ヴァーミンズ・クロニクル

蠱毒成長中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヴァーミンズ・クロニクル

【Ｎコード】
Ｎ８９６１Ｖ

【作者名】
蠱毒成長中

【あらすじ】
俺の名は辻原繁（ツジハラシゲル）。
生まれてこの方真面目かつ真っ当に生きてきた学生だ。いや、それは誇大的か？
まぁいい。兎に角毎日真面目に健全な学生生活を送っていた俺。
今日は休日を使って事で都会の街へ遊びに出ていた。
そして昼頃、それは唐突に起こった。突如謎めいた光の巻き添えを食らった俺は、奇妙な空間を流されながら気を失い、気付けば見知らぬ部屋に居た。

暫くして戻って来た部屋の主・コリンナ王女の話を聞くに、ここは地球でない異世界『カタル・ティゾル』で、俺はこいつに魔術で召喚されたんだと。
妙な話かもしれねぇが、本当にそうなんだから仕方ねえわな。
んで、何時までも混乱してたって仕方無ぇなと思った俺は、王女に召喚した理由を聞いてみた。
すると返ってきた答えが「お前を下僕にするためだ」だと!?
おいおい、リアル生活も上手く行ってたってのにそんなのありかよ!?
これからどうすりゃ良いってんだ!?

『なろう』史上最も人気の振るわない男が送るわちゃめちゃ異世界ファンタジー、ここに開幕!

第一話　辻原繁の失踪

―現代・日本国内中国地方某所―

「いやぁ、補講も代講も無いごく普通の休日ってのは良いねぇ」

都心部を意気揚々と歩く長身痩躯に眼鏡の青年。
彼の名は辻原繁。動物行動学を専攻する２０歳の大学生である。
専門は昆虫学だが、動物全般に対する愛が強く「文明と自然は距離を置いて共存すべき」という考えの持ち主である。
こういった性格故に、時たま動物相手に人間のように接する事もある（あくまで半ば冗談のようなものなのだが）。
更に元々思い遣り深い性格の彼は家族や友達など、身の回りの人々も心から愛し敬う事を美徳だと信じている。

また、真面目な性格で気遣いも上手い為学校での評判もそれなりに良く、奇行が玉に瑕の好青年として中々に名の知れた存在でもあった。

彼は現在、補講・代講の無い純粋な休日を堪能していた。
というのも、彼の大学ではここ最近教員の事情により平日の休講が相次ぎ、その補講や代講を毎週土曜に開いていた。
日曜は別件で午前中の大半を消費する辻原にとって、土曜日には若干特別な思い入れがあったのである。

「さて、それじゃ今日は何処に行くかな」

等と地図を片手に考え込む辻原。
財布の中身や脚の具合から大方の予定を立てる彼は、洒落た飲食店

での食事や路線バス・路面電車・タクシーによる移動を行わない。移動は基本的に自転車と電車を用い、運転免許は持っているが専用の車を持っている訳ではないので移動手段として乗用車を用いることはない。
自転車・電車の管轄でない場所は基本的に徒歩である。

これらは全て、彼が有り金をなるべく趣味に使い込みたいと思うが故であり、それ故に彼は飲酒・喫煙・賭博の類にも手を出したことはない。
酒は元々好きではなく（寧ろ生徒時代自宅で食べたラムレーズン入りアイスに不快感を抱くほど）、煙草に至っては「毎日の煙草より月一のコカイン」という科学理論に基づきそもそも根底から忌み嫌う傾向にある（だからと言ってスモーカーであるという理由だけで他人を罵るような事は無いが）。
賭博を否定する考え方は幼い頃両親に教え込まれた事もあって筋金入りの域に達しており、テレビＣＭで魅力的なプロモーション・ヴィデオが流れるとそれに興味を示すも、それがパチンコ・パチスロの宣伝用に作られたものだと判るや否や途端に落胆する程である。

予定を考えながら歩みを進める辻原。

しかしその一方では、何も知らない辻原を巻き添えにある出来事が起こり始めていた。

―同時刻・異世界カタル・ティゾル―

何処にあるかも判らない次元の壁を越えた場所にある、我々が暮らす浮世とは違う異世界カタル・ティゾル。

世界の根底に超自然的エネルギー―所謂『魔力』のようなものの概念が根付き、それに伴って生物相も大きく異なるという、我々現代人の知識の斜め上を行く世界。

その一大陸、まるで中世西洋を思わせる分化の根付く大陸ノモシア。

そしてノモシアを支配する王国エクスーシアの首都中枢部に鎮座するのは、代々国を治める国王家の住まうテリャード城。

辻原を巻き添えにする出来事を引き起こし始めていたのは、この城に住まう国王の一人娘コリンナ・テリャードであった。

―テリャード城・コリンナの自室―

起伏の無い細い身体に豪奢なドレスを着込み、白金色の長いツインテールを棚引かせた王女コリンナ・テリャードは、異世界の様子を鮮明に映し出す巨大な鏡を覗き込みながら、何かを呟いていた。

「遂に見付けたわ……こいつよ……この男よ……。

この男なら間違いないわ……そう……この男なら……」

コリンナは、しゃがみ込んで上質な木材で作られた床材を素早く指でなぞっていく。

彼女の指の跡は白く光る線となり、奇妙な円陣を描いていく。

円陣を完成させたコリンナは、立ち上がって解読不能な言葉を詠唱し始めた。

そして彼女の詠唱に合わせて、円陣は脈打つように光を増していく。

「（もうすぐ……もうすぐよ……もうすぐ私だけの忠実な下僕が……）」

―同時刻・日本国内中国地方某所―

「……うん、これは中々に良いな。やっぱりこの会社は安定したものを作る」

発売されたばかりの飲料を飲みながらそんな事を言う辻原は、休憩所のベンチでくつろぎつつ、街の風景を眺めていた。

二分ほどして、ゴミを処理しようかと辻原が立ち上がった、その時。

――フヴォウン！

「！？」

突風が吹き荒れるかのような音がしたかと思うと、辻原の背後に何やら光り輝く球体のようなものが現れた。

光の球体を元手に薄い光の板のようなものが舞っており、その姿は神秘的かつ幻想的であった。

「な……何だ？…一体何事だ……？」

咄嗟の出来事に驚いた辻原は慌てて周囲を見渡すが、どういうわけかその存在に気付いているのは辻原だけらしく、周囲の人間は寧ろ

慌てふためく辻原に驚く始末だった。

「（もしかしてこの光る球体……俺にしか見えてないのか？
全く……何処の世界のファンタジーだよ、こんなもん……）」

等と考え込みながらも、辻原はコンビニで買った食料を頬張る。

「（とりあえずこういうのは、無視するのが一番だと相場が決まってる）」

根拠は無いがそうする他無いだろうと考えた辻原。
しかし世の中、そう何もかも上手く行とは限らない。

光り輝く球体のようなものは次第に肥大化していき、遂に必死で無視を決め込んでいた辻原をも巻き添えにする。

「（……ん？何だこりゃ……？やばいか？流石にやばいか？いや、確認するまでもなくやばいよなコレ？
そして何でこういう時に限ってカップ麺作ってんだ俺？何でカップ麺チョイスしてんだ俺！？しかもうどんだから五分くらいかかるわ！）」

そして、次の瞬間

「（畜生、二分余計なんだよ！そしてうどんを選ぶ俺も俺だろ！何やってんだよマジ！このままじゃ明らかにヤバ――――）」

――――ヴォフン！

光の球体が一気に収縮するかのようにして消滅するのと時を同じく

して、意識を失った辻原は手に持っていた荷物ごとその場から消え失せた。

その場に残されたのは、湯を注いでから1分も経過していないインスタントのうどんだけだった。

第二話　さしガメ！（前書き）

突如謎の光に包まれ気を失った繁が目を覚ますと・・・

第二話　さしガメ！

―前回より―

何処とも知れない空間を、辻原は漂っていた。

その空間は、終わりのない曲がりくねった管に似ていた。
辻原の目に入る内壁の風景は、サイケデリックでありながら幻想的で、不思議な美しさを醸し出していた。
描かれているのが風景である事は辛うじて感じることが出来たが、それが何処なのかは一切理解できなかった。

「（ここは一体……俺はどうなったんだ……？）」

考え込む辻原だったが、この謎めいた空間では何をしようとほぼ無駄である事は既に実証済みだった。
奇妙な力によって浮かばされたまま、ゆっくりと落ちていく。
その空間では幾ら動き回ろうとも、進むことも上がることも止まることも出来ない。
ただ、等加速度で落ちていく。それだけだった。

「（それにしてもこの壁画……凄く俺好みなんだが、一体何を描いたんだろなぁ…）」

と、その時である。
突如、辻原の頭を激しい頭痛が襲う。

「――ッ！？（な、何だこの頭痛は！？頭の中でッ…針の塊が暴れ回っているような……ッ！）」

頭痛はその後二分半にも及んだ。

「（……何だったんだ……あれは……）」

頭痛収束に安堵する辻原だったが、ここで更なる怪異が彼を襲う。

「（――――!?）」

頭の中が激しく揺れ動くような感覚に襲われたかと思うと、突如辻原の脳内へ、断片的な言葉が響く。

―おはれかルル・テルへうだ―

―かた後、そこ簡単ると出い―

―前れったへりらカタィゾのとれ―

―だとくな―

―可だとめな―

―おにはが―

―何もる事な、絶力―

―恐な。さたおをけせ―

「（何だこの声は……俺に何を語りかけようとしてるんだ？）」

必死に考え込む辻原。
しかし幾ら考えてもその答えは出てきそうにない。

そんな中、異変は起こった。

―壊したいものを探せ。消し去りたいものを探せ。滅ぼしたいものを探せ。殺したい奴を探せ。―

謎の声が、遂にはっきりと聞き取れる明確な言葉を発したのである。

「（…！？

……壊したいもの？
消し去りたいもの？
滅ぼしたいもの？
殺したい奴？

……何を言い出すんだ一体…？

…第一、俺に何をしろっていうんだ……？）」

謎の声は尚も語りかける。

―それが、見付かったら、口を開け―

「（口？）」

―そして、吐き出せ―

「（何を？）」

―壊したい、消し去りたい、殺したい、滅ぼしたい、

その思いを精一杯に込めて、吐き出せ―

「（だから何をだよ？）」

―全てを消し去り滅ぼす、緑の霧、或いは、碧の流れ―

「（霧？流れ？）」

―それを以て、隠されたお前を、さらけ出せ―

「（隠された……俺……か）」

その言葉に覚えのある辻原は、断片的な言葉の解読を試みる。

しかしその最中、またしても彼は意識を失った。

―目覚め―

「……ん……」

目覚めた辻原は、木製の床の上で寝転がっていた。

「…ここは一体……何処だ？」

起き上がって周囲を見渡すと、そこが中世ヨーロッパを思わせる豪奢な作りの部屋である事が理解できた。

「（だが何故…？俺は確か、あの謎の光に巻き込まれて気を失って……そうだ！荷物！何処かで何か落としたりしてないか！？）」

辻原は慌てて手荷物を確認する。

幸いなことに、失っていたのは作りかけのカップ麺だけだった。

「（良かった……カップ麺は仕方ないが、これだけあれば十分やっていける……）」

安堵した辻原は、続いてこの部屋からの脱出手段について考える。

屋敷の主に頼んで出口まで案内して貰うのが筋というものだろうが、主含め屋敷の住人が友好的な存在だとは言い切れない。

実際辻原は大学に入り立ての頃、ゲームセンターで一人ゲームに興じる高校生のプレイ風景を後ろから観戦していた所、詳しい理由は不明だが何故か高校生に睨み付けられ、罵詈雑言のような言葉を叩き付けられたような気がしたという事があった（店内の音声が酷かったのと高校生の滑舌が悪かった事からよく聞き取れなかった）。

昔からそういった経験を繰り返すたび「現代日本であろうとも危険なときには危険である」という事を幼くして熟知していた辻原は、なるべく屋敷の住人に見付からないような逃走方法を計画する。

しかし幾ら考えても良い案は浮かばず、結果的に彼の考えは行き詰まってしまっていた。

「（兎も角この部屋に人が来る前に何処かへ隠れないと……時代錯誤気味だが見るからに女の部屋だし、見付かれば洒落にならんぞこ

れは…）」

辻原は凄まじい速度で隠れ場所について考えを巡らせる。
しかし、やはりというか何というか、決定的にまとまった案は出てきそうに無かった。

と、その時である。
辻原の身に、更なる危機が迫る。

ガチャリ

「！？」

豪奢なドアノブが回転し、部屋に何者かが入ってきたのである。
焦りと未知なるものへの恐怖で慌てふためく辻原だったが、やがてそれも馬鹿馬鹿しく思い、動くのをやめた。

そうして入ってきたのは、起伏の無い体つきをして、豪奢なドレスを身に纏う、白金色のツインテールを棚引かせた高貴そうなティーンエイジャーの少女―基、異世界カタル・ティゾルは大陸ノモシアを支配する王国エクスーシアを治める国王の一人娘こと、コリンナ・テリャードであった。

その姿を見た辻原は、再び考えを巡らせる。
「（どういう事だ……？あんな服装をした人間が、まさかこの世にまだ居るってのか？
そんな馬鹿な。時代錯誤も大概にしてくれ。金属製の鎧に剣と盾で戦う兵士や、忍者の方がまだ現実味がある……。

だがだとすれば、この女は一体何者なんだ……？）」

一方のコリンナは、辻原の姿を見て内心歓喜していた。

「（やったわ……成功よ……そう、この男よ…。
私が探し求めていた、最高の下僕……！

これでこのつまらない毎日がもっと愉快になるに違いないわ……）」

そんなコリンナの考えどころか、名前すら知らない辻原は、ふと左手の掌に違和感を感じる。

「（……ん？何だ？）」

辻原が左手を見ると、掌に何やら黒い紋章のようなものが刻まれている。

その形状はまさしく昆虫のようで、大学で昆虫学を学ぶ辻原にとってその種類を特定する事は容易かった。

「（これは……サシガメか？）」

サシガメ。

漢字では「刺亀虫（刺す亀の如し虫）」または「刺椿象（刺す椿の象）」と表記されるそれは、虫や鳥獣の体液を啜るカメムシの一種である。

一瞬入れ墨の類かとも思ったが、生憎と辻原にそんな趣味はない。

では冗談か何かで書き記した落書きか何かか、とも思い記憶を探ったが、それも当て嵌まらない。

何はともあれそれを不審に思った辻原は、人差し指と中指で、紋章

に軽く触れてみる。
事が起こったのは、その瞬間だった。

「（――――――！？！？！？！？）」

辻原の脳内にて、驚くべき勢いで様々な情報が再生される。
更に驚くべき事に、辻原は再生された全ての情報を余さず明確に記憶するに至ったのである。
これにより辻原は、一瞬にしてこの謎の状況についての全てを知るに至る。
あの光や謎の空間の正体、何故自分があんな目に遭ったのか、この少女は何者なのか、謎の声によって語られた言葉には如何なる意味が秘められていたのか、この紋章とは一体何なのか。

その全てを、辻原は理解できた。
そしてそれにより一気に平常心を取り戻した彼は、不気味な笑みを浮かべ、呟いた。

「――成る程な。大方覚った」

大学生・辻原繁。
下僕欲しさに彼をこのカタル・ティゾルへと召還した張本人である王女コリンナは、知らなかった。
温厚で博識、かつ真面目で心優しいと専ら評判になっている彼の持つ、おぞましい本性の存在を。

第二話　さしガメ！（後書き）

繁の持つ本性とは一体？

第三話　可愛げゼロの王女（前書き）

下手に出る繁を相手に強気に振る舞うコリンナだったが……？

第三話　可愛げゼロの王女

―前回より―

異世界カタル・ティゾルはエクスーシアのテリャード城にて、コリンナと辻原はひたすら向かい合っていた。

お互い黙り込み、微塵も動かないまま数分間も睨み合っていた二人。その沈黙を打ち破ったのは、辻原の方だった。

「初めまして。名も何も知らぬ、麗しの異国の姫君よ」

柄にもなく、というより、上役や遠い親戚などを相手にするような声で馬鹿丁寧に話を切り出す。

「私は辻原繁。嘗て倭或いは大和と呼ばれし極東の矮小な島国に産まれた、取るに足らない庶民です。
本日はお許しもなく貴方様のお城へ侵入してしまったこと、深くお詫び申し上げます。
ひいてはこの城の出口を教えて頂きたいのですが、宜しいでしょうか？」

辻原の芝居がかった挨拶を受けたコリンナもまた名乗る。

「此方こそ初めまして、辻原。私はコリンナ。コリンナ・テリャード。
このテリャード城城主にしてこの国の国王、ジェローム・テリャードの一人娘よ」
「コリンナ……良いお名前ですな」

「有り難う、辻原。
それと城の出口についてだけど、心配要らないわ」
「何故です？」

辻原の問いに、コリンナは声高らかに言い放つ。

「何故って？決まってるじゃない。貴方はこれから私の下僕になるからよ。
下僕である以上、私の言うことは何でも聞いて貰うわ。城から出るにしても私の許可が無ければ駄目よ。
でも有り難く思いなさい。このエクスーシア王国……いいえ、ノモシア大陸一の美少女であるこの私の下僕で居られるんだから」

黙り込む辻原に、コリンナは更に付け加える。

「あぁ、それと……貴方が産まれ育ったって言うそのワとかヤマトとかいう国だけど、帰ろうなんて考えないことね。
だって死んでも無理だもの。

貴方に使った召還魔法、この世界で扱えるのは私達神性種の中でも特に優れたエリートだけなの。
そもそもこの城に、その魔法を扱えるのは私と私のお父様しか居ないわ。
だから貴方が元の世界に戻る事は、絶対に無理って訳。

あ、そういえば世界とか何とか言われても、何のことだかさっぱりでしょ？
良いわ、教えてあげる。特別サービスよ、感謝なさい」

大仰な動きで歩みながら、コリンナは言葉を紡ぎ出す。

「この世界の名は――「カタル・ティゾル」――！？」

突如話を遮られたばかりか、決して知り得る筈のない情報を軽々語り出す辻原に驚いたコリンナは、思わず言葉を失った。
しかし辻原は、尚も話し続ける。

「それぞれに文化・技術等が大きく異なる6の大陸から成る世界。その根底に存在するのは、自然界に起因する二つのエネルギー理論とそれを昇華させた技術。
魔力からなる魔術と科学からなる学術。

これら二つの影響により生態系は日々多様化の一途を辿り、優れた生物学者は中堅貴族と同等の身分を得る事もある。
ただ、身分の高い者には圧倒的に魔術関係者が多い」

コリンナは、本来知っているはずのない情報を淡々と語り続ける辻原に気圧されていた。

「（何故……？何故なの……？何故この男が、カタル・ティゾルの事をこんなに知っているの…？）」

「文明を形成する生物の種族・形態も多種多様であり、一口に人類と言いくるめる事は難しい。
神性種は、数ある”カタル・ティゾル人”の中でも特に希有な存在であり、総じて王族・貴族に属し社会的地位も高い。
魔力・魔術の才能にも長け、主要な魔術関係者はどこかで神性種と繋がっている。
名前の由来は主要な出身地であるノモシア大陸の大国・エクスーシア王国に伝わる神話に起因。

神性種はその神話に於ける造物主の眷属を自称し――「ちょっと待ちなさいよ！」

淡々とした説明を遮るようにして、コリンナが怒鳴る。

「神性種がトゥマージョーの眷属である事は紛れもない事実よ！創世の神トゥマージョーとその妻である記憶の女神インディクリストとの間に産まれた子供達……その末裔が私達神性種なのよ！？

それを自称ですって？ふざけるのも大概にして！
もう良いわ、今日から貴方は下僕なんかじゃない。私の奴隷よ！
死ぬまでペット以下の扱いでコキ使ってやるわ！
有り難く思いなさい！これから貴方は――「黙れクソガキ」――んなっ！？」

騒ぎ立てるコリンナの言葉を遮り、辻原は本音を口にした。

「こっちが態々下手に出てやってるからってな、調子こいてベラベラ喋ってんじゃねぇよゴミクズが。
つか目障りだわ、お前。ハッキリ言わせて貰うが、一度死んだ方がいいんじゃ無ぇか？
つうかお前みてぇのは一度ぐれぇ本気で死ぬべきだろ。いや、冗談抜きで」

思いも寄らぬ毒舌に、コリンナは言葉が出なくなった。
明らかに先程までとは態度が違う。本当に同一人物なのかと疑いたくなるほどに。
愛と友情に生き、親しい者を思い敬う事を美徳とする辻原。しかしその本性とは、そんな彼の設定を根底から覆すものである。
彼はある一面に於いて卑劣で狡猾なサディストであり、敵や、嫌っ

ている者相手ではどんなに卑怯な手段や姑息な真似も厭わない。その上ある意味で独善的な考えを持っており、動機が家族や友人など親しい人々への愛によるものであり、尚かつ違法でなく表沙汰にならなければどんな事でもやって良いという考えの持ち主である。更にそれらの動機が含まれていない悪行も「生物は生きるに当たって必然的に罪を犯してしまうものだ」という言葉で弁明しその殆どを完全に正当化してしまう。

斯様に何とも悪質な男というのが辻原繁の本性の一つであり、例えるならばホンソメワケベラとアンボイナガイの中間といった所であろうか。

ホンソメワケベラとは掃除屋として名の知れた魚であり、魚の歯に詰まった食べカスや体表の寄生虫を啄むことで広くその名が知られている。

一方のアンボイナガイは、猛毒を含んだ針で魚を毒殺し丸飲みにしてしまう恐るべき巻き貝であり、この毒は人も殺せる程に強力である。

同じ環境に棲みながら悉く正反対の性質を持ったこの二種類こそは、まさしく辻原の性根を表すに相応しかった。

暴言はまだまだ続く。

「つか、お前は正直なところアレだな。テンプレの塊だな。要するに面白みの欠片も無ぇ。

今日日萌え豚全盛期……作家・アニメーターは勿論企業商店地方自治体観光地、果ては教育機関や寺院まで萌えに走る時代だ。

そんな時代だからこそ、スタンダードな萌え属性は使い古されつつ

ある。信者や新参の根強い指示があって廃れこそしてねぇがな。

だがそれは逆に言えば、テメェみてぇな奴なんぞ何処にだって居るって事になる。

貴族・金髪・ツインテール・貧乳の時点でもうカブりまくりだっつの。

要するに、テメェみてぇな奴の代理なんぞ腐るほど居るんだよ。

そもそも異世界召還自体、近代ライトノベル界隈じゃ腐った先に森が出来るぐれぇの数になってやがる。

しかもその殆どがティーン男のハーレム物語だ。

ふざけんじゃねぇぜ、ド畜生めが。

何か自分で言ってて腹立ってきたしよ……とりあえずお前、殺すわ」

辻原は恐怖の余り硬直して動けないコリンナの首筋を掴み彼女を睨むと、その口を大きく開けた。

開かれた口の中から現れたのは、無数の太い針の束。

その先端部から、若草色の霧が勢い良く噴射された。

第三話　可愛げゼロの王女（後書き）

繁が吐き出した霧の正体とは！？

第四話　とある学生の異世界紀行（前書き）

遂に紋章の謎が明らかに！

第四話　とある学生の異世界紀行

―前回より―

シュォォォォォオオオオオオ

「っくぁぁあああぁぁあああああっ！」

コリンナの顔面から白煙が上がるのと同時に、辻原はそれを投げ捨てた。

緑色の霧を顔面に浴びせられたコリンナは、その激痛に両手で顔面を押さえ藻掻き苦しむ。

その顔面からは絶えず白煙が生じており、暴れ回る彼女の顔から滴る液体が、彼女の両手から床材や家具までも、手当たり次第に焼き溶かしていく。

「そのまま一生藻掻き苦しんでろ、クソガキ」

辻原は藻掻き苦しむコリンナの尻を蹴飛ばし、指先から放つ緑色の霧で部屋の扉を溶かして廊下に躍り出た。

「しかし便利だな、この力は。

無制限かつ精密仕様で破壊力抜群。その上マニュアルまで付属とは」

辻原が絶賛する”力”とはつまり、先程放った緑色の霧の事である。

『ヴァーミン』と呼ばれる全十種類の異能力が一つであるこの緑色の霧の性質は、現実世界で言う硫酸に近く、辻原の意志により自由自在に操られるこれは彼が命じればどんなものをも焼き溶かしてしまう。

更に驚くべき事に、この液体に対する命令の中には「溶かすな」というものも含まれており、これにより余計な被害を出す心配も滅多に無いという、馬鹿に親切な設計だった。

「『ヴァーミンズ・ヴォーセミ　アサシンバグ』だったか？中々に洒落た名前じゃねぇか。
アサシンバグってのは俺の左手に出た紋章よろしくサシガメの事だが、何故サシガメで溶解液なのかねぇ」

辻原は城内の廊下をのんびりと歩んでいく。
異世界の美術品はどれも魅力的で、彼はそれらをじっくりと堪能したかった。
しかしその願いが叶えられるほど、現実も優しくはないらしい。

侍女の報告によりコリンナの異変をいち早く察知した城に控える兵士達が動き出したのである。

魔術関連の技術が深く関わる所以か、奇妙な術式により辻原の動きは直ぐさま兵士達に知られてしまった。
どうにか逃亡を試みた辻原だったが、そこは一介の大学生。しかも根っからの座学派で運動部になど入ったこともない。
当然すぐに息切れを起こし、メイスと盾を構えた兵士達に取り囲まれてしまった。

「観念しろ侵入者！」
「そうだ！その罪牢獄で償え！」
「死刑台に送ってやる！」

辻原に対し口々に悪口雑言を浴びせる兵士達。

こういった手合いの始末の悪さを知っている辻原は、能力で撃退しようかと考える。
しかしその時、

「黙れ！黙らんか！騒ぐでない！案ぜずともこの男は逃げも隠れも出来ぬわ！」

隊長らしき男の一声で、兵士達は一斉に押し黙った。

「有り難うよ、一際貫禄のある旦那」
「礼には及ばぬ。儂はこの者共の長であるからな」
隊長の男は、辻原の軽口にも冗談交じりで返答する。
少なくともこの兵士よりは理解力のある人物らしい。

「して……貴様は何故この城に居る？」
隊長の問いかけに、辻原はさも真実であるかのように大嘘を語り聞かせる。
「ここだけの話、俺は大臣殿から極秘に呼ばれてやって来た辺境地の霊媒師でね。
昔からこの辺りに出るっていう質の悪い悪霊を退治しに来たのさ」
我ながら見え透いた嘘である事は自覚済みだった。しかし、ありのままの事を話せば間違いなく袋叩きにされる。
「（どうせ嘘だと見抜かれんのがオチだろうな……）」
等と踏んでいた辻原だったが、隊長の反応は意外なものだった。

「な、何と！貴様はもしや、あの悪霊アクセタルを倒す為にここへ来たというのか！？」
全く持って予想外の反応だった。
しかし辻原は、取り乱すこともなく話を進めていく。
「そうそう。んで、俺と大臣殿の会話を偶然立ち聞きしたコリンナ

姫が俺の話を聞きたいってんで、装備展開しながら話を進めてたのさ。
で、腹が痛くなって厠に行こうと思ったんだが、慌ててたもんで姫に教わった道順を忘れちまってさ。
探し回ってる間に変なところへ迷い込んでよ、今はその帰りって訳だ」
「そうだったのか……それは大変だったな。しかし此方も大変なのだ。
姫様がいきなり不埒な輩に襲われてな、顔と掌が無惨に焼け爛れてしまっておるのだ。
それでその犯人を捜しているのだが……」
「そうか……そいつぁ大変だな。良し、ここは俺が人肌脱ぐとするぜ」
「何？」
「姫の為に故郷に伝わる薬を作ってやろうかと思ってな。火傷の傷口に塗るとそれが最初から無かったように治る優れものなんだよ。
城に来る途中この辺りの草や石ころでどうにかなるのは確認済みだし、材料集めて来ようかと思ってな」
「そ、それは本当か！？」
「嘘なわけねぇだろ？」
「おぉ！感謝するぞ霊媒師よ！さぁお前達、喜ぶのだ！」
兵士達が喜び沸き立つ中、辻原は隊長から出口への道順を聞き出し（「忘れた」と言ったら詳しく教えてくれた）、城からの脱出に成功する。
こうして辻原はまんまと城外への脱出に成功した。
―城下の市街地―
「成る程。こりゃ確かに凄ぇわ。まさにファンタジーって奴だな」

辻原が繰り出した市街地は、まさしく彼が見た架空の異世界を思わせるものだった。
鎧やローブ等様々な服装の人々が道を行き交い、亜人や獣人が人間と思しき人々と対話する、そんな光景。
それが、彼の眼前に広がっていた。

「さて…それはそうと、どうにかして元の世界に戻る方法を考えなきゃなんねぇよなぁ。
とりあえずここに定住する事を考えるか……あの声は『カタル・ティゾルの破壊神になれ』とか何とか言ってたが、そんなもんそうそうなれるもんでもねぇしな。

そうと決まれば早速働き口だが――『号外！号外ィ！号外だァ！』――？」

ふと上を見上げると、背中に翼を持った鳥のような姿の獣人―羽毛種と呼ばれる者達―の男性が、上空からビラを撒いていた。
そのビラを拾って見た辻原は、驚愕の余り言葉を失った。

「……何故……あの事がバレてるんだ……？」

辻原はすぐさま路地裏に逃げ込み、再びビラをよく読み直してみた。

「…『異世界人シゲル・ツジハラ、コリンナ姫への傷害で殺人未遂』……クソ、バレやがったか……」

そう。辻原が城を抜け出してから、彼の容姿に関する情報がコリンナによって城内に知れ渡るに至り、それがそのまま指名手配にまで

発展したのである。

「何はともあれ逃げねぇとな……王女の顔面に硫酸ぶっかけたなんてのが裁判になりゃ、懲役通り越して死刑確定だ」

辻原はそそくさとその場から逃げ出し、人気のない広葉樹林に逃げ込んだ。

「（何か化け物とか出そうだが仕方無ぇ。いざとなりゃヴァーミンでどうにかしてぇところだが…一応喰われる覚悟もしておくか……）」

広葉樹林の道無き道を掻き分けて歩みを進める辻原。

てっきり猛獣や化け物の類が出てきて喰い殺されかけるのではないかと思っていた彼だったが、この後そんな予想は悉く裏切られることになる。

第四話　とある学生の異世界紀行（後書き）

逃亡者・辻原繁！広葉樹林を往く彼がであった驚くべきものとは一体！？

第五話　逃げ込め！ツジ原さん（前書き）

森の中を歩いていた繁は、そこでカタル・ティゾルの数奇な生態系を目の当たりにし……

第五話　逃げ込め！ツジ原さん

―前回より・広葉樹林―

辻原は一人広葉樹林の中を進んでいた。

「驚いたな」

辻原は呟く。

「こうして自然の中を歩いていると、改めて今異世界に居るんだと再認識させられる。
草木も虫も、見たことのない奴ばかりだ。熱帯雨林の奥地にでも行かなきゃこんなのは居ないだろう」

広葉樹林には奇妙奇天烈な形態の生物がひしめき合っており、そのどれもが辻原にとっては興味深く思えた。
虹のようにきらびやかな翅の羽虫が飛んでいたかと思うと、それを目玉模様の芋虫が飛び跳ねて捕食する。
地を這う円錐形をしたムカデのような生物の身体は美しく輝く青色で、毒々しくも煌びやかな模様の翅を持つ蝶の複眼はカタツムリのように長く伸び縮みする。
根元が泥山のように脹れ上がった樹に登った蟻がその表面を触角で叩くと、樹皮が扉のようにスライドして開き、中は蟻達の都市国家が如く有様だった。
ふと小さな紙飛行機のようなものが飛んできたので捕まえて観察してみると、その正体は植物の種子らしかった。

このように、自分が産まれ育った世界とはかけ離れた生態系を持つ

カタル・ティゾルの自然をもう暫く堪能していたかった。
しかしそれを許さないのが現実というものである。

「探せェ！捕らえろォ！」
「悪漢ツジハラを捕らえて血祭りに上げるのだ！」
「引きずり下ろして細切れだ！」

林の向こうから聞こえてくるのは、間違いなく兵士達の雄叫びであろう。

「やべぇな。極力見付からないように逃げたつもりだったが、どうやら甘かったらしい。
何処かに適当な隠れ家は…っと」

辻原はなるべく音を立てないように、姿勢を低く保って兵士から離れようと移動する。
しかしそうこうしている間にも兵士達はどんどん辻原に近付いてくる。
事を案じた辻原は、ふと沢の側に広葉樹林に似つかわしくない煉瓦造りの家を発見する。

「あの家にかくまって貰うか……」
辻原は見付かるのを覚悟の上で立ち上がると、家に向かって全速力で走り出した。

―家の前―
何とか家の前まで辿り着いた辻原は、扉を叩く。

ゴンゴン、ゴゴン

「ご免下さい！ご免下さいませ！家の方は居られますか！？」
幸いにも家主は在宅だったらしく、温厚そうな若い女の声が返ってきた。
『どうなさいました？』
「訳あってテリャードの兵に追われているのです！
贅沢は言いません！兵が退くまで匿って頂きたい！」
『テリャード兵から！？何があったかは存じませんが早くお入りなさい！鍵は開いていますから』
「感謝します」

家主の計らいにより辻原は民家の中に逃げ込んだ。
家の内装は和風とも洋風とも言える成り立ちで、中世ファンタジーと現代日本が混ざり合ったような雰囲気がある。

「土足で構いません。どうぞお上がり下さい」
奥の方から聞こえた家主の声を頼りに、辻原は恐る恐る家へと上がり込む。
何分土足で屋内に上がるというのは初めてだったため、多少の躊躇いがあったのだ。
そのまま暫く歩いていると、奥の方から家主らしき細身の女が現れた。
部屋の雰囲気と同じような服装のその女は、整った顔立ちに深紅のロングヘアが似合っていた。
何処かで見たような顔だが、気のせいだろう。

「大変でしたね。しかし助かって何よりです――
「いえいえ。此方こそ助けて頂き有り難う御座います――

そしてお互いの顔を見た二人は、

――!?」」

一瞬硬直した。

そして数秒後。

「……繁…?」

「…香織…?」

再度顔を見合わせる繁と香織。

そして次の瞬間、二人の口から言葉が爆薬のように飛び出した。

「何で貴方が此処に居るのよ!?」

「そらァこっちの台詞だろうが!今まで何処で何してた?」

「何って、此処で生活してたけど?」

繁と会話を繰り広げるこの深紅の長髪が特徴的な女は、名を清水香織という。

繁の従姉に当たるこの女は、3年前の秋から行方知れずとなっており、その事は繁もまた深刻視している案件だった。

「まぁそういう事なんだが、そういう事じゃねぇわ。

三年間も行方不明になっといて理由がそれだけってのはおかしくねぇかって事だよ!

叔母様や俊一達がどんだけ心配したか判ってんのか?」

離れ離れになっていた母や兄弟の名を出された香織は、一瞬口をつぐむ。

「や……それは確かに、悪かったと思うけどさ……でも仕方ないんだよ。

変な光に巻き込まれて、妙な奴に捕まった所をどうにか逃げ出して、

気が付いたら何か魔法っぽいのが使えるようになってて……」
「何か漫画みてぇな話だなぁ」
「事実なのは確かなんだけどね。私も正直信じられなかった。
でも、この家のお婆さんに拾われて、そこで色々な事を教わってね。
そのお婆さんも半年前に病気で亡くなって、今は私が一人暮らししてる。
仕事の合間にどうにか戻る方法を探したけど、結局は駄目だった」
「それで、ここに居続けてると？」
「そういう事。それで、繁の方は？何があったの？」
「俺か？俺はなぁ……」

辻原は香織に、今までの経緯を話した。

「つまり貴方は……ヴァーミンの有資格者になったって事？」
「そういう事になるな。『ヴァーミンズ・ヴォーセミ　アサシンバグ』
つまり八番目で、象徴はサシガメって事だ」
「八番目って……溶解液の能力？」
「何だ、知ってるのか？」
「知ってるも何も、生前お婆さんが色々教えてくれたからね。
一応十種類全部、覚えてるつもり」
「そりゃ凄ぇ」
「そうでもないよ。ただ、お婆さんは何時も言ってた。『ヴァーミンの有資格者を敵に回しちゃいけない』って」
「そんなにおっかねぇもんなのか」
「らしいよ。
それはそうと、とんだ無茶をやらかしたっぽいね？
よりにもよって王女の顔を焼いたとか何とか」
「正確には『焼き溶かした』だが、確かにそうだ。俺はこのヴァーミンの初発をコリンナ・テリャードの顔面に放ってやった」

「昔から変な所で本気出す正確だとは思ってたけど、どうも筋金入りみたいだね」
「お陰で城から出られたは良いが指名手配――つまり犯罪者だ。さて、どうする？お前は今現在、王女への傷害行為を働いた極悪人を匿っているわけだが」
「どうするって、決まってるじゃん。
貴方をこのまま匿い続けて、その活動をサポートする。それだけよ」
「意外だな。小さい頃から正義感が強かったお前からすると有り得ないぞ」
「いや実は、私を呼び付けたのもあのコリンナって王女でさ。その件で結構個人的な怨みがあったりするのよ。あとあいつ、親手玉に取って贅沢し放題なもんだから偶に増税が酷いんだよね。態度も気に入らないし」
「そうか……あのガキ、見たとおりのクズだったようだな」
「そういう事。
んで、繁はこれからどうするの？まさかとは思うけど、このままここに留まり続けるなんて訳無いでしょ？」
「勿論。折角異世界に来たんだ。何かやらずには終われねぇ」
繁はその晩から、早速活動計画を練り始めた。

第五話　逃げ込め！ツジ原さん（後書き）

従姉妹・香織と再会した繁は一体何をしでかすつもりなのか？

第六話　サポート要員にお勧めな従姉妹（前書き）

繁が定めたカタル・ティゾルでの活動は、主人公にあるまじきものだった。
しかしその内には彼なりの真意があり……

第六話　サポート要員にお勧めな従姉妹

―前回より―

「で、どうだった？私の貸した資料、役に立った？」
「愚問だな。大助かりだ」
「そう、それは良かった」

昨晩、繁は香織に私物のある資料を貸りていた。
カタル・ティゾルについてのより詳しい情報と、今後の活動に於ける目標を探す為である。
資料というのは、学生用の教科書や図鑑から各大陸の観光ガイド、更にはローカル情報誌など多岐に渡る。
それら全ての資料は、何れも今は亡き薬屋の老婆と彼女の弟子である香織が収集したものであった。

「準備物の目星もつけてある」

繁は香織にリストを差し出す。
表記されている文字はカタル・ティゾルで最もスタンダードな言語のものであった。

「凄いね、もう読み書き覚えたんだ」
「紋章に触った時、全部流れ込んできた。
書こうと思うと勝手に頭の底の方から湧き出て来やがる」
「流石はヴァーミンの有資格者。私だって全部の言語覚えるのに半年かかったのに」
「俺もよくわからん。
何にせよ言葉が余裕で通じるのは助かる」

「召還魔法の影響だね。喋る分にはどこでも問題ないよ」
「素晴らしい。ややこしいモンは全部ご都合主義でどうにかなる。まさに異世界ファンタジーって奴だ。

で、どうだ？この世界で三年も暮らしてきたお前から見て、そのリストに何か問題点はあるか？」
「別に無いと思うけど、繁はどこか不安なの？」
予想を外れた香織の答えに、繁は淡々と返す。
「予算面が予想以上に高くついちまったってのと、リストの最後に入れた『兆眼紫円陣（ちょうがんしえんじん）』……」
「あぁ、これね」
「今回、ソレがどうしても要るんだ……が、だ。
そいつは去年の法案改正の所為で今じゃ生産停止の上、製造法も現存品諸共お上の押収喰らってると来た。
だからどうしたもんかなぁと、思ってた所でな」

兆眼紫円陣とは、指定した無生物を至る所へ、そこに在るべき姿で転送する布状の魔術道具である。
転送先に距離は関係なく、異なる世界にすら送り届けることが出来るという奇跡のような代物だった。
繁は資料でこれの情報を目にした時即リストに追加したものの、後になって入手はほぼ不可能と知って落胆していた。

しかし、そんな繁に対する香織の返答は、またも彼の予想を上回るものだった。

「それなら心配ないよ」
「どういう事だ？」
「だってこれ、うちにあるもん」
「……何？」

「いやだからさぁ、これうちにあるんだって。押収されたのは二十年前の魔術道具売買に関する法案の改定案で導入された『購入証』付きの奴と、一部の公的機関・高所得者が持ってたのだけだから」

カタル・ティゾルにて一般向けに流通する機材・道具類には、性能に応じて格付けがなされる。

この格付けで上位に分類された魔術道具は、売買にあたりややこしい法的制限が課せられ、更に購入者はそれを証明するための『購入証』なる書類を所持しなければならならず、ある一定の状況下（購入証を提示出来ない状態で魔術道具を使う、違法行為に使用する、所持権利を失ってなお手放そうとしない等）に於いては、政府によって該当の品を押収されてしまう。

法改定の結果、兆眼紫円陣はその数量こそ少ないものの性能が高すぎると判断され、殆どの所有者が政府によって該当の魔術道具を押収されてしまっていた。

但し購入証導入以前から所持していた物についてはこの限りではなく、香織の恩師であった老婆の所持していたものは押収対象の定義に当て嵌まらなかった。

「そういえばそうだったな……何分、法律関係はまだ覚えきれて無くてなぁ……」

「仕方ないよ。基本法規に加えて各大陸が独自に法律定めちゃってるからね。

まぁ、気楽に覚えていけばいいと思うよ？元々指名手配中の身の上だし、そんなに必死こいて覚え込まなくても」

「それはそうかも知れんがよ、だからって法律完全無視とはいかんだろ。

業に入っては業に従えってな便利な言葉があるわけだしな」

「うん、字が違う。誤字にしては明らかにどうかしてる。でも私は

突っ込まない。

っていうか、兆眼紫円陣の他にもうちで確保できる物は多いけど…
…一体これで何を企んでるの？」
「何ってお前、アレだよアレ」

繁はごく自然に、ぽつりと言った。

「金儲け」
「……金？」
「そう。
お前は三年前にこっちへ来てたから知らないだろうから教えてやる。
実はこっちの世界の日本じゃ、馬鹿でかい地震の所為で一部都道府県が壊滅的な被害を被っててよ。
マグニチュードは８．５かそこらだったかな。観測史上最大、規格外の大地震だったそうだ」

その言葉を聞いて、香織は口を噤む。
まさか自分が姿を消してから、そんな事が起こっていよう等とは予想もしていなかったのだ。

「幸いにも国全体の機能が麻痺する程じゃねぇし、うちの県も無事ではあったんだがな。
二年前に政権交代があった所為で内閣の使えなさ感がヤバくてよ」
「じゃあ、被災した人達は…」
「各方面からの支援で暮らしはナンボか楽になってるが、問題は山積みだな。
特に、どっかの馬鹿が修理代ケチった所為で原子力発電所がぶっ壊れやがったもんで事態は更におっかなくなってやがる」

「つまり、カタル・ティゾルで稼いだお金を兆眼紫円陣で向こうの世界へ送り込むんだね？」
「その通りだ。このテの境遇に晒された奴は大体辿り着いた世界を救いたがるが、俺は違う。
あくまで俺が産まれた世界への愛を示し、俺が育った世界への敬意を示す。
それが、俺を産み出し育ててくれた世界への、最大の恩返しであり善行だ。

その為には汚ぇ事もしなきゃならんだろうし、最悪死も覚悟してるが……どうする？
そこまでするクズ従兄弟に、お前は肩入れする覚悟があるか？
運が悪けりゃ、お前も巻き添えだぞ？」

言い方こそきついが、その言葉には大切な従姉妹への思いやりが含まれていた。
そしてその事をちゃんと理解している香織は、自信を持って答える。

「当然。ここで捨てるくらいなら、兵士に追われてるって時点で家に入れてないよ。
こんな所で三年も暮らしてると、妙なところで勘も鋭くなっちゃうからね」
「そういうもんか」
「そういうもんだよ。大体、繁の考えたことは面白さという一面ではほぼ外れが無いもん。
元の世界にも帰れずにこんな異世界で骨埋めるくらいなら、精々足掻いてみたいと思ってたんだ。

情報収集とかなら任せてよ。
魔法は実戦で使い物になるようなレベルじゃないから戦ったりは出

来ないけど、小細工なら自信あるから」
「頼りにしてるぞ」

かくしてここに、カタル・ティゾルを混沌に陥れる異世界人のコンビが誕生した。

第六話　サポート要員にお勧めな従姉妹（後書き）

次回、情報収集開始に伴い新キャラ登場！

第七話　辻原さんと突然の爆発事故（前書き）

変装して大陸首都へ向かった繁は、そこで突然の爆発事故に遭遇し……

第七話　辻原さんと突然の爆発事故

―前回より―

「さて、どうするかな」

前回、カタル・ティゾルでの活動方針を確立させた繁は現在、最初の現場として選定したノモシアの大国・ルタマルス首都圏ジュルノブルの街道にてベンチに座り込んでいた。

ルタマルスはエクスーシアに次ぐ第二位の地位に属するノモシアの主要国家が一つであり、実質的にはエクスーシアを遙かに凌ぐ程の国力を誇る。
ただ、比較的新しく歴史の浅い国家である為形式上の最上位はエクスーシアとして定められており、その立場は現代日本に於ける皇族に類似したものである（しかも当のエクスーシア上層部はこの扱いに全く気付いていない）。

そしてベンチに座り込む繁だったが、彼は何分指名手配中の身である。
そのままの姿で出歩けば、ノモシア大陸内ならば普通に動き回ることなど出来はしない。
斯様な関係上、彼は現在身元を隠すために変装を強いられているのだが、その姿というのがまた奇抜の一言だった。
否、奇抜と言うよりは、怪しい。

上半身は赤の毛筆書体ででかでかと『致死量』と書かれた黒のTシャツを着込み、その上から白衣を羽織っている。
下半身は灰色の作業服と爬虫類を思わせる質感のベルトを巻いて、

靴の足跡から特定されては困ると黒いゴム長靴を履いていた。
何より怪しげなのは頭部であり、巨大なバッタ丸々一匹を模したフェイスマスクには特殊な術が施され、頭部と一体化しているようだった。

「さて、そんなこんなでこんな変装―ってか仮装だなこりゃ、まぁ良いや。
何にせよ金儲けの計画を進めねぇと。
とりあえずアレだ。ルタマルスはノモシアでも特に異文化交流が盛んな癖に、未だ王政なんて時代遅れな手法に拘る懐古厨だ。
だがそれは、こっちからすると好都合だとも考えられる。

ぶっちゃけ貴族のが、弄くる上で楽しそうだからな」

そんな事をぼやきながら、繁は街道を歩いていく。
作り込まれた装備品は、何れも驚くほどに通気性が良く、繁は強い日差しの下にあって尚涼しげな態度を保てていた。
現代社会の街道でこんな格好をしていれば好奇の目で見られ、好ましくないトラブルに発展することもあるだろうがしかし、ここは異世界カタル・ティゾル。
奇抜な格好をした者が我が物顔で堂々と公道を闊歩するなど日常茶飯事である。
中には、我々人類と同じだけの知性レベル・言語能力を持つというだけで、人間とはかけ離れた容姿の者も居る。
そんな中にあって、仮装した繁の姿というのはさほど目立つわけでもなく、寧ろ逆に隠れ蓑として十分機能する程のものだったのだ。

「さて……地図によるとジュルノブル城はもうすぐなんだが……この道はどう行きゃ良いんだ？
一角獣の石像はもう通り過ぎた筈なんだが……」

城を目指す道中、道に迷い地図と睨み合う繁。
そんな彼の熟考を遮るように、事態は急展開を見せる。

ッドォォォォォン！

鋭い爆風と凄まじい爆音を伴った、恐らくは可燃性ガスかある種の燃料によるものであろう爆発事故。
「い、一体何事だ！？」
慌てながらも、繁は全速力で現場を目指す。
事故現場でなら自分のヴァーミンを活用できるのではないかと考えたからである。
無論、出過ぎた真似はしない。あくまで謙虚に、そして臆病に歩を進めるのが繁の基本的なやり口だからである。

―現場―

「失礼、何か凄まじい爆風が来ましたが、一体何が起こったんです？」
繁の問に、野次馬の一人である禽獣種（哺乳類風獣人）の若者は快く答えてくれた。
「爆発事故だよ。あそこの廃倉庫に溜まってた魔ガスが何かの拍子に爆発したんだ」
「よくある事なんですか？」
「いや、滅多にないよ。魔ガスは魔力の集まりで、加工法もかなり特別だからそう簡単に爆発したりはしない筈なんだけどなぁ」
ぼやきながら、若者は何処かへ立ち去ってしまった。
「（魔ガス……確か天然の魔力をエアゾル状に加工したものだったよな？
確かに香織が持ってきてくれた資料にもそんな事があったな……ま

ぁ、世の中何が起こるか判ったもんじゃねぇ。
気を付けねぇとなーっと）」

繁は再び城へ向かって歩き出す。
しかしそんな時、倉庫内部が更に大きく爆発した。
しかも今度のそれは以前と比べてかなり大規模なもので、強烈な爆発は小振りな倉庫一つを丸々吹き飛ばすに十分すぎた。

野次馬達は予想外の出来事にパニックを起こし逃げ惑う。
しかし繁は彼自身でも信じられない程に冷静で、指先から溶解液の霧や弾を放っては周囲に飛んできた瓦礫を打ち消していく。
その動きはまるで一般人とは思えない機敏さであり、当の繁本人も別の誰かに動かされているように感じている始末だった。

瞬く間に瓦礫の殆どを打ち消した繁は、野次馬達が逃げ去ったのを確認するとそそくさとその場から立ち去ろうとする。
あれほどの爆発が起きたのに消防・救急に相当する機関が動かなかった事を疑問に思ったがしかし、それが逆に繁にとっては好都合でもあった。

しかしそんな中、彼を呼び止める者が居た。

「ねぇ、お兄さん」
「？」

見れば繁を呼び止めたのは、白衣を着たクリーム色の長髪を棚引かせる若い女だった。
側頭部や腰から生えた狐のような耳や尾は、彼女が禽獣種―哺乳類を基礎とした亜人型種族―の血を引く存在である事を証明していた。

「さっきの、凄かったじゃない。何をどうやったの？」
「手元から溶解液の弾を飛ばしただけですよ。別に大したことじゃあない」
「いやいや、凄いことだよ。ここいらの連中は誰も彼も中途半端に身勝手な奴と流されやすい奴ばっかりでさ。それに引き替えお兄さんは凄いよ。最後まで始末付けちゃうんだもん」
「そんな最後まで始末付けた覚えは無いんですけどねぇ。所々外してますし」
「外す外さないは関係無いでしょ。その場に留まり続けたって事がそもそも評価に値するんだし」
等と、通りすがりの名も知らぬ女と適当な雑談を繰り広げた繁は、女に別れを告げて城を目指す。
そしてその場に一人取り残された狐女は佇んだまま、遠くを見据えていた。

「それにしても…何がどうなってこんなに吹き飛んだのかしらね…」
等と呟きながら女が倉庫の跡地に足を踏み入れ、辛うじて爆発に耐え抜いた柱に触れようとした、その時。
柱の根元が鈍い音を立てて折れ曲がり、女は倒れてきた柱に上の下敷きになってしまった。
女はその一撃で絶命し、二度と起き上がることはなかった――
――と、思われた。
しかし、それから二分ほどして。

「――不覚、だったわ」

そんな声がして、下敷きになった女の手足が、激しく蠢いた。
かと思えば女は両手で柱をずらし、未だ身体の正面に深手を負っているにもかかわらず、何事もなかったかのように歩き出した。

更に柱によって重傷を負っていた女の身体は、一歩、また一歩と女が歩む度に治癒・再生していく。
倉庫を出る頃には、女の身体には傷一つ見られなくなっていた。

「幾ら不老不死だからって、やたらめったら危ない事しちゃ駄目よねぇ。

それにしても彼……何でジュルノブル城なんかに向かったのかしら？」

繁に興味を持ち始めた女は、密かに彼を追うことにした。
女の名はニコラ・フォックス。ルタマルスの首都圏に住まう、”元”開業医である。

第七話　辻原さんと突然の爆発事故（後書き）

次回、元開業医ニコラの真実が明らかに！

第八話　医学博士は呪われない（前書き）

不死身の医者ニコラ・フォックス。その不死性の真実と、波瀾万丈なる彼女の生涯。

第八話　医学博士は呪われない

昔々、カタル・ティゾルはルタマルスに、ニコラという女の子が住んでいました。
ニコラはとても明るく心の優しい子で、誰かを助けてあげることと、助けた相手から「ありがとう」と言われる事が大好きでした。

ニコラには、大きな夢がありました。それは、お医者さんになることです。
お医者さんになって、色々な人を病気や怪我から助けたい、守りたいと、願っていたのです。

でも、お医者さんになるのはそう簡単なことではありません。
お医者さんになるためには、色々なことを勉強し、勉強だけでは学べないような事もたくさん知っておかなければならないからです。
でも、誰かを助けたいと思うニコラは、夢を諦めずに頑張りました。
そうして頑張ったニコラは、お医者さんになるための特別な学校に入ることが出来ました。

ニコラは学校での生活を楽しみました。難しいこともいっぱい勉強しました。
そうして、学校での生活にも慣れた頃。
街へ遊びに出ていたニコラは、その姿を偶然にも、ある人に見られてしまうのです。

それは、遠い所にある大きな国の王子様でした。
お忍びで街に遊びに来ていた所を、偶然にも側を通ったニコラと目があったのでした。
そしてその時王子様は何と、

ニコラに恋をしてしまったのです。

それまで女の人に恋をした事なんて一度もなかった王子様は、それが恋なのだと気付くのにかなりの時間がかかりました。
でも、気付いてからははっきりと判るようになったのです。

これは恋なんだ。僕はあの子に恋をしているんだ。

王子様は人が良く誰とでも仲良くできましたが、奥手で少し気の小さい所がありました。
だから、その気になればニコラを探し出して思いを伝える事だって出来たはずなのに、王子様はそれをしませんでした。
出来なかったのです。

結局そうして月日が過ぎ、王子様の恋心がニコラに伝わらないまま、一年が経ちました。
勇気が出せない王子様は、幼馴染みで友達だった隣の国のお姫様に相談することにしました。

お姫様は王子様の事をよく知っていたので、王子様に「貴方のペースでじっくりタイミングを見計らっていけばいい」と言いました。
王子様はその言葉を信じ、勇気が出る時を待ち続け、その日のために告白の計画を練るのでした。

でもこの時、王子様は気付いていませんでした。

お姫様は、王子様の恋を応援する気なんて無かったのです。

それもその筈でした。
お姫様は王子様の事が死ぬほどに大好きで、王子様の愛は自分だけに向いていればいいと、そう考えていました。
だから、王子様の心が他の女の人に向いている事が何より許せなかったのです。

そしてお姫様は、作戦を実行に移しました。
遠い国から魔法の本を取り寄せ、その本にあったある恐ろしい呪いを、ニコラにかけたのです。

呪いをかけられたニコラが不幸な目に遭うことはありませんでした。
それどころか、どんなに大きな病気や怪我をしても、ニコラが死ぬことはありませんでした。
でも、お姫様にとってはそれで十分でした。何を隠そう、お姫様の狙いはそれだったからです。

というのも、お姫様のかけた呪いの力で、ニコラは決して年を取らず絶対に死なない身体になった代わりに、もう二度と子供を産めない身体にされてしまっていたのです。
鈍感なニコラはそれに気付きませんでしたが、お姫様は満足でした。
女の人だけに許された、最も大きな幸せの、最も意味のある生き甲斐の一つである、子育ての権利を、奪ってやることが出来たのですから。

お姫様は早速、その事を王子様に話しました。

「貴方が好きなあのニコラという女の子は、絶対にやってはいけないと言われている魔法を使って、子供を産むことを諦めてまで老いることも死ぬこともない身体を手に入れた」と。
それは明らかに歪められた真実でしたが、優しく奥手な王子様は、その言葉を真に受けて深く悩み苦しんでしまいます。

お姫様はこうして出来た心の隙に付け入ろうと考えていたのですが、中々上手く行きません。
王子様に近付くタイミングを掴もうとしても、大抵は失敗してばかり。
タイミングを掴んでじっくり話そうとしても、ニコラの事を諦めきれない王子様は、ニコラにかけられた呪いを解いて彼女を改心させる方法を探すことに躍起になっていて、お姫様との話もその事ばかりです。

お姫様はその事に腹を立て、腹いせに徹底してニコラの命を狙いました。
でもどんな事をしても、ニコラは死ぬことがありません。
当然でした。
ニコラは既に、お姫様がかけた呪いの所為で、決して死ぬことの出来ない身体になってしまっていたのですから。

でもお姫様は、王子様への想いとニコラへの逆恨みの気持ちでそのことをすっかり忘れてしまっていました。
そして月日が経つ内に、お姫様と王子様はどんどん年を取りましたが、呪いのかかっているニコラは年を取りません。

そうこうしている間に、王子様は病気で死に、お姫様も途中で女王様になりましたが、国を上手く治める事も出来ず、民衆に刃向かわれ、城を追い出されてしまいました。

そして数年が経ち、ニコラは無事にお医者さんになることが出来ました。
でも、ニコラはまだ、物足りない気分でした。というのも、ニコラの性格は、学校での色々な経験を経て、少し変になっていたのでした。

ニコラは思いました。

「お医者さんをやる以外に、私にしか出来ないことが、まだ他にあるんじゃないかしら?」

そしてニコラはある日、自分の身体についての秘密を知ることになります。
子供を産むことが出来ない代わりに、絶対に年を取らず、なにをされても死なない身体。
その秘密を知った途端、ニコラはあるとんでもない事を思い付きました。

自分で自分を、色々な方法を使って、殺してしまうのです。

普通の人なら死んでしまうような事でも、ニコラは死にません。
それを利用して、ニコラは色々な方法で自殺を繰り返し、その原理や様子を細かく記録することにしたのです。
例えば縄で首を縛るにしても、太さ、長さ、縛る力や縛り方、縄の材質など、その度に少しずつ変えて、どうなるかを試します。
その様子の違いや、痛みの感じ方、安全な対処方法などを、ニコラは研究し続けました。

そしてニコラはある時、それらの記録を一冊の本にして、出版しま

す。

『対死神営業妨害白書』というタイトルのそれは、人を死から救う方法を探求したために冥界から追放された死神が、密かに書き記したという設定でした。

『対死神営業妨害白書』はその衝撃的な内容と癖になる文章が相俟って大ヒットを記録し、続編が期待されていましたが、所々に王政を批判する記述が目立ったため、政府により発行を禁止されてしまいました。

それでもニコラは、お医者さんをしながら研究者としてめげずに政府と戦い続けました。
老いることも死ぬことも無いニコラの戦いは五十年以上も続き、ついには病院の営業を停止されてしまいました。
でも、ニコラは諦めずに打開策を探し続けます。

果たして彼女に、本当の安息は訪れるのでしょうか？

それは誰にも、判らないことなのでしょう。

第八話　医学博士は呪われない（後書き）

明らかになったニコラの過去。果たして彼女は繁の見方か？それとも……

第九話　再会したゼ！（前書き）

元開業医と指名手配犯は再び出会い、そして……

第九話　再会したゼ！

―前々回より―

繁がジュルノブル城に辿り着くのに、さほど時間はかからなかった。
道中の道案内はとても丁寧であり、城下町の商店経営者や城周辺の警備兵に聞けば、大抵の事は教えてくれた。
それどころか「建築士を目指している友人に頼まれたので、城の内部や周辺について詳しく判るものが欲しい」と頼めば、城の詳細な間取りは勿論、通気口や排水溝のルートまで事細かに書かれた見取り図を渡された。

「（完全に信じ込むとヤベェが……参考までに持っておくか）」

繁は外部で準備を綿密に済ませ、ひとまず城内を見学させて貰うことにした。
霊長種（我々人類と大差ない種族）の若者がガイドとして案内役を担当し、一般人に公開出来る部屋全てを三時間もかけて巡り続けた。

繁は城の内装や従業員達の業務内容等に興味津々で、積極的な見学やインタビューを行っていった。
元々善意や敬意、愛情を軸とした行動を心がける繁のインタビューには従業員達も積極的に応じており、皆不平一つ言わず嬉々として自らの生い立ちや業務内容を話し、更には私生活を語る者まで居る始末であった。
繁はそれらを大学生活で鍛えた速記で記録していくが、当然彼の目的はそんな情報ではない。
否、城の内装や従業員達についての情報もまた、目当てではあった。
しかしそれの優先順位はほぼ最下位であり、より重要な目的とは他

にあった。
それは手渡された城内見取り図の確認と、更にもう一つ含まれていた。
その目的が何かは、また後程。
―帰路の道中―
「準備は完了した……あとは筋書きと下準備だが……」
ベンチに座り込んで城の見取り図を睨みながら、繁は考え込んでいた。
しかし幾ら考えても、望むような作戦概要は思い浮かばなかった。
思案することを不毛に感じた繁は、食事にしようとベンチから立ち上がる。
と、同時に。
ガンッ―バキィ！
という鈍い音がして、木製のベンチが盛大にへし折られる。
その根源に居たのは何と、城に向かう道中で出会ったあの女―ニコラ・フォックスであった。
首の骨が在らぬ方向に折れ曲がり、頭部からは血が出ている。
「うぉっ!?あ、アンタは確か爆発事故の時出会した……ってんな悠長な事言ってる場合じゃねぇや！
気をしっかり以て下さいね!?今救命隊を――「呼ばなくて良いから」――はぇ？」

ニコラの予想外の答えに、思わず間の抜けた声が出てしまう。

「寧ろ騒ぎを大きくされたりすると困るのよ。若干政府から追われてる身だしさぁ、さっき落ちてきたのもその一件でね？」

等と語り続けるニコラの身体は、驚くべき速度で再生していく。
地に滴り落ちた血液の一滴までも傷口に吸収されていく辺り、彼女の不死性が常軌を逸している事が見て判る。
その光景に言葉を失う繁を尻目に、ニコラは存外マイペースであった。

「驚かしてごめんね？実は私ってアレがコレでこうなっててさぁ」
「微塵も意味がわかりませんよその説明文」
「そりゃ説明する気が無いからねぇ。
あぁ、自己紹介が遅れたね。私はニコラ・フォックス。この辺りで開業医をやってたよ」
「田上飛蝗（タガミヒコウ）です。エクスーシアで従姉妹と薬屋を営んでいます」

繁は偽名を名乗った。
指名手配中である今、安易に外部で本名を話すわけにはいかない。

「ヒコウか…中々に良い名前だねぇ」
「いえいえ、貴女こそ素敵ですよ。その耳や尻尾もお似合いですし」

等と適当な事を語らいながら、二人はひとまず香織の家へと向かう。
公共交通機関を乗り継ぎながら交わされる二人の会話は、雰囲気だけを見れば中々に平和的だった。
しかし内容はといえば、ニコラの素性や繁の体験談（大幅に脚色）等であり、その内容は若干恐ろしげでもあった。

「ほうほう、ではニコラさんは19歳のままで不老不死の身体に？」
「そうなんだよねぇ。理由もわからず、突然にね」

本人達からしてみれば他愛もない会話と共に、二人の時間は過ぎていく。
繁はこの間に、隙を見て小型通信機で香織と連絡を取り、異世界人である自分達の素性は隠すべきとの結論に至る。
幸いにもニコラは気付いていないようで、繁は心の底から安堵した。
香織は兎も角、自分の素性を知られてしまっては大変だし、何よりニコラを傷付けてしまうからだ。

そして列車に揺られ、獣道を歩むこと早一時間半。
二人は無事、何事もなく香織の家へと辿り着いた。
ちなみに香織の偽名は「露木揚羽（ツユキアゲハ）」とした。

―玄関―

「揚羽、今戻ったぞ」
「お帰りなさい。ノモシアはどうだった？」
「お邪魔しまーす」
「いらっしゃい。ゆっくりしていって下さいね」

等と家に上がり込む二人を、露木揚羽こと清水香織は温かく出迎える。
香織はニコラを居間に案内し、紅茶とケーキを振る舞った。
正体を覚られないよう、繁は尚もマスクを取らない。

その後、三人は他愛もない世間話を楽しんだが、ふとニコラが、こんな事を言い出した。

「それにしてもまぁ、二人は上手だよねぇ」

含みのあるその言葉に、飛蝗こと繁が問いかける。

「何がです？」

繁の問いかけに、ニコラは軽く、しかし的確に言葉を紡ぐ。

「何がってそりゃあ、嘘がよ。というか、演技っていうのかな？

随分とまぁ、巧妙なもんだねぇ。

不老の身として７０年以上生きてるけど、これほど上手で、それでいて悪意や私欲の感じられない嘘は、初めてだよ」

その言葉に思わず動揺した香織が、口を挟む。

「う、嘘？何の話ですか、フォックス先生？私達、嘘なんて吐いてませんけ――「シラ切ろうったってそうは行かないよ？

気付くのにはかなり時間がかかったけどね、その分確固たる答えが見いだせたわ。

飛蝗さん、揚羽さん……貴方達のその名前、偽名だよね？

確証はないけど、何かそんな気がするんだ……。

それから、出身地とか生い立ちとかも嘘だよね？

真実があるとすれば……二人の趣味くらいでしょ？」

ニコラの推理は、曖昧でありながらしかし的確でもあった。

図星であったが故に、二人は言葉を失い返答が出来ない。

「あと出身についてだけど……二人は、さ。

異世界人、だよね？何となく、だけど」

その推理に、二人は最早言葉を失うしかなかった。

香織の経験が確かならば、地球人とカタル・ティゾルの霊長種の間には、決定的な差は見受けられない筈であった。

つまり、動向に気を遣って個人情報漏洩防止に心がけていれば、余程疑り深い人間とかなりの長期間でも居ないと、地球人であるという事はバレないというのが、香織の立てた定説であった。

しかしその定説は今、音もたてずに瓦解した。

ノモシア出身の、一人の開業医の「何となく」という理由で立てられた推論によって。

繁と香織はアイコンタクトで瞬時に意見を交換し、ニコラに真実を話す決意を決めた。

通報されてしまうかもしれないが、そうならないようにどうにかするしかない。

繁と香織は、覚悟を決めた。

第九話　再会したゼ！（後書き）

二人の旅もここで終焉か！？

第十話　彼女も同類（前書き）

またもや明らかになる事実。そのヒントは、タイトルにあり

第十話　彼女も同類

―前回より―

繁と香織は、ニコラに全てを打ち明けた。

自分達の本名から、詳細な生い立ちや、その活動目的まで。

ニコラもある程度の情報は得ていたようで、指名手配班辻原繁についての情報は既に持っていたという。

しかし彼女は繁を罪人だとは思っておらず、寧ろ王族主導で行われる政治体制に対して否定的だった彼女は、繁の行動を寧ろ賞賛する意向を示した。

それどころか、度重なる王族批判により政府からの圧力を受け開業医としての立場を追われ、更に命を狙われる等、自業自得とはいえ散々な目に遭っているニコラは、二人に協力したいとまで言いだした。

最初は驚いていた二人だったが、その真っ直ぐな志や資質は繁の立てた計画の人員としては十分採用に値するものであり、拒否する理由は見当たらなかった。

「それにしても驚いたよ。まさか異世界人がヴァーミンの有資格者になるなんてね」

「おや、ヴァーミンをご存じで？」

「ご存じだよ。っていうか敬語やめてよ。これから一緒に戦っていく仲間なんだしさぁ、私だって心は子供のまんまなわけだし」

ニコラの主張を受けた繁と香織は、彼女の意見を採り入れることに

した。
「そう……か。
ではニコラ。お前はヴァーミンについて、どの程度知っている？」
その問いかけに、ニコラは誇らしげに答えた。
「基礎的な事は大体全部知ってるね。
何せ私……」
そして彼女は白衣の右袖をまくり上げ、白い細腕をさらけ出す。
その二の腕を見た二人は、驚きの余り言葉を失った。
「ヴァーミンの有資格者だからさぁ」
等と言うニコラの右二の腕には、黒い蛾のような紋章が描かれている。
「『ヴァーミンズ・トリー　タセックモス』。
ドクガの象徴を持つ三番目のヴァーミンだよ」
「ドクガか…しかし驚いたな。まさかこんな近くに同類が居たなんて……」
「まさか、繁に近付いたのもそれを察知したから？」
「その通り。ヴァーミンの有資格者は、その気になれば互いの存在をうっすらと認識できるようになるの。
そうしてなくても、無意識に過ごしてたら何か人が寄ってきて、気が付いたらこの人有資格者だって事もあるらしいし」
「そうか。それは良いことを聞いた。有り難うよ、ニコラ」
「ん？何が？」
「判らないのか？ヴァーミンは只でさえ凶悪な能力だ。そしてその

有資格者は、まだこの世界に八人も居る。
全ての有資格者と協力的な関係を維持できるとは限らないし、生い立ちや職業、それに種族だってピンキリの筈だ。
そんな状況下だからこそ、同類を意図的にサーチ出来るという性質は実に有り難い。
協力的な同類は早く出会って仲間にするに限るし、敵対的な同類は早々に狩る事が出来るからな」
「確かに一利あるね、流石繁」
「止せ、香織。こんな作戦だれだって思い付く。
それより問題は、初回の作戦での動き方だ」
「あ、初回の作戦の現場決まったんだね？」
「無論。下見もしっかりしてきた」

繁はテーブルの上に、ルタマルスで手に入れたジュルノブル城の見取り図を展開した。
見取り図は所々カラーペンで加筆が施されており、繁の私的な憶測や作戦内容の片鱗が見て取れる。

「今回の現場はルタマルスの首都ジュルノブルに居を構える王族・アイトラス家の住まうジュルノブル城。
メインターゲットは当然当主エスティとイルズの夫婦だが、それ以上に重要なのは娘のセシルだ」
「セシル・アイトラスねぇ、白金色をしたロングヘアと整った顔立ちに青い瞳が特徴的な１５歳だっけ？」
「あの乳見たら普通２０歳くらいには思っちゃうけど、でも１５歳なんだよねぇ」
「そう、だ。ガイドブックにも顔写真とプロフィールが載るくらいの有名人、それが王女セシル・アイトラス……。

そしてこのガキには、髪だの身体だの目玉だの、そんな事よりずっ

と重要な特記事項がある…何か判るか？」

確かに、何か重要な事があったような気がした。
しかし二人はそれを思い出せず、首を横に振る。

「まぁ、お前等は俺と違って暇じゃないから仕方ないな。

セシル・アイトラス……奴にある重要な特記事項……それは、奴の種族だ」

「種族？それってどういう事？」

「アイトラス家は代々高純度の霊長種でしょ？」

「如何にも。アイトラス家は霊長種としての血統を維持するために、緊急時には近親婚が認められるほど人種に五月蠅い。
食や医療に関する分野も独特で、調べた限りだと、毎日決まった時刻に魔術で加工したケトゥスペールを炙って吸ったり、硫化水銀や獣骨、魚の肝臓や竜種の胆汁なんかを調合した精力剤が代々伝わってたり、料理に砕いた真珠や水晶を混ぜたもんを毎日食べてるんだと」

ケトゥスペールとはカタル・ティゾルの海に棲息するフナダマクジラという巨大なハクジラの腸内に発生する蝋状の結石であり、一般的には天然香料として高額で取引されている。
言ってみれば現実世界の龍涎香（リュウゼンコウ）に等しいものであり、貴族や政治家等の金持ちが私用で買い求める事で有名である。
その上、カタル・ティゾルでは研究のための調査目的や、害獣指定され駆除が認められている地区以外での捕鯨が禁止されているためケトゥスペールの希少度は鯨肉と並んでかなり高く、オークションにて億単位で落札される事も珍しくなかった。

「で、だ。そんな事してるのはカタル・ティゾル広しと言えどアイ

トラス家ぐれぇでよ、その上上層部の延命や治療の為に魔術を平然と使うような連中だ。
そんな事になってりゃ、幾ら純粋な霊長種だろうと、何かしらの変異が生じて亜種が産まれても文句は言えん。
事実カタル・ティゾルは同性愛や近親婚について比較的フリーな傾向にあるからな。
ある豹系禽獣種の兄妹が近親婚の末に産んだ子供は、親と似ても似つかない毛色かつ尾が三本もあったという」
「その事なら時代柄大学じゃ習わなかったけど、最近の医学書でなら読んだことあるよ。
他にも、回復魔法を頻繁に受けていた霊長種の母親から角の生えた子供が産まれたケースもあるみたい」
「それ以外にも、先天的な遺伝子変異で親と違う姿になったりっていうケースは昔からあるらしいよ。
それが一つの血筋として繋がってることもザラらしいし。
確か、『亜種血統』だっけ？禽獣種や羽毛種なんかだと顕著なんだよね」
「流石だな二人とも。
で、調べた所によると、だ。セシルも霊長種の『亜種』であるらしいという事が判った」

二人はその言葉を聞いて、どの道色白で耳が三角形かつ比較的細身で美形になる傾向にある尖耳（せんじ）種や、頭に角を持ち身体能力の高い有角種であろうと考えていた。
しかし二人の予想は裏切られ、また二人は度肝を抜かれることになる。

「どうせ二人とも、尖耳か有角だと思ってんだろ？
だがな、奴はそんな甘っちょろい亜種じゃねぇんだ。

あのガキ……セシル・アイトラスはな……飛姫（ヒキ）種なんだよ」

二人は絶句するしかなかった。

第十話　彼女も同類（後書き）

飛姫種とは一体何なのか…？

第十一話　ＩＳ〈命懸けの繁さんラジオ公開録音スタート〉（前書き）

明らかになる飛姫種の正体。そして繁が実行に移した計画は……ラジオ番組？

第十一話　ＩＳ〈命懸けの繁さんラジオ公開録音スタート〉

―前回より―

嘗てカタル・ティゾルに於ける科学の聖地ラビーレマに、一人の工学者が居た。
学者は霊長種の若い女であり、自らを天才と自称し興味を持たない者への態度は最悪。
それ故に忌み嫌われ、度々迫害の対象になっていた。

ある時、女は発明をした。それは機械的な鎧のようであり、人が着込む事が出来た。
理論によればそれは魔術と科学を併合させたものであり、独自の出力機関により空を飛び、また虚空より武器を産み出し、更に着込んだ者の命を絶対的に守り通すとの事だった。
各大陸・各国家はこの鎧を貪欲に欲し、研究に着手した。

しかし鎧は、人を選んだ。
鎧を着込み動かす事が出来たのは、主に霊長種の女性―中でも、特に選ばれた者だけだったのである。
更にその鎧の中枢部に使われている機関の構造は発明者の女が独自に作り出したものであり、他の何者にも再現する事は不可能だった。

よって各大陸・各国家の政府は、我先にと女を自らの陣営へと招きたがった。
しかし女は突如姿を消し、残されたのは全１３４４の鎧―『プリンキピサ・サブマ（和訳：王女の奇跡）』だけだった。

後にラビーレマが誇る生理学者や医学博士が、プリンキピサ・サブ

マを起動させる事の出来た者の体組織を詳しく調べた所、何れも身体の何処かに僅かな変異が見受けられた。
この変異した組織は後に『ＰＳ因子』と名付けられ、因子を持つ女性達は『飛姫種』と呼ばれるようになり、軍人や研究対象として優遇される事となる。

「と、まぁこんな話は至極有名だからまだ良い。
問題は、セシル・アイトラスが飛姫種だって事と、それが公表されてねぇって事だ。
城の内部じゃわりと有名らしく、情報源はそこらしい。

俺は今回、この情報をどうにか作戦で上手く利用出来ないかと考えてるんだが……その話は後だ。

実を言うと作戦プランは既に出来上がってる。
下準備だって完璧だ。

あとは二人に、こいつを見て欲しい」

そう言って繁は、ホチキスで閉じられたコピー用紙の冊子を二人に手渡した。

「これは……台本？」
「そうだ。香織の魔術サポートでかなり凝った仕掛けを組めたからな。
ただ単に侵略していくんじゃ面白く無ぇ。

ここは一つ、奇抜に攻め入る」
「奇抜にって……こんなんで大丈夫なの？」

「大丈夫かどうかは知らん。しかしながら、こうでもせんと面白みが無い。
敵だってろくすっぽとっ捕まえもせずどうせ殺すか無視するかだ」
その発言に疑問を抱いたのか、香織が一言。
「あれ？囲って調教とか繁殖とかしないの？」
女ながらにとんでもない事を言う奴である。
「誰がそんな馬鹿馬鹿しい真似するか。
俺が目指すのは破壊神だ。破壊行為の末に金が得られればそれでいい。

ハーレムを夢見る奴に人格者なんて居ない。いや、ごく希に居るが……十中八九はクズだ。
その内の八割は性行為どころか女とまともに喋ったことも無いような若手童貞。
残る二割は性欲のまま、知的生物としてのモラルを捨てて生き続けるバカに過ぎん。

生涯抱ける女なんて精々一人が原則だ。二人目を探すのは、そいつと別れる羽目になった時で良い」

「珍しいねぇ。英雄と侵略者は好色家の性豪ってのが常だと思ってたけど」
冗談半分のニコラに、繁は言う。
「俺は英雄でもなきゃ侵略者でもねぇ。只の大学生だ」
自作の台本を握り締める繁の顔は、何処か笑っているようだった。

―翌日・ジュルノブル城―

「皆様、御機嫌よう」
『お早う御座います。セシル王女』

煌びやかな青いドレスに身を包んだセシル・アイトラスの一声に、従業員達が一斉に返事を返す。

「今日はとても素晴らしい一日になりそうな予感がしますわ。例えばそう……愛しい愛しいあの方が、今日こそ私の元へ舞い降りて……」

等と、音信不通の思い人の顔を思い浮かべるセシル。
しかしその日は残念ながら、彼女にとって色々と大変な日になってしまう。

城の従業員達が持ち場に戻り、自室のセシルが思い人との妄想にふける中、城に異変が起こり始める。
壁や柱が鳴動し、それらが機械的に開いたかと思うと、内部から黒い巨大な箱が幾つも出現し始めたのである。

「な、なんですの一体っ！？」

突然の事態に取り乱すセシルだったが、城の鳴動と黒い箱の出現は案外すぐに収まった。
そして黒い箱――セシルはそれが、ラビーレマの技術による蓄音機の一部―即ち我々の間でスピーカーと呼ばれるものであると理解した――から、人間の声と思しき音声が鳴り響いた。

『『せェーのッ……「ツジラジ」ッ！』』

続いてアニメのオープニングかアダルトゲームのデモムービーを思わせる音楽が流れ出す。

『はァーい！始まっちまいましたァ！』
『始まったねー！目出度いねー！』

話しているのは若い男女二人らしく、妙に上機嫌でもある。
そんな事ぐらいしか察知できなかったセシルだったが、一つだけ確信している事があった。

「（…この音量……最悪ですわッ……）」

狭い室内で四方八方から大音量の音声を叩き込まれたセシルは、決死の思いで部屋から脱出。
廊下で衛兵達と合流し、非常口へ向かっていた。
しかしスピーカー越しの男女の会話は尚も続いている。

『さてそんな訳で初めまして。
私この「ツジラジ」でメインパーソナリティを勤めさせて頂きます。
「チューターの教える生物科学概論に感動した１８の夏、或いは矮小な虫の尾」ことツジラ・バグテイルです』
『何か長い上に意味不明！？っと、リスナーの皆さん初めまして。
「ツジラジ」メインパーソナリティその２こと青色薬剤師です』
『突然何事だって思うかもしれませんがそれは無理もないことなんですね。
何せこの「ツジラジ」、放送決定したのが何と三日前なんですよ。
以前この時間帯にやっていた「朝から爆裂気分」が、諸事情により急遽放送を急死せざる終えなくなったとの事で、放送局の局長さんが偶然別件でその場に居合わせた私達に目を付けまして』

『何か私達にラジオをやれっていきなり言って来たんですよ。
それで急遽企画を考えて、設備も整えて…』
『そもそも今こうやって放送してますけど、まだ尺埋めるのに十分な企画が思い付いてないんですよ。
いや本当、冗談抜きで』

等と、スピーカーから聞こえる男女の会話を聞いたセシルは思った。

「（今日は何だか、人生最悪の日になりそうな予感がしますわ……）」

そしてそんな彼女の気心を知ってか知らずか、メインパーソナリティの二人―もとい、繁と香織は、上機嫌なままに番組を進めていく。
電波ジャックによる、完全な違法放送の元に。

第十一話　ＩＳ〈命懸けの繁さんラジオ公開録音スタート〉（後書き）

もう凄いとか言う、レベルじゃない

第十二話　ジュルノブル城物語（前書き）

この反応は北米版ＢＷ二期日本語版最終回を思わせる勢いで……

第十二話　ジュルノブル城物語

―前回より―

『ツジラジ』の放送は六大陸全土に及び、それらは各所で話題を呼んでいた。
各大陸放送局は電波ジャックの元に探りを入れて放送をやめさせようと躍起になっていたが、複雑怪奇な術式の適用された電波は探りを入れようにも逆に機材を狂わせてしまう始末。

更に各大陸放送局には問い合わせが殺到し、各局は苦情の嵐に巻き込まれる事を覚悟した。
しかし電話の内容はその予想と真逆のものであり、『ツジラジ』は民衆に対して好評だった。

―放送開始から１０分、ジュルノブル城―

いつの間にか城内に閉じこめられていたジュルノブル城の面々は、『ツジラジ』に聞き入っていた。

『はい。と言うわけでフリートークもそこそこに、今回は何と初回にして素敵なゲストに来て頂いています』
『えぇ!?何それ聞いてない！っていうかラジオって初回は大体ゲスト無しだよね！？』
『そこはまぁ、色々とアレって事で許せ。
サプライズっぽい仕様にした方が面白いとか思ったんだよ。

という訳で、素敵なゲストに来て頂きましょう。
ノモシアの医者を語る上でこの人を知らないならモグリだぜっ！

不死身の天才医学博士、ニコラ・フォックスさんです！どうぞ！』

その名前を耳にした瞬間、セシルの顔色が変わった。

「ニコラ・フォックス……？
お婆さまの愛しい人を奪い取り、今ものうのうと生き続ける汚らわしい泥棒狐が何故こんな所に……？」

王族家や王制国家政府と真っ向から敵対しているニコラは、当然アイトラス家からも快く思われていない。
というより、彼女が王政批判で槍玉に挙げるのは基本的にアイトラス家であり、特にセシルに関する記述は私情による脚色が酷く、ある種惨劇と言って良い有様である。
また彼女は両親から、今は亡き祖母―つまりニコラに呪いをかけた張本人―の話を脚色の限りを尽くされた形で聞かされており、ニコラを完全な悪役として考えていた。
それ故、スピーカーの向こうで楽しげにパーソナリティと語らい、賓客として持て成されるニコラの姿を思い浮かべるだけで腹が立ってきた。

そして彼女の耳に、思いがけない情報が入ってくる。

『それにしても今日の収録場所…一体何処なんです？』
『あ、それ私も気になってた。何かスタッフさんに目隠しされた状態で連れてこられたんだけど……』
『右に同じく。ツジラさん、ここ何処なんですか？』
『よくぞ聞いてくれました。実はここ、何とも凄まじい場所なんですよねぇ』
『『凄まじい場所？』』

「一体何処だと言うんですの…？」

『何と本日はですねぇ……

ジュルノブル城中庭中央地下に設営した特設スタジオで収録を行っています！』

――えぇえええええええええええええ！？――

驚きの声はスピーカーから、ジュルノブル城全体から、そしてカタル・ティゾルが六大陸全土から響き渡った。

『あと、地味にせり上がったりします』

――はぁあああああああああああ！？――

再び驚きの声。最早大騒ぎである。

それは地味じゃないだろ！

ラジオを聞いていた誰もがそう思った。

そして、中庭へ向かったジュルノブル城の面々が見たものとは……

―中庭―

『ハイ！んな訳でせり上がってみたわけですが…こりゃすげえ！
何て出来でしょう！見たことも無い花々が軒を連ね、高級感たっぷ
りの高級大理石をふんだんに使った彫刻なんて見事なモンです！
彫刻以外にも、石畳や中央の池だって賞賛に値する出来ですなぁ！』

中庭の芝生を突き破って現れた小屋の中から外の風景を見た繁は、
それらを絶賛していた。
そう言われて王家の面々や中庭を手入れしていた庭師達も、満更で
もない表情を浮かべる。
しかしその嬉しい気分も、続く繁の一言で台無しになる。

『イヤー本当に凄いですねえ！一体どんだけの国家予算と公的補助
を注ぎ込めばこんな事が出来るんでしょう！？
多分アレですね！死亡税なんてもんがまだあるんでしょうねこの国
には！
いや～時代遅れも大概にしてくださいよ全く！
これじゃまるで中世のクソ時代じゃありませんか！』

その言葉が流れた瞬間、カタル・ティゾルの反応は大きく二つに分
別された。

まず一つ目は、王政反対派による歓喜。
そして一つは、王政支持派による憤怒。

当然王政支持派であるルタマルス政府とアイトラス家の面々は怒り
狂い、政府は軍に命じて即時ツジラジの放送を辞めさせるための『
ツジラ討伐隊』を編成しジュルノブル城に派遣。
ニスティの指示を受けたジュルノブル城専属の兵士や騎士、魔術師
等が、四方八方から中庭のスタジオに突撃した。

しかし、攻撃は意味を成さなかった。

ツジラ討伐隊はジュルノブル城周辺に展開された特殊な障壁に弾かれて中に入ることさえままならず、同じくジュルノブルの戦闘員による攻撃も、スタジオ周辺の障壁に弾かれてしまったのである。

―軍司令部―

「オップス大佐！城の周辺で何をくすぶっている！？」

討伐隊の指揮を執るスタウリコ中将は、通信機越しに討伐隊隊長のオップス大佐を怒鳴りつける。

『申し訳御座いません！ジュルノブル城周辺に破壊困難な障壁があり、現在解除作業に当たらせているのですが…』

「そう言ってもう１０分だぞ！？迅速に事を進めるのだ！」

『か、畏まりましたァッ！』

通信を終えたスタウリコは、呆れたように椅子に腰掛けた。

「しかしどういう事なのだ……？

我がノモシア軍魔術隊の精鋭が、只の障壁如きに十分など――「古式特級魔術では、ないかね」

ぼやくスタウリコの背後に、何者かが歩み寄ってそう言った。

「そ、そのお声はッ！」

スタウリコはその声を聞いただけで狼狽え、思わず椅子から転げ落ちてしまった。

「ド、ドライシス上級大将ッ！？何故このような場所に！？」

スタウリコが慌てて振り向いた先に居たのは、爬虫類を思わせる頭

や角、腰から生えた細長い尾、堅い鱗に覆われた肌等が特徴的な『竜属種』の女にして、ルタマルス軍の頂点に君臨するランゴ・ドライシス上級大将であった。

「そんなに取り乱さないでおくれ、スタウリコ中将。本官はそういう風に、他人から怖がられるのが嫌なんだ」

「こ、これは失礼致しましたッ！」

「別に謝らなくたって良いさ。それで本題だけど、あのツジラという男とその仲間の内に、最低一人は古式特級魔術の使い手が居るよ」

「古式特級魔術……嘗て、文明と呼ばれる概念さえ曖昧だった時代に編み出されたとされる、１４５の強大な魔術の事ですか…？しかし、あの術に関連する資料は殆どが消え失せ、扱えるような術者も殆どが死に絶えていると聞きましたが……」

「しかしだよ君、並の障壁なんて訓練された王宮魔術師が十人がかりで本気を出せば簡単に破れるんだ。まさか天下のジュルノブル城が、障壁破りも出来ないような三流魔術師を雇い入れている筈もない。となると、それしか考えられない。」

ドライシスは踵を返すと、歩み出しながらスタウリコに言った。

「中将」

「は、はいッ！」

「この一件、どうも一筋縄では行かないようだ」

「と、仰有いますと…？」

「本官の左肩がね、朝からどうも変なんだ」

言葉の意味を覚ったスタウリコは無言のままドライシスを見送り、現場へと連絡を入れる。

「諸君、この件にはかの有資格者が絡んでいる。
くれぐれも用心せよ」

第十二話　ジュルノブル城物語（後書き）

まさかヴァーミンの有資格者が軍内部にまで！ツジラジはどうなってしまうのか！？

第十三話　王家（やつら）は主人公（おれ）を嫌ってる（前書き）

通称「やつおれ」

第十三話　王家（やつら）は主人公（おれ）を嫌ってる

―前回より―

『ハイ！そういう訳で今回のメイン企画行ってみましょう！』

『『エーイ！』』

まさか軍で上級大将が動き出している事など露知らず、繁達はラジオを続けていた。

『先程も仰有ったとおり、この番組では視聴者の皆様から寄せられたカタル・ティゾルの謎や事件に、我々が体当たりで挑んでいきます！

そしてその様子をドラマチックかつ器用な編集で上手いこと纏め上げ、皆様にお伝えすると、そういうコンセプトな訳です！』

『成る程！』

『本来は皆様から寄せられた情報を頼りにアクションを起こしていくのですが、今回は第一回記念という事で！

何と、此方でご用意した企画を生中継でお届けします！』

ツジラこと繁のそんな豪快過ぎる一言に、六大陸全土が沸き立った。

『そして今回此方でご用意した企画とは……』

『企画とは…？』

『一体何なの？』

『その名も「第一次ノモシア内戦　ジュルノブル奇闘編！～王家（やつら）は主人公（おれ）を嫌ってる～」

即ち、我々対ジュルノブル城の皆様＆ａｍｐ；その他の方々での全面戦争って訳です！』

その言葉に、視聴者達は言葉を失った。

『ルールは至極簡単！
我々三名と、城の内と外に控えて居られる方々とで真っ向からのガチバトル！
武装・魔術等戦術に制限無しで、開始２４時間以内に相手チームの２／３以上を戦闘不能とした方が勝ちとなります！
尚、参加資格を持つのは現在ジュルノブル城内部に居る方と、政府命令で派遣されてきた討伐隊の皆様、更にそこに加えて、王家・軍艦傾斜一名様に限らせて頂きます！
そんなわけでェ～』

『『『開け、障～壁☆』』』

三人の言葉と共に、スタジオと城の周囲を取り囲んでいた障壁が消え去った。

―門前―

「大尉！障壁が、消え失せました！」
「何ぃ？良し！全軍突撃だ！陛下達をお救いするぞ！」

こうして、進軍が開始された。

―スタジオ内部―

「そいじゃあまぁ……」

繁は香織とニコラに指示を下し、自らも戦闘準備につく。

「企画スタートだ！」

繁の言葉を合図に、スタジオは機械的に展開し、どういう原理か機材も地面の下へ潜っていく。

そしてその場に残されたのは、何と繁ただ一人。

能力のままにサシガメ型のフェイスマスクを被り、作業着の上に羽織った白衣の背にはデカデカと『生地万歳』と書かれている。

「どっからでも、かかって来やがれ！」

その言葉を聞いた兵士達は、冬眠開けの雑草か蛙が如く勢いで繁に向かっていく。

騎士達は槍を構えて突進し、剣士達も一斉に斬り掛かる。

更に建物上部で様子を伺っていた魔術師達も、炎球や氷弾、電撃等、要素こそ千差万別なれど皆想いを一つに攻撃魔術を放つ。

一部兵力は王家の護送に当たったが、どのみち侵入者を殺したいという思いに違いはない。

しかし、次の瞬間。

「『ワカバグモの切肉網』ッ！」

辻原は叫びに伴いその場で華麗なスピンを決めると共に、溶解液を糸状にして周囲に放つ。

空中でも尚彼の意志に従う溶解液の糸達は、蜘蛛の巣型の網となり、

繁の周囲へと素早く広がっていく。
そしてそれらは、最前列で突撃する剣士達に降りかかる。

結果、剣士達は断末魔さえ上げずに血肉を撒き散らし、大振りな肉片へと変わり果てた。
その様は、まるで人間版サイコロステーキとでも言えば良いだろうか。
ともあれ凄惨な光景である事に変わりはなかった。

突如無数の剣士が鎧諸共肉片と成り果てたことに動揺した騎士と魔術師の心に、一瞬の怯みが生じる。
更に飛んできた炎や氷の攻撃魔術も、繁が脚を踏み鳴らしただけで地面から伸びてきた木材のような謎の触手によって打ち消されてしまった。

しかしそれでも尚、残った兵士や騎士は突撃し、魔術師達も各々の弾丸や波動を放つ。

対する繁は何処からか黄色い箱形の物体を取り出し、言った。

「ニコラ！上は任せた！」

その直後、魔術師達が待機している屋根の上が一部波打ったかと思うと、液体を突き破るようにして現れた者が居た。
ニコラである。

ニコラは早速両手の中指と人差し指を銃身に見立てて拳銃の形にし、それを水平状態で魔術師達に向ける。
それを見た魔術師達はというと、

「何だ貴様……思わせぶりな登場をした癖に、まさか輪ゴムで我々に立ち向かう気か？」
「いや待てボイセイ。奴は怪しげな呪術に手を出し悪魔を孕んだと噂される国賊のニコラ・フォックスだぞ？
もしかしたら指先から光線でも打つのかも知れない」

心底馬鹿にしたような態度で、ろくに攻撃魔術も撃ってこない。
完全に此方を軽視した態度に、怒ると言うより呆れを覚えたニコラは、早速指先から空気弾を数十発放ち、それら全てを魔術師達に命中させた。

それでも空気弾そのものの威力は控えめなので、やっぱり魔術師達の態度は変わらない。
しかしある魔術師がふと空気弾の当たった自分の左脚を見た時、その空気は一変する。

その魔術師は自らの左脚を見て、驚愕と恐怖の余り取り乱した。

「おい、どうしたんだ？」
「かっ、かかっ、かかかかかかっ……身体……からだがぁ！」
「身体……――――ッ！？」

取り乱す魔術師の言葉を頼りに、改めて自らの身体に目を遣った魔術師達は、一斉に凍り付いた。

「これはまさか……『毒蛾の刻印』ッ！？」
「ご名答…よく判ったね」
「何故だ……ニコラ・フォックス……何故貴様がヴァーミンの有資格者なのだ！？
何故貴様のような国賊が、よりにもよってヴァーミンの有資格者な

どに……」
「はぁ……知らんよ。
というか、その印の意味がわかったって事は……宮廷魔術師なだけはあるねぇ」
「質問に答えろ、国賊！何故お前がヴァーミンの有資格者なのだ！？どんな呪術を使った！？何処の悪魔と契約したッ！？」

女王イルヅによって歪められた真実を聞かされて育った宮廷魔術師達は、『ニコラが禁忌の呪術により悪魔と契約し不老不死の肉体を得て、その上先代女王（即ちエスティの母）の思い人を奪おうとしていた』という話を信じ切っていた。

しかしそれは全くの嘘であり、そもそもニコラは産まれてこの方悪魔というものに逢ったことが無い（一応それらしい生物種は存在する）。

「はぁ……何処の誰に吹き込まれたかは知らないけど、近頃の宮廷魔術師はアホばっかりかい。

それと、一つ訂正。
私は医者だ。国賊になったつもりはない。

患者を生かす事。それが医者の仕事。
でも完璧に患者を生かす為には、殺す方法も知っておかなきゃいけない。
医者は患者を生かす方法と、殺す方法を知り尽くしてこそ、初めて医者として完成する。

だからさぁ、何て言うのかな。

宮廷魔術師の十人や二十人殺すぐらい、私にとっては何ともないんだよ」

そう言ったニコラの背後で、山吹色に輝く蛾のようなオーラが揺らめいた。

第十三話　王家（やつら）は主人公（おれ）を嫌ってる（後書き）

次回、遂に明らかになるニコラの本領！

第十四話　医者と軍隊と攻城戦（前書き）

ニコラ「見せてやるわ……『毒蛾』の力を！戦慄を教えてあげる……。

快楽なんて無いわ。あるのは苦痛だけ。これぞ、第三のヴァーミンッ！」

第十四話　医者と軍隊と攻城戦

―前回より―

屋根の上にて巨大な蛾のオーラを出現させたニコラは、それを引っ込めると共に自らの能力―毒蛾の象徴を持つ三番目のヴァーミン―を発動した。

すると間もなくして、何処からか甲高い羽音のような音が無数に響き渡る。

宮廷魔術師達は皆その耳障りな音に思わず頭を抱え冷静さも失ってしまう。

そして突如空気中が波打ったかと思うと、何かを突き破るようにして小さな物体が飛び出てきた。

よく見れば、それは小さな山吹色の蛾であった。

しかし蛾にしては妙に飛行が早い。早すぎる。

突然の出来事に唖然とする魔術師達だったが、そんな事など気にせず、蛾は銃弾のような動きで魔術師達へ一斉に襲い掛かる。

そして、次の瞬間。

ゾシュッ！バゴュ！ゴゲュ！

蛾の大群が魔術師達の身体に発生した刻印に突撃し、そのまま猛スピードで骨肉を貫いていく。

それも５匹や十匹ではない。軽く見積もっても一人当たり１００匹を超える蛾が、魔術師達の身体を貫いていく。

蛾一匹の全長は僅か１ｃｍ程だったが、翅の面積と推進力も相俟っ

て破壊力は既に9ミリ口径の銃弾に匹敵。
そんなものを志保魚発砲から受けて、無事で居られるはずがない。
一部魔術師は術で身体能力を上げ、弾雨をかいくぐろうとした。
しかしそれもまた蛾の執拗にして正確無比な追尾の前には意味を成さず、刻印を何百匹の蛾に貫かれ、跡形もなく死に絶えた。

「よしよし立派な射殺体。魔術師のミンチ一丁上がり」

死体の山を見てそんな事を言ったニコラは、出てきたときと同じく水に飛び込むかのようにして屋根へと潜っていった。

―同時刻・中庭―

「ツジラジィィ～ッヘァッ！」

ヴァーミンへの順応から獲得した身体能力で軽快に飛び回り、宮廷戦闘部隊の猛攻をかいくぐっていた繁。
彼は現在、積極的な攻撃よりトリッキーな回避を優先する事で洋画の猿気分を味わっていたのだが、中庭に携帯式榴弾砲が持ち込まれた辺りで流石に考えを改めたのか、そろそろ本気を出すことにした。

「早々にコイツを使ってみるか！」

繁は背負っていた黄色い箱を開く。
内部にはキーボード等の機械的なパーツが組み込まれており、繁はそれらに巧みな手つきで何かを打ち込んでいく。
そして打ち込みが終わった、直後。

「どぅおわあああああああああ！」
「っぎゃあああああああああ！」

携帯式榴弾砲を構えていた兵士達の経っていた地面がピンポイントで鳴動し、四角柱型に勢い良く伸び上がったかと思えば、兵士達は空高く跳ね上げられてしまった。
続けざまに四角柱がゴムのようにしなり、落ちてきた兵士達を叩き潰してしまった。

「おぉ、こりゃ良いねぇ。流石は上物だ」
等と宣いながら四角柱を引っ込める繁だったが、突如その背後から長剣使いの兵士が三人同時に斬り掛かってきた。
「「「ツジラ、覚悟ぉぉぉぉぉ！」」」
しかし兵士達の振り下ろした剣は何故か繁の右腕一振りではじき飛ばされ、続けざまに放たれた溶解液で骨を残して消滅してしまった。

しかしその直後に隙を見出した騎士が、ランスと盾を構えて突進を繰り出してきた。
だが繁はそれを巧みに避け、盾を溶解液で消し去ると、騎士の腹を下から殴り上げる。

ドゥゴ！
「ッガ!?（な、何故だ!?何故板金鎧越しに……ここまでのダメージがっ…！）」
それは辻原が溶解液で鎧を部分的に溶かしているからなのだが、騎士はそんな事など知る由もない。
「（そもそもかりに鎧が無かったとしても、この重み……こんな体格で出せる筈が無いッ！）」
等と疑問に思いながらも再び槍を握り締め、騎士は逆転を狙う。
「（こいつの頸椎を槍で叩き折ってくれるッ！）」
だが次の瞬間、その作戦は見事に失敗する事となる。
先程まで拳が叩き込まれていた場所から続けざまに刃物のようなも

のが飛び出し、騎士の下腹部を刺し貫いた。
「ッゴェッ！」
苦痛の余り最早言葉さえ出せない騎士の手が緩み、槍が地面に落ちた。
繁はそのまま騎士の亡骸を突き上げるようにして投げ捨てた。地面へ仰向けに落ちた騎士の亡骸は、鎧の下腹部が拳一つ分程度に剔られ、シャツには鮮血が滲んでいた。

繁の左腕もまた、肘より前が血で赤茶色に染まっていた。
訳の判らない事態に一瞬突撃を躊躇った宮廷戦闘員達だったが、ここで引き下がってはジュルノブル城警備隊の名が廃るとばかりに奮起し、一斉に突撃していく。
しかし繁は、それらの猛攻を優雅にかいくぐり、その恐ろしい溶解液の餌食にしていく。
更に彼の両腕から、恐るべきものが飛び出した。

それは平たい、金属製と思しき刃であった。
指の骨に沿って片手に四本ずつ、計八本が出そろっている。
それはさながら、数多くのメディアミックスがされた欧米の人気コミックに登場する、捕食動物の名を冠する不死の戦士を思わせる。

しかし繁はその戦士と違い、繁は煙草を好まず、異性への執着も薄い。
能力も相俟って獣というよりは虫のようであり、野性的な雄々しさや勇猛さも、繁には無い。

しかし共通している事もある。

それは、家族や友などへの愛が人一倍強いという事。

繁は両腕の鉤爪に溶解液を纏わせ、宮廷の騎士や兵士や魔術師達をどんどん切り裂いていく。
そしてそれと時を同じくして、障壁により動きを阻害されていたツジラ討伐隊やランゴ・ドライシスも、戦場である中庭へと向かいつつあった。

この壮絶な戦いは、誰にも止めようが無い。

第十四話　医者と軍隊と攻城戦（後書き）

繁の武器についてはセキヒロト氏からアイディアを頂いた。
素晴らしいアイディアを提供してくださった氏に心からの感謝を。

第十五話　大佐が主人公っぽいなんてぜんぜん思ってないんだからねっ！（前書

注意：主人公はあくまで繁です。

第十五話　大佐が主人公っぽいなんてぜんぜん思ってないんだからねっ！

―前回より―

『オップス大佐、状況説明を』
「はッ！先程突如障壁が解除された事により、城内への突入に成功しました」
『よくやった！』
「しかし、問題があります。幻術か罠なのか、城の内部が迷路のように入り組んでおり、中庭に辿り着けないのです」
『何だと？』
「更に言えば、城内部は我々の目に見える形で、建築学を乖離した凄まじい変形を繰り返しています。これでは中庭になど辿り着きようがありません」
『馬鹿な……我が軍の魔術部隊はあらゆる感覚干渉系魔術への耐性を身に付け、一級の幻術破りを習得させた者ばかりだというのに…』
「正直なところ鬼頭（キトウ）種である故に私も軍に入って長いですが、幻術や感覚干渉系魔術以外でこんな事をやってのける魔術師には会ったことがありません。
確かに専用術式を用いれば建築物を変形させる事も可能ですが、それには建造段階での術式適用が必須ですし、そうだとしても決まったパターンの変形を定期的にこなす事しか出来ないというのに……」
『いや待て大佐……その例外というのは確かに存在するぞ』
「まさか！現代の魔術理論では神性種でも不可能だという事は既に実証済みですよ！？」
『そうだ……スプリングフィールド教授の打ち立てた現代式魔術理論では、神性種でも到底不可能な事だ。

だがもし、発動されている魔術が現代魔術の定義に当て嵌まらないものだとしたら、どうかね？』

中将の言葉に、大佐は耳を疑った。

「まさか……古式特級魔術！？」

その一言は、それまで黙っていた兵士達の耳にも入る結果となり、討伐隊に動揺が広まった。

『ドライシス上級大将の受け売りだがな、しかしそうだとすれば納得が行くだろう？』

「確かにそうですが……しかし、古式特級魔術はもうかれこれ１５０年も前に習得方法を印した資料が根刮ぎ破棄され、関連教育機関でもその存在や術名・効果等の情報こそ歴史学びますが、習得方法の教育は完全に違法とされていましたよね？

更にその殆どは現役の使用者が既に他界しており、生存していたとしても殆どは各大陸で厳重な監視の元保護されていますし、更に総じて高齢である事も相俟ってツジラ・バグテイルが招き入れる事は不可能だと思うのですが……」

『確かにな。だが魔術を学ぶ方法は、何も教育機関だけではあるまい？

民間の魔術師に弟子入りする事で直にそれらを学ぶことも可能だ。

当然それが、古式特級魔術であろうともな』

「確かにそうですがしかし、しかしですよ中将。

あらゆる点で現代魔術理論を乖離している古式特級魔術を習得可能な逸材が、果たしてそう簡単に産まれるのでしょうか？」

『判らん。しかしながら、風の噂で聞いたことがある。

異世界で産まれた者の中には、比較的高確率で優れた魔術的才能を発揮する者が居るのだとな。

しかもその才能の方向性は神性種などとは違う事が多く、現代魔術理論を逸した場合が多いとも聞く』

「異世界出身者……ですか。それは盲点でした」
『……そもそもだな、大佐。現状に於いてそんな事はさして重要ではないのではないかと、私は思うぞ』
「それは、どういう事でしょうか？」
『判らんか？つまり、習得者の発生率がどうであれ、現に我々の眼前では既に古式特級魔術が行使されているのだ。
私もついつい熱く語ってしまったが、今重要なことは「如何にしてツジラ一味を捕らえるべきか」だ。
それを忘れてはならんぞ、大佐』
「はい…了解であります、中将！」
予想外の出来事の連続で不安に囚われていたオップスは、再び奮起し決意を固め、部下達に言う。
「諸君、我々が今こうして立ち往生している間にも、かのツジラという男は国王陛下や女王陛下、そしてセシル王女のお命を狙っている！
王族が命の危機にあり、また王家を護る為に警備隊の勇士達はツジラ一味の手に掛かり、尊い命を奪われているのだ！
そんな状況下で、我等ルタマルス公国軍の誇り高き軍人ともあろうものがが、この『ツジラ討伐隊』の選ばれし精鋭ともあろうものが、たかが魔術程度に恐れを成して進軍を躊躇うとは何事かっ！
我等討伐隊の軍人達よ！今こそ立ち上がって眼前の障害を果敢に突き破り、かの憎きツジラ・バグテイルのその首を、悉く刈り取ってやろうではないか！」

オップス大佐の言葉に感化された軍人達は、皆次々に雄々しく立ち上がり、種族それぞれに咆哮や奇声にも等しいほど凄まじい音量で、一斉に鬨（トキ）の声を上げ、お互いの志気を高め合った。
男も女も、若手も古参も、霊長種も禽獣種も鬼頭種も羽毛種も流体種も有鱗種も、その他様々な種族や亜種の者達が、一斉に叫ぶ。

ふとそんな時、軍人達の志気が上がったのを見計らったかのように、城の変形が止まった。
これを好機と見たオップス大佐は、部下達に向かって叫ぶ。

「今だ！我々の力を一つにして、壁を突破するぞ！」
『うおぉぉぉぁぁあああああああ！』

魔術部隊がオップス大佐を含む武装部隊に持てる限りのエネルギーを注ぎ込み、それらをまず銃砲や弓など、遠隔攻撃担当の部隊が中庭方向の壁に向けて放つ。
そして続けざまに、武装部隊が一斉に全力での突進を繰り出し、障害物を悉く突き破っていく。

最後の太い石柱一本を突き破った末、討伐隊は中庭へと辿り着いた。
所々に前線虚しく力尽きた警備隊員達の亡骸が散乱する中庭は、本来の美しさや気品を失っていた。

そしてその中央に、オップス大佐は自らの宿敵であろう男の姿を見付ける。
姿を見たことは無かったが、一度声を聞いている以上、鬼頭種の持つ気配察知の力を用いれば特定は容易い。
そして中央に佇み暢気に黄色い炭酸らしき飲料を啜る、頭に巨大な虫が丸々一匹貼り付いたような容貌の男・ツジラ―基、辻原繁―は、討伐隊に言い放つ。

「お前さん方、いい目をしてるな。

殺すのが、惜しいよ」

その言葉に対し、オップス大佐は果敢に言い返した。

「そうか。お褒めに預かり光栄だ。
お前は私達をころすのが惜しいと言ったが、しかしだ。

私は少なくとも、微塵も躊躇わずにお前を殺せそうな気がするよ」

繁が立ち上がるのと同時に、オップス大佐は自らの武器であるウォーハンマーを構え、部下達もそれに応じて各々戦闘態勢に入る。

『ツジラジ』の第一回で遂行された企画は、遂に最終局面へと向かい始めた。

第十五話　大佐が主人公っぽいなんてぜんぜん思ってないんだからねっ！（後書

注意：主人公はあくまで繁なんです。

第十六話　俺と奴が殺人鬼と軍人で城内交戦中（前書き）

ヴァーミンの有資格者としてその力を振るう繁と、彼に翻弄される大佐。

第十六話　俺と奴が殺人鬼と軍人で城内交戦中

―前回より―

「うぉおおおおおおおお！」
「ぐあああああああああ！」
「さァ喰らエ喰ラえェッ！」

ジュォア！ゾブシュッ！

溶解液が兵士の体組織を綺麗に消し去り、鉤爪が頸動脈を分断する。
中堅戦力の中でも選りすぐりの精鋭達で構成された討伐隊であったが、変形する城と繁の奇策、そして彼の能力が故に、その数は加速度的に減りつつあった。

しかも繁の嫌な所は、如何なる物体をも的確に消し去ることの出来る溶解液を持ちながら、その力を殆ど使わないという事。
即ち繁は本気で戦って居らず、それは軍人達にとって自らの実力を軽視されている事にも等しい行為であり、純粋な愛国心と努力で生き残ってきた討伐隊メンバーにとって、死をも超える冒涜ですらあった。

メンバーの殆どを殺され、数少ない生き残りも無惨な姿にされ生きるのがやっとという中、ただ一人だけ繁の奇策をかいくぐり戦闘をやめない男が居た。
討伐隊隊長・オップス大佐である。

「素晴らしいな、隊長殿。貴方の格闘センスは、私が見た中でほぼ究極の域にある。

どうだ？軍を去り、我々と六大陸でラジオ番組を創らないか？」
「誰が乗るかっ、そんな誘いにっ！
私が一生涯を賭して守ってきたこの国の、魂とも呼ぶべき王家を冒涜し、多くの命を奪ったお前の誘いになんて、乗って堪るか！」
「そうか……それは残念。今時王家が政治のトップに君臨するなんて正気の沙汰とは思えないんだがなあ」
「お前のした事に比べれば十分正気だろう！」
「それはそうだが、身勝手な制作や失策も一つや二つじゃないぞ？ノモシアで政権を握る王族は総じて国家予算を独占気味だっていう話だってザラだ」
「だから何だ！殺人犯が誇り高い王家を―
―「これは俺が独自のラインで調べてきたネタだ。捏造とかじゃねぇし、まぁフライドポテトでも食いながら聞いてくれ」
そう言って繁はオップス大佐にフライドポテトの包みを投げ渡す。しかしオップスはそれを辛うじて動く右手ではたき落とし、踏み潰してしまった。
「……おいおい、食い物を粗末にするとは頂けんな。
その行為によってお前は、飯屋や調理師や農業者の思いと同時に、素材となった植物の存在意義までも踏みにじって居るんだぞ？
国民の模範であらねばならない軍将校ともあろう男が、そんな真似をして良いはずがないだろうに」
「殺人犯如きにそんな説教をされるのは心外だが、確かにお前の言うことは、その点に限っては正論だろうな。
だがしかし、軍人たるもの注意と警戒に心血注ぐ事を疎かにしてはならないのだ。
そのフライドポテトに毒や爆発物や電極が仕組まれていないと誰が断言できる？」
「……呆れた。何かと思えばそんな事か？大丈夫だ。貴方に何か出

来るなら、もうとっくにそれをしている。

まあ良い。とりあえず話だけでも――　ヒュォン　ガッ！

繁の発言を遮るようにしてオップス大佐が投げたナイフは、繁の持つ黄色い箱によって直撃を免れた。

「……おい、こちらに戦う気が無いのに投げナイフとはどういうつもりだ？」

「黙れ。私は将校であり兵士だ。兵士とは戦士や騎士のように余計なプライドなど持たない生物だ。

常に任務を最優先し、その為ならば如何なる手段をも厭わない。

それはある意味、貴様らも同じ事だろう？」

「それもそうだな。それに引き替え騎士や戦士なんて連中は、確かにある一転に於いては強いのだろうが、動物行動学的には弱者と呼ばざるを得ない哀れな種だったな。

よし、話はやめだ。貴方とこうして言い合っているのも楽しいが、それればかりとも――　ズバォン！　バキャン！

オップス大佐の放った散弾は、再び黄色い箱によって防がれる。

しかし流石にこの衝撃には耐えかねたのか、黄色い箱は音をたてて崩壊してしまう。

内部から基盤やキーボード、液晶が崩れ落ちる。

「そんなものをまだ持っていたのか」

「この一発が最後だがな、しかしこれで、貴様の古式特級魔術は封じられた筈だ。

発動体を失った魔術はその効力を失うか、暴走故術者に被害をもたらす……それは古式特級魔術とて例外ではない筈……」

「そうだ。それは実に正しい。
だが……」
その後繁は少々間を置いて、オップスに問いかける
「それはあくまで『私が術者だと仮定した場合の話』に過ぎない。だがしかし、この場に於いて建造物を変形させる古式特級魔術『ソワール・マルファス』を行使していた術者が、もし私でなかったとしたら？」
「まさか……青色薬剤師かっ！？」
「彼女は魔術が得意でね。攻撃系はからっきしなんだそうだが、こういう分野だと滅法強くなるらしい。
師と仰ぐ老婆は最早他界なされたが……その英知はしっかりと、彼女に受け継がれている」
「そんな馬鹿な…まさか本当に、回収計画をかいくぐって逃げ延びた古式特級魔術の使い手が居ようとは……」
予想こそしていたものの、十分信じがたい事態に狼狽えるオップス大佐。
しかし彼と繁の脚は、既に変形した城によって吸い込まれつつあった。
それに気付き更に騒ぎ立てるオップス大佐を宥めるように、繁は言う。
「狼狽えるのは止せ、将校。大丈夫だ。これも企画の演出さ」
その言葉と共に、二人は地面に吸い込まれていった。
時を同じくして、王家の面々と戦闘人員でない従業員達とが避難に

使っていた部屋から、従業員達だけが綺麗さっぱり消え失せていた。

第十六話　俺と奴が殺人鬼と軍人で城内交戦中（後書き）

親父が言っていた。

『皿の上で塩焼きになった魚はお前のために死んでくれたんだ。だから出来る限り喰わせて貰うのがせめてもの勤めだ』ってな

第十七話　飛翔王女と害虫男（前書き）

繁とオップス大佐が飛ばされたのは……

第十七話　飛翔王女と害虫男

―前回より―

地面に吸い込まれたオップス大佐と繁が吐き出されたのは、王族家三名が避難に用いている、強固な外壁と高度な防護魔術によって守られた礼拝室の中であった。

突如現れた異質な二人に、驚き取り乱す王家の面々。

「な、何だ貴様は!?一体何が目的だ!?」

オップス大佐の着ていた軍服に見覚えのあった国王エスティ・アイトラスは、彼が軍関係者―それも位の高い将校だと覚り安堵し、見慣れぬ服装の繁へ強気に問いかけた。

「おぉ、これはこれはエスティ・アイトラス国王陛下。お初にお目に掛かります。私、ラジオＤＪをやる事になりましたツジラ・バグテイルと申します。本日は我が『ツジラジ』の企画にて、このジュルノブル城を訪れた次第」

「企画……貴様等と我が城の兵達が戦うという、つまらん手合わせの事か?」

「その通りで御座います。ただ違うのは、城の兵達という点ですがね……」

「どういう事だ?」

「即ち……こういう事ですよ」

繁はマスクに仕組まれたノズルを前方に向けると、大きく反り返る。

プション

拍子抜けするような音と共に放たれた緑色の巨大な塊は、放物線を描いて飛んでいく。

四人が呆気に取られている中、その塊は女王・イルズの元へ飛んでいき、

ベシュ――ジュォァアアッ！

彼女の頭部を、消滅させた。

「ッ…お母様ぁぁぁ！」

「イルズゥゥゥ！！貴様……よくも妻を！！」

「落ち着いてください国王陛下！失礼ながらあの男、ただ者ではありません！」

騒ぎ立てる三人を尻目に、繁は淡々と言ってのける。

「イルズ・アイトラス……旧姓をミドツェーモ。

聞き込みをしたが正直悪い話ばかりだったな。

元は辺境の弱小貴族の家に生まれるも実家が没落。その後偶然出会ったエスティに見初められ、結婚。

その後夫により政治の才能を見出され、政治主導権を獲得」

繁が城や町中で集めた話は、アイトラス家の歴史を如実に物語っていた。

しかし問題は、その次からであった。

「主導権を握った後のルタマルスは、強権的な政治に悩まされることとなる。
エクスーシア程じゃ無いが、国家予算を半ば私物化したアイトラス家の政治は酷いもんだった。
家族揃っての世界一周旅行に大陸内貴族限定の社交パーティの定期開催等々、国家予算の１／３を使い込み、不足分補充の為に月単位の増税。
かと思えば余った予算を使い切る為無差別な道路工事やバラマキ政策を決行……。
それでアンチが沸かないなんて有り得ないというのに、王家批判派に間接的圧力をかけることでその勢力を削ろうとする姿勢は実に気に食わん。
そもそもこの女は自分の娘が飛姫種であるのを鼻にかけて方々で好き勝手やる事も――――　ザゴュン！

繁の頭の真横を、青い光線が通り過ぎた。
見れば光線を放ったのはセシルであるらしく、彼女が身に纏っていたドレスはいつの間にか消え失せ、ドレスのような意匠の目立つ青い鎧のようなものを身に纏い、右手にはライフルを構えていた。

「プリンキピサ・サブマか……」
厄介なことになったな、と繁は思った。
ＰＳことプリンキピサ・サブマは、扱うに値する飛姫種共々各大陸がこぞって欲しがるだけに、インチキとしか思えないような機能が目白押しである。
先ず、普段は小物などに擬態しており、傍目から見ただけでその存在を察知するのは困難であるという点。
次に、何も存在しないはずの虚空から、使い手専用の武器を取り出し自由自在に扱うという機能。
更に、取り出された武器が刃物であるなら折れもせず刃こぼれもせ

ず、銃砲ならば段数に制限が無いという事。
そして最も重要なのが、飛行能力。
何とも複雑な形状をしている癖に、それでいて平然と空を飛んだりする。

こんな性能故、繁にとってPSを起動した飛姫種は非常に相性の悪い相手であった。
しかし繁はそれでも尚諦めず、能力と奇策を以て性能の差を埋めようと思考を巡らせる。

「……お父様、この害虫めを駆除してもよろしいかしら?」
「あぁ、存分にやるがよいぞ。我が愛娘セシルよ」
「はい。では……遠慮無く殺らせて頂きますわ。覚悟なさい、この汚らわしい害虫!」

気取った口調でそう吐き捨てたセシルは早速ライフルを構え直し、繁を狙い撃つ。
しかしヴァーミンの力に馴染みつつある繁にとって、直線的な射撃を避ける事など容易い。
青い光線のような弾丸は繁に当たることなく、全てが礼拝堂の床や壁や柱に大穴を開け、テーブルや花瓶や宗教画を粉砕していく。
そして弾を外す度に父親のエスティは激しく怒り狂い、親が言うには些か相応しくないような言葉で娘を口汚く罵り続ける。

例え実の父親によるものであろうと、『ノロマ』だの『役立たず』だのと罵られていれば、怒らない方が変である。
事実、産まれながらにして頂点として育てられ、唯我独尊たる思想の元に全てを踏み台に生きてきたセシルにとって、父による罵倒の数々は本来我を忘れる程激昂するに値する程のものであった。

しかしセシルは考える。
自尊心と慢心故に世の何よりも優れていると影ながら自負している己の頭脳で。
普段の自身は、周囲に対して「高貴で優雅、かつ淑やかな才女」というイメージがまかり通っている。
それだというのに、彼女自身からすれば尻拭き紙ほどの価値しかないような軍人や、それ以下のゴミである害虫男の手前、そういったイメージを崩すのはかなり都合が悪い。
この二人を殺してしまえばその点は解決だが、問題点はまだある。
それは、恐らくこの部屋での音声が今もこうしてカタル・ティゾル全土に流れているであろうという事であり、ともすれば自分の発言が全てのカタル・ティゾル民に筒抜けという結果になるのは確実。
只でさえ王政反対派・王家批判派の勢いが強まりつつある昨今にあって、更なるイメージダウンの発生は、自分の生涯に於いて致命傷となるだろう。
そう考えれば、ここはひとまず冷静に取り繕っておくのが妥当だろうと、セシルは考えた。
自身のＰＳ『アスル・ミラグロ（青の奇跡）』にはライフル以外にも機関銃や誘導弾等多数の武器が搭載されているが、礼拝堂内の品々を破壊しては余計親子関係に拗れが生じてしまう。
となると最早、結論はただ一つに限られていた。
「（ここはひとまず……必要最低限の動作であの男を始末……そうすれば私は、城の兵達を救ったヒーローとして一躍有名人ですわ…）」
しかし彼女がそう思った瞬間、繁はその視野から消え失せていた。
そしてそれと同時に、背後へこれ以上にない程の不快感を感じ、慌てて振り返る。

すると彼女の背後には、やはり辻原が、浮いていた。

第十七話　飛翔王女と害虫男（後書き）

繁ＶＳセシル、最終局面へ！

第十八話　おねがい☆プリンセス（死んでください的な意味で）（前書き）

各大陸が欲しがるＰＳの力を使いこなす飛姫種も、繁の奇策に翻弄され……

第十八話　おねがい☆プリンセス（死んでください的な意味で）

作者は今作に於いてしばしば『プリンキピサ・サブマ』の形状を、鎧と形容している。
しかし実際の所、この兵器の形状には実際の鎧と異なる点もかなり多い。

最も大きな違いは、装着者の頭部及び胴部を守る装甲が殆ど存在しないという点であろうか。
更に装着者は兵器行使にあたり身に纏っている全ての衣類を一度取り払い、専用の防護服を身に纏わねばならない（但しかなり面倒なので、軍役中の飛姫種は最初から防護服を身に纏う者が殆ど）。
この防護服というのは薄手かつ伸縮性があり、軽量化により機動性を向上させる目的の他、兵器そのものに搭乗者の意志を、神経などを通じて伝達する作用を促進させる目的も兼ねているのだという。

しかし、今回の場合――

―前回より―

「ってイやァァァァァ！」
ドゴギッ！

――それは見事に裏目に出てしまった。

妙な叫びと共に放たれた繁の飛び蹴りが、振り向きざまにセシルの腹へと突き刺さる。
ヴァーミンに順応したが故に獲得した身体能力で放たれた蹴りは、

浮遊中の飛姫種を吹き飛ばすのに十分な力を秘めていた。

「っ！？」

衝撃の余り声も上げられずに吹き飛ばされたセシルだったが何とか空中で体勢を立て直し、天井に張り付いた繁を睨み付け、使うまいと思っていた誘導弾の狙いを繁に定める。

「（正直これは使いたくありませんでしたけど……いい加減お父様のお説教にもうんざりしていた所ですし…致し方在りませんわ）」

セシルの腰に備わった砲塔から誘導弾が発射される。

繁は壁伝いに這い回り、どうにか誘導弾の追跡を逃れようと躍起になるも、努力虚しく見事爆発の巻き添えになってしまった。

結果繁は木っ端微塵に砕け散り、壁にも大穴が空いてしまった。

礼拝堂が壊れた事でまたも怒鳴り散らすエスティだったが、この状況下のセシルにとって最早父親などさして重要ではない。

「さてと……事も済んだことですし、帰りましょうか」

ＰＳを解除しドレス姿へと戻ったセシルは、今だ怒鳴り続ける父エスティを無視して自室に戻ろうとする。

しかし次の瞬間、壁をすり抜けるようにして眼前に現れた者の姿を目にしたセシルの目の色が変わった。

「貴女は……ニコラ・フォックス！？」

「あ、誰かと思えば消費税横領と年齢不相応な薄い本向きの体型に定評のあるセシル王女じゃありませんか。

直接お会いしたのは半年前のＰＳ学院入学式以来でしたっけ？」

「何故貴方がここに居るんですの！？幾ら強大な悪魔と取引をした

ところで貴女は一介の藪医者ですわ！
それが百戦錬磨のエリート魔術師団に敵うはずがありませんわ！」
「あ、まだそのネタ気に入ってたんですね？いやぁ、女王陛下らしく寒くて売れなさそうなギャグだから、流行に囚われてばっかりのスイーツ（笑）な王女もすぐ飽きるかと思ったんですけど」
「ギャグですって！？貴女は自分が過去に犯した禁忌をギャグと偽り言って開き直るんですの！？」
「開き直るも何も、嘘なんだから仕方ないじゃありませんか。
まさかあのお話が事実だなんて思ってませんよね？
幾らオワコン系王女、脳死系王女の異名で有名なセシル王女でもそれはありませんよね？
冗談抜きでお願いしますよ！？いや切実に！」
「思ってるに決まってますわ！
貴女はお婆様の思い人を奪おうと計画し、その過程で外道に走り悪魔と取引して不死の肉体を手に入れた！
これは紛れもない真実ですのよ！？」
「はぁ……アホの宮廷魔術師達もそんな事言ってましたけど、セシル王女までとは……まぁ良いです。
そういえばセシル王女って、アホな王族ランキング王女編晩年一位でしたもんね……。
それは仕方ないですよね」
「そうそう仕方ない事なのですわ。何せ私は――って、今貴女なんて仰有いましたの！？
今私がアホとか何とか聞こえましたわよ！？」
「へ？今頃気付いたんですか？気付くの遅すぎでしょう？どんだけアホなんですか？
だからアンタはアホなんですよ。判ってます？」
「貴女……どれだけ私をアホ呼ばわりすれば気が済むんですの！？」
「さあ」
「さあって貴女……そもそも私を誰だと思って――「あ！」――ち

ょっと、聞いてますの！？
関係ない話題を切り出して話を反らせようったってそうは――ッ！？」

突如背から腹に走る不快な激痛に、セシルは思わず言葉を失った。
痛みの中どうにか振り向くと、背後には驚くべき人物が立っていた。

「……ツジラ…バグ…テイル…！？」
「お久しぶりです、セシル王女。

そして、さようなら」

端から馬鹿にしたような繁に何か言い返そうとするセシルだったが、ふと力を込めた瞬間。
彼女の体組織が一瞬で木炭のように変化。更にそこへ亀裂が走り、粉々に砕け散ってしまった。

「PS因子が身体から抜けた飛姫種は全身の細胞が炭化し死に至る……話には聞いていたが、まさかこれほどとはな」

繁は仕上げとばかりに右手から溶解液の塊を放ち、エスティをも悉く消し去った。
更にそれと時を同じくして床から這い出るように現れたのは、今回の作戦で影ながら重要な役割を果たしていた人物にして彼の従姉妹・青色薬剤師こと清水香織。

「そうだね。でもさ、こんなにあっさり死ぬようなら態々七話半もかけて攻撃する事無かったんじゃないの？」
「まぁ確かにそうなんだが、それじゃ破壊神っぽさが出ねぇだろ？
さて、あとは城内の金庫を攻めて中身を手当たり次第頂くだけなわ

けだが」
「その件なら安心して。私がちゃんと例の場所に送っておいたから。あとは回収するだけだで大丈夫な筈」
「そりゃ何よりだ。さて、金も手に入った事だしこんな所さっさとズラかんぞ」
「了解」
「はいよ～」

目的を完遂した三人は、早々に城から立ち去ろうと帰路を急ぐ。
スピーカーからは予め録音しておいた番組を締め括る挨拶が流れており、諸々の事柄が終わり次第城に仕組まれた古式特級魔術も解除され、放送は終了する。
あとは適当にその場から逃げ去り、途中で香織が例の場所に送った戦利品を回収。香織の自宅にある兆眼紫円陣でそれらを然るべき場所へ換金し流し込む。

三人はそれぞれこの計画について始終不安で仕方なかったが、それぞれが協力し合った事と偶然が折り重なった事が功を奏し、無事完遂するに至った。

しかしながら、事件はこれで終わっていなかった。

第十八話　おねがい☆プリンセス（死んでください的な意味で）（後書き）

ツジラジ第一回、無事放送終了。しかし事態はこれで終わりではなかった！？

第十九話　君が死を断念するまで説得をやめない（前書き）

繁が去った後、礼拝堂に取り残されたあの男は……

第十九話　君が死を断念するまで説得をやめない

―前回より―

最早死体と炭の散乱する廃屋同然となった礼拝堂の中にあって、ただ一人生き延びた者が居た。
今となっては壊滅したツジラ討伐隊の隊長・オップス大佐である。
繁との戦いで深手を負い、更にエスティに突き飛ばされ重体に陥った彼は、生きることを諦め、このまま静かに死を待つ事を心に決めていた。

「（どうせ生きて帰ったところで、私は軍法会議にかけられた挙げ句投獄されて飼い殺しか、最悪死刑だ。
鬼頭種の誇りに賭けて、生きる喜びを享受できない生涯を送るなんてご免だ……それこそ、死んだ方がましというものさ）」

大佐の決意は固かった。それならば今すぐにでも舌を噛み切ればいいと、思う読者も居るだろう。
しかしながら彼は、『どうせ死ぬのなら、せめて生きた目でもう少し、この景色を眺めていたい』という思いから、自殺を拒んでいた。
その奇妙な心境は、徐々に命が果て往くその時間さえも、生きる喜びとして享受しようという、彼なりの哲学の結果であった。

そうして死を待つ彼だったがしかし、ふとその耳へ幽かに羽音のようなものを感じ取る。

「（これは……まさか……いや、そんな筈は……）」

オップス大佐が思考を巡らせる中、羽音はどんどん大きくなってい

く。
そしてそれが突然止んだかと思うと、ガラスの砕けるような音が、礼拝堂の中に響き渡る。
その後何者かが大佐の近くに降り立ち、そのまま歩み寄ってくる。

妙にゆっくりとした歩みに
一体何者なのか、傷の所為で瞼を開くことの出来ない大佐は傷付いた身体で身構える。
しかし、
「おいおい大佐、身構えるのはよしてくれないか」
その声を聞いて、オップス大佐は驚愕した。
「ど、ドライシス上級大将!?何故貴方がここに!?」
「おや、連絡していなかったかな?忘れていたのだとしたらすまないね。
何、少し同類の気配を感じ取ったので来てみたんだが……どうやらもう、姿をくらましてしまったようだね」
「はい。尽力こそしたのですが、やはりヴァーミンの有資格者相手では力及ばず……結果部隊は私を残し全滅。
唯一の生き残りである私も最早この有様故、国王陛下を御守りすることも出来ず終い……」
「そうだったのか…」
「恐らくこのまま生きて帰っても軍法会議にかけられ、良くて投獄、最悪の場合死刑を言い渡されるでしょう。
そんな末路は鬼頭種の誇りに反しますので、いっそここで静かに死んでしまおうかと、そう思っていたところで御座います」

大佐の話を聞いたドライシス上級大将の心の奥底から、得も言われぬ悲しみがこみ上げてきた。
彼女にとっては、例え歩兵の一人でも大切な軍の仲間であり、家族同然に愛すべき者なのだ。

それだというのに、あんな身勝手極まりない王族如きを守るために、それ程にまで尊い命が散らされたという事がそもそも、彼女にとって怒りに値する事柄だった。

泣きそうになりながら、ドライシス上級大将は言う。

「そんな悲しい事を言うものではないよ、大佐。鬼頭種が生きる喜びを何より尊ぶ種族だというのは知っているし、君は本官の大切な部下だ。

だから君を投獄だなんて、本官は是が非でもしたくない。

でも軍上層部には王家支持派が大勢居るだろうから、彼らの意見を考慮すると確かに、君に罰を与えねばならないのは明白だ」

「そうで御座いましょうな……ですから上級大将、どうか私の事など捨て置いては頂けませんか？

私はここで死ぬさだめなのです……ですから、私は―

―「だがしかし、だからと言って君を見殺しにする事は出来ない。

そもそもだよ大佐、こうは思えないかね？

ツジラ・バグテイル一味が今回のような事件を起こしたのは、十中八九アイトラス家の悪政が原因だ。

如何に無能であろうとも、国家首脳が襲撃・暗殺されるような事などあってはならないし、それが推奨されるべき行為だとも本官は思わない。

しかしだからと言って、国家首脳陣はその立場に甘んじることなく、『もしかしたら不安を募らせた国民が反逆を起こすかも知れない』『明日にでも自分は暗殺されるかも知れない』という意識を念頭に置き、それが現実にならないよう、国民を正しく導き守り通す事こそ、国家首脳のすべき事ではないのか、とね」

「確かに……そうですが……しかしならば何故…彼らはエクスーシアでなく、この国を…？」

「理由は簡単だよ、大佐。国家首脳は常に国民を正しく導き守り通

すべきなんだ。
だがアイトラス家は違った。彼らは王族である自分達に陶酔し悪政を行ってきた。
無論エクスーシア程ではないがしかし、国民が不安を募らせ怒り狂う原因となるには十分なものだ。

ラジオにゲスト出演していたニコラ女医の本を読んだことがあるのだけど、彼女は医学だけでなく政治にも詳しいようでね。
指摘は的確だったよ。
ただ、彼女がジュルノブル城を襲撃する暗殺グループに肩入れするとは全くの予想外だったがね。

大佐、本官は思うのだよ。ツジラ一味の言うとおり、最早王政とは古いのかも知れない――否、古いのだろう。
これからはラビーレマやイスキュロンを倣い、国民が直接選んだ面々が新たなる政府として一丸となって国を治めねばならないのだ」
「政府が……一丸と…？」
「そうだ。今までの王政では、政府はあくまで王家の命令に従い、王家を補佐するだけの存在だった。
当然政治的な発言力など持ち合わせていないわけだが、それは実に効率が悪い。
ルタマルスは――否、ノモシアは変わらなければならないんだ、きっと。
これまでのように、王家だから、貴族だからと、ある程度先天的な血統で評価される文化圏ではなく、真っ当に努力して確固たる実力を得た者だけが評価される文化圏へとね。

それこそが、この国に足りないものだと、本官はそう思っている。
そういった意味では、ツジラ一味のしでかしたこの一件、必ずしも完全な害であるとは言い切れないと思うのだが、どうだね？」

「確かに……そうですが……しかしでは、これからどうするので？」

オップス大佐の問いに、ドライシス上級大将は答えた。

「そうだね……本官は――いや、『僕』は――

――軍を、去ろうと思う」

第十九話　君が死を断念するまで説得をやめない（後書き）

ドライシス上級大将の口から出た衝撃の一言！その真意とは！？果たしてこの二人の運命や如何に！？

第二十話　旅に出よう、ここではない何処か―謎と神秘の漂うあの大地まで（前編）

ドライシスの発言にオップス大佐は……

第二十話　旅に出よう、ここではない何処か―謎と神秘の漂うあの大地まで

―前回より―

「失礼ながらお伺いします……正気ですか？上級大将」
オップス大佐の問に、ドライシスは答える。
「正気か狂気か、それを完全に保証出来る者はこの世に居ないが……僕は本気だよ、オップス君」
「しかし、宜しいのですか？」
「何がだい？」
「着任中の身でありながら生きたまま軍を去ったとなれば、只では済みませんぞ？
我等は国家反逆罪に問われ、それこそ投獄や極刑は目に見えております……」
「何だ、そんな事かい？心配は要らないさ。手は打ってある」
「と、仰有いますと？」
ドライシスはオップス大佐の問に、淡々と答える。

「この礼拝堂をね、爆破してやるのさ」
「ば、爆破……ですか？」
「そうさ。放送を聞く限り、ツジラは奇抜な作戦が得意な男だ。違うかい？」
「いえ、奴は奇策に秀でた男で御座いますが…」
「それなら都合が良い。奇策を特技とする男が、罠の一つや二つ仕掛けないなんて逆に可笑しいだろう？
見たところかなりのエンターティナーだったようだから、派手な事をしたがるとも考えられる。
そこで僕達は、そこを逆手に取る」

「……成る程。つまりこの礼拝堂を爆破し、ツジラの罠により我々が死亡したと見せかけるのですな？」

「その通りさ、オップス君。

幸いなことに僕は炎の魔術が得意でね。爆薬に見せかけてこの教会一つ吹き飛ばすくらい訳はない。

そもそも彼らの仲間には、古式特級魔術の使い手が居ただろう？その片鱗と思わせれば、例え魔術であると判明しても誤魔化しが効く。

残留魔力分析から個人を特定される恐れもあるにはあるが、竜属種にその方法は通用しない。

あとは……そうだ。念のためにより死を信じやすくさせる為の偽装工作をしておこうか」

「偽装工作？」

「そう、偽装工作だ。というのは要するに、君の軍服だとか、僕の指の骨なんかをこの場に捨てておくのさ。

そうすれば偽装された死はより真実味のあるものに成り果て、走査線をかく乱することが出来るようになる。

心配することはない。竜属種は元よりしぶといんだ。指や腕の一本や二本、二日もすればまた生えてくる。

どうだい？これでもまだ、潔く死ぬ事に拘るかい？」

ドライシスの問に、オップス大佐は笑みを浮かべて冗談交じりに答える。

「仕方ないですね。ドライシスさんがそんなに私と一緒に居たいというのなら、生き残ってみましょうか」

「フフ…その意気だよオップス君」

「但し、私はかなり重いですよ？ドライシスさんの体格で、大丈夫

ですか？」
「おやおや、竜属種もかなり軽く見られたものだね。大丈夫さ、竜属種は力自慢だし、何より今回は転移の術を使って、一気にエレモスまで飛んでやろうと思っていたからね」
「エレモスですか……謎めいた第六の大陸、良いですねぇ。私達二人のセカンドライフを送るにはもってこいの場所だ」
「そうだろう？では、軍服を脱いでくれ。転移終了と共に術が発動して、礼拝堂が吹き飛ぶようにしてあるからね」
「判りました」
「そうだ、いっそ僕の軍服も脱いでしまおうか。心機一転の意味合いも込めて、エレモスではもっと女らしい服を着てみたい」
「良いじゃありませんか、きっと似合いますよ」

こうしてオップスとドライシスは自らの上着を脱ぎ捨て、転移の術を用いてノモシアから遠く離れた神秘の大陸・エレモスへと向かった。

そしてそれと時を同じくして、ジュルノブル城最上階の一角に立てられた豪奢な礼拝堂が、凄まじい爆発音を伴って盛大に吹き飛んだ。

―翌日以降―

卑劣かつ背徳的な虐殺行為であったにもかかわらず、『ツジラジ』は多くの民衆の支持を獲得していた。
というのも、事実ルタマルスを初めとするノモシア王政国家の政治体制は議会政治を取り入れている国家のそれより異常な点が多く、ごく一撮み程度の政治家や貴族、懐古思想の強い高齢者等を除き王政を支持する者は微塵も居ないというのが現状であった。
この事から、王家を一方的に批判・侵略する繁達の行動は、ある意味で王家への不安を抱えていた民衆達の怒りを代弁するようであり、

それが高い支持率に繋がったのである。
こうした現状と、本件での実質的な王家壊滅及び国王エスティ・アイトラスの醜悪な本性露呈を皮切りに、ルタマルス政府は王政を廃止。以降は政府主導での議会政治を取り入れるようになった。
更にその動きを察知したノモシアの各王制国家も、王族や貴族をあくまで国家の象徴として置くことで政治への直接干渉を禁止し、王族・貴族の権威を殺ぐ動きを見せ始めている。
ただ問題は、影で実質的な独裁国家と呼ばれているエクスーシアがこの流れに乗っていないという事であるが、大陸同盟はこの件の解決策も随時考案中とのことである。

第二十話　旅に出よう、ここではない何処か―謎と神秘の漂うあの大地まで（後編）

ランゴ・ドライシスとエリヤ・オップス。
死を装ってまで軍を抜け出した二人の旅は、まだ始まったばかり。

でもシーズン2以降の主役は、やっぱり繁達。

第二十一話　生徒が次々と怪死していく理由を説明出来ない（前書き）

あの悲惨なテロ事件から一週間後、事件はラビーレマで起こった。

第二十一話　生徒が次々と怪死していく理由を説明出来ない

―ジュルノブル城襲撃から一週間後・東ゾイロス高等学校―

学術ラビーレマの大国に存る名門私立高等学校・東ゾイロス高等学校の夕暮れ時。
多くの生徒達が自宅や寮へ戻り、一部は部活動の練習などで校内へ残っている時間。
広い体育館の片隅で練習に励むのは、実力者揃いの東ゾイロス高校バスケットボール部の面々。

練習風景の見回りをしていた亀系有鱗種（禽獣種・羽毛種の爬虫類版）の顧問が、ふとある事に気付く。

「（諏訪が居ない…？）」

部員が一人、足りないのである。
その部員・諏訪というのは大変に真面目な尖耳系霊長種の男子寮生であり、無断で欠席・早退するなど有り得ない程の人格者であった。
華憐で手足が細く、虚弱で儚げな美男子ながらに、持ち前の機敏さを生かして毎度試合ではチームの勝利に貢献する優秀な部員である諏訪を顧問は気に入っていた。
気に入りであろうがなかろうが、自らが顧問を務める部活の部員が失踪したとなれば心配するのが教員というもの。
顧問は早速部員達への聞き込みを始め、ある部員から『休憩時間中トイレに行ったのを見たがそれ以降見ていない』という証言を得るに至る。
余計心配になった顧問は、早速部員達が利用する男子トイレへと向かった。

しかしトイレに諏訪の姿はなく、顧問は結果的として他に諏訪が行きそうな場所を一時間以上かけて探し回ったが、結局諏訪は見当たらなかった。
念のためにと諏訪が寝泊まりする寮にも連絡を入れたが収穫は皆無であり、ふと時計を見れば練習が終わる時刻が近かったため、戻って部員達を帰らせようと、顧問は体育館へ戻ることにした。

と、その道中。

「っぎゃあああああああっ！」
「ひぃいいいいいいいい！？」
「な、なんだあああああ！？」

部員達の悲鳴が響いた。
丁度、練習中隊長を崩した部員達を休ませる為に使っている休息所の方角からだった。

「（一体何事だ！？）」

まさか校内に不審者でも現れたんじゃないだろうな？

顧問は思った。
つい先週ノモシアの方で城が襲撃され、宮廷警備隊や軍人、王族など述べ１００人以上が殺害されたテロ事件のように、良からぬ事を企む輩が入り込んだのかもしれない。
そう思っただけで、顧問が抱えていた不安が急激に肥大化していく。

「（だとすれば…最悪俺が身を挺してでも奴らを守るだけだ！）」

そう決意した顧問は、亀ながらにかなりの早さで休息所へ駆けていく。

―そして、休息所―

「お前達！無事かっ！？」

「先生っ！」

休息所に入るとすぐさま部員達が駆け寄ってきた。

「良かった……全員無事らしいな。

それより、一体何があった？」

「それなんですが、その……」

誰もが酷く怯えているのか、部員達は中々言葉を切り出せない。

顧問は一度部員達を外で待たせた上で、休息所の中に入っていく。

暫く進んでいると、休息所の奥にあるベッド二つの間から、茶色い枯れ木のような物体がその先端部を除かせていた。

そして顧問は、ベッドの間に打ち捨てられていたその物体の全貌を目の当たりにして、思わず言葉を失った。

「（これは……どういう事だ…？

だがこれで、あいつ等が悲鳴を上げたのも納得が行く……）」

顧問が目にしたその物体―てっきり枯れ木か何かだろうと高を括っていたそれ―は、極限まで水分を失い干涸らびて絶命した人の死体であった。

体格から推測するに年齢は１５~１７歳、種族は霊長種と言ったところだろうか。
体組織は殆ど骨と皮だけとなり、何故か頭髪の色素も限界まで抜け落ち、更に両目の水分が完全に失われた結果、まるでえぐり取られたように眼窩の大穴が存在していた。

「（一体何がどうなっているんだ……？）」

等と考え込む顧問の頭にふと最悪の事態が過ぎるも、しかしやはり教員と言うだけあり冷静を保つ顧問はこの事を学校に報告し、部員達を即時帰らせた。
発見された死体はすぐさま教員達の手で解剖にかけられ（ラビーレマでは情報漏洩や無駄な混乱を防ぐため余程の大事件でもないかぎり、事の解決に公的機関を頼らない流れが一般的である）身元調査が行われた。
結果として襲われたのは、バスケットボール部一年の諏訪という生徒であると判明。
即ち、顧問の予測した不吉な予感が的中したと言うことになる。

翌日以降学校側は事を荒立てない為、死体の第一発見者であるバスケットボール部員を公欠扱いとして欠席にする等して情報漏洩を防ぐと共に、有効な打開策を練り始めた。

そうして三度目の職員会議序盤、羽毛種の数学教員がこんな事を言い出した。

『そういえば先週ノモシアの城を襲撃したラジオ番組の三人組は、自分達に解決して欲しい謎や事件のネタを募集しているのではなかったか』

更に数学教師は続ける。

『彼らの番組の題材として、この事件を解決させるというのはどうだろうか？
彼らはコンセプトにより収録した情報を編集すると言っていたし、仮に生中継だったとしても校名を出さないようにして貰えば良い』

数学教師の提案に、職員達は真っ二つに割れて対立した。
一方は物理教師の考えを支持する賛成派で、繁達の高い実力を評価しての事だった。
もう一方は反対派であり、此方は繁達がテロリストであるから迂闊に信頼してはならないという考えを持っていた。
ちなみに根っからの王政嫌いだった顧問は賛成派であり、この事は賛成派にとって強みとなっていた。

二時間にも及ぶ議論の末賛成派の意見が通る事となり、代表として理事長が繁達へ宛てた依頼状を出す事となった（この事は理事長たっての希望によるものである）。

教員達が安堵したのも束の間、校内に潜む謎の存在は次々と生徒達をその手にかけていき、次々とミイラ化させて殺害していく。
事態を重く見た理事長は事情を生徒や生徒の保護者にも報告し、徹底した情報奇声を敷くよう要請。
更に表向きには感染症流行の為と題して長期間の学校閉鎖を遂行（事実この時、ラビーレマでは運良く季節性の感染症が出回っており、欠席者もかなりの数が居た）する事で、これ以上の犠牲者を増やさないようにした。

第二十一話　生徒が次々と怪死していく理由を説明出来ない（後書き）

次回、遂に繁達が動き出す！

第二十二話　日常？（前書き）

暗躍する何かに苦戦を強いられる東ゾイロス高等学校職員陣。一方その頃『ツジラジ』のスタッフ三人は……

第二十二話　日常？

―前回より更に数日後・エクスーシア国境付近に佇む薬屋―

三人の男女が、テーブルを囲んでいた。
一人は長身痩躯に眼鏡の男。
一人は深紅の長髪を棚引かせた女。
一人は狐の耳と尾を持つ、白衣を着た女。

「さて、今回のツジラジだが……実は適当にかけておいた募集の方へ贈ってくる奴がかなり居てな」
男女の内の一人、長身痩躯に眼鏡の男が話を切り出した。
彼の名は辻原繁。元居た世界へ戻る為、カタル・ティゾルの破壊神を目指すべく猟奇系ＤＪツジラ・バグテイルとして神出鬼没系謎解きラジオ『ツジラジ』を主催する異世界人である。

「お、私がやったあの適当な宛先に送ろうっていう奇特な人がよく居たもんだね」
それに返すのは、この家を仕切る深紅の長髪を棚引かせた女・清水香織。
繁同様異世界人である彼女は繁の従姉妹兼補佐役でもあり、ツジラジの放送に置いてはＤＪ青色薬剤師を名乗り諸々の連絡等を行う。

「そんなに適当には聞こえなかったけど……っていうか、前回ゲストだった私の扱いは？」
自らの行く末を案じる（？）ような事を言う白衣の女の名は、ニコラ・フォックス。
嘗てルタマルスで開業医として活動していた医学博士であり、若干

１９歳にして呪術により不老不死の身となってしまったという壮絶な過去を持つ。
王家に対する批判から政府に追われているところを繁に誘われ、ツジラジの初回でゲストとして出演していた。

「手紙もメールもかなりの数でよ。合計で二十万件くれぇ来てんだわ、コレが」
「に、二十万件っ！？」
「一体何処からそんな数値が出るの！？」
「正直バカみてぇな数値だが、その九割が電子メールでよ。郵便の方は多分検閲か何かに引っかかって処分されたんだろうな。まぁ六大陸の主要な国家全体に向けて放送してたんだ。そんだけ来たって何ら変じゃねぇさ。
流石に全部採用する訳にも行かねぇんで、ノモシア舞台にしたのを省いて三割減らし、更にそっからあんま金が入りそうに無い奴を省いたら更に五割減った」
「それでもまだ四万件残ったの！？」
「残ったな。んでまぁ、そんなんじゃ話進まねぇわな。
という訳で、収入が不確定な奴を省いた。宝探しとかその辺だな」
「幾ら減ったの？」
「大体八分くれぇにはなったんじゃねぇか。それでもまだ一万件以上あるけどな。
更に追加で内容重複と面白く無さそうな奴を適当に省いて五分の一まで減らした」
「一気に減ったねぇ」
「半ば適当に省いたからな。大丈夫だ。省いた分は後々の放送にも転用する。
んで、更にこれを厳正かつ適当に審査した結果」

「どっちよ？」
「どうにか一つに絞り込めた。現場は学術大陸ラビーレマの中枢部の『列甲大学』――「れ、列甲！？」――の、関連校として名高い東ゾイロス高等学校だ」
「あ、そっちか……良かった」

香織は一瞬ぎょっとした。
『ツジラジ』が列甲大学などに挑むなど、考えただけで身の毛も弥立つような話だからだ。
列甲大学は、科学の力を用いた技術『学術』を主導とする大陸ラビーレマに於ける教育・研究機関の最大手であり、学術者の聖地とも呼ばれる巨大機関である。
その名前は創立者である天才羽毛種・列甲に由来し、面積は一つの大都市に匹敵。通称として『大学園都市』とも呼称される。

一部では学術のみならず魔術の研究にも着手しており、その影響から大陸外にも数多くの関連校を持つ。
その為他の大陸・文化圏からの入学者も多く、今となってはラビーレマそのものが多種族文化圏となりつつある程。

東ゾイロス高等学校は大学園都市付近に存在する都市ゾイロスに存在する高等学校であり、大学園都市には遠く及ばないものの凄まじい規模を誇る教育機関であった。

「そういえば知り合いが東ゾイロス出身だったっけ。でもあそこ、そんなに問題らしい問題なんてあったっけ？
ノモシア、ヤムタ辺りはまだ王政が続いてるし、イスキュロンは退役軍人の横暴が酷いとか、アクサノは海神教過激派の猛攻が酷いって聞くけどさ、それに引き替えラビーレマって治安も経済状況もさして問題ないよね？

一時期権威主義が横行したこともあったけど、それも今ではあってないようなもんだし」
「どうでも良い事だけどニコラさんって大陸情勢に詳しいよね」
「伊達に７０年生きてないからね。それで、案件は？」
「理事長をやってる『生まれたての７３歳児』さんからのお便りでな、近頃校内に妙なのが沸いて出るとかでよ。
幸い校外には出ねぇそうだから生徒を自宅待機させ、職員が交代で見張ってるらしい。
だがまぁ、公的機関にバラすと情報が漏洩して寧ろ厄介になりやがるから、ジュルノブルの宮廷警備部隊を皆殺しにした俺らの力を借りてえんだと」
「ハンネのセンスもさることながら、とんでも無いこと頼んでくる理事長だね……っていうか、ツジラジって結局大陸全体にオンエアされるから厄介事になるのは変わりないんじゃ…」
「だからジュルノブル戦よろしく生放送でケリ付けてくれって言って来やがったよ。
成功時の報酬は前回回収した分の１．５倍、失敗したら保険で２．２倍出すとよ」
「なにそのヌルゲー」
「八百長かませって言ってるようなもんじゃん」
「そんな事言ってやるなよ。幾ら俺でも保険の話は後々断ったさ」
「あ、断ったんだ。珍しいね。何やるにしても大体何時も逃げ道確保する癖に」
「世の中には確保して良い逃げ道と確保しちゃならん逃げ道があるんだよ。
んで敵の特徴についてだが、今回も人間サイズを相手に戦う事になるんじゃねぇかと踏んでいる。
但しそうだとしても、やり口を見る限り霊長種じゃない可能性も高い」

「屋内戦となると私のマルファスが本領発揮だね」
「タセックモスも狭い室内でなら起動読まれにくい分活躍の幅広がるし」
「良し。んじゃ早速台本を練るか」

こうして始まった作戦会議の末、ニコラはゲストとして二回目も出演する事になった。

第二十二話　日常？（後書き）

次回、殺人事件の犯人グループが遂に登場！

第二十三話　Ｍｒ．クェインのお気に入り（前書き）

物語は謎めいた薄暗い一室から始まる・・・

第二十三話　Ｍｒ．クェインのお気に入り

―前回と同時刻・ある一室―

薄暗いその部屋からは、実に悲痛で痛々しい喘ぎ声が響いていた。
喘ぎ声は若い―恐らく十代の―女のものであり、その声には恐怖と苦痛と不快感、そして快楽が混じり合っていた。

それと同じくして鳴り響くのは、生理的な嫌悪感や不快感を催すような、湿った音。
擬音語で表すなら、ぐちょ　だとか　ねちょ　だとか　ぬちゃ　だとか。
そんな不愉快な音が激しくなる度、喘ぎ声の悲痛さは増していく。

そんな事が続いて、早十数分。

静かになった部屋の中で、男の声がした。

「やはり生娘の精気は良い……二十歳に見たぬ処女のそれは至高……。

しかし――「しかしだからと言ってもだ、幼すぎても良くはない。十五に見たない稚児などは、味も悪いし見た目も悪い」

男の変態じみた独り言を遮るように補ったのは、これまた若い―しかし今度は２０代程の―女の声。

「おや、誰かと思えば小樽さんではありませんか。

一体どうしたのです？」
「お楽しみ中の所失礼致します、Ｍｒ．クェイン」
「いえいえ、構いませんよ。丁度今終わったところですから」
「有り難う御座います。

では、ご報告致します。今後の戯事についてですが……状況が変わりました」
「状況が変わった……とは？
よもや、以前のように現地の空気を感じながらの戯事が出来るようになった、という事ですか？」
「いえ、残念ながらそのような良い変化ではないのです」
「ふむ……そうでしたか。つまり『状況は悪化の一途を辿りつつある』と？」
「左様で御座います。
単刀直入に申し上げます。祭品（ジピン）の供給源を、断たれました」

クェインが動揺する様は、暗闇の中でもハッキリと感じ取れた。

「何と……！よりによってもうそろそろ補充せねばならぬという時になってですか…」
「我々の動向を覚った職員共は、感染症の流行を理由に穢れ無き子らの登校を封じました。
申し訳御座いません、Ｍｒ…これも全て私の力不足が招いた事に御座います……」

暗闇の中、小樽はクェインに頭を下げる。

「頭をお上げなさい小樽さん。貴方が謝る理由などどこにもありません」

「しかしこのままでは……」
「心配ご無用。また何か打開策を立てれば良いだけです。
我等クブス一派の栄光は、まだ十分取り戻せます」
高らかに宣言するクェインに、小樽は再び申し訳なさそうに話を切り出す。
「それとＭｒ……もう一つ申し上げねばならぬ事が御座います」
「何でしょう？」
「度々不吉な事柄で申し訳ないのですが、職員共が我々を始末しようと刺客を送り込んでくる事が判明したのです」
「刺客ですって？」
「はい。それも音声データによりますと、何でも刺客というのは……二週間前ノモシアで勃発したジュルノブル城襲撃事件の、その主犯であるツジラ・バグテイル一味であるとの事でして……」
「何と！あのツジラ一味が？確かにあのラジオ番組では身の回りに潜む謎や事件を募集していましたが……まさか我々がその手にかかろうとは……」
「まだ確定的ではありませんが、来るという覚悟だけはしておくべきかと」
「そうでしょうね…（しかし何と言うことだ……まさかツジラ一味とは……）」
クェインは頭を抱えた。
「（私はまだ良い……しかし、しかし問題は彼女だ……。ラクラ……ラクラ・アスリン……彼女だけは絶対に守り抜かねば……）」
決意を固めるクェイン。
そんな彼の決意も知らず、別の一室に備わったベッドで眠り続ける

のは、旧式体操着に紺色のブルマーという出で立ちの兎系禽獣種の少女、ラクラ・アスリン。

肉付きが良く豊満な体つきをしながら、まるで幼子のように無邪気に眠る彼女の部屋の床には、先日東ゾイロス高校で見付かったような、全裸に剥かれ干涸らびた男の死体が転がっていた。

第二十三話　Ｍｒ．クェインのお気に入り（後書き）

次回、ツジラジスタッフが遂にラビーレマへ！

第二十四話　ネカフェから失礼致します（前書き）

かくしてラビーレマへ辿り着いた三人だったが・・・

第二十四話　ネカフェから失礼致します

―翌日・ラビーレマ首都圏―

『さて、そういうわけでだ。俺らは今変装かましてラビーレマ首都圏某所―つーか東ゾイロス高校のすぐ近所にあるネカフェに居る訳だが』

『うん』

『だねぇ』

『何か絶賛行き詰まり中だよなこの状況』

『そうね』

『冗談抜きでやばいね』

お互い離れ離れの個室を取り、魔術道具による簡単な念話によって会話する三人。

しかし現在三人は皆、総じてパソコンの前で項垂れていた。

詳細な理由は不明なのであるが、三人とも移動途中から徐々に疲れが出始め、ラビーレマ首都圏に着く頃には不老不死である筈のニコラさえもかなり疲弊した状態になってしまっていた。

『何が原因なんだろ……』

『……ニコラ、お前何か知ってるんじゃないか？

ラビーレマ独自の感染症とか、疾患とか』

『あるにはあるけどさ、どれもこんな症状じゃないわ……』

『じゃあ何が原因なんだ…？税関回避ルートでの長距離移動に備えて事前に疲労止めの薬飲んでたよな？

確か香織の師匠の……』

『トリロ婆様直伝のアレね。効き目は確かだよ？』

『そりゃそうよ。大昔の薬学の教科書にも大きく書いてあるもの。

「サキモリガの幼虫はタテムシと呼ばれ、その内蔵は疲労回復に効果覿面である」って。
薬学の先生、生徒思いでサービス問題とかけっこう出してくれてたんだけど、テストには毎回その問題が出ててね。嫌でも覚えたわ』
『そうかよ……じゃあ香織、トリロ婆様はこの薬の副作用とか言及してたりしたか？』
『いやそれが……何にも無し。ノモシア圏内で使う分にはほぼ万能って言ってたけど……ちょい待ち、ノモシア圏内？』

香織は思い立ったように重い身体を持ち上げ、スリープモードにあったパソコンを叩き起こす。
ＳＦめいた大陸だというのにこういった細かい部分は現代の地球そのままである事に安堵しつつ、検索エンジンを立ち上げキーワードを入力。

検索結果で出てきたページを幾つか見て回った後、香織は机へ盛大に倒れ込み、その後か細い声で言った。

『ごめん。薬なんだけどさ……あったわ、副作用』
『……マジで？』
『……どんな副作用だ？』

『これさ……ノモシア区域以外の水・植物と併せて摂取すると真逆に作用するらしいの……』
一向はこの薬を服用するに当たりその辺の量販店で、アクサノを原産地とする果実『キツルギ（学名：ムサ・マユシェンシス。地球のバナナに相当）』を原料とする乳酸飲料を購入。
それを水代わりに薬を服用していた。
『つまり俺らは、疲労防止のつもりで疲労を増幅させる薬を飲んでたと……』

『大学の教科書には載ってなかったんだけどねぇ……』
『論文として公的に発表されて学会で認可されたのが実に２０年前の事だから、この話』
『あぁ…それじゃ知らないわ。
それで、対処法は？』
『ビタミンＣ入りの炭酸飲料……その辺の自販機にある奴で事足りるみたい』
『マジでか……ちょい買って来るわ』

繁の買ってきた炭酸飲料の効果は凄まじく、疲労感はすぐさま回復した。
それこそ、吹き飛ぶという表現が適切なほどに。

―街中―

「効いたな、炭酸飲料」
「まさかあそこまでの即効性とは思わなかったよ」
「凄い。流石ビタミンＣ凄い」
「ていうか炭酸が地味に効いた。あとビタミンＣ以外に入ってた諸々の栄養素も。
副作用を打ち消したのか、薬の効能自体が無かったことになったのか、どっちでもいいやってぐらいに」
「全くだな。さて、早速スタジオと情報の確保を――ッドォォォォン！――ぬぉ！？な、何事だ！？」

突然の地鳴りと逃げ惑う人々の悲鳴。その源に居たのは外皮が黄土色のワイバーンであった。
ワイバーン。分類学上二足飛行竜というカテゴリに属する動物類であり、前脚が現実世界に於ける翼竜類（プテラノドン等）や翼手目（コウモリ）のように発達した大型爬虫類である。

全長はしめて６m。中型肉食恐竜ほどの大きさだが、それでも町中に出れば十分脅威と呼べる存在であろう。

「ワイバーン類……頭骨と鱗からしてシッキタシアス科、角から考えると性別は雌だな……」

「時期と動きを見ると、繁殖期なのにプロポーズしてくれる雄が居なくて気が立ってたみたいだね」

「いや何で冷静に解説してるの！？イトコ同士語らってる所悪いけど、流石に不老不死の私でもこれは逃げるよ！？」

「いやいや、そこは逃げるなよ。ワイバーンなんて元々寿命長い癖に繁殖頻度低くて個体数少ないのに増えすぎて困るってぐらいの戦闘能力がある動物だ。

写真や文献での資料は腐るほど在るが、その反面映像資料は極端に少ない。

飼育してる施設もカタル・ティゾルでも片手で数えられるぐらいしかない、そんな何か微妙な奴らなんだ。

ヴァーミンの有資格者を代表して触れ合ったって罰は当たらんだろ」

「どういう理屈！？」

「私はヴァーミンの有資格者の身内兼相方を代表して触れ合うことにするよ」

「いやだからどういう理屈！？」

等というニコラの突っ込みも意に介さず、二人はワイバーンに向かっていく。

繁は正面からトリッキーな動きでワイバーンを挑発するように走り寄り、それに続く形で香織はその背中に飛び乗る。

かくして人々の逃げ惑う中、香織と繁のコンビによる奇策と魔術を駆使したワイバーン狩りが始まるかと思われた。

しかしその予想は、大きく外れることとなる。

荒ぶるワイバーンの足下から、突如緑色をした炎が上がったのである。

第二十四話　ネカフェから失礼致します（後書き）

突如上がった炎の正体とは！？

第二十五話　マチでヒリュウが燃え尽きる頃（前書き）

雄運（おとこ）無さ故に繁殖（けっこん）出来ないワイバーンの足下が、大炎上！

第二十五話　マチでヒリュウが燃え尽きる頃

―前回より―

雄運無さ故の苛立ちが原因で街を襲ってしまったワイバーンの足下で上がった炎は、瞬く間に彼女を取り囲んだ。

『ヴァオォォォォン！ゴアォォォォン！』

緑色の炎に脚を焼かれ、腹を炙られたワイバーンは飛び立とうと躍起になるが、一度着地の為地面に下ろした両足と両翼は接着剤のようなもので地面に固定され、動かすことが出来ない。

シッキタシアス科のワイバーンは更に体温・水分をなるべく逃がさないよう強固な鱗を持っている。

しかし今回はその『熱を溜め込みやすい』という鱗の性質が災いし、その巨体は極端に熱せられていく。

香織は隙を見て背中から逃れ、繁と共に傍観へ徹する事とした。

最早これは自分達が手出しすべきではないと判断したのである。

『グァォアァァァッ！』

ワイバーンは尚も、地面に貼り付いて動けないまま炙られていく。

そしてその熱は脳を余裕で煮えたぎらせ、熱中症に近い症状に陥ったワイバーンはうめき声も上げずに絶命した。

逃げ惑っていた人々は最初、自分達の眼前で何が起こったのか理解できず戸惑っていたものの、次第に状況を理解。

訳も判らず盛大に歓喜した。

緑色をした炎は自然に消え去り、石畳の幅広い道に残されたのは、無傷なまま熱を持って死に絶えたワイバーンの亡骸のみ。

そんな状況下で、繁達は。

「凄いね、まさか古式特級魔術？」

「いや……それというか、科学的な手法によるもんだろうな。只でさえ少ない古式特級魔術の使い手が、よりにもよってラビーレマなんぞに居る訳もあるめぇ。

恐らくは遠隔から弾頭やら小型ロボやらを使って炎や接着剤を仕込んだんだろうよ」

「あの緑色の炎は？」

「炎色反応だ」

「炎色反応？結晶乗っけた針金の先端をバーナーで焼いたらそこだけ色が変わるっていうアレ？」

「花火の色づけとかにも使うよね」

「そう。基本原理はそれだが、燃料に色々な化学物質を混ぜて焼く方法だと炎全体に色が付く。

極一部でも色々な色があってな……」

以下に、主要な炎色反応の組み合わせを記す。

リチウム：深紅
ナトリウム：黄
カリウム：淡紫
ルビジウム：暗赤
セシウム：青紫
カルシウム：橙赤
ストロンチウム：深赤

バリウム：黄緑
ラジウム：洋紅
銅：青緑色（燃焼エネルギーを奪い温度を下げて色の振り幅を変更すれば青も可能）
ホウ素：黄緑
ガリウム：青
インジウム：藍色
タリウム：淡緑
リン：淡青
ヒ素：淡青
アンチモン：淡青

「炎の色が緑だった所を見ると、燃料に混ざってたのはバリウムかホウ素、それか銅だろうな」
「断定出来るものなの？」
「そりゃお前、色彩パターンなんぞ成分構成や温度の違いで千差万別だ。
これならこの色、なんて断定出来る物質なんぞありゃしねぇ。

あとよ、ニコラ」
「何？」
「お前言ってたよな？『ヴァーミンの有資格者同士は互いを認知しあい、偶発的に出会いもする』ってよ」
「言ったねぇ」
「何かよ、今になってそれが初めて判った気がしたぜ。

実は今朝紋章が右肩の方に現れてたんだが……今その右肩、無茶苦茶脈打ってんだよ」
「って事は……つまり……あれをやったのは、ヴァーミンの有資格者かも知れないって事…？」

「そういう仮説も、強ち間違いじゃねぇかもな。番号は判らんが、十中八九向こうもこっちを認識していると考えて間違いあるめぇ」
「となると、今回の案件にも絡んでるのかな？」
「それは些か飛躍した推測だが、頭に入れておいて損は無ぇだろうよ」

等と語らいながら、繁達は東ゾイロス高等学校で起こる謎の事件について何かラジオに使えそうな情報を探すため、その場から立ち去った。
ワイバーン死亡に沸き立っていた群衆達も次第に死体の周囲から離れ始め、各々の目的地へ向かいだす。

何処からともなく現れた、地を這う無数の赤い粒子がワイバーンの死骸へ一斉に集る。
そして粒子が動く度、ワイバーンの死肉が驚くべき速度で消えていく。
この粒子こそはラビーレマ全土に備わった有機ゴミ処理システム『トラッシュバイター』である。
この胡麻粒ほどの小さな飛べない甲虫達は極小の電子機器によりその行動を制御されており、命令されるが侭に動き、貪り、増え、そして死んでいく。
他の大陸政府からは未だに暴走の危険性を示唆され続けているこのシステムだが、不思議なことに今の今まで災害を引き起こしたことは一度もない。

死骸を食い尽くしたトラッシュバイターが立ち去ると、今度は何処から都もなくゴミ収集用のキャタピラ車が現れてワイバーンの白骨を回収していった。

全てが丸く収まったのを見計らったかのように、建物の影から素早く女が現れた。
アジア人的な顔つきに緑色のポニーテールを棚引かせたその女の年齢は、見たところ２０代ほどであろうか。
ほっそりした肢体が爽やかな外観の黒いスーツを着こなす様は、彼女があらゆる能力に秀でた秀才である事を彷彿とさせる。

女はゴミ収集車が取りこぼした骨片に歩み寄り、それを拾い上げて呟く。
「馬鹿ですねえ、貴女も。幾ら結婚できないからって、幾ら雄運（おとこ）が無いからって、街に攻め入るなんて……本当に、救いようのない馬鹿ですよねえ」

骨片を近くのゴミ箱に投げ捨てた女は、そのままラビーレマの町並を歩き出す。

「まぁ、そんな馬鹿の事なんて気にしてたらキリがありませんよね。馬鹿ほどこの世界に腐るほど居るようなものなんて、そうありませんから。

それより今注目すべきは、あの三人組ですよ。
彼ら……特にあの昆虫のようなマスクを被った男性は、実に興味深い。
あのマスクの形状からするとモチーフは蛾でしょうか？
しかしながら見たことの無い姿……もしや、アクサノ学会も認知していない新種…？

何やら面白そうな雰囲気ですねぇ……彼らの後、付けてみても良いかも知れません。

っと、それより前に……何か食べましょう。流石にお腹が空きました」

女はごく普通に、飲食店のある方角へと歩み出した。

しかし彼女が三歩進んだ直後、その姿は一瞬にして消え失せてしまった。

第二十五話　マチでヒリュウが燃え尽きる頃（後書き）

突如現れた謎の女、その脚力の秘密とは！？

第二十六話　謙虚理事長と喋る葉虫（前書き）

理事長・緒方三ツ葉の独白。

第二十六話　謙虚理事長と喋る葉虫

読者の皆さん、初めまして。東ゾイロス高等学校理事長で多眼系霊長種の緒方三ツ葉です。

さて、学校を閉鎖してもう一週間近く経ちました。ラジオＤＪのツジラさんからのお返事によると、第二回目の舞台は是非とも我が校にしたいという事でした。

また私は、協力者への敬意を示すためツジラさん達に多額の報酬をご用意し、事件解決に失敗したとしても保険として多額のお金を差し上げようと考えていました。

バグテイルさんからのお返事にはその件についても触れられていましたがしかし、何と彼は「事件失敗に際してお金はお受け取りできません」と言ってきたのでした。

私は驚くと共に、この人は何と人格の優れた人なのかと思ってしまいました。

サービス業に於いて重要な事の一つには、業者と顧客との信頼関係が含まれます。

業者は顧客からの報酬を代価に、報酬に見合う、若しくは報酬以上のサービスを全力で提供する。

それが普通である事は、読者の皆様もよくご存じの所だと思います。

しかし世界に絶対的な法則など存在し得ず、あらゆる存在・原理・現象には何らかの形で例外が存在します。

例えばヤムタの慣用句には、『打ち水、杓に戻らず』というものがあります。

打ち水とはヤムタに古くから伝わる風習で、敷地や路面に水を撒き路面の塵が舞い上がるのを防いだり、気温の高い季節は気化熱を利

用して涼気を取る目的でも行われます。
またこの時に撒かれる水の事も指し示しており、この慣用句の場合は此方の意味合いでしょう。
杓とは液体を掬う道具の事で、こちらも古来ヤムタに伝わる伝統的な工芸品の一つです。打ち水に用いられることもあったでしょう。

この慣用句を私なりに解釈すると、「打ち水の為、杓で撒かれた水を再び掬い取って杓に戻すことは出来ない」という意味であり、即ち「一度起きてしまった物事は元に戻せない」という事柄を意味しているのです。

この慣用句、確かに意味そのものは的確でしょう。先人の残したものは、何者にも代え難い価値を持つのが世の常です。
しかしながら私は二年前、我が校を卒業後列甲へ進んだとある男子学生の書いた本にあった一説を見て、驚き呆れると共に感心してしまったのです。
彼は本にこう書いていました。

『極端な思考に押し負けて諦めるな。
打ち水が杓に帰らないと割り切るな。打ち水だって無重力空間でなら杓に戻るし、そんな事をしなくても撒いた部分から上がる水蒸気を集めれば理論上は杓に戻せる。
鳥からは鳥しか生まれないと割り切るな。遺伝子操作の技術を駆使すれば、鳥に鼠や蛇を産ませることだって出来る。
無い刃は届かないと割り切るな。無い刃は量子力学の分野で見れば「届かない」という確率が高いだけだ。

諦めようとするな。慣用句に対してもそこまで捻くれたものの見方をして、揚げ足を取るのが科学という学問なんだ』

本分は長いので要約しましたが、大体こんな事を書いていたように思います。
中々凄いことを書くでしょう？でも確かに、彼の書いたことも間違いではないんです。
つまり世の中には必ず、何らかの形での例外が存在する。

でも世の中に存在する例外は、必ずしも良いものばかりだとも限らないんです。
サービス業者の中には、言葉巧みに顧客から多額の報酬を持ち逃げするような、道を踏み外した者も存在します。
私は最初、心の何処かで、ツジラさんもそんな「道を踏み外した者」だと思ってしまっていました。
だから、彼に強力を仰ぐ事に反対した中には「騙されるかもしれない」と主張した方も居ました。
でも実際の所、彼からの返事を見た私は、彼がそれほど卑劣な人物ではないと、そんな風に思ったのでした。

―前回より―

そして私は今日、彼―ツジラさんに呼び出され、東ゾイロスが誇る人気ファミリーレストラン『ＮＹＡＮ☆ＢＥＹ』で待ち合わせ中なのです。
注文は今のところドリンクバーのみ。長い人生で久々にコーラの味を再認識しましたが、まさかこれほどに美味しいものとは……。

そろそろ何か食べる物を頼もうかと思っていた時、ふと私の目の前に大きな赤い虫が現れました。
外殻種（禽獣種や羽毛種、有鱗種の節足動物版と思って下さい）の方でしょうか？
禽獣種等の方々と違い、外殻種の中にはヒューマノイド型を乖離し

た形態の方が居られます。面白いですよね。

外殻種の方（と、思っておきます）は私の向かい側の椅子に降り立つと、私に向き直って言いました。

「失礼、私立東ゾイロス高等学校理事長の……」

「緒方三ツ葉ですが」

「良かった……。お初にお目に掛かります。私、かの方からの使いとして参りました。

三型茂虫系外殻種のクリムゾンと申します」

「かの方…？」

「貴女がお便りを出した、あの方で御座います。一応、我等の会話は部外者に対してごく普通の世間話となるよう魔術を施しましたが、それでも用心に超したことは無いでしょう」

「確かにそうですね。それで、彼は何故私を呼び出したのです？」

「はい。実はですね、かの方は生放送のため、現場に収録スタジオを設けなければならないのですが…」

「それは承知ですが、何か問題でも？」

「えぇ。前回は事前に現場の建造物に関する情報を得ることが出来たのですが、それは相手が王家の侍従であったからこそです。ジュルノブル城は半ば観光地であり、ノモシアの庶民は元々表裏が無く寛容でありますからな……しかしながら、ラビーレマともなればそうも行きますまい？

失礼ながら『追い詰められたラビーレマの民は己の為ならば権利も誇りもあっさりとかなぐり捨てる』と聞いております」

クリムゾン氏の言及したラビーレマの民族性は的確の一言でした。

「いえいえ、全く持ってその通りですからご心配なさらず」

「左様で……そして更にまたこうも聞きました。

『ラビーレマの民は趣味趣向に於いて共通する者や、自らに友好的

である者は決して裏切らず生涯全力を以て愛し続ける。
その反面、自らを阻害する者や、敵対的であったり、悪意を以て接しようとする者は徹底的に忌み嫌う。
しかし原則として無用な争いを望まず、それ故に進んで争いを仕掛けたり、破滅させようとする事は極力しない』と」
「確かにその通りですね。現にラビーレマで起こったいじめ行為の加害者は総じて、性格面に於いては他大陸出身者に近いことが明らかにされていますし」
「そうでしょう？ですからして、かの方は収録場所の下見に自ら現地に赴くことを躊躇っておられます。
お便りによれば、かの方への協力要請を出すという案が出た時、賛成派と反対派による対立が起こったというではありませんか」
「全く持って仰有るとおりです」
「『ともなれば、現地へ赴いての情報収集や下見は徒労』
かの方の出した結論に御座います。
何より今回の敵は校内に潜伏している。つまりあなた方を監視しているとも、考えられるわけです」
「……！」
思わず言葉を失いましたが、気を取り直して精一杯言葉を紡ぎます。
「お恥ずかしながら、盲点でした」
「いえいえ、恥ずべき事ではありません」
「それで、私に何をせよと？」
「単刀直入に言いますと、今からお渡しするデータに従い、我々に校内の見取り図と各所の特徴に関するデータを提供して頂きたいのです。
無論、提供して頂いたデータは公表せず、回収次第此方で破棄します」
こうなったら決意を固めるしか在りません。

私は彼の言葉に従い、ツジラさんにデータを提供する事を決意しました。

第二十六話　謙虚理事長と喋る葉虫（後書き）

繁の部下であるという外殻種・クリムゾン。
次回、彼の驚くべき（？）正体が明らかに！

第二十七話　虫も魔術も使いよう（前書き）

前回、繁からの使者として緒方理事長との交渉を行った口達者な外殻種・クリムゾン。
しかし、その正体は・・・？

第二十七話　虫も魔術も使いよう

―前回より―

「よくやったぞクリムゾン……お前は優秀だ」

ラビーレマ近所にあるビジネスホテルの一室にて、繁は一抱えほどもある巨大な赤い甲虫―クリムゾンと名付けた雄にそう語りかける。机の上には香織の私物である小型ノートパソコンが展開されており、画面には東ゾイロス高等学校の詳細な見取り図が映し出されている。ちなみにこのクリムゾンと名付けられた何とも巨大な甲虫は正式名称を「チイロハムシ」といい、体内に脊椎を発達させるという独自の進化によって昆虫種の域を超えた巨大化を実現させた「脊椎節足動物亜門」に属する生物の一つである。

「しかしクリムゾン以上に優秀なのは、やっぱりお前だよなぁ…香織」

「そうかな？繁が捕まえてきたその虫居てこそだと思うんだけど」

「謙遜するな。お前の覚えた古式特級魔術二つ……動物を操る『ジュルネ・バルバトス』と生物の記憶を複製・搾取して記録する『ソワール・シャックス』が無ければ、今回の作戦は成り立たなかった。あと一般系の会話偽装魔術もな」

「確かにそうだけどさ、クリムゾンの操作は繁がやったんでしょ？」

「まーな。だが今になって考えるとアレも中々グダグダだったような気がしてきた……」

「何にせよ、これで動き方には困らないね。タセックモスの刻印は弾頭の出入り口としても使えるし、この分だと二階の廊下とか良いかも」

「うし、んじゃ早速台本を作るぞ。リクエスト以外にも色々な投稿

が寄せられてるからな。
音楽のリクエストも来てるから音源を確保せにゃならん」

こうしてツジラジ第二回に向けた会議が開始された。

―同時刻・外部―

「予想的中……ツジラ一味が我々を狩りに来る事は確定的だったようですね……」

ホテルの屋根の上から特殊な器具を突き立て、内部の音声を聞き取っていたのは、あの黒スーツの女であった。

「しかしノイズが酷い……やはりあの青色薬剤師、低級でこそありますが盗聴防止用魔術を施していますね……。

ホームセンターで買ってきた材料で作った総額二千円の盗聴器ではやはり限界がありましたか……。

ともあれ、彼らが校舎内にスタジオを設置する事は判りました。

これでMr.クェイン、Ms.アスリンを守る手立てはある程度確保出来るでしょう……。

これでこの小樽兄妹を臣下と認めてくれた彼らに、漸く本格的な恩返しが出来るというものです…。

ねぇ、兄様。そうでしょう？」

等と女―小樽が左肩へ語りかけると、スーツの布地をすり抜けるようにして若い男の頭が現れた。

顔つきや瞳の色は小樽と似ており、頭髪も小樽と同じ緑色をしていた。

「ええ、そうですよ桃李……我々は遂に、本当の意味で恩を返すこ

とが出来るのです……」
男の頭はそう言い残すと、ゆっくりと小樽の体内へ引っ込んだ。

―その日の晩・ある一室―

「即ち……遅くとも本日より一週間以内に、我々の元へツジラ一味が攻めてくるでしょう」

外部で捕獲してきた祭品―クェインやアスリンが『戯事』と呼ぶ一方的な性行為に際しこの相手となる15歳以上の男女―の山の傍らに跪いた小樽桃李は、主であるクェインに事を報告した。

「そうですか……聞けばツジラ一味の一人・青色薬剤師は古式特級魔術を用いる手練れと聞きます。
並大抵の者は許可しない限り発見すら不可能なこの空間魔術……しかし古式特級魔術の使い手ともなれば容易に破るでしょう。
そうなれば戯事や祭品についての情報は漏洩し、我々は公に知られ、クブス派の栄光どころか存在そのものが危うくなりかねない……」
「無論、そんな事はさせません。Ｍｒ．クェインやＭｓ．アスリンは私共が御守り致します」
「何を言うのです、小樽さん。貴女一人だけを戦わせるなんて出来ませんよ。
この戦い、私には参加する義務がある。何か異論はありますか？」
「いえ、全くありません。Ｍｒのご協力あらば、ツジラ一味相手撃退程度どうという事は無いでしょう」
「そうです。我々が力を合わせれば、幾らツジラ一味とて一溜まりもありません。
さて、それでどのように――「待って、クェイン」

クェインの言葉は唐突に、背後へ現れた禽獣種の女によって遮られ

た。

「おや、ラクラ？どうしたのです？
今日はやけに起きるのが早いですねぇ」
「変な気がしたから、早く起きたの」
「そうですか…変な気が……。
（流石はラクラ。禽獣種の勘は侮れませんねェ。）
しかし、大丈夫ですよ。心配なんて無用です。
今小樽さんと話していた案件なんて、大したことでは無いのですから」

こうして適当にはぐらかしておけば、何時も通りなら彼女は折れてくれる。
そう考えていたクェインだったが、

「嘘」

「はっ？」

現実はそう都合良く進まなかった。

「大したこと無いなんて、嘘。ラクラ判る。
クェインもトーリも、もしかしたら死んじゃうかも知れない。そうでしょ？」
「……まぁ、そうですね。万に一つの確率で、我々は死ぬかも知れません」
「ただ、確率は確率ですから、無論生き残る可能性だってあります。
仮に私が死ぬことになったとしても、貴女達は何が何でも守り抜きます」
「最悪の場合にはラクラ、貴女だけでも逃げ延びなさい。

貴女さえ生き残る事が出来たなら、クブス派にはまだ栄光を掴む権利が――「やだ」

クェインの言葉は、ラクラによって悉く遮られる。

「な、何を言い出すのですかラクラ！
クブス派の女性がどれだけ崇高な存在か、貴女にはその自覚がはっきりと在るはずですよ！？」
「それでもやだ。ラクラ、ひとりぼっちきらい。
クェインもトーリも居ないのに、クブスを取り戻したって、なんにもたのしくなんかない」
「しかしですね…」
「おわりはみんないっしょ。みんないなきゃ、だめだから。
だから、ラクラも戦う。みんなでツジラ一味を倒して、クブスを取り戻したい」
「そうですか……Ｍｓがそう仰有るのでしたら私は別に構いませんが、Ｍｒはどう思われますか？」

話を振られたクェインは、少々考え込み答えを出す。

「……仕方在りませんね。こうなれば三人でツジラ一味を迎え撃つとしましょうか」

第二十七話　虫も魔術も使いよう（後書き）

次回、本格的に戦闘開始か！？

第二十八話　彼女と毒物と権威主義社会の愚者達（前書き）

戦闘開始の前にちょっと一休み。小樽兄妹の過去話をどうぞ

第二十八話　彼女と毒物と権威主義社会の愚者達

今でこそ六大陸で最も住み心地がよいとされるラビーレマですが、一昔前は他の大陸と相違ない程に荒れた大陸でもありました。
というのは、原初より学術が主流であるラビーレマも昔は権威主義の名の下に、多数派や親の代から力を持った人々が優遇される傾向にあったからです。
その上今と違って排他的な思想で唯我独尊を地で行くような政治体制だったため他の大陸とも仲が悪く、特に魔術至上主義で代々指導者の気が荒い傾向にあったノモシアとの関係は最悪の一言でした。
そしてそんな時代柄の中、その二人は生まれてしまったのです。

―

権威主義が主流であった当時のラビーレマに住まう科学者にしては珍しく温厚な性格だった小樽夫妻はある時、双子を身ごもりました。
しかもその双子というのは珍しいことに、一卵性にして男女の兄弟だったのです。
通常、何から何まで同じである一卵性双生児は同じ性別で産まれてくるのが常であり、理論上その性別が異なると言うことは有り得ない筈なのですが、希にある例外に引っかかったようでした。

ただ、双子には少々問題がありました。
というのも、双子というのは母体内で背中合わせに育っており、二人の左腕と右脚とは歪に結合していたのです。
これは現実に結合双生児とかシャム双生児とか呼ばれている双生児の事で、決してフィクションに限った出来事などではなく、発生率は５万分の一から２０万分の一程と言われます。

生後の生存率は低く日常生活も困難ですが、夫妻は男児に羽辰、女に桃李と名付け、出産を待ちました。
特に妻の決意は凄まじく、夫は病弱な妻を労り中絶も考えましたが、妻の覚悟を知ってからはそんな事など考えなくなっていました。
そして時は巡り、待ち望まれた出産の時。

帝王切開で産まれた双子の羽辰と桃李。駄目もとの上最悪死を覚悟した末の出産でしたが、子供は産まれ妻も無事生存。
誰もが喜びに沸き立ち、小樽家を祝福する――筈でした。

しかし現実とは、全く予期していないときに酷いことをしたりします。
そのまま元気に産声を上げるかと思われた桃李と羽辰でしたが、桃李が産声を上げた途端、突然羽辰の身体が灰になり、桃李の左腕と右脚は最初から存在しなかったが如くに消滅してしまいました。
その場の誰もが悲鳴を上げ取り乱す中、立て続けに二人を産んだ妻までもが徐々に弱り始め、入院中に息を引き取ってしまいました。
この件については今も学会で論争が続いているようですが、誰もが納得できる説は未だ出ていません。

生き残った夫は妻と息子の死を乗り越え、一人になったとしても必ず娘を育ててみせると決意しました。
しかしそんな夫もまた、不慮の交通事故により死んでしまいました。

独りぼっちになった桃李は父親の姉である富豪の未亡人に引き取られました。
桃李には最新鋭の義手と義足、そして出身地でも選りすぐりの教育機関でトップクラスの教育を受けられる権利が与えられました。

桃李はそこで多くのことを学ぶ内、科学へ興味を持つようになっていました。
桃李が特に生物学や化学に興味を持っている事をしった周囲の人々は、彼女をその当時ラビーレマで最も研究が盛んだった遺伝学や薬学の道へ進む事に期待していました。
しかしその頃の桃李は既に、遺伝学や薬学などよりもっと好きな分野を定めていました。

それは「毒」の研究でした。
特に生き物が持つ毒に興味を持った桃李は、色々な動物や植物、更には細菌の持つ毒など、色々な毒の研究に興味を持ちました。
勿論桃李は生き物に由来しない毒にも興味を示し、色々な毒の研究についての学術書や論文を読んだりしました。
家族同然の伯母や従兄弟達、親しくしていた学校の先生はこれを評価してくれましたが、身の回りの人すべてがそうとは限りません。
現に同級生の殆どは、桃李を嫌っていました。

何故なら、血統書つきのトイ・プードルよりヤドクガエルを可愛いと言うからです。
何故なら、大陸を超えた人気のアイドルグループよりクサリヘビを美しいと言うからです。
何故なら、人気の男優よりも大きなサソリの方が格好いいと言うからです。

そして桃李を嫌う同級生達は、同時に彼女を恐れても居ました。

その理由は主に彼女の左腕と右脚にありました。
合金と樹脂で作られた最新鋭の義肢である彼女のそれは、謎めいた技術により桃李の成長に伴ってサイズを変え、先端に鉤や吸盤のつ

いたワイヤーを射出したり、一瞬で文房具や調理器具に姿を変えたりするからです。

またそういった同級生の実家は、遺伝学や医学などその頃のラビーレマで普通とされていた分野を専攻する人ばかりでした。
産まれながらにエリートとして育てられていた同級生達は、自分よりも優れた才能を持つ桃李に嫉妬し、同時に自分達と相容れない存在である桃李を忌み嫌ってもいたのです。

しかしそういった同級生達は、年月を経る毎に様々な理由で桃李の周囲から消えていきました。

そして大学生になった桃李は、差別を受けるでもなく平和な日々を送っていました。
優しかった伯母は亡くなり、従姉妹達とも音信不通でしたが、桃李は平穏な日常に満足していました。

しかし桃李は大学生活を送る中で、再び知ってしまいます。

世の中というのは、『普通』が正義であり『異質』は悪なのだ と。

毒について研究したいと思う自分の考えは、所詮差別され爪弾きにされてしまうようなものなのだと、覚ってしまったのです。
そしてまた桃李には、別の危機も迫っていました。

亡くなった伯母の遺産を狙う親戚から、相次いで執拗な攻撃を受けるようになっていたのです。
連日自宅の郵便受けには剃刀の刃を入れた封筒が届き、町中で在らぬ言い掛かりで大勢から追い回され、時には実験中に燃え盛る油が迫ってきたり、フィールドワークの最中野生の四足竜が襲い掛かっ

てきたこともありました。

そして親戚からの攻撃が過激になった頃、桃李の夢に奇妙な男が現れました。

その人は細くて背が高く、瞳や髪の色は桃李そっくりでした。

男は言いました。

「やっと会えましたね、桃李」

しかし桃李は男の事なんて一切知らなかったので、一体何者か聞きました。

すると男は驚くべき事に、桃李が産まれた時に死んでしまった兄羽辰を名乗ったのです。

何でも羽辰が死んだのは、肉体を消滅させて幽霊のような存在として桃李の体内に潜み、内側から彼女を支え続ける為だったというのです。

最初は混乱していた桃李も、考えの末に兄を受け入れる覚悟を決めました。

それからというもの、羽辰は妹の危機に乗じて体内から部分的に姿を現し、霊体と生命の中間的存在として桃李を助け続けました。

そして三年生になった今年の春―ツジラジ第一回より少し前―、権威主義に嫌気の差した桃李は死を装って大学から姿を消し、偶然出会ったホリエサ・クェインに見初められ、彼の臣下として東ゾイロス高等学校での活動を開始します。

人から精気を吸ってその力を高める力を代々受け継ぐ他種族派閥・クブス派最後の生き残りである二人に桃李が協力する理由は不明です。

しかしながら彼女の動向の根底には、政権交代によって成し得た民

主主義的自由社会の中にあって未だ一部で猛威をを振るう権威主義に対する敵愾心があることだけは、確かなのです。

第二十八話　彼女と毒物と権威主義社会の愚者達（後書き）

ハブられるって辛いけど、でもアイデンティティを捨てるのはもっと辛いよね。

第二十九話　私立校列王記－Ａｂｅｒｒａｔｉｏｎ　Ｉｎ　Ｔｈｅ　Ｓｃｈｏｏｌ－

ツジラジ、放送開始！

第二十九話　私立校列王記－Ａｂｅｒｒａｔｉｏｎ　Ｉｎ　Ｔｈｅ　Ｓｃｈｏｏｌ

―前々回より・午前１０時程―

『せェーのッッ―』

『『ツジラジっ！』』

繁と香織の元気な声が、六大陸の主要な国家全域に流れ込む。

それと同時に、第一回とは違った音楽が流れ出す。

―錆色の空　苦境に悶え
―やがて人は　欲に目覚め
―私利私欲　夢　快楽の為
―満足だけ目指し　動き出す

『はい、そんなこんなで始まってしまいましたツジラジ第二回っ！相変わらずの電波ジャックですが張り切っていきましょう。司会の青色薬剤師です』

『予想外のお便りの数に圧倒されつつピザトースト片手に徹夜で作業してたら口内炎になりました。司会のツジラ・バグテイルです。

ん……で、この番組の概要は……もう説明しなくても良いか。企画が生中継になったくらいだし』

『いや説明しようよ。パーソナリティだよ？』

『つうかそもそもこの番組、明確な概要なんてモンがそもそも無ぇじゃん』

『それはそうだけど……そういえば今流れてるこの曲は何？』

『よくぞ聞いてくれた。コイツは現在全大陸でＴＶアニメ版が好評

放送中の「増殖探偵丸斗恵」のＯＶＡ版最新作「悪鬼編」オープニング主題歌「Ａｒｒｉｖａｌ　Ｔｏ　Ｒｕｉｎ」だ』

『「悪鬼編」と言えば、原作の中でも五本の指に入るくらいの人気ストーリーだよね？

「中世編」に隠された謎が次々と明らかになったり、「戦国編」の人気キャラクターが再登場したり……』

『そうだ。続く「混沌編」への伏線も多く、アニメ未登場の人気キャラクター・ダイノヒウスも登場する。原作・アニメファン共々注目しておいて損はないぞ！

ちなみに原作小説は全４０巻で一冊５１０円、アニメ版ＤＶＤも続々リリース中。

ＤＶＤ最新七巻の予約限定版には原作者と制作スタッフ・キャスト達との対談を収録したブックレットが付属するぜ！』

『凄く豪華！』

『だろ？まさしく全ての増殖探偵ファンに贈る仕様と言って差し支えねぇぜ！

さて、フリートークも程々に続いて番組に届いたお便りの方、紹介していきたいと思います！』

『はい、どんどん参りましょう』

等と楽しげに進んでいくラジオだったが、一方各大陸では別方向での騒ぎが巻き起こっていた。

というのも、「指名手配犯なんだから今更どうと言うことはない」という無茶苦茶な理由の為に、繁はアニメの歌や情報を当然無許可で流していた。

この事が災いし、出版社やアニメ制作会社、音楽会社など『増殖探偵』に関する各企業は総じてマスゴミ共からツジラ・バグテイルとの関係に関して暴動同然の質問攻めに逢っていた。

作者であるアクサノ出身の地竜種（禽獣種・羽毛種・有鱗種等の恐

竜版と言える種族）・ＮＩＳＥＣＯ氏も同じような状況であり、自宅に押しかけてきた近隣住民を家族ぐるみで巻いた上で、続いてネット上での騒動鎮圧に向かっていた。

しかし一方で、ツジラジで名が知れた事もあって、各通販サイトでは主題歌ＣＤや映像作品のソフト、原作本を中心に『増殖探偵』の関連商品が急に売れ出した。
社会現象と呼ぶほどでは無かったにせよ、翌日から六大陸各地の書店では『増殖探偵』を初めとするＮＩＳＥＣＯ作品の特設コーナーが作られるに至った。

『では先ず最初に、ラビーレマにお住まいのラジオネーム・兎田ピョンさん。１１歳の方から』
『１１歳？若いねぇ！』
『広い年齢層に受け入れられる番組という事だろうよ。
さて、「ツジラさん、青色薬剤師さん初めまして。」』
『『はい、初めまして』』
『「先日献立表に『発作』と書いてあったので一体何事かと思っていたら、ヤムタ産の果物・ハッサクでした。こういう場合、どう突っ込めば良いでしょうか？」という事なんですが』
『それはアレだね。あの人だよホラ、声優の近野香奈恵さん。
あの人ラジオ番組で「猛る者」と書いて「モサ」って読むのを「モウジャ」って読んだりするような、アレに近いよね』
『何か近しいものを感じるな。
と言う訳で兎田ピョンさん、そういった場合には無理に突っ込まず、運命に身を任せると良いと思います。

さてさて、続いてのお便り』

番組はスラスラと進行していき、五通の頼りを詠み上げた所で、遂

に企画のコーナーに入る。

『ハイ！そういう訳で御座いまして。お便り紹介も程々に、遅ればせながら本日のゲストの方ご紹介して行きましょう！』

『第一回に続き、この方が来て下さいました！元医学博士のニコラ・フォックスさんです！』

『はいどうも皆さん今日は。ぶっちゃけ無職のニコラ・フォックスです』

『いやぁ、よく来てくれたなニコラよ』

『いやいや、呼んでくれて有り難うと言わせてよ。あと折角呼んでくれたのに遅れてご免』

『気にしないで。そりゃ昨日あんなに遅くまで騒いだんだもん。遅れたって仕方ないよ』

その後ツジラは、昨日青色薬剤師とニコラの三人で集まり宴会を開いた事を明かした。

無論これは捏造であり、繁自身の無意味な遊び心によるものであった。

『さて、メンバーも揃った所で今回のメイン企画行ってみましょう。青色、今回の収録場所を説明してくれるか？』

『はいは～い。今回の収録場所は、ラビーレマ首都圏東部にある、とある私立高等学校です。

今回私達は、ラジオネーム「生まれたての」さんからのお便り「校内に潜む謎の殺人犯を捕まえて欲しい」との依頼を受けました』

『被害者は主に生徒の皆さんで、総じて全裸に剥かれ干涸らびていたとの事。

この事から番組では犯人を霊長種・神性種以外として推定。対応する作戦の立案に努めました』

『無論、ゲストのニコラさん込みで』

『そして私達三人が考えた企画タイトルはーッ！』

ッバァン！

『『『「ラビーレマ死闘編～学校でラジオ番組と殺人鬼が死闘過ぎる～」ッ！』』』

そのタイトルと共に動き始めた三人。

そしてそれと時を同じくして、学校に身を潜めていた三人も動き出す。

第二十九話　私立校列王記－Ａｂｅｒｒａｔｉｏｎ　Ｉｎ　Ｔｈｅ　Ｓｃｈｏｏｌ－

『増殖探偵』シリーズが気になる方はｐｉｘｉｖにて、我が親愛なる同志・腹筋崩壊参謀氏の名をユーザー検索にかけてみましょう。

第三十話　兄と私は共生中（前書き）

戦闘開始！繁ＶＳ桃李！

第三十話　兄と私は共生中

―前々回より・校内―

ふとした事から遭遇した繁と桃李の交戦は、お互い一歩も譲らぬ侭に長引いていた。

「熱流！」

桃李の手元から放たれる炎は流水のように床面を這い回り、繁を追尾する。

「へァッ！」

それを繁は奇怪なステップで回避し、そのまま飛び掛かって鉤爪で斬り掛かる。

しかしその攻撃は桃李の右腕によって防がれてしまった。

「ッ！？」

まるで堅いロウソクを斬っているような感覚に陥る繁。

まさかこいつの腕がロウな訳は無かろうと思いながら鉤爪を引き抜こうとするが、中途半端に柔らかい為刃が食い込んでしまい、脱する事が出来ない。

繁が一瞬手間取ったその隙を突き、桃李の腹から羽辰の左脚が飛び出して、繁の腹に突くような蹴りを入れる。

繁はどうにか桃李の右腕から刃を抜き取り、彼女の身体を踏み台にして後方へ跳ぶ事で衝撃を緩和しようとする。

しかしその作戦は思うように行かず、結果的に繁はかなり遠くへ吹き飛ばされてしまった。

「グがッ！？」

バトルものの漫画にあるような『壁に激突して亀裂が入る』程の威力では無かったにせよ、繁にとってその蹴りは若干の深手となった。

「（何だったんだ昨期の蹴りは……？
あの位置から出るなんて有り得ねぇし、かと言って見間違いとも思えねぇ……。
だがそうだとして、さっきのは何だ？物理法則を無視してた時点で学術ではねぇだろうが……まさかＥＳＰの類じゃねぇだろうな？
臭いから判る……コイツはジュルノブルのバカ共やあの軍人達とは桁違いだ。別格だ。
つか、どうにも気分が妙だな―）―ッ！」

ガギィン！

考え込む繁の正面へ、炎を纏った桃李の拳が飛び込んできた。
「うぉっ！？」
繁は咄嗟にそれを両の鉤爪でどうにか弾くが、火の粉に一瞬視界を奪われる。
その隙を突くように桃李の身体から再び羽辰の左脚が飛び出し、今度は繁へ踵落としを放つ。
しかし繁はその攻撃を直前で回避し、その勢いに任せて爪で羽辰の右脚を切り落とした。

「っっ！」
切り落とされた足首から先はゲーム画面に映った死骸のように消滅し、残りの部分も桃李の体内へ戻っていく。
桃李の左脚には鋭利な刃物で切断されたような激痛が走り、激痛の余りバランスを崩した彼女は着地に失敗。
対する繁は瞬時に体勢を立て直し、桃李の肩へ爪先を引っかけて掬い上げて宙へ浮かせ、そこへ両腕を上下から振りかぶって叩き込もうとする。
しかしその攻撃は、桃李の身体から飛び出た羽辰の両腕によって止

められてしまう。
それを好機と見た桃李は繁の股座を蹴り上げようとするが、咄嗟に繁が羽辰の両腕へ溶解液を放った事で状況は一転。
羽辰は両腕を引っ込め、激痛に耐えかねた桃李は思わず絶叫し廊下を転げ回る。
暫く転げ回った後、落ち着きを取り戻した桃李は繁に言う。

「貴方のその力……魔術や学術によるものではありませんね？」
「まぁそうだな……だが、そりゃこっちの台詞だ。
アンタの身体からチョイチョイ生えるその手足、それこそ並のブツじゃねえんだろ？」
「えぇ、その通りですよ。しかし素晴らしい。
貴方が初めてですよ。私と兄の連携に対してここまで対応してきたのは」
「……兄だと？」
「えぇ…兄ですよ」

桃李の言葉と共に、桃李の背中から緑髪で長身痩躯の男がぬっと現れた。

「初めまして、私小樽桃李の兄で羽辰と申します」
「驚いたねぇ……妹の肉体に寄生とは、どんな兄貴だ？」
「産まれて間もなく死ぬ事を覚った私は、自ら霊体と生物の中間的存在へと形を変え、妹を影から支えようと彼女の体内へと潜んだのです」
「それで定期的に姿を現しては妹を助けていると。確かに兄妹なら、感覚器官共有でも納得が行く。
ましてやその面構え、信じられねぇがアンタ等……双子だろ？」
「その通りで御座います」
「性別の異なる双子か。架空の事象だと思ってたが、よもや拝見で

きる日が来ようとはな」
「お褒めに預かり光栄です」
「さして褒めたつもりも無ぇがな……」

そう言って繁は両腕の鉤爪を再度展開し、小樽兄妹へと突進しようとした。
しかし

「―ッ!?何だ!?脚が、上がらねぇッ!」

見れば、繁の長靴は靴底の辺りから正体不明の白い個体で塗り固められていた。
しかも足裏が妙に冷えている。
「何だコレぁ?接着剤の類じゃ無さそうだが……」
「お手数ながら、暫くそこでじっとしていて下さいませんか。
他のお二人がどのような方かは存じ上げませんが、貴方は余りにも厄介すぎる。

やはり同胞ともなると、先天的な格の違いという奴を思い知らされますよ」
「同胞……やっぱりアンタ、ヴァーミンの――」

繁が話し掛けようとした時、桃李は既に姿を消していた。

「なんちゅー逃げ足だ……どっちが格上だ、ド畜生めが。

それにしても……この白い奴はロウか油だろうな。
それなら足裏が冷えんのも納得が行く……。

それに、確かにこの強度なら、ロウが溶けきるまで並大抵の奴は動けんだろう。

だが」

繁の手先から緑色の水滴が滴り落ちていく。
水滴は長靴の表面を伝って下へ下へと流れていき、冷え固まったロウ状の物体だけを的確に溶かしていく。

「小樽桃李はしくじった。何故なら奴は、俺を並大抵の奴だと思い込んだからだ」

自身の能力により生成される溶解液を用いて白いロウ状の物体だけを溶かした繁は、桃李を追って再び歩き出す。

「待ってろ主犯共。ヘッピリムシなりの戦い方って奴を見せてやらァ」

第三十話　兄と私は共生中（後書き）

桃李はヴァーミンの有資格者だった！果たして彼女のヴァーミンとは！？

第三十一話　爆乳白兎娘（前書き）

お気に入り登録数３０件突破を祝って（？）景気付けに（？）ニコラＶＳラクラ！

第三十一話　爆乳白兎娘

―前回より・校内―

桃李と繁が激戦を繰り広げる一方で、ニコラもまたクェインの部下である兎系禽獣種のラクラ・アスリンと戦闘を繰り広げて――居なかった。

「待て！待て！待てぇっ！きつね、逃げるなぁっ！」

「今日日『待て逃げるな』は『逃げろ待つな』のフリなんだよねぇッ！

そんな事も判らないとか、アンタ駄目ねぇウサギちゃん！

巨乳・体操着・ブルマの三拍子揃ってまぁ、只でさえ薄い本向けのナリだってのに、教養も無いと来ちゃあ取るに足らないキモオタに掘られんのが関の山よ？」

長い長い廊下を逃げる狐（ニコラ）とそれを追う兎（ラクラ）。

動物種だけ見れば異様な光景であろうそれも、この二人ならばその違和感も消え失せる。

本来形態からも動物寄りのラクラは持久力・脚力共にニコラより優れている筈だったが、そんなラクラからニコラは華麗に逃げ続ける。

「うるさい！黙れ！黙れ黙れ黙れ！エロは正義！エロには何も敵わない！エロは絶対！」

「だぁあからさぁっ、それが駄目だってのよ。何で判らないかなぁ？エロはあくまで調味料。主軸になる食材じゃないんだって……いや、主軸になるとこだってあるにはあるけどさぁ」

ニコラは立ち止まり、言う。

「アンタが今居る世界は、只のエロ軸如きじゃ廻らないんだよねぇ」

その言葉に腹を立てたラクラが一歩前に踏み出した瞬間。彼女の足下に、奇妙な紋章が浮かび上がった。

「！？」

それは山吹色に光り輝く円陣で、中には毛羽立った書体で何やら不可解な記号が書かれていた。

そして次の瞬間、それと同様の紋章が廊下の壁面中に浮かび上がる。

ラクラは目映い山吹の光に包まれ思わず目を覆った。

その三秒後、全ての紋章からラクラに向かって、件の蛾型弾幕が悉く降り注いだ。

「っがあああぁぁぁぁぁあああああっ！」

有り余る激痛に絶叫するラクラに、ニコラは軽々しく言い放つ。

「安心して良いよ。それは痛覚神経だけを的確に刺激するものであって、何発当たっても死にはしないから」

ニコラは苦痛の余り地面に倒れ伏すラクラの頭を、嘲るように軽く踏み付ける。

「いやぁ、我ながら凄いわ。身体にゃ傷一つついてない……これもヴァーミンの有資格者の成せる技――「ふ、ざ、け、る、なあっ！」

――「ぶべっ！」

ラクラは頭上に乗ったニコラの足に掴みかかり、痛みに耐えながら身体を捻って彼女を転倒させた。

続けざまに立ち上がったラクラは、ニコラの腰へ跨るとその後頭部を掴んで持ち上げ、凄まじい勢いで床面へ叩き付けた。

ゴッ！

しかもその回数は一回や二回などというものではなく、何十回にも渡った。

仮にニコラが並の禽獣種であったならば、素早さとパワーを兼ね備えたラクラの打撃技を一発でも受けていれば既に死んでいても可笑しくはない。

しかし彼女は呪詛により不死の肉体を得たが故に、自らを何度も殺すという人体実験を繰り返した事で知られる元開業医のニコラ・フォックス。

この程度の攻撃で倒れる事など、有り得る筈が無いのだ。

しかしそんな事など知る由もないラクラは、床打撃に飽きたのか再生中のニコラを無理矢理立たせ、その顔面へ兎の脚力を生かした回転蹴りを叩き込む。

叩き飛ばされたニコラは木工教室の扉を突き破り、作業台に腹を叩き付けられる。

これを好機と見たラクラは更に執拗な攻撃を続行。

手始めに転がっていた角材を拾い上げると、それが折れるような勢いで背中を殴りつけ、更に長さ１ｍはあろうかという工業用大型ハンマーで作業台ごとニコラを叩き飛ばす。

更に落ちてきたニコラの右脚を掴み、教室中央の柱へ叩き付けた挙げ句、その腹を大型のドライバーで刺し貫いて壁に打ち付ける。

そしてとどめとばかりに作業台に固定されていた大型の万力を次々に引きちぎり、それを柱へ打ち付けられたニコラへと乱雑に投げつける。

「……これで……終わっ……た」

憎き相手を闇に葬り去った（と思い込んだ）ラクラは、思わず安堵し壁にもたれ掛かって座り込む。
激しい動きで疲弊しきっていたラクラの身体と意志とは、迷わず睡眠を選び取った。

しかし当然、彼女がこのままで済まされる筈はないのである。

頭蓋骨を潰され、背骨を叩き折られ、挙げ句ドライバーで串刺しにされて万力を投げつけられたニコラ。
その身体は既に原型を留めぬ程ボロボロであったが、全身の傷は時が経つにつれて徐々に塞がり、砕かれた骨や臓器は再構築され、更に呪詛の弊害によって衣類や所持品までもが修復されていく。

そして最後に腹からドライバーを排出し、四つ足で床面に降り立った所でニコラの再生は完了した。

「嘗て今まで、私が出会って来た中で」
木工室の壁にもたれ掛かって眠るラクラの前に歩み出たニコラは、言う。
「ここまで方向性でソリの合わない奴が居ただろうかと、つくづく思うわ。

何をどうすればこうポンポンとまぁ、淫乱になれるのかねぇ。
常に男とヤる事念頭に置いて、その為にエネルギーの殆どを注いで……いやぁ、わけがわからんわ。
そもそも戦闘中に男子逆レイプとかその時点で意味不明だし、初対面の相手への第一声が『ｏ●ｎｋ？』だもんで一瞬状況判断すっ飛

ばして飛び蹴りかましそうになったよ。

こうしてるとやっぱり思うのよねぇ、金とセックスはある意味似てるんだって。

確かにどっちも必要だけど、最終目的に設定して良いほど大層なもんじゃないし、そもそも本質はどっちもあくまで手段だし。

あと、知的生物が金とかセックスに溺れちゃいけないよねぇやっぱり。

若い内からそんなもんに溺れちゃったらもう、ほぼアウトの一歩手前だよ」

そう言ってニコラは、並大抵の事では全く起きる気配のないラクラを殺すでもなく、縄と木材とその他諸々の道具を用いて作り上げた無駄に巧妙な仕掛けに組み込んで、そそくさとその場から立ち去った。

それから訳四分後、開脚状態で宙吊りにされたラクラの肛門へ角の削られた角材が突き挿さり、濁音の混ざった彼女の絶叫が校内に響き渡ったのは言うまでもない。

第三十一話　爆乳白兎娘（後書き）

みんな読んでくれて有り難う！
次回は香織とクェインのバトルだよ！ついでにクェインの正体も明らかになるよ！

第三十二話　Ｓｌｉｍｅ&ａｍｐ;Ｐｈａｒｍａｃｉｓｔ（前書き）

更新復帰！（でも以前のように毎日は無理かと思われ）

ひとまず香織ＶＳクェインの魔術対決！

第三十二話　Slime&Pharmacist

―前回より―

「いやぁ……お強いですなぁ、清水さんは…」
「いえいえ……クェインさん程じゃありませんよ…」

講堂で妙に穏やかな雰囲気のまま語らい合う、二人の影。
一方は、深紅の長髪を棚引かせる霊長種の女・清水香織。
方やもう一方は、本件の首謀者であるホリェサ・クェイン。

「しかし驚きましたよ。まさか事件を引き起こしていたのが、クブス一派出身の流体種の方だったなんて。
失礼でしょうけど、流体種はともかくとして、クブス派なんてとっくに滅んでいたかと思っていましたから」

ホリェサ・クェインは、カタル・ティゾルに存在する知的生物の中でも特に風変わりな種族に属している。
流体種と呼ばれるそれは、その名の通り半個体状の肉体を持つ種族であり、一説には刺胞動物に近いとされる体組織の九割は水分で構築されている。
生活形態も多種多様であり、生涯水中で生活を続ける者も居れば、クェインのように陸上で難なく活動できる者や、中には極地や乾燥帯に住まう変わり種も居るというのだから驚きである。
ただ全てに共通しているのは、身体が非常に柔軟であったり、身体の至る所からエネルギーを摂取できるという事。
そして柔軟である反面、一部水棲種を除いては水分蒸発を防止するために薄くもそれなりに強靭な外皮が全身を覆い、体内には肉眼での目視が不可能な程に細密な神経系と軟骨の絡まり合った繊維が通

っているため、大がかりな変形は不可能であると言うことだろう。
更に外皮・神経系・軟骨等は柔軟に伸び縮みし、損傷しても即座に再構築される。
この為、流体種を物理的な攻撃で殺害する事は殆ど不可能であるとされる。
そんな流体種の本質を担うのは脳を内包する小さな球状の頭蓋骨であり、各種神経と軟骨の行き着く場所である。

普段、感覚器官や発声器官が体外に露出している流体種であるが、有事ともなれば頭蓋骨に備わった臨時の感覚器官や発声器官を用いることもある。
その上時には肉体を捨て、頭蓋骨のみで活動する事もあるという（但し死の危険性が極めて高い）。

この為、理論上流体種を効率的に殺害するためには頭蓋骨を破壊してしまえばよい。
但しこの頭蓋骨というのはかなり強固であり、刃物や銃弾、高温や高圧力にも耐え、一時的にだがあらゆる上級魔術の影響を受けないという記録も存在する。
その上頭蓋骨は柔軟に伸び縮みする繊維組織と流体状の体組織によって体内を反射的に素早く動き回り、本人の意志とは無関係に危機を回避しようとする為、捕らえたり射抜く事さえも難しい。

現に香織も、先程からクェインを一撃で仕留めようと機会を伺ってこそ居たわけではあるが、狙いが全く定まらないというのが現状であった。

「世間には必ず例外というものがついて回るものです。
そして例外は時に万人の思惑から外れ、あらゆる常識を破壊する。

例外ありきの世の中だからこそ、私達は生き残ることが出来たのです」

「そうです、か。

確かに私も、自分自身はそういった例外の一人であろうと自覚していますから、貴方の言葉には納得せざるを得ないように思います。

それで、事件についてですが……やはり祭品確保が目的ですか？」

「えぇまぁ、そんな所ですがしかし、それなりに惜しいですな」

「と、申されますと？」

「私達の最終目的は、祭品の確保ではない……という事です」

その言葉を耳にした香織は、一瞬身構える。

「まさか……」

「そう、恐らくはそのまさかです。

私達の目的は、クブス一派の再興。

その為には上質な少年の精子と精気とを、母としての高い資質を持ったクブスの淑女に蓄えなければならないのです」

「やはり……という事は、居るのですね。貴方以外の、クブスが」

「ご名答。精子と精気の貯蓄量は既に満たされようとしています。

故に、ここであなた方三人を始末した上で更なる回収作戦を続ければ、自ずと準備は整う筈だ。

あとは彼女が新たなる眷属を産み出し、あらゆる生物をクブスのもたらす甘美な快楽によって隷属し続ければ、一年足らずでカタル・ティゾルは我等クブス一派のものになるでしょう……。

そうなれば、あの忌々しい軟体動物の手に掛かり散っていった我等が同士達にも顔向けできるというもので――

ズドバァン！

クェインの言葉を遮るようにして、講堂の天井が一部巨大な四角錐に変形して彼の居た場所を指し貫いた。

「大した自信ですね、クェインさん……否『腐臭の肉塔王』ホリェサ・クェイン…」

「その名で呼ばないで頂けますか?私としましてはその異名……些か不愉快でしてね」

四角錐から退避していたクェインが、何処からともなく這い出つつ言った。

「最初からそう呼ばず、あくまで初対面の他人として敬語で接して差し上げただけでも有り難いと思って頂かなければ此方としても何とも言えませんねぇ」

「まあ、割り切るしか無いのでしょう」

清水香織とホリェサ・クェイン。

共に高い魔術的才能を持って産まれ、あらゆる高等魔術を操るに至った二人の戦いが、再び始まろうとしていた。

とは言ってもこの二人の戦いは、繁と桃李のような「特殊技能に武装や奇策を織り交ぜフル活用する接近戦」ではないし、ニコラとラクラのような「ルール無用のぶつかり合い」でもない。

お互い魔術師である二人は己の知恵と術に全てを託し、可能な限り手早く相手を倒そうとする。

即ちそれはある種の「勝負」でもあったがしかし、彼らは騎士道や武士道のような気高き精神を持ち合わせているわけではない。

よってこの壮絶な勝負は、一方が投了を宣言したとしても終わる事は無いのである。

終了の基準は原則としてただ一つ、一方或いは両者の死亡のみである。

第三十二話　Slime&Pharmacist（後書き）

次回、クブス一派の実態が明らかに。

第三十三話　私が侍女を始末しますから貴方は感染症対策をお願いします（前書

待たせたか！？一週間ぶりの更新！

予告どおり、クブス一派の過去話だぜ！

第三十三話　私が侍女を始末しますから貴方は感染症対策をお願いします

嘗てケニーギ・スプリングフィールドが現代魔術の基礎を築くより遙か昔、カタル・ティゾルに一人の魔女が居た。
小夜子というその霊長種は実に美しい才女であり、あらゆる分野に通じていた。
しかし彼女は、その性分が災いして周囲からは快く思われていなかった。

というのも、小夜子は産まれながらにして酷く淫乱であったのだ。
温帯域の海にぽつりと突き出た岩の小島に建つ、古びた館に従者と二人で住まう彼女は、しばしば島に流れ着く漂流者を助けていた。
しかし助けられた者は皆彼女の魔術に心身を侵され、性による快楽に執着する哀れで不毛な存在へと成り下がってしまうのが常であった。

はっきりした自我が保たれ正常なように見える者であっても、その内面は必ず性欲で染まっていたし、異常な性癖を植え付けられ人格を歪められてしまった者も居た。
このような哀れな者の末路というものは火を見るよりも明らかで、抑止の利かない欲故に見境無き強姦魔に成り下がる者など、総じて悲惨な末路を辿るばかりであった。
「快楽の権化」を自称する小夜子の魔手は人伝に大陸を超えて伝染し、それは同時に各大陸へ凶悪な感染症を媒介する事にも繋がった。

この事が災いし、報道機関や政府に該当するものが明確に備わっていなかった時代にありながら彼女の名は広く知れ渡る事となる。
そして感染症による怒りや憎悪に駆られた一握りの者は度々小夜子

の暗殺を試みたが、謎めいた尖耳種の従者・太刀川の持つ凄まじい力はそれを良しとしなかった。

しかしながらある時、この太刀川を巧みに打ち倒す強者（ツワモノ）が現れた。男の名は黒沢健一。ノモシア辺境地の地方自治体に所属する中堅管理職である。

管理職とは言えどその戦闘能力は凄まじく、翼を持たない痩躯の嘴（ハシブトガラス）太鴉系羽毛種としての身体能力を生かした槍術と宮廷魔術師に匹敵する強力な魔術を織り交ぜた連携は、民間人らしからぬものであった。

学生時代は頭脳明晰な秀才として名を馳せた黒沢であったが、太刀川との戦いでは策も何も無い単純明快な戦術で勝利を勝ち取った。というのも彼は、総重量約１ｋｇにも及ぶ諸装備を身に付けたまま沿岸部から島までの約３ｋｍをクロールで泳いで渡ったのである。更に島へ上陸するや否や、館の周囲で無数の爆竹を鳴らし、様子を伺いに外へ飛び出てきた太刀川に恋文らしきもの（とは言っても内容は『五年前に貸した花澤●奈の写真集さっさと売ってこい。今プレミアがついてて大変な事になってるから』という支離滅裂かつ意味不明なもの）を渡した上で決闘を申し込んだのであった。

結果として勝利を収めた黒沢の武勇伝はこの後、彼の部下であり格闘術の達人でもある手長猿系禽獣種・大喜多大志によって仲間内に広められ、以降一部で伝説として語り継がれたという。

（彼の仲間達はこの話を聞いて、最初大喜多の法螺とも思ったらしい。しかしながら同時に仲間達は、黒沢の臣下を自称し、彼の為ならば死も辞さない性格の大喜多に限ってそんな事を言うはずも無いと考え、話を信じることにした模様）

（また、大喜多の話を聞いた仲間達は、黒沢の彼らしからぬ戦いぶりを知って、仲間内のリーダー格である自称・禽獣種の男を思い浮かべたという）

（ちなみにその男、恋人らしい立場の蜘蛛系外殻種共々今も尚好評行方不明中である）

一方、臣下太刀川を殺された小夜子はというと、タッチの差で転移術を用いて黒沢の攻撃を館ごと回避し、予め予定していた通り亜寒帯の辺境地に逃げ延びていた。
逃げ延びた先で小夜子は、魔術によって彼女の下僕となった者達に新たなる術を施した。
下僕達は術の効果により、高い身体能力と魔術的才能、そして快楽を捨てなければ決して老いることのない肉体を得るに至った。
また彼らは欲を相手に気取られぬよう覆い隠す術を学び、鍛錬の末性行為によって相手の精気を吸い取り自らの魔力に変換する『夢魔式四十八手』という魔術と体術を併合した技法を習得した。

更に下僕達は同類と愛し合い繁殖を繰り返すようになっていた。
下僕達の能力は世代交代の度に高まっていき、その類い希なる力を見た小夜子はこれを『クブス一派』と命名し、活動を開始する。

世界を犯し、自らの『血』を繋ぐ『種』を地に満ち溢れさせるという目的のために。
更に、クブス一派の力を以て『耐える事なき快楽に包まれた世界の中枢に立つ事』を夢見た小夜子は、呪術により自らの子宮を捨て不老不死の肉体を手に入れる。

その後、クブス一派は各大陸で影ながらに猛威を振るい続け、力を増す毎にその名もまた広まっていった。

そんなクブス一派の前にある時、総勢１８名の風変わりな集団が現れた。
その集団というのは禽獣種や羽毛種等複数の種族によって構成され

る集団であり、『ラビーレマの飯屋がきっかけで集った烏合の衆』と名乗った。
最初小夜子はこの『烏合の衆』を、さして気にも留めていなかった。自ら烏合の衆と名乗る程卑屈なのだから、きっと己に自身のない弱者なのだろうと高を括っていたのである。

しかし、小夜子はその翌日『烏合の衆』の信じがたい力を目の当たりにする。

ノモシア東部に潜伏中だったクブス一派の者が皆、僅か半日の間に全滅したのである。
更に混乱する間もなく、小夜子の元へ次なる報せが舞い込んできた。その知らせによれば、ノモシア西部と北部に潜伏中だったクブス一派の一部が突如謎の光線によって変死したかと思うと、突如ゾンビのような姿となって残りの者を襲い始め、現地の部隊は瞬く間に全滅してしまったという。
この他、「突然壁に引きずり込まれた」「突如何かに怯えだし、わけもわからぬままに死んでしまった」「転がる度に肥大化する球体に押し潰されてしまった」等の報告が相次ぎ、六大陸に潜伏中だったクブス一派の関係者は悉く殺されていった。

小夜子は高を括った己自身を悔いたが、既に手遅れであった。
烏合の衆を名乗る集団の筆頭である烏賊軟体種の男はいつの間にか小夜子の私室に現れ、恐れおののく彼女の頭蓋骨を細い触手で叩き割って殺した。

因みに軟体種とは、禽獣種の水棲無脊椎動物版とでも言うべき種族である。但し形質の中に節足動物は含まれていない。

始祖である小夜子が殺害され、構成員もほぼ絶滅した事で、クブス一派は実質的に壊滅。

こうして人々の暮らしはまた、平和に戻っていった。因みにこの『クブス一派壊滅』が起こったのは、繁がカタル・ティゾルにやって来るより３０年ほど前の事。

薬師の老婆トリロは最初の恋人であった漁師の青年を小夜子によって奪われ、更に姉もまたクブス一派によって殺された為、クブス一派に対し激しい怨みを抱いていた。

そしてその怨恨は師から弟子へと受け継がれ、香織もまたクブス一派を凄まじく嫌っていた。

第三十三話　私が侍女を始末しますから貴方は感染症対策をお願いします（後書

次回以降、戦闘激化！

第三十四話　繁が何か主人公っぽい事に挑むそうですよ（前書き）

但し何をするのかは不明！

第三十四話　繁が何か主人公っぽい事に挑むそうですよ

―前々回より―

壮絶な魔術合戦は尚も続いていた。
香織とクェイン、赤と青とで対を成す二人はどちらも古式特級魔術を習得する程の達人でこそあったものの、この手の戦闘に用いられるような『攻撃魔術』についてはからっきしであった。

しかしだからといって相手に攻撃を行えないという訳ではなく、方や常軌を逸した変形を続ける建物で、方や宙に浮かぶ雑貨や瓦礫で、相手に執拗な攻撃を続けていく。

「封獄式、六角触腕柱！」
香織の放つ魔術により変形した床材と天井から細い六角形の棒が無数に伸び、クェインの中枢を貫かんとする。
「効かぬわ！チョーク・バレットォ！」
それを巧みに避けたクェインは、箱入りチョークを空中で砕いて再結合させ、それを散弾のようにして放つ。

散弾として放たれたチョークもまた香織操る不定型なテーブルによって防がれ、その脚が無数の鋭い針となってクェインに襲い掛かる。
しかしその針もクェインは巧みに避け続け、体内に残った針は吐き出す序でに香織に放つ。

とまぁ、ざっとこんな流れがもうかれこれ出会って以降一時間半以上も続いていた。
途中、多少ばかり長めの会話休憩（三十二話参照）を入れてこそ居

たものの、それでも戦闘時間が長い事に変わりは無かった。

そしてこんなに長い時間をかけていながら、未だに両者一歩も譲らぬ拙戦が続いていた。

故に『どちらが有利か』と問われたと仮定しても、『一概に断定的な回答は出せそうに無い』という回答が精一杯とでも言えば良いか。

兎も角二人の戦いには、よくある魔術師の持つ魔術そのものの『美しさ』だとか『健全な迫力』等というものはない。

よくある変身や召喚を行うにしても『幻想的』である以前に『暴力的』であり、また『ユーモラス』である以前に『ショッキング』である為、児童向けアニメや少年誌にはまず向かないような戦いが繰り広げられていた。

―一方その頃―

遙か上の階で戦っていたのは、繁と桃李であった。

「アンタのヴァーミンの正体はともかくとしてその姿は何だぁ!?」

突如姿が大幅に変貌―というより、全く別物とでも言うべき姿になった桃李に、繁は問う。

しかし、それに対する桃李の答えは実に暢気なもので

「あぁ、これですか?まぁ何というか、有資格者が己のアイデンティティを自覚し始めた際の姿とでも言っておきましょうか」

「アイデンティティの自覚!?曖昧過ぎんだろ!

つうかお前、霊長種と見せかけて実は擬態してた外殻種でしたってオチか!?あぁ!?」

珍しく取り乱す繁だったが、彼が取り乱すのには当然、明確な理由があった。

というのも、現時点での桃李は『エメラルドグリーンのゴキブリ型ヒューマノイド』とでも言うべき姿を取っており、以前の面影が殆ど無いに等しかったからである（あって精々声と頭部の体毛程度）。

「まぁ良い、アンタのヴァーミンの正体についての目星はついてんだ」

「ほぉ……では貴方は、私のヴァーミンの象徴と能力詳細についてどのようにお考えで？」

「その姿から見るに、象徴はゴキブリで間違いあるめぇ。で、肝心の能力詳細だが……『温度』だろ？際限なく油っぽいのをどっからか出すってのも確かに能力だろうが、あくまでオマケ程度のモンでしかねぇ。その本質は物体の温度を自在に操作して、燃焼や凍結を引き起こすことにある。違うか？」

「…流石ですねぇ、象徴は兎も角そこまで見抜くだなんて、やはり貴方は別格ですよ。私の『ヴァーミンズ・シェースチ　コックローチ』は、ゴキブリの象徴を持つ第六のヴァーミン。厳密に言えばこの『ローチスリック』の量にはそれなりの制限がありますし、分泌も身体の一部に存在する油膜腺からしか生成出来ませんが、ほぼ正解と言って過言ではありません」

「ワイバーンや俺の足を止めたのも、その油か？」

「えぇ。ローチスリックは高い可燃性を持つ一方、冷却して凝固させるとポリエチレンテレフタラートにも匹敵する強度を得るという、奇妙な性質を持っています」「ＰＥＴか、どうりで硬いわけだ。ワイバーンが抜け出せないのも頷ける」

「それを抜け出す貴方はどうなんでしょうねぇ」

「気にしちゃ負けだ」

そう呟いた繁は、両腕を斜め下３０度程に伸ばし、掌を背面に向け、

右膝を僅かに曲げた。

「……一体何を始めるんです？」

そんな桃李の問に、繁は軽々しく答える。

「さァて、何かねェ。ただ一つ判る事があるとすりゃあ、この構えはさっきアンタが取った奴を、俺流にアレンジした奴だって事だ」

その時繁は、全身の血管が脈打つような感覚に襲われていた。

―一方その頃―

「ぎぃやっはぁあああああ！何でこんな事になってんのぉぉぉ！？」

学校などでしばしば見かける『廊下走るな』の掲示も無視して廊下を全力疾走するニコラ。

そんな彼女の後を追い回すのは、極太の木材で尻の穴を掘られ怒り狂うラクラ―ではなく、ニコラの身長の倍以上程もある直径の、岩石球であった。

「一体何なのよこれはっ！？

何！？古典的な防犯装置！？古典的過ぎるわぁっ！

一体何処の古代遺跡よ！？」

如何なる原因によっても死ぬ事の無い不老不死であるニコラであったが、彼女の神経細胞はいつ何時とて正常に作用していた。

つまり彼女の体質は「死にさえしないが、痛みはしっかり感じる」という厄介なものである。

とは言え、『嘗て自身の身体で人体実験を行ったニコラが何故死を恐れるのか』等と疑問に思う方も居る事だろう。

確かにニコラは嘗て自身を用いた人体実験を、苦痛も含み存分に楽

しんでいた。
しかしながら彼女は、どういったわけか実験によるものでない苦痛を楽しめないのである。
これは彼女自身にとっても不明瞭な事柄であり、明確な答えは出せない。
しかし弁解の術は考えてあり、熟考しても答えが出ない場合『乙女心という奴だ』と答える事にしている。

『乙女心』とは、『女子力』『小悪魔系』等と並んでニコラにとって好ましくない単語である。
しかしながら、安易で軽々しい言葉なので弁解に使おうとも罪悪感などあって無いが如しというものである。

かくしてニコラは時折『乙女心』『女子力』『小悪魔系』等の単語を使うのである。

さて、そうこうしている間にもニコラと岩石球との不毛な追走劇は続いていた。

「しかし本気で何なのよこの岩っ！？
曲がり角減速無しに余裕で曲がるわ、上り坂だろうと平然と猛スピードで転がるわ、廊下に面した部屋に隠れても追って来るわ、突っ込んでも突っ込み切れないのよ！」

等と叫びながらもどうにか逃げ続けていたニコラであったが、ふと何かを踏ん付けて足が滑る。

「あっ」

ニコラがそれに気付こうとも、最早状況は手遅れであった。

廊下に落ちていたパンの袋で大きく滑った彼女の身体は、忽ち岩石球によって潰され、そのまま張り付いてしまう。

結果としてニコラは、岩石球に張り付いた状態で再生しては潰され、また再生しては潰され、という悪夢の如し無限ループに陥ってしまった。

そしてそのまま、岩石球は転がり続ける。

行く先に何があろうと、決して止まりはしない。

第三十四話　繁が何か主人公っぽい事に挑むそうですよ（後書き）

次回、繁に新たなる力が！

第三十五話　女神様の言うとおりっ！（前書き）

一方そのころ、ニコラの非道な罠にかかったニコラは…

第三十五話　女神様の言うとおりっ！

―前回より―

今の今まで自慰と騎乗位性交を主軸に、満たされることなき性的欲求の処理を行ってきたラクラには、肛門性交の経験などと言うものが一切無かった。
この事はクブス一派の教義に反するものでなく、感染症のリスク等もある程度軽減できる為、彼女にとっては都合がよかった。

しかし今回ばかりは、それが裏目に出てしまったようである。

自分の大便より太いものを通した事の無かった彼女の肛門にとって、角を削った角材はあまりにも太すぎた。
故に女性器では余裕に快楽と感じる刺激も肛門では激痛へと成り代わり、その痛みは彼女を気絶にまで追い込んでいたのである。

意識の飛ぶ中、彼女は謎の声により起こされる。

ラクラ、ラクラ。起きなさい。

「（ん……ここは……一体？）」
目覚めたラクラは、光り輝く幻想的な花畑に居た。

「ここは……まさか、天国？
もしかしてラクラ、死んじゃった？」

立ち尽くすばかりのラクラ。
しかしそこへ、穏やかな女の声がラクラに優しく語りかける。

『ラクラ、ラクラ、漸く起きたのですね。
辛かったでしょう？でももう大丈夫です』
「誰！？」

ラクラが振り向いた先に居たのは、肌の白い全裸の女だった。
女は見たところ２０～３０代程。
膝の間接まで伸びたピンク色のロングヘアはウェーブが掛かっており、その体つきは諸々に於いてラクラ以上に肉付きが良かった。
というか、乳房が異様に肥大化している。

『私は性愛と快楽の女神パイオ・マンマン。
クブス一派が開祖・小夜子の甘美で気高き意思の象徴』
「女神……さま……？」
『ラクラ・アスリン、我が愛娘よ。
貴女はこの世にある他の何より尊く崇高なクブス一派の栄光が為に戦わねばなりません。
その戦いは辛く厳しいものとなるでしょう。
ですから私は、貴女に至高の力を授けます』

女神の言葉を受けたラクラが静かに頷く一方、他の面々は未だ戦場にあった。

―蟲と虫―

スバァン！

唐突に繁の全身から解き放たれた衝撃波は、元々軽い小樽兄妹を軽々と吹き飛ばした。

「す……凄まじい力……無自覚初級者かつ見よう見まねとはいえ、これだけの威力とは…」
地面に倒れ付す桃李は、ふと衝撃波の根源に目をやる。
塵と土煙の舞う中にたたずむのは、当然我等が主人公・辻原繁…である筈なのだが、土煙が晴れるに従って現れたシルエットは、人を乖離した異様なものであるようだった。

完全に土煙が晴れ、露になったその姿を見て桃李は絶句する。
しかし誰より驚いていたのは、他でもない繁自身であった。

「（何だこいつは…？
これが俺の、パワーアップって奴なのか？）」

見様見真似の上、何が起こるかも全く解らない状態で全身に力を入れてしまった繁は、桃李以上に人を離れた姿になっていた。

全体的なフォルムこそ長身痩躯な人間のそれであったものの、全身黒い外骨格に覆われ、手足も節足の様な形状であった。
頭は滴型とも多角錐とも言える形状で、首と呼べるものはない。
背には折り畳まれた翅が備わり、腹部側面からは細い節足が生えている。

そんな姿になった繁が驚きとある種の感動により立ち尽くしていると、桃李が言った。

「破殻化成功おめでとうございます。
これで貴方も晴れて並の有資格者の仲間入りです」
「破殻化？この変身の事か？」
「はい。能力への順応が進行したヴァーミンの有資格者には、象徴

である生物種の力を最大限に活用する変身能力の使用が許可されるのです」
「それが、破殻化か」
「はい。『外殻を突破し新たな己へと変化する』という意味合いでしょうね」
「そうか」
「しかし驚きましたよ。
まさかこれ程早期に破殻化を達成する有資格者が居るとは」
「……何故俺の破殻化が早いと判った？」
「それは判りますよ。
先程の貴方の動向や、私の破殻化を見た時の反応がまず素の驚愕でしたし、外皮の質感も違いましたし」
「質感まで見通すか。
流石だ。兄妹揃って敵なのが惜しまれる。
お前が居れば良いラジオ番組が作れるだろうに」
「私達もそう思います。
貴方と一緒なら、きっともっと大きくて面白い事が出来たでしょうに」
「まぁ、出来ない事をあれこれと言っても空しいだけだ。
敵対しちまった事を悔いつつ、最後くらい派手に行こうじゃねぇか」
「そうですね。今は出て来れませんが、兄もそう言ってます」
「んじゃ一丁、やっちまうかァ」

桃李は背の翅で空へ舞い上がり、追う繁目掛けて炎の塊を放つ。
中枢に油を仕組んだメラミンスポンジの球体を据えたそれは、突風はおろか流水でも簡単には消せない火力を誇る。
しかし、それらが飛来するべき時、繁は既に姿を消していた。

「（何処へ消えた……？
まさか、光学迷彩ッ！？それともまさか……）」

考えを巡らせる桃李に、内部から語りかける者が居た。
兄・羽辰である。

『（桃李、彼は上です！
天井にしがみついて、今にも飛び掛からんとしています！）』
「（上…？
…！）」

桃李が気付いた時、彼女の首は繁の腕四本に捕まれていた。

繁は空中で身体を巧みに高速回転させ、桃李を床に投げつける。
投げつけられた桃李は、立て続けに降り注ぐ溶解液を、凝固させた油の盾で受け流す。
当然盾は溶解液の前に成す術も無いが、桃李はそれを、流体力学の知識を生かした造形と裏側からの素早い補強で補い繁に対抗せんとする。

お互い譲って精々数歩という戦いが続くも、その終わりは当人達の意思とは無関係に訪れた。

桃李の身体を支えていた床が、盾を縁取るようにして丸ごとえぐられてしまったのである。

「！？
（しまった！まさかこんな事になるなんて！）」

桃李はまたも出遅れた。
落ち行く床の上で天井を見上げれば、既に繁がドロップキックを放っている。
軽く硬い外骨格同士がぶつかり合い、桃李の下腹部に衝撃が走る。

そのまま二人は下の階まで落下していくが、事態はここで思わぬ方向へ進んで行く。

下の階の床に差し掛かる直前、突如横から凄まじい運動エネルギーを内包した物体が現れたかと思うと、二人を勢い良く跳ね飛ばしたのである。

二人を跳ね飛ばし、上の階の床材兼下の階の天井であった建材の塊を打ち砕いた末に黒板へ激突し動きを止めた。

「いってェ…一体何が起こったってんだ……？」

繁が辺りを見渡すと、そこは散々に散らかった大教室であった。しかもどういう訳か―否、訳そのものは分かっているのだ。兎に角魔術に伴って発生する残り香がそこらじゅうから漂ってくる。

「いや冗談抜きで、何が何だってんだ？」

繁はひとまず、隠れて様子を見ることにした。

第三十五話　女神様の言うとおりっ！（後書き）

遂に目覚めた繁の新たなる力！
次回、戦いは思わぬ方向へこじれ始める！

第三十六話　有資格者達は象徴の生物に何処か似ている（だから何だ）（前書き

分岐していた道筋が、今再び交わり合う！

第三十六話　有資格者達は象徴の生物に何処か似ている（だから何だ）

―前回より―

「「!?」」

それぞれ魔術によって召喚したサイスと双剣を掲げる香織とクェインによる鍔迫り合いは、突如割って入った巨大な何かによって中断されてしまった。

二人は一度大きく引き下がり、壁や天井に張り付いて相手の出方を見る。

二人は熟考する。

「（そういえばそうだった……東ゾイロス高等学校と言えば、創設者の趣味で校内に色々と罠が仕掛けてあるんだった……）」

「（見取り図によれば岩石球の罠は東側にしかなかったはず……今更増設したのかそれとも、見取り図に無い隠し罠なのか、あるいは私の入手した見取り図に見落としがあったのか……）」

「（何はともあれ岩石球は止まったみたい…）」

「（あの音、さては直進して黒板を砕いたな?）」

「（引っかかったのは繁かな?それともニコラさん?そうでなかったら残る敵二人のどっちかだけど……）」

「（正直な所、あの場の状況を確認したいのは山々だ）」

「（あの岩石球の確保は大きなアドバンテージになる）」

「（古式特級魔術『ジュルネ・デカラビア』……）」

「（もしくは『ソワール』の方が良いかも知れない）」

「（どちらにせよ、岩石球ついでに砕け散った黒板も確保出来れば良いが……）」

「（どうだろうと、頃合い見計らって動くしか無いっ！）」

「（それより何より重要なのは他の二人だ）」

「（始まって以降連絡取って無いし、そもそも状況からして連絡取れないし）」

「（数も力の内だ。とすれば二人との合流も考慮すべきだろう）」

「（でも今は）」

「（ひとまず）」

「「（（あの岩石球を確保して術を当てるのが最優先ッ！））」」

二人はほぼ同時に飛び出し、空中を飛行するように岩石球へと向かう。

岩石球へと放たれた魔術は、全く同時に対象へ向かう。

根本の性質が同じ『ソワール』と『ジュルネ』の二つが対を成す様に存在する古式特級魔術。
その中の一つである『デカラビア』は、砂泥や岩石を操る効果を持つ。

しかしながら、対象外の物質には、単なる衝撃波にしかならないのだが。

「むぎゃひっ！」
「「（（！？））」」

ふと響く悲鳴の根源を見た二人は、硬直の余り落下した。
それもその筈、岩石球の正面で強風程度の衝撃波を受けていたのは、岩石球に轢かれたまま転がり続けていたニコラだったのである。

香織は思わずサイスを落とし、本能で危機を感じ取ったクェインはその場から逃げ延びる。

「ニ、ニコラさん！？」
「あれ？香織ちゃんじゃん。
何でここに？」
「それはこっちの台詞だよ。
まさかニコラさんが岩石トラップに便乗して助太刀に来てくれるなんて」
「いやぁ、そんな格好の良い話じゃ無いんだけどね？」
「そうなの？
じゃあ一体何が？」

二人は繁捜しのついでに互いの近況を方向しあった。

「あの馬鹿兎がクブスだったとはね。
どうりで三月ピンクにド淫乱全開なわけだわ」
「私や繁も薄々感づいてはいたんだけど、さっきの流体種が色々吐いてくれたおかげで確定的な情報を得られたよ」
「クブスねぇ…悪い思い出しかないわ」
「大丈夫。私も悪い話しか聞いてない」

そんなこんなで二人の繁捜索は続く。
道中、香織とクェインによる魔術合戦（と、表現出来るかどうか曖昧な乱戦）の弊害で起こる天井や壁の崩壊に悩まされた。

時間経過と共に複雑さを増して行く大教室（何故これ程に巨大なのかと言う程に体積が広い）の中をさ迷うこと数分。
二人は積み重なった瓦礫の横を通りかかる。

一方の繁はというと、変身を解除して瓦礫の上で黄昏れていた。
「（さて、変身解除したら全裸とかそういう弊害が無いのは救いだが、これからどうする？
二人を探すか、それとも残りを潰しにかかるか……って、二人居たじゃねぇか）」

繁は瓦礫の山を下りながら、二人に呼び掛ける。
かくして『ツジラジ』スタッフ三名が揃い踏む形となり、彼らは再び諸々の事を報告しあった。

「成る程。やっぱりヴァーミンの有資格者が絡んでたんだね」
「そうだ。相手は四番ゴキブリ、油脂生成と温度操作と高速移動が厄介なやつだ。

それはそうと、そっちは魔術師の流体種にビッチの禽獣種……しかも悪名高きクブスの奴等とは、油断ならんな」
「流体種はともかく、禽獣種はしばらくどうにかできそうだけどね。あいつ馬鹿だし」

適当に報告や雑談をしながら歩みを進める三人だったが、ふと不穏な気配を察知した繁が、動いた。

「避けろ！」

瞬時に二人を左右に突き飛ばし、自らもバックステップで３ｍ程飛び下がる。
その直後、爆発音を伴って巨大な炎の塊が地面に激突し、砕けるのに伴って炎が広範囲に広がった。

「おや残念、直撃するかと思ったんですが」
天井へヤモリのように張り付きながらそういうのは、破殻化を解除した桃李であった。
「あの衝撃を受けて生き延びたか」
「それはお互いの事でしょう？我々は害虫というだけあり、そう簡単には死にませんし」

「ほうほう、まさかこんなに若い子が同胞とは驚いたねぇ」
「……その髪型……ニコラ・フォックス先生ですね？」
「ははぁ、私を知ってるとは随分とマニアだねぇ」
「貴方の本は高校時代読破しましたから。あの文体と、冗談にならないようなくだりであえてふざけるユーモアが大好きでしたよ」
「そりゃどうも。貴方も腐臭の肉塔王なんかに肩入れなんてしてないで――――」

ニコラの背後で浮き上がった巨大な白い四角柱が、彼女の頭部を刈り取るように叩き潰す。

「その名で私を呼ばないで頂けますか。不快指数がかなり上がるので」

壁の隙間から這い出てきたクェインが言った。

「何を言ってんのさ。全世界の人々の不快指数上げまくったのはアンタ等じゃん」

「不快指数を上げた?はて、何のことでしょうかねぇ。私はただ、小夜子様の御意思に従い、クブスの教義に基づき世界を快楽で満たそうと暗躍していただけなのですが」

「レイプで他人狂わせまくってただけの変態クズ集団がよく言うよ」

「不人気を王政批判で補おうとしたマゾヒストの貴方に言われるのは心外というものですねぇ」

罵り合いが白熱するかと思われた、その時。

ドゴォォォォン！

轟音と共に教室の壁が凄まじい勢いで吹き飛び、更にその余波で瓦礫が悉く崩壊する。

濃い土埃は五人から視界を奪うが、その中でも彼らはどうにか降り注ぐ瓦礫を回避し続ける。

土埃が晴れた先、丁度差し込む太陽光をバックに佇むのは、霊長種と思しき少女であった。

顔つきから察するに年齢は１５~１８程度だが、胸や尻は年齢不相

応に肉付きが良い。
頭髪は薄いピンクのショートカットで、白の長袖ジャージにブルマという井出達だった。
更に飾り物であろうか、頭頂部から白い兎の耳が生えている。
類人形質の強い禽獣種ならば耳は即頭部から生えるので、一同は各自飾り物か何かだと判断した。

盛り上がった瓦礫の上に立つ少女は、静かに言い放つ。

「無能は、いらない。

新世界の神は、ひとりでいい」

第三十六話　有資格者達は象徴の生物に何処か似ている（だから何だ）（後書き

突如現れた少女の正体とは！？
次回、思わぬ展開に！

第三十七話　社会的に死んでまでこんな奴に仕えてたなんて（前書き）

突如現れた少女の正体とは……？

第三十七話　社会的に死んでまでこんな奴に仕えてたなんて

―前回より―

突如現れるた霊長種の少女について、繁は思考を巡らせる。

「（一体何なんだこいつは？
ピンク髪巨乳ってだけで既に萌え豚ホイホイだっつーのに、紺ブルマとかどんだけ萌え豚相手の身売り志望なんだよこいつは。
上は長袖白ジャージでギャップ萌えってか？
あからさまにファスナー下ろしたりすんだろ？
んで、兎耳で人外＆ａｍｐ;家畜キャラってか？
まぁいい。問題は俺の個人的苛立ちじゃねぇ。
奴が何者かって事だ。
新世界の神とか何とか言ってるが、カタル・ティゾルともなると一概に厨二病だのイカレだのとは言い切れねぇんだよな……）」

一同と少女との拮抗状態は尚も続く。

「……ラクラ……なのですか？」

その場の沈黙を破ったのは、クェインであった。
対する少女は、無表情のまま頷き返す。

桃李は驚愕し、言葉を失った。
仲間の身に未知の変異が起これば、大体は驚くものである。

続いて口を開いたのは、ラクラと死闘を演じたニコラであった。

「へへぇ、あの馬鹿兎が随分と様変わりしたもんだねぇ！
オカマ掘られたショックかい？それで女子力（笑）とやらを上げて、
それで私を殺そうって！？

甘いんだよ糞餓鬼め！
あんたが何処で何をどうしたかなんて知らないし知りたくもないん
だけどねぇ、このニコラ・フォックスを、一ヴァーミンの有資格者
を、その程度の浅知恵で始末しようなんて、考えた時点で負け確定
なんだよっ！
第一、私の息の根を止めたとしてそこからどうするつもりだい！？
あんたら如き、本気のこの二人にゃ手も足も出ないだろうさ！」

妙に感情的なニコラだったが、彼女は次の瞬間、突如ラクラの背後
に現れた巨大な右手に叩き潰される。

続けてラクラが言う。

「……野狐にもなれない三流害獣如きが偉そうに……。
愛と快楽に満ち溢れし我が新世界完成の暁には、こういった屑は即
刻排除せねばなるまい……」

その物言いは、以前のラクラとは全く違うものであった。

「ラクラ、一体どうしてしまったのです？
フォックスに何をされたんですか？」
「そうですよＭｓ。
一体何の真似で――
「黙れ能無し共！
我は女神パイオ・マンマンの加護を受け、隠された真の己に気づき、
目覚める事が出来たのだ！

神は言われた！
『その力を以て世を犯し愛と快楽に満たされし神の御国とせよ』と！
そしてまた、神はこうも言われた！
『能無しの同胞など最早不要であり、切り捨てる他無し。神の御国は汝のみの支配によってこそ完成する』と！」

「パイオ・マンマン？」
「クブス始祖であらせられる小夜子様を導きし女神さえも知らぬとは、能無しの面汚しめ！」
「お待ちなさいラクラ！
小夜子様を導いた女神の名はファウヌーラです。
パイオ・マンマン等というふざけた名では――
「くどい！」ラクラの背後から現れた巨大な右手は、ニコラに続いてクェインまでも叩き潰してしまった。

「Ｍｒッ！」
ショックの余り桃李が叫ぶ。
ラクラの平手は、クェインの頭蓋骨まで悉く破壊しており、遠目からそれを悟った羽辰も叫ぶ。

『Ｍｓ．アスリン！
貴女は自分が何をしたかお分かりなのですかっ！？』
「愚問だな。能無しのゴミ一つ、処分してやっただけだ」
「それはつまり、我々兄妹をも敵と見なし、絶縁するという意味合いですね？」
「その通りだ。我が新世界に無能は不要。
支配者は、このラクラ・アスリン只一人！
私こそが法であるべきなのだ！」
声高らかに叫ぶラクラを尻目に、繁は桃李に小声で提案する。

「なぁ、小樽のご兄妹よう」
「何です？」
「ここは一つ、一時休戦としようや。
仲間になれだの仕えろだの、そんなややこしい事は言わねぇからよ」
『休戦、ですか？』
「そうさ。クェインとか言う流体種が死に、あの馬鹿兎も俺らとアンタらを殺す気満々と来りゃ、ここは一先ず一時的にでも結託して、だ」
「奴を始末すべきであると、そういう訳ですか」
「そうだ。実を言うと、俺らは東ゾイロスの理事長から莫大な額の報酬で雇われてんだ。
だからある程度なら分け前をくれてやる。
どうだ？」
『そんな、お金なんて結構ですよ』
「そうですよ。こう見えても私達、食い淵や遊ぶ金には困ってませんし」
「まじか」
「そうと決まれば早速作戦会議だね。
三人とも、ついて来て。

あとニコラさん、あの馬鹿一丁前に何か始めてるから死んだフリとか意味ないと思うよ」
「あら、そう？」

こうして五人は、香織の用意した異空間で作戦会議を開始した。

―臨時作戦会議室―

「さて、それで今の状況だが」
「良くも無く、悪くも無いって感じだね」
「奴は何をするか全く予測不能。但しこちらに手を出して来る事は有り得ない。
何せ認知出来ないからねぇ」
一同は頭を捻る。
「しかもあの『謎の巨大平手』が問題なんですよね」
『詳細情報も一切不明ですからね』
「なんにせよ、世の中打開策の無ぇ状況なぞそう無ぇ。
ましてやあの馬鹿兎なら――……？」
ふと、固まる繁。
「あれ？どうしたの？」
香織の問いに答えるように、繁は外部を一方的に見渡せる窓を指差した。
「窓の外……？」
言われるがままに外を見た一同は、驚愕の余り言葉を失った。
窓の外、荒れ果てた校舎の中に見えたのは、身につけている物共々加速度的に巨大化を続けるラクラの姿だった。
その光景を目にした香織、思わず呟く。
「これはひどい……かなり馬鹿げてる」

第三十七話　社会的に死んでまでこんな奴に仕えてたなんて（後書き）

謎の少女の正体は、裏切りを決行したラクラだった！？
次回、巨大化したラクラに繁達が挑む！

第三十八話　痴女巨人と策を練る六人（前書き）

六人の逆襲が今始まる！

第三十八話　痴女巨人と策を練る六人

―前回より―

「さて」

ラクラの巨大化が止まった所を節目と見て外部へ繰り出した五人。

その中で最初に話を切り出したのは繁で、流れから自動的にリーダー扱いされている身としても何か言っておきたいのだろう。

「動物が巨大化する事で得られるメリットについてわかる者は、挙手を」

真っ先に手を挙げたのは香織だった。

「はい」

「よし、清水」

「補食動物等の外敵から襲われる危険が下がり、仮に襲われたとしても撃退が容易になります」

「そうだな。では他に何か、解る者は？」

続いて手を挙げたのは、ニコラ。

「はい」

「よしフォックス。言ってみろ」

「気候変動等、環境の変化への耐性や病原体・寄生虫等への抵抗力や免疫力が上がります」

「そうだな。よし次」

次に手を挙げたのは桃李である。

「はい」

「よっしゃ。小樽妹」

「前二人の述べた理由もあり、寿命が延びます」

「そうだな。よし、次」

『では』
妹に続いて羽辰も手を挙げる。
「よし、小樽兄」
『身体の体積に対して表面積が小さくなるため、体温が下がりにくくなり極地での活動も容易になるでしょう』
「全く持ってその通り。
さて。そこで、だ」
繁は依然微動だにしないラクラを見つつ言う。
「ここまでで皆が言及してくれた事柄の逆を突けば奴を効率的に始末出来ると、俺はそう思う訳だよ」
「確かに、寧ろそうすべきですらあるよね」
「そうだろ？
だから俺は考えた。大きさというアドバンテージをディスアドバンテージに変えちまえば良い。
要約すれば、奴の体温を徹底的に上げて熱中症にし、動きを鈍らせちまえばいい」
「成る程。確かに巨大で馬鹿な恒温動物相手でしたら、これ以上無く素晴らしい名案ですね」
「差し当たり、少々準備が要る。
なるべく迅速に進めたい所だが――
ズドゴァン！
凄まじい音と共に、巨大な質量を持った物体が校舎を貫いた。
物体の正体とはつまるところ、巨大化したラクラの右足であった。
有り得る可能性は二つに一つ。

移動を始めたか、一行を踏み潰さんとしたか。
どちらにせよ、繁達にとって都合の悪い事態である事に変わりは無い。

「よし、作戦開始。
桃李、コックローチの温度操作に制約や法則性はあるか？」
「射程距離は３０ｍが限度ですが、ローチスリックを媒介にする場合距離は問題ありません」
「良し。んじゃ羽辰よ、お前さん妹から完全に分離出来るか？」
「破殻化前なら可能ですが」
「制限時間は？」
「状況にもよりますが、浮遊状態でなら少なくとも５０分は確実でしょうね」
「浮遊状態での飛行速度と範囲は？」
「破殻化した桃李に匹敵します」
「良し。んじゃ次、ニコラ。
お前には少し特殊な役割を任せる」
「特殊？」
「そうだ。医学博士として、開業医としての腕と知識が必要だ。
奴の主要な動脈の位置を特定し、可能なら図示してくれ」
「あいさ。しかし図示か……そうなると紙と筆記用具と台座が要るのよねん」
「なら心配するな。筆記用具は俺のペンを使え。
紙ならさっき理解準備室からくすねて来た霊長種の人体図鑑がある。
台座は……こいつで足りるか？」
繁は破壊された引き戸の残骸を指差し言った。
頷くニコラ。

「よっしゃ。んでラストは香織」
「待ってました」

「この状況下だが例のコンボは行けるか？」
「例の……あぁ、前に話してた奴？
愚問だねぇ、この状況下であれ程度出来ずに今の繁の従姉妹なんて名乗れないよ」「心強いな。
良し、行動開始だ。各自配置に着こうぜ。

ニコラ、動脈の配置図示を可能な限り手早く――
「もう終わってるけど？」
――流石開業医、仕事先が早いな。
と、言う訳で桃李。
その図を元に奴の主要な動脈のある部位に油を挿してやれ。挿し終えたら地上に戻り、安全地帯でそこの温度を風呂の湯かカイロ程度を目安に上げて維持してくれ。
羽辰は桃李が温度操作をしている最中、奴の気を逸らしつつ可能なら攻撃を頼む。あとニコラもな。
何、相手をイラつかせりゃ良いんだ」
「解りました」
『了解です』
「お任せあれ」
「んで香織、例の奴行けるんなら話は早い。
桃李や羽辰やニコラに当たんねぇ様に例の奴を維持し続けてくれ」
「あいよ」

各自与えられた役目に移る中、指揮を取った繁自身もまた羽辰に加勢する形で作戦に参加する。

「待ってろ厨二病ビッチ馬鹿兎。
兎が如何に崇高な生き物か、俺が教育してやる」

飛び立つ繁の脳裏に浮かんで居たのは、未だ生後間もなくつたない

言葉しか話せない、幼い雄のスマトラウサギ。
何でそんなもんが思い浮かんだのか、厳密に説明できるものはおそらくこの場に居ない。
もしかしたら繁本人にも説明がつかないのかもしれない。

そしてまた、戦闘の勃発が昼飯前の時刻ということもあり、東ゾイロス高等学校に向けられる衆人の視線もすさまじいものであった。
繁側の会話文は音声回路に施された香織の魔術でどうにか誤魔化せていたが、流石に敵が巨大化するとは誰も想定していない。
桃李と羽辰に至っては、まさか見方だと思っていたラクラが裏切ったばかりか、その背景には自分はおろかクェインさえも知らない、馬鹿っぽい名前の女神が居るというのだから、益々予想外だった筈である。
更にその姿までも大幅に変わっているとあっては、もうやっていられない。

しかしそれでも「どんなに努力しても受け入れるしかない運命だってたまにはある」という、何所の誰が残したとも知らない言葉を胸に、五人は戦う。
眼前の、身長３０ｍにまで巨大化した低脳ビッチを打ち倒すため、全力を賭すのである。

第三十八話　痴女巨人と策を練る六人（後書き）

次回、破殻化繁が空に舞う！

第三十九話　Ｒ－１５Ｇ（前書き）

作戦開始！シーズン２も遂にクライマックス！

第三十九話　Ｒ－１５Ｇ

―前回より―

主要な動脈の通る部位を的確に熱する桃李の手によって、ラクラの体温は急激に上がっていた。
そもそも気候の安定した温帯域にあるラビーレマとは言え、カタル・ティゾルももう五月下旬。
快晴ね昼間、それも遮蔽物の無い場所に厚着して立っていれば、嫌でも暑くなるだろう。
それが筋肉質な身長３０ｍの巨人であれば尚更である。

更にそこへ追い打ちをかけるのは、繁・ニコラ・羽辰による挑発と、地の利を活用した香織の魔術コンボ。
香織の魔術コンボは、
・空中に物体を浮遊させるもの
・鏡の様な物体を召喚するもの
・光の角度や流れを読むもの
・物体にある程度の破壊耐性を付加するもの
等という複数の魔術を併合したものであり、日光を反射しラクラの体温を上げる目的があった。
更に多方面から反射される日光はラクラの視覚にも凄まじいダメージを与えるに至っていた。

―上空―

「おいどうした馬鹿兎っ！？
動作が手に取るように丸解りだぞ！」
「はぁ……っぁ……う、五月蝿い五月蝿い五月蝿い五月蝿いっ、五

月蝿ぁぁぁぁぁぁぃっ！
潰ししてやる……お前なんか、私が粉々に叩き潰してやーんぅっ！」
強気に言い放つつもりが、実に無駄に艶っぽい声を上げて怯むラクラ。

見れば彼女の両胸はいびつに波打っている。
まるで透明な巨人がラクラの胸を揉みしだいているようだったが、
良く見ればそれはニコラの放つ蛾型弾幕だった。
気になった繁が向かってみれば、ラクラの背後には巨大な蛾が浮いていた。

蛾の体毛は主にクリーム色と白であり、細長い人間の腕を思わせる節足を持っていた。
更にその頭は狐のそれに似ており、腹部は狐の尾に似る始末。
ここまで来れば、この蛾が何者であるかお分かり頂けると思う。

第三のヴァーミンを持つ元女医、ニコラ・フォックスである。

破殻化は、有資格者の姿を大きく変える。
しかしその姿が、必ずしもヒューマノイド型であるとは限らない。
その姿は総じて、象徴である生物種を元にした巨大で得体の知れない化け物である。
しかしその形態には、何処か有資格者の元々の種族としての形質を持ち合わせている。
桃李や繁の破殻化した姿がヒューマノイド型であるのは、二人の種族が霊長種だからであるという理由が大きかった。
そしてそれ故、幾ら霊長種寄りとは言え曲がりなりにも狐系禽獣種のニコラは、「狐の様な姿をした巨大な金色の蛾」という姿を取るのである。

繁は早速ニコラに話し掛ける。
「よう、ニコラ」
「あ、繁。どうしたの？」
「どうしたの？じゃねえわ。何やってんだお前。馬鹿兎の挑発と撹乱はどうしたよ？」
「やーねぇ、ちゃんとやってるわよ。あの馬鹿兎撹乱するついでに不快指数と体温も上げて、尚且つ近頃の『女の子がいっぱい出て来るライトノベル』のお約束もしっかり守ってるんじゃないの」
「お約束って何だ。アレか。猿みてぇな間抜け面の変態怪盗が物欲で生きてる雌豚（肉付き的な意味で）に襲いかかったら十割型首折られて死ぬとかそんなんか」
「まぁ大体あってるけど繁ってあのシリーズ嫌いなの？」
「いや、ある程度見るぐらいには好きだが」
「じゃあ何なのよさっきの言い方……」
「伏せ表現が他に思い付かなかった。それで、お約束ってのは？」
「アレよほら。『巨乳は同性に乳揉まれて喘ぐ』って奴。天然の動物耳&

「一応回復もある」
「マジか」
「私自身不老不死だし、繁も香織も只じゃ死ななさそうだから使う機会多分無いけど」
「いや使え。使ってくれ。これから戦闘が激化したらわりと高頻度で死に掛けると思うから俺ら。

つか、羽辰は？」
「羽辰？羽辰なら下の方で馬鹿兎の尻突き回してるけど」
「妹の手前何やってんだあの似非輝美結城は……」

呆れた繁が目を見やると、羽辰は何故かラクラの腰へ執拗に攻撃を加えていた。
しかも、ナイフらしきものを握っているのに血液らしきものは一滴も出ていない。

何かがおかしい、と思って接近してみれば、羽辰がナイフで切ろうとしているのはラクラの履いているブルマのゴムであるようだった。
しかもどうやら、ご丁寧にブルマのゴムだけを切ろうとしている。

「（まぁ、あれはあれで羽辰なりには頑張ってるんだろうし、応援しとくか）」

そう思った繁が飛び去ろうとした、その時。

ブヂッ！

鈍い音を立てて、何かが千切れた。

「ゴゲフッ！」

続いて響くのは、これまた鈍い羽辰の声。顔面か腹を強打したのだろう。

バサぁ

更に、布のようなものが落下しそうになり、

「―っやんっ!?」

無駄に可愛らしいような、ラクラの悲鳴が響く。

ふと繁が下を見れば、片側だけゴムの切れたブルマの前を押さえつけるラクラと、何らかの衝撃で吹き飛ばされたのか、上半身が近くにあったビルの壁にめり込む羽辰。

「（あの馬鹿ビッチ、羞恥心なんてあったのかッ!?）」

繁は心底驚愕した。これでもかという程に驚愕した。

ニコラの話を聞くに、ラクラ・アスリンとは生まれながらにクブスの女であり、それ故に羞恥心などかなぐり捨てているのではなかったか。

しかも、である。

暑さ故に意識が朦朧としているのか尻を押さえるのを忘れており、そのせいで尻が丸出しである。

「（三十九話にしてパンチラたぁ、らしくねぇなぁ作者よ）」

我ながらしくない事をしたとは思ってるよ。

「（反省は?）」

しない。一応これC指定してるし。
実際はDだろうけど。
「（色についての描写・言及は？）」
勿論しない。そもそも需要無いだろ。
というか、さっさとやっちまいなよ。主人公らしく、名前つきの必殺技でもぶちかましてやりな。
「（おう。言われるまでも無く殺ってやらァ）」

繁は空中で姿勢を整え、試しに漫画でよくあるような『虚空から武器を掴み所る』ように動いてみる。
すると次の瞬間、繁は両手の甲から何かが生えるのを感じる。

見れば彼の両手の甲からは、鋭い刃のような鈎爪が生えていた。
それはまるで、繁の愛用武器である篭手が破殻化した彼の体組織と化したようでもあった。

「（成る程、中々面白いギミックじゃねぇの。
イメージとは違うが、これもまた良い。

さて、こいつで一丁派手に殺るか）」

繁は滞空したまま、必殺技を考え始めた。

第三十九話　Ｒ－１５Ｇ（後書き）

次回、巨大化ラクラに繁の必殺技が炸裂！
そしてあの謎も明らかに……？

第四十話　きじょ？きじょ！（前書き）

繁さーん、必殺技考え終わりましたー？

第四十話　きじょ？きじょ！

―前回より―
繁は瞬時に必殺技を思い付いた。
「（最早こいつで行くしか手はねぇ！）」

繁は独自の構えを取り、猛スピードでラクラへ向かう。
それを悟ったラクラは慌てて右手でたたき落とそうとするが、飛ぶ繁は溶解液で巨大な手の平をも、まるでそれが存在しないが如くに通過する。
激痛に顔をしかめるラクラは、思わず股間から手を離していた事に気付き、ブルマをも失い更に惨めな姿になった事からの恥辱で更に赤面、思わず泣き出しそうになる。
というか、公衆の面前に醜態と下着を晒す羽目になったラクラは、既に涙目になりつつある。

しばしば、涙は女の武器であると言う。

諸説あろうが、大方都合が悪くなったらとにかく泣いておけば周囲が味方になってくれて、結局事は自分に都合良く進むという意味合いだろうと作者は推測する。
（そして恐らく、そんな真似を好んでするはさぞ人間性が無く低俗な女であろうとも作者は推測する）
女に限らず、目の前で他人に泣かれると躊躇いが生じるのは、人として当然であろう。

しかしながら、カタル・ティゾルに来る前から繁の人としての基軸に大きなブレが生じている事は読者諸君もよくご存知かと思う。
そしてそんな繁を前にして「女の武器」なる概念は、当然全く意味

を為さない。

かくして繁の猛攻が、ラクラの涙程度で止まる筈も無い。

繁はそのままラクラの首筋を幾重にも切り結び、噴水のように勢い良く吹き出る鮮血と、その持ち主が苦しみ悶える姿を尻目に巨大痴女の頭上へ舞い上がる。

繁はそのまま遥か上空で位置を見計らい、手頃な所で口吻から勢い良く溶解液を吐くと同時に空中で一回転。
瞬時に溶解液噴霧を止めて体勢を立て直す。

細い糸となった溶解液はラクラの巨体を中心線で真っ二つに切り裂く。
この一撃で既に出血多量に陥り、加えて脳組織を破壊されたラクラは絶命に至った。
しかし、ここで終わらせる繁ではない。

立て続けに繰り出された溶解液は空中で箱型に変形。
垂直に落下する溶解液の膜はラクラの骨だけを残し、その他を悉く溶かし尽くす。
更に箱型溶解液の二発目が崩壊寸前の白骨を消し去る。

「碧細縄（へきさいじょう）、緑鉛二段柩（りょくえんにだんきゅう）」

等と技の名を言ってみた繁であったが、その名は場の勢いで付けたものだった（つまり、後々変更される可能性が高いという事）。

何はともあれ、こうして東ゾイロス高校で多発していた謎の殺人事件は幕を閉じた。

繁達は一先ず予め録音しておいた音声を流し、小樽兄妹と別れて一度ラビーレマを去った。
後日、報告と謝罪を兼ねて東ゾイロスの理事長・緒方の元へクリムゾンを送り込んだ繁だったが、緒方の言葉は三人にとって予想外のものであった。

―後日・ラビーレマ某所―

『と、言うわけでございまして……事件そのものは解決したのですが、校舎はあのとおり散々な有様でして……』
「そうでしたか……でも安心しましたよ」
『安心、ですと？』
「はい。だって、スタッフの皆様は全員ご無事なのでしょう？」
『えぇ。それはもう、ただでは死にませんから』
「なら良いんです。
お話を聞く限りでは、主犯格の二人も退治出来たそうですし」
『しかし、よろしいので？
彼は事件解決に際して、校舎を破壊してしまった事を酷く気に病んでいるのですが』
「構いませんよ。元よりあの校舎は大部分を取り壊して立て直す予定だったんです。
それに、そんな些細な事を気にしていたのでは、あんな規模の学校で理事長なんてやって居られません」

理事長から許され、更に約束通りの報酬を受け取った三人は心の底から安堵した。
全員が全員、多少の差こそ有れど理事長に文句を言われると思っていたからである。

そして今回得た報酬に適当な手紙を沿え、兆眼紫円陣で地球の信頼できる機関へ送り込む。

こうして、三人の企画は今回も無事成功を収めたのだった。

―事件解決より数日後・あるチャットルームにて―

軍神内藤［そんな事があったもんだから、俺としても気の抜けない事態になっててよ］

空舞椿［成る程。それは確かに恐ろしい……某は一応、小型の飛竜程度なら全裸に丸腰でも追い返す自身はあるが、お主のような状況なら二秒で逃げ出すぞ］

淫乱毒飯［あなたねぇ、それ自慢になってないわよ？］

夢私刑［嬢ちゃんのスッパなら興味あるが、流石にそれは逃げた方がいいぜ］

軍神内藤［おい、幾ら仲間内限定だからってチャットでセクハラは止せよ］

淫乱毒飯［まぁ、文字だけだとどうしても冷たく見えちゃうのよねぇ］

夢私刑［そうか……すまねえな、嬢ちゃん］

飛舞椿［いや何、気にするな］

――入室：侵略頭足類――

侵略頭足類［やぁみんな］

侵略頭足類［相変わらず楽しそうで何よりだよ］

飛舞椿［これはこれは、管理人殿］
夢私刑［おお、××の旦那じゃねぇすか］
淫乱毒飯［今日はどうしたんですの？］
軍神内藤［また何か、新発明の話か？］
侵略頭足類［いやぁ］
侵略頭足類［実を言うとホラ、この間ラビーレマでツジラジの生放送があったろう？］
軍神内藤［あぁ、あれか］
飛舞椿［あの番組、賛否両論あるでしょうが某は好きですね］
夢私刑［それで、ツジラジの生放送がどうかしたんで？］
侵略頭足類［その放送の途中、クブスの女が裏切ったろう？］
淫乱毒飯［ラクラ・アスリンって奴ね？］
夢私刑［正直クブスにゃロクな記憶がねーんだよな］
飛舞椿［確か、神の暗示で巨大化したんでしたっけ？
全く馬鹿馬鹿しい話です］
軍神内藤［……いや待て、何かオチが見えたぞ…］
飛舞椿［？］
軍神内藤［おい××、あのラクラって馬鹿唆して自滅させたの、お前だろ？］
飛舞椿［えっ］
淫乱毒飯［なにそれ］
夢私刑［こわい］
侵略頭足類［流石だね〇〇君。
確かに僕はあの馬鹿の夢に侵入し、奴に嘘の情報を掴ませ仲間殺しを行わせた］
軍神内藤［やっぱりか］
侵略頭足類［いやぁ、あの馬鹿が想像を遥かに絶する他に類を見ない無知無学の腐れ産廃ダッチワイフで助かったよ］
侵略頭足類［それにどんな馬鹿だって、他人に言われただけで仲間を殺すのに躊躇いを見せないなんて、頭おかしいんじゃないのかあ

のダッチワイフのゴミクズは。軍人や暗殺者でもあるまいし生意気なんだよ」

侵略頭足類「まぁ、そもそもクブスそのものがニートや汚職官僚も下回る社会ゴミの集まりなんだよね。連中なんてその程度のもんなんだよ」

侵略頭足類「調べた所ホリェサ・クェインはクブスの中では一般人相当の人格者だったんだけど、ラクラ・アスリンは下っ端も下っ端、最下位のクズでね。早急に駆除する必要性があったんだ」

侵略頭足類「その為に僕は奴の夢に入り、適当な薬を乱雑にぶち込んでやったのさ。結果的に種族・服装が変化し妙な能力も得たらしい。だが死んだ。当然だ。元よりクブスには救いなんて決して訪れないんだからね」

侵略頭足類「何より、あんな生物とも定義出来ないゴミは早急に駆除すべきでもある」

軍神内藤「何故だ？」

侵略頭足類「何故って、」

侵略頭足類「それはもう」

侵略頭足類「決まりきった事じゃないか」

夢私刑「どんなんで？」

侵略頭足類「恐ろしいからだよ」

飛舞椿「恐怖、ですか？」

侵略頭足類「そう。恐怖だよ。こう言うのは女性に対して失礼かも知れないが」

淫乱毒飯「別に良いわよ」

侵略頭足類「なんというか、こういう極端な事はあまり言いたくないんだけど、女性というのは、種に関わらず総じて恐るべき存在だろう？

あのクズだって曲がりなりにも雌だったんだ。用心に越したことは無いさ。

ああ、女性とはかくも

蟷螂のようであり、
蜘蛛のようであり、
蜂のようであり……

いやぁ、身の毛もよだつ恐ろしさだよ」

第四十話　きじょ？きじょ！（後書き）

次回、シーズン3がスタート！

第四十一話　さんどおーしゃん☆しっぷす（前書き）

第三シーズン遂にスタート！
次の舞台となるのは、義理人情の根付く砂漠の軍事主義文化圏・イスキュロン！

第四十一話　さんどおーしゃん☆しっぷす

―前回より―

次なる便りからイスキュロンへ向かった三人は、港街で別行動を取っていた。

というのも、このイスキュロンという大陸、ノモシアやラビーレマとは勝手が違う。

乾燥帯の軍事主義社会という表現こそ簡単だが、大国デザルテリアを始めとする主要諸国を除いた大陸の殆どは粒子の極めて細かい砂からなる砂漠で成り立っている。

この砂はまるで液体のようであり温度も高い為、並大抵の生物に歩行を許さなかった。

そこで砂漠のオアシスを拠点とする原始イスキュロン民は、海上の小島が如し隔離のされたオアシス間を移動するため、砂上船という船による独自の移動手段を確立させた。

動力も人力や風力の他、砂中に棲息する動物を飼い馴らしたものから、学術や魔術に起因するものへと変化していった。

時代が進みノモシアやラビーレマを始めとする他の文化圏との交易が始まるにつれてそうした傾向はより強まり、同時に大陸そのものも高度な文明を持ち、独自の崇高な哲学と国民の性質を重んじる思想を根底に据えた軍事主義社会へと成長を遂げていた。

現時点で三人がそれぞれ担当する事柄をまとめると、以下のとおりとなる。

ニコラ：移動先での宿泊施設等の確保。今回はかなりの長期戦が予想される為、安価かつ上質な宿の確保が望まれる。

香織：目的地へ向かうための砂上客船と航路情報の確保。生憎メンバー内に砂上船の運転免許を持っている者は居らず、安易に他の方法で移動するのも躊躇われる為、宿同様安価で性能やサービスの安定したもの。
繁：届いた便りの中から、今回放送分で読み上げるものの選定。及び目的地や中継地点に関する情報の確保の他、全体的な活動計画の調整等、全面的な雑用を担当。

この内、仕事が思いのほか速く終わったニコラは早急に繁と合流。仕事を手伝いながら適当な雑談に興じていた。

「それで、今回は何所に行くんだっけ？」
「香織が戻ってきたら色々と買い揃えて、１４時には砂上客船でデザルテリアを目指す。
遅くて明日の夕方には首都ゴーヴィーで買い物と情報補完だな」
「そういえば今回、長旅にしてはやけに荷物減らしたよね。まぁその分手持ち軽くて助かるんだけど、何で？」
「何でってお前、今回は現場の気候が圧倒的に違うんだぞ？
俺らで用意出来る備品はどれも亜寒帯・温帯での使用を考慮されてた。大学のフィールドワークで砂丘になら行ったが、正直砂漠地帯なんて人生で初めてだ。
ネットやハウツー本で情報集めるにしても少しのしくじりが大惨事に繋がらないとは言い切れんだろうが」
「香織ちゃんの魔術でガードしてもらえば？」
「それも出来ない事は無いが、出来れば奴には魔力や体力の消費を抑えていて欲しい。
俺達はまだヴァーミンの有資格者だが、香織はただの人間だ。もしかしたら環境に耐え切れず体調を崩したり、毒蛇毒虫の類にやられんとも限らんだろうが。
そう考えると、現地で乾燥帯での使用を想定して設計された装備や

食料を購入したほうが、安全性は高い」
「なるほど。７０年以上生きてる私でもそこまでは知恵が回らなかったよ」
「しゃあねえしゃあねえ。俺みたいなガキは無駄なところで頭が回ったりするんだよ。
……っと、香織の奴も戻って来てんな」
「暑いのに普段着でよく走れるよねあの子。しかもあんな笑顔維持したまま」
「昔からそうだったんだよ、あいつは。何か無駄なところで生命力高くてな」

駆け寄って来た香織は、何故か汗をかいた様子が全く見えなかった。

「お待たせ～。船の方確保してきたよ～」
「おう、お疲れさん」
「おっつ～」
「いやぁ、大変だったよ。
値段関係なく何処も予約一杯でさ。
でも一つ、凄く頑丈な最新型なのにガラガラの船があってね。
受付で聞いたら管轄じゃないって言われて、試しに乗組員の人に聞いてみたら無料で乗せてってくれるって」
「おい、それ違法な船じゃねぇのか？
賊とか密猟者とか」
「マフィアとか環境右翼とか、カルト系じゃないの？」
「私も気になって近くの警備隊詰め所で聞いてみたんだけど、街興しの為に組織された民間団体なんだってよ」
「民間団体？」
「そ。砂の海に眠る希少な鉱物資源を採取するのが目的みたい」
「鉱物ねぇ……そんなもん、ヤムタやラビーレマの奴らが採り尽くしてそうなもんだが」

「それで、その団体の名前は？」
「確か、『デゼルト・オルカ』だった筈。
丁度２時半頃から船を出して採掘に向かうから、それを手伝ってくれるなら無料で乗せてってくれるって」
「成る程。つまりツルハシ振り回したり、猫車押したりすればいいのね」
「現場の警備とか、負傷者の救護とかな。
この辺りは砂の海に適応した動物が多くて、肉食性の奴は人喰いもザラだっつうし」
「いよっし、それじゃ決まりだね。
出港はさっき言った通り１４時半頃だから、それまではゆっくり出来るよ」
「んじゃ早速、色々買い揃えに行くか。
幾ら鉱物採取だろうとこんな装備じゃ、色々と不便だろうしな。
軽いのだけでも持って行く価値はあるだろうよ」

かくして準備を済ませた繁達は、民間団体デゼルト・オルカの砂上船に乗り込んだ。「んじゃ早速、色々買い揃えに行くか。
幾ら鉱物採取だろうとこんな装備じゃ、色々と不便だろうしな。
軽いのだけでも持って行く価値はあるだろうよ」

かくして準備を済ませた繁達は、民間団体デゼルト・オルカの砂上船に乗り込んだ。

第四十一話　さんどおーしゃん☆しっぷす（後書き）

次回、デゼルト・オルカの船で繁達を待つ者とは！？

第四十二話　巨人を倒した以前、巨獣に挑む今回（前書き）

船に乗り込んだ三人を待ち受けるのは……

第四十二話　巨人を倒した以前、巨獣に挑む今回

―前回より―

民間団体デゼルト・オルカの砂上船ミガサ・コルト号は、イスキュロンの広大な砂漠地帯を進んでいた。
ちなみに『ミガサ・コルト』とは、シーズン1冒頭で言及された神話に於ける雷電と戦いの女神である。
地域によっては、悪霊から神性にまで昇格したアクセレタルと並んで学術の祖とされたり、無数の眷属が居たともされる。
世界各地に残る数々の武勇伝故にトゥマージョーに匹敵する人気を誇り、彼女を主役とした外伝が見つかる等、古代から優遇されていたともされる。
また、宗派によってはインディクリストに代わりトゥマージョーの妻になったともされ、現にミガサ・コルトがトゥマージョーに好意を抱いているという記述はこの神話の伝わる全ての地に存在する（但しミガサ・コルトは勇敢で義を重んじる恐れ知らずである半面極度の照れ屋であったともされ、この他様々な理由からトゥマージョーにその好意が伝わったという記述は極めて少ない）。
この他にもトゥマージョーの女性関係については諸説あるため、この件についてはしばしば論争が起こる。

しかしそもそもトゥマージョーは神話の中で種族や派閥を問わず様々な女性から好意を寄せられており、その全てを妻とし六大陸全ての人民の父となったという記述も一部地域に残っているため、正直なところ真相は定かでない。

「いやしかし、すみませんねぇ。
お忙しい中わざわざ運んで頂いて」

「謙遜しなくたって良いのよ。丁度私らも収穫を一度向こうに持って行かにゃならんでね」

甲板で繁と語らうのは、ミガサ・コルト号船長兼デゼルト・オルカ団長の八坂逢天（やさかほうてん）。

彼は屈強な体つきの面々を率いるにしては些か細身な多眼系霊長種であった。

「短い間とは思いますがお世話になります。

それで、件の鉱物採掘とやらはいつ頃始まるんでしょう？」

「いつ頃って言われると困んのよねー。

何せ向こうも変則的だからさぁ」

「変則的……やはり砂漠の鉱山ともなると、ある種の岩場のように不規則に浮沈を繰り返すのでしょうか？」

「まぁ確かに、浮沈を繰り返すって言えばそうなんだけどもね？

ただ何て言うか、鉱山とは――「船長ォ！レーダーに反応ありやしたァ！」

逢天の言葉を遮るようにして、船室内の乗組員が叫ぶ。

「来たか……距離と座標を割り出して船内放送かけな！

他の奴は配置につくんだ！」

「何事です？敵襲ですか？」

「敵襲てのもあながち間違いじゃないけど違うねぇ。

寧ろこれは”標的”さ」

「標的？それは一体どういった意味合いで――！？」

ふと、突然暗くなった空を見上げた繁は、絶句した。

弧を描いて頭上に舞い上がる、巨大な質量。
太い筒型をしたそれの姿を言い表すならば、さしずめ「平たく短い手足を持ったナマズ」とでも言えば良いのか。
ともかくその生物らしき存在を目の当たりにした繁は、言葉を失った。

そこへ更に、酷く取り乱した様子の香織とニコラが駆け寄ってくる。
二人もまた、反応こそ異なれど、繁と同じ事を思っているのだろう。

最早騒ぐ気力さえ失った繁は、か細い声で逢天に問う。

「船長、あれは一体何者です？」
「何者ってあんた、あれが目当てで私達は船出してるんじゃないか」
「しかし船長、この船は鉱物資源の採掘を目的としたものですよね！？」
「そうさ」
「船に備わった数多の武装は、あくまで船を護る為のものでしょう？」
「まぁ、それもある意味正解かな」
「ある意味？ある意味ってどういう意味ですか！？」
「ある意味はある意味。そういう意味合いも含むって事だよ」
「……それは、つまり……」
「そう、私達は狩るのさ。あのでかぶつ―ヤマホフリをね」
「……ヤマホフリ？」
「そう。まぁその名前は俗称で、正式にはテイオウスナハンザキって言うんだけど」
「スナハンザキ！？あんな巨大なスナハンザキが居るんですかっ！？」

スナハンザキとは、イスキュロンの砂漠地帯に適応した有尾類（イ

モリを始めとする尾を持つ両生類）の一種である。
オアシスや地下水脈でオタマジャクシとして育ち、以降大部分の種が繁殖を除き生涯を砂中で過ごす。
生態系では海洋で言う肉食性の小型回遊魚や海鳥に該当し、砂中または砂上の小動物を捕食。
砂中生活を送る為殆どの種は目が退化したが、半面聴覚と嗅覚が発達している。
美味である肉は食材として、骨や皮は工芸品の素材として重宝され、ある先住部族にはスナハンザキの捕獲・加工とその指導を専門とする役職があった程らしい。

スナハンザキについては繁もよく知っていた。

しかし、このサイズは反則なのではないか。

繁は心底そう思っていた。
身長３０ｍに巨大化したラクラを相手にしたお前が言うなと思われる読者も居るだろうが、考えてもみて欲しい。
身長３０ｍのセックスにしか頭の回らない巨人と、全長がヒゲクジラ程もある遙か昔から砂漠に順応してきた規格外に巨大な両生類。
この二つを、果たして同格と見なせるだろうかと。

読者諸君が仮に何と言おうと、作者は断言する。

そんな事が、出来る筈はないと。

「居るよ。何故か年に一頭しか居ないんで、その他の活動時期はもっと小振りな奴をとっ捕まえたりしてるけどね。
奴は砂を丸呑みにして食い物だけを漉し取って食べるクジラみたいな奴さ。

だから奴の皮や腹の中には砂に混ざってる色々なもんが固まってでかい玉や岩になる。
玉は元より、岩だって職人が削ったり炉にかければ宝石や金属に早変わりだ。それ自体も希少だったりするから、学者なんかにも高く売れる」
「成る程。そういう事ですか」
繁はひとまず騒ぎ立てる香織とニコラを蹴り一発で黙らせ、逢天に問う。
「それで船長、我々は何をすればよろしいので？」
「そうさねぇ…そこな紅色髪の姉さん、あんた確か魔術師だったね？」
「えぇ、はい。
あ、でも純正攻撃系はからっきしですよ？」
繁の蹴りで正気を取り戻した香織が言う。
「変則攻撃系で構わないから、機銃班のサポートをしてくれるかい？あと出来れば永続効果付与や回復も」
「お任せ下さい」
「あと白衣着た狐の姉さん」
「はいはい」
「あんた医者なんだろう？
だったら負傷した奴らの救護を頼むよ」
「解りました」

「船長、私は何をしましょう？
一応白兵戦の心得はありますし、残骸目当てに寄ってくる甲虫やスナハゼの駆逐ぐらいなら出来ますが」
「いやぁ、あんたにはもっとでかい仕事が似合うだろう」
そう言って逢天は、船の床下に備わった倉庫から何かを取ってきて繁に手渡す。
「これは一体？」

手渡された物体は、全長１．５ｍ程の少し太い槍に見えた。
「槍さ」
「それは解ります。しかし何故これを私に？」
「あんたに似合うと思ったんだよ。というのは、実を言うとそれはいわくつきの品でね。
誰が持ち込んだとも知れないのに、何時からか倉庫にあって、誰にも振るう事を許さないのさ」
「……そんなものが…」
「振るおうとすればまるで自我があるみたいに突然暴れ出す。
でも磨いたり持ち運ぶ分には問題ない。
気になってノモシアの鑑定士数人に見せたら、これは並大抵の者に扱える品ではないそうでね」
「ほう」
「鑑定士によれば、直感ではっきりそうだと感じる男に譲り、巨獣の背に登らせろとか何とか」
「成る程……つまり、アレですか？」
「何だい？」
「私にこの槍を持ってあのテイオウスナハンザキに挑めと、そういう事ですか！？」
「有り体に言えばそうなるかな。
大丈夫さ。私が管制室から指示出すから」
「いやそういう問題ではありませんよ！
急過ぎるでしょうに！」
「ああ、鑑定士の予言通りだわ。
確か次にあんたは、
『……仕方ない。やってみましょうかね』と言う」
「……仕方ない。やってみましょうかね――ッ！？」
逢天の先読み通りの言葉を口にしてしまった繁はまたも絶句する。
「お次はこうさ。
『でも過度の期待は禁物ですよ？私臆病ですし』」

「でも過度の期待は禁物ですよ？私臆病ですし――……またか」
「さて、お遊びはここまでよ。もうそろそろ奴が船に近付いてくる筈さ。
そうなればいよいよあんたの出番さね。
何、手筈通りにこなせば良いんだ。怖がらなくたっていい」

そうこうしている内に、テイオウスナハンザキは船へ近付きつつあった。

第四十二話　巨人を倒した以前、巨獣に挑む今回（後書き）

次回、テイオウスナハンザキ相手に善戦する繁にまさかの危機！？

第四十三話　だから私は彼を信じたい（前書き）

大砂漠の激戦！

第四十三話　だから私は彼を信じたい

―前回より―

砂の海を舞台にした人と獣との戦いは第二段階へと突入していた。
それまで船上から遠距離攻撃を行っていた機銃班・砲撃班・魔術班を下がらせ、船に接近してきたテイオウスナハンザキの背目掛けて近接班と採掘班が飛び乗っていく。

近接班がおのおのの武器でテイオウスナハンザキを攻撃し、その隙に採掘班は外皮に発生した岩石や透き通った塊を採取していく。
それら「砂漠の鉱物資源」の産出場所は、例えば体の表面であったり、外皮と化した砂岩の中であったりする。

砂岩からなる硬い外皮を鈍器で打ち割り引きはがすと、スナハンザキ本来の強靭かつ柔軟な皮膚が露出する。
変態に伴って発生する砂岩の外皮は繊維質の粘液により固定され、以降成長するにつれて発生する隙間を新たなる砂と粘液が補うように形成される。
しかしその内部には両生類特有の柔肌が未だに残されており、ゴムの様な弾力と強度を誇ってこそいたが、乾燥と刃物には滅法弱いのであった。

「せェア！ッラぁ！ウェイォアッ！」

近接班として背中に乗る繁もまた、先程の攻撃で砂岩が砕けて露出したテイオウスナハンザキの柔肌十数箇所を不規則かつ的確に切り付けていた。
両手の鉤爪の素早さと槍の長いリーチを巧みに織り交ぜた連携に一

々無駄に軽快なステップが加わり、本来なら切り傷程度ものの数秒で完治してしまう筈の再生力が追い付いていなかった。
というのも、繁の溶解液がその再生を妨害していたからなのではあるが（しかも溶かし方がまた繁らしくて不快極まりない）。

暫く経ち、テイオウスナハンザキがその丸太型の身体を大きく縦にうねらせる。
幾人かは背中に貼り付いたり各々翼や飛行装置などで空中に逃げる事でどうにか逃げおおせるが、船員の殆どは砂の海に放り出されてしまう。

「アンカー射出！」
「間に合って！」
逢天の指示を受けた船員達が砂漠に落ちた近接班・採取班に向けて特殊な救助用アンカーを放ち、それらを手早く釣り上げる。
あぶれた何人かは香織の魔術で救い出され、結果的に死傷者は皆無であった。
逢天はすぐさまテイオウスナハンザキの動きが妙である事に感付き、船外の船員達に船へと戻るよう指示する。
繁もそれに続いて飛行装置で戻ろうとする（ヴァーミンの有資格者である事を明かすと不要なトラブルを招きそうで嫌だった為破殻化はしたくなかった）が、ほんの一瞬出遅れてしまう。
そして次の瞬間、テイオウスナハンザキの筋肉が素早く脈打ち、繁は空中高くへ跳ね上げられてしまう。

逢天が自ら救助用アンカーを放ち、香織が救助用の魔術を放った瞬間。

ヒゲクジラのように大きく砂中から跳び上がったテイオウスナハンザキの口が大きく開き、

繁を丸飲みにした。

「！！」

逢天他、船員達やニコラまでもが絶句する中、半ば無関心とも取れる表情を浮かべるのは他の誰でもない、繁の従姉妹にして相方の清水香織ただ一人。

あまつさえ、

「何やってんのよあのバカ……頭良い癖にバカなんだからもう。二十歳になってもあのバカは……」

等と言い出す始末。

そんな事をはっきりと言ってしまったものであるから、当然反感を買わないはずがない。

「ちょっと待って香織ちゃん！

それは流石に洒落とか冗談ってレベルじゃ済まされないよね！？

イトコ同士とはいえ人としてどうなの！？」

ニコラを皮切りに、群集心理に乗せられた船員達は口々に香織を罵り始めた。

その罵り言葉というのは殆どが「人間のクズ」だの「死ね」だの「自分が今生きていることに恥や罪を感じたことはないのか」だのと、感情任せかつ支離滅裂なものであり、その事に馬鹿馬鹿しくなったニコラは思わず怒るのをやめてしまった。

しかしそれでも船員達の勢いは静まるところを知らず、遂に船員の一人がこんな事を言い出した。

「そうだ！こんな人でなしは船から放り出してやろうぜ！大いなるミガサ・コルト様も、こんな薄情者の魔術師には裁きを下されるはずだ！」

この発言で完全に一致団結した船員達は、早速香織を縛り上げようとする。

流石のニコラもこれは当然止めに入ったが、同罪にされて逆に捕らえられ、香織共々船から放り出されそうになる。

完全に縛り上げたところで、言い出しっぺの男が言う。

「よぉぉぉぉぉおおおっし！縛り上げたか！？それじゃ早速この薄情無しの卑怯者共を―」

―「いい加減にしなよあんた等ぁっ！」

船員達の暴挙を見かねた逢天の怒号が、その場の空気を一変させた。

「その内自分達の愚かさに気付いて自然消滅するだろうと信じていたのに、黙って見てりゃあ一体何だね！？感情任せに喚き散らしたかと思ったら、今度は法廷の裁判官気取りとは！あんた等それでも義と愛と哲学に生きる誇り高きイスキュロン民かい！？このデゼルト・オルカの一員としての自覚が、ミガサ・コルト号のクルーとしての覚悟があんのかね！？

何が大いなるミガサ・コルト様か！
非力な女を寄って集って縄で縛り上げ、この灼熱の砂漠に放り出そうなんてそんな卑劣な行いが、ミガサ・コルト様の御心に叶うとでも思ってんのかい！？
馬鹿を言うんじゃないよ！確かにその女の言ったことは酷いだろう！死人を罵るなんて人として最低だ！
だけどもね、その女が何を言おうが何をしようが、今ここであんた等がその女をあんた等の独断で裁いて良いなんて事は決してないんだ！
例えその女がこの場で私を殺そうとも、それをあんた等が独断と感情に任せて裁いて良いわけはないんだよ！
あんた等は法官でもなければ政治家でもないし、ましてや天上の神でもない、只の私の部下だろうに！
身の程を弁えな！身の程を！何時も言っているだろう！『何にしても下手に出なさい。自分が一番下だと思って努力しなさい』と！
何で船の操縦や機関銃の扱いが判ってそれが理解できないかね！？
そもそもその女だけならまだしもあんた等、最初は見方だった筈の女医先生まで最終的に悪者にして殺そうとしたろう！
何て馬鹿なんだい！感情に流されすぎなんだよ！第一女医先生がその女に言ったのは、冷静な視点からの説教だったけれど、あんた等のは揃いも揃って馬鹿丸出しの暴言だったじゃないか！
あんた等みたいのが居るから、ヤムタの貴族共やなんかからイスキュロンは脳味噌が豚肉で出来たような馬鹿共の集まりだなんて言われるんだよ！」
「しかし、船長―
―「お黙り！兎も角あんた等は他人の話を聞かなさすぎる！あと状況の判断も遅い！
何時も何時も感情任せに突っ走って歯止めが利かなくなって、そうして事を荒立てたりするんだ！

これは別にあんた等が嫌いで言ってるんじゃあ無いんだよ。嫌いなら説教なんてせずに撃ち殺してるさ。
それもこれも全て、あんた等が大切だから言ってる事なんだ。その辺り、判っておくれよ」

説教を終えた逢天は、船員の一人に香織とニコラの縄を解くように命じ、香織に聞いた。

「ところで香織さん、見て話した所じゃあんたは年の割にかなり賢そうだ。
さっきの言葉だって、深い意味も無く思ったとおりに言ったなんて事は無いんだろう？」
「はい。私は彼の従姉妹ですから、付き合いももうかれこれ１０年以上になります。
だから私は、あの辻原繁という男がどんな人物なのか、この場では他の誰よりも理解しているつもりです」
「そうだろうと思ったよ。それじゃあ、聞かせてくれないかね？
さっきの言葉の、真相って奴をさ」

第四十三話　だから私は彼を信じたい（後書き）

次回、垣間見える二人の絆！

第四十四話　ブレブレな彼は死亡フラグくらい叩き折れますから（笑）（前書き）

香織の言葉の真意とは！？

第四十四話　ブレブレな彼は死亡フラグくらい叩き折れますから（笑）

―前回より―

「単刀直入に言えば、ですよ」
香織はボトルの茶を一口飲んで言った。
「彼は生きています。
恐らくテイオウスナハンザキの食道から大腸までの何処かしかで」
「何故言い切れるんだい？」
「何故って、彼がそういう男だからですよ。
昔からそうでした。私がまだ加減法も満足に出来ない頃からとても頭が良い癖に、余計な所で変ことして死にそうになって、それでも最後には事を荒立てるでもなく嬉々とした表情で無事帰ってくる。
私はそんな彼の姿をもう十年以上見てますから、心配すべきかそうでないかは、その都度の仕草とか態度とかを見れば判るんですよ」
「大した自身だねぇ」
「私達二人はイトコ同士というより同い年の兄妹みたいなものでしたから、互いの事は大体理解し合ってるつもりなんです。
お互いその事を言い合ったりはしませんけど、少なくとも私はそう思ってます。
今までだって、彼が本当に危ない時は何処にいてもそれを薄々感じ取れましたし、彼も私の危機はくまなく感付いていたと聞いてます。
ましてや今の彼は身も心も霊長種としての基軸を大きく外れつつありますから、死ににくさには余計磨きが掛かってるでしょうし」
「……皆聞いたね？十年以上も青年君と姉弟同然の付き合いをしてる彼女がこう言うんだ。
信じてやらないでどうするってんだい？

まさかあんた等……天下のツジラ・バグテイルともあろう男が、よもやテイオウスナハンザキに丸飲みにされた程度で簡単に死ぬとでも思うのかね！？」

『断じて思いません！』

逢天のその言葉を聞いて、香織とニコラは驚愕した。

何故逢天がその名前を知っているのだろうか。事前に繁の指名手配がエクスーシア圏内と周辺諸国に限られていると踏んで本名を名乗り、目的もイスキュロン大陸軍本部の名物軍人へのインタビューだと伝えたはずなのに。

ツジラ、青色薬剤師という源氏名はおろか、ツジラジに関する情報は一切漏らさないよう徹底していたというのに。

「八坂船長……何故、その事を……？

まさか最初から、覚っていたというのですか？」

「いやいや、私はそこまで鋭く無いよ。あんた達のラジオはみんな大好きだけどね」

「じゃあ何で――「私達ですよ」――あ、あんたはっ！」

「そんなまさか！？」

船室から現れた女に、二人は見覚えがあった。

何せそいつとはほんの数日前まで敵同士であって、ほんの僅かな時間だが共闘した事さえあったのだから。

「お久しぶりです、青色薬剤師様、Ｄｒ．フォックス」

綺麗に畳まれた寝間着らしき衣類の山を抱えながら現れたのは、嘗てラビーレマにてクブス残党のホリェサ・クェインの部下として暗躍、繁達と一戦交えた双子の片割れにしてヴァーミンの有資格者・小樽桃李であった。

「桃李!?何でアンタがここに居るの!?」
「いやぁ、あの後適当なマフィアか悪徳政治家に媚びてまた小遣い稼ぎ&組織破壊でもしようかと思ったんですが適切なターゲットが見当たらなくて」
「明確な犯罪行為を海外旅行かゲームみたいに言うもんじゃないわ」
「近頃妙に色々と物騒な事件も多くなった関係上、各国の警察機関も何かピリついてまして。
えぇ、恐らく原因の三割くらいはあなた方のラジオ番組なんでしょうけど」
「いや前シーズンのあんた等も十分原因になってるよ」
「兎に角諸事情相俟って以前より迂闊に手出しが出来なくなりまして、当てもなく彷徨い続けその他諸々の紆余曲折を経た結果、デザルト・オルカ様の船内にて寝間着修繕のお仕事を頂いたわけです」
「いやちょっと、色々省略しすぎでしょそれは。あとパジャマ修繕って何?
私らが身体張ってあいつと戦ってて、繁に至っては大概即死の丸飲み攻撃喰らってる最中なのに」
「さっき死んでないって言ったのあなたじゃないですか。
それに仕方ないでしょう、普段の私って攻撃力ほぼゼロですし。
その代わり兄はあのケダモノの腹へ潜って中を調べ回ってますけどね」
「じゃああれの背中がトランポリンみたいに脈打ったのって……」
「恐らく兄の仕業かと。多分中でパスタを茹でて居るんだと思います。
海鮮クリームパスタは兄の大好物ですから」
「そうなんだ」
「そもそも海鮮好きなんですよ兄は。特にエビには独特の拘りがありまして、茹でエビはマーリ・アルヌ産の安価な養殖物に限るとか何とか」

「いやそこまで聞いてないし羽辰味覚安っ！
マーリ・アルヌって好適環境水使った農業的漁業で天下取ったラビーレマの内陸都市でしょ！？」
「好適環境水……？」
「あら、香織ちゃん知らないの？ヤムタ西部の山間部にある坂道ばっかりの理系大学が作り上げた画期的な発明品なのよ。
それとその大学で人類学教えてるスキンヘッドに眼鏡の男がまた面白い授業やんのよ。
そいつんとこのゼミ生も白骨見ただけで男前とか何とか言い出す奴らでね？」
「いや知ってますよ。地球（こっち）にもバリバリありますし」
「あ、そうなの？何か妙なところでシンクロするわねぇ」
「全くで―

―ズドォォォォォォォォン！

香織の言葉を遮るように、突如船の真横から柱状の何かが飛び出した。
微細な砂を霧状に撒き散らすそれは、目を凝らしてよく見れば先程のテイオウスナハンザキであった。

しかもその鳴き声は、名状し難い苦痛だとか、或いは冒涜的な不快感が混じっているようだった。

「全員構えェッ！砲撃用意！」
「ちょっと船長ー！？
あん中にまだ二人居るんですけど！？」
「大丈夫ですよニコラさん。二人とも妙にタフですし」
「いやそういう問題じゃ―

ニコラが突っ込もうとした瞬間、垂直に苦しみ悶えるテイオウスナハンザキの口の中から、マイクで増幅された歌声が響き渡った。

―『グダグダかッ☆ッヘェーイ！

テレレッテッテレッテーレィ♪
テーレーレーレレレッレレー♪
テレレッテッテレッテーレィ♪
テーレッテーレッターラァィ♪』

その歌声の主は前奏らしき音楽の部分まで口で歌っていた。

『初手から腐っても♪
チューナー来なくても♪
使い続けてりゃ、何時か応えてくれる♪』

その場の誰もが、その声に聞き覚えがあった。
そもそもこんな状況下でこんな人格破綻の大盤振る舞いとでも言うべき歌詞の酷さを誇る歌を歌い出す奴の同定に、時間など掛からない。

テイオウスナハンザキの口の中から、何処から取り出したのであろう台座のようなものに乗って現れたのは、

我等が主人公にしてツジラジの司会を務めるＤＪツジラ・バグテイルこと、辻原繁だった。

第四十四話　ブレブレな彼は死亡フラグくらい叩き折れますから（笑）（後書き

読者「どういう事だぁぁぁぁぁぁぁ！？」（ディスプレイに頭突き）
傍目から見てた人「あんたがどういうことだよ！」

第四十五話　これは軍人ですか？　1．はい、ただのクズです（前書き）

テイオウスナハンザキ戦、決着！

第四十五話　これは軍人ですか？　1．はい、ただのクズです

―前回より―

一通り歌い終わった繁は再びテイオウスナハンザキの体内へ飛び込んだ。
その体内で何が行われているのか傍目からは窺い知れないが、被害者である巨獣の上げる嗚咽にも等しい悲鳴のような鳴き声からして、相当酷い目に遭わされているのだろう。

まるで漫画のような光景が繰り広げられた後、遂に力を失い絶命したテイオウスナハンザキが砂の中へ倒れ込む。
粉塵を巻き上げながら砂の中へと横たわるテイオウスナハンザキの口から、何かが素早く飛び出した。繁である。
その手には逢天から授かった槍が握られており、両手の手甲鉤も刃が剥かれていた。

獣の腹の上に座り込み、船上の仲間達に手を振る繁。
それに応えるかのように船員達は歓喜の声を上げ、香織やニコラも笑顔で手を振った。

―船上―

「凄いねぇ、まさか本当に生き延びるとは」
『当然ですよ。
彼は飛姫種や巨人さえも一人で討ち取る程の実力者なんですから』
「誰かと思えば羽辰さんじゃないかい。
一体何時からそこに居たんだい？」
『おかしな事を聞くものですね、船長。

私は細胞と霊魂との中間的存在故、インスタントタイミングで大概何処へでも行けるのですよ』

「そういえばそうだったねぇ。こらいかんわ、私ともあろうもんがねぇ。はっはっはっは」

『……ところで船長、話は変わりますが……』

「あぁ、分かってるさ。あの大きさを絶命まで追い込んだんだ。暫くは砂上船の事故も減るだろう。

テイオウスナハンザキはどんな船乗りも軍人も恐れる巨獣だ。砂漠の生態系では万年トップな上に、体当たりや噛み付きで客船も戦艦も瞬く間に沈めてしまう、名前の通り帝王みたいな奴さ。となれば、砂漠を主な活動拠点にしてる船持ちの企業には、大体の所に恩を売れるだろうね。

皮や腹から取れた玉や岩は言うまでもなく、骨肉もラビーレマの学者共がこぞって欲しがるだろうよ」

かくしてテイオウスナハンザキ狩りを終えたミガサ・コルト号は、収穫と共にデザルテリアへと進み出し、翌日の夕方にデザルテリアへ到着した。

都市の船着き場にてデゼルト・オルカの面々に別れを告げた繁達は、急速のためひとまず予約していた宿へと向かう。

因みに船で出会った小樽兄妹もこれを期に正式なツジラジスタッフとして認可され、繁達のグループに加わることとなった。

―翌日―

「早速だが、今日は人に会う」

「あれ？船乗るんじゃないの？」

「情報によると、今回の企画に最適な有名人が居るらしい。そいつに誘いをかける」

「有名人、ですか？」

『イスキュロンの有名人と言えば、大抵は政治家か軍人ですが……』
「まさか今回のゲストに退役軍人や政治家を呼ぶの？やめといた方がいいと思うなぁ」
『確かに、昔気質（むかしかたぎ）の退役軍人は柄の悪い奴が多いですからねぇ。それればかりとは言いませんが、報道機関で取り沙汰される退役軍人は大抵酷い奴ばかりだ』
「居るよねぇそんなの。現役時代に死んでくれたけど、昔海軍にハーマンヌ・リアメイっていう猿系霊長種が居てね？義父のロナルドは退役軍人にしては珍しく結構気の良い人格者のじじいなんだけど、義息がそりゃあもう性悪でさ。親継いで海兵隊訓練所の教官やってたんだけど、訓練生の扱いがそりゃもう酷かったのよ。人権無視の罵詈雑言は当たり前、訓練生へのフォローも無し。殴る蹴る、下手すりゃ死ぬような体罰だってあったらしい」
「まじか。ひでえな」
「一昔前ならまだしも、流石に近頃ともなると問題になりますからね。案の定各大陸の雑誌やテレビ番組で度々取り沙汰されまして、ある番組でインタビュー受けた時に何て言ったと思います？
『俺は偉大な親父の掲げていた崇高で気高い志を継承しているだけだ。誇り高きイスキュロンの海兵たるもの、上官の命令や体罰に耐えられもしないようではいけない。俺の指導は浮世の荒波の中からすれば生やさしいものに過ぎない。その程度で泣き言を言う腑抜けのゴミは自ら喉を射抜いて氏ね』ですよ？」
『田舎の貧民街で盗みを働いていた孤児如きが、偶然にも名家の当主に拾われた程度で何を勘違いしているのやら。
「優秀だったので父は俺を叱りも怒鳴りもせず、欲しい物はなんでも買い与えてくれた」ってそりゃあんた、優秀だったんじゃなくて

甘やかされてたんでしょうに。
何が浮世の荒波か！世の荒波を知らないのはお前だろうに！
何が腑抜けのゴミか！親の七光りで甘やかされて育った不良のお前が何を偉そうに！
何が指導か！お前のそれはは只のくだらない腹いせだ！目的も哲学も本能もない汚らしい暴力だ！』
「落ち着け羽辰、往来で大声出すもんじゃねぇ。

んで、その人格者のロナルドってのは息子の暴走に気付かなかったのか？」
「それが、ロナルド氏は幼い頃から女運に恵まれず、子供を授かるどころか結婚も出来なかったんだそうです。
それで『この子は神のくださった最後のチャンスに違いない。大切に育てなければ』という思いが暴走シテしまったらしく」
「しかもその時、運悪く不意打ち仕掛けてきた盗賊にハンマーで頭殴られてさぁ。
そっから頭おかしくなっちゃったみたい」
「精神異常ねぇ……」
「しかもそれが結構特殊で、他のことに関しては何時も通り全部完璧なんだけど、こと育児となると別人みたいに駄目人間全開になっちゃうらしくってさ」
『お陰で我等がラビーレマの医者もお手上げでしてね』
「その横暴が暫く続いた頃だっけっか、訓練生の一人にちょっと出来の悪い奴が来てさ。
他の訓練生から散々イジメ受けて、あの馬鹿からも散々な目に遭わされていったの」
「自殺したのか？」
「強ち間違いでもないけど、その訓練生は過酷な環境下で射撃の才能を開花させてね。
でもそれと同時に精神病を患い始めて、周囲が精神病院に入れよう

って言ってるのにあの馬鹿聞かなくてさ。
『精神病院は他人の力を借りなければまともに立ち歩く事さえ出来ない弱者の巣窟だ。
絶対無敵のイスキュロン海兵にとっては地獄の方がまだ生温い』って、親の権威振り翳してその訓練生をそのまま学校に入れたままだったんだけど……」
「卒業式前夜、武器庫から銃器持ち逃げしたんだよそいつ。何に使うのかは知らなかったけどね。
それでそれを見た馬鹿がキレて殴りかかったら、自分が虐めてた訓練生に撃ち殺されて目出度く死んでくれたのよ」
「それで済めばまだ良かったんだけど、撃ち殺してくれた訓練生も気が動転してすぐに自殺しちゃってねぇ。
あとはもう、酷いの一言よ。ロナルド氏が今までの自分を悔いて重度の鬱病になったり、ヤムタの報道機関が在ること無いこと書き綴って方々で言いふらしたり」
「大変だなぁ、軍隊ってのも。
いやぁ、俺自衛隊とか行かなくて良かったわ。柄じゃねぇし。
やっぱ人間の基本は座学だな」

等と雑談しながら歩く五人は、遂に目的地であるイスキュロン陸軍管轄の大病院へとたどり着いた。

第四十五話　これは軍人ですか？　1．はい、ただのクズです（後書き）

次回、病院での新たなる出会い！？

第四十六話　これは軍人ですか？　2．そう、彼女は災いを背負う（前書き）

新キャラ登場！

第四十六話　これは軍人ですか？　2．そう、彼女は災いを背負う

―前回より―

デザルテリア首都圏に存在する、イスキュロン陸軍管轄の大病院。
その深奥には、訳ありの事情を抱えた軍人達の治療に用いられる隔離病棟が存在した。

一部屋ごとに分厚い鋼鉄の壁で仕切られ、扉のロックは定められた方法以外では開けることが出来ない。
無理にでも開けようとすれば、患者の首に付けられた首輪から痛覚神経に刺激が下り、居ても立っても居られない程に苦しい（が、しかし決して死ぬことはない）激痛に苛まれ、気力を殺がれてしまう。
病棟と銘打つだけに患者を生かし続ける事が目的であるため、俗に幻術と呼ばれる、精神・感覚・思考に干渉する魔術の類で彩られた室内は患者に自身が最も理想とする世界を見せ続ける。
しかしその実態は全身が白く塗られた無機質で簡素な独房であり、必要最低限の設備が備えられている以外に飾り気は一切無い。
食事は基本的に全自動で供給されるが、幻術はそれさえも患者の望み通りに変えてしまう。

そんな隔離病棟の一室に、一人の女が収容されていた。

ベッドに座り込んだまま動かない女は身長約１．７ｍ、少々広めの肩幅を持ち、長い銀髪を棚引かせている。
しかし異質なのは彼女の右半身であり、金属製の鎧か拘束具のようなもので覆われていた。
その表情は暗く落ち込んでこそいないが、明るく活気に満ち溢れているとも言い切れず、銀髪と白い病衣も相俟って『虚無』を感じさ

せる。
即ち今の彼女には『何もない』。
目的も、欲望も、使命も、本能も、何もかもが感じられない。
必要最低限の行動を取る以外は、何時もこうしてただ何もせず過ごしているだけ。

そんな彼女の名は、リューラ・フォスコドル。元々の階級は少佐である。
若干２１才の若さにして数々の武勲を打ち立てた事でその名を馳せた彼女は、数々の活躍から『砂塵の豹』の異名を持つ伝説的な存在であった。
そんな彼女が何故こんな場所で、生死すらも曖昧に思えるほど無気力かつ不毛な状態でたたずんでいるのか。
その理由と彼女の過去、そして彼女の身に付けている拘束具の意味については、後々述べることとする。

『フォスコドル様、面会をご希望の方がいらしておりますが、如何なさいますか？』
ふと、部屋に備わったスピーカーフォンからそんなスタッフの声がする。
空ろな表情ながらもその声を確定的に聞き取っているリューラは、微動だにせずそれに答える。
「どんな奴だ？」
『はい。本の題材にするのでフォスコドル様にインタビューをしたいと』
「通せ。そしてなるべく丁寧に持て成しな。
私の噂を知りながら、こんなに薄暗くて気味悪いだけの場所にまで足を運んで私に面会を申し込む奴の顔が見てみたいんでな」

その言葉には感情に伴う抑揚というものがまるで感じられず、至極不気味に思えてしまう。
聞くほうからしてみれば、これならまだ稚児の棒読み音読のほうがましというものであろう。

『畏まりました。では二分後、そちらにご案内致します。面会時間は如何致しますか？』
「相手の気が済むまで、好きなだけ話し相手になってやる」
『畏まりました。相手の方にもそうお伝えします』

―二分後―

コン、コン

「どうぞ」

ガチャリ

「失礼致します」

中に入ってきたのは、我等が主人公・辻原繁ただ一人。
シーズン1でも見せたバッタ型マスクに白衣という出で立ちである。
他の四人は宿で待機させており、マスク他数カ所に仕掛けた小型カメラからの映像を遠隔送信している。

「初めまして。辻原繁と申します」
「……よろしく、ツジハラ。
リューラだ。リューラ・フォスコドル。
気軽にリューラと呼んでくれ」
「では、リューラさん。あなたに幾つか質問があります。よろしい

ですか？」
「良いぜ。答えられる範囲でなら、答えてやる」
「まず、インターネット上で貴女がここへ来る前に、テレビ番組にゲスト出演した際の映像を見させて頂きました。その時の貴女は、とても元気で明るく社交的な方だったように思えます。この事に間違いはありませんか？」
「無い。自分で言うのも何だが、ここに来る前の私は良く言えば明るく、悪く言えば気が荒かった。ガキの頃は男の群れに混じってオアシスの森で虫や魚を追い回したり、格ゲーとかガンシューでハイスコア出しまくったもんだ。喧嘩も散々した。酒や煙草には手を付けなかったし、不良と連む事も無かったが……暴力事件だけはよく起こしてたな」
「有り難う御座います。では……これは担当の方から聞いた話なのですが、この隔離病棟内には常時患者の方を対象とする精神干渉系の強力な魔術が施されているのだとかで……」
「そうだな」
「そしてその魔術の影響により、患者の方々は隔離病棟内を自身の願望を精密に反映した理想空間として感じ取ることが出来る、とも聞いております」
「一介の物書きにしては、随分と博識だな。感心したぞ」
「お褒めに預かり光栄です。そしてここからが本題なのですが……リューラさんの目に映る理想世界とはどのようなものなのでしょう？」
「理想世界……か」
「はい」
リューラは暫く考え込んでから、繁に言った。
「忘れちまった」

繁は特に驚くでもなく、淡々と聞き返す。

「忘れてしまった？」

「あぁ。忘れちまった。いや、それしか逃げ道が無かった。ここに来るそもそもの理由になった病の影響でな。ノモシアの魔術師もラビーレマの医者も、アクサノのシャーマンとかドイルドとかいう奴らも、皆お手上げだと泣く泣く匙投げちまってよ」

「左様で……それはそれは、失礼致しました」

「良いんだよ、別に。大概どんな事でも聞くがいいさ。可能な限り答えてやる」

「有り難う御座います。それではあなたの右半身を被うその鎧のようなものは、一体何なのです？」

「あぁ、これか？実を言うと病に感染したのは、私の右半身全部でな。こうしてないと、色々とヤバいんだ」

「ほう……色々、とは？」

「……悪いが、それについては話す気になれねぇ」

「そうですか」

「物書きにしては潔いじゃねぇか。どういう風の吹き回しだ？」

「他意はありません。ただ、その御言葉が聞ければ十分です。無理に聞いてしまっては、リューラさんのお体にもよろしくありませんし」

「優しいんだな、お前」

「……ご冗談を、私は欺き逃げ回る事しか出来ない意気地なしの臆病者ですよ」

「そうか？……私にはそうは見えないがなぁ」

「そうでしょうかね。

では、リューラさん。少々失礼な事をお伺いしても宜しいでしょう

か？」
「ああ、どんと来い」
「私の個人的な意見ですが、今ここにいる貴女は大変に無気力で、明るいとか暗いとか、そういった表現以前に『活き活きとしていない』と言いますか……はっきり申し上げれば『傍目から見るに生き物であるように思えない』のですが……それも病の影響ですか？」
リューラは暫く口を閉ざしていたが、暫し考え込んで言葉を紡ぎ出す。
「病の影響じゃあ、無ぇ。私個人がそうしたことだからな。あと訂正だが、そうするとさっき言った『理想世界を忘れた』ってのも、若干語弊のある言い方だったな」
「と、仰有いますと？」
「さっきも話したとおり、私の病てのはかなり妙でよ。治療不可能なんだよな。
で、長いこと苦しめられてる最中に見出した唯一の対処法が……」
「『何も考えないこと』ですか？」
「そうだ。『虚無に近付く』事が私に遺された唯一の逃げ道だったんだよ。
だから今もこうして、自分の感情や欲求なんてもんを限界レベルまで封殺してんだ。
ほんの少しなら大丈夫だが、人並みに出すとやべえ事になりやがるからな」
「成る程……では、リューラさん」
「何だ？」
「もし宜しければ、聞かせて頂けませんか？貴女の過去を」
繁の問いかけに、リューラは幽かな笑みを浮かべて答えた。

「ああ、喜んで」

第四十六話　これは軍人ですか？　2．そう、彼女は災いを背負う（後書き）

次回、明かされるリューラの過去！

第四十七話　これは軍人ですか？　3．いえ、彼女は深手を負いました（前書き

昔話調で語られる、リューラの過去とは！？

第四十七話　これは軍人ですか？　3．いえ、彼女は深手を負いました

―以下、リューラ自らが語った内容―

よっしゃ。んじゃあちょっと昔話っぽくしてみるか。

＊＊＊

昔々―等と言ってもほんの二十年程前の事ですが―砂漠の大陸イスキュロンの田舎の国に、リューラという女の子が住んでいました。
リューラは昔から元気で明るく正義感が強いとよく言われ、少し怒りっぽくて融通の利かない所もありましたが、それでもみんなの人気者だと評判でした。

遊び相手は男の子が多く、女の子らしい事なんてしたことがありません。
そもそも彼女は元より風変わりな生まれで、女性の身体に男性としての特徴を併せ持つ『両性具有』という体質でした。
これは身体だけでなく心にも言える事でした。即ち、男女の本能が入り交じっている彼女はバイセクシャリストだったのです。

心身がそれほどに奇怪ならいじめや差別の標的になっても良さそうなものでしたが、昔から人望のあったリューラにそんな事をしようという奴は、どうやら居なかったようです。
むしろそれが珍しかったこともあり、リューラの周りには人がどんどん集まっていきました。

しかし、リューラの人望と正義感が常に良い方向に動くとは限りません。

運動も勉強もそれなりに出来たリューラは、少しばかり不器用でもありました。
直情的で熱くなりやすい彼女は、友達や全く無関係の人をも助けようと度々暴力事件を起こしては相手に重傷を負わせて補導される事が何度もありました。
周りはそんな彼女を咎めますが、リューラはいつも『困っている奴を助けて何が悪い』と開き直ってばかり。
両親はそんな娘を咎めつつも許し、どんなときでも支えてくれました。

ある日、リューラの両親は言いました。
『リューラ、よく聞きなさい。
正当な理由無く相手に暴力を振るうのは良くないことだけど、お前の持つ正義の心は本物だ。
進むべき道を間違えないよう、優しさと思いやりの心を忘れずに生きなさい』

リューラはこの言葉を心に留め、感情的になる事を控え、物事を一歩下がって考えるようになりました。

その頃地元の公立中学に通っていたリューラは、精神的に成長を遂げた結果あらゆる方面で華々しい成績を修めるようになりました。
そしてその成績と人格を担任の先生に見込まれ、何とデザルテリアにある国軍の士官学校へと入試出来るチャンスを与えられたのです。
更に面接での彼女を見て、将来有望な軍人になるであろうと踏んだ士官学校の校長先生は、あるとんでもない決断を下します。
リューラの秘められた能力を見込んだ校長先生は、特別な手順を踏んで彼女を特待生にしたのです。
特待生とは選ばれたごく僅かな人間だけがなることが出来る選ばれし学生の事で、学費免除を初めとして破格の優遇措置を得ることが

出来るのです。
更にそれが名門中の名門とされるデザルテリア国立軍事士官学校ともなれば、大陸全土と言えども選りすぐりの精鋭という事に他なりません。

それでもリューラはその肩書きに酔うことなく、今まで通り庶民的な正義感と善意に従って生きる事にしました。
そして特待生の名に恥じないよう、無理をしない程度に全力で努力を続けました。
そうしてリューラが三年生になった頃、彼女の元にまたも素晴らしい話が舞い込んできたのです。
士官学校へ視察に来ていたイスキュロン陸軍の将校が訓練中のリューラの活躍を見てたいそう気に入ったので、卒業後自分の部隊に配属したいと申し出たのです。
その頃将来何をすべきかで悩んでいたリューラはこれを喜んで受け入れ、両親を初めとする身の回りの大勢の人達が彼女を祝福してくれました。

卒業後陸軍に配属されたリューラの活躍は素晴らしく、若くして多くの武勲を打ち立てた彼女は２１歳にして少佐の地位にまで上り詰め、その華麗な活躍から何時しか『砂塵の豹』と呼ばれるようになっていました。
国民的英雄になったリューラは、テレビ番組に出演したり、アニメ映画の吹き替えをしたり、自伝を出版したりしました。
でも彼女はその事を一切誇らず、自分はあくまで軍人であり国を守ることが仕事なのだと主張し続けました。
軍人以外の仕事で稼いだ金は全て寄付したり、両親の仕送りに注ぎ込みました。
軍人でない自分自身の稼いだ金を自分のために使うのは、彼女自身の哲学が良しとしなかったからです。

そうこうしている内に時は巡り、リューラが２３歳の頃。
故郷でノモシア民魔術師による戦乱が起こり、急遽リューラ率いる大隊が駆り出されることになりました。
部下達と共に故郷へ向かったリューラが見たのは、無茶苦茶に破壊されて変わり果てた故郷の姿でした。
リューラは部下達を率い、時に現地の人々を助け、時に敵の魔術師達と壮絶な戦いを繰り広げました。

リューラは大勢の魔術師を殺しましたが、敵の魔術師も負けじとリューラの部下達や生き残った人々を殺していきました。
それでもリューラはぐっと涙を堪え、生き残った人々と共に必死で戦い抜きました。
そして二十日間に及ぶ激闘の末、敵をあと一人という所まで追い詰めたのです。
敵の魔術師は魔力も体力も使い果たしており、抵抗はほぼ不可能でした。

リューラはその魔術師に、「投降して罪を償うのなら助けよう」と交渉を申し出ます。無抵抗の相手を殺すのは、彼女の哲学が許さなかったからです。
しかし相手の魔術師はそれを頑なに拒み続け、遂に抱えていた硝子瓶を叩き割ると、自ら舌を噛み切って死んでしまいました。

こうして全てが終わったかに思えたのですが、事態はまだ終わってなど居ませんでした。
硝子瓶の中に入っていたタールのようなものが唐突に動き出したかと思うと、それがリューラの右半身にへばりついたのです。
タールは服の下へと潜り込み、肌へと直に染み込んでいきます。
リューラはそれを必死に食い止めようとしますが、強く抵抗すれば

するほど全身に激痛が走り、立つ事さえままならなくなってしまいます。
タールの染み込んだ場所はそれと同じような色に染まり、彼女の右半身を恐ろしい怪物に変えて行きます。

「やったぜ！遂にやったんだぁッ！」
右肩から硬い軍服を突き破って飛び出た蛇とも魚ともつかない不気味な怪物の頭が、低く嗄(しわが)れたような恐ろしい声で叫びます。
「俺は助かったんだ！こいつだ！この女だ！ああ、最高だ！この女とならやっていける！
この女の為なら何だって出来る！俺は生きてぇんだ！あんな生活はもうご免なんだ！」
更に怪物は長い首を曲げてリューラの方へ向き直り、言いました。
「すまねぇな、姉ちゃん。痛かったかい？だが怨まねぇでおくれよ、仕方が無かったんだ」
「仕方……無い、だ…と？どの、口が…ッ…」
「おいおい、落ち着けよ。身体の力を抜いてリラックスするんだ。そうすりゃあ痛みも消える」
「……」
「だからよォ、そう睨むなっての。俺ァアンタの敵じゃねえよ。獲って喰うだの取り憑いて操るだの、んな真似はしねぇから安心しな」
等と宣う怪物でしたが、小さい頃から男性向けの漫画やアニメが大好きだったリューラは、その影響からか怪物の言うことを信用できません。
「黙れ……お前の言うことなんて誰が信じるか…ッ…」
「…はぁ……判ってねぇなぁ……俺ァアンタが好きなんだ。餌としてとかカモとしてとかじゃなく、純粋に友達として好意を向けてんだよ。
いきなり飛びついちまったのは悪いと思ってる。

けど仕方無かったんだ。あのままだと死んで――「悪いお化けめ！少佐のお姉ちゃんから出てけっ！」

近くに居た子供が投げつけた水銀体温計が、怪物の口の中へ入りました。

それに驚いた怪物は思わず体温計を噛み砕いてしまいます。

「ッぐぇあぉうあがぎげっ！

かッ！馬鹿なッ！てめえ、不完全体の俺の唯一の弱点が水銀だと何故解ったァ！？」

水銀にを飲まされた怪物は、萎みながらも吐き捨てます。

「頼む……俺を拒絶しねぇでくれっ……！

俺にはもう、お前しか居ねぇんだよ……頼む…」

そう言って怪物は姿を消しました。

しかし、リューラの右半身は依然として元に戻る気配を見せませんでした。

デザルテリアの本部に戻ったリューラはそこで様々な治療を受けましたが、どれも効果はありません。

あまつさえ感情が高ぶると、その隙に付け入って怪物の声が頭の中へ響き渡り全身に激痛が走ります。

リューラはこの事から、最早まともな生活は送れないと思い、自ら志願し隔離病棟に収容される道を選んだのでした。

彼女は表向きには戦死扱いとなり、多くの人々がそれを悲しみました。

しかし、一部でまことしやかに信じられている都市伝説にはこんなものがあるのです。

―リューラ・フォスコドルは生きている。

彼女は戦場で秘めた力に目覚め、その力を制御出来ないが為に国立

病院の隔離病棟で生かされているのだ―

そして今日も、リューラの一日は無色に過ぎ去って行くのです。

第四十七話　これは軍人ですか？　3．いえ、彼女は深手を負いました（後書き）

怪物の真意とは一体何なのか？リューラの結末は？繁はどう動く？
全ては次回、きっと明らかに！（多分！）

第四十八話　これは軍人ですか？４．うん、結構曲者っぽいね（前書き）

過去を語り終えたリューラに告げられる、母校の現状。
そして彼女の感情が高ぶったとき、遂に奴が現れ……

第四十八話　これは軍人ですか？４．うん、結構曲者っぽいね

―前回より―

「…とまぁ、こんな事があってな。それ以来私はここで過ごしてる。満足してるかと聞かれても上手く答えられねぇが、そもそも今の私にゃ満足なんて贅沢だと思えば納得が行く」

「……左様で。

それと、ですな。リューラさん」

「何だ？」

「貴女の出身校は、デザルテリア国立陸軍士官学校で間違い在りませんね？」

「あぁ、そうだな。本来は中高一貫だったが、私は特別に高校から入れて貰った。

学校としては異例の事態だったそうだ」

「そう、ですか」

「私の出身校がどうかしたのか？」

「いえ……実は風の噂で耳にしたのですが、何でも士官学校の教頭先生が代わられたとか何とかで」

「代わった？『教頭として学校の敷地内に骨を埋める』が口癖の、ディロフ教頭がやめたのか？」

「えぇ。突然食道癌を発症し、療養のためやむなく休養をとられるそうで」

「そういえば教頭、学校でも一二を争う飲兵衛だったなぁ……。

それで、新任の教頭はどんな奴だ？」

「鼠鮫系鰓鱗種の秋本・九淫隷導・康志という男です。表向きには真面目で博識な人格者として通っています」

「……表向きには？まるで裏の顔があるとでも言いたげだな？」

「えぇ、あるのです。裏の顔が」
「マジか……どんな顔だ？」
「どんな顔だと、思われますか？」
「ヤクザと繋がってるとか」
「違いますな」
「じゃあ違法な品々を影で売り捌くブローカーだとか」
「それも違います」
「ならヤク中」
「外れです」
「ガキとヤりたくてしょうがないキチガイ変態野郎」
「僅かながら近い」
「じゃあガキの所を女に変換」
「性格に於ける本質についてならそれで正解です」
「性格…？どういう事だ？」
「つまり問題は、奴の嗜好などではなく、行動にあるという事です」
「……行動？」
「はい。見境無き好色の秋本には自分より遙かに若い四十八人の愛人が居り、全員が士官学校に潜んでいるのです」
「四十八人……とんでもねぇ人数だな」
「えぇ。ある者は生徒として、またある者は教員、用務員、売店店員等職員として、ひとかたまりにならないようまばらに潜んでいるらしいのです。

そして秋本は自ら考え出した校則と愛人共を基軸に、士官学校を独裁的に支配しているそうなのです」

「な、何だとっ！？」
リューラは驚愕の余り思わず立ち上がった。
「そんな事が、そんな馬鹿な事があってたまるか！あそこは私の第二の家だ！

おい、ツジハラ！その秋本って奴は何処にいる！？野郎、絶対に許さねぇ！」

怒り狂ったリューラは、繁の襟首を掴みながら大声で言う。

「落ち着いて下さいリューラさん。秋本の所在なら判っていますが、今の貴女では手の出しようも無いでしょう？
それに、そんなに感情的になって大丈夫なんですか？」

「何のことだ！？」

「いやだから、必要最低限以上に感情が高ぶったりすると―

―「うおぉぉぉおおおああああっ！何だとぉぉぉぉぉぉ！」―

―こ、こいつは一体っ！？」

突如拘束具に被われていた筈のリューラの肩から、肉食恐竜とも犬とも鮫ともつかない形をした首の長い怪物の頭が現れ、低く嗄れた青年か中年のような声で叫んだ。
それと時を同じくして、リューラが苦しみながら床に倒れ込む。しかし隔離病棟収容者とはいえ元軍人、受け身だけは取っているらしい。

「何てこったァ、ちくしょおおおおおお！うあぁああぁああ～ッ！俺のッ、俺の命より大切なリューラにとってのッ、大切な母校がぁッ！
そんな訳の判らねぇ骨無しのクソ野郎に支配されてやがるだとぉぉぉぉーッ！？
なんてことだ…なんてことだっ……ひでえ……酷すぎるぜ…畜生…
なんてこったぁぁぁぁ～ッ！
うぇっへあぁあああああーッ、どうしてなんだぁぁぁぁぁッ！
どうしてこうなったあああぁぁぁぁああッ！」

怪物は先程まで怒り狂っていたかと思えば、今度は滝のような涙を流して鳴き始めた。
流石の繁もこれには驚いた。驚かざる終えなかった。リューラに謎の怪物が寄生しているとは聞いたが、まさかこんな性格だとは思っても見なかったのである。

「あぁ、あの、とりあえず涙と鼻水を拭いてはどうでしょう？」
「おぶ、ずばべぇっ（訳：おう、すまねぇっ）」

繁は恐る恐るポケットティッシュを袋から抜くと、一袋分束で差し出した。
怪物は首の真ん中当たりから猿とも虫とも付かない形の腕を出してそれを受け取ると、全体の四分の三近くで涙を拭き、更に残る四分の一で鼻水をかんだ。

「どうです？落ち着きましたか？」
「おう…何とかな。有り難うよ、バッタ面の兄ちゃん」
「いえいえ、幾ら相手が得体の知れぬ生物であろうとも、困ったときはお互い様ですから」
「優しいなあ、兄ちゃんは。リュー（こいつ）ラみてぇによう、良い奴だなあ、あんた。
こんな『顔に刺青入れた金髪の悪徳科学者みてえな声』した化け物だからって、物投げねぇでちり紙くれるなんてよう」
「何を仰有いますか、貴方の声はどちらかと言えば、『いざというときには愛と大儀の為危機に立ち向かう勇敢な父親のような声』ですよ」
「そうだとしてもだぜ？声云々以前にこんなんが出てきたらヒいちまわねぇか？」
「まぁ…最初見たときにはかなり驚きましたが、悪い方には見えませんでしたから。

自分以外の誰かの為に、あんなに大声で涙を流して泣ける方が悪だなんて、そうそう有り得ませんよ」

「そう思うか？」

「えぇ。万が一悪意を完全に覆い隠してそこまでの演技が出来る方が居たとして、貴方はそうでないと見える。

そこまでする程の悪党ならそんなエネルギーを無駄遣いするような真似はせず、早急に私を手にかけている筈です。

仮にその先の先の先の、更にその果てまで読み通すような頭脳の持ち主が居たとしても、私が思うにそういった手合いは悪党五千兆人に一人居るか居ないかでしょうし」

「そうなんだよ、俺って不器用な上に積分も出来ねぇ大バカでよう、出てくると何時もこうやってこいつを痛めつけちまうんだよなぁ。

俺はただ、こいつの事が好きで好きでたまんねぇだけなんだけどなぁ……」

怪物の声は渋く、少し嗄れてこそ居るが気迫と威厳を感じさせるものだった。

しかしながらその喋りから読みとれる胸中たるや、まるで思い人に上手く胸の内を伝えられず、返って誤解を招き距離を置かれてしまう現状に思い悩む思春期の少年のようであった。

リューラは思った。

「（私はもしかして、こいつの事を誤解してたのかもしれないな……）」

そう思った瞬間彼女は、自らの全身を襲う激痛が幽かに和らいだように感じた。

第四十八話　これは軍人ですか？４．うん、結構曲者っぽいね（後書き）

疾患はまさかの思い込み！？
次回、遂に二人の心が通じ合う！

第四十九話　これは軍人ですか？　5．ああ、奴らは実に面白い（前書き）

リューラと怪物、遂に和解か！？

第四十九話　これは軍人ですか？　5．ああ、奴らは実に面白い

―前回より―

「それで、そのクソ野郎を兄ちゃんはどうするつもりなんだ！？」
「実を言うと、既に対応のために動き出している組織がありましてね。
何でも士官学校に潜入し、内部から教頭と愛人共を叩きのめすのだとか」
「ほう、そいつぁマジか！？すげえぜ！やったなぁ！」

繁と怪物の会話に花が咲く中、リューラは密かに考え込んでいた。

「（私はガキの頃から漫画やアニメが大好きだった。魔術や学術で派手に戦う奴が特に。
んで、そういうのには幾つかお約束ってのがあって、そういうのは基本的に現実でも同じだったんだ。
お約束の中でも特に印象的だったのは『身体に寄生してくる奴は危ない。そいつが喋るとなると尚更』って奴だったなぁ。

そうだ。だから私はあの時、こいつの存在を拒絶しちまったんだ。
こいつに騙されそうになってるんだ、受け入れたら殺されるんだと勝手に思い込んで。
こいつの話をろくに聞こうともせずに……聞いた上で拒否るんならまだしも、聞かずに拒否るなんてな……バカじゃねえのか、私は。
フタ開けて見りゃあ、こいつ中々良い奴じゃんよ……そうだよなぁ）」

考えを改める内に、リューラの激痛はどんどん治まっていく。

そして痛みが完全に消えたとき、リューラは怪物に言った。

「嫌ったりして悪かったな。お前、本当に私が好きだったんだろ？」
「おお！そうだよ！やっと判ってくれたか！俺ぁ嬉しいぜ！」
「こっちこそ、許してくれとは言わねぇからさ……やり直そうぜ？」
「許さねぇ訳ねーだろ！そもそも許すもクソもありゃしねえよ！
お前と分かり合えた！それが一番価値のある事なんだ！」
「そうか…嬉しい事言ってくれやがる。

そういやそうだがお前、名前は？」
「俺か？俺ァバシロってんだ」
「バシロ……『王』って意味だな。堂々としたお前にピッタリだな」
「ハハハ、止せよ。俺ァ王なんて器じゃねえ。良くて足軽だ。
ま、お前が女王だってんなら考えねぇでもねぇがな」
「いやいや、それこそ柄じゃねぇさ。
こうして話してもわかるんだ。お前と私は案外似てるってな」
「そうかよ！こいつぁ一本取られたね！だが似たもの同士ってのは
中々嬉しい事だぜ！」

和解後、暫く談笑し合っていた二人だったが、リューラはふと繁を
見て言った。

「なぁ、ツジハラ」
「何でしょう？」
「お前さっき、秋本をブチのめす為に暗躍しようとしてる組織があ
るって言ってたよな？
その組織の奴に会わせてくれねぇか？母校を独裁支配なんてしやが
るクソ野郎は、許しておけねぇんだ」
「俺も同感だぜ。リューラは俺に生きる意味をくれた。
だから俺には、リューラが守りたいモンを一緒に守る義務がある！

頼むぜ兄ちゃん、組織のヤツと話をつけてくれ！」

頼み込む二人に、繁は笑みを交えて言った。

「あぁ、その件なら大丈夫ですよ。
お二人は組織の代表者に気に入られ、恐らく組織にも受け入れられるでしょう」

「マジか！？」

「そいつぁ凄ぇ！だが何故だ！？」

「何故って、貴方達は既に出会っているんですよ。組織の重鎮に」

「何！？何だと！？」

「何時だ！？俺達は何時、そんなスゲェ組織の重鎮なんてヤツに出会えてんだ！？」

「何時？おかしな事を聞くんですね」

目を輝かせる二人に、繁はマスクを取りつつ言った。

「組織の重鎮とは私ですよ。私、辻原繁と申します。
またの名を『ツジラ・バグテイル』」

「ツジラ……ツジラだと！？まさか、お前があの！？」

「何だバシロ、知ってるのか！？」

「あぁ、お前は毎日俺を押さえつけるのに必死だったから聞きそびれてたんだろうが、チロっと話を聞いたことがあるんだよ。
ついこの間、カタル・ティゾルで突如放送が始まった謎のラジオ番組があるってな。
『ツジラジ』っつーんだが、メールや投書で寄せられた企画にパーソナリティ共が身体を張って生中継で挑んでいくっつー何とも面白い番組だそうでよ…噂に寄ればジュルノブル城の奴らを血祭りに上げ、列甲大関連の高校で暴れ回ってたクブスの生き残りを皆殺しにしたんだそうだ！

で、その番組の司会ってのが『ツジラ・バグテイル』……つまり今俺達の目の前にいるこの兄ちゃんて訳だ！」

「な、何だってェ！つまりアイトラスのクズ共に、クブスの変態野郎共の生き残りまで始末したってのか！？おま、バカ！そんな英雄同然の御方にタメ口なんて聞いてんじゃねえ！」

「うへぁっ、そうだった！す、すんませんツジラ様！俺って奴ぁ不器用バカなもんでつい貴方様に無礼な口を！」

「あぁいえいえ、気にしないで下さい。それに英雄だなんて烏滸がましい、ただの自己満足ですよ！」

「何を仰有いますか！私ぁガキの頃からアイトラスやクブスにゃ腹が立ってたんです！

それを根絶やしにしてくれた貴方様を、英雄と呼ばずして何と呼びましょう！」

「あぁもう、解りました。解りましたから何でも良いですから敬語をやめて下さい。

年下相手に畏まってちゃ貴方らしくないですよ」

「いえ！そいつぁ譲れません！」

「そうでさぁ！俺達ァ腐ってもイスキュロン民です！とどのつまりは愛と義と哲学が俺達の信条！

ましてや敬意を忘れてちゃあ、この大陸の基盤をお作りになられた黎明六英傑が一人、ミガサ・コルトの神託騎士たるユウゲン様の名が泣くってもんです！」

「どうしてもと仰有るのでしたらツジラ様、貴方様と対等という事にさせて下さい！それでなら納得致します！」

二人の気迫に気圧された繁は、渋々二人の申し出を受け入れることにした。

「……解った。じゃあ俺とお前らはこれから対等だ。これで文句な

いか？」
「「勿論！」」
「それは良かった。……で、問題はお前らをどうやってここから連れ出すかだが……まぁ良い、俺に任せておけ」
「有り難うよ！」
「恩に切るぜ、繁！」

かくして繁は一度病院を去り、リューラを合法的に病院から連れ出す作戦を考え始めた。

第四十九話　これは軍人ですか？　5．ああ、奴らは実に面白い（後書き）

繁の考え出した作戦とは？
次回、リューラがとんでも無いことに！

第五十話　これは軍人ですか？　6．はい、どちらも瀕死です（前書き）

繁は一度宿に戻り、ひとまず報告

第五十話　これは軍人ですか？　6．はい、どちらも瀕死です

―前回より―

「さて」

その日の夜、宿（と、言っても値段の割に所々中途半端に設備や待遇の良いビジネスホテル）の一室に集った我等がツジラジのメンバー達。

「今日は一部で『生存している』という噂の流れているリューラ・フォスコドル元陸軍少佐に実際に会ってみたわけだが、凄かったな」

「うん、凄かった。まさかあんなオチになるとは……」

「あの手の怪物は普通狡猾で打算的な性格で、寄生対象を操って暴れ回ったりするのがスタンダードなもんだけど」

「もしくはあのまま取り憑いて殺害・捕食なんてパターンもありますよね」

「しかしフタ開けてみれば何て事はない、恋するピュアな熱血少年っぽい奴だったと」

『いやぁ、ヒトは見掛けに寄らないなんてのはしつこく言われますが、まさか謎の怪物相手にもそれが通用したとは……』

「んで、まあなんつうかアレだ。

昼間も言ってたが、あいつ等出すぞ」

「「「『は？」」」』

「いやだから、出すんだよあいつ等を」

「出すって、何処から？」

「何だ香織？女の癖に鈍いな。

出すっつったら病棟からに決まってんだろ」

「あぁ、成る程」

「そっちでしたか」

「いやいきなり出すなんて言うから何かと思って」

『成る程確かに、あの二人をメンバーに誘い入れることが出来れば戦力になるだけでなく、普通のラジオらしい企画もしやすくなりますね』

「だろ？何時も血生臭い企画ばっかりってのもアレだしよ、予め録音しといたのを電波ジャックで流しゃ良いんだから自宅で煉●弐通信しつつ反省会出来るし、編集出来るしな」

「デュエルは？」

「遊●王なら可だな。向こうにデッキ置き忘れたからこっちで組み直さねぇと…あ、制限ルールも向こうと違ってたらヤベェな…キーカードが揃うかどうか……」

等と雑談に花を咲かせつつ、五人の会議は進んでいく。

―翌日の隔離病棟―

繁は再びリューラの部屋へと面会に訪れていた。

適当にツジラジについて説明した後、リューラをあくまで合法的に病棟外部へ連れ出す作戦を説明した。

奇妙な事に詳細な説明がなされたのはバシロのみであり、何故かリューラには簡単な指示と気構えについての説明があっただけだった。

そしてその日の夜。リューラは作戦を実行に移す。

「（確か、まずコップに水道水を半分より少ないぐらいまで注ぐ…っと）」

リューラは細心の注意を払って作戦を実行する。

「（それをこぼれないように回して……机の上に置き４０数える…）」

四十秒後。

「（あとはそれを飲んで二十秒以上したら、非常用呼出しブザーを押して…）」

等と考えながら待っていると、リューラの体を突然凄まじい発熱・動機・息苦しさが襲う。

「（っぐぉぁぁっ…なん、だ、、この……発熱と、息苦しさはっ…）」

苦しみ転げ回るリューラは、ふと繁の言葉を思い出す。

―『何があっても状況を疑うな。恐れず段取り通りにやれ』―

「（そうだ……段取り通りに……仮に奴が私を殺すつもりだったにせよ、ここで助けを呼ばなきゃ死んじまう！）」

リューラは必死の思いで這って動き、乱暴に非常用呼出しブザーを叩く。

暫くブザー音が鳴り響き、スタッフからの応答が返ってきた。

『どうしました？』

「苦しい……助け……助けてくれ！息苦しい…熱い……今…にも、今にも、死にそうだ！」

『畏まりました。直ぐに救護班を其方に呼び寄せます』

「あ…ああ……なるべく、早く頼む……。

（クソ……何だこりゃあ……マジで死ぬんじゃねぇか私……つか、バシロの野郎……何処行った……？）」

原因不明の発熱・動悸・息切れに苦しめられたリューラの意識は、時間が経つにつれて加速度的に薄れていく。

そしてリューラの病室に救護班が到着したとき、倒れ伏した彼女の身体からは既に体温が消え、脈拍も途絶えてしまっていた。

この事はすぐさま軍上層部に連絡され、会議の結果死因調査の為司法解剖が決定。

急遽ラビーレマより専門家のチームが召集される事となった。

第五十話　これは軍人ですか？　6．はい、どちらも瀕死です（後書き）

リューラ・フォスコドル、まさかの死亡！？
次回、リューラ＆バシロの運命や如何に！？

第五十一話　これは軍人ですか？　7．はーい、従姉妹の名言です（前書き）

リューラとバシロの運命や如何に！？

第五十一話　これは軍人ですか？　7．はーい、従姉妹の名言です

―前回より―

――ラ――

（……）

―ユーラ――

「（……ん、何だここは……私は確か、死んだ筈……）」

―リューラ、聞こえるかー？―

「（この声……――繁かッ！？）」

ガバァ

深い眠りから目覚めたリューラは、ベッドの上に寝かされていた。
周囲には誰も見当たらない。この部屋が何処かは解らないが、少なくとも死後の世界でない事は確かなようだ。
しかし彼女は全裸な上に、右半身の拘束具は外され、変異した体組織が脈打っていた。自覚はないがかなり魘されていたのであろう、シーツが汗で湿っていた。

「これは……一体……私は死んだ……そうだ、死んだ筈だぞ…？」
一人考え込んでいると、部屋の戸をノックする音が聞こえてきた。

「……入ってくれ」

ドアが静かに開いたかと思うと、エプロン姿で皿か何かを乗せたプレートを持った女が入ってきた。
女の背はリューラよりも低く、見とれるような深紅のロングヘアを棚引かせている。

「漸く目が覚めたみたいね……良かった。さっき繁が起こしに行ったときは相方さん共々ピクリともしなかったって言うから」

女はプレートをベッドの側にあったテーブルに置いた。
中を見てみると、どうやら揚げ麺を茹で戻したものらしい。橙褐色のスープからは、香ばしい香りが漂ってくる。

「……そうか…それは悪かったな……」
「良いのよ別に。それに謝るのは寧ろ繁の方でしょ。何もあんな事しなくたって、貴方を連れ出す方法くらいいくらでもあったでしょうに」
「……ああ、いや、良いんだ別に。

それより、幾つか聞いて良いか？」
「答えられることなら」
「まず第一に、あんた一体誰だ？」
「私？そういえば自己紹介がまだだっけ。
初めまして、私は清水香織。繁の従姉妹で、ツジラジでは司会と連絡係をやってるの」
「そうか……じゃあ次に、倒れてから記憶が無いんだが……私は一体何をされたんだ？
死んだと思っていたはずなのに、何でこんなところに居るんだ？あ

と、何で服が無い？」
「ＯＫ、一度には無理だから順番に答えていこうか。
貴方が熱出して倒れたのは薬のせい。息苦しいのも心拍数があがったのも、全部。
この辺りに棲息してるモリジガバチっていう蜂の幼虫は、頭と身体の側面に円錐形をした毒腺毛があって、そのせいで『ハリムシ』って呼ばれるんだけど、その虫が持ってる毒から作った薬。
その薬を服用したあなたは一時的に発作を起こして仮死状態になったの。
で、軍上層部の脳に私の魔術で介入してあなたを司法解剖にかけるよう仕向け、死体運送業者のふりしてあなたを運び出したってわけ」
「そうだったのか……」
「服がないのは、仲間の元開業医がそうするように言ったから。鎧みたいなのも解熱の邪魔だったから外させて貰ったわ」
「そう、か。苦労かけたな…」
「謝らなくたって良いのよ。あなたも相当苦労してきたんでしょ？」
「いや、そんな事ぁ無ぇさ……私は甘ったれだ。好き勝手生きてきた癖に、天才だ優秀だと周囲からチヤホヤされて育ってきただけの、甘ったれだ。
褒められるような事なんて一つも―
―「果たしてそれはどうかな」―
―「な？」
「だってそうじゃない。貴方の過去を繁から聞いて、気になったから調べてみたんだよ。
あなたは自分のことを『周囲の七光りで出世した自分勝手な甘ったれ』なんて思ってるかもしれない。
でも、周りのみんなはそんな事思ってないんだよ。
インターネットで貴方の名前を検索にかけただけで、ファンサイトが幾つも出てきたよ。

有名人には大体毒づくのがセオリーな掲示板サイトでも、逆に貴方を否定する奴が叩かれる始末だったし」

「だから……何だってんだ？他人の評価なんてアテになんのか？」

「なるね。寧ろ他人の評価だからこそアテになるんだよ。

『自分自身のことは自分が一番よく理解出来ている』っていうのは間違ってない。

でも、自分を客観的に見るっていう事は誰にでも簡単に出来る事じゃないし、他人じゃなきゃ気付けないような事だってある。

物事を計る計りは一つじゃいけない。色々な計りを幾つも使って、ようやく真実に近付ける。

自分の考えも他人の考えも取捨選択して、ようやく本当の自分が見えてくる。

それが世の中ってもんなんだよ、きっと」

「他人の評価も強ちバカに出来ねぇってか。

有り難うよ、香織。お陰でなんか元気が出たぜ」

「そう、それは良かった。あと、良かったらスープ食べてね」

「おう、貰っとく」

「それじゃ、何かあったら呼んでね」

そう言って、香織は部屋を後にした。

「……繁の従姉妹か……なあバシロ、お前はどう思う？」

その言葉に応じるように、露出したリューラの右肩からバシロが顔を出した。

「どうって言われてもなぁ……見た目以外で解ることと言やぁ、かなり良い女だって事と魔術師だってことぐれぇだぜ」

「それは私でも解ってんだよ。

繁にせよあの香織って女にせよ、どっちも私にとって最高なのは違い無ぇんだ」

「……どういう意味だ？」

バシロは嫌な予感がした。

「どういう意味って、決まってんだろ？
容姿（ツラ）、性格（キャラ）、体形（スタイル）の全部がだよ！」

「……はぁ？」

バシロはリューラが何を言いたいのか今一判らなかった。

「いやだからさ……はっきり言うとあいつ等、マジけしからん！もといエロ過ぎるっ！」

「つまり、平たく言うと？」

「ヤりてぇ！」

予感が的中した。

「……そういやお前フタナリだったな」

「厳密には先天性生殖機能併合症っつう奇形の一種らしいけどな。奇形と言ったって障害が出るわけでもねぇ。ただ孕むも孕ますも自由ってだけでよ。孕ます率が極端に低かったり、孕む機能が無かったりするフタナリとは別物だ。

調べてみたら男ベースもあってよ、フタナリは乳が張り出してんだが先天性生殖機能併合症はそれがなく、ツラも身体も生涯女みたいなんだと」

「あぁ。そこまで頭の回る作者が怖ぇよ」

「ま、私みたいな身体の奴が皆バイなわけじゃねぇ。

私の場合、男と女の気質がゴタ混ぜんなったような精神状態でよ。バイはそれの弊害だ」

「そうなのか」

「まぁ、ヤるのも大事ではあるが、だ」

「どうした？」

「今の目標はひとまず、秋元の野郎を叩き潰す事だ」

「確かに、何をするにもそれが最優先だな」

こうして、新たな決意を胸に二人は再び眠りにつく。

第五十一話　これは軍人ですか？　7．はーい、従姉妹の名言です（後書き）

次回、遂に士官学校の実態が明らかに！

第五十二話　これは軍人ですか？８．はい。殆ど台詞で御免なさい（前書き）

ある公務員の５１日間。

第五十二話　これは軍人ですか？8．はい。殆ど台詞で御免なさい

―デザルテリア国立士官学校数学教師高志・カーマインの部屋に遺されていたレコーダーより―

カチャリ

―ズッ――ザザァ――チッ、チチッ――――

《一日目。
黒板用コンパスを新調した。やはりこの手の金属製品は岸本工業に限る。
数日前から話題になっていた新任教頭の件だが、今日になって漸くその顔を拝むことが出来た。
確か秋本とかいう名前で、ヤムタの大学を出た鼠鮫系鰓鱗種だというが、どこか胡散臭かった。
ディロフ教頭の優秀さに慣れていた所為だろうか？それにしてもおかしい》

《五日目。
一昨日から引き続いて胃が痛い。
医者曰く胃潰瘍になる恐れがあり、入院の可能性も捨てきれないという。
これもあいつの…ヴァロータ・パラルス・カラリェーヴァ・イスカとかいう無駄に名前の長い女子生徒の所為だ。
理事長の孫娘であるのを良いことに、言いたい放題散々言うだけ言うしか脳のない奴だ。
体育担当の日向先生曰く、姉のリェズヴィエも相当な問題児だったが理事長の手前注意も出来なかったという。

全く、どうすればいいのだろうか……》

《九日目。
昼下がり、暇だったので久々にハコガメの飼育小屋に行くと秋本教頭が居た。
教頭は何処か虚ろというか悲しげな表情で、どうにも話し掛けるのが躊躇われた。
するとそこへ、高等部の女子生徒が現れた。
衛生科の二年生で有角種、名前は確かリノ・ピプシル。私が教えている生徒の一人である。
近頃の富裕層としては珍しい人格者で、クラスメイトからも慕われていた。
様子を見るに、ハコガメの餌を持ってきたのだろう。ふと用事を思い出したので、その場を後にした。

しかし今になって思えば、彼女のスカートは少々丈が短すぎるのではないだろうか》

《十三日目。
近頃は特筆すべき問題も無く、胃の調子も良い。
作家志望だった友人が新人賞を受賞、デビューが決まったという。
今度、他の友人達と共に祝賀パーティを開催しよう》

《十七日目。
祝賀パーティ当日。彼は涙を流して喜んでくれた。大成功だ》

《二十日目。
作家志望だった友人のデビュー作が出版された。ヤムタが舞台の推理小説で、高校時代書き連ねていた作品のリメイクだと言うが、とても面白い》

《二十二日目。
秋本教頭に召集され、緊急の職員会議が開かれた。
何でも、近頃生徒達の校則違反が酷いので取り締まりを強化するとか。その場に居た殆どは賛成の姿勢を見せたものの、私は教頭の言葉に疑問を抱かざるを得なかった。
手始めに翌朝の持ち物検査から始めるらしい。教頭曰く『違反状態の解消が見られない限り校内に入れるな』との事。
しかも運の悪いことに、私も教頭から名指しでリーダーに指名されてしまった。
曰く『朝早くから学校に来て校内の掃除や必要な配布物の準備などを済ませてくれるカーマイン先生の生の勤勉さを見込んで』との事らしい。
実際はそんな作業など直ぐに済ませて職員室の隅で一人ゲームしてるだけなのだが。
そもそも持ち物検査にリーダーも何も無いだろうに》

《二十三日目。
どういう事だ!?おかしい!おかしい!何が起こっている!?
今日は珍しく授業が無く、仕事と言えば日課と登校時の持ち物検査だけだったのに!
あんな持ち物検査が果たして有り得て良いのか!?女子生徒に抱きついたり、男子生徒を木刀で殴り倒したり!
馬鹿げている!有り得て良いはずがない!
挙げ句の果てには歩兵科の教師が女子生徒の改造制服を無理矢理引きはがし、狙撃科の教師は指輪・付け爪等というアクセサリー類の装着を理由に拳銃で男子生徒の手を吹き飛ばした!
止めようかとも思ったが、生来の臆病が災いしてはっきりと意見を申し立てることも出来ない。
最初は気の狂った教員達が勝手な考えで暴挙に出たのだと思ったの

ではあるが、教頭が女子生徒のミニスカートを無理矢理下ろした辺りでそれが間違いだったと気付く。
耐えきれなくなった私は腹痛を理由にどうにか自宅へと逃げ帰りこうして日記を更新しているわけであるが、今も恐怖と不安と息切れが止まらない！
……思い出しただけでも気分が悪い、今日は一日休むことにしよう》

《二十四日目。
持ち物検査は続行されていたが、昨日のような事にはなっていなかった。
それと校門をくぐる瞬間、白黒のツートンカラーに赤いランプというスタイリッシュな乗用車を見掛けたが、きっと趣味の良い来客のものだろう。
途中、警察官らしき人物ともすれ違ったが、恐らく近頃多発している質の悪い家焼きへの注意を促しに来たと行った所だと推測する。
というか、そうだ。そうであるに違いない。既に死人も出ている事件なのだ。公的機関に注意を促すのは警察機関として当然の行いだ。
家主の居ない時間を狙う空き巣と違い、家焼きは家主の有無を問わず動向に躊躇いがない。私も気を付けなければ》

《二十七日目。
特筆すべき問題点はない。
そういえば士官学校の女子の体操着は何時からブルマーになったんだろうか》

《二十九日目。
そういえば忘れていたが、秋本教頭は赴任当初から校則改定に余念がなかったように思う。
近頃悪化した胃潰瘍によって不本意ながら入院を強いられている身

の上なので詳しいことは知らなかったが、日向先生から情報を貰って驚愕した。
『クラス内のトラブルは担任教員またはクラス委員の判決に従う』？
『男子生徒は女子生徒の、女子生徒は教頭の指示に絶対服従しなければならない』？
『選考審査で代表に選ばれた女子生徒は、指示に従い奉仕活動に従事すべし』？
ふざけるな。これが学校の校則か？私は怒りがこみ上げてきた。
しかし入院中の身である私にはどうすることも出来ない。日向先生も、近頃は学校の雰囲気が何処か怪しいので色々と理由をつけて仕事を休むようにしているらしい》

《三十二日目。
日向先生から連絡があった。どうにも学校が怪しいので勤め先を変えるのだそうだ。
賢明な判断だ。進行方向も解らないまま正体不明の敵に向かって行けば、待ち受けるのは十中八九敗北と死だ。
彼は逃げざるを得なかった。いや、逃げるべきだったのだ。こう言うのも何だが、彼はあくまで職員でしかなかった。
だが私は違う。私、高志・カーマインはデザルテリア国立士官学校高等部・軍用理学コースの卒業生だ。
卒業生である分、士官学校への愛は人並みにある。学校の為に己の身を擲(なげう)つ覚悟も、あるにはある。
ならばどうしてやらずに居られようか。
そうだ。そうと決まれば、まずは胃潰瘍を治そう。話はそれからだ》

《三十四日目。
胃潰瘍が驚くほど早く治り、退院に漕ぎ着けた。あの軟体種の医者がくれた薬の効き目は素晴らしい》

《四十日目。
調査の結果、一部教員・生徒が秋本教頭と裏で繋がっている事が判明した。
全員で何人かまでは不明瞭だったが、自身以外の男性を扱き下ろすであろう秋本教頭の事だ。
全員が女性である事は予想が付く》

《四十一日目。
教え子の一人、中等部の女生徒で菌類種の三沢紀美歌が職員室にやって来た。
何でも、現行中の単元で解らない部分があるので教えて貰いたいそうだ。
思い付く限りの攻略法を伝授すると、元気な声で礼を言い去っていった。彼女は良い子だ》

《四十六日目。
身体に言い様のない違和感を感じるようになってもう三日になる。
医者に見せてもすこぶる健康だと言われたし、特に異常も見られないそうだが何かおかしい》

《四十七日目。
遂に決定的な情報を捕らえた。繋がっている女性達は彼の愛人だったのだ。
あとは該当者のリストと、教頭の悪行を実証するものがあれば私の勝ちだ！
しかし身体の違和感が酷い。精神科に通うべきか？》

《四十八日目。
特筆すべき事は何もない。身体の違和感が唐突に消え失せたが、やはり気のせいだったという事だろう》

《四十九日目。
頭が痛い。今日は一日寝ていよう》

《五十日目。
何だこれは……一体これは何だ!?私は一体どうなっている!?私に何が起こった!?
私は一体誰に何をされたんだ!?
私は一何処に向かおうとしている（・・・・・・・・・・・・・）!?
私は何になってしまうのだ!?
これはそもそも何だ!?

……落ち着こう、そうだ。今日はもう今日は休もう。

私は間違っていたのだろうか。あの時転職していれば、こんな事には……》

《五十一日目。

こッ、こッれ、れはッ…一体ナんなンだ!?
私ｎＯ、
カＲａＤａ牙ッッッッ、
ドろ…けｔａｌｅ……ｎあんえｔッ……
ぁ……ぇぁぅ……ｇ……》

――ズッ―

―ザザァ――――

―チッ、チチッ――――――

―ブツッ――――

第五十二話　これは軍人ですか？８．はい。殆ど台詞で御免なさい（後書き）

次回、遂に本格的作戦始動！

第五十三話　これは軍人ですか？　9．そう、学生生活は優雅に（前書き）

奴らが遂に動き出す！

第五十三話　これは軍人ですか？　9．そう、学生生活は優雅に

―リューラ加入より二日後の朝・デザルテリア国立士官学校高等部軍用魔術コース3年A組―

「今日は皆さんに転入生を紹介しなければなりません」

クラスを受け持つ蔓植物系葉脈種の女性教師がそんな事を言うと、途端に教室内がどよめき立った。

「はい、静かに。逸る気持ちも判らなくありませんが、先ずは何時も通りの我々らしく出迎えてあげましょう。
では、どうぞ」

教師に促されるまま、転入生―背丈はそこそこ、体格は平均より若干起伏があるといった感じの、大人びた霊長種女学生―が教室に入ってきた。
整ったヤムタ系の顔立ちと、背を被うように腰まで伸びた深紅の長髪が織りなす美しさに、男子ばかりか女子までも思わず見とれてしまう。

転入生は殆ど無駄の見られない動作でタッチパネルに触れ、液晶式黒板に名前を打ち込んでいく。

「今井椿姫（ツバキ）です。
色々とご迷惑をおかけするかもしれませんが、皆さんどうぞ宜しくお願いします」
「今井さんはノモシアのガルダスタフ国立魔術学校に通っていたそうですが、皆さんもご存じの通り先日の内乱で校舎が丸ごと無くな

ってしまった為転入を余儀なくされてしまったそうです。
皆さん、気質や考えの違いはありましょうが、差別や迫害の無いよう、イスキュロン民として最大限の敬意を以て接していきましょう。

それでは今井さん、席はノゼツさんの隣が良いでしょう。
ノゼツさん、良いですか？」
「はい。喜んで」
「宜しくお願いします、ノゼツさん」
「いえいえ此方こそ」

かくして椿姫と猫系禽獣種ロイマ・ノゼツは親交を深め、お互いに『攻撃系魔術が扱えない体質』と、『攻撃系は天才だがそれ以外は馴染まない家系』であった為、実習等を通してすぐさま意気投合した。

―翌日―

朝間の寮から高等部諜報科校舎へ向かう通学路を、一人の女生徒が走っていた。
女生徒はスカイブルーの羽毛を持った四足型羽毛種であり、口には朝食のトーストなど銜えている。
というのもこの女生徒、今現在まさに遅刻するか否かの瀬戸際なのである。

「んもう、こんな朝に限って遅刻なんてッ！」
無理をしなければいいのに、女生徒は焦りから疾走しつつトーストを喰らう。
そして彼女が最後の曲がり角に差し掛かったとき、事件は起こった。

ドン

「きゃっ！」
「ぬぉっ！」

女生徒は曲がり角から現れた何者かに激突、大きく尻餅などついてしまう。

「痛たたた……」

どうにか立ち上がった女生徒は辺りを見渡すが、ぶつかった相手らしき人影は見当たらない。
そして再び走り出そうとした所で、とんでもないものを見掛けてしまう。

それは自分と同じ学科と思しき男であった。詳しい識別は出来ないが、種族は恐らく外殻種であろう。
この種族は家族間でも個体差が激しく、専門の知識が無ければ別種に見えてしまう事も多々あるのだ。
それはまだ良い。しかし問題は、男の状態にある。
男はどういう訳か地面に仰向けになって倒れ伏しており、しかも頭から緑と黄色が入り交じった、汚染された淡水のような色の体液を流している。

「だ、大丈夫!?」

女生徒は思わず駆け寄った。先程ぶつかったのはこの男であり、恐らく見た目に反して軽量であるためぶつかっただけでこんなに遠くへ飛ばされてしまったのだろう。
だとすれば遅刻をしようが助けるのは自分の義務であるし、仮にそうでなくとも眼前に横たわる瀕死の外殻種を見捨てて走り去るなど、彼女の哲学が許さなかった。

駆け寄ってみると、どうにも息をしているようには見えない。
途端、不安になった女学生が男を揺り起こそうとした、その時。

「ご心配なさらず」
男は言葉を発すると共に勢い良く起き上がり、どさくさに紛れて女学生の額にキチン質の右肩をぶち当てた。
恐らく故意ではあるまい。偶発的な事故なのだ。そう、事故でしかない。
「ッッッッッッッッ～！」
頭を抑え転げ回る女学生に、男は言う。
「おっと、大丈夫ですか？状況からして事故とは考えられませんね……一体何処の誰にやられました？」
いけしゃあしゃあと、謝るでも詫びるでもなくそんな事を言う。
そもそも声色や見下ろすような態度からして、女学生の身を案じているとは考えがたい。

「ッッ……あん、あんた……」
「はぁ、私ですか？」
「そう、あんたにやられげふぇっ！」
女生徒の腹部に走る衝撃。見れば外殻種らしきの男が女生徒の腹を踏み付けている。
「その調子なら大丈夫そうですね。安心しました」
「んがっ！ぎぇびっ！ぼべっ！」

あっさりとそんな風に吐き捨てた男は、故意に女生徒を踏み付けるようにしてその場からそそくさと立ち去っていった。

結果女生徒は見事に遅刻。職員室で科長にどやされながら入室許可証を受け取り、腹をさすりながら教室に入っていった。

―教室（高等部諜報科３－Ｆ）内―

「ホームルームの途中だから言うが、今日は何か転入生が来てんだよな」

内部が水のような液体で満たされたパワードスーツ状の機械の内部で蜷局を巻いた脚無井守（アシナシイモリ）系半水種の担任教師が、ふとそんな事を言い出した。

「何か前にラビーレマやノモシアの諸学校で起こった乱戦とかの影響で校舎が使えなくなったんで、授業数を補う為に他校へ一時的に生徒を転校させるって話があったろ？
あれの一人らしいわ」

担任教師の言葉を聞いて、教室内がどよめいた。

「ァい、静かにィ。そんなに騒いじゃ転校生気圧されて教室入って来れねぇだろ？」

担任の男は騒ぐ生徒達を静まらせ、教室内に生徒を招き入れる。
朝方外殻種の男に踏み付けられた女学生も、果たして転入生がどんな人物なのかと気が気でない。
そして彼女は、教室内に足を踏み入れた瞬間驚愕する。

「（あいつは！）」

教室に招かれた転入生というのは他でもない、朝方彼女とぶつかった挙げ句腹を踏み付けて立ち去っていった外殻種の男だったのである。
更に女学生には、おかしな事がもう一つあった。

「（何…何なのよッ!?朝は死ぬほど憎たらしいって思ってた筈なのに、何で今はあいつの姿を見るだけでこんなに胸の鼓動が止まらないの!?
まさか私……あいつに……）」

年頃に達した人並みの女であるが故に、女学生は不本意ながらも覚っていた。

この胸の高鳴りはもしや、恋の兆しなのではないかと。

認めたくはない。しかし、本能には逆らえない。

元来属する種の九割が一夫一妻を貫き、死が分かつまで添い遂げるとされる鳥類の形質つ羽毛種は、恋愛や性愛については敏感であり独自の哲学を持つ者が極めて多いとされる。
風俗店勤務者やアダルトビデオ俳優も全種族中極めて少ないという統計も出ており、羽毛種は性を神聖視している傾向があるとも言われる。

かくして、羽毛種である女学生の葛藤に満ち溢れた学園生活が始まろうとしていた。

第五十三話　これは軍人ですか？　9．そう、学生生活は優雅に（後書き）

これは一体どういう事なのか！？まさか蠱毒が真面目にラブコメディを！？

第五十四話　これは軍人ですか？　１０．いえ、恋するバカです（前書き）

抱腹絶倒？諜報科女生徒・財田の不毛なる日々の始まり。

第五十四話　これは軍人ですか？　１０．いえ、恋するバカです

―前回より・高等部諜報科３－Ｆ教室―

外殻種風の転入生は、液晶式黒板に名前を打ち込んでいく。

「中村輝実です。ラビーレマの東ゾイロス高等学校から来ました」
「この種族欄にある『ツバキを刺すゾウ』って何て読むの？」
「あぁ、それはサシガメです」
「サシガメか……確か近頃ラジオをやってる有資格者のヴァーミンもサシガメだったな」
「えぇ。私も彼のように堂々と生きていられたら、と思っています」
「そうか。じゃあ席は、そうだな……財田の隣で良いか」
財田というのは、朝方輝実に腹を踏み付けられた件の女学生である。
「（！？）」
いきなりの出来事に財田は動揺したが、気取られてはまずいと平静を装って事を受け入れた。

―授業時間―

一限目の諜報基礎概論、二限目の数学に続く三・四限目はＤ組との合同による白兵戦実習であった。
白兵戦実習とはいえ無論実銃や本物の刃物を用いるわけではなく、特殊な訓練服と訓練用の各種武器類を用いて行うものであり、コンピュータによる判定で勝敗が決まるというものだった。
しかも制限時間や体力ゲージめいたもの（無論、技の判定に用いるだけである）まで設けられ、見ている方も楽しめるため中々に人気の高い授業となっている。

「確か男子更衣室の場所は何処だったかな」

輝実は、担任教師に教わった男子更衣室として用いらる部屋を探していた。

「確かこの辺りだった筈なんだが……お、ここだここだ。

失礼しまー――って、アりェ？」

着替えようと部屋の引き戸を開けた輝実だったが、内部の光景を目にした瞬間彼は一瞬凍り付いた。

理由はただ一つ。引き戸の向こうに広がっていたのが俄には信じがたい光景であったからに他ならない。

端的に言えば、輝実は更衣室を間違えたのである。

しかもそれだけではなく、着替えていたのは別クラスの女生徒達であった。

「おっと、これは失礼」

そう言って立ち去ろうとする輝実であったが、そんな彼の耳を女生徒達の甲高い悲鳴が劈く。

『『『『イヤァァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』』』』

怒り狂った女生徒達が、輝実目掛けて向かってくる。

結末は大体予想が付くと思うが、このまま状況を放置したままだと基本袋叩きにされたりと十中八九ろくな目に遭わない。

「――――ッッッ、ちょっとあんた達ねぇ！出会い頭バインドボイスで怯ませて突進とか必中確定じゃないですかァ！ィやだァんもウ！」

等と訳の判らない事を宣いながら、輝実は制服の上着を振り回して応戦する。
そんな小学生の遊び程度の抵抗が何になるかと思うだろうが、ポケットに入れていた諸々の私物が働きかけて中々馬鹿に出来ない鈍器になっていた。

しかしそれでも尚着替えそっちのけで突撃する女生徒達を相手に、輝美はあくまで着替えつつ様々な武器や動作で対抗する。

そしてあらかたの女生徒達が動けなくなった辺りで輝美は戦いを取りやめ、無言のまま実習室へ向かって行った。

結果としてその場で着替えていたD組の女生徒達は揃って授業に遅刻。
担当教員から怒鳴られ同級生からも白眼視され、事情を説明しても現実味の無さから取り合って貰えなかった。
若い女が力を持ちつつあるこの平成ライトノベル界隈にあって、輝美はその中で最も恐ろしい一つとされる『群れた女の怒り』を打ち破る可能性を見出だしたのである。

―授業開始―

「それでは予告通り、本日は両クラス代表による対抗試合を執り行う。
外野はそれぞれの試合の内一つに関するレポートを提出すること」
それを聞いた輝美は、他の生徒に混じって観覧席に向かおうとする。
しかし程なくして、担当に呼び止められた。

「中村君」

「何でしょう？」
「すまないが君、試合に出てくれないか？」
とんでもない一言だった。
「……何故です？」
「いや、実は今日財田君と一緒に試合へ出る予定だった男子が急に痛風で倒れたのだ」
「では別の生徒様に頼んでは？」
「そうしたいのは山々なのだが、D組の代表はどちらも還暦を過ぎた退役軍人の孫でな。おかげでうちの代表二人以外はD組の代表に妙な恐怖心を抱いておって、試合へ出たがらんのだよ」
「御言葉ですが……それはイスキュロン民としてどうなんです？」
「確かにそう言われればそうなのだが、致し方のない事なのだ。昔に比べれば遙かに脳筋思考の和らいだ現イスキュロンだが、その分家系や資産が力を持つことも珍しくはない。故に、そういった権威主義に対し耐性のある君に――「ちょっと待って下さい寺杣先生！」――ん？どうした財田君？」
「中村は転入したばかりで、士官学校の基礎を知らなさすぎると思います！」
「いや、案外そうでもない。中村君は転入前から我が校についてよく調べてきてくれている」
「―ッ、そうだとしても中村はラビーレマ民！身体能力はうちのクラスで最下位のイゼルにも及ばない筈です！クラスの威信を賭けた試合に、そんな奴は―」
―「その件についても心配しなくていい。中村君の身体能力は転入前のスポーツテストで実証済みだ。そうでなければ諜報部になど、百億詰まれても入れはしないさ」
「……」

財田は心底不服だった。只でさえ緊張する対抗試合のパートナーがよりによってこんな男では、試合の勝敗にかかわらず緊張で精神が持たない。
しかしこれも現実だとやむなく受け入れることにした財田は、仕方なく輝実に言った。

「良い？今日の所は仕方なくアンタと組んであげるけど、絶対足手まといになんかならないでよ？」
「解ってますって」
「自分がヘマして自滅するんならまだしも、私まで巻き込んだりしたら承知しないからね！」
「そら、可能な限り善処していきたいと思いますがね」
「あ、あと……ケガ……そう、ケガなんてしたら許さないわよ！？解った！？」
言った側から財田は盛大に後悔した。自分は何を言っているのか。こんな虫螻如きに、何故こんなにも気を遣ってやらねばならないのかと。
「ご心配どうも。肝に銘じますわ」
そう言われて益々立場の無くなった財田は更に強がろうとする。羽毛種故に、恋愛感情を安っぽい粗末なものにしたくないという建前の元に。
「か、勘違いしない事ね！別にアンタの事が心配だとか、ケガして欲しくないとか、そういう事は思ってないんだから！
ただ単に、初実習で転入生にケガされるとクラス代表としての私の立場が無い。そう、ただそれだけよ！」
「へぇ、解りました」
輝実は心底どうでも良さそうに手持ち武器である槍を調整しながら答える。
その態度に腹を立てた財田は、思わず輝実に掴みかかろうとするが、

「あ、試合開始や」

肝心の相手を掴み底ね、見事に転んでしまう。
それを見た輝実は悪びれる様子もなく、

「財田さん、何してんです？
まぁ良いや。私先行ってますんで遅れないように来て下さいね」

等と実に軽薄な態度で立ち去っていった。

「（中村の奴、私がどれだけ心配してあげてるかも知らないで……。見てなさい……乙女心を弄んだ罪、その身を以て償わせてあげるわ！）」

起き上がった財田は至極身勝手かつ稚拙な決意を胸に、アリーナへと向かった。

第五十四話　これは軍人ですか？　１０．いえ、恋するバカです（後書き）

次回、試合開始。

第五十五話　これは軍人ですか？１１．おう、やっぱ俺こういうの柄じゃねーわ

遂に試合開始！

第五十五話　これは軍人ですか？１１．おう、やっぱ俺こういうの柄じゃねーわ

―前回より―

試合開始に伴いアリーナへ集った四人。
Ｆ組代表の財田と輝実に、Ｄ組代表の男女二人。

「御機嫌よう、財田さん。
それとそちらの方は……」
「転入生の、中村です。以後宜しく」
「初めまして。私はデザルテリア国立士官学校高等部諜報科のエリートこと、トルバ・リナラブ。
伝説的狙撃手として名高きウィゼル・リナラブの孫娘ですわ」
金属光沢を放つ青い訓練服に身を包んだトルバの自己紹介には、根底から相手を見下すような傲慢さが見て取れた。
「初めまして、中村クン。僕はラモル・マカラ。
祖母は軍事魔術の天才と名高きイルミネル・マカラ博士だ」
トルバとは対照的に深紅の訓練服に身を包んだラモルの目つきには、言い様のない怪しさが漂っている。

「それにしても、貴方が噂に聞いた転入生ですのね。
ラビーレマの東ゾイロスから来たと聞いたのでどんな方かと思えば……ッハ、外殻種だなんて！てんでお笑いですわ！」
「おいおいトルバ、幾ら揺るぎようのない真実だからって相手へ直に言うのは失礼というものだよ。
ラビーレマは只でさえ低俗な、無節操と卑怯者の多い汚らわしい学術者共の地。
統領キラマを始めとする忌まわしき悪魔ハタム一家の力を受け継ぐ情報弱者共だからと行って、露骨な中傷は可哀想というものだよ」

「そうですわね。反面私たちの大陸イスキュロンは、誇り高きミガサ・コルト様の力を受け継ぐ絶対強者の地！
そして私達は、そのイスキュロンの中でも特に選ばれた選民の血を引き継ぐエリートの中のエリート！
虱まみれの落ち零れ羽毛種や、地を這う事しか出来ない外殻種如き、私たちの敵ではありませんのよ！」
「その通りさトルバ！軍人の家系にある僕達は無敵だ！
そうとも！僕等は――「凄いですねえッ！財田さんッ！」―は？」

二人の話を聞いていた輝実は、突如大声で財田に話を振った。

「な、何が？」
「何って、決まってるじゃありませんかッ！彼らですよッ！
無節操で汚らわしく卑怯な情報弱者の虫螻である私には到底知り得ない世界の話ですがッ！
彼らの祖父母は相当な力の持ち主だそうでッ！」
「えぇ、そうらしいわね」

財田は覚った。おそらくこの男は、二人をおちょくる為にこんな事を言っているのだと。

「つまり彼らも相当な実力者という事ッ！
しかも凄いのは彼らの祖父母の専門ッ！
リナラブ様は狙撃手、マカラ様は魔術師だと言うじゃありませんかッ！」
「結構有名よ？あんたは転入生だから知らないのも無理はないけどね」
「そうでしょうそうでしょうッ！彼らはそれらの天才でしょうッ！
しかしながらそれだというのに彼らの所属は諜報部ッ！
祖父母の形質を濃く引き継ぐ選民のエリートであるならばッ！

狙撃手の孫は狙撃科にッ！
魔術師の孫は軍用魔術コースに向かうのが普通と見えるッ！
しかし彼らは態々諜報部に入学したッ！」
「そうよね！つまり彼らは、本来目立つべきであろう自らの運命を諦め、進んで―
―「お黙りなさいッ」
―「黙れェッ！」

「さっきから黙って聞いていれば何ですの！？」
「お前達、僕等をバカにしてるだろう！？」
怒り心頭で怒鳴り散らす二人に、輝実は言う。
「何です？もしや今さらお気づきになられたんです？
テメェ等のバカ丸出しの長ったらしい前口上は、バカにして下さいって言ってるようなもんだろうによォ。
あぁ、悪い悪い。もうちょっと簡単に説明すべきだったか？悪いな、バカ相手にすんのも辛くっ―
―「黙れこの虫野郎がァァァァァァ！」

度重なる輝実による長髪で怒り狂ったラモルが、遂に彼目掛けて掴みかかってきた。
しかし輝実はそれを無駄に華麗な動作で回避。結果、壁にぶつかって仰向けに倒れてしまう。
ノびている彼の耳へ、輝実の更なる罵倒が飛び込んでくる。

「おいおいどうしたァ！？エリートってなァそんなモンかァ！？」
「だ、ま、れ、と、言ってるだろうがぁぁぁぁぁぁぁ！」

更なる怒りを胸に、ラモルは再び突進を繰り出す。挑発の為に近付いた輝実も流石にこれを避けるには至らなかったが、この程度の相

手に掴まれるような彼でもない。

「んじゃ財田さん、あとは任せました」

「ひょ？」

財田が自分の立場に気付いた時にはもう遅かった。

近くに居たが為、輝実によってラモルの攻撃を防御する盾にされた彼女は、理性を失い暴走したラモルに掴まれ、そのまま怒濤の間接技連携『狂戦士の魂（ヴァーサーカー・ソウル）』を凄まじい勢いで喰らい続けた。

コキッ「ガッ！」

クキッ「イ〝っ！」

ポキュ「エあッ！」

ペキョ「ウおッ！」

ポキャ「ん〝ッ！」

ゴギリ「げあェッッ！」

『狂戦士の魂（ヴァーサーカー・ソウル）』を受けた財田は試合開始五分もせずに敗北判定を受けた。

しかも受けたのが訓練用の武器攻撃ではなく本気の関節技攻撃だったので訓練服越しに凄まじいダメージを受けてしまっている。

そして敗北判定が下っても尚攻撃をやめないラモルは、既にガールフレンドであるトルバの言葉さえ耳に入っていないようだった。

そんな戸惑うトルバの隙を突き、輝実は槍で彼女の手元を殴り銃を叩き上げる。

「わ、私のライフルがっ！」

そして背に備わった翅で飛び上がると、宙を舞う銃を取り、未だ技をかけ続けるラモルの背目掛けて銃口が前を向くように投げつける。

そしてそれを追うようにして天上を蹴り、飛び蹴りの姿勢を取った。

そして、僅か二秒後。

ヴゴギリリッ

輝実の飛び蹴りによって推進力が増し加わったライフルの銃口がラモルの背へと突き刺さり、その身体が逆方向へ角を成して折れ曲がった。

第五十五話　これは軍人ですか？１１．おう、やっぱ俺こういうの柄じゃねーわ

※このあと輝実は突如姿を消し、それと同時に彼は士官学校どころかこの世界にあえ「存在しないこと」になった。
また、輝実によって脊椎を直角にへし折られたラモルは病院へ搬送されるも死亡。
現場に居合わせたトルバはショックで精神に異常を来し、隔離病棟暮らしを余儀なくされる事となる。
試合に参加した中で唯一生存した財田は、全身に複雑骨折を負いながらも療養を続けているという。

第五十六話　これは軍人ですか？　１２．いやぁ、それがちょっと微妙な所でして

遅くなったけど続きです。

第五十六話　これは軍人ですか？　１２．いやぁ、それがちょっと微妙な所でして

―前回より―

「と、言うことがあってだな」
「あってっていうか引き起こしたのアンタよね！？
ねぇ、アンタなんでしょ！？」
「まぁ、そう言われると認めざるを得ないな」
『認めざるを得ないって何ですか！？
潜入初日に騒動起こした挙げ句殺しまでする必要性が何処にありますかっ！？』
「ここにあった気がする」
「何だその言い訳はァ！？清水の姉ちゃんはしっかりと情報掴んで来たっつーのにオメェはよー！」

デザルテリアにあるホテルの一室に怒声が鳴り響く。
それらは現在の所、ただ一人の男に向けられていた。
その名は辻原繁。異世界カタル・ティゾルの破戒神を目指し奮闘するラジオＤＪである。
そして彼を怒鳴っているのは、不老不死の元開業医ニコラ・フォックス、生物と霊の中間的存在の小樽羽辰、謎の寄生生物バシロの三名。

怒りの理由については最早詳しく言及するまでもあるまいが、転入生を装い士官学校へ潜入した繁と香織の動向にあった。
というのも、あくまで転入生として過ごしながら教頭について調べ続けた香織に対して、繁の行動は前回あったように散々だったからである。

あのあとその場から逃げ出した繁は香織に転入生・中村輝美に関する全情報を消させ、以降適当に校内を徘徊した（本人談）。

これを聞いて怒らない者も多くはあるまい。
暫くして、怒鳴り散らす三人をどうにか残る三人が宥めるに至る。
そして場が落ち着いた辺りで休憩をはさみ、香織が報告する流れとなった。

「そりゃみんなは、繁の事を許せないと思う。
だけどそれは、単に繁の言い方に問題があっただけなんだよね」
「どういう事？」
「繁はさ、自覚は無いみたいなんだけど話し方に癖があってね」
『癖、ですか』
「そう、癖。自分のことについて話す時、無駄にマイナス方向へねじ曲げんの」
「マジ？」
「マジ。だから繁が自分のやった事について話してるのを聞くときは『口ではこう言ってるけど実際はそれほど悪くないんじゃないか？』って思いながら聞くと良いよ」
「成る程、覚えとくわ。で、つまりどういう事？」
「一緒に潜入してた私だから言うけども、私が情報収集出来たのは繁が騒ぎを引き起こしてくれたからっていうのもあるんだよね」

以降、香織が話したことを箇条書きにすると、
・転入生を装い士官学校に潜入するまではどうにかなった。偽造書類の内容は全て嘘八百だったが特に弾かれるでもなくすんなりと通った。
・クラスメイト達も怪しげな新参者をすっかり信頼しきっていた。隣人も人格者そうであり、潜入捜査は上手く行くものと思われた。
・しかし問題はすぐさま発生した。香織がいざ調査開始と思い諜報

用の魔術を起動すると、不可視のエネルギーが働いて魔術が打ち消されてしまったのである。

・調べてみた所、これは犯罪防止の為に校内へ設けられたセキュリティシステムであり、専門職員によって解除されない限り生徒は校内で魔術を扱う事が出来ないという。

・だが香織は魔術を用いない諜報活動については上手くやれる自信がなかった。聞き込みでは時間が足りないし、それ以外の方法ではすぐにボロが出そうでならない。

・しかし三限目の序盤辺りで、彼女に転機が訪れる。諜報科の白兵戦実習で死人が出たというのである。

・しかも死んだのは退役軍人の孫で金持ちのエリート株だったようで、ともなれば授業どころではなくなる。

・結果的、魔術実習の授業はセキュリティシステムが解除されたまま放置される羽目に。混乱に乗じて自身と繁の学籍情報を抹消し、ついでに学校関係の情報もある程度搾り取って逃げ帰ってきた。

『成る程……つまり繁さんの大暴れも強ち叱れない、という事ですか』

「っていうか、寧ろ褒められるべき行為だったのね……」

「怒鳴ったりして悪かったな、ツジハラ……おめーすげぇじゃん……」

―事態の収拾がついた数日後・士官学校教頭室へ向かう廊下―

「ちょっと、何なんですか一体!?僕が一体何をしたってんです!?」

「黙れ。我々が許可しない限りお前に発言権はない」

教頭室へ向かう廊下を歩く、二人の人影。

一人は長身に灰色のスーツという教師らしき出で立ちの食肉目らし

き禽獣種の女。
もう一人は、女に引きずられ無理矢理歩かされている、中等部指令科の制服を着た羽毛種の少年。

女は教頭室の前で立ち止まると、軽くノックをして反応を待つ。

「どなたです？」
「志摩です。違反者の男子生徒を連行しました」
教頭室内からの温厚そうな男の声に、志摩と呼ばれた禽獣種は答える。
「解りました。お入りなさい」
「はい。
おい、さっさと来い！」
「わっ、とっ、うぁっ」

羽毛種の少年は志摩によって投げ出され、広々とした大理石の床に倒れ込む。
暫くしていると少年の眼前に流線型の巨体が現れた。背は灰色で腹は白く、尖った鼻先と三角形型の歯が生え揃った口。
何処か生気の失われたような虚ろで冷酷な目と、両の首筋には五つのヒダらしきもの。

デザルテリア国立士官学校現教頭（厳密には教頭代理）の鼠鮫系鰓種鱗種、秋本・九淫隷導・康志である。

「ほうほう、君ですか……」
「きょ、教頭先生!?これは一体どういう事なんです!?」
「何をした…ですか。おかしな事を聞きますねェ、校則違反を犯したからに決まっているじゃありませんか」
「……校則違反？そんな…一日に三回生徒必携を読む事が日課の僕

がそんなっ……」
「生徒必携…ですか。考えが甘いですねぇ君は。毎週の朝礼や配布プリントで事細かに、私の新設した校則について詳細に解説しているというのにそれに気付かないとは……」
「……申し訳御座いません、教頭先生。しかし質問をしても宜しいでしょうか？」
「何です？」
「僕は……僕は一体どんな校則違反を犯したんです？どんな罰則でも受けますが、それだけは教えて頂かないと納得できません！」
「ほう、流石は優等生揃いの指令科ですねェ。歩兵科や狙撃科のバカ共とは頭の出来が違い、かと言って諜報科や軍用理学コースのクズどものような屁理屈での言い逃れもしようとしない……。まことにまことに素晴らしい。君のような生徒はまさしく我が士官学校の鏡です。
では、お教えしましょうかね。君の違反事項を」
羽毛種の少年は不安で不安で仕方なかった。
そして告げられたのは、衝撃的な内容であった。
「君の違反事項……それは、同時に複数の女子生徒から明確な恋愛感情を抱かれ、好意を寄せられたことです」
少年は落胆し、絶望した。そんな事が校則違反になるのか？
他人からの感情なんて気付きようがないではないか。
ましてやそれがどんな感情かなど、此方にとって知ったことでもあるまい。
「そ、そんなッ！そんな事ですかッ！？自分に対する他人の思いな

んて、気取りようが無いじゃありませんか！」
「黙りなさい。兎も角、校則違反である事に変わりはありません。生意気なのですよ……酒も飲めない青二才の分際で、複数の女性から好かれようなんてね。
さて、誓い通り君には罰を受けて貰いましょうか……」
「そんな、あんまりです！」
「だから黙れと言ってるでしょうが、取るに足らない鶏ガラ如きが生意気なんですよ。
私が教頭である以上、私が士官学校に於ける絶対的な校則であり、倫理なのです」

そう言って秋本は少年の腹を蹴り上げ黙らせると、周囲に控えていた女達に合図を出す。
合図を受けた女の一人が秋本教頭から何かの鍵を受け取り、奥にある金属製の扉の鍵を解除する。
扉には『要注意開閉　必要時を除き周囲３ｍ以内に近寄るべからず』との張り紙がある。
更に女二人が少年を持ち上げ、扉の前まで運んでいく。

鍵を解除した女が扉を開けると、途端に内部からおぞましいうめき声や金切り声のようなものが響き渡る。

「ウうェェェェエエえええええエエアあアァぁァぁァ！
ッア〝ァヴォオロろろロロゴゴごッ、ゴゴぁぁあエィッッ！ッえぇエぅぁアおぅッ！」

その余りにもおぞましい声に目覚めた少年は、恐怖の余り訳も判らず泣き叫ぶ。

「良いでしょう。投げなさい」

秋本教頭の指示と共に、二人の女は羽毛種の少年を扉の中目掛けて投げ込んだ。
すると次の瞬間、扉の中から砂鉄入りスライムを思わせる流体や触手、節足などが伸ばされ、少年の身体を絡め取る。
泣き叫びながら必死で壁の縁にしがみつく少年。
しかし、現実とは実に非情であった。

「さっさと行けこの劣等生が！」

先程の教員らしき禽獣種の女・志摩が少年の両手を全力で蹴り付ける。当然少年は痛みから手を離さざるを得ず、扉の向こうへと飲み込まれてしまった。
すかさず扉を開けた女がそれを閉め手早く施錠。かくして扉の向こうに住まう謎の存在は、再び暗闇の中へと封印された。

「ざまあみろ、生意気な態度を自覚せず改めないからそうなるんだ。精々その中で泣いて歯軋りするが良い。その身を貪られ、命が尽き果てるまでなぁ……」

少年の最後を見届けた秋本教頭は、嘲笑うように呟いた。

第五十六話　これは軍人ですか？　１２．いやぁ、それがちょっと微妙な所でして

遂に明らかになった秋本教頭の凶悪な実態！
この嘗て無いほど強大な敵に対し、繁達はどう立ち向かうのか！？
そして金属製の扉の向こうへ封印された黒い何かの正体とは！？

次回、物語はきっと急展開を見せるに違いない（多分予定上は）！

第五十七話　これは軍人ですか？　１３．はい。学者と巨人です。（前書き）

一方その頃、ラビーレマでは……

第五十七話　これは軍人ですか？　１３．はい。学者と巨人です。

―前回より・ラビーレマは列甲大学工学部研究室―

「――お掛けになったお電話番号は、現在使われておりません―」

「クソッ！やっぱり駄目かっ！」

小柄な猫系禽獣種の女が、苛立ちの余り携帯電話を床に投げつける。

「どうした九条？」

「退屈で仕方がないから電話でカーマインの奴でもいじろうかと思ったんだが、奴の携帯に繋がらんのだ！」

身体の各部位が機械的なパーツで被われた角竜系地竜種の大男の問いに、禽獣種の女・九条は答えた。

「何だそれは……大体お前、退屈とはどの口が言うか」

「この口だが？仕方ないだろ、やる事が無くて暇でならんのだからな」

「暇？暇だと？お前、今月中に目を通しておかなければならない書類がどれだけ残っているか、解っているのか？」

「勿論だ。私を見くびってくれるなよ、ティタヌス」

「じゃあ幾つだ？」

「２１８だ。内１１２は他大陸からで、更にその内４０はイスキュロン軍からのもので間違いない」

「そこまで的確に覚えていられるなら何故全く手を付けない？」

ティタヌスの問いに、九条は心底呆れたような表情で言った。

「…？おいティタヌス、お前大丈夫か？まさかエラーでも引き起こしたんじゃないだろうな？

こんなに良い天気だというのに、崇高な学術の叡智をただ金儲けの為に活用したがる連中の寄越した書類に目を通すなんて真似をして良いと思ってるのか？」

「少なくとも仕事をさぼってまで暇を持て余していると主張し、相手の迷惑も顧みず嘗ての後輩に嫌がらせの電話をしようとするよりはずっと推奨されるべき行為だと思うがな」
「固いなティタヌス」
「お前がそうしたからな」
「装甲や筋繊維のみならず思考まで固くなりよってが」
「思考の固さは元々だ」
「柔軟な思考の欠如は思わぬ所で仇になるぞ」
「柔軟と怠惰はヤムタ神話の姉妹神程にも異なるだろうが」
「ヤムタ神話の姉妹神……確か、姉の方がこの世に厄災をもたらした邪神で、妹は六栄神の一柱で武神と対を成す太陽神だったか？」
「そうだ。名前は忘れたが、同じ六栄神の中に夫が居るらしい。確か冥界を支配する女神の弟で天空神だったか？
まぁいい。とにかくだな九条、早くこの仕事を片付けたらどうだ？」
「いずれやるさ。覚えてないのか？私はその都度やる気の有無が変動するんだ。だから今やったとしてもろくな結果は得られまい」
「子供でも言わないような屁理屈を大の大人が真顔で言うな」
「気にする事はない。どうせスタイルはガキのままだ」
「体形が何だ」「それに女というのは心の何処かでいつまでも若くありたいと願っているものだ。不本意ながらな」
「普段からろくに化粧もしないお前が言っても説得力がないな」
「真の理系女は原則化粧などせんのだ」

そう言って九条は愛用のコンピュータを立ち上げる。

「だからお前―
―「勘違いするな。純粋に後輩の事が心配になっただけだ」
「……携帯電話が繋がらない程度でか？」
「程度とは何だ？
かなり深刻な問題だぞ？

奴は電話に出なかった事こそあるが、繋がらなかった事は一度たりともない」

「機種変更をしたまま報告をし忘れたという可能性は無いのか？」

「無いな。奴が他に類を見ないくそ真面目な奴だという事はお前もよく知っているだろう？

仮に奴が携帯電話の機種変更をするとすれば、『機種変更しました』という連絡は来ない。

来るのは『機種変更します』という連絡だ」

「つまり、事前に連絡が来ると」

「そうだ。しかし今回、奴からは何の連絡もない。

となると考えられるのは、携帯電話が破損したか、私に無断で解約したかだ。

我ながら言うのもアレだが、私は奴から徹底的に恐れられているようだ。

私の目が届きそうにないような所でも、不用意な行動は控えているらしいしな」

「……調べたのか？」

「私を誰だと思っている？

大学園都市最強の工学部生たる称号『スターダスト』を得た最初の女学生、九条チエ様だぞ？

舎弟の見張りも満足に出来ないでどうする」

「舎弟だったのか……」

「あぁ、奴――高志・カーマインは私の舎弟第一号だ。

だからこそ私は――な、何だこれはっ！？」

「どうした、九条？」

「おいティタヌス、これを見ろ！」

ティタヌスは九条の指し示した記事に目を見やる。

「カーマインが行方不明……だと？しかも彼の自宅周辺には特殊な

セキュリティシステムが展開されており捜索の目処も立たず、か。
とんでもない事になってしまったな……」
「あぁ。奴の家に罠を張ったのは勿論私だが、まさかこんな事になろうとはな」
「お前だったのか!?」
「ああ、私だ。こんな事もあろうかと罠を展開しておいた甲斐があったというものだ」
「お前は一体何を言っている!?自分が何をしたか解っているのかっ!?」
「解っているとも。警察の捜査を妨害してやった」
九条は笑い混じりに軽々しく答えた。
「笑い事ではないだろう!?」
「いいや、笑い事だ。高志の家には、この一件に関わる重要な証拠が眠っている。
そしてその証拠、使いようによっては事件解決に向けての強力な手掛かりとなる!」
「……だったら尚更警察を初めとする公的機関に譲り渡した方が良かったのではないか?」
「おいおいティタヌス、お前の部下兼最高傑作か?
重要かつ強力な証拠だからこそ、尚更警察には手渡せんだろうが。
奴らは公務員だ。本来の力こそ強力だろうが、それを発揮する機会は極めて少ない。
それ即ちパワーバランスという奴でな、公務員の中間管理職というのは上司の命に背いてまで己の意志を貫き通すなんて真似はそう出来んのだ」
「ではどうする?まさか我々だけで事件を解決するつもりか?」
不安げに問うティタヌスに、九条は言う。
「馬鹿を言え、誰がそんなエネルギーの浪費などするものか。
証拠は我々の手中へ確保し、警察より確実にこの一件を解決出来るであろう組織に明け渡すさ。

如何なる法にも縛られず、ただ己の意志を貫き通し常に十割の力を出し切ることの出来る存在にな」

「そんな都合の良い組織があるのか？まさかギャングや新興カルト教団の類じゃないだろうな？

弱音を吐くようで悪いが、私はあの手の連中に関わるのはご免だぞ」

「アホか。私だってその程度の奴らにこんなに凄い玩具を暮れてやるつもりなど無いわ。

例え奴らに数兆積まれて懇願されようが願い下げだ。ギャングも新興カルトもクソ喰らえ！」

「ほう、よくぞ言ったな九条。改めて思う、お前の部下で居て良かったと」

「ッフ、そうだろうそうだろう？何せ私は女性初代の『スターダスト』だからなァ！」

「それで、お前が頼み込むという組織とは何だ？」

臣下ティタヌスの問いかけに九条は、自信満々の笑みで答える。

「ああ、それか。何、お前も知っている筈だ」

「ほう」

「つい最近どこからとも無く沸いて出た、不定期放送のラジオ番組だ」

それを聞いたティタヌスは、深々と頷いた。

「そうと決まればティタヌス、長旅の準備だ。昼食後１４：２３発のフェリーでイスキュロンへ向かい、そのまま砂上船でデザルテリアまで向かう」

「随分と急ぐんだな」

「当たり前だ。そうこうしている間に舎弟が殺されてしまうやもしれん。そうなっては私の『スターダスト』の名に傷が付く」
「成る程な」
「デザルテリアへ到着次第第高志の家で証拠となるものを粗方回収し、ツジラ一味を探り当てて用件を話しブツを突き出す」
「その後は？」
「無論、奴らに同行し士官学校を探る他あるまい。ツジラ・バグテイルはヴァーミンの有資格者であり、その相方の青色薬剤師は古式特級魔術の使い手だ。
それに奴らの組織にはあのニコラ・フォックスも居る！つまり知識人としてこれに接触しない手はない！」
「確かに、お前ならそう言い出すだろうとは思っていた。だが仮に、断られた場合はどうする？」
「その点は問題ない。組織のアテはもう二つある」
「流石だな、九条。それでこそ我が主だ」

第五十七話　これは軍人ですか？　１３．はい。学者と巨人です。（後書き）

次回、九条と繁、奇跡の出会い（予定）！？

第五十八話　闇のみぞ知る店内（前書き）

一方その頃、繁はというと

第五十八話　闇のみぞ知る店内

―前回より―

デザルテリア郊外の繁華街に備わったネットカフェでパソコンを操作するのは、白衣に蝗マスクの男―我等が主人公、ツジラ・バグテイルこと辻原繁。
生放送を二週間後に控えた彼は現在、頼り募集の為に設けたＥメールアカウントを覗いていた。

「（やっぱ依頼ばっかりか。遂行してる暇ァ無ぇんだがな……っと、質問や楽曲リクエストも結構来てるな。
法的に認可・保護された番組じゃない分大概の局は音源さえ手に入れば流せるし、質問も基本大概のことは答えられる。
油断しちゃなんねぇのは百も承知だが、非合法ってのも中々オツなもんだな）」

等と考えつつカーソルを動かしていた繁は、ふと件名の無いメールがあるのを見付ける。
今まで彼の所に届くメールは正式な応募から番組への意見、言われもない言い掛かりや誹謗中傷に至るまで全てに件名があった。
しかしこのメールにはそれがない。差出人のアドレスもどういう訳か表示されて居らず、怪しさは益々高まった。

「怪しい……が、思うほどでもねえ気がする」
という訳で、繁はそのメールを開いてみることにした。そもそもこのパソコンに設けられたセキュリティシステムなら、怪しげなＵＲＬが入っていればその時点で迷惑メールの欄に振り分けられ、ウイルスでも入っていようものなら到達前に削除されてしまう筈だ。

となればこのメールはさして問題があるとは考えられない。それが繁の判断だった。

メールの内容はこうだった。

――

お初にお目に掛かる、ツジラ・バグテイル。
私は普段ラビーレマの大学で研究員をしている者だ。

『巨竜を駆る野良猫』私を呼ぶならそう呼べ。

今回こうしてメールを送らせてもらったのは他でもない。貴公らと我々とで解決したい事件が発生したからだ。
というのは、近頃イスキュロンの大国デザルテリアの国立士官学校に勤務する私の舎弟が行方不明になっているらしいのだ。
その他諸々の点から見て、この事件には裏で暗躍する巨大な組織の存在があるものだと私は確信した。

無論、都合が悪いなら無理にとは言わん。協力者のアテはまだあるのでな。

追伸．本日１９：００、デザルテリア国立大使館地下七階の料亭『傘猫』で逢おう。
店に入る時、合い言葉を要求されるだろうが、お前なら解るはずだ。

――

「（『巨竜を駆る野良猫』……か。逢ってみる価値は大いにあるな）」

かくして繁はその夜、メールの送り主と合流するため『傘猫』へ向かった。

―同日１８：５５・デザルテリア国立大使館地下七階『傘猫』―

青白い光を放つ蛍光灯が照らすコンクリートの通路を、繁は進んでいく。

―料亭『傘猫』―

国立大使館地下七階の狭い通路を進んだ先にあるこの店は、表向きこそ完全会員制にして貸し切り式の高級料亭という名目だが、そんなものは所詮隠れ蓑に過ぎない。

その本来の目的は政府関係の要人や裏社会で生活する人間など、曰く付き故に表舞台で堂々と生きられない人間達に、重要な交渉や約束事、話し合いなどの場を提供する事にある。

機密性を確保するため、客席は強固な防護壁で区切られ、八丈一間の『客間』と呼称される。

『客間』の出入り口には錠前が施され、専門スタッフのみが持つ専用の鍵によってしか解除出来ない仕組みになっていた。

政府の大臣によって管理されているこの場所の実態と真の目的を知る者は、イスキュロン広しと言えども数えるほどしか居ないという。

「（然し、『巨竜を駆る黒猫』とかいう奴は何故そんな店を待ち合わせ場所なんかに指定したんだ？

確かに機密性は高いだろうが、一体……）」

等と考えている内に、繁は『傘猫』の扉の前へと辿り着く。

「（ここが『傘猫』か）」

通路の突き当たり左側に質素な鉄製の扉があり、上からは小さな猫型の茶色い電光看板が飛び出している。

扉には取っ手が見当たらず、『御用の方はここを押して下さい―店主』という張り紙とインターフォンがあるだけだった。

繁がインターフォンのボタンを押すと、低い男の声が受け答える。

『はい、こちら「傘猫」です。どういったご用件でしょうか？』

「突然すみません。実はある方と待ち合わせをしているのですが」

『待ち合わせ、ですか。相手様のお名前は？』

「それが、偽名しか知らんのですが…」

『構いません。当店をご利用なさるお客様の間では偽名を用いるのが暗黙のルールとなっておりますので』

「はい。では『巨竜を駆る野良猫』という方を、お願いします。その方と今夜１９：００にここでお会いする予定でして」

『「巨竜を駆る野良猫」様ですね。少々お待ち下さい』

暫くして、店主から返答が帰ってきた。

『お待たせ致しました。「巨竜を駆る野良猫」様はまだ来られていないようですので、ご予約のあった客間二十二番でお待ち下さい』

「有り難う御座います」

『それではごゆっくり』

店主の声が途切れると、金属の扉が横にスライドした。どうやら自動の引き戸だったらしい。

表向きには会員制の料亭とされるだけあってか、『傘猫』の内部は際限無き高級感に満ち溢れていた。

涼しげな青白い光で照らされた店内は漆塗りの木材や大理石で彩られ、所々に飾られた絵画や竹細工の精巧さには思わず見とれてしま

う。

「（まさか俺の生涯でこんな所へ来ることになろうとはな……）」

等と思いながら、繁は受付で従業員に用件を伝え、店についての大まかな説明を聞いた。

今回は予約主である『巨竜を駆る野良猫』が代金の全額を受け持つ形式らしい事などを聞かされた繁は、早速客間二十二番と案内された。

客間の中は予想以上に広々としていて、利用者が居るであろう隣室からは話し声の一つも聞こえて来ない。

中央に設けられた漆塗りの机には四つ足に翼を持った龍―中国に於ける四霊の一・応龍が描かれており、机の両端と真ん中にメニュー表を立てる竹製の棚が据え付けてあった。

壁際には給水器・給湯器の他トイレまで備え付けてあり、客とそのプライバシーを外に出さない工夫が見て取れる。

「ご注文がお決まりになりましたらこちらの呼び出しボタンを押して下さい。

相手様が来られ次第、随時此方から連絡致します。

お手洗いとお水・お湯の機械はあちらに御座います。それでは、ごゆっくりどうぞ」

「はい、どうも有り難う御座います」

従業員の去った客間にて、繁は再び考えた。

『巨竜を駆る野良猫』とは一体何者なのか？

何故奴は自分が今デザルテリアに居ることを知っていたのか？

何故奴は待ち合わせの場所にこの店を選んだのか？

店と一体どんな関係があるのか？

考えれば考えるほどに深まる謎に繁が頭を抱えたその時、客間のスピーカーから従業員の声が鳴り響いた。

「お客様、相手様が起こしになられました。そのまま客間二十二番でお待ち下さい」

第五十八話　闇のみぞ知る店内（後書き）

次回、『巨竜を駆る野良猫』と対面！

第五十九話　猫頭の工学者（前書き）

奇跡（悪夢？）の出会い！

第五十九話　猫頭の工学者

―前回より―

扉のロックが解除され、中に二人の人影が入ってきた。どちらもフードのついたローブで姿を隠しており、それを見た繁は自分の愚かさを悔いた。
幾らマスクを被っているとはいえ、自身を相手に記号として認識させるような真似をしてしまっては機密性のきの字もありはしない。
二人組の体格差は凄まじく、高い確率で別種族である事は間違いない。

「それではごゆっくりどうぞ」

スタッフが立ち去るのを見守ってから、二人組は席に着く。
大柄な方は部屋の強度が大丈夫なのかと心配になったが、以前ビクともしていない辺りは流石はカタル・ティゾルと言ったところだろう。

「あ、初めまして。私の名はツジラ・バグテイル。お二人もご存じだろうが、ラジオ番組をやってる」
繁がそう言うと、小柄な方が答えた。
「此方こそ初めまして。お目に掛かれて光栄だ、ツジラ。
私は『巨竜を駆る野良猫』」
小柄な方はフードを脱ぎながら名乗り上げた。
「本名を『九条チエ』。ラビーレマは列甲大学で研究者をやっている。専門は機械工学だ。
種族は見ての通り猫系禽獣種さ。そしてこっちが――」

「角竜系地竜種のティタヌスだ。わけあって九条の部下をやっている」
大柄な方―もとい、九条の部下ティタヌスは淡々と名乗った。
そして三名は、お互いの用件を話し合った。
「すると何か？お前達も国立士官学校を標的にしていたと？」
「そうなるな。番組にそんな感じの投書が届いたんで、じゃあ向かうかと」
「九条、嬉しい誤算だったな。これでお前が守り通してきた件の証拠が役立つというものだぞ」
「ああ、全くだ！喜べティタヌス、ヴァーミンの有資格者二人に古式特級魔術の使い手一人と結託出来た我々は、今や百人力と言っても過言ではない！
そう言うわけで辻原、お前にこれを託そう。今日我々が確保に成功した、秋本の悪行に関する決定的な証拠だ」
そう言って九条は小型のレコーダーを取り出した。
「士官学校に勤めている舎弟の部屋から回収したものだ。奴はある時を境に、こうして音声で日記をつける趣味があってな」
―音声再生中（内容については五十二話を参照）―
「これは……恐ろしいな。校則の内容も仲間が確保した断片的な情報と合致する」
「そうだろう？私もこれを聞いたときは背筋が凍る勢いだった」
「そうだな。ところで、九条」
「何だ？」
「お前の言ってた合言葉っての、あれ言われなかったぞ？」

そう、成り行きでどうにか入店出来たものの、繁が地味に気になっていたのはそこだった

「あぁ、あれか。すまん、メール送った直後に思い出したんだが、この形式だとお前は確率で合い言葉を要求されない場合があるんだよ」

「確率……？」

「そうだ。インターホンで受け答えをしてきた低い声の男が居たろう？」

「あぁ、居たな」

「あれは実を言うと私の父上で、この店の経営者でもある。父上は肉声を聞くだけで相手の腹の内を大雑把に読む事が出来てな」

「それで俺は安全枠だと判断されたってか？」

「そうなるな。父上のヒトやモノを見る目は確かだ。娘の私が言うんだから間違いない。

さて、それで作戦の件だが……」

「此方としては二週間後を想定してるが」

「そうか。では我々はこれでお暇するとしよう。ティタヌス、やれ」

「了解した」

指示を受けたティタヌスはぬっと席を立ち、大理石の外壁を両手でゆっくりと押した。

すると壁の一部が陥没し、３ｍ×２．２ｍ程の縦長のスペースが出現した。

「な、なんだこの仕掛けは！？」

「『何だ？』とは愚問だな。出店用エレベーターに決まっているだ

ろう」
「出店用エレベーター！？」
「そうだ。各客間の壁へ一定の力を加えるとこうして開くようになっていてな。
このまま一気に大使館から各大陸の辺境にある『傘猫』の支店まで行き来が出来るのだ。
周囲から怪しまれるリスクを回避しつつ店から出られる上に、そこで勘定を済ませたり食事なども出来るので中々に便利だぞ」
「お帰りは各国家市町村中枢部行きの常設型転移魔術でひとっ飛び、というわけだ」
「成る程…曰く付きの連中が集う店だけにかなり高性能な仕様って訳だ。
こいつぁ凄え、俺も次から使ってみるかねぇ」
「ああ、使ってみると良い。内緒話にはもってこいの場所だからな」
「ただ注意すべきは、他の客とのトラブルを起こしても公的機関を頼れない事だがな」
「そこに関しちゃもう覚悟は出来てるさ。こんな事やってる身の上だと、何時命狙われても可笑しくねぇからな。
前まではとんだ平和ボケだったのが、もう癖みてぇに知恵が回るようになっちまった」

かくして三人は出店用得エレベーターでデザルテリア辺境地にある『傘猫』の支店へ向かい、それぞれの更にそこから常設型転移魔術でそれぞれの拠点へと戻っていった。

―19：13・九条とティタヌスの拠点―

「そういえば九条よ」
「何だ？」

「我々が確保した士官学校についての情報の内、辻原に提供していないものが僅かに見受けられたのだが、気のせいか？」
「気のせいではない。幾つかの情報は、辻原の役には立つまいと思って報告しなかった」
「そうか……ではあの事も、奴の役に立つような重要情報ではないと？」
「何のことだ？」
「決まっているだろう？
……カーマインの顛末についてにの事だ」
「をぉ、その事か」
「奴がどうなったのかを話さなかったのは、故意によるものか？」
「ああ」
「何故そんな事を？」
その問いに、九条は悪ふざけめいたギャグを思い浮かべる同人作家のような笑みを浮かべて答える。
「何故かだと？愚問だな」
「と、言うと？」
「そんな事の理由は大概一つと決まっている。
面白そうだからだ」

それを聞いたティタヌスもまた、口元に幽かな浮かべながら言った。

「九条……やはり流石だな、お前という奴は。

それでこそ、我が主だ」

第五十九話　猫頭の工学者（後書き）

次回、遂に士官学校へ突入か！？

第六十話　ラジオはＤＪが多い（前書き）

事件は教頭室で起きていた。

第六十話　ラジオはＤＪが多い

―二週間後・午前十時頃・士官学校教頭室―

「素晴らしい……実に素晴らしい……これぞまさしく絶景と言った所か……」

恍惚の表情で壁に並べられたモニタを眺めるのは、士官学校教頭・秋本。

この無数のモニタが映し出すのは彼が設けた校則により犯罪・不正行為・いじめ・校則違反を防ぐため全校内に設置された監視カメラの映像であるが、映し出されていたのは最悪の光景だった。

それ即ち、女生徒や女性職員達の私生活や着替え等の様子。

秋本が監視カメラを設置した目的の全てはほぼこれであったと言って良い。

当然こんなものが仕掛けられている事を、職員や政府機関関係者は知らないし、知ることも出来はしない。

そもそも誰が何をしようとも、自らの築き上げた帝国は崩れることなどありはしないと、そう言い切れるだけの自信が秋本にはあった。

「何処からでも掛かってくるが良い、私欲の為正義を騙る政府機関の眷属共よ。

あの厄介な校長と理事長を傀儡とした今、誰にも私の完璧な策を破ることなど出来はしない。

もし仮に暴こうものならば、私の愛しき恋人達が黙っていないだろう。

生徒・職員の中に紛れ込んだ彼女ら４８人は、いずれも各分野に特

化したエキスパート揃いの最強先頭集団でもある。
それを相手に戦うなど、出来るはずも無い……。
そうだ。私は今やこの士官学校を――『せェーのッ、ツジラジっ！』
―！？！？」

秋本の思考を遮るようにして、校内中のスピーカーから数名による
タイトルコールが響き渡る。
突然の出来事に秋本が怯んでいる隙を突くようにして、続いて音楽
が流れ出した。

―萌え豚諸君御用達ィのォ！
―ハーレムもんのォ、養豚要員ッ！
―養豚養豚花○養豚ッ！
―養豚養豚フレンチ養豚ッ！
―養豚養豚金髪養豚ッ！
―養豚養豚巨乳で養豚ッ！
―養豚養豚甘えて養豚ッ！
―養豚養豚無差別養豚ッ！
―養豚養豚女も養豚ッ！？
―キリがねえぜ、豚共がァッ！
―屠殺屠殺赤目で屠殺ッ！
―屠ッ屠ッ屠殺だ萌え豚共ッ！
―屠殺屠殺俺の手で屠殺ッ！
―屠ッ屠ッ屠殺だお前等なんざァ！
―てめえらそこそこ鬱陶しいぜェ！
―事ある毎にブヒブヒブーブー！
―屠殺屠殺界隈のためにも、屠殺しようぜェ！

『お送りしているのは、インターネットの動画サイトで投稿から半
年足らずで再生数１０万回を突破した大人気フリーシンガー・ＴＡ

ＫＥＮＯＫＯ氏の「悪ふざけ」シリーズ第八弾として公開された「養養養屠豚豚豚」。
今日は。何時も不敵に貴方の街へ這い寄るＤＪツジラ・バグテイルです』
『ブクマ件数６０件超えてるのに何でレビュー無し感想２件なのかが解りません、ＤＪ青色薬剤師です』
『竜の風〇２熱が再燃、一ヶ月もせずもう終盤な雰囲気の作者が居ますけど私は専ら元気だったりします。
ニコラ・フォックスです』
『はい、そして今回から新しいパーソナリティが四人も増えてくれました』
『やったねツジさん、仲間が増えるよ！』
『それ死亡フラグだろ！
んじゃお前ら、リスナーの皆さんに早速挨拶だ』
『ツジラジをお聞きの皆様、初めまして。
新参パーソナリティのイモウトキシンと申します』
『その兄ことアニジキニンです。宜しくお願いします』
『どうも！新人の嶋野二十五番です。以後宜しく！』
『嶋野二十五番の旦那やってます、黒物体Ｖです！嫁共々頑張っていきますんで、どうぞ宜しくゥ！』
『はい、みんな有り難う。それでは今回のお便り紹介行ってみたいと思います』

「……ツジラジ……そういえば忘れていた……謎解きラジオを騙る例のテロリスト集団……。
だがその程度がどうした？あいつらはあいつらだ。バカ騒ぎでもテロでも何でも、勝手にやらせておけばいい……。
そうだ、どのみち私が奴らに襲われる危険性は――『そういう訳で今回はこちら、デザルテリア国立士官学校にて地球に優しくない校則で生徒や職員を苦しめる黒幕をぶっちめて殺ろうって発想な訳

です！』――な、何だとッ！？」

秋本の希望は一瞬にして瓦解した。

「そ、そんな馬鹿な！？何故だ！？
大東の扱う古式特級魔術『ジュルネ・ヴァッサーゴ』の隠蔽戦略は絶対――はっ！古式特級魔術ッ！
そう言えばあの一味には古式特級魔術の使い手が居たんだったっ！
何と言うことだ、私としたことがそんな初歩的な見落としをするなんてッ！」

自らのミスに頭を抱える秋本の元へ、一本の電話が掛かってくる。
それは愛人達に持たせている『自分と連絡を取る為だけの携帯電話』からのものであった。
発信者の欄には先程名前の挙がった愛人の名前がある。

「もしもし、大東か！？」
『教頭、ご無事ですか？』
「ああ、何とかな！そちらはどうだ！？何か異変はあるか！？」
『無いと言えればこれほど幸いな事もありませんが……緊急事態です、教頭。
校内に存在する生徒・職員・来賓等の学校関係者が……』
「どうしたというのだ？」
『我々四十九人を除き、一瞬にして消失しました』

秋本は絶句しそうになりつつも言葉を紡ぐ。

「どういう事だ！？何が起こっている！？」
『恐らく、敵の魔術攻撃と考えるべきでしょう。
恐らく古式特級魔術の使い手である青色薬剤師が「ソワール・マル

ファス」で、我々以外を外部に退避させたものと』
「テロリストにしては随分と妙な奴らだな。無関係の一般人を巻き込まない体勢を見せて民衆からの信頼を得ることで自らの行為を正当化し悦に浸ろうとでも言うのか？」
『いえ、それも目的には含まれているでしょうが、敵の目的はあくまで我々の抹殺でしょう』
「何？ではお前の考える『本格的な理由』とは何だ？」
『はい、教頭。
この推察は、まことに申し上げがたい事なのですが……』

大東は呼吸を整え、言った。

『恐らく、恐らくですが、ツジラ一味が無関係の人間を荷が逃がした理由とは、もし仮に自分達が敗北寸前にまで追い込まれ逆転の見込みがなかった場合、強力な魔術やＢＣ兵器、爆薬度を用い……』
「用い、何だ？」
『士官学校の校舎諸共我々を一人残らず抹殺すると、そういった事を我々に知らしめる為なのかも知れません』
「そんな……馬鹿な……」
『恐らくは故意に我々以外を逃す事で人数を減らし行動しやすくすると共に、「自分達は自爆テロさえも辞さない覚悟である」という意思表示でもあるのではないかと』
「そう……か」
『教頭、如何致しましょうか？』
「何をするかなど……決まっているだろう？愛人各位に連絡を取り、戦闘配備に付くよう指令を出してくれ。

あちらがその気ならば、こちらも本気で挑まねばならないだろうからなぁ……」
『畏まりました』

秋本は大東との通話を終えた秋本は、一人窓ガラスの向こうに広がる都市の風景を見ながら呟く。

「ツジラ・バグテイル……精々掛かってくるが良い。私が嘗て倒してきた多くの愚者共の様に、お前も隅々まで喰らい尽くしてくれる……」

秋本の笑みによりうっすらと空いた鮫の大口から、一瞬茶色い棒のような何かが飛び出した。

第六十話　ラジオはＤＪが多い（後書き）

次回、ツジラジＶＳ秋本軍団の壮絶な戦いがスタート！

第六十一話　メオトでかますぜリューラちゃん！（前書き）

外野「来た！リューラさんとバシロさんの合体コンボだ！」

第六十一話　メオトでかますぜリューラちゃん！

―前回より―

香織の魔術により校内へ散り散りに突入した繁一行は、秋本の作戦により校舎内へまばらに配置されていた愛人達との交戦を始めていた。

―歩兵科戦闘実習用アリーナ―

「行くぞバシロ！」
「合点承知の助ァ！」

実習用アリーナに解き放たれた数奇なコンビ―リューラとバシロは、待ち構えていた女生徒―何れも小学生かと見まごうほどに小柄で童顔な三名を相手に構えを取る。

「あんたたちね！最近ちまたを騒がせてるテロリストってのは！」
女生徒の一人、小さな弓を構えた尖耳系霊長種が言う。
「テロリストぉ？そいつぁ心外だなぁ。私達は只の個性的なラジオDJだぜ？」
「うそおっしゃい！どこの世の中に、肩からおばけが生えたラジオでぃーじぇいがいるのよっ！？」
「おい、俺はこいつの宿六だぜ？お化けなんてふざけた呼び方は止してくんな」
「全くだ。体型のみならずボキャブラリーまで貧困とあっちゃあ、国立士官学校の名が泣くってもんだ」
心底嘲るようなリューラの言いぐさに、女生徒達は腹を立てた。
「なんですってえ！？かおの右はんぶんがくさってるどぶすのあん

たにいわれたくないわ！」
「もういちど言ってみなさいよこのおばさん！」
「そうよそうよ！おっぱいなんてしょせんしぼーじゃない！」
ここまで罵られれば普通は誰しも苛立つくらいはしそうなものである。
しかし流石は一介の中学生から国立士官学校特待生を経て陸軍少佐にまで成り上がり国民から英雄視されるに至ったリューラとでも言うべきであろう。
女生徒三人の言葉に反応さえ、殆どしていない。
「はぁ、お前等なぁ……私の顔半分が腐ってるとかはまだ良いとして、『乳も所詮は脂肪』とかもうギャグとしても古すぎてツッコミも出ねーぞ？」
「言えてんなァ。近頃の貧乳は養豚アニメでももっとマシな事言ってるぜ」
「まぁどうしても突っ込んで欲しいってんなら、お前等のアナルなりヴァギナなりに私のイチモツをぶち込んでやっても構わねぇがな」
「おいおい、あんな肉のねぇギツギツそうなロリで良いのかよ？」
「ぶっちゃけやだな。冗談抜きで。やっぱアナルは辻原、ヴァギナは清水のが良いや」
「アレ、冗談じゃ無かったのかよ……」
「冗談でこんなネタなんぞ言えるわけねーだろ。
私は腐ってもイスキュロン民だぜ？愛って奴は、尊重しねぇとーーなぇぃっ！？」

その瞬間、リューラの左耳を一本の矢が掠めた。

「てンめェよくも俺の嫁目掛けて矢なんぞ放ちやがって！
話し中には矢放っちゃいけねぇって学校で習わなかったか！？」
「ふふん、寧ろそこを狙えと教わったわ！」
「マジで！？そんなフリルまくりリボンまくりの服着てる癖にそこ

まで知恵回るとか異常じゃね！？」
「なによ！服装はべつに関係無いじゃない！」
「そうよそうよ！わたしたちのお洋服や鎧は、リボンからパンツまでみんな教頭先生が選んでくれた最高級品なのよっ！？」
「えっ、なにそれきめえ！あの教頭、そんな変態めいた真似までしてんのッ！？」
「きもいとはなによ！あんたたちの方がよっぽどきもちわるいじゃない！」
「そうよそうよ！じゅようもないようなキャラクターのあんたたちにきもいなんていわれたく――――　――――

防御力の全く無さそうな白いビキニアーマーを着込んでいた鬼頭種女生徒の顔面へと、蛍光灯三本が一斉に叩き込まれた。
蛍光灯は砕け散り、幾つもの巨大な破片が少女の顔面に徹底して―額や頬、更には眼球までも―突き刺さっていた。

「いやあああああああああああああああああああっ！」
余りに衝撃的な有様に、へたり込んで泣き叫ぶ尖耳種の女生徒。
しかしその隣に居た揚羽蝶系外殻種の女生徒は、醜態を晒す同級生を尻目にピンク色をしたハート形の巨大な宝石（実際はガラスやアクリルの塊であろうが）の埋め込まれたステッキを掲げる。
ドレス風のなりもあって、どうやら魔術師――軍用魔術科の生徒であるようだった。

「よくもぷりてぃをっ！くらいなさいっ！」

少女がステッキをバトンのように振り回し、両手で振り下ろすと、その先端部からハート形のエネルギー体が発射され、リューラとバシロに襲い掛かる。

キュボボボン！

甲高く無駄にポップな音を立てて無数のエネルギー体が爆発した。この魔術は女生徒オリジナルの攻撃系魔術であり、厄介な詠唱が無く発生も早い癖に絶大な破壊力を誇っていた（また、本当に蛇足であるが先程言及された「プリティ」というのは蛍光灯を投げつけられて無惨な姿で絶命した鬼頭種の本名である）。

女生徒は勝利を確信した。四足竜種さえも仕留められる程の破壊力を誇る自身の必殺技を受けて尚立っていようなど、並大抵の生物には不可能だと信じて疑わなかったからである。

「さぁ、いくわよふぇありい。教頭先生にこのことをおはなしして、ごほうびをもらいにいきましょ」

揚羽蝶系外殻種の女生徒は、生き残った仲間の名を呼んだ。しかし妙なことに、仲間からの返答がないばかりか声も聞こえない。というか、気付けばその場には彼女一人以外に士官学校の女生徒の姿は無かった。

尖耳種の「フェアリイ」どころか、「プリティ」の亡骸までもが、忽然と姿を消していたのである。

女生徒の脳裏を、最悪の事態が過ぎる。そして次の瞬間、彼女の眼前に湿って黒ずんだ塊が落ちてきた。

それを見て、女生徒は絶句し思わず尻餅をついてしまう。

「こんな……こんなこと……」

嘘だと思いたかった。しかし見まごう筈もない。

彼女の眼前に落ちてきたのは他でもない、嘗ての仲間「フェアリイ」と「プリティ」の生首だったのである。

「え……うぅ……ぁ……」

恐怖の余り声も上げられない女生徒の眼前へ、更なる絶望が訪れる。

「「よう、大丈夫か？」」

そんな声を伴って現れた黒い何かによって目の前の生首二つが叩き潰され、血肉や骨の破片が飛び散る。

女生徒が恐る恐る顔を上げると、そこには自分の必殺技に敗れ去った筈のリューラとバシロの姿があった。

女生徒が声も出せない程怯えているのを良いことに、二人は一方的に話を進めていく。

「まさかお前があんな技を持ってようとは、流石に驚かされたぜ」

「だがツメが甘かったなァ、クソガキ。身体が羽化してようが、頭はまだまだ幼虫じゃねえか」

「うちの宿六は変幻自在でよ、ガキ二人程度引っかけて釣り上げるワイヤーぐれえ幾らでも繰り出せる」

「そいつで釣ってきたテメェの仲間二人を盾にすりゃあ、あんな攻撃系魔術如き幾らでも防げんだよ」

「まぁ、あんな貧相なガキ程度最初はすぐぶっ壊れるかと思ってたんだが……」

「テメェ等のダッセェ服だの鎧だの、よく見りゃ一丁前に防魔仕様の合成繊維とか耐魔合金で作ってあるじゃねーの」

「しかもノモシア貴族・上級士官御用達の最高級ブランドの作った最新作とはよ。

そりゃあお前、そんな装備がありゃあの程度の攻撃系魔術じゃそう簡単にゃ壊れねぇわな」

「良い教頭を持ったな、テメェ等……いや、パトロンか？」
「ま、どっちでも良いけどよ。私等にゃ関係ねーし」
リューラの左腕が、女生徒の襟首を掴む。

「「どのみちテメェを殺すっつー予定は、今ここで片付けなきゃなんねーしなァっ！」」

二人の叫びと共に、女生徒の身体は中高く放り投げられる。
そして急降下を始めたその身体に、リューラの右腕―バシロを受け入れ、彼と同化したが為に哺乳類とも爬虫類ともつかない異形のそれに変貌している―による回し蹴りが入らんとする。
それと同時にリューラの長ズボンの裾から伸びてきた針金のようなバシロの触手が、太股から裾の辺りまで、右脚の臑（すね）を縦断するように真っ直ぐ伸びたファスナーを開く。

開かれたファスナーの中から現れたのは、バシロが変形した大振りな回転鋸の刃であった。
内部機関が無いにもかかわらず、どういうわけかその黒い刃は高速で回転している。

「「夫婦奥義之八（めおとおうぎのはち）ッ！――『斬筋断骨脚（ざんきんだんこつきゃく）』ウウウウッ！」」

そんな二人の雄叫びと共に叩き込まれた臑の一撃は、女生徒の外骨格、脊椎、筋繊維、神経組織、主要臓器を綺麗に切断。
リューラが一回転し脚を振り抜くと同時に刃は引っ込み、バシロの触手によってファスナーが閉じられる。

かくしてアリーナを舞台にした二対三の勝負は、かくも奇妙で何とも豪気な（自称）夫婦の圧勝に終わる。
中等部所属の愛人三名が死亡した秋本軍は、彼自身を含め残り４６

名となった。

第六十一話　メオトでかますぜリューラちゃん！（後書き）

次回、戦いは更なる激化を見せる！

第六十二話　私の兄がこんなに空気なわけがない（前書き）

激闘は尚も続く！

第六十二話　私の兄がこんなに空気なわけがない

―前回より―

「すぐ離せ！今すぐ彼女をその手からッ！」
「ははははははっ！断ると、そう言ったのなら、どうします！？」
「貴様等をっ、貴様等をただ、殺すのみっ！」

五七五の川柳めいた会話を繰り広げているのは、破殻化した小樽桃李と、秋本の愛人であるウミウシ系軟体種の歩兵科教員。名をラズリ・スラッグと言う。
身体の殆どを筋肉で支える軟体種ならではの怪力を持って獣機関銃を軽々操る彼女と対峙する桃李は、この段階で既に秋本の愛人を四名殺害しており、次なる標的として狙撃科教員の羽毛種を殺そうとしていた所でとラズリと遭遇。
一心不乱に乱射された機関銃の弾丸を、待ってましたと言わんばかりに羽毛種女を盾にして防ぎ、そのまま挑発的にあらゆる平面を重力無視のままに走り回っているのだった。
対するラズリは自身の恋人（教頭公認の仲）であった羽毛種女を殺させられた事から怒り心頭。
機関銃で応戦するも、弾丸は全て愛人達の死体によって防がれてしまっていた。

「このゴキブリの出来損ないめが！卑怯な真似を！」
「卑怯で結構、元より毒沼育ちの腐れ外道ですからねぇ私は。まぁ最も……」
桃李は死体を投げ捨て、言い放つ。

「職場を裏切り非道な独裁者の側に付いた貴方とでしたら、汚さはどっこいどっこいな来もしますがねぇ！」
「貴様……秋本教頭を愚弄するかァァァァ！」

ゾガガガガガガガガガガガガガガ――

ラズリの重機関銃が火を噴き、大口径の弾丸が教室内の窓ガラスや備品を悉く破壊していく。
しかしゴキブリ故の機敏さと持久力を以て所狭しと駆け巡る桃李を相手に感情任せのガムシャラな連射など無意味であり、意味のない連射は急激な弾切れを引き起こす。

案の定ラズリは直ぐさま弾丸を使い果たしてしまい、自棄を起こして機関銃を投げつける。
しかしそんな攻撃とも呼べないようなものが桃李に当たる筈も無い。

「おやおやどうしたんですぅ！？さっきのそれは攻撃ですかぁ！？」
「黙れェェェッ！」

そこに加わる桃李の嘲り。
この小樽桃李という女は衛生害虫の代名詞とされるゴキブリを象徴とするヴァーミンの有資格者であるが為か、それとも元々そうなのかは定かでないが、特定の他人を徹底して嘲る事に心血を注いでいた。
『特定の』とはつまり、嘲る必要性のある他人の内、『あらゆる可能性から考えて今後一切協力的・友好的な関わり関わりは持たないという確定的な証拠が得られている』という事を大前提に、死者、瀕死者、その場に居合わせていない第三者、自ら殺害する事と確定しており尚かつ様々な方面から考慮してそれが如何なる場合も変更される事がないと確定できる相手等が含まれる（この辺りの定義は

大変曖昧かつ複雑なものであり、作者の文章で説明しているとこの話しが四千字を超えてしまい読み辛くなるためこの辺りで留めておく）。

故に桃李は、秋本の愛人であるこの女を徹底して嘲ることが出来た。
今頃は香織が外部へ逃がした生徒・職員達により秋本軍の真実も明るみに出ているはずであるし、そうとあれば秋本の手先であるこいつをここで嘲らないでおかない手はない。
ここで上手く話を進めておくことが出来れば、ツジラジはよりカタル・ティゾルの民衆に愛される番組となり、政府関係者とも結託する事が出来るようになるかも知れないのだ。

桃李は可能な限り高速で思考を展開する。

「（幸いにも奴は元々水棲の傾向が強い軟体種……。
それも体組織中の水分比が比較的高く防御用の殻も持たないウミウシ系、となれば私の温度操作で煮立たせるなり凍らせるなり出来ようもんですが……相手がこの大きさ、かつ変温種族だとすると最低でも半径５ｍ以内に近付かないとほぼ意味を成さないって所が問題なわけでして。

直触りなんて論外で、もし仮にやろうとすれば軟体動物系軟体種特有の怪力にねじ伏せられて腕の一本でも持っていかれそうで怖いんですよねー。
破殻化したコックローチの外骨格なんて強度で言えばヴァーミン十種類中最下位レベルですし…ここは回避軸で接近戦に持ち込むしかないようですね……）」

この間、僅か５秒しか経っていない。

桃李の頭の回転は幼少期よりほぼ常軌を逸したレベルに達しており、本気で思考を展開した彼女は実質的に時間の流れを遅くする能力を持っていると言って良かった（長時間続けていると激しい頭痛に悩まされるため滅多にせず、やるとしても最長一桁台に留めているが）。

「（ひとまずは奴へ安全に近寄らなければ……）」

桃李が平常時のペースでそう考えた瞬間、遠くにいたはずのラズリが突然目の前に現れた。

「――ッ！？」

「…驚いたろう？」

ラズリが言う。

「元来鈍足であるはずの貝類系何体種が何故ここまで俊足なのか、疑問ではないか？」

余りにも図星な発言に、桃李はぐうの音も出なかった。

「図星過ぎて言葉も出ないか……無理も無い」

壁際に追い詰められ身動きの取れなくなった桃李の首を、ラズリの扁平な右手が掴んで壁に押しつける。

「このまま貴様の首をへし折るなり締め付けるなり叩き付けるなりすれば一瞬で殺せるが……冥土の土産に聞かせてやろう。私が持つ桁外れの力について――っぐぁぁあああああああっ！」

その瞬間、ラズリの右手が炎に包まれた。

桃李が流し込み続けていたローチフィルムを加熱し、発火させたのである。

「すみませんねぇ、ラズリ先生。

貴方のお話を聞きたいのは山々なんですが、どうせラビーレマの学者が考案した特殊なトレーニング法の結果だとか、神経の放つ微弱な電気信号を餌にするミクロマシンを体内に仕込んでるとかそういうオチでしょう？」

「貴様ぁあああああ！力の秘密がそれだと何故解ったあああああ！？」

炎が全身に燃え広がって尚、ラズリは必死の形相で言葉を発する。

「そりゃあだって、私は生粋のラビーレマ民ですから。故郷の事情に詳しいのも当然ですよ」

「あああああああ！そんなばガボェアィフェッ！」

只でさえ熱に弱い身体を悉く焼かれた上に熱気を吸い込んだ結果、更に熱に弱い喉が焼け焦げて貼り付いてしまったラズリ。

それでも無茶をして喋ろうとして喉を動かしてしまったが為に、持ち前の怪力が災いして喉の柔らかい粘膜が張り裂け、口から大量の青い液体を吐き出してしまう。

これは彼女の体液であり、血中に含まれる呼吸色素ヘモシアニンが銅イオンと酸素の反応に由来する青色を示す事によるものだった（我々人類を含む脊椎動物は赤色素ヘムを持つヘモグロビンが血液の主成分である為血液は赤い）。

全身を焼かれ大量出血まで引き起こしたラズリに残された道は最早死の他になく、のたうち呻きながら苦悶し絶命しゆくその姿を嘲りながら、桃李は部屋を去って行く。

『（いやぁ、流石は桃李です。
この程度の相手、私が手助けをするまでもないようですねぇ）』

かくして六名が死亡した秋本軍は、残すところ４０名となった。

第六十二話　私の兄がこんなに空気なわけがない（後書き）

次回、ツジラジメンバーを待ち受ける更なる脅威とは！？

第六十三話　ねこメカ！（前書き）

秋本軍相手に優勢かと思われたツジラジメンバーにも、苦戦を強いられている者が居り……

第六十三話　ねこメカ！

―前回より―

リューラや桃李が秋本軍を圧倒する中で、珍しく苦戦を強いられている―というより、手も足も出せずに居る者が居た。
不死身で名高き元開業医・ニコラである。

理系魂をくすぐられ、軍用理学コースの理科実験室へと忍び込んだ彼女を待ち受けていたのは秋本の愛人が一人であるカマキリ系外殻種化学教師・真栄田（外観はラズリやニコラなどと同様極めて人間的である）。
事故により両足を失った彼女は普段から歩行補助用のパワードスーツを着用していたが、今回ニコラの眼前に現れたそれは完全に軍用の品だった。

「どうした!?随分と慌ててるみたいだな、嬢さんや！」

全高４ｍはあろうかという軍用パワードスーツの中央に乗り込んだ真栄田は、手早い操縦で拳を振り回し、逃げ惑うニコラ目掛けて机や実験器具を投げつける。

「そりゃあ慌てもしまさぁねっ！あたしゃあんたに指一本触れられないんですからねえっ！」

対するニコラはそれらの猛攻を狐由来の身体の運動能力で素早く避け続けるが、いざタセックモスの蛾型弾丸を放とうにも、狙いを定めたり発生源を設置するより前に鉄の拳や張り手で叩き飛ばされてしまうため攻撃のチャンスが一切無いに等しかった。

「（くっ、こいつはやばいね。私の不死性は『修復』の方は完璧なんだけど、痛覚や疲労は極めてストレートに来ちゃうのよねん。これじゃ狙いも乱射もあったもんじゃないわ。ただ、あの猿女が乗ってるデカブツを止めることが出来たら……）」

桃李程ではないにせよ、霊長種から見れば機敏な動作でどうにか真栄田を翻弄しようとするニコラ。

しかし彼女の思惑に反するように、真栄田はパワードスーツによる打撃を的確に打ち込んでくる。

「（こいつ……多分昔はゲーマーだったんじゃないかしら？それもアクションとかＳＴＧとかＦＰＳとか専門の、あの動作から見ると大方ゲーセン仕込みって所かしら）」

ニコラの読みは当たっていた。真栄田は学生時代、天賦の才を持つゲーマーとして地元のゲームセンターで有名になった事があるのだ。

「（はぁ……『ゲームなんぞ出来て将来何になる』とかいうのは不寛容で頭の固い団塊世代のアホが言う世迷い言の代名詞だけど、まんまコントローラを移植したような操縦システムの機械が出来てからはその発言も益々アラだらけになってんのよねぇ。最初は雇用が増えるとか不況も吹っ飛ぶとか思ってたけど、まさかこんな形で苦しめられるとは……）」

そうこうしている内にニコラも疲労が限界に達し、足首をパワードスーツによって掴まれてしまう。

「（やば！）」

「うルァ！」

ニコラがそう思ったとしても時既に遅い。真栄田はニコラを壁目掛

けて勢い良く投げつける。
ドゴァ！バギゴッ！
鈍い音を伴ってコンクリートと骨が砕ける。
「スァラバッ！」
それでも飽き足らない真栄田は、近付いてニコラに追い打ちをかけ続ける。
ニコラの骨が砕け、筋が切れ、内蔵が破壊されていく。しかしそれでもノモシア王族に受け継がれる高純度の魔力からなる呪いは強力で、死なないばかりか徐々にではあるが再生を続けていた。

「さァ！死ねェ！我らがッ！教頭のッ！栄光のッ！為にィィィィ！」

無抵抗のニコラを目一杯乱雑に殴り続ける真栄田。
その顔つきは教育者としてのモラルや倫理観、覚悟をもった化学教師たるものではなく、ゲームの中での最強である自分自身に酔いしれる稚拙なゲーマーのそれであった。

「何故！？何故！？何故だあああああああっ！何故死なない！？何故殺せない！？」
幾ら殴っても死なないニコラに苛立ちを感じながら、尚も殴ることを止めない真栄田の背後で、唐突に瓦礫が突破されるような音がした。
「さっさと死―どぅおおおおおぉ！？」

突然の出来事に取り乱した真栄田は振り向きざまに叫ぶ。

「なっななななっなな何者だああ！？何も、なに、何者だぁ！？」

何処からどう見ても慌てている真栄田の問いかけに答えるものは居らず、真栄田の脳内では焦りばかりが加速していく。

そんな中、散らかった理科実験室の床を堂々と歩いてくる二人の人影が彼女の目に入る。
体格が大きく異なる二人組は、どちらもクリーム色のローブで全身を覆い隠している。

「な、何者だ貴様等!?ここは部外者立ち入り禁止だぞ!?」
真栄田の叫びは高圧的でこそあったが、明確な焦りや怯えというものが如実に表れていた。
そんな彼女に対し、ローブの二人組の内小柄な方が言う。
「いやぁ、これは失礼。正門も窓もロックされていたので屋根の上から突入する他ありませんでな。
お許し下され、悪気が会ったわけではないのです」
「御託は良いから名乗れッ!」
「失礼、私どもはしがない旅行者でして、とある筋より本日こちらでツジラジ公開録音の催し物があると聞いて馳せ参じた次第。
私も、私の臣下であるこの男もあの番組の大ファンでしてね。特に青色嬢の声が綺麗で可愛らしいとは、職場でも評判なのですよ」
「そんな事はどうでもいい!そのローブを脱ぎ捨てて名を名乗れッ!」
「はあ、畏まりました。おい」
「ああ」

二人は一斉にローブを脱ぎ捨てつつ、淡々と名乗り挙げた。

「お初にお目に掛かります。ラビーレマは列甲大学にて機械工学を研究しております、研究員の九条チエと申します」
「同じく初めまして。私、九条の部下兼助手のティタヌスと申します」

そう。唐突に現れたローブの二人組とは、嘗て料亭「傘猫」で繁に

協力し秋本軍に挑む事となった二人組―桃色の毛を持った小柄な猫系禽獣種の女・九条チエと、大柄で身体の所々が機械的な角竜系地竜種・ティタヌスであった。

「さて……そうだティタヌスよ、挨拶の印として此方のご婦人にアレをお送りしてはどうだ？」

「何？アレをか？いやぁ、アレはやめておいた方が良いと思うぞ？」

九条の提案に、ティタヌスは笑い混じりに苦言を呈する。

「何を言っている。彼女を見ろ、両足を失いながらも尚こうして努力を惜しまずパワードスーツを乗り回して弱い者イジメに精を出されているじゃないか」

「弱い者イジメとは何事かっ！これは教員としての職務の一環であるぞ！」

九条の発言に戦うことも忘れて突っ込む真栄田だったが、党の相手方からは華麗に無視されてしまう。

「確かにそうだなぁ。そう言われてみれば、確かに九条の言うとおりだ」

「何が言う通りかっ！助手ならば上司の間違い程度訂正せんかっ！」

「そういう訳で御座いますからして、名も知らぬ外殻種のご婦人殿。私どもよりの最大の敬意と挨拶の証で御座いますこれを、どうぞ受け取って下さいませ」

そう言ってティタヌスが右腕を真栄田に向けると、機械的な意匠の目立つ太い腕が瞬時に変形。

終いにはロケットブースター付き弾頭を使用した対戦車仕様の無反動砲を思わせる流線型の弾丸と射出部が露わになった。

「な、何だそれはっ！？」

「愚問ですなご婦人殿。何と言ったら決まっているじゃありません

か」
「我々から貴女様への、敬意と挨拶の証で御座いますよ」
「馬鹿め！そんな形で敬意と挨拶を表明する奴があるかっ！
ええい、貴様等など今にこの私が叩き潰して――ッ！？な、何故だ！？間接部が動かん！
くそ、こうなれば脱出を――何！？脱出用ハッチまでビクともしないだと！？」
気付けばパワードスーツの手足関節部と脱出用ハッチはいつの間にか謎の接着剤らしき物体で固められており、手足を動かすことも脱出することもままならない。

「動かない、という事は……この男の贈り物を正面から受け取って下さるのですね？」
「馬鹿！そんな訳があるかっ！良いから早くそれを下ろせっ！」
「まぁまぁ、そうご謙遜なさらず。口で何と言われようと、お体の方は正直ですぞ？」
「その風体でアダルト漫画のような言い回しを使うんじゃないこのシロサイの出来損ないが！」
「シロサイの出来損ないとは心外ですな、私はこれでもカスモサウルスですぞ？」
「お前の種族なんぞ聞いとらん！そもそも脊椎動物系種族なんてどれも同じようなものだろうが！
良いから早くそれを下ろせっ！私を敬っているのなら、早くそのでかぶつを――」

言い終わるより早くに、パワードスーツの操縦席が粉々に吹き飛んだ。
この間でかなりの再生と疲労回復に成功していたニコラはこれを見て見事な爆発だと感心した。

この後九条・ティタヌスと出会ったニコラはお互いの事を話し合い、お互いの事を知るや否や意気投合。
新たなる秋本軍の手下を捜しに校内へと繰り出していく。

かくして４０名だった秋本軍は一名減り、残すところ３９名となった。

第六十三話　ねこメカ！（後書き）

次回、遂にあのコンビの活躍が！

第六十四話　しんうち！（前書き）

遂にあのコンビが姿を現した！

第六十四話　しんうち！

―前回より―

壮絶な戦いは尚も続いていた。

「えぉりあァッ！」

繁の振るう槍の矛先が、中等部歩兵科女生徒の頸動脈を斬り付ける。
続いてそこへ斬り掛かってきた兎系禽獣種の女も、香織の魔術によって操られた校舎の一部に叩き飛ばされてしまう。

ヴァーミンの有資格者・辻原繁と、古式特級魔術の使い手・清水香織。
元より姉弟兄妹同然の関係にあったこの二人の連携は秋本の愛人達を悉く圧倒しており、現時点で既に9人を殺害。
更に現在も、周囲を取り囲む愛人達を次々と始末していく。
その姿は最早人を逸した存在―言ってみれば獣、或いは悪霊か魔物を思わせるものであった。
別に繁が破殻化をしていただとか、香織が幻術で愛人を相手に自分達の姿をそう見せていたとかそういう事ではない。

淡々と、しかし猛烈に多くの相手を次々と手にかけていく二人の雰囲気が周囲の目にそう映っていたのである。

そして二人が丁度２０人を殺害した辺りで、敵兵がぱったりと出てこなくなった。

「……どういう事？」

「連中め、まさか俺らに怖じ気付いて逃げ出したなんて事ァ無ぇだろうし……となると、アレか？」
「アレって？」
「ゲームとかだとよくあるだろ？長時間の雑魚戦が急に終わって、間を置いてからいきなりボスクラスのデカブツが出てきてガーって」
「あー、そのパターンは出来れば回避したいよね全力で」
「無論同感だ。が……」
繁は不安げに辺りを見回す。
「どうしたの？」
「なぁ香織よ、改めて思うに……この部屋ァ妙じゃねえか？」
「え？どこが？普通の綺麗なアリーナじゃん」
「そう、そこだ。お前、今の今までここいらの死体や血痕を掃除したか？」
「……ッ！…そういえば、そうだった……」

香織ははっとした。
彼女が習得している魔術の中には、例えば壁の血痕を綺麗に吸い取るものや、或いは地中・異空間等に死体を運び込むもの等が存在している。
しかし香織はツジラジの生放送について、これらを使用する事はなかった。
既に場所が割れているし、現場の状況を克明に流す事が目的である。
即ち、隠す必要性が無いのである。

「……私達、ひたすら殺しまくってた筈なのに…何で……何で、何で死体が消えてるのっ！？」

香織は辺りを見回して驚愕した。
先程まで一心不乱に愛人達を殺していた筈なのに、死体が見当たらない。

血痕さえも、抜け毛の一本や薄皮の切れ端さえも、綺麗さっぱり消えているのである。

香織が呆気に取られていると、咄嗟に繁が叫ぶ。

「伏せろ、香織！」

その瞬間彼女の眼前に巨大な深紅の球体が飛んでくる。

必死に避けなければと思い立つ香織だが、突然の事態に驚いた身体は思うように動いてくれない。

「クソッ、怨むなよ！」

その言葉と共に、繁の飛び蹴りが香織を横方向へ大きく突き飛ばす。

――ズギョォイン！

球体は香織の背後にあった壁に当たると同時に、壁材の塗料とコンクリートを大きく削り取った。

「！？」

「（クソ……さっきから舌が塩辛い油モン食い過ぎた後みてぇにヒリヒリすると思やぁ……案の定紋章が出てんじゃねえか）」

未だヴァーミンの有資格者としては新参である繁は、紋章の発生する位置が一定でない。

道中拾った鏡で、現在紋章が自分の舌に現れていると知った繁は確信した。

――俺含め四人目か……悪くねえ！

「香織……」

「何？」

「この状況下で何だが、嬉しいお知らせだ」

「へぇ、どんなの？」

楽しげに何かを覚ったような香織の問に、繁は同じく楽しげな調子で答える。

「……居るんだよ。さっきの奴かどうかは知らねぇが……ヴァーミンの有資格者だ」

「やっぱり、さっきの奴？」

「どうだかな。もしかしたらさっきのをやった奴のサポートかも知れねぇ」

「そう。……実を言うとね、私も感じてるんだよ……」

「ほう、何をだ？」

「何をって、決まってるじゃん」

これまで以上に恐ろしい脅威たりえるかもしれない存在が眼前に潜んでいる事を覚りながら、香織は尚も楽しげな表情で言う。

「古式特級魔術の使い手だよ。

それも前にラビーレマに居た、クェインっていうクブス残党の流体種とは真逆の――つまり私とも真逆の――純粋な攻撃系魔術以外はからっきしの奴がね」

「つまりアレか？お前が潜入中に意気投合したっていう、例のノゼツとかいう」

「いや、あの子じゃない。あの子はあくまで『攻撃系以外が馴染まない家系』の産まれなだけであって、初歩的な奴なら攻撃系以外も扱えたし。

私が言ってるのはそういうのじゃなくて、本当にただ攻撃系魔術だけに特化した完全火力型（フルバーン）の変わり種だよ」

「成る程、そいつは確かにお前とは真逆だな。

まるでジョー○ターとブ○ンドーよろしく、根本から対を成す性質

って訳だ」
「ははっ、どっちがどっちよ？」
「そうだな……この流れから言うと、お前がブラ○ドーって所じゃねえか？戦術が変則的だしよ」
「そうかなぁ？私は○ランドーっていうより、ア○ッシーとかメロ○ネとかミュー○ーとかのが似合うと思うんだけど」
「相変わらずモブ扱いのトリッキーな悪役好きだよなお前」
「そりゃ、ああいう奴らこそ輝くべきだと思ってるからね私は。特にミュ○ラーが好き。あとケ○ゾーとウ○ガロにはもうちょっと頑張って欲しかったかなぁ」
「へへっ、もうラノベのメインヒロインが言う台詞じゃねーって」
「良いじゃん別に。元々メインヒロインとしての自覚なんて在ってないようなもんだし。

さて……それはそうと、こっちが隙だらけで待ち伏せしてるんだし、敵さん方もいい加減顔くらい見せたらどうよ？」
「そうだよなぁ。こんな近くで明確に気配が察知できるんだ、隠れた所で無駄ってモンだろうによぉ」

二人の言葉に促されるようにして、アリーナの東端と西端からそれぞれ人影が姿を現した。

東端から現れたのは、生徒と思しき服装の小柄な少女であった。
西端から現れたのは、保険医と思しき服装で長身の女であった。

「よもやここまで簡単に見抜かれるとは、些か予想外だったわ」
白衣を着た食肉目系禽獣種と思しき女が言った。
「あの程度であそこまで察知するなんて、お兄さん達流石だね」
小柄で人に近い妖精のような有角種の少女が言った。

「実にエロそうなケモ保険医に、妖精みたいなロリ学生ってか……」
「学園もんのエロゲやエロ漫画じゃ定番の攻略対象じゃねぇかァ……」
……」

かくして39名だった秋本軍は、20人が死亡し残すところ19人となった。

第六十四話　しんうち！（後書き）

次回、突如現れた二人組の実態とは！？
そして小柄な少女に隠された、衝撃の事実が明らかに！

第六十五話　やっぱり俺の仮説は間違ってねぇ！（前書き）

アリーナでの壮絶な戦い！

第六十五話　やっぱり俺の仮説は間違ってねぇ！

―前回より・教頭室―

教頭室にて、秋本と愛人の一人が連絡を取り合っていた。

「首尾はどうです？」

『はっ。誠にお恥ずかしながら、劣勢としか言い様が御座いません』

「と、言うと？」

『はい。我々はどうもツジラ一味の実力を見くびっていたらしく……残存戦力は教頭ご自身を含め１９人となっております』

「……そうですか」

『しかしご心配には及びません、教頭。諜報科の鳴頃野神子音（なごろのみこね）とその姉にして保険医の比良子（ひらこ）が現在、ツジラ・バグテイル及び青色薬剤師と思しき二人組と接触したとの報告がありました』

「ふむ……鳴頃野（なごろの）さん達ですか……彼女らは確かに我々の内でもかなりの実力者でしたねぇ」

『えぇ。しかし教頭、それだけではありませんよ。あの姉弟は元より連中に対抗しうるに相応しいのですよ』

「ほう？どういう事です？」

『教頭の生まれ故郷であるヤムタの慣用句にあるでしょう？「蜂殺しには蜂を放て」という言葉が』

その慣用句を聞いた秋本は、納得したように深くうなずいた。

「成る程、そういう事でしたか。確かに、敵の元へと本質が似通う見方を送り込むというのは、古くからある作戦ですからねぇ……」

―同時刻―

かくして『古式特級魔術を行使する魔術師』と『ヴァーミンの有資格者』という組み合わせによるミラーマッチは熾烈を極めていた。

保険医・鳴頃野比良子（なごろのひらこ）が放つ攻撃魔術は何れも強力なものであり、しかも繁と香織を的確に狙い撃ってくる。

攻撃系魔術とはその名の通り対象物の攻撃・破壊に特化した魔術の総称であるが、その意味合いは『主に攻撃に用いられる魔術』であって、『攻撃に用いることの出来る全ての魔術』ではない。

現に先天的素質から攻撃系魔術を全く扱えない香織も、『マルファス』や『デカラビア』系統の古式特級魔術で建物や岩石を操ったり、魔術によって召喚した武器などを用いた戦闘は可能である。

では攻撃系魔術の特色とは何かと言えば、『攻撃・破壊の効力が魔力に起因する』という事に限られる。

否、それ以上に『他の魔術より攻撃に対し知恵や技術を要さない』という特徴もあるにはあるが、その点は現時点に於いて余り重要でないので言及を省く。

つまりどういう事かと言えば、例えば香織が行うような魔術攻撃はあくまで『建材や岩石で殴ったり、単なる武器での攻撃』として扱われるが、攻撃系魔術での攻撃は『純然たる魔術による攻撃』として扱われるのである。

多少解りやすく説明するならば、典型的なファンタジーもののＲＰＧに於ける『物理』と『魔法』の差だと思えばいい。

カタル・ティゾルに於いてこの差が何を成すかと言えば、攻撃・破壊対象の性質に関係してくる。

つまるところ攻撃対象の耐久力が高かったとしても、それに魔術対策が成されていなければ攻撃系魔術による攻撃が有効、と……すんません、やっぱり『物理防御』と『魔法防御』の話でした。

ともあれ、攻撃手段に於ける性質の違いを差し置いたとしても、魔術師としての比良子の実力は計り知れないものがあった。
更に言えばもっと問題なのは、無差別にして強力無比な破壊力を誇る番号不明のヴァーミンを保有する有資格者・神子音であろう。
神子音の放つ深紅の球体は血液のように不透明な液体で構成されており、直系は５ｃｍから１ｍ程と多岐に渡る。
何らかの物体に接触した瞬間砲弾は液体としての性質の元に崩れるが、その際触れた物体は何もかもが煙も上げず削り取られたように消滅してしまう。
更に同じ液体でありながら、繁のアサシンバグと違って、発射されて以降何らかの物体に触れるまでの動きはそれこそ砲弾のようであった。

「（クソっ！タセックモスやコックローチと違って完全に直線的な飛び方しか出来ねぇらしいが、それにしてもあの連射力は何なんだ！？まるで機関銃じゃねえか！
魔術だろうが学術だろうが―無論ヴァーミンだろうと、この世の中のモンには必ず『四則に基づく質量保存の法則』が当て嵌まる。
１．０＋１．０は必ず２．０だし、３．０＾２は原則９．０でしかねえ。
不純物のない完全なゼロからは例え１／１０００００００さえも産まれはしねぇ。
つまるところ何かをやるにはどっかからそれと同じだけのモンを取り入れなきゃなんねぇんだ……）」

繁は多才な魔術によって猛攻を凌ぐ香織の心配をしつつ、広大な室内を素早く飛び回りながら打開策を考えていた。

「（無論浮世は例外ありき。虚数は自乗して負の解を成すし、青薔

薇は人造で産み出される。
砂漠で育つカエルだって居るし、浮気しない・早死にする・ス○ンドは殴り特化の人型で派手に目立つっつー法則性が目を引く歴代ジョ○ョの中にあって、９０近くまで生きてスタ○ドも活躍基本地味だった紫のイバラ、おまけに浮気までしやがった二代目が居る！
あとそんなジ○ジョの相方も、作中で死亡が描写・言及されんのがデフォなのに四代目だけはそれが無かったしな！
だがそれは極めてイレギュラーな場合……そう、現実にそうそうお目に掛かれるような代物ではねえ！
つまり奴のヴァーミンもあれだけの連射力を演出してるって事ァ何らかの仕掛けがあると考えた方が妥当なんだが……）」

繁は思考を巡らせる。桃李程ではないが、幼い頃から長ったらしく小難しい（主に昆虫学関係の）の文章を読み慣れてきた繁は、その関係上一般人よりそれなりに頭の回転が速い。

「（待てよ……そういえば奴が現れる前に……いや待て、別の可能性も……何よりこの仮説が当たったとして攻略の足しになるのか……？）」

熟考の末に繁はある仮説に辿り着く。

「（だが実証しねぇよりはマシだろうよ……厳密に断定できる『無駄知識』なんてもんはこの世に存在しねぇ……なら、実証するしか無ぇっ！）」

決意を固めた繁は、懐からビニール袋を取り出す。
その中に入っていたのは、今朝方収録前に食べたフライドチキンの骨であった。

「（時間無くて軟骨食い損ねたのを残しといた甲斐があったぜ。トリの正しい食い方を教えてくれた親父には、その他諸々も含め感謝してもしきれねぇぜ）」

繁は軟骨の残った骨を数本、名残惜しく思いながらも部屋の隅の方へ放り投げる。

骨は放物線を描いて回転しながら落ちていく。

「（さぁ……どうなる？ただ単に床へ転がったままか？それとも……）」

繁によって投げられた骨は、床に落ちるや否や削られるように消滅した。

更にその数秒後、深紅の球体を発射し続ける神子音の喉元が幽かに脈打った。

それらの光景を見届けた繁は、確信する。

「（仮説的中！やっぱこいつは例外なんかじゃねえ！）」

第六十五話　やっぱり俺の仮説は間違ってねぇ！（後書き）

次回、神子音の持つヴァーミンの正体とは！？

第六十六話　オトコの娘は伊達じゃない（前書き）

遂に露わになる、鳴頃野神子音の本性！

第六十六話　オトコの娘は伊達じゃない

―前回より―

「（まぁ……仮説が的中しようが最大の脅威は去ってない訳だが……）」

繁は尚も考察する。
死体消滅及び連射の謎について、大凡の仮説は成立した。
しかしだからと言って、こと攻撃力に関する面でこちら側が圧倒的に不利であるという事は変わりない事実でもある。
ともすれば、一体如何にしてあの二人に打ち勝つべきか？

「（あのチビは無理でも、あっちの保険医っぽい奴はどうにかしてぇんだよな……さてどうするか…。
只でさえ自衛で手一杯な香織の協力はアテにしねぇが吉……と、するならば、だ）」

少しばかり考え込んだ繁は、すぐさま作戦を思い付く。
「（コレで行ってみる…か）」
壁に貼り付いた繁は、そのまま壁を蹴って比良子目掛けて突撃する。
「……？バカね、無駄な事を！」
早々に感付いた比良子は、嘲笑うかのように手元から大規模な電撃を放つ。
古式特級魔術でこそなかったが、その威力は並大抵の人間を消し炭にする程度の威力は持ち合わせている。
しかし繁はそれにさえ動じずに、空中で前転すると共に溶解液を纏い、そのまま両足で飛び蹴りを繰り出す姿勢となる。

「な、何ですってッ！？あんた正気ッ！？
イスキュロン軍魔術部隊の古参精鋭さえも悩ませる最上級攻撃系魔術『Ｃ－インドラ－１１７』に真正面から突っ込むなんて――――……！？」

その瞬間、比良子は目を疑った。
一般的な攻撃系魔術の中でも桁外れの威力を誇る筈の『Ｃ－インドラ－１１７』が、繁の身に纏った溶解液によって打ち消されているのである。

「ズェルァッ！」

繁の飛び蹴りが炸裂する直前、比良子は大きく飛び退いてそれを回避した。
着地点を中心に緑色の膜と飛沫が散り、床材を溶かす。
比良子が避けた事を見切った繁は、魔術で展開した盾で神子音からの攻撃を防ぐことに躍起になっている香織へ合図を送る。
防壁の隙間から辛うじて顔を出した香織はその合図を何とか理解したらしく、深紅の球体から必死で逃げ回りながらも何とか『了解』との返答をボディランゲージで返す。

そうこうしている内に繁目掛けて再び比良子の熾烈な攻撃系魔術―電撃の他、火炎や光線等多岐に渡るものが一斉に襲い掛かる。
しかし繁はそれら攻撃系魔術さえも、左手の一振りで撒いた溶解液によって掻き消してしまう。

「最初は物体だけかと思っていたが、成る程ここまで出来たのか。
この調子ならこれから先、まだまだ成長しそうな雰囲気だな……頼むぜ刺椿象（アサシンバグ）、俺のヴァーミンよ」

繁は両手から手甲鉤の刃を繰り出した。

「思えばコイツにも世話になりっぱなし……だ！」

手甲鉤の刃を構えた繁は、そのまま一直線に比良子目掛けて突進する。

対する比良子は何かを感じ取ったのか、咄嗟に波動を繰り出し繁を吹き飛ばす。

「ぐぉぁ！」

そしてそのまま、微動だにせず球体で香織を狙い撃ち続ける神子音に言った。

「神子音ッ！あれっぽっちじゃそろそろやばい筈よ！あんただけでも逃げなさい！」

そんな姉の忠告に対し、神子音は顔色一つ変えずに答える。

「大丈夫ですよ義姉さん。僕はこいつらを始末し、秋本教頭の栄光を守り続けます。

義姉さんこそ、逃げた方がいいんじゃあないですか？ツジラが義姉さんの魔術を無力化出来ると判明した今、最早義姉さんは彼に傷一つ付けることは出来ないでしょうから」

「何？あんたは私が役立たずだとでも言いたいわけ！？」

「よくお判りじゃありませんか、義姉さん。

僕が今相手にしている青色薬剤師は取るに足らない相手ですが、ツジラを前にした今の貴方はそれ以下です。

だから早く逃げ戻って、秋本教頭に例のアレを始動させるよう掛け合ってきて下さい」

「冗談じゃないわよ！妾の息子の分際で偉そうに！

今の今まで誰があんたみたいなのを育ててやったと思ってるのよ！？」

「誰ってそりゃあ、亡くなられた義父さんや義母さんに秋本教頭で

しょう。
あとは学校のクラスメイト達や先生方、それに侍従の皆さんですかねぇ。
……まさか、そこで義姉さんだとでも言えば良かったんですか？そう言ってくれるだろうという事に期待でもしていたんですか？そこまでして僕より優位に立とうと？」
「……ッッ！」
図星であった為、比良子はただただ黙り込むしかない。
「義姉さん、貴方はバカですか？初めて出会った頃から救いようのないバカだとは思っていましたが、本当に何処までも救いようのないバカだったんですね？」
「何ですって――「だってそうでしょう？貴方如きちっぽけなクソ猫如きに恩義も愛情も何も在るわけがないじゃありませんか」
「この……義弟の分際で生意気を――ッグゴフッ！？
比良子はその一瞬を以て、神子音の指先から伸びてきたホースのようなものに胸と眉間を貫かれ絶命した。
「僕という存在の目的はあの時……先天的なヴァーミンの有資格者として生を受けた時から既に決まっていたんですよ。

『完全無欠の永久機関』……如何なる代償をも要さず活動する究極的生命体としての完成こそは、僕の存在意義なんです。
その為には…義姉さん、あなたみたいなバカなんて所詮は只の餌に過ぎなかったと言うことで――ッ！」

繁の槍が神子音の顔面スレスレを掠める。

「言いてえことはそれだけか？えェ、この女装野郎がよォ」
床に突き刺さった槍の頂上部に立った繁の挑発的な発言へ、神子音は冷ややかに言い返す。
「女装野郎……失礼な方ですね」

「そんなナリの野郎が言えた義理かよ」
「……よく僕が男だと気付きましたね」
「そりゃな。さっきのバカが妾の息子とか言ってやがったし、何より臭いがしたからなぁ……」
「臭い？」
「そうだ。どんだけ着飾って化粧しようが、先天的な雄臭さってのは抜けねぇんだ……よッ！」
繁はポールダンスの要領で槍を軸に回転しながら手甲鉤で神子音に斬り掛かる。
「くぅっ！」
すんでの所でそれを避けた神子音はそのまま飛び退くと、殺害した比良子を触手状の指から瞬時に吸収。
直後、球体を撃ち出す際出される円が空中に現れ比良子の衣類等を吐き出した。

「お前の能力については大体解ってきてんだ。
指定範囲内に落ちた動物の死骸を吸収し、そこから産み出したエネルギーを消費して深紅の球体を放つ……。
球体の性質については言及するまでも無ぇ、お前がバカスカ撃ちまくったお陰でほぼ見切れてっからなぁ」
「……流石ですね、僕の持つ『ヴァーミンズ・ピャーチ　リーチ』――つまりは蛭の象徴を持つ第五のヴァーミンについて、この限られた時間内でそこまで理解するとは。
流石は六大陸を騒がせるテロリストのリーダー、という事でしょうか」
「失礼な奴だな。俺はテロリストじゃ無ぇ、ラジオＤＪだ。
しかもさっきお前に吸われたバカの言ってたことが確かならお前…
…そろそろ弾切れが近いんじゃねえか？
どうする？２０人であの程度の量が限度なら、そんなバカ一人程度で撃てる分量なんぞ決まって来るんじゃねえの？」

「えぇ。間接吸収より直接吸収の方が効率的であるとはいえ僕の能力は未だ未発達ですから、上限など高が知れているでしょうね」
「だったら――「しかし、だからと言って僕があなた方二人を抹殺するという事実に変わりはありません」――何？」
神子音は肩の力を抜きながら、繁と香織に向けて言い放つ。
「能力が使えまいと、僕にはまだ戦う術がありますから」
肌が小刻みに脈打つ神子音の姿を見て、繁は言った。
「成る程。お前も出来るのか……『破殻化』を」
「えぇ……と言うことは貴方も？」
「まぁな……」
「では、何処からでも掛かってきて下さい。何がどうなろうと、あなた方が僕に勝つ事など出来はしないのですから……ッ！」
神子音が目を見開いた瞬間、彼の皮下組織内部を無数のミミズかヒルのようなものが蠢き出す。
それに合わせて繁も破殻化の構えを取り、薄いガラス版の割れるような音と共に異形の姿へと変貌した。
かくして１９名だった秋本軍は、１名が死亡し残すところ１８名となった。

第六十六話　オトコの娘は伊達じゃない（後書き）

次回、蛭ＶＳ刺椿象＆魔術師！！

第六十七話　ヒルがサシガメを追う理由（前書き）

尚も続く壮絶な戦い！

第六十七話　ヒルがサシガメを追う理由

―前回より―

「さて、どうしたもんか……」

魔術で異空間の中へ退避した香織は、窓の向こうにて繰り広げられる激戦を眺めつつ頭を抱えていた。

「外では二人が交戦中。しかも基軸になる能力はどっちも破壊力がとんでもないから、巻き添えを喰らうと明らかに死ぬんだよね。かと言って下手に動けば繁の邪魔になる上にそれこそ下手したら即死だし……ああもう、どうしたら良いかな……」

香織は考えた。最も楽な選択肢としては、このまま異空間に隠れ潜んだまま繁を見守るというものがある。

しかしながら、香織はその考えを思い立ち次第即刻却下した。それは余りにも手抜きが過ぎると思ったからだ。

かくして香織は尚も思考展開を続けるが、中々適切な策が思い浮かばず悩み続ける。

―同時刻・外部―

蛭のヴァーミンを持つ神子音の破殻化した姿は、それが元々少女と見まごう程に華憐で線の細い尖耳種の美少年である事を忘れさせるようなものであった。

それは差詰め色取り取りの蛭が群れを無し一つの生物であるかのように振る舞って生きるようであり、尖耳種としての意匠はおろか、

人型さえも保っていない。
日本の有名なアニメ映画に登場する、祟りによっておぞましい化け物に成り果てた巨獣のような姿のそれには、当然目や鼻といった顔のパーツは何も見受けられない。
しかしそれでも尚、神子音は何処から声を出しているのであろうか、明確にまともな言葉を喋ったりする。

しかも問題はその攻撃方法であった。
破殻化前の神子音の攻撃と言えば、能力による球体の連射のみであったが、ここにきてそのレパートリーが増えたのである。
というのは、身体を構成する蛭数匹が本体を離れ巨大化し床や壁を砕いて掘り進みながら突進を始めたのである。
しかもその動きは無差別なようで不規則ながら、本体である神子音を守りながら繁を狙うという芸当を的確にやってのけるので尚のこと厄介極まりない。

「（でェい、クソッ！しかもコイツ等、幾ら殺しても次の奴が来るんじゃあキリが無ぇッ！）」

繁は巨大蛭の猛攻を回避しながら打開策を練っていた。

「（だが打開策が無いとは限らねぇ……そうだ！打開策は多分どっかにある！そう信じよう！
だが何だ？相手は繁殖力・再生力に優れた馬鹿でかいヒルの集まりだ。見る限りじゃパワーやスピードも連中の方が圧倒的に上回ってると見て間違いあるめぇ。
問題は奴が如何にして俺を追ってきてるかだが……少なくともこれまでの事から考えて視覚は使えないと見て間違い無ぇだろう。
環形動物に目玉は無ぇからな……となりゃあとは聴覚・嗅覚か空気の振動、温度、二酸化炭素を基準にからこっちを探ってるかだが…

…）」

繁は巨大蛭の猛攻をかいくぐって静かに着地すると、そのまま破殻化を解除し動きを止めた。

「（これで奴が聴覚に依存して俺の位置を探ってるならまだ打開策はありそうなもんだろうが……さてどうだ……？）」

繁が暫く待っていると、巨大蛭達は途端に目標を見失って迷いだした。更に蛭の聴覚は曖昧なのか、呼吸音や足音などは聞き取れないらしい。

「（良し……これなら行ける……）」

繁は再び破殻化で姿を変え、動きを止める。

しかしそれを皮切りに、突如巨大蛭達が一斉に襲い掛かり始めた。

「（クソッ、どういう事だ!?破殻化の劣ってそんな大きくなかったよな!?）」

繁が混乱しながらも避け続けていると、蛭の塊である神子音が声を張り上げた。

「成る程、破殻化状態の僕が音で貴方を察知していると判断したわけですか。しかし考えが甘いですね。

元々耳に自身のない僕がまさか音で敵を探る訳がないでしょう？寧ろ耳は目玉共々破殻化と共に封印してしまいますからね、僕は音に頼らない」

「（そういう事か……だがだとすれば、何を手掛かりに俺を探って

るんだ？
まず嗅覚・二酸化炭素軸だとすると、止まってた俺を察知できなかった事と矛盾が発生する。
破殻化すると寧ろ体温下がるんだから熱軸も有り得ねぇ。
となりゃ残るは振動軸だが……やってみる価値はあるか……）」

繁は携帯電話を取り出し、空を飛びつつ異空間の香織に連絡する。
彼が持つ携帯電話は少々特殊で、相手の許可があれば如何なる隔たりをも超えて通信が可能という代物だった。

「香織、聞こえるか！？」
『し、繁！？聞こえてるけど、どうしたの？』
「奴はエネルギー消費を懸念してか、破殻化以降能力と視聴覚の使用を放棄したらしい。だが奴の妥協案ってのがまたかなり厄介でな。かく乱の必要性がある。手伝ってくれ」
『そりゃ大歓迎だけど、どうやって手伝えばいいの？』
「簡単だ。『ビートエアーＣ３』をアリーナ中に放ってくれればいい！俺がやめろと言うまでだ！」
『解った！』

通話が終わり次第、香織の放った魔術によってアリーナに充満した大気が振動した。
これで巨大蛭が空気振動や大気の流れを頼りに繁を察知しているのなら、混乱する筈である。
「良し、これでどうにか――――！？」
しかし、現実は違った。空気が振動し気流が大きく乱れる中にあって、巨大蛭は尚も凄まじい勢いで繁目掛けて向かってきたのである。

「ば、馬鹿な！？っがぉぁっ！」
繁は巨大蛭の噛み付き攻撃を何とか回避しようとするが、密集して

突進する太い柱となった巨体に叩き飛ばされ、意に反して破殻化が解除されてしまう。

人の姿で落ちていく繁を、巨大蛭は再び察知できなくなる。香織はその隙を突いて空間を歪め、異空間の私室に繁を退避させた。

―異空間―

「繁、大丈夫？」

「あぁ。お前が山積みになった掛け布団で受け止めてくれたお陰で、人の身体であの高さからアリーナの床に転落なんて事にはならずに済んだ。

有り難うよ、香織」

「良いって良いって。元より助け合うのが従兄弟じゃん」

「そうだったな……しかしありゃあ何なんだ？聴覚でも嗅覚でも熱探知でもなく、ましてや空気振動や気流から探知してるわけでもねぇとは……」

繁は頭を抱えた。仮に秋本と奴以外の愛人を皆殺しにしようとも、奴一人生き延びればそれだけでこれから先自分達の脅威になるであろう事は容易に予想が付く。

何より只でさえ強力なヴァーミンだが、それらは保有者に合わせて更なる成長を遂げる。

今でこそ死体を吸収しエネルギーを確保しなければ撃てないという弱点を抱えた神子音の球体も、何れその制約から解き放たれた真の姿へと成長を遂げないとも限らないのだ。

否、有資格者である神子音が生き続ける限り、リーチは何時か必ずその成長を完了させるであろう。

そしてヴァーミンの有資格者が背負う宿命に従い、今とは比べ物にならないほどの力を得た神子音は必ず繁達の前に立ちはだかるに違

いない。

「（となりゃここで一度殺しておくのが吉……と、考えるのが手っ取り早い。あの性格と和解なんて出来るはずねぇし、ましてや結託なんて夢のまた夢―それこそ例外中の例外の可能性だろう。

だがどうする？奴の攻撃をどうにか止めねぇ限り、勝ち目はねぇぞ……）」

繁は考えた。香織も考えた。お互い意見を出し合って話し合いもした。

そして様々な仮説を飛び交わす中、二人は遂にある結論を出すに至る。そして一介の仮説に過ぎないその結論が正しいという前提の元、二人は最適な作戦をも練り上げた。

「そうと決まりゃあ……」

「早速、作戦開始だね」

繁は再び破殻化して外へと繰り出し、香織は安全確認も兼ねて離れ離れになっているニコラ、桃李、リューラの携帯電話にもメールを送信する。

第六十七話　ヒルがサシガメを追う理由（後書き）

次回、ヒルＶＳサシガメの地味な吸血害虫対決遂に決着か！？

第六十八話　ＬｅｅｃＨ！　オトコの娘確殺術（前書き）

ＶＳ鳴頃野神子音戦、遂に決着！

第六十八話　ＬｅｅｃＨ！　オトコの娘確殺術

―前回より―

香織の送ったメールは空間の壁を越えて四機の携帯電話へと届いていた。

一つは、実験室で座り込んで九条やティタヌスと談笑していたニコラの携帯電話。

二つは、獲物を探して廊下を彷徨う事に飽き広大な図書室で暇を潰していたリューラの携帯電話。

三つと四つは、小樽姉弟が離れて連携を行う事を想定して共有している二台の携帯電話。

それらに届いたメールの内容から香織の作戦を知った七名は動き出す。

―実験室裏の準備室―

「ニコラ、こんなもので良いか？」

「うん、上出来だよティタヌスさん。これだけあれば大概の奴は一溜まりも無いって」

「いや待てフォックス、いっそここの粉末試薬全てを持っていってやるのはどうだ？」

「それは止めた方がいいと思うなぁ。あ、でも臭素とかあるじゃん。これは使えるかも」

―食料庫―

「まさか学校に食料庫があるとはな」
「だろ？国立士官学校の名は伊達じゃねぇのさ！」
「冗談抜きで凄過ぎんだろコレ…。
んで確か……塩と酢と、あと何だ？」
「そんぐれぇで良いだろ。他にもソースとか醤油とかもイケるらしいが運ぶの大変だしこんぐらいで良いだろ」
「そうだな」

―医務室―

『やはり軍人を育てる学校だけあって、消毒液や包帯のストックは計り知れませんね』
「えぇ。これは最早本格的な大災害にも対応できるレベルですよ、兄さん」
『確かにそうですねぇ。いや本当に、侮れませんよここは。医務室ですらこの勢いですから、恐らく建物全体を掌握することが出来れば強力無比な要塞としての活用も見込めますし』
「そう考えると何だか楽しくなって来ますねぇ」

かくして香織に指示されたものを確保した七人は、彼女の開いた異空間への入り口を潜っていく。

―アリーナ―

繁は再び破殻化した状態で神子音の猛攻を避け続けていた。

「（さっきまでの不安が嘘みてぇだな……やっぱ、苦境に対する打開策の有無は人の精神状態に大きく影響するらしい）」

繁には勝てる自信があった。度合いは確定の八割程度だが、繁にと

ってはその程度もあれば十分であった。

「さぁ来い！」

着地した繁の挑発は意味を成さなかったが、それでも巨大蛭を引き寄せる事に支障はない。

案の定大口を開けて迫って来た蛭の頭部を、繁は溶解液で消し去る。
すると傷口からは環形動物としての青い体液が吹き出す。

そして繁はその体液を意図的に浴びた。

「これでお前は俺を探れねぇ……」

そう言うのと同時に、再び蛭達が混乱し始めた。
神子音もまた、かなり取り乱しているらしい。

繁は言う。

「お前が索敵に使ってた感覚は、やっぱり嗅覚だったんだよ。
だがその嗅覚から来る探知には、大きな欠点があった。
それは、破殻化したヴァーミンの有資格者の臭気にしか反応出来ないって事だ。
実際には強い力の持ち主に反応とかそんなんだろうが、結果として俺をサーチ出来ないんじゃ意味はねぇ。

まぁ、今回はお前の体液で擬態させて貰ったが……どの道結果は同じだったらしいな」

繁は蛭が混乱している隙を見計らい、早急に香織へ連絡を入れる。

―異空間―

「じゃあ皆、準備は出来たね？」
香織の問い掛けに、七人は深く頷く。
「良し……それじゃ、これでも喰らいな！」

その言葉と共に、神子音の真上へ空間の歪みが生じ、異空間から大量の粉末や液体が降り注いだ。

「ッギィァアアアア！」

神子音は人のそれとは思えない悲鳴を上げて苦しみ悶える。
これは「破殻化したヴァーミン保有者の体組織は象徴たる生物に近くなる」という性質を利用した作戦であった。

というのも、環形動物である蛭は塩・酢酸・エチルアルコールに滅法弱く、肌へ食いついた蛭を撃退するにしてもこれらを用いるのが最も効率的で安全なのである。

更に質の悪さを発揮するのはニコラ達が持ってきた臭素であろう。
臭素は地球上唯一とされる「常温・常圧で液体である非金属元素」であり、その名の通り刺激臭を持つ猛毒である。
ニコラが一時期その値段が金を上回ったともされる臭素に目を付けた理由は、皮膚に触れると腐食を起こすという性質故であった。

かくして塩・エチルアルコール・酢酸に加え、猛毒である臭素まで浴びせられた神子音は屠殺場の豚のような悲鳴を上げながら苦しみ悶えて暴れ回る。
それを養豚場の豚を見るような目で見下ろしていた繁は「これも絵になるかな」等と不謹慎極まりない事を考えていた。

しかしふとアリーナが汚れるのではと余計な良心を働かせた繁は、巨大蛭の死骸や体液諸共溶解液で神子音を消し去り、ひとまず休憩の為香織の設けた異空間の休憩所へ向かった。

―同時刻・教頭室―

教頭室には残る愛人17名が召集されていた。

「さて……皆も知っているとおり、ツジラ一味は遂に鳴頃野姉弟の二人さえも倒してしまった。
これは由々しき事態だ」

その言葉を聞いた愛人達の間に、同様が広まった。

「落ち着け。おい、落ち着かないか。騒いでも何も始まらないぞ」
そう言って集団を宥めるのは、古式特級魔術の使い手である竜属種の教員・大東。
愛人達の間ではリーダー格でもある大東によって、集団は落ち着きを取り戻す。

「有り難う、大東。さて、そういう訳だから我々も遂に切り札を投入しなければならないと、私はそう思う」
「切り札、ですか」
「そうだ」
「しかし教頭、切り札とは一体何を？ツジラは古式特級魔術さえも無力化してしまう強者ですよね？」
「確かにツジラ一味の力は強大だ。だが倒せない相手ではない」
「と、言いますと何を？」
「今に解る。三沢」
「はい」

秋本が呼び寄せたのは、菌糸種の中等部生・三沢紀美歌だった。
教頭は三沢にただ「あれを」とだけ指示を出し、部屋を去る。
その指示を承諾した三沢は、懐から鍵を取り出して教頭室の奥へ向かう。

「ちょっと、三沢!?」
「何ですか?」
「あんた、まさか今その扉を開けるつもり!?」
「えぇ」
「何でそんな事するのよ!?あれは校則違反者を取り締まる為のものでしょ!?」
「そうですよ。でも教頭先生の指示ですから、従うしかないじゃないですか」
「そうだとしてもだ三沢、あの扉の向こうに居る奴がどんなに危険かはお前も知っているだろう!?」
「知ってますよ。でもだからこそ、妥当ツジラ一味の切り札になるんじゃないですか」

そう言って三沢は他の愛人達の制止を振り切り、鍵を開けてドアを解き放ち、鍵を中に投げ入れた。
直ぐさま扉の向こう側から、無数の黒い節足や触手が飛び出し、金切り声を上げながら這い出てくる。
「うぇウェウォアアあああああアバババアアガッがああがガギギアえええガアアガッ!」

「三沢!アンタ自分が何したのか解ってるの!?あの鍵は奴をこの中に閉じこめておく最後の枷だったのよ!?」
「そうですね。そして高いエネルギーを持った鍵を喰らった彼は、我々による再拘束が不可能になり、ただひたすら本能の赴くままにあらゆる生命を喰らうでしょうね」

「良いのか三沢っ!?それでは我々共々、お前自身さえも喰われて死ぬぞ!?」

怒鳴る大東に、三沢は呆れ顔で言った。

「大東先生、何を言ってるんです?私がそんなヘマをやらかす筈ないじゃないですか。

私は施術者ですよ?彼をああしたのは他でもない私なわけですから、私に逆らう事は契約条件で不可能なんです」

「そんな、馬鹿な――」

言い終わるより早くに、伸びてきた触手が大東を丸飲みにした。

パニックを起こした愛人達は命惜しさから逃げ惑うが、用意周到な秋本は教頭室の戸や窓への施錠を忘れていなかった。

かくして愛人達は謎の黒い触手や節足を持つ巨大な何かによって食われ続け、遂に教頭室には三沢一人がぽつんと取り残される形となった。

「……」

暫くして、開け放たれた扉の向こうから黒い何かが現れた。

巨大なそれの姿を一言で形容するならば、蟹のような無数の節足で節足で歩き回る細長いイモムシといった所だろうか。

円筒形である胴部の前端には白い仮面にも似た円盤状の物体が埋まり、数学記号の”＝”を９０度回転させて少し太くしたような、まるで簡略化された目を思わせる二列の文様が見られる。

「さぁ、お行きなさい。不埒なよそ者に天罰を下すのよ」

三沢がそう命じると、黒い巨大な「何か」はまるでアザラシかワニが水中へ入るが如くにして教室の床へと飛び込み、そのまま姿を消してしまった。

一方教頭室に取り残された三沢はそのまま微動だにしなかったが、暫くしてふと彼女の身体が揺らぎ出す。

「……っ……そろそろ、限界のようね……」

胸を押さえて苦しみだした三沢は自らの運命に抗うでもなく、ただ一言を言い残して床に倒れ込む。

「……九淫隷導様に、幸あれ…」

その一言を言い残した彼女は、そのまま静かに息を引き取った。

かくして18人だった秋本軍は、17名が死亡し残すところ秋本ただ1人となった。

第六十八話　ＬｅｅｃＨ！　オトコの娘確殺術（後書き）

次回、解き放たれた黒い怪物の正体とは！？

第六十九話　内壁から失礼致します（前書き）

繁達に迫る新たなる脅威！

第六十九話　内壁から失礼致します

―前回より―

異空間より出た繁一行は、残る愛人共を駆逐せんとして校内を徘徊していた。

「しっかし居ないわね……どこ探しても見付かんないわ……」
「まさか全員逃げ出したとかいうオチじゃないよね？」
「冗談じゃねぇ、んな事あってたまるか。愛人共は兎も角、秋本って奴は確実に殺す」
「だな！流石繁だぜ！雑兵共は逃がしても、諸悪の根元は許さねぇってのは私らも同意だ！なぁ、バシロ？」
「おうよ！秋本ってのがどんな野郎かは知らねーが、きっといけ好かねぇクズ野郎に違ェ無ぇ！となりゃ俺らでぶっ殺すのが筋ってモンだ！」
「何より、根源である奴を逃がせば他で悪さもしかねませんし」
『まさしく「蟻塚を潰すなら先ず女王を捜せ」と』
「それもある。が、本題は奴の隠し財産についてだ」
「隠し財産だと？それは初耳だな」
「あぁ。調べてみたんだが、奴の正体は鰓鱗種なんかじゃなく、もっと別の何かかもしれねぇらしくてな。
その話によると奴はもんげぇ長寿の絶倫野郎で、千年以上も前から無数のセフレにアホほど貢がせて遊び暮らしてたんだと。
んで、そいつの莫大な財産はカタル・ティゾルのどっかに隠してあるらしいんだとよ」
「そんな噂があったのか……おい、ティタヌス」
「もう調べている。確かに該当の逸話はかなりの件数がヒットしたが……成る程、隠し財産の場所については諸説あるがどれも信憑性

は高くないな…」
「クソっ、となれば記憶吸収しかないな……辻原よ、仮にその噂が本当だとしてどうするつもりだ？」
意味もなく心配げな様子の九条に、繁は余裕綽々といった表情で答えた。
「心配無ぇ、一応のアテはある」
「ぬ……そうか」

そしてそのまま校内を彷徨うこと十数分。そろそろ昼頃かと思ったその時に、ニコラが動きを止めた。

「おい、どうしたニコラ？」
「ニコラさん、何かあったの？」
「……聞こえんのよ」
立ち止まったニコラが暫し間を置いて言った。
「聞こえるって、何がです？」
「何かは分かんない。でも多分、ろくな音じゃないわ」
『ろくな音でない……悲鳴か何かですか？』
「もしくは、金切り声か絶叫かもね」
「ヒトのか？」
「どうなんだろ…その辺りが正直微妙なのよ」
「気配だけなら俺も感じるが……こりゃまさか――」

バシロが言い終えるより早く、コンクリートの壁を突き破って巨大な黒い何かが現れた。

「何だこいつは……？」

それは大蛇のように太長い蟲のような生物―即ち、前回三沢によって解き放たれた謎の生物であった。

謎の生物は白い仮面のようなものの備わった頭部らしき部位を少し振り回してから、おぞましい音量の奇声を上げた。

「ｑｕｕｕｕｕｕｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｅＥＥＥＥＥＥＥｅｅｅｅｅａａａａＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨ！！」

耳を劈く甲高い奇声に、一同は耳を塞ぎ堪え忍ぼうとするが、空気振動の圧は元より体重の軽い香織や九条を物理的にも圧倒した。しかしその後、謎の生物は動くのをピタリとやめてしまった。

「……ッッッッ……何て鳴き声だこりゃあ……」
「耳がァ…！クソ……ンの野郎ォ……」
「冗談じゃないよ全く……」
『いやいや全く……半分霊体ながらにこれは酷いですねぇ…』
「おい香織、大丈夫か？」
「何とか……歩けそう…」
「ティタヌス……」
「解っている」

ティタヌスが九条を抱き上げた辺りで、繁が口を開く。

「バシロ」
「……何だ？」
「お前さっき、何か知ってそうな口ぶりだったな？」
「否定はしねぇ」
そこで賺さずリューラが口を挟む。
「おいバシロ、本当か？このイモムシ野郎について何か知ってんのか？」
「オウ。よく知ってるぜ……。話せっつんなら、俺の知ってることなら何一つ包み隠さず話したって良い。

あんなクソ忌々しい自由工作の話は正直したくなかったんだが、何時かはお前にも話さなきゃなんねぇだろうって事は解ってたんだ…」

「バシロ……お前……」

「だがよォ、話云々以前に今は兎に角逃げた方がいいと思うぜェ。つか、逃げるべきだ。

さもねぇと――「うぉおあああああああああああっ!?」「九条ーッ!」――なっ、何だ!?」

響き渡る九条の悲鳴とティタヌスの雄叫びに気付き振り返った一同が見たのは、衝撃的な光景だった。

謎の生物から伸びた触手に絡め取られ、引きずり込まれそうになっている九条と、それを助けようと躍起になるティタヌスの姿である。

「九条博士!ティタヌスさんッ!

よくも二人を……コンクリ喰らー――「止せ、香織!」

繁の肩に掴まりながらも尚魔術で攻撃しようとする香織を、繁が制止する。

「繁?どうして?」

「今ここでそんなもん撃つな。掴まり立ちがやっとの奴には荷が重い」

「大丈夫だよ!私ならやれるって!」

「やれるとしても今はやめろ。俺は男だがお前の事はそれなりに解る。

お前、急性魔力障害で身体が思うように動かないんだろ?」

「バレてたか……」

魔力障害とは、体内に存在する魔力を司る血管に何らかの異常が生じて魔術発動に支障を来したり、魔術師等魔力依存度の高い生物に至っては体組織そのものを弱体化させてしまう病である。

先天的な発症の無いこの病は、大抵が特定の化学物質やアルコール等によって一時的に引き起こされることが殆どであり、恒久的に続く場合であってもほぼ十割方治療出来るようになっている（魔術的・学術的手法により引き起こす方法もあるのだが、国営の専門的な研究機関等以外での使用や軍事利用は固く禁じられている）。

「そりゃバレるわ。どうも奴の奇声には急性の魔力障害を引き起こすような効果があるらしい」

「成る程ね……」

そうこうしている二人の向こう側から、桃李と羽辰が言う。

「辻原さん！清水さん！九条博士は無事です！早く逃げましょう！」

『バシロさん曰く、今の我々では奴を殺せないそうです！急いで下さい！』

「オウ、解った！」

「ごめん繁……幼い頃から苦労かけてばっかで……」

「心配すんな。苦労かけっぱなしなのはお互い様じゃねぇか」

破殻化した繁は外骨格に被われた腕で香織を抱え上げると、仲間達に続くようにして一目散にその場から飛び去った。

対する謎の生物も折角の獲物を奪われたことがよほど悔しかったのか、酷く悔しそうな奇声を上げながら再び床へ潜っていった。

第六十九話　内壁から失礼致します（後書き）

次回、バシロの語る真実とは！？

第七十話　黒のヒミツ（前書き）

バシロの口から語られる衝撃の真相！

第七十話　黒のヒミツ

―前回より―

「バシロさん、これで良いですか？」
壁や床を冷やしたローチスリックで固めた桃李が、バシロに言う。
「オウ、大丈夫だ。奴は生物的エネルギーの気配と記憶を頼りに獲物を探す。
だがどうしてだかヴァーミン関連のブツは奴の探知を遮断する効果があってよ、どんなにエネルギッシュな奴だろうと、ヴァーミンの有資格者だとか、ヴァーミンの関連物で覆われてるってだけで見向きもしねぇのさ。
これで視覚がありゃ別だっただろうが、あの動きを見るにそれも無さそうだしな」

バシロのレクチャーに従い用務員の詰め所に隠れた一行は、そこでバシロからの説明を受けていた。

「何故そんな事が解る？まるでお前自身の事を語っているかのような口ぶりだな」

雰囲気こそ軽かったものの九条の一言は妙な重みを持っており、それに反応したリューラが言い返す。

「おいおい学者先生、まさかうちの宿六があのバケモンと同じモンだって言いてぇのか？」
「そうは言っとらんさ。ただ、彼があれについて詳しいことが不思議でならんだけだ。他意はない」
「そうか……突っ掛かったりして悪かったな」

「此方こそすまない。学術を扱う者は総じて疑り深くてね」
「いやいや、イスキュロン民はどうも単細胞になりがちでよ。
……で、バシロ。あのイモムシの化け物は一体何者なんだ？」
「そういえば、奴の正体についてまだ話してなかったな」
バシロはリューラの肩に空いたファスナーの穴から西洋神話の怪物を思わせるデザインの上半身に似た姿を取って、腕組みをしながら語り出した。
「奴の正体について語るには、先ず予備知識ってモンが要るだろう。だから少しばかり昔の話をしようと思うぜ」
「あぁ。異論はねぇ」
「事の起こりはそこそこ昔、六大陸の片隅に居たある研究チームが『純然たる生命の人造』を思い立った所から始まった。
チームの対応分野は、魔術と学術を併用した技術の雛形だったと思やぁ良い。
チームの連中はその頃確立されていた魔術論や生命科学の粋を凝らし様々な理論を立てて必死で研究を続けたが、どうやっても思うような結果は得られなかった。
命を成すまでもなく死んじまったり、命を成したとしても何かの拍子で溶けて死んじまうんだ。
だがある日、大勢居た個体の中で一匹だけ生き残る奴が現れた。
黒いスライムみたいなんだったが、歴とした生物だったのさ。
研究者達は歓喜し、その生命の秘密を探る事に昼夜も忘れて没頭した」
『それで、真相は一体何だったんです？』
「それがな、製造の途中で材料ん中にショウジョウバエが巻き込ま

れてたらしいんだよ」
「ショウジョウバエ？」
「そうだ。そこからヒントを得た研究者達は、完成した材料の中へ生きた鼠を入れて錬成する事を思い付いた。
結果、その生命はマトモに動き回る事が証明された。当初の予定とは違うが、研究次第じゃ幾らでも発展の可能性はあるだろうと研究者達は考えた。

更に研究が進み、黒い流体状の人造生命体は特定の生物に寄生しなきゃ直ぐに死んじまう事や、寄生する宿主にも相性ってモンがあるんだとか、色々な事が判明した。
魔術を使って材料を生物に馴染ませるなんて方法も考案されたな、そういえば。

そうやってそのまま研究が進みゃあ良かったんだが、トラブルは唐突に起こった」
「トラブル…とは？」
「研究チームの一人が、焦って馬鹿げた事を抜かしやがったのさ。
『材料としてヒトを使えば、知性や言語能力を獲得し擬似人造生命体が出来る筈だ』ってな。
勿論他の研究者共は猛反対したが、言い出しっぺは聞きやしねぇ。
散々暴れた挙げ句、終いにゃトチ狂って、チームリーダー一人を残して全員射殺しちまった」
「……何でそいつはリーダーを殺さなかったの？」
「『恩があったから殺すのは惜しい』だとか抜かしやがって、確かにそいつはリーダーを殺しこそしなかった。
だがだからってそいつがそれで反省したなんて事はねぇ、リーダーを罠にハメて材料の溜まった容器の中へ突き落としてそのまま錬成。
リーダーだった奴はそれで、黒いドロみてぇな化け物に姿を変えちまった」

「そうだったのか……」

「それから暫くの間反逆者はいい気になって取り繕うように生きてたんだが、素人の悪行だ。

バレねぇ方が可笑しいってもんでよ。結果として政府機関に追い回される事になっちまった反逆者は、元々リーダーだった化け物を魔術で瓶詰めにし、大陸外へ亡命した。

手始めでノモシアで現地に居た不良魔術師共を実力でねじ伏せ子分にした反逆者は、何を思ったかそのままイスキュロンの片田舎へ渡り、そこで無意味に紛争なんぞ引き起こしやがった。

んで、そこへ駆けつけてきたイスキュロン軍と二十日間に渡り交戦した反逆者の一団は――」

――「ちょっと待てバシロ！」

その話について心当たりの有りすぎるリューラは、バシロを遮るように言った。

「どうした？」

「話を遮って悪いが、その話の続きはこうだろ？

反逆者の一団は、首謀者を残し全員が死亡。残る反逆者自身もイスキュロン軍少佐から投降を言い渡されるがそれを良しとせず、研究成果の瓶を破壊し自殺した。

違うか？」

一同は驚愕した。まさかバシロの語る話がそんな結末に行き着こうなど、考えようもなかったからである。

「……流石だな、リューラ……俺の目に狂いは無かったって事か。

そうだ。瓶から這い出た化け物ってのはつまり――俺（●）――北エレモス理科大学大学院理学部生命科学科内部に在籍していた私立研究集団『ウボ・サトゥラ』リーダーだった男……バシロ・ジゴール

だ」

「……まさかバシロがそんな奴だったとはな…」

「すまねぇ、リューラ。お前には何時か話そうとは思ってたんだ。だが俺ァ、ただ自分の過去を語るって行為如きに意味もなく躊躇っちまってよ……」

「いや、良いんだ。言い出しにくい事の一つや二つ、誰しも持ってるもんだろうからな」

「その通りだ。リューラを純粋に愛し傷付けまいとしたお前にとって、それは恥じることなんかじゃない。

……しかし、そうだとすればバシロよ」

「何だ？」

「お前と同じように変異した『奴』に知性が見受けられなかったのは何故だ？」

「解らねぇ。だが恐らく、術者の施した術が未熟だったからかも知れねぇ。あと水銀も精々怯ませる程度にしかなんねぇ。

流石に素体になった奴が何処の誰かは解んねぇが―

―「その件ならば私が答えよう」

話を切り出したのはラビーレマの工学者・九条チエだった。

「先程我々を襲撃し、挙げ句私を喰らおうとしたかの怪物の正体だが……あれは大学時代私の後輩だった男だ」

その言葉を聞かされた一同に動揺が広まる。

「まぁ落ち着け。慌てたくなる気持ちも解るが、ひとまず落ち着け。あれの正体―というか、あれが真っ当なヒトであった頃の名は高志・カーマインと言ってな。

部屋に残されていたレコーダーの音声記録から、魔術か何かによってヒトならざる存在へと変異したことだけは解っていたのだ。

しかしそうか……あの計画によって産み出された術だったのか……」

「何だアンタ、詳しそうだな？」
「いやぁ、別にお前さんよりお前さんや奴について詳しいと言うことはないさ。
ただ、ここにいる他の誰よりも我々二人の方が確実に詳しいであろうモノは他にあるがね」
「……？」
「おいおいティタヌス、気付かないのか？我々二人がこの七人より詳しいと断言できるモノと言えばあれしか無いだろう？」
「あぁ……あれか」
「そうだ……我々二人が君らより確実に詳しいもの……それは『奴』――高志・カーマインそのものだ」
そう言い放つ九条の浮かべる笑みは、根拠の解らない自信に満ち溢れていた。

第七十話　黒のヒミツ（後書き）

次回、一行は如何にしてカーマインと決着を付けるのか！？

第七十一話　異形教員タカ（前書き）

殺害不可能に近い敵を相手に一行はどう戦うのか？

第七十一話　異形教員タカ

―前回より―

「そんで学者先生よォ」
「何だ？」
「あのバケモンの正体がアンタの後輩だってのは判った。
だがバシロ曰く不完全体の奴には、唯一弱点の水銀さえも怯ませる程度の効果しか無いらしいじゃねぇか。
なぁ、バシロ？」
「そうだな。俺ら自体、さしたる弱点の無ぇ存在として設計してたんだ。
不完全体の水銀はあくまで非常時に数時間黙らせる程度、しかも口に相当する部分から飲み込ませねぇと無意味だからな」
「と、こう言ってる訳だが……どうやって奴を始末するつもりだ？」
リューラの問いかけに、九条はあくまでいつもの調子を崩さずに答えた。

「始末、か。確かにその点は考慮すべきだろうな。今の奴には、ヒトであった頃の知性も理性も愛嬌さえも残されては居ない。
しかしだからと言って、この場でお前さん方の手を煩わせてまでカーマインに引導を渡すつもりは元より毛頭無い」
『どういう事です？』
「単刀直入に言うと、今の九条にカーマインを殺すつもりはないと言うことだ」
「それは言及されるまでもなく分かり切っています。しかし問題はその先ですよ」
「先って？」

『殺さないとして、彼を如何為さるおつもりかという事です。まさかあのまま校内に放置するわけではないでしょう？』
「当然だ」
「じゃあどうするんですか？」
「どうするか……か。決まっているだろう？撃退するんだよ」
「撃退？」
「そう、撃退だ。
ところでバシロ、完全体であるお前達の種族には弱点が無いそうだが、所謂ゲーム的な表現で言うところの物理的なダメージはどう扱われるんだ？やはり効かないのか？」
「素早く再生するようになってるが、ダメージ自体は感じるな。あと生き物な分、完全に死なねぇって訳でもねぇ」
「再生の速度や度合いは？」
「個体によりけりだが、大概はとんでも無く早ぇ。但しあの手合いなら、痛みには弱いはずだ」
「では何らかの方法で記憶を呼び覚まさせ、精神的な揺さぶりをかけるというのは？」
「安定の度合いに依存することになるが、奴が不安定ならそれもまた有効だろうな」
「情報提供どうも。と言うわけで、以上の事柄を踏まえて早速作戦を立案する。
尚、撃退後我々はここを離れて奴を追うと共に、安全に始末出来る場所へ誘導しそこで決着を付ける。
よって我々は秋本・九淫隷導・康志との決戦に加勢する事が出来ないが、異論はないか？」
九条の発言に異を唱える者は誰一人として居なかった。
―二分後―

「それで、作戦が固まったのは良いんだが」
広々とした講堂の中央で、繁はぽつりと切り出した。
「どうやって奴をおびき寄せる？俺は大学のフィールドワークで虫取りをした事ならあるが、あんな図鑑に先ず載らないような蟲の捕まえ方は知らんぞ？」
「心配はいらん。此方から何をしないでも、先程の動向からして奴は恐らく我々の気配を察知して真っ先にここへやって来るだろう」
「だと良いが……もしあの状態で逃げ出していたとしたら――――な、何だッ！？」
「辻原さん、奴です！カーマインが天上からッ！」

桃李の指差す方向では、確かに突き破られたコンクリートの天上から、異形と成り果てたカーマインが這い出してきていた。
天上や壁面に鋭い節足を突き立てて走り回っているカーマインだったが、その胴体は以前見たより明らかに細くなっているようだった。

「（この短時間で痩せただと……？まぁ良い）九条、奴が出たぞ！」
「解っている。奴とは普通に戦って構わん。但しこの部屋からは出すな！」
「了解したッ！」

かくして繁一行とカーマインとの激戦が始まった。
まず先陣を切ってリューラとバシロが飛び掛かり、変幻自在の肉体と軍隊式格闘術を織り交ぜた凶暴な猛攻でタールのような黒い身体に打撃や斬撃、刺突などを叩き込んでいく。
しかし対するカーマインは、悲鳴や絶叫で自身に降りかかる苦痛を主張するものの傷そのものは一切負っていないかのようだった。

「クソ！やっぱ駄目だァっ！不完全体の癖に再生能力が無駄に高ぇっ！」

「つーかこいつ、痩せた分だけ素早くなってねぇか！？そもそもこの短時間でここまで痩せる生き物って存在するのか！？」
「鬼が付くほど高燃費な粗悪品だからなァ。そもそもが粗悪な術式で変異させられた上に、多分ロクな管理下に置かれてなかったんだろうぜッ！」

バシロの読みは当たっていた。
若い上に元よりそれほど魔術向きでない所を無理矢理薬物で補って発動した三沢の術は一般的なそれより遙かに粗悪なものであり、これはカーマインから理性や知性を奪う結果となった。
更にその保存場所や餌の与え方も、元来強い生命力を持つ割に所々繊細な存在である黒い人造生命体を管理するには些か不向きな場所であった。
かくして斯様に不具合が重なった結果、異形化したカーマインの燃費は極めて高くなっており、絶食状態では肉眼視が可能なほどに衰弱が早くなってしまっていたのである。

「オォアアアアッ！」
「「ぐごあっ！」」

しかし衰弱して尚その力は健在なようであり、節足でリューラとバシロを強く叩き飛ばす。
吹き飛ばされた二人に代わり、続けざまに羽辰の連続技と破殻化した桃李の火炎攻撃と、それを纏ったニコラの蛾型弾幕が襲い掛かる。

「ッギェアェェェッ！」

それらの攻撃全てを正面から受けたカーマインは、壁に潜って逃げようとする。
しかしそれは香織の操る古式特級魔術によって防がれ、そこへ更に

馬乗りになった繁の手甲鉤や、ジェット噴射で飛び回るティタヌスの重火器などを受け、苦痛に悶え悲鳴を上げる。
しかしやはりその身体は依然として傷一つ付いて居ない―否、付いたとしてもすぐに治ってしまうのである。

かくして開始された高志・カーマイン撃退作戦。
この激しい勝負の行く末は、作者でもまだ解らない！

第七十一話　異形教員タカ（後書き）

次回、遂に決着！（すると思う）

第七十二話　げ・き・た・い（前書き）

高志・カーマイン撃退作戦の鍵を握るのは……ヤムタの開業医？

第七十二話　げ・き・た・い

―前回より・ヤムタ都市部にある診療所―

「～♪」

繁達の活躍が各国のスピーカーを通じて各国に流れているのと同時刻。
和の趣が全面に押し出された台所にて、赤いヤムタの民族衣装に身を包んだ霊長種の女が料理に興じていた。
その整った顔立ちは地球に於けるモンゴロイド特有のものであり、彼女が純正のヤムタ系霊長種である事を物語っていた。
作っているのは肉まんであり、近頃診療所へ勉強をしにやって来る猫系禽獣種の少女に食べさせるためのものだ。

「それにしても相変わらず派手好きねぇ、あのラジオ番組。パーソナリティの趣味なのかどうかは知らないけど、もしヤムタに来るならせめてうちの近所で派手な事はやらないでほしいわ」

彼女の名は高橋飛鈴。この近辺で診療所を営む開業医にして薬剤師でもある。
親の代からのヤムタ民である彼女だが、最終学歴は列甲大学という秀才だった。

「これで良し。あとは蒸かすだけね」

飛鈴が肉まんを蒸籠に詰め終わった所で、ふと彼女の携帯電話が鳴り響く。

「あら、誰からかしら」

携帯電話に表示されていた発信者番号は、大学時代先輩だった女のものだった。

「もしもし、九条先輩ですか？」

『あぁ、私だ』

「一体何の用です？私これから肉まん蒸かさないといけないのでそんな手の込んだこと出来ませんよ」

『いや、そんなに手の込んだことは要求しない。ただ、少し時間をくれないか？』

「どの位です？」

『たった一言、電話口に語りかけてくれるだけで良い。それで万事解決する』

「一言？何て言えば良いんですか？」

『いやな、実はカーマインの奴が職場でのストレスから鬱を引き起こしたらしくてだな。

携帯の電源も切ってしまっているようだから、奴の家へ録音した音声データを送りつけてやろうかと思ってな』

「高志が？…はぁ、またどうせ誰にも相談せずに一人でふさぎ込んじゃったんですね……。

まぁ、その真面目さと優しさが彼らしさなんですけど……そうですね、じゃあ――」

―同時刻・士官学校講堂―

「九条ォォォォ！」

「九条さぁぁぁん！」

「このナマコ野郎！学者先生を吐き出しやがれ！」

先程の場面では嘗ての後輩へ暢気に電話などかけていた九条だったが、だからと言って彼女の置かれている状況が気楽なものであるかというと、それは断じて違うと断言できた。

何せ彼女は現在ふとしたミスから異形と化したカーマインに食われており、尚も吸収されまいと必死で嘗ての後輩や自身の運命他、その他諸々に必死で抗っていたのである。

この状況を『楽しそう』だとか『気楽だな』等と思う奴が読者の中に居たとしたら、作者はそいつの人格を疑わざるをえない。

仮に異形と化したカーマインに相当する存在が美女若しくは美少女或いは美幼女の姿をしており、食われているのが『さして取り柄の見受けられない日本人のティーンエイジャー』ならば、何時も女の肉ばかり追い掛けていて、事ある毎にペロペロとかブヒブヒとか一々五月蠅くて仕方がない連中は死ぬほど羨むかもしれない。

しかしそんな連中がこの作品を読んでいる確率はほぼ皆無に等しいと作者は推測する。仮に読んでいたとしたら3話辺りで既に読むのを止めているか、或いは作者に言い掛かり同然のクレームを叩き付けているはずである。

「九条ッ！九条ッ！死ぬな、生きろッ！
死にかけだった私に生きる意味をくれたお前に先立たれては、私はまた以前のように他人の命令で動き回ることしかできない哀れな愚か者に成り下がってしまう！
だから死ぬな、九条ォォォォ！」

ティタヌスが声を張り上げ鋼鉄製の強靭な拳や角でカーマインを攻め続ける。
その姿は初登場時のような落ち着き払った紳士的なものではなく、感情のままに大声を荒げて吼え猛る巨獣のそれであり、その姿はまさしく恐竜然としていた。

しかしそんなティタヌスの攻撃もカーマインにとっては苦痛や体格の萎縮を引き起こすに留まっており、それらの刺激があっても尚、彼は九条を吐き出そうとしない。

「クソッ、こいつぁヤベェぜ！学者先生が食われちまった！」
「切り開いて取り出そうにも傷はマッハで塞がっちまうし……どうすりゃいいんだよ！」
「お二人とも、諦めるのはまだ早いですよ」
『そうですそうです。天が我等に味方しない事は、元より分かり切ったこと。
ともなれば信ずるべきは己と仲間ぐらいのものでしょう』
「そうだがよ、アニジキニン」
『羽辰で良いですよ。どうせ流れる先では編集されてますし』
「そうかよ。じゃあ羽辰、そうは言うがお前、この状況をどう打開するってんだ？
あのナマコ、逃げるどころか寧ろこっちに向かって来て――――「ウあァぁぁあアァぁＡＡＡａａＡアッ！」――な、何だ！？」

カーマインの上げた悲鳴はそれまでのものと比べて極めて異質なものだった。
しかも悲鳴を上げたタイミングが不自然極まりなく、さしたるダメージを受けたわけでもないのに苦しみ悶えている。

「あ……あぁア゛あァ゛っ！……ヒ……ス、ズ……ッ……」

その声に含まれていたのは、傷を負った事による苦痛ではなく、ある種の悲しみであるようだった。

「一体何が起こったの…？」
「知らん……だが、奴に異変が起こってるって事だけは確かだ」

「ヒスズ……人の名前かね」
「恐らく、というか確実に女性名ですね。奴の同級生か、友人か…」
『もしくは親戚、恋人の可能性もありますね』
「つーか学者先生無事なのかよ」
「あぁ、それはわりとマジで心配」
「頼むからわりととか言わんでくれ」

そしてその変化を皮切りに、カーマインの上げる奇声が人の言葉に近いものに変わっていく。

「あァ……ヒス、ズ……ボくは……なンてコトを…ッ……ッぐぅ……ァ〝ぁ……エぁアあ……――ヒギャアアアアアアアアアアアアアアッッ！」

命そのものをエネルギーにしているかのような叫びを上げたカーマインは胴体から九条を吐き出し、交戦中に空いた穴の先へ通っていた水道管に潜り込み姿を消してしまった。

「九条ッ！」
「九条さん！」
一行は一目散で地面に投げ出された九条に駆け寄った。しかし、彼らの思惑を無視するかのように九条は普通に立ち歩き始めた。

「どうやら上手く行ったらしいな。お前さん方、無事か？」
「それはこっちの台詞だ！いきなり飲み込まれたから食われてしまったかと思ったぞ！？」
「おいおいティタヌス、よりによってお前がそれを言うか？私は元『スターダスト』の天才・九条チエだ。
あの程度の攻撃、回避できない訳があるまい？」
「いや待て、その理屈はおかしい！そもそも回避云々以前の問題だ

ろうが」
「まぁ落ち着け。一々些細な事を気にするものではない」
「何処が些細だ!?何処がっ!?」
「今の我々にとっては極めて些細なことなのでな。何より奴の撃退にも成功したんだ、結果オーライじゃないか」
「……」
「どうした、何をしている?さっさと奴を追い、始末を付けるぞ。あのままの身体では幾ら何でもカーマインが可哀想だからな」
「……お前の口から可哀想なんて言葉が出るとは思わなかったが…まぁ良い。作戦は無事完遂されたし、良しとしよう」
「そうしておけ。そういうわけだ、ＤＪ諸君。我々はこれより奴を追い、是が非でも仕留めて始末をつける」
「あぁ。列甲女子初代スターダストの名にかけて、絶対にでも仕留めろよ」
「お前こそ破壊神を目指して居るそうだが、その地位に就くまで決して死ぬな。その地位に就いてからも、なるべく死ぬな」
「言われなくても、生きてやるさ」

かくして九条とティタヌスは混乱に乗じて大陸外まで逃げ出したカーマインを追うため、静かに士官学校を去っていった。

「さて、こっちもそろそろ仕上げと行くか」
繁の呼びかけに呼応した仲間達は、一斉に無言で頷き走り出す。

「待ってろ秋本……テメェの希望は俺らが潰す！」

第七十二話　げ・き・た・い（後書き）

次回、遂に秋本と決戦！

※補足…九条はわざとカーマインに食われたフリをして、体内で携帯電話越しに飛鈴の肉声を流す事で彼の記憶を刺激し、精神的な揺さぶりをかけることで無力化させた。

第七十三話　イクチ一族の野望（前書き）

対決直前！

第七十三話　イクチ一族の野望

―前回より―

「遂に残るは私一人か……だが何も問題はない」

西校舎一階会議室で一人待ち構える秋本の顔は、自信に満ち溢れていた。

「ツジラ一味を打ち倒すことなど、イクチ一族最強の妖術師と呼ばれたこの私の力を持ってすれば赤子の手を捻る程に雑作もない事だ。来るが良い、ツジラ・バグテイル……我が天上天下天地無双の力を以て、己の愚かさを思い知らせてやる……」

秋本の手に握られているのは、真珠のような宝石で出来た数珠と煌びやかな装飾の施された蒼い細身の剣。

「『絶海刀』、『神授珠』……偉大なるイクチ一族の最長老達によって創り出されしこれら法具の力は、並大抵の魔術具を遙かに上回る力を持っていると言っていい」

秋本は現在、自分という存在に心底酔いしれていた。

「そう、私は自分に酔う事が何より……って、おいナレーション。というか作者」

ん？何？

「貴様三次元世界住民の分際で人聞きの悪い事を言うな。産まれながらの天才であるこの私が自己陶酔マニアの変態ナルシスト野郎な訳が無いだろうが」

いやぁ、そう言われてもねぇ。そう設計・構築しちゃったし。

「ならばそれは設計や構築に不備があったんだろうな。肝心な所でしくじるお前らしいことだ」

バカかテメェ。肝心な所でしくじるっつーのはまだ認めるが、キャラの設計しくじる創作家が何処にいる？

「居るだろう、日本に。何でも、かの吸血鬼と噂される某漫画家は、ある敵役の異能について理解しきれていなかったと噂されるているそうだ。

それと同じように、お前は私について不理解であるが故に私の設計と構築を間違えたんだ」

はぁ？何やそれ？オメェこそ1シーズン限りのゲストエネミーの分際で作者に生意気言ってんじゃねぇよ。

そもそも仮に設計ミスがあったとして、只でさえ少ない読者から指摘される事なんざ希だっつの。まだ誤字の指摘の方が多いだろ。

「ええい、五月蠅い！落ち零れのヘタレ大学生の分際で生意気だぞ！もう良い、こうなったら私自身で私について解説してやらねば！」

かくして秋本の身勝手な思い立ちから――「黙れ！お前は喋るな！

さて、読者諸君。あんなクソ作者は放っておいて早々に私こと秋本・九淫隷導・康志及び我々イクチ一族についてのスポォティーでビューティーかつゴッディーな華麗なる生い立ちについてご説明しよう！

我々イクチ一族とはそもそも、カタル・ティゾル創世の時代―まだ陸に生命体が居なかった頃から、魔術の基礎を確立させ海底に高度な文明社会を築いていた！

その頃より海中の生態系の頂点に立っていた我々は、如何に野蛮な種族をも寛容に受け止めようとした。

だが知性のない野蛮で愚劣な下等生物共は我々の崇高な愛を受け入れず、それどころか愚かにも我々に牙を剥いて来た！

我々の力を以てすれば奴らを滅ぼすことなど雑作もない……だが寛

容な我々の祖先はそれを良しとせず、無用な争いを回避する為深海の辺境へと逃れた…。
だがそこからが試練の連続だったのだ……」

―長いので省略―

「かくして最長老達は激闘の末絶海刀と神授珠を守り抜いた。
さて、次に私の生い立ちについてだが」

―長いし省略―

「つまり私は世界中に恋人が居るというわけだ。あの４８人は所詮使い捨てでしかない。
読者諸君が驚くのも無理はないが、私のようなカリスマにとってこの程度当然の事なのだ。
つまり私のようなデキるカリスマ男は毎日がハーレムなのだ。
どうだ、羨ましいだろう？羨ましく無いはずがない。男とは皆総じてハーレムの中枢に憧れるものなのだからな。
それこそ男が男である意味！そして存在価値であ――ぐばらべっ！」

突如現れた巨大な岩石球が秋本を吹き飛ばし、その拍子に秋本の体内からくすんだ色合いの太い内蔵らしき物体が飛び出した。
内蔵らしき物体はすぐさま蛇のような動きで嘗て秋本だった鰓鱗種の亡骸へ這い寄り、秋本の声で喋りだした。

「何という事だ……よもや私の妖術で抜群の鮮度を保っていたこの身体がここまで崩壊するとは……」

さて、ここで言及するまでもなく読者諸君は既にお気づきかと思うが、この内蔵らしき物体こそが士官学校教頭代理の秋本・九淫隷導・

康志の真の姿である。
その実態はつい十数年ほど前にある生物学者が進化論否定派に対抗するため実験目的でヌタウナギに遺伝子操作を施し鰓鱗種に近付けたものである。
それだけならばまだ良かったのだが、何処を間違ったのか知性と寿命が予想以上に向上し生物学者に反逆。
おまけに変な偽の記憶と魔術の力まで獲得したこの個体は、自らをイクチ一族なる妖怪氏族の天才妖術師であると自称。
生物学者の体内を食い荒らし殺害した後、その死体を操って巧り研究者の財産を全て金に変え逃亡。各大陸の方々で女を誑かしては貢がせ、働かずして多額の金を稼ぎ続けていた。
今回士官学校に入り込んだのは士官学校を裏から支配し自身の支配下に置く為であった。

「さて、これからどうするべきか……」

秋元が頭を抱えたその時、講堂の扉が勢いよく吹き飛び、中に何者かが入ってきた。

「お邪魔しま～す。何時もニコニコ貴方の街まで這い寄る狂気、ツジラ・バグテイルです！」

「おかえりなさいませご主人様。チオペンタールナトリウムに致しますか？臭化パンクロニウムに致しますか？それとも塩化カリウムで御座いますか？
はーい、順番に全部ですね。畏まりました。ケミカル魔法少女・青色薬剤師です☆」

「貴方の余命は、今日限りでしょう……どうも。ニコラ・フォックスです…」

「『さぁ、お前の罪を数えろ……』」
「このイモウトキシンと…」
『アニジキニンが…』
『「許しはしないッ！」』

「秋本……お前の敗因は断った一つだぜ…」
「たった一つのシンプルな答えだァ…」
「お前は私を怒らせ…」
「俺に喧嘩を吹っ掛けた…」

見渡せば、いつの間にか秋本の眼前にはツジラジメンバーの7名が立っていた。

「秋本、テメェの希望は俺らが潰す……」
「ほざけクソガキァ！イクチ一族は常に全ての上にあるのだァ！」

かくして秋本軍最後の一人、鮫系禽獣種改め自称イクチ一族の妖術師、秋本・九淫隷導・康志との対決が始まる。

第七十三話　イクチ一族の野望（後書き）

次回、イスキュロン編（予定上の）最終話！
何時もと違った最終決戦はきっと見逃せない（凄くしょうもないかもしれないけど）！

第七十四話　ＲＰＧ　ＴＡＳＴＥ－ろーぷれていすと－（前書き）

ラビーレマ編遂に完結！
何時もと違う前半部の戦いは、サブタイから読み解くべし！

第七十四話　ＲＰＧ　ＴＡＳＴＥ－ろーぷれていすと－

自称・イクチ一族の妖術師（笑）、秋本・九淫隷導・康志があらわれた！

秋本：なまいきな　クソガキめ！かくの　ちがいを　みせてやる！
ツジラ：メクラウナギのできそこないが　いうじゃねぇか
ツジラ：いいぜ　おまえのミライ　ねんいりに　こわしてやる

＊＊＊
『ツジラ』
・コマンド
＞たたかう
　≫手甲鉤・刺突
　こうげき
　とくしゅ
　ころす
＊＊＊

ツジラの攻撃！ツジラは手甲鉤で刺突を繰り出した。
秋本は死角からの一撃を喰らったが、生き延びた。
秋本の攻撃！秋本は妖術（笑）で炎を放った。
しかしツジラが咄嗟に出した溶解液のバリアーが、それを打ち消した！

秋本：き、きさま！ひきょうだぞ！

ツジラ：どくさいハーレム　めざしてた　へんたいやろうに　いわれたか　ねーよ

＊＊＊

『青色薬剤師』

・コマンド

＞まほう

　≫てきとう

　じゅもん

　そのほか

　いとこにてをかす

＊＊＊

青色薬剤師の攻撃！青色薬剤師は、適当に魔術を放った。

秋本・九淫隷導・康志は深手を負ったが、何とか生き延びた。

秋本はの攻撃！秋本は、妖術（笑）で電撃を放った。

しかし青色薬剤師は、床材を壁に変形させてそれを防御した！

秋本：きさまもか！あかいかみの　くせに　あおいろ　なんて　なのりやがって！

青色薬剤師：べつに　どうでも　いいじゃん　そんなこと

青色薬剤師：い●い●さみだって　あかいかみの　キャラを　えんじてるのに

青色薬剤師：しんそ●　っていう　うたを　うたっているし

＊＊＊

『ニコラ』

・コマンド

　どくがだん

＞みがわり

≫青色薬剤師
とくしゅ
＊＊＊

ニコラの身代わり！ニコラは不老不死の身体を生かして、青色薬剤師の盾になった。
秋本の攻撃！秋本は妖術（笑）で光線を放った。
光線はニコラの肌を焼き、肉を切り裂くが、しばらくすると傷は塞がり、元に戻ってしまった。

秋本：いったい　なんなんだ　おまえは！？
ニコラ：なにって　ふろうふし　だけど？
秋本：ふろうふし　だと！？ふざけるな！
ニコラ：いやぁ　じぶんを　ようじゅつし　とか　いっちゃう　やつには　いわれたく　ないわぁ

『イモウトキシン＆アニジキニン』
・コマンド
＞やく
≫強火
かためる
おにいちゃん

イモウトキシンの攻撃！イモウトキシンは、燃え盛るローチ・スリックを放った。
炎は秋本の身体を焼き尽くす―と思わせて、体表に湿った繊維質のヌタを纏った秋本には効果がない。
すかさず秋本の攻撃！秋本は妖術（笑）で氷の弾を放とうとした。
しかし、突如アニジキニンがそれを妨害し、妖術（笑）は不発に終わった！

秋本：き、きさまぁっ！　これは　さすがに　ひきょう　だろうがっ！
イモウトキシン：なにを　いっているん　ですか？　ばかですか
あなた
アニジキニン：このていどの　こうげき　どうにかできないで
アニジキニン：このけいれつの　さくひんの　敵キャラが　できると　おおもいですか？

『嶋野二十五番&黒物体Ｖ』
・コマンド
＞なぐる
　ける
　ぼうこうをくわえる
　たたきのめす
　めおとおうぎ

嶋野二十五番の攻撃！嶋野二十五番は、あくまで普通に殴りつけた。
拳はあくまで普通に秋本の背骨をへし折ったが、秋本は生き延びた。
秋本の攻撃！秋本は妖術を放とうとしたが、逆に黒物体Ｖの攻撃を受けて更にダメージを受けてしまった！

秋本：ぐおぉぉぉぉぉぉぉ！
嶋野二十五番：イスキュロンみん　を　なめんじゃねえ！
黒物体Ｖ：ラッキースケベ　ぶっころすぞ！
秋本：まるで　わけが　わからんぞっ！

―前回より―

ＲＰＧ的演出も程々に、秋本との戦いは最終局面へ向かっていた。

「な、何故だぁっ!?何故私がッ!この、九淫隷導がッ!こんな青二才のガキ共にっ!?」

長大な身体をくねらせてのたうち回る秋本は、その軟らかい肉を切り裂かれ、最早瀕死の重体であった。

「まだ気付いてねぇのか、ミミズ野郎」

「ミミズではない!あんな何の取り柄もない肉の管と一緒にするな!我等はイクチ一族!創世記から海に住まう、海の王たる血族なのだ!」

「んな事ぁどうでもいいんだよ。

重要なのは、テメェが元デザルテリア国立士官学校特待生であるウチの家内に喧嘩売ったって事だ。

その足りねぇオツムで理解出来るかどうかはこの際度外視だが、国立士官学校特待生ってのは、言わば準国宝級の存在価値があってよ。つまりはカラスのクソ程も金にならねぇテメェ如きが喧嘩売って良い相手じゃあねーわけだ」

「カラスのクソだとっ!?よりによってそこいらのコールタールと見分けもつかんような貴様に言われる筋合いは無いっ!」

「うっせぇオナホ野郎。テメェの居場所は士官学校じゃねぇ、エログッズ自販機ん中だ」

「黙れ若造!お前にバカにされるのだけは死んでもご免だ!」

それを聞いた繁は、露骨な卑劣さを感じさせる笑みを浮かべて言った。

「まぁそうは言っても、俺って所謂『絵に描いたように健全で善良な民間人』じゃん?

平たく言えば『凄くいい人』。そう、俺ってば『無茶苦茶いい人』なわけよ!

だからさぁ、お前みたいな安物ローターの出来損ないに対しても、

寛容さと善意を以て接しようと思うわけ！」

芝居がかった口調で大袈裟に言った繁は、秋本の首筋に槍を突き付ける。

「うぉあ！な、何をする！？」

「おう、悪ぃ！許せ、わざとじゃねえんだ！偶然にも手が滑っちまってなぁ！そう、偶然なんだよ！俺、いい人だから！」

「偶然だと！？ふざけるな！これのどこが――「お前さぁ、オナホールだかローターだかの出来損ないの癖して一丁前に隠し財産なんて持ってんだろ？その隠し場所を吐け。そうすりゃ逃がしてやる」

「ッハ！そんな事をこの私が教えるとでも――「はい、アウトォー！」

ザシュッ

繁は槍を持った手を素早く一回転させ、秋本の頭部を切り落とした。頭部を回収した繁は、舌をサシガメの口吻のような形に変化させると、それを切り取った頭部の脳天に突き刺し中身を吸い始めた。

「……繁、何やってんの？」

そんな従姉妹の問いかけに、中身を吸い終えた繁は答える。

「何って、情報収集だよ。相手の脳味噌を吸い取って、その中にある知識や情報を頂くのさ」

「はぁ！？何それ？アサシンバグってそんな事出来るの！？」

「幾ら何でもそれは反則でしょう！？」

「反則とか言うなし。東風とら基礎ステータス全部平均以下なんだ、これくらい出来て良いだろ」

「基礎ステータス以前の問題ですよ！コックローチの耐久力はアサシンバグを大きく下回ってますが！？」

「タセックモスもパワーじゃアサシンバグの足下にも及ばないよ！」
「お前等は速度とか飛行能力とか機動性とか射程距離とか汎用性とか色々上回ってるから別に良いだろこんくらい」
「良くない！」
「良くありません！」
「良くあれ。頼むから良くあってくれ。いや本当マジで――「ツゥウゥウジラァァァァァ！」――へ？」

死んだはずの秋本による、怒りと憎悪の籠もった叫びが講堂に響き渡った。
振り向けばそこには、先程より遙かに巨大化し、色合いも地味な灰褐色からサイケデリックな色合いになった秋本が居た。

「野郎、まさかマジきモンの妖怪だったってのか！？」
「そんな馬鹿な、只の器用な鰓鱗種かと思ってたのに」
「残念だったなァ！イクチ一族は無限の命を持つ者！体躯を完全に消し去らぬ限り、何度でも再生する！」

そう言って秋本は太短い身体を不気味にうねらせる。

「そういう事か……仕方無ぇ。
皆、折り入って頼みがある」
「何だ、リューラ？改まってどうした？」
「あぁ…このナメ腐った野郎だが、俺らに殺らせてくんねぇか？」
「二人に？私は別に良いけど、何で？」
「奴は私の母校をこんなにしやがった張本人だ。奴の所為で何人も死人が出て、備品や校舎もかなりぶっ壊された……」
「だから俺ら夫婦としちゃ、ここで奴らをぶっ殺さねぇと気が済まねぇんだ」
「そういう事でしたか……」

『そこまで言うのでしたら、我々は手出しも何もしはしませんよ』
「そうか…有り難う、皆……。
良し、行くぞバシロ！」
「オウ！」
「「夫婦鉄契！！」」
そのかけ声と共に、リューラが開け放った右半身に備わったファスナーから這い出てきたバシロが彼女の全身へまとわりつく。
そして数秒もしない内に成された姿は、肉食獣と爬虫類の形質を併せ持った極めて女性的な体型、背中に生えたコウモリのような翼、羽毛の生えた肉食恐竜のような頭から生えた二本の拗くれた角が特徴的な、漆黒の怪物であった。
「「完成ッ！変則結合ガルグイユ！」」
リューラとバシロの声が全く同じタイミングで響き渡る。
「な、姿が変わっただとォォォォ！？」
「おうよ！これぞ『変則結合ガルグイユ』！私とバシロを繋ぐ一心同体の絆あってこそ成せる、愛と絆の究極合体だ！」
「おい、今さっき思いっ切り変則結合って言ってんじゃねぇか」
繁の冷静な突っ込みも無視して、更にバシロが言う。
「こうなった俺らは只じゃ止まんねぇぜ？何せ普段は６０％ぐれぇの確立で武装扱いの俺が、この時ばかりは一丁前の戦闘キャラ扱いだからな！」
「いや武装扱いの確立案外低くない？」
香織の冷静な突っ込みも、最早三人―リューラ、バシロ、秋本―の耳には入っていない。

「ぐ…どんな姿になろうとも、不死身のイクチ一族であるこの私を殺すことは出来ぬぞ！」
「ヘッ、ソイツはどうかな？」
「何ィ！？」
「テメェがオナホに住んでそうなウナギの出来損ないだと解った時、既に殺し方は出来ていたんだぜ！」
そう言ってリューラと結合したバシロ（色々面倒なので以降場合によってガルグイユと呼称）は、背の翼で空高く舞い上がり飛び蹴りを放つ。
いつの間にであろうか、その左脚は円錐形の削岩用ドリルに変形しており、更に右腕は小型ロケットになり尾部から炎を吹いている（繁は一瞬燃料の存在について疑ったが、程なくして徒労と考え深く考えるのをやめた）。
秋本はそれを妖術で迎撃しようとするが、慣れない形態故にタイミングを逃してしまう。
「「夫婦奥義之白ッ！――飛翔破山蹴！」」
妖術を諦めた秋本はそのままガルグイユを丸飲みにしようとするが、それより先に左脚が彼の頭部へ突き刺さり、そのまま胴を通過し尾の先端部までをも細切れの肉片へ変えてしまった。
飛び蹴りを終えた二人はそのまま着地し元の姿へ戻り、更にその直後に復活の隙を与えまいとした桃李の炎と繁の溶解液が肉塊を消し去っていく。
かくしてデザルテリア国立士官学校を舞台とした壮絶な戦いは、秋本・九淫隷導・康志一味率いる首謀者一味の全滅により無事幕を閉じたのであった。

第七十四話　ＲＰＧ　ＴＡＳＴＥ－ろーぷれていすと－（後書き）

次回、シーズン４・アクサノ編がスタート！
自然と共存する赤道直下の大陸にて、繁一味を待ち受ける脅威とは！？

第七十五話　インポッシブル・ウェイストマンション（前書き）

シーズン４・アクサノ編、遂に始動！

第七十五話　インポッシブル・ウェイストマンション

―前回より―

時は溯り、ツジラジ第二回が終了した日のアクサノにて、夕暮れ時の熱帯雨林を往く六つの影があった。
一見人型を乖離したような外観のそれらは、何れも歴としたヒト―この場合、文明を扱うに値する知性と言語能力を併せ持つ種族の一個体―である。

「ねぇアニキ、あとどのくらい？」
「確かこの辺りに古いお屋敷がある筈だから、多分もうすぐだよ」
「うやー！」

地面を這うように歩く胴長の獣の問いかけに、その側を歩く二足歩行の熊が答える。
気怠そうな胴長の獣に対し、熊の側に付き添って歩く幼い兎は心底乗り気なようだった。

「しっかし、『青く光る真珠の垂れ幕』……未だに信じられへんなぁ」
「この辺りは電気が通ってないから、考えられる可能性としては魔術だけれど……」
「これ程辺鄙な場所でそんな真似をする意図が見えんな……儀式か何かとも思って調べてみたがそんな記録は無いし…」

等と言うのは順番に、紅い嘴（クチバシ）と青く長い尾羽が特徴的な鴉ほどの大きさの鳥、それより小柄で繊細な印象のある白い鳥、そして鱗に覆われたトカゲともアリクイともつかない獣である。

彼らは現在、世話になっている猿系禽獣種の老人から聞いた『青く光る真珠の垂れ幕』を探していた。

老人曰く『青く光る真珠の垂れ幕』は、熱帯雨林の奥深くにある巨大な廃洋館の全体に掛かるもので、その光は見る者全てを虜にする程に魅力的であるという。

かくしてその光を是非とも見てみたいと思った彼らであったが、その旨を保護者である熊猫系禽獣種の男に伝えたとしても『夜の熱帯雨林は危険だから』の一言で即時却下されると考え、覚えたての召還系魔術『ミチオシエ』で召喚した甲虫の案内を頼りに森の中を進んでいた。

そうして歩くこと数分後。六名は遂にお目当ての廃洋館へと辿り着いた。

しかしそこは、話に聞いたような光を放っては居らず、ただただ月明かりに照らされているだけだった。

「光って……ない、ね」

「何だ、あの話嘘じゃん……」

「うゆー」

「何やつまらん、早よ帰ろ」

「そうね。あんまり長居するとあとが怖いし」

「興味深かったのだが……致し方無いか」

そう言いながら、六名はそそくさと帰り始めた。

しかし、その時。

「うわあああああああっ！」

最後尾を歩いていた胴長の獣の悲鳴が、夜の熱帯雨林に響き渡った。

「トト！？」
「トト君！？」
「どないしたんや！？」
「みみみみ、皆逃げてぇっ！あ、あっああっ、アガ、アガガガガっ！」
胴長の獣―基、麝香猫系禽獣種の少年・トトは恐怖心で酷く取り乱しているらしく、腰が抜けていた。
仕方なく思った熊のような獣―基、熊猫系禽獣種の少年・ハピが回収し頭の上に乗せる。
「落ち着いてトト。アガって何の事？」
「アガっ、アガっ、アガシュラが居るぅっ！」
「「「「アガシュラぁっ！？」」」」
「んきゃぁぁぁ！？」

その名を聞いて、一同は思わず絶叫した。
アガシュラ。正式名称をツリーフォーク・ボア、或いはオオツノニシキヘビとも呼ばれるこの巨大な夜行性の爬虫類は、アクサノ本土を初めとする熱帯地域の湿潤な森林地帯に棲息している。
無性生殖であるため一個体での繁殖が可能であり一度に産み落とされる子供の数は７０～１００と極めて多く、貪欲であり環境の変化にも強いため生きた状態での輸出入は全面的に禁止。大陸内でも生きた状態での展示・飼育は原則不可能である。
しかし狩猟に関してはこの限りでなく、近寄ることが極めて困難かつ危険という理由から賞金がかけられているほどである。

そんなアガシュラを目の前にして、一同は死を覚悟した。だが何かがおかしかった。
一般的なアガシュラならば、動くものが目に入りそれを獲物と認識し無差別に襲い掛かってくるはずである。

しかし今現在、アガシュラはピクリとも動かない。大口を開けたまま、一切動こうとしない。

「……あれ？」

不審に思ったハピは恐る恐るアガシュラに近付いてみるが、アガシュラは一向に動く気配を見せようとしない。

続いてハピは、思い切ってアガシュラの頭へ小枝を投げつけてみた。小枝はアガシュラの頭に当たったが、それでも尚アガシュラは全く動かない。

「……こりゃあ、どういうこっちゃねん…？」

独特な言い回しで喋る青い鳥―山鵲系羽毛種のガッザは、上空から恐る恐るアガシュラの頭を観察し、ある事を理解した。

「このアガシュラ、死んでんで」

「「「え！？」」」

「うゃ？」

「だってホレ、こっち来て見てみぃや。このアガシュラ、首から後ろが何かに食いちぎられてんねや」

「何だって？それじゃ、このアガシュラは……」

「見間違い、だな」

「何だ……びっくりしたわ…トト君の見間違いだったなんて……」

「ホンマ傍迷惑な奴やで。まぁでも、本物やのうて良かったわ」

「そうだね。それじゃ早く帰ろうか」

「うやー」

かくして一同が帰ろうかという時になって、依然としてアガシュラの死体から動こうとしない者が居た。

トカゲともアリクイともつかない獣―センザンコウ系禽獣種のマニ

スである。

「マニス、何してんのや？はよ帰んで。抜け出した事がバレたら神官のおっさんに大目玉や」

「おっとすまん。アガシュラの死体を見ていて、少し不可解な点があったものでな…」

ガッザに促されたマニスは、素早く駆け寄りながら言った。

「不可解な点？」

「あぁ。あのアガシュラの死体、大体脊椎７～１０個くらい以降から先が無かったろう？」

「えぇ、そうね。でもそれって、そんなに珍しいことじゃないわよね？

アガシュラは確かに比類無き捕食動物だけど、だからといって無敵というわけでもないし」

「ワイバーンとか、ドラゴンとか、数は少ないけどあれより大きな動物が居ないって訳じゃないもんね」

「確かにそうなんだが、これはそんな安易な話じゃあない…」

「どういう事？」

ハピの問いかけに、マニスはあくまで冷静に答える。

「アガシュラの胴体にあった傷口についてなんだが……こんな傷跡を残せる構造を身体に持った生物は、アクサノどころかカタル・ティゾルにも居はしないんだ」

マニスの発言に、一同は度肝を抜かれた。

「ええっ！？」

「マニス君、それって……」
「どういうこっちゃねん！？」
「うやっ！？」
「それじゃあ、一体何がこんな事を……」
「解らない。最初は魔術や機械なんじゃないかとも思ったが、それらしい痕跡さえ全く無い……これは間違いなく、生き物の歯形に相当するものだ」
「それやったらこのアガシュラをこないにしてもうたんは一体何やねん！？」
「解らない。少なくとも僕の理解の範疇を超えた存在だ……。改めて思う。皆、早く逃げよう。ここには僕等が知ってはいけない何かの住処なｎ――――『ゴゥォエアァァァァァァァァァァッ！』――な、何だっ！？」

マニスが言い終わるより先に、突如地面を突き破って巨大な何かが現れた。
辺りが暗くその姿を肉眼視する事は出来ないが、何物とも思えない奇妙で恐ろしげな鳴き声から、大概ろくでもない存在であろう事は確かであった。

「皆逃げろーっ！早くっ！」
「うあああああああああああ！」
「きゃあああああああああああ！」
「んきゃあああああああああああ！」
「わあああああああああああ！」
「コレぁどないな設定やねーん！」

かくして一同はその場から全速力で逃げ出した。
彼らは当然戻った矢先保護者である神官にこっぴどく絞られたのだが、それはまた別の話。

重要なのは彼らの証言を聞いた神官が廃洋館についての情報を得るに至ったという事であり、話を聞いて不審に思った彼は早速力自慢で知られる傭兵団を雇い入れ、洋館へ調査に向かわせた。
しかし傭兵団からの通信は調査開始一日を待たずして途絶え、三日後にただ一人生き残った団員が山中で救護された。

団員は何らかのショックにより錯乱状態に陥っていたが、現地の医師やシャーマンの治療が功を奏しまともな会話が可能な段階にまで回復。
調査に向かった中で唯一生存した彼は、こう証言した。

『私は最初、この仕事を見くびっていた。だが今となってはそれが致命的な過ちだったと痛感している。
団長を含め仲間達は、皆総じてあの洋館に潜む何らかのものに食われてしまったのだ。
私は見た。仲間達を食っていたあれらとは、この世に住まうあらゆる存在とは全く異なるものだ。

だが、私はあれらを見て一つだけ確信できたことがある』

それは何かと訪ねられた男は、表情を変えずにこう言った。

『あれが、神だということだ』

第七十五話　インポッシブル・ウェイストマンション（後書き）

次回、この事件に繁達はどう挑む！？

第七十六話　次の行き先は南国ですが、何か？（前書き）

そしてラジオも動き出す。

第七十六話　次の行き先は南国ですが、何か？

―前々回より―

デザルテリア国立士官学校に潜んでいた秋本軍を壊滅させてから数週間、世間は夏真っ盛りであった。

テレビでは連日海、山、遊園地や博物館等各種観光地に関する情報が報じられ、絵描き達は水着祭りに走り、アニメ雑誌の表紙やピンナップなども海水浴やキャンプ、縁日等の図柄で統一される。

しかしてそんな中にあっても、我等がツジラ・バグテイルこと辻原繁とその同士達はさして派手な事をするでもなく、ただただ己の思うように過ごしていた。

「突然だが、次の行き先が決まった」

その日の夜、極めて珍しいことに一室に集って夕食を突く仲間達に、繁は言った。

「突然だね」

「あぁ、突然だ。多くの物事とはな」

「それで、今度は何処行くの？ヤムタとか？」

「他は何処でも良いがとりあえずエレモスはやめとけ。出身者だから言うが、あそこは今の季節じゃ何処もクソ寒くてやってらんねぇから」

『そうなんですか？』

「南半球だからな。俺としちゃその流れに慣れてたんだが、あの気温は慣れがねぇと辛いんだぜ。

んで、何処行くって？」

バシロの問いかけに、繁は意味もなく立ち上がって答えた。

「今回の行き先はアクサノだ。秋本も財産をアクサノのどっかに埋めたらしいから、一石二鳥って奴だな」
「アクサノって言うとあの、赤道直下にあるっていう大陸？」
「だだっ広い癖に人口密度はそんな高くなくて、陸地の殆どが熱帯雨林なのよね」
「技術形態は魔術・学術併合、文化形態は宗教軸だという話も有名ですよね」
『そもそも民族性が他の大陸に比べて幾らか穏やかな傾向にありますからねぇ』
「だがだからってノホホンとした間抜け共かっつーとそうじゃなく、スジは通すしケジメもしっかり付ける奴らなんだよな」
「あと確か海神教とかいう喧嘩好きのカルト連中が跋扈してんだよ、あそこ。
まぁ今じゃナリを潜めてるらしいが……何時暴れ出しても可笑しくは無ぇ」
「何？今回の敵はその海神教の奴らなのか？」
「いや、今回の件に海神教は関係していない。案件概要は追って説明するが、それより今は準備が先決だ。
今までと違い、今回は地方自治体のバックアップがついているからちょっとしたバカンスが楽しめるぞ」
「マジか！？」
「あぁ。一度に口頭で説明するのが困難なほどに至れり尽くせりのサービスだ。
しかも街は海沿いでな、その海ってのがまた凄まじく綺麗な珊瑚礁だと聞いてる」
「アクサノの海はカタル・ティゾル最高峰と言われますからねぇ」
「そうだ。だからこそあらゆる方面で準備は万端にしていかにゃあならん。
今回は仕事とバカンス兼ねてるからなぁ……」

そう言って繁は徐(おもむろ)に重厚な金属製のスーツケースを取り出した。
一般的なそれよりは些か薄いような気もしたが、しかしそれでも威圧感は十分だった。

「……そのスーツケース、何？」
思わず箸を落とした香織は、そのまま訝しげな表情で繁に言った。
「そう身構えんなよ、お前らしくねぇな」
「身構えもするよ。漫画とかドラマとかだと、大体そういうのには洒落になんない額の札束が詰まってるもんでしょ？」
「そうよね。それでその中の札束っていうのは、大体法的にも倫理的にもヤバい金だったりすんのよね」
「定番中の定番ですね」
『まぁ我々ってハッキリ言うと悪役ですし』
「しかしそこまで悪役だったとはな」
「侵略先の若い女手当たり次第犯しまくるとかじゃねぇだけマシだろ」

「皆勘違いしているようだが、この中に入ってるのは金なんかじゃねぇぞ」
「「「

認するように」

繁によって配られたリストには、商品券・ポイントカード類の種類や、それが使える商店や商品についての詳細な情報が記されていた。

「家電、ゲーム機、ゲームソフト、レンタル品、動植物、農業用品の殆ど、中堅以上の魔術具等はそれらの対象外だが、それなりのものは入手可能だろう」

「……あのさ、繁。ちょっと良いかな？」

「どうした香織、金額や対象商品の品目に不満でもあるのか？品目はどうにもならないが、金額だったら俺の分を―」

―「いやそうじゃなくてね？品目・金額について不満なんて無いのよ。私が聞きたいのはこれの出所。こんなに沢山の商品券、どこで手に入れたの？」

「あぁ、何だそんな事か。何て事ぁ無ぇ、イスキュロン行ったときに駅に居た痴漢冤罪のオッサン助けたら」

『その男性の方から助けたお礼にと頂いたというわけですね？』

「それもある。が、そんなもんは全体の一分程度でな。実はその時、被害者面してオッサンから強請ろうとしてたＯＬのお姉様や尻馬に乗ってた民間人の皆さんと軽く平和的な交渉をさせて頂いたら、詫びだと言って中身の詰まった財布を突き付けられてな。極めて健全で平和を愛する善良な一般人の俺としては当然、そんなモン受け取る訳にも行かねぇから、中からポイントカードとか商品券だけ抜き取って財布だけは返してやったって訳だ。勿論残る現金とかクレカは全部、最大の被害者であるオッサンに慰謝料として差し上げた。

いやぁ、我ながら他に類を見ない健全かつ平和的で善意溢れる解決法だったと思うぜこいつぁ」

「凄いね繁！それでこそツジラジの司会ＤＪだよ！」

「そう言うな香織よ。俺は当然の事をしたまでだ」

等とあからさまに芝居臭い態度で宣う地球人二人を尻目に、他五名はただただ死んだ眼のままに飯を突き続けたのであった。

かくしてエレモス行きが決まった七名は、それぞれ準備のために動き出す。

第七十六話　次の行き先は南国ですが、何か？（後書き）

次回、ヴァクロ女子（↑ここ重要）チームの受難！？

第七十七話　狐医者（元）の発案：前編（前書き）

初の前後編！

第七十七話　狐医者（元）の発案：前編

―前回より・翌日―

「さぁ皆、張り切って行くわよ！」
『はい、ドクター！』
「勿論だぜェ！」
「は、はい……」
「兄さん、落ち着いて下さい…」
「（……何で私がこんな洒落た店なんぞに……）」

ノモシア都市部にある若者向けに作られた服屋の店内を突き進むのは、繁を除くツジラジメンバーの六名。
その先頭を意気揚々と歩くのはニコラであり、彼女を初めとする六名がこうして服屋を訪れる事となったそもそもの言い出しっぺもこの不老不死の狐であった。

―第三者視点での回想―

事の起こりは午前１０時頃、香織が自宅の居間で何を準備すべきかと計画を練っていた頃にまで溯る。

「うーん……悩むなぁ。行き先はリゾートとして名高いアクサノで、しかも作戦には地方自治体のバックアップがつく上にバカンスのオマケ付き……となると準備についても真剣に考えないと……」

香織は愛用のノートパソコンを起動し、アクサノという大陸について根底から調べを進めていた。
地域ごとの気温や気候や地形の特徴から、宗教観や特産品等の文化

的特徴、主要な生物相に至るまで、緻密かつ迅速に情報を収集・分析していく。
更にそこから得た情報を頼りに通販サイト等を駆使し、状況に応じた品々の平均価格を見定めていく。

「良し、この分なら９０万で十分足りそう。余った分でちょっとした買い物とかするのもありかもね。
さて、そうと決まればお店の方に確認を――
―「香織ちゃぁあああああん！」――!?」

香織が携帯電話を取ろうとした瞬間、居間に飛び込んできた者が居た。
不老不死から来る凄まじい生命力に定評のある医学系雌狐こと、毒蛾のヴァーミンを持つニコラ・フォックスである。

「ニ、ニコラさん!?一体全体何がどうしたの!?」
「香織ちゃん、今暇!?時間ある!?」
「え?ま、まぁ、時間ならあるけど」
「オッケェイ!そんじゃ決まりねっ！」
「は!?何が!?」
「良いから良いから、とりあえず来なさいな」
「え!?あ!?え!?」

言われるがまま、ニコラは強引に香織を引っ張っていこうとする。
持ちうる異能と種族故であろう、ニコラの身体能力は香織を上回る為、引っ張られるとどうしようもない。

「自分で言うのもなんだけど、年寄りの言うことは大概聞いといて損無いわよ。
認知症とか例外はあるけどね」

「え、いや、それは確かにそうだけど……一体何!?何ゆえ私は腕を掴まれてる訳!?」
「何でってあーた、そりゃ香織ちゃんにも来て欲しいからよ」
「何処へ!?っていうか私携帯も財布も持ってないし、何よりパソコンの電源切ってないんだけど!?」
『それならば私が済ませておきました。それと、携帯電話とお財布です。どうぞ』
「あ、有り難う。っていうかこの流れは何!?私どうなっちゃうの!?」
「良いから良いから」

ニコラの手で半ば強引に連れ出された香織は、同じようにして連れ出された桃李とリューラと共に近所にある若者向けの服屋へと辿り着く。
聞けばニコラが三人を連れ出した目的は、アクサノの海で着る為の水着を買いに行く為であった。
曰く『気の利かない作者が水着回のチャンスをくれる事はもう無いかも知れない』との事。
これに対し三人は『海水浴に行くつもりはない』として水着は不要だと告げたのだが、半ば暴走気味のニコラに加え、桃李の水着姿に釣られた羽辰や、更にはその妄想で歯止めが利かなくなったバシロによって強引に押し切られた結果、されるがままに服屋へと連行されてしまったの。

かくして話は冒頭のシーンへ舞い戻る。

―服屋―

「つか、清水や桃李は良いとして私は出歩いたらヤバくねぇか…?外じゃ変則結合でどうにかなったが、素顔晒してちゃ流石にバレる

んじゃ…」

『心配要りません。こちらのお店はドクターのお友達の方が経営されておりまして、現役ギャングから脱獄囚、犯罪組織の幹部まで受け入れる事をモットーにしておりますので』

「それでよく商品券やらクーポンやらポイントカードの対応店舗になれたね……」

「まぁ、んな事ぁ表沙汰んなってねぇしな」

「何にせよ洒落込む事には不慣れですし、ここはドクターに従っておきましょうかねぇ」

「任せなさい。あたしの取り分であんた達にとびきり良い奴買ってあげるから」

そんなこんなで女性用水着コーナーに辿り着いた六名は品定めを開始した。

『では私は暫く休ませて頂きましょうかね。こういうものは女性だけの空間で選んでこそと思いますし』

そう言って桃李の体内に戻ろうとする羽辰を、バシロが引き留める。

「そりゃ甘ェぞ羽辰ッ！こういうモンは男の目ってのが重要になるんだ！だよな、医者先生！？」

「そうね！心理学も囓ってるから言うけど、男女で観点が違うっていうのを単なる安易なスラングと割り切るのは些か間違いなの！」

『つまり、どういう事でしょう？』

「要するに野郎は女の服選びに同行すべきだって事だよ！取り分け亭主とか彼氏とか兄貴なんつう、関わりの深い奴だと尚良し！」

「生まれてこの方彼氏も出来ず家族は異世界、従姉妹もこの場に居ないのが一人いるけんだけど？」

「それは何て言うのかしら……そう、アレよ！サプライズって奴よ！粗筋とか伏線とかの情報を知るのは大事だけど、所見でネタバレばっかりってのも駄目でしょ？」

「まぁそれは確かに言えてるし、そもそも落とす必要性のある男も居ないし、何か良い感じのを適当に……」
「そうだな……何か適当にサイズ合いそうなの選んどくか」
「えぇ。それが良いでしょうね」

かくして三人は水着選びを開始する。

第七十七話　狐医者（元）の発案：前編（後書き）

因みにこの辺りで言及しておくと、ツジラジメンバー女性陣の体格を体積順に並べると以下のようになる。

リューラ（１）＜香織（２）≦桃李（３）　ニコラ（４）

1．バシロ抜きにしても元々背が高く筋肉量も多い。というか高身長・性欲旺盛・両性具有と三拍子揃った軍人キャラな辺りで巨乳確定なわけであって。

2．彼女の容姿は大体某蒼い対戦格闘ゲームに登場する憲兵部隊所属の中尉（声：●井麻●）だと思えばいい。但しその戦闘スタイルや作中での動向、根本的な性格は似ても似つかないが。

3．あくまで若干の差であると想定する。但しゴキブリをシンボルとするスピードキャラなので、作者の中では細身のイメージが固まりつつある。

4．元々肉体派でなく、僅かながら狐の遺伝子が入っているため細身である。

第七十八話　狐医者（元）の発案：後編（前書き）

後編だけどタイトルの割に後半の方がメインになってるなコレ…何処がライトノベルだよ。

第七十八話　狐医者（元）の発案：後編

―前回より―

『水着選びは適当に済ませてさっさと帰る』と考えていた三人だったが、選び初めて１０分でそれが甘かったと後悔する羽目になった。というのも、ニコラは予め予約を取っていたのか自分の分を早急に購入し、羽辰やバシロの他、店員や他の客達とまでも結託。愛と勇気と情報と誠意を以て三人を圧倒し始めたからである。

それ即ち『適当に良さそうなものを選ぶ』という行動の封殺とほぼ同義であり、打開策として『面倒』『適当』『そちらの方で』というような曖昧な単語を口にしようにも、彼女らの気迫はそれさえも許さなかった。

対等の立場であろうニコラ、羽辰、バシロならばまだしも、普通客商売の人間がまともな客を圧倒するなどあってはならない事であり、ましてや他の客の介入など迷惑以外の何物でもない筈である。

故に彼女らにはそれに苦言を呈し、店員や他の客はおろかニコラ達をもはね除けるだけの権利は当然持ち合わせていた。

しかしその権利を行使しようにも、奔走する店員や客達の表情は総じて純粋な善意に善意に満ち溢れ生き生きとしており、それは三人の心に躊躇いを生じさせるに十分なものであった。

そもそも生まれてこの方海水浴にもプールにも行った経験が無いに等しい三人にとって、水着選びという行為は正直恥ずかしくてやっていられないのではあるが、だからと言って羨望の眼差しを向ける仲間達やその他大勢の手前取り止めるわけにも行かず、結果どうしようもなく流れに身を任せるばかりなのであった。

―同時刻・ルタマルスはジュルノブル―

早朝から一人別行動を取っていた繁の行き先は、ノモシアの大国ルタマルスが首都・ジュルノブル。
記念すべきツジラジ初回の舞台となり、また彼らの手によって元々の機能を壊滅させるに至ったジュルノブル城が存在していた都市である。
繁がわざわざ朝早くからここに来たのは、ある人物に会う為であった。

「確かこの辺りに……おっ、ここだ」

暫く歩いた繁は、路地裏に佇む薄暗い建物の中へと入っていく。

「店長、居られますか？」
「ん……誰かと思やぁあん時の坊ちゃんかい。何の用だね？」
店の奥から現れたのは、全体的に緑色をした外殻種の老人であった。
その人型を乖離した姿は巨大な甲殻類を思わせるものだったが、それでも彼がカタル・ティゾルに於いてヒトとして扱われていることに変わりはない。
「はい。件のブツ―この仕込み手甲鉤のお代を支払いに参りました」

察しの良い読者はこの発言から判るだろうが、繁がシーズン１のジュルノブル城戦より愛用している一対の仕込み手甲鉤を作ったのは、他でもないこの外殻種の老人であった。
というのも、彼―グソクムシ系外殻種カドム・イムは長年ジュルノブルで武具店を営む武具職人である。
今年で２１４歳になる彼は溶接・旋盤・鍛造・鋳造・手仕上げ等、ありとあらゆる工業技術に精通し、果てはラビーレマ製の最新型コンピュータさえも購入から半日で全貌を理解し使いこなす等、ある

種の天才に類する人物である。

「止さんかい。金は要らぬと言ったろう。
それとも何かね?儂があの時言ったモノを持ってきたとでも?」
「えぇ。貴方のご期待に添えるかは判りかねますが、中々の品々であるかと」
「ほほう。何を持ってきたのかね?」
「此方になります」

そう言って繁は背負っていたカバンの中から木箱や硝子瓶を数個取り出し、カウンターの上に並べた。

「こ、これは……!」
「此方は飛姫種であった故セシル・アイトラス王女の専用ＰＳ『アスル・ミラグロ』の擬態形態です。
その隣にあるのは『腐臭の肉塔王』の二つ名で忌み嫌われたクブス派の魔術師ホリェサ・クェインの頭蓋骨ですね。修繕に苦労しました。
此方の木箱にはこの通り、テイオウスナハンザキの牙が入っています。大きさは少々振るいませんがね。

如何でしょう。私としては何れも『世界に数ある驚愕と感動の象徴』たりえる品々だと思うのですが…」
「……いやぁ、驚いたよ。まさか坊ちゃんがこんなお宝を集めてくるとは……並みの冒険家なら至難の業だよ。
一体どうやって集めたんだい?というか、坊ちゃんそもそも何者だい?」
「六大陸でラジオ番組の収録をしている内に集めてしまいましてね」
「ラジオねぇ……っと、この瓶は何だい?何か丸いものが入ってるけど……」

「あぁ、それはイクチ一族とかいう妖怪を自称するヌタウナギのようなバカの目玉ですよ。
普通ヌタウナギの目玉というと肉に埋もれていて殆ど意味を成さない筈なのですが、そいつの目玉は至極真っ当に機能しましてね。
専門家などに見せて詳しく調べさせればそれが一体何なのかは判ると思いますが、私個人が思うにそれほど大したものではないと思います」
「いやいや、そんなに気を遣わなくても良いんだよ。しかしこれだけのものを貰っておいてその手甲鉤だけってのも何か悪い気がするねぇ」
「そうでしょうか」
「長いこと生きてると他人のために無駄な事までしたくなるもんなのさ。老婆心って良く言うだろう？
まぁ最も、グソクムシにとっちゃ２００歳はまだまだ若造なんだけどな。ちょっと待っとってくれよ……」

暫く店の奥で何かを探していたカドムは六つの紙箱を持っていた。
色はそれぞれ赤・黄・黄緑・青緑・銀・黒で、大きさや厚みもそれぞれ区々である。

「感動が抑えきれなくてね。坊ちゃんにプレゼントをあげようじゃないか」
「プレゼントって…そんなにですか？それは流石に悪いような……」
「謙遜しないでおくれ。年寄りの親切は利用してナンボだからね」
「……判りました。有り難く頂戴致します」
「うむ。若者は適度に素直なのが一番だよ。使い方は説明書を同封してあるから大丈夫さ。
もし使わないようなら友達にでもあげると良い……」
「有り難う御座います。私にはこの手甲鉤で十分ですし、丁度六人居ますのでこれらは仲間達への贈り物にしようかと思います」

「うむ。謙虚でよろしい」
「では、私はこれで」

カドムの武器屋を後にした繁は、そのまま他の店で必要物資を買い揃え、夕方頃に香織の自宅へと戻った。
女性陣の水着選びもその日の昼頃に無事終わり、各自自分で選んだ一着をニコラに買い与えられたのであった。

第七十八話　狐医者（元）の発案：後編（後書き）

次回、遂にアクサノへの旅立ち！

第七十九話　おまたせ☆ラプトル（前書き）

時は再び夕食時。

第七十九話　おまたせ☆ラプトル

―前回より―

「さて」

夕食時、またも一同に会したメンバーに、繁が言う。

「皆、今日はお疲れ様。大概の奴は今日で大まかな準備を済ませたろうが、もしかしたら買い逃しなんかがあるかも知れん。
明日一日はそういった諸般の確認作業や各々現地で使う事になる機材・道具類の調整、予定立てなんかを済ませたら、なるべく早くに戻ってくれ」

「具体的には何時頃までに戻るべきでしょうか？」

「そうだな…遅くても２２時４５分には準備万端の状態でここに居られるようにしておいてくれ。
その１５分後、２３時にはアクサノへ発たにゃなんねぇからな」

「飯は昨日今日みたく全員一緒に喰うのか？」

「いや、好きにしてくれて構わねぇ。移動中でも喰えるしな」

「移動は海路？それとも空路？」

「空路だ。とは言っても当然公式的に認可された奴じゃなく、出発十五分前までにアクサノから迎えが来る予定になってる」

「到着予定時刻は？」

「天候や竜種の行動ルートを伺いながら行くから奇跡的に早くても翌朝５時ぐれぇになるらしい。
寧ろ到着遅くなった方が空から夜明けとか見られたりしてな」

更に繁は机の上に白い紙袋を置いて呼びかける。

「あとアレだ。今日はお前らに渡したい物があるんだよ」
「渡したい物？」
「あぁ。実は午前中に出掛けたのは俺の仕込み手甲鉤を作ってくれた職人の爺さんに代(シロ)を支払いに行ってたからなんだが、実はその職人が気前良くてな。
手甲鉤だけじゃ割に合わんと、何かの入った紙箱をくれてな。中身が何かは俺もまだ見てないんで知らんが、丁度六つあったしお前らにやろうかと思ってな」
「おぉ～、流石は辻原。黒っ腹だな！」
「……それを言うなら太っ腹じゃねぇか？」
「しかし自営業の武器職人ですか。近頃少なくなったと聞きますが、居るところには居るものですねぇ」
「自営業っつうか、客に要求する代が現物なあたり事業っつーより道楽なのかも知れんがな」
「つまり物々交換な訳ね。でもそんなにいい物持ってたの？」
「いや、代の価値は爺さんがそれを見てどんだけ感動したかによって決まるらしい。
クソ王女の玩具にクェインの頭蓋骨とスナハンザキの歯、あとバカの目玉とか持ってったら大喜びでな」

そう言って繁は、紙箱を仲間達に配っていく。
香織には赤を、ニコラには黄色を、桃李には黄緑を、羽辰には青緑を、リューラには銀を、バシロには黒を手渡した。

「中身は各自部屋で開けてくれ。取説が入ってるらしいから扱いには困らんだろうが、くれぐれも部屋で試したりすんなよ？
あの爺さんの事だ、火器の類だと壁ぐらい簡単に吹き飛ぶだろうからな」

カドムが繁を通じて仲間達に贈った武器とは、果たして一体如何様

なものなのか？
それはまた、次の機会に。

―翌日・２２：３９―

殆どの面々が未だ外出中或いは準備中である中、一人早々に準備を終えた繁は屋外の開けた土地―迎えの航空機が来る事になっている場所で夜空を眺めていた。

「奇妙なもんだな。異世界だけに星の並びも違うっつうのに、星座の位置関係やそれに纏わる神話は地球と似通ってやがる。もや二つの世界には何か関係性が……なんて考えてるとキリねぇわ。

さて、そろそろ戻って荷物の確認でもすっか」

繁が立ち去ろうとした時、彼の背後からふと声がした。

「ツジラ・バグテイル殿ダナ？」
声のした方を振り向けば、そこには哺乳類とも爬虫類とも鳥類ともつかないヒューマノイドが佇んでいた。
全身茶褐色の羽毛に包まれ、爬虫類然とした細長い頭部、手足にある禍々しい鉤爪や細長い尾を持つそれは地球で言う恐竜―それも知性と戦闘能力に定評のあるドロマエオサウルス類に似ていた。
彼の骨格は辛うじて人型だったが、下半身を覆う黒のダメージジーンズが無ければ大抵の者は地上棲若しくは樹上棲の竜種と勘違いしてしまうだろう。

「如何にもバグテイルは俺だが、あんたは？」
「俺ノ名ハヌグ。元ハアクサノ航空防衛隊三等空佐ダッタガ、任期ヲ終エタ今ハセルヴァグルニアル児童養護施設・コチョウランニ勤

メテイル、シガナイ地龍種ノ男ダ」
「つまり、神官の旦那が言ってた迎えのモンか」
「ソウダ。ツイ先程、予定シテイタルートニ不備ガ発生シタタメ急遽着陸場所ヲ変更シタノダ」
「それは大変だな。フライトに支障は？」
「殆ド無イ。タダ、現地ヘノ到着ハ若干遅レルダロウガナ」
「そうか、なら良い。しかしまた、随分と早い到着だな」
「ウム。俺ハ他人―トリワケ客人ノ類ヲ待タセルノガ嫌イデナ、行動ハ迅速ニ行イ、アラユル不測ノ事態ニ備エテイルノダ」
「素晴らしい心がけだ。大概の奴には中々出来るもんじゃねぇ」
「オ褒メニ預カリ光栄ダ。デハ、俺ハマダマシンノ点検ガ残ッテイルノデソロソロ行カネバナラヌ」
「そいつぁ丁度良い。俺も今し方戻って荷物の確認をと思ってたんだ」
「デハマタ、出発時刻ニ会オウ」
「おうよ」

かくしてヌグは航空機へ、繁は家へと戻っていった。
そして同日２３時、ツジラ・バグテイルこと辻原繁とその仲間達を乗せた旅客用の大型ヘリコプターに乗り込んでアクサノへと旅立っていった。

第七十九話　おまたせ☆ラプトル（後書き）

次回、遂にアクサノへ！事件解決・遺産回収・南国旅行を無事果たせるか！？

第八十話　夜明けの朝日と市長と神官（前書き）

繁一味、遂にアクサノへ！

第八十話　夜明けの朝日と市長と神官

―前回より―

翌朝５時１４分。
旅客用大型ヘリの中で目覚めた七人は、水平線の果てから登る朝日に力を分け与えられるような感覚に陥った。
透き通った東天から差し込む優しげで暖かな陽光は、社会的な悪に染まるラジオＤＪ達にもまた平等な癒しと活力を授けるのである。

「…もう朝か」
「アァ、モウソロソロダ。到着次第ホテルへ案内シヨウ。朝食ハドウスル？要ルナラバ早クテ午前7時ニハ用意サセルコトガ出来ルガ」
「いや、大丈夫だ。貯蔵分があるし、不足分は各自向こうで買い足す」
「了解シタ。他ニ要望ハアルカ？有レバ自治体ニ連絡スルゾ」
「そうだな……じゃあ、スター扱いは止めて欲しい」
「ト、言ウト？」
「派手で大がかりな歓迎会やパレードをやったり、過剰な宣伝や優遇は止して欲しいという事だ。
外部への報道もＮＧだ。あれやこれやとチヤホヤされて目立つのは柄じゃないんでな。
あくまで一介の旅行客として、それなりに良い扱いをしてくれればいい。まぁ、最初の契約通り宿泊費なんかはそちら持ちで頼みたいが」
「ソウカ。デハ上ニモソウ伝エテオコウ」
「俺達は芸能人でも英雄でもない。ただ、森に潜む何か―目撃証言によれば神とも言えるそれの正体を突き止め、可能ならば駆除する。

その為にノモシアからやって来た、単なる物好きの民間団体。そういう事でよろしく頼む」
「心得タ」

―セルヴァグルにある高級ホテル―

ホテルに到着した繁達はそれぞれ割り当てられた部屋で暫く好きなように過ごした後、午前８時３０分の呼び出しに従い一階のロビーへ向かった。

ロビーで待っていたのは竜属種と禽獣種の男二人組。雰囲気から察するにどちらもかなりの高齢であるようだった。

「お初にお目にかかる。私はムチャリンダ。この街の市長だ」
真っ先に口を開いたのは大柄な東系竜属種の男性だった。一件深緑に見える鱗は、角度によって七色の光を発している。
「ほう、貴方が市長様でしたか。初めまして。
ラジオＤＪをやっております、ツジラ・バグテイルと申します」
「貴公がツジラ殿か。巨大な羽虫一匹が丸ごと頭になっていると聞いていたが、霊長種だったのか」
「あれは被り物で御座います。我々のような者は安易に素顔を晒しては身を危険に晒します故」
「左様か。という事は、その名も？」
「えぇ。当然ながら偽名です」
「成る程。して、今回貴公等に来て頂いた理由だが……」
「心得ております。森林の深奥にある廃洋館とその近辺に住まう、得体の知れぬ化け物共を駆除する――投書にはそうありました」
「うむ、その通りだ。あの後洋館へ精鋭を送り込もうとも考えたのだが……傭兵団の二の舞になると考え、貴公等の華麗な策に頼るもの決定した」

「華麗な策……ですか。それほど凄まじい事をやった訳でも無いのですが、呼ばれたからには我等一同全力を尽くさせて頂きます」
「因みに投書は私が出させて頂きました。とは言っても、事はそれだけに限らないのですが……」

竜属種・ムチャリンダに続いて口を開いたのは、青紫を基調とした中華服に身を包む熊猫系禽獣種の男であった。
背丈はニコラや桃李と同じ程度だが、肩幅はその倍程もある。

「そうでしたか。ところで貴方様は……」
「失礼、申し遅れました。私、林霊教の神官兼児童養護施設『コチョウラン』の運営者で禽獣種の供米磨（クマイマオ）男と申します」
「ほう……それで供米神官、それだけに限らないとは一体どういう事で？」
「はい。実は廃洋館への傭兵団派遣以降明らかになった事なのですが、以前よりこの近辺で若い女性の怪死が相次いでおりまして」
「若い女性の怪死……ですか」

若者の怪死と言えば、リューラとバシロを除く5人には覚えがあった。
シーズン2、ラビーレマの東ゾイロス高等学校で起こったクブス派残党による連続強姦殺人事件である。
とは言えあの時は男女問わず、しかも範囲が限定されていたのではあるが。

「えぇ。街に住まう若い女性―それも、健康体の処女ばかりが１０人も変死体で発見されているのです。
何れも恐るべき傷跡や解剖学の域を逸した形跡を残されたままに、しかし魔術の形跡は見当たらずという有様で」
「解剖学の域を逸した有様とは？」

「それにつきましては、ご希望とあらば後程現物をお見せ致しましょう」

「判りました。他に何か変わった事件などは？」

「はい。これはつい二週間程前からなのですが、市内で得体の知れない生命体の目撃情報が相次いでおりまして、それらしき生物の死骸も幾つか発見されているのです」

「ほう。具体的にはどのような？」

「具体的にここがこうであるとか、そう言い表す事も出来ないほどに奇怪な姿をしているのです。

それも、どの生物にも似ていないのではなく、不特定多数の生物種に見られる特徴が様々に混在しているという、益々に不明瞭な形態でして」

「『どれでもあるが故にどれとも言えない』……ですか。して、専門家は何と？」

「それが、各大陸のあらゆる専門家に種の特定を仰いだのですが、どの方も口を揃えて『同定不可。既存の生物種には当て嵌まらない』の一点張りで……。

細胞の大きさや目撃証言からして動物である事は間違いないのですが、遺伝子の塩基配列もまるで見る者を嘲るかのような配列でして…」

「成る程……それは確かに奇妙ですなぁ…。判りました。この一件、全力を以て当たらせて頂きます」

「はい。どうか宜しくお願い致します。無論、事件の捜査ばかりでなく観光も存分にお楽しみ下さいませ」

かくして市長達との話を終えた一行は、情報収集を兼ねて街へ観光へと繰り出した。

第八十話　夜明けの朝日と市長と神官（後書き）

次回、待望のセルヴァグル観光！

第八十一話　バカが話を聞いてくれない（前書き）

さぁ、観光だ！

第八十一話　バカが話を聞いてくれない

―前回より―

市長ムチャリンダ及び神官供米との話を終えた一行は、屋外へ繰り出す前にひとまず自室で熱帯用の服に着替える事にした。
と言っても布地が薄く、丈が短く、デザインが派手になったくらいの違いなのだが、それでも着替えると着替えないとでは各自の気分に圧倒的な差があったのである。

「海外旅行なんてのは人生で初めてなんだが……成る程、中々良い雰囲気じゃねぇのセルヴァグル。私は気に入ったぜ」
「同感だ。俺ぁヒトの頃から夏好きで、毎年夏場になると無茶苦茶テンション上がるっつー持病があってな。
永住は無理でも偶に来るぐれぇなら良いかもな」
「私もだよ。亜寒帯出身だけど、この気温に慣れるのはそう苦じゃない気がしてきた」
『私は半分霊体なので体感温度というものはある程度調節出来ますが、桃李はどうです？』
「大丈夫ですよ、兄さん。気温面なんてどうとでもなるんです。
それより何より熱帯と言ったら派手な警告色の有毒生物ですよ。まさしくマニアからしたら理想郷というものです。
山なら毒草、毒蛇、毒虫、毒蛙、海なら毒魚、毒貝、毒海月、毒海胆、毒蛸……いやぁ、考えただけでワクワクしてきますねぇ」

街道を歩きながら思い思いに語らう五人を、少し後ろから見守る三人が居た。

「供米のおっさんにゃ感謝しねぇとな。今までの俺らは法から隠れ

るように活動してたが、少なくとも今回ばかりはそれがねぇ。
四度目にしてこの有様は何処か異様ですらあるな」
「考え過ぎじゃない？まぁそりゃ、旅行気分で現を抜かしてると敵に察知されて足下掬われるってのは百も承知だけどさ」
「どうでも良いけど、あの緑髪の娘さん何か妙なことしでかさないだろうね？近頃は只でさえ若い研究者の無茶を止めるので精一杯で……」
そう言うのは、神官の知人であり今回繁達のガイドを務めるサイチョウ系羽毛種の女性・ラドラム。
供米の友人である林霊教の巫女である彼女は植物学に深く精通し、生涯の間に３０の子を産み育てた等数々の伝説的所業で有名な人物であった。
「心配要りませんぜ、大巫女様。うちの者は見て呉れや好みこそ奇抜で性根もひん曲がった奴ばかりですが、それぞれ自分がやっちゃならねぇ事はちゃんと理解してる。
仮にこれ以上道を踏み外そうもんなら俺が止めますし、逆に俺が道を踏み外しそうになったら奴らが俺を止めるでしょう。
この集まりはそういうもんなんです」
「若いのに大した自信だねぇ。霊長種にしては見上げた根性だ」
「それは甘いですわ、大巫女様。彼は既に霊長種を逸しておりますもの」
「そういえば、あんたはヴァーミンの有資格者だったね」
「えぇ。こんな身なりながら糞生意気にも――「ゥい待てやグラァ！」――あん？」
唐突に高圧的な喋りの声に呼び止められた繁が振り返ると、そこには全身ピアスや銀製アクセサリーだらけで、体毛の色合いや形状が攻撃的な禽獣種らしき男の姿があった。
外見から推測すれば総合的に見た知能指数は繁の半分程度だろうか。
繁は仲間達に先に行くよう伝え、その場で立ち止まった。

「何だアンタ？俺に何か用か？」
「何か用かじゃねぇわ！テメェ、観光客だろ！」
「……そうだが、それがどうかしたか？」
「どうかしたかじゃねえ！テメェ観光客の癖に生意気なんだよ！観光客なら観光客らしく、目立たないように大人しくしてろってんだ！」
「はぁ……あー…自分で言うのも何だが、俺自身は観光客の中でも比較的大人しい部類だと思ってるんだが……何か問題でもあるか？」
「問題だと！？大有りに決まってんだろ！テメェ自覚ねーのか！？」
「自覚…？はて、ちょっと待ってくれ……ええと、『目視可能な武器・火器類』はちゃんと指定通りの保管庫に入れてあるし、『一等以上の魔術具』も『三等以上の毒劇物、五等以上の爆発物』も、持ってないな……。
あと思い当たる問題点と言うと……すまない、俺の確認できる限りでこの辺りの法律や条令に違反するような問題点は何一つとして無いんだが……何がいけないんだ？」
「何がいけねぇかだとぉぉぉ！？そんな基本的な事から態々説明さす気かテメェはっ！」
「あぁ、頼む。無知な観光客に地元のルールや事柄を説明するのも地元民の義務だと思ってくれ」
「っち！仕方ねーなぁ、そんなに言うんなら教えてやるよ！この俺様、闇夜の吸血蝙蝠ことゼンヲウ・龍漸寺様の前でハーレムをやった事！それがテメェの大罪だ！」
何とも酷く馬鹿馬鹿しい言い掛かりがあったものである。
「……ハーレム？はて、覚えが無いのだが……」
「テメェ、バックレる気か！？ナメてんじゃねぇぞ！」
「いや、しらばくれるつもりは更々無い。私はただ友達と歩いてい

ただけであって―

―「まだ言い訳するってか?テメェヒトをバカにすんのも大概にしろよ!」

「いや待てバカにしているつもりは――「問答無用ォ!死ねや腐れリア充がァ!」

かくして自称（明らかに血を吸いそうな顔つきでないが）闇夜の吸血蝙蝠こと蝙蝠系禽獣種ゼンヲウ・龍漸寺が飛び掛かってきた。

しかも本来ならば多くの個体が腕の翼で空を飛ぶ能力を備えているはずの蝙蝠系禽獣種の癖に、地面を走っている。

というのも、彼のピアスや銀製アクセサリーは耳や手足ばかりでなくその翼にまで及んでおり、金属で重くなった上に穴まで空けられた翼では満足に空も飛べない為であった。

本来このような過剰装飾に法的な制限はないが、各大陸の軍・企業・教育機関・タレント事務所等から暴力団のような組織でさえ、職員・構成員等関係者の過剰装飾を禁止しているか、或いは制限を設けている。

（但しそれそのものが装着者の身体的・生理的な活動補助を目的とするものであったり、文化・宗教による取り決めである等やむを得ない理由がある場合は例外として容認される場合も多い。当然ながらゼンヲウの過剰装飾に正当な理由など有るはずもないが）

ゼンヲウは町中だというのに刃物を振り回しており、対する繁も槍や仕込み手甲鉤などは持っていなかったが、だからと言ってこの程度の相手にアサシンバグの力を使おう等とも考えては居なかった。

第八十一話　バカが話を聞いてくれない（後書き）

次回、辻原繁の新たなる可能性が明らかに！

第八十二話　暴虐！ムシ男（前書き）

＊注意書き＊

今回は表現がむやみやたらに過激です。

別に何時もそうじゃねぇかって言うとそうなんですが、何か今回はとりあえず注意書きでも書いておいた方がいいんじゃないかと思いまして…えぇ。

第八十二話　暴虐！ムシ男

―前回より―

「あれで良かったんでしょうか…」
『不安ですねぇ…冗談抜きで』

ラドラムの案内で辿り着いたレストランにて『必殺虫グミ―ゴキブリ』なる、精巧に作られたゴキブリ型のグミが盛られたコーンフレークを眺めていた桃李と、それにミルクを注ぎ終わった羽辰が不安げに言った。
因みにグミの味はコーラとミルクチョコであり、中に同じ味付けのされた水飴状のシロップが仕込んであるという豪華仕様であった。

「どうせなら私らも一緒に残りゃ良かったんじゃねーかな……」
「だよな……まぁ、加減間違えて殺してもアレだがよ……」

等とぼやくのは、泡立つ透明な液体の中に透明標本のようなカエル型のグミが入ったコップ―『スケルトンサイダー―アクサノアオガエル（上陸直後）』という歴とした店のメニュー―にストローを突き立て、中身を吸っていたリューラとバシロ。
こちらのグミは透明な部分こそ単なる白砂糖味だが、青い部分にはアクサノ固有種の香草から抽出した染色液が使われており、これはある種のハーブに似た爽やかな香りを放つものである。

「ま、どうなろうがアタシがどうこう言う事じゃあ無いさ。
聞けばあの子、幼い頃から中々のやり手だそうじゃないの。ねぇ、狐のお嬢さん？」

等とニコラに話題を振りつつ、ラドラムはフォークに刺した蒸かし芋―この喫茶店名物『パンダ印の蒸かしヤムイモ』を自慢の嘴（クチバシ）で器用に啄む。

「いや、私も詳しくは知りませんよ。そこは香織ちゃんに聞いてくれないと。ねぇ、香織ちゃん？」

等と言うニコラが突いているのは緑色の毛虫型グミが盛られたアイス―レストランのメニュー『必殺虫グミ―イラガ（幼虫）』をバニラアイスに盛っただけのものを食べつつ言う。

因みに三色あるグミの味はそれぞれメロン、青リンゴ、マスカットである。

「いやー、何て言うか繁の方は別段心配要らないんですけどね？寧ろ心配なのはあの自称吸血蝙蝠とか言いながらどう見ても顔つきがオオコウモリなバカの方で。

しかも繁って『ハーレムの男主人公に嫉妬』とか『リア充爆発しろ』とか『クリスマス中止』みたいな考えを無駄に毛嫌いしてまして…あー、そう考えるとあのバカ大丈夫かなぁ。何か逆に心配になってきた……」

その言葉に思わず絶句する六人を尻目に香織がナイフを入れているのは、『司法解剖ケーキ』なる、腹を切り開かれた霊長種を模したケーキである（オーダーすれば特注でどんな種族のものでも作ってくれる）。

メニュー開発担当が血液を表現しようと調子に乗って投入したイチゴソースの処理に戸惑う事で有名な品であり、見た目のインパクトや精密な作り込みから根強い人気を誇っていた（香織が食べているのはSサイズの男性型）。

―一方その頃、街道にて―

香織の予想は的中していた。

「ゥをイどらしたぁ!?闇夜の吸血蝙蝠（笑）ってのはその程度か!?

観光客の霊長種相手にヘバってちゃあ、地元民の面目丸潰れだなぁ!」

「黙りやがれこの三下がぁ!」

ゼンヲウの振り回すナイフを奇怪なステップで避けながら、繁は腹立たしい声と口調で罵り言葉を連発する。

その様は自惚れが強く自己陶酔の激しい性根の腐りきったリスザルが、人間を心底バカにしたように立ち回るが如くであり、海馬（トド）の詰まり『途轍もなく鬱陶しい』の一言であった。

更に驚くべき事に、ゼンヲウと向かい合って以降繁は能動的な攻撃を一切繰り出していない。

「てめえはっ!てめえは絶対に泣かすぅっ!そんで、そんで、その後思いっ切りぶっ殺してやるっ!」

「オォゥ!スッゲェや!流石地元民、威勢が良いねェ!最も威勢が良いだけなんだろうがなぁ!」

「黙れバカが!こっ、この、このドサンピンの糞童貞野郎がぁぁぁ!」

「地元民の癖に萌え豚みてぇな事言ってんじゃねえよ。

どうせテメェも毎晩喧嘩とオナニーぐれぇしか楽しみの無ぇアホなんだろ?」

「うがあああああっ!ぎぎぎあああああああっ!」

その言葉が図星だったのかどうかは定かでないが、兎にも角にも怒

り狂ったゼンヲウはガムシャラに言葉にならない叫び声を上げながら向かってくる。
しかし繁はさして身構えるでもなく、ポケットから何かの瓶を取り出し、そのフタを外して待ち伏せる。

そしてゼンヲウが繁の眼前へ来た所で繁は咄嗟に瓶を盛った腕を振り上げ、その中身―結晶体のような白い粉末―を、ゼンヲウの顔面目掛けてぶちまけた。

「っぐあああああああ！しょっぺえええええええええ！」

ゼンヲウは絶叫しながら目元を押さえのたうち回る。

「見たか！これが塩の力だ！」

そう言って繁はその辺で拾ってきた食塩の瓶（硝子製）をゼンヲウに投げつけ、未だ塩に苦しめられ続けるゼンヲウの胸倉を掴んで持ち上げると、間髪入れずにその顔面を壁面に叩き付けた。

「ぐぶげがっ！」

更に尚も容赦しない繁は追撃とばかりに仰向けで倒れ込んだゼンヲウの顔面を力強く踏み付ける。

「ぐぼがあっ！」

並みの霊長種ならば普通この辺りで死にそうなものだが、それでも尚生きているのが禽獣種の生命力である。
それを見越している繁は、警察が来たときの言い訳を考えながらゼンヲウの胸倉を掴んで無理矢理立たせると、何処から奪ってきたの

か携帯式のガスコンロ（強火）をその顔面に無理矢理押しつける。

「っぎゃあああああああああ！」

そのまま投げ倒されたゼンヲウは激痛の余り顔面を押さえて転げ回るが、尚も繁の攻撃は止まらない。
一種の興奮状態に陥った町民達はそれを一種のショーか何かのように楽しみ始め、挙げ句の果てには

「手を休めるんじゃないよ！そいつのライフはまだ半分も減っちゃいない！」

等と言い出す老婆が出始める始末である。
こういった町民の反応から、このゼンヲウという男がどれだけ嫌われていたのかが手に取るようにお判り頂けるかと思う。
声援もあって尚も攻撃を続けようとする繁は、ゼンヲウを押さえつけその口を無理矢理こじ開けると、大型の工業用ペンチを用いて彼が持つ一際大きな犬歯を引き抜いた。

「っがあああああああああああああ！」

口から大量の血を流して苦しむゼンヲウは、とうとうその場から逃げ出そうとする。
しかしそれを繁が見逃す筈もなく、肩を掴んで彼の身体を拘束すると、そのへんで拾ってきた謎のボトルに入っていた得体の知れない液体を無理矢理彼の口の中へ流し込む。
当然必死で抵抗するゼンヲウだが、得体の知れない液体はどんどん彼の体内に入り込んでいく。
そしてボトルが空になったところで、繁は彼の腹に強烈な膝蹴りを叩き込んだ。

「ぐぼぇあぁあああっ！けぼべあぇっ！」

腹を蹴られたゼンヲウは口から胃の内容物を大量に吐き出し地面に倒れ込む。

倒れ込んだ地元民を繁は尚も容赦せず、彼が身に付けている装飾品の類を次々と無理矢理引きちぎっていく。

その装飾品というのは当然彼の全身に装着されたピアス類も当然含まれており、結果としてゼンヲウは体中のあらゆる部位の皮や肉を引きちぎられてしまった。

最早『闇夜の吸血蝙蝠』という名前も形無しである。

ゼンヲウを散々痛めつけた繁はただ一言、

「あとは皆様にお任せします」

とだけ言い残し、従姉妹の携帯電話に連絡を入れながらその場を去った。

この後、ゼンヲウがどうなったのかは読者諸君のご想像にお任せする。

第八十二話　暴虐！ムシ男（後書き）

次回、遂に水着回！（の、予定）

第八十三話　これは水着回ですか？　X．はい、更新遅れてごめんなさい（前書

予告通りの水着回！（母親に外食誘われた所為で更新遅れたｏｒｚ）

第八十三話　これは水着回ですか？　X．はい、更新遅れてごめんなさい

―前回より―

繁と合流した一行は、ニコラの希望により海へ向かった。
希望者であるニコラの目的は『水着選びに参加しなかった繁に女四人の水着姿を見せつけてみる』というものだが、そう考えているのは当然彼女だけであった。

先ず香織だが、彼女の目的とは『少々変則的な海水浴』であった。
例えば一般的な２０代女性の海水浴というと、水泳・日光浴・ビーチバレー等が主な行動なのではないか。
しかし香織の行動はほぼ水泳―というよりも、アクサノの美しい海に潜る事と決まっていた。
目当ては海棲のあらゆる生物群の他、美しい海の風景そのものや海底に潜む古代の遺物などであり、特に古代の遺物は中学時代より歴史好きが転じて人類学・考古学に熱中した香織にとっては一種の浪漫でさえある。

次に桃李と羽辰。この二人の目的についてはもう説明するまでも無いであろうが、『アクサノの有毒海洋生物』である。
シーズン２で言及したとおり根っからの毒物マニアである桃李と、妹を守る内に彼女の影響を受けていた羽辰の二人は、あらゆる生物の内とりわけ何らかの毒を内包した種をこよなく愛する。
特に水圏、取り分け海という環境は元よりありとあらゆる動物種が存在しており、その中には有毒の種も数多く存在している。
地球より環境や生物種の多様化が激しいカタル・ティゾルともなれば、例え二人程のマニアでなくともどんな動物が居るのか気になる方は居られるのではないか。

続くリューラとバシロの目的は、気性の激しい二人らしく『素潜り漁』である。

というのは繁が次の行き先を発表するより数日ほど前、テレビを見ていた二人は偶然にも六大陸全土で人気沸騰のバラエティ番組『驚愕！戦慄伝説』を目にする。

そしてその番組に出ていたヤムタ出身のお笑いタレントが海でモリを振り翳し、魚介や巨大蛸を捕らえる様を見た二人はその姿に感銘を受け、自分達でも同じような事が出来ないかと強く思っていたのである。

最後に繁の目的だが、何かと託けて変なことをしたがる彼にしては珍しく『海釣り』という至って普通のものであった。

繁自身、魚釣りは大学の実習で野山へフィールドワークに向かった際同級生から簡単なものを教わった程度であった。

しかしそれでも魚釣りというスポーツを少々魅力的に思っていた彼は、これを機に改めて真面目な海釣りに挑戦してみようと考えていたのである。

因みにガイドのラドラムは七名と定期的に連絡を取り合いながらそれぞれの場所へ適当に顔を出す事にしたらしい。

「そんじゃ今が11時だから15時集合とするか。そんぐれぇありゃ何とか行けるべ」

「そうだね。そうと決まれば早速お昼買いに行かなきゃ。海の家どっちだっけ？」

「確か北北西と南東に一件ずつあった筈ですが」

『北北西は甘味、南東は粉ものに定評があるようですね』

「じゃあとりあえず南東の方かな」

「バシロ、ちゃんとモリ持って来たよな？」

「勿論だぜ。序でに水中眼鏡と魚籠もこの通りだ！」
「おぉ、流石はバシロ。気が利くじゃねぇか」
「この程度の四次元沙汰も出来ねぇようじゃあ黒物体の名が泣くってモンよ！」
「よっしゃ、そんじゃ１５時までにはここへ戻ってくるように。解散」

適当に予定を語らいあった一行がそれぞれの目的地へ向かおうかという時。
ニコラとラドラムを除く六名の後頭部に、輪ゴム銃の弾が当たるような痛みが走った。

「痛(いて)っ」
「痛(あた)ッ」
「痛(つ)ッ」
『ｉｔｅ(イテ)ッ』
「うぎっ」
「救命阿ッ！」

一体何事かと後頭部さすりながら振り向く六人に、目の死にかかったニコラが言った。

「……みんなさぁ、空気読もうよ……。
空気っていうか……流れっていうか……こう、ラノベめいた雰囲気というかさぁ……」

その顔からは何時ものような無駄に有り余る生気が消え失せていた。

「何を言いたいのかさっぱりなんだが……」
「要するに女衆の着物について触れてやれって事じゃないかね。

若いもんの感性はさっぱりだけども」
「おぉ！そういやそうだったぜ！」
『ドクターに連れられて水着を買いに行っていた事をすっかり忘れていましたよ』
「え、何？話には聞いてたけどあの時お前らが買ったのって今着てるコレだったの？」
「うん、一応ね」
「ドクターがどうしてもと言うので仕方なく、ですが」
「まぁ料金はニコラ持ちだったし、結果的には良い買い物が出来たんじゃねぇかな。
で、どうだ？」
「どうだってか？そうさなぁ……」

繁は女衆の水着について冷静に分析してみた。
とは言っても、元々ファッションにあまり固執するわけでもない彼の分析など大したものではないが。

「（先ずは香織だが……）」
香織が身に付けているのは、俗に『チューブトップ』と呼ばれる肩紐を廃したデザインのトップ（上半身部位）にホットパンツ型のボトム（下半身部位）で構成されていた。
主軸の色は明るめのスカイブルーであり、深紅の長髪と対称的で映える他『青色薬剤師』という源氏名を体現していると言えた。
更によく見れば水着全体には呪文式―近代魔術理論で用いられる呪文の配列・構成を表す、魔術版化学式に相当するものが描かれている。

「成る程。肩出して放熱した上で、敢えて肩から下の露出を控える事で落ち着きと知性を演出したって訳か」
「いや、別にそこまで意識した訳じゃ無いんだけどね？」

「しかも色と絵柄のチョイスが神がかってんな。空色に黄緑で呪文式とは……」
「あー、呪文式は買った後に自分で入れた。魔術で」
「マジで？万能型だなお前……一家に一台欲しい従姉妹になりつつあんぞ…」
「そうかなぁ？」

「（で…次はニコラか……）」
ニコラが自分用に買い込んだのは白い『タンキニ』というデザインのものだったが、此方も医療関係者らしく麻酔薬の化学式やサイケなアレンジのされた内臓等が所々に描かれていた。

「何時も白衣に白パジャマだなと思ってたらまた白水着か。お前白好きだな」
「白は終焉と再起、そして医学を象徴する色だからね。本当は青緑とかクリーム色とかで悩んだんだけど」
「やっぱり白ってか？」
「うん。青緑はやっぱり柄じゃないし、クリーム色だと毛色と被るし」
「何時も思うが、汁物喰う時大丈夫か？」
「大丈夫よ、問題ないわ」

「（…お次は桃李だな……）」
桃李が着込んでいるのは紺色の『スクール水着的なもの』だったが、如何せん問題はその絵柄にあった。
言うまでもなく予想は付いていると思うが、彼女の水着には全体を通してあらゆる有毒生物が描かれていた。
その絵柄のラインナップは主にクサリヘビ、ゴケグモ、イモガイといった動物類からトリカブト、ドクウツギ、ウバタマといった植物類、更にはカラフルに染色された細菌類までもが前衛的なアレンジ

の元に描かれていた。
隣に佇む兄・羽辰もどういうわけか同じような競泳水着を着ていたが、此方は毒素の化学式が描かれていた（主にサリンやアルカロイド系）。

「徹底して毒か。もう何か此処まで来ると清々しいな」
「何処に何を配すべきかかなり迷いましたね」
『私も、毒素の化学式は全て暗記しているのですがどれも格好良くて……』
「OK、お前らが毒物好きなんだって改めて良く判った」

「（最後はリューラか……）」
リューラの水着はスタンダードな『ビキニ』であり、左半分が黒、右半分が銀の布地で構成されていた。
左右で色が違うのは恐らくバシロ寄生を配慮しての事であろうが、確かにこれは名案なのかもしれないなと、繁は思った。
下半身には深緑のパレオが巻かれており、半身が異形と化しているリューラの容姿と相俟ってどこかシュールな美しさを演出していた。

「案外ストレートだな」
「いやぁ、これでも結構苦労したんだぜ？何たって私の場合、シモのブツが最大の問題だったからなぁ」
「あー、そういやお前両性具有だったな」
「最初は俺がカバーするって手も考えたんだが、どうにも抵抗感があってな。
そこへ来て店に来てたカップルが勧めてくれたのが『ディノミスクス』っつーブツでよ。
こいつを穿くと無理無く股ん所のを隠せるんだと」
「あぁ、あるよなそういうの（わりかしガチのフタナリが居るこっちの方じゃなかなか需要あるんだな）」

かくして女衆の水着について語り合った一行は、それぞれの目的地へ向かった（ニコラ、ラドラムは一先ず香織に同行する模様）。

第八十三話　これは水着回ですか？　X．はい、更新遅れてごめんなさい（後書

次回、それぞれで海を満喫する一向に新たなる脅威！？

第八十四話　或いは現在進行形の萌えポルノ？（前書き）

それぞれで海を堪能するメンバーだったが……

第八十四話　或いは現在進行形の萌えポルノ？

―前回より―

「うし、来たッ！」

地表に露出した巨大な海棲爬虫類の頭骨化石（地球で言うリオプレウロドンに相当）の上に座り込んで海釣りに勤しんでいた繁は、現在三度目のアタリ到来につきリールを巻き取っていた。

「切れんなよ、切れんなよ……っし、釣れたッ！」

糸を引き上げ、魚をを逃がさない内に海水の入ったバケツへと移し早急に釣り針を取る。

繁が釣った三匹目の魚は地球で言うセミホウボウに似ていたが、全身を外骨格のように発達した鱗で覆われており、色はスズメバチを思わせる黄色と黒の縞模様だった。

「お、ハチホウボウじゃねぇか。確か煮付けが美味いんだったかな、あとでレシピを調べてみるか」

そうして繁は再び餌（八十二話で引きちぎったピアスにくっついていた肉片）をつけ直し、四匹目の獲物を求めて再び釣り糸を垂らす。

―同時刻・沖合の砂地―

観光客達が楽しむ中、少々沖合の砂地に潜む怪しい気配があった。

気配と表記したのはそれの姿が肉眼視出来ない為であり、現に周辺を泳いでいた魚の何匹かは不可視の壁に移動を阻まれていた。

ふと、砂地にて巨大な何かが現れ、またすぐに消えてしまった。

二秒後、先程現れた『何か』がはっきりと姿を現した。

砂地に貼り付くようにして身を潜めていたそれの姿は、サイケデリックな青色をした巨大な蛸に似ていた。

しかしよくよく冷静に見てみれば、若干ヒトに似た手足が幾つか見える。

この青い蛸のような化け物の名はシリク・カイメ、海神教幹部の蛸系軟体種である。

「（時は来た……今こそ我が長年の夢を叶える時……）」

海底で決意を固めたシリクは再び姿を消し、海面へと向かい始めた。

―浜辺―

『いやはや、期待以上の収穫ですねぇ』

「全くですよ、兄さん。まさか半ば伝説的レアリティを誇るシャレコウベマンジュウガニが居ようとは……」

『流石アクサノと言った所でしょうねぇ』

「えぇ、この勢いならロイクコラハリエビの貴重な子育ての様子を撮影出来るかもしれません」

『ロイクコラハリエビと言えば、ミガサコルトヒメベラとの共生も見てみたいですねぇ』

ロイクコラハリエビの名前にあるロイクコラとはミガサ・コルトの臣下とされる女性妖怪であり、転移の異能を持つ事で知られる。
忠誠心が強く、また公正で優秀なな法の守護者でもある為主に司法関係者から信仰されている。
一方で主に異常な性欲を抱くマゾヒストの同性愛者としても有名であり、原典ではコミカルな役回りも多い。
ミガサ・コルトの伴侶はトゥマージョーではなく彼女だとする説もあり、そのユーモラスな性格もあり、妖怪の中ではトップクラスの人気を誇っていた。

「それにしても平和ですねぇ。海神教や謎の生物が居るなんて信じられませんよ」
『同感です……が、どうやらそうとも言っていられないようですねぇ…』

羽辰の視線が浜辺で戯れる若い女学生五人に映った瞬間、異変は起こった。

五人の内、若干幼く見える一人―黒の長いツインテールを棚引かせた少女が、突如不可視の何かによって足を掴まれ、逆さ吊りにされてしまったのである。
少しして少女を持ち上げた何かがその姿を現した。
それは木の根のように太い蛸の触手であり、その色は人工物と見まごう程にどぎつい青色だった。
当の少女自身は勿論、仲間と思しき四人や周囲の観光客までもが、その異様な光景にパニック状態に陥り逃げ惑う。

しかし触手はそれらの中から若い女性―特に細身のティーンエイジャーばかりを捕らえていく。
その触手の数は確認可能なだけでも２０本を超えており、それらが

捕らえられた少女達の手足を的確に拘束。少女達の水着を引きはがしに掛かっている。

『海で蛸の化け物が水着少女拘束……これがラノベ的雰囲気だと言うのかっ！？』

「落ち着いて下さい、兄さん。幸いにもあの蛸の変態製は筋金入りのようです」

『どういう事です？』

「水着にかかっている触手の動きを見て下さい。明らかにゆっくりでしょう？

恐らくあれはただ水着を引きはがし裸体をなで回すだけでなく、恐怖や不快感に怯える少女の表情や自らが優位に立っている状況を楽しんでいるんですよ」

『成る程。小型のハクジラ（イルカ）が死にかけのコウイカを捕らえてもそのまま食べず、暫く鼻先でどつき回してから食べるのと同じですね』

「えぇ。あの頭足類の面汚し、恐らく嫌いなもの、どうでもいいものから先に食べるタイプですよ」

『ですねぇ。……さて、それはそうとしてあの蛸…どうしましょうか……』

「携帯電話で増援を呼ぶにしても時間がかかりますし、ここは我々だけで奴を始末して見ませんか？」

『おぉ、それは名案ですね』

「では早速……今日は少し変則的に言ってみましょうか」

そう言って桃李は左腕と右脚を覆う人口皮膚を取り払い、内部に仕込まれた義手と義足を露わにする。

特殊な金属で出来たそれは状況に合わせて質量を逸した変形をこなし、武器から調理器具、更には通信機器としても機能する優れものであった。

「近頃はコックローチに頼り切りでこれを本格的に使うのは久々ですが……救助作業なら此方の方が好都合であるのも確かですし。ひとまずはあの少女達を助けましょう。兄さん、目分量で見て大体何人まで抱えられます？無論、浮遊状態での話です」

『そうですねぇ……いつもの調子で飛ぶとなると、大体二人が限度でしょうか』

「二人ですか…成る程、ではその案で行きましょう！」

かくして桃李と羽辰は、それぞれ別方向から凄まじい速度で青い蛸―基、自称海神教幹部シリク・カイメへと向かっていった。

第八十四話　或いは現在進行形の萌えポルノ？（後書き）

次回、蛸ＶＳゴキブリ＆ａｍｐ；幽霊モドキ！

第八十五話　変態蛸はメタ発言で死んでいく（前書き）

何かメタ発言と下ネタが多いような気がするが……あんな敵じゃ仕方ないか。

第八十五話　変態蛸はメタ発言で死んでいく

―前回より―

桃李と羽辰による奇襲攻撃にシリクは為す術も無く、触手に囚われていた少女達は次々と解放されていった。
触手など幾ら切られても瞬時に再生するからと高を括っていたシリクだったが、流石に獲物の少女を全員奪われたとあっては黙っていられない。

「貴様等ァ！黙って見ておれば我の邪魔立てとはどういう事だァ！」

海面下から巨大蛸そのものである頭を出して怒鳴るシリク。

「そもそも貴様等、我を誰と心得る！？恐れ多くも海神教が幹部格、蛸系軟体種のシリク・カイメだぞ！
貴様等のような観光客の若造如き、我が視界に入ることさえも万死に値するというのに、ましてやその上を裸足で駆け回り我が手足を切り落とすなど許されると思っているのか！？」
「いやぁ、正直なところあんたが誰かとかどうでもいいんですよ。どうせ初登場の次で死ぬようなキャラなんですし、ろくすっぽ名前覚えなくたって別に良いでしょ」
「何だと！？海神教幹部であるこのシリク・カイメが使い捨ての雑魚だと！？貴様、観光客だからといって何をしても許されると思うなよ！」
『逆に海神教幹部が強制猥褻とかふざけるなと思うんですがね、此方としては』
「ッハ！バカも休み休み言えい！我等が海神教はアクサノの頂点に立つ勢力！

そしてその幹部ともなれば、平民を玩具にする程度の事が何の罪になろうか！寧ろ玩具共はそれを喜び誇るべきであろうがァッ！」

そう叫ぶと共に、シリクは無数の触手を打ち振るうも、桃李と羽辰はその打撃を難なく回避すると同時に機関銃を掃射する（桃李は左腕が変形、羽辰は謎の技術で隠し持っていた）。

銃弾は振り回される触手を切断し皮膚を突き破り肉を刺し貫くがしかし、蛸の細胞が持つ強靭な再生能力の元にそれらが意味を成そう筈もない。

「ぬぅはははははははっ、愚か者めぇ！我は水圏の知将、深海の魔物として恐れられし蛸族！
斯様な銃弾如き、痛みも痒みも感じぬわぁっ！」

自信に満ち溢れた叫びを上げながら、シリクの猛攻は尚も続く。
その触手は尋常でない長さまで伸び、まるで弾道を意のままに曲げる拳銃の弾丸が如し勢いであった。

「やはり銃弾では生温いようですね……」
『仕方有りません、この分だと物理的な攻撃は例え焼夷弾でも榴弾砲でも無反動砲でも無力化されてしまうでしょう……』
「眉間を狙うというのは？」
『早急に感付かれて失敗に終わるでしょう。それに感付いて奴が海中に潜りでもしたらそれこそ手も足も出ません』
「かと言って安易に破殻化すれば余計な敵を招きかねませんし……ここは一つ、煮てやる展開で――「私語の暇さえ与えんぞッ！」――！？」

適度に触手を避けながら兄と作戦を練っていた桃李の顔面と首に、シリクの太く平たい触手が巻き付いた。

『桃李っ！』
「甘いわァ！」
捕らえられた妹を救おうと走り出す羽辰目掛けて、触手の束が振るわれる。

『霊体浸と――ぐぉぁっ！』
体を生物から霊体に近付けて触手を通り抜けようとした羽辰だが、双子故の中途半端な神経のシンクロによる息苦しさでタイミングを逃した羽辰はそのまま薙ぎ払われてしまった。

「我の眼前に我以外の男は要らぬ！暫しそこで伸びておれィ！」
そういってシリクは桃李の四肢を縛り上げ、顔面と首から触手をほどく。
「よく見れば貴様も中々の上玉ではないか……どれ、我が直々に遊んでやろう」
その余りの恐怖からなのか、真相は定かでないが桃李の顔から余裕が失せ、更に左脚からシリクの胴体にかけて何らかの透明な液体が伝っている。
「おぉ！何と言うことだ！大いなる海神スィチンが我に聖水までも与えたもうたとは！
これは敬意を以て扱わねば罰が当たるというものだ！…さぁて、どこから剥がそうか――」

シリクの触手が桃李の胴体に伸びた瞬間、桃李の左脚を掴んでいた触手から彼の胴体にかけての大部分が大々的に燃え上がった。

「――っがあああああああああああああああっ！な、何だこれはぁっ！？一体どういう事だ！？
何故我の身体から炎が！？火の気もないはずの我の身体が、何故こ

んなにも熱いのだぁあああああああ！？」

パニックに陥ったシリクは思わず桃李を投げ捨て急いで水中に潜っていった。

一方投げられた方の桃李は砂浜に着地しながら兄に呼びかける。

「兄さん、今です！」

『心得ました！』

薙ぎ払われ浜辺に倒れていた羽辰は瞬時に起き上がり、シリクが戻っていった方角目掛けて右手首から全体が青い分銅を放つ。

分銅は羽辰の意のままにトリッキーな軌道を描いて飛んでいき、海中深くに入ったとしてもその勢いは止まらず、鎖も無限に伸び続ける。

生物と霊体の中間であるが故に存在が曖昧な羽辰は、それを利用して体内に異空間を発生させある程度の荷物を収容出来るのである（但し容量は同じような真似の出来るバシロに遠く及ばないが）。

―同時刻・海中―

「（どういう事なのだ……我の肌から火の気など……！

ええい、今に見ておれ若造めが！状況を立て直し次第我が秘策を――ッ！？）」

海中深くへ潜ろうとしていたシリクだったが、羽辰の分銅によって縛り上げられ動作を拘束されてしまう。

「（な、何だこれはっ！金属の鎖か！？ええい、こんなものが何だ！我が怪力で引きちぎってみせ―ぐぉぉぉぉ！し、絞まっただとぉぉ

おぉ！？）」

必死に抵抗するシリクだったが、幾ら抜け出そうとしても分銅の鎖はどんどん絞まっていく。
そして逃げ出してから数秒もしない内に、シリクは羽辰の手で浜辺へ釣り上げられてしまった。

―浜辺―

「ぐぬおあああああああああああああ！この…このカイメが、こんなアホ面の観光客共如きの手でぇぇぇぇ！
何故だぁ…何故なのだぁあああああああああああああ！」
『何故と言われても……』
「死亡フラグの塊であるとしか……言えませんね」
「何ぃ！？我が、我が死亡フラグの塊だとぉ！？そんな馬鹿げた話があるかぁっ！
南国と言えば海！海と言えば水着回！水着回と言えばエロエロの触手プレイと相場が決まって居ろうに！
それがライトノベルの鉄則であろうに！
それが何故死亡フラグだと――っぎゃあああああ！」

その瞬間、シリクの触手が突如何かによって切り落とされた。
しかもその本数たるや一本や二本という生温いものではなく、ゆうに１０本は超えている。

「ですから…それが死亡フラグだと何で気付かないんです？」

心底馬鹿にしたような口調で語りかける桃李の手元には、全体が赤い小振りな鎌が握られていた。

「っぐあああああああ!?わ、我の触手があああああああ!?」

「ああもう、あんた絶対話聞いてないでしょう?仕方ないですねぇ」

そう言って桃李が赤い鎌を振り落とすと、再び一瞬で十本以上の触手が切り落とされて吹き飛んだ。

しかも奇妙なことに、本来ならば直ぐさま再生するはずの触手が、全くその気配を見せていない。

「な、な、な、なななななっ、何故だ!?何故我の触手が再生しないっ!?

どういう事だ!?き、貴様等……貴様等一体何者だあああああああ!?」

半ば自棄になって泣き叫ぶシリクに、兄妹はあっさりと言い放った。

「ふむ……何者と言われましても……」

『そうですねぇ…強いて言うならば…』

「『通りすがりのラジオDJですよ」』

「ラ……ラジオDJだあああああああああ!?

そ、そんな馬鹿な話がぁっ――「『あるんです!」』――あったあああああ――」

状況が全く飲み込めないまま絶叫するシリクの眉間へと、二人はその辺で拾ってきた錆びた鉄パイプをあえてゆっくりと突き刺した。

苦痛の余り言葉ですらない叫び声を上げて絶叫するシリクだったが、暫くして唐突に動かなくなり、そのまま絶命した。

凄まじい生命力と文武両道の身体能力を誇る蛸であるが、当然ながら脳を破壊されれば一溜まりもなく絶命する。
それは異世界カタル・ティゾルに住まう、蛸の形質を持った知的生物であっても変わりない事実であった。

ちなみに蛸など頭足類はその名の通り、頭を起点として両端から足と胴体が生えているという奇妙な構造をしている。
即ちしばしば頭部と誤認されがちな袋状の部分は胴体であり、実際の頭部は足の根本に存在する目や口や漏斗の集合した部分である。

かくしてアクサノの海水浴場にて起こった強制猥褻事件を実に平和的な手法で解決に導いた二人は、その後も熱帯の海に棲む有毒生物についての観察と記録を進めていった。

第八十五話　変態蛸はメタ発言で死んでいく（後書き）

次回、遂に繁達が事件解決へ向けて動き出す！

第八十六話　変死体上等。（前書き）

翌日、死体安置所を訪れた繁と香織がそこで目にした惨状とは？

第八十六話　変死体上等。

―前回より―

あの後海水浴を終えた一行は、ラドラムの案内で尚もアクサノ観光を堪能し、ホテルへと戻っていった。
そしてその翌日、繁と香織は処女怪死事件について探るため供米の案内で街の死体安置所へ向かった。

「此方が立死体安置所になります。特別な手続きなどは前もって済ませてあります故、どうぞ気兼ねなくお入り下さい」
「死体安置所に気兼ねなくというのも何処か変な話ですが、では御言葉に甘えて」

三人は重厚な金属製の自動ドアをくぐり、無機質なタイル張りの床を進んでいく。
さほど賑わう事の無い施設であるためか職員は少なく、受付の奥に毛のない猪のような禽獣種が二人座っているだけだった。

「失礼する」
供米が受付に呼びかけると、毛のない猪のような禽獣種の二人が慌てて駆け寄ってきた。
体格と服装から見て３０代を過ぎた男女であろうが、男の方は口の辺りから二本の角か牙らしきものが突き出ており、何とも異質な顔立ちだった。
「これはこれは供米神官、ようこそお出でくださいました」
「本日はどのようなご用件で御座いましょう？」
「件の方々をお連れしたのだ。死体保管庫へ案内して欲しい」
「件の方々？では、こちらのお二人が？」

「そうだ。
紹介しよう、ノモシアより来て下さったバグテイル殿と青色薬剤師殿だ」
「初めまして、ツジラ・バグテイルと申します。
本日はどうぞ宜しくお願い足します」
「相方の青色薬剤師です。本日は態々お時間を頂き有り難う御座います」
「いえいえ此方こそ初めまして。私、バビルサ系禽獣種のヘンリーと申します。
長年夫婦で市内会を取り仕切りながら、この死体安置所の運営と管理を行っております」
「妻のエマで御座います」

バビルサ夫妻に案内され、二人は常にマイナス１５度で保たれた死体保管庫へと入っていった。

「こちらが最初に発見された遺体となります」

そう言ってヘンリーは棺桶を取り出し、台車でテーブルまで運んだ。
金属とガラスで作られた棺桶の中に納められた死体を見た二人は、一瞬己の目を疑った。

「これ……一体どういう事なの…？」
「成る程、確かにこいつは狂気の沙汰だ…」

二人の目の前にあった死体は、一見ごく普通の食肉目系禽獣種の若い女性でこそあった。
その死に顔は苦痛に歪みながらも、何とか原型を留めてはいた。
しかし彼女の腹部はまるで中身の詰まった水風船のように脹れ上が

っており、腹の皮が張っているというより、外部から巨大な肉の袋が接着されているかのようだった。

「市長からの指示で検死にはかけていませんが、スキャンにかけたところ内部には何らかの液体と思しきものが…」

「何らかの…水や胃液などとは違うものですか？」

「恐らく違うものでしょうな。何より詰まっていたのが子宮である時点で何かがおかしい」

「子宮？」

「はい。膨張しすぎた子宮は他の臓器をも圧迫していたようでしてね。

一体何をどうすればここまで子宮が膨らむのか……」

「相変わらず狙ったように魔術的な形跡もありませんし…ますます不自然ですね」

「ひとまず、他の死体も見せていただけませんか？情報が多ければ何かに気づけるやもしれません」

「かしこまりました。少々お待ちください」

その後ヘンリーとエマが運んできた棺桶に収まっていた死体は、何れもヒトの体を逸した異変が目立っていた。

例えばある者は両の乳房がこれまた異常に膨れ上がっていたり、肛門・膣・乳首等が本来有り得ない直径に拡張されていたり、異常に巨大な男性器や睾丸が股間ばかりか乳房の先端部に存在するものなど、そのどれもが普通ならばこのような状況に陥る前に肉体が破壊されているとしか考えられず、まともに原型を保っている事自体が奇跡あるいは狂気としか思えないようなものばかりであった。

「見れば見るほど不自然でおぞましい……恐らく第三者の介入で後天的に成されたものだろうが、それにしても何所の技術でこんな事を……」

「それ以前に、ここまでの事をする理由が分かんないわ……」
「何にせよこのままでは分からない事が多すぎる。ご夫妻、至急これらの死体を検死にかけてください。
出来れば近隣在住の学術者が好ましいですが、場合によってはラビーレマから人員を呼び寄せてもかまいません。
但し、この事はくれぐれも内密に……」
「かしこまりました」
「至急、人員を手配しますわ」
「次に供米神官」
「何で御座いましょう？」
「被害者達の情報―とりわけ種族や血液型、病歴、食べ物の好き嫌いなどについて重点的に調べていただけますか？」
「御意。至急役所と医療機関に連絡を入れましょう」
「それと香織よ」
「何？」
「この被害者、本当に外因的な魔術行使の痕跡は見られないのか？」
「あー、そりゃ医療とか攻撃とか自己暗示とか一般的なタイプの普通にあったけど、どれも体がこんな風になった事の理由付けにはならないねぇ」
「そうか……さて、となるとあとは……供米神官、もう一つよろしいですか？」
「はい。何なりとお申し付けください」
携帯電話で連絡を入れ終わった供米に、繁は言った。
「ではお聞きしますが、近頃目撃情報が相次いでいるという謎の生命体の死体や、それらに関する情報はどこに保管されているのでしょうか？」
繁の問に、少しばかり考え込んだ供米はこう答えた。
「保管場所へは、私が直々にご案内致しましょう。あれは特に外部

への漏洩を控えるため、極秘の場所に保管させてあるのです」

そう言って供米は二人を白い普通乗用自動車に乗せた。
車の運転席・助手席と後部座席の間には仕切り板があり、後部座席の窓にもスモークフィルムが張られている。
どうやら供米は、それほどまでに死体の保管場所を秘密にしたいらしかった。

「別にお二人を疑っているわけではないのです。しかし如何なる者にも、知られたくない事の一つや二つはあるものでしてな」

かくして二人を乗せた車は、謎の生物の死体・情報が保管されているという場所に向けて走り出した。

第八十六話　変死体上等。（後書き）

次回、極秘の保管場所で二人を待つものとは！？

第八十七話　アンノウンズは語らない（前書き）

いざ、地下施設へ！

第八十七話　アンノウンズは語らない

―前回より―

「此方です」

約一時間程乗用車に揺られた二人は、全面がコンクリートで固められた広大な薄暗い駐車場に降り立った。

「アクサノにこんな場所があったとは驚いた」

「ヌグさんのヘリから見たときは本当に森ばっかりで、こんな風な建物なんて無かったのに……」

「それはそうですよ。何せこの施設、地下に作ってありますからな」

「地下……ですか？」

「えぇ。危険性が高い分野についての研究や実験を行ったり、極力漏洩を控えるべき機密情報の保管を目的としてムチャリンダ市長のご両親が創られたものを、我々セルヴァグル地方公共団体が全体で管理しておるのです」

「成る程……しかしながら、それほどまでに重要な施設へ我々のような者を案内して宜しいので？」

「構いません。ここまでの道順は教えておりませんし、並大抵の技術では探れぬようになっております。通信機や念話、記録装置の類も使わせず、出入り口も限定。フィクション作品などではこういった鉄壁防備ほど破られそうなものですが、その時には何をしてでも情報漏洩を防ぎます」

「凄まじい覚悟ですな。私など足下にも及ばないほどの」

「こうでもしなければ、宗教者などはやっておれませんのでな」

「安易に逃げ出すようじゃ本気で神に仕えてなんて居られない…と。参考になります」

等と適当に話しながら歩いていた三人はそのまま複雑に入り組んだコンクリートの迷路を進んでいき、やがて白い扉の前へと辿り着いた。

「少々お待ちを」

供米は懐からテレビのリモコンに似た小型の機械を取り出し、扉に向けて素早くキーを入力。リモコンらしき機械を再び懐に納めた。するとそれから約十数秒後、ゆっくりとした動作で扉が開いていく。内部にはこれまた簡素な白黒灰色の空間が広がっており、部屋の中央には巨大な白い円卓が置いてある。その椅子まで、まるで磁器か石灰石の柱であるかのように純白だった。

「どうぞお入り下さい」

供米に導かれるまま、二人は恐る恐る中へと入っていった。中で供米が椅子に腰掛けたので、二人もそれに倣って腰掛ける。

「もう暫くお待ち下され。いずれ部屋の主が……っと、噂をすれば何とやらですな」

見れば、部屋の奥から一人の若い女が歩いてくる。見たところはスカイブルーのサイドポニーを棚引かせた２０代ほどの霊長種だが、何処か不気味で毒々しい雰囲気を放っていた。

「随分と早いな、逆夜」

「今日は妙に調子が良くてね。それはそうと供米のおっさん、そっちの二人は？」

「あぁ、お前の管理しているブツを見たいというのでお招きした。かのラジオで司会を為さっているお二人だ」
「ラジオ……あぁ、あのラジオ？へへぇ、そりゃ凄い。初めまして、あたしは逆夜テトロ。師匠の関係で地方公共団体からここの管理を任されてるモンさ」
「こちらこそ初めまして。ＤＪ兼脚本のバグテイルだ」
「私はその相方で広報担当の青色薬剤師。宜しく」
「ほお、アンタ等が噂に聞くヴァーミンの有資格者に、古式特級魔術の使い手かい。
益々凄いねぇ。それで、例のブツって言うと……」
「二週間前から出始めている謎の生物に関する目撃情報や正体不明の死骸のことだ。
確かお前の所に回していた筈だが」
「あぁ、あれか。あの見るからに意味不明な奴ね。
ちょっと待ってよ……確かこの辺りに……っと、あった」

テトロが円卓の裏に備わったレバーを手前に引っ張ると、円卓の一部が機械的に開き、中から本棚や硝子瓶が現れた。
テトロは瓶と冊子を手に取り、繁と香織に手渡しながら言う。

「これが最初に見付かった死骸。発見場所とかの詳細な情報はこっちに書いてあるから、それ参考にして」

太く背の低い硝子瓶の中に入っていたのは、薬液漬けの標本にされたヒザラガイと思しき生物の標本であった。
しかし裏面にはエビのような節足が無数と小腸の柔毛を拡大したような動物質の突起物がブラシの毛のよに生え揃っている。

「これは確かに不可解だ……遺伝子合成なんてまだ初歩の初歩だというのに……」

「魔術でもこんなの見たこと無い……魔力で一から構築された細胞でも無いし、こんな歪な融合なんてしたら形を成す前にドロドロに溶けて崩れてしまう…」

「しかも問題なのはこの資料だ。推定が確かなら、こいつは少なくとも生後三日は生きていた事になる……そうだな？」

「あぁ、ほぼ間違いないねぇ。こいつは元からこの姿で産まれて、寿命とか気温とか、そういうのが原因で死んだんだろうよ。その証拠にこいつの腹を裂いたら中から消化途中の地衣類っぽいのが出てきてね。つまりこいつは普通の生き物と同じものを食べるって事さ」

それから後も二人は様々な生物の死体の標本を目の当たりにしたのだが、何れも不自然で異様な合成生物ばかりであり、その謎を解くには至らなかった。

そして全ての標本とそれに関する資料を見終わった頃、テトロは二人に切り出した。

「どう、気に入ってくれたかい？機密情報ってのも中々乙なもんだろう？」

そう言ってテトロは何処かへ立ち去っていった。何か用事でも思い出したのだろうか。

「……乙…というのか？これは…」

「判らない……ただ、何て言うのかな……こう、最後に見付かった奴に似たのを昔何かで見たような……」

「最後……あの赤と青の宝石みたいな目玉が二つついたイモムシみたいな奴か？」

「そう……何だっけ……確か知り合いの画家で坂原って人が居たん

だけど、覚えてる?」
「覚えてるも何も、俺らよくあの人が嫁さんと経営してる喫茶店で飯食ってたじゃねぇか。
で、その坂原さんがどうしたって?」
「いやさ、坂原さんが描いてた絵に、あれとよく似た奴が居たんだよ。その時は繁、部活の集まりに行ってて居なかったんだけど」
「何?」
「はっきりとは覚えてない。でも確かに、赤と青の宝石みたいな目玉二つがついた白いイモムシみたいな奴だった」
「マジかよ……」
「それで気になって、坂原さんに『こいつ何者ですか?』って聞いたら」
「聞いたら、何だって?」
「あんまりよく覚えてないんだけど、インターネットの知り合いが書いたクトゥルフ神話小説に出てきた邪神の子供なんだって」
「邪神?」
「そう。名前は忘れたけど、若い地球人の処女を襲って子供産ませるっていう奴らしいの」
「おいおい、そりゃもう完全に触手もんのエロゲーが如し設定じゃねえか」
「しかも処女厨とかどうかしてるよね。うん、私もそう思ったんだけど聞けばその人『安っぽい内容を何処まで崇高に出来るか』っていう実験の途中だったみたいで」
「そうかよ、そりゃ御苦労なこって」
「……でも変だよね、今回の事件でも若い処女ばっかり死んでるんだもん」
「あぁ。その上うろ覚えだが、死体安置所で見た被害者に残ってた傷、もしかしてコイツ等の仕業なんじゃねえかとも思えてきた。あくまで仮説ですらない妄想の域だがな?そもそも腹突き破るとか腹膨らますとかは兎も角、体組織改造系の傷跡の説明にはなんねぇ

し」
「だね……この件はもうちょっと私達で調べてみた方が良さそうかも。
被害者の身辺については供米神官の部下とか、ニコラさん達も探ってくれてるし」
「ああ…この先に何が待ってるのか想像すっと、不思議とワクワクしてくるってモンだぜ」

そう言って繁は、別件の為部屋を去った供米が手渡してくれた呼出スイッチを手に取った。
通信機器や念話の類が使用できないこの施設内に於いて、呼出スイッチは重要な連絡手段となりうるのである。

「んじゃ、そろそろ帰っか」
「そうだね。長居しても悪いだろうし」

繁が呼出スイッチを押そうとした、その時。

「ちょぉぉぉっと待ったぁあああ！」

テトロが大声で二人を呼び止めた。
何事かと思って振り返れば、彼女は古びた段ボール箱を抱えて大慌てで此方へ駆け寄ってきた。

「どうしたの、逆夜さん？」
「何かあったのか？」
「――いきなり大声出して悪いね。実は二人が話してる最中、二年前に蒸発しちゃってそれ以来行方不明だったうちの師匠―つまり、本来ここを仕切ってたボスの部屋を整理してたんだよ。
そしたらその部屋の中でこれを見付けてね。研究ノートなんて題名

なもんだからいつものと勘違いしちゃったんだけど、中を開いてびっくりしちゃったよ」

そう言ってテトロは、最も古い研究ノートの表紙を開いた。
そこに書いてあった内容を暫く読み進めていた二人は、驚愕する。

「これは、まさか！」
「そんな馬鹿な……」

ノートのあるページに貼り付けられていたのは、専門的な研究施設で撮影されたものと思しき写真であった。
研究者や学生のノートに写真が貼り付けられている事は別段珍しいことではなく、問題はその被写体にあった。

手術台と思しき場所に乗せられていたのは、正体不明の生命体であった。
全長数十センチ程であろうその生物は、白く柔らかな体のイモムシであったが、普通のイモムシとは明らかに違う所があった。

そのイモムシの頭部には、水晶体で構成された目玉があったのである。しかも左右で色が違い、それぞれ赤と青であるそれらは宝石のように美しく透き通っていた。

第八十七話　アンノウンズは語らない（後書き）

テトロの恩師とは一体何者なのか！？そして写真に写っていたかの生物の正体とは！？

第八十八話　蒸発恩師の研究記録（前書き）

また冒頭からノートの内容が延々続くと思った？残念！冒頭は謎の二匹がただ近況話してるだけでした！

第八十八話　蒸発恩師の研究記録

―前回より・同時刻・廃洋館内部―

【首尾はどうだ？問題ないか？】

【あぁ、先日近隣の稚児共を追い払って以降侵入者は近付いていない】

【成る程、それを聞いて安心した。だが近頃は妙な連中が増えていると聞くし、警備を固めておいた方が良いかも知れんな】

【全くだ。ノモシアでは貴族の奴隷が反逆し塩酸を浴びせて逃げ出したと言うし、クブス派の残党が復活したとか、イスキュロンの士官学校を化け物が乗っ取っていたとも聞く。

だが特に気を付けねばならないのはあのツジラという男だ。奴は油断ならん。

言うなればふざけた若造の皮を被った物の怪だ】

薄暗い中、不気味な声を発する謎めいた二匹の生物が喋っていた。

二匹の姿は全く似通って居らず、一見すれば全く別の生物としか思えなかった。

話題を切り出した方は褐色の甲殻に太い手足を持っていたが、右脚が右股関節から、左脚が左肩から生えているという独特な骨格の持ち主だった。

もう一方はゼリー状の皮膚を持つ緑色の肥満体が如し外観であり、一見愚鈍そうな外見ながら知的であるようだった。

【ツジラ・バグテイル……第八のヴァーミン、アサシンバグを持つとされる男か】

【そうだ。ジュルノブル城の城主一家を衛兵や宮廷魔術師諸共血祭りに上げ、先に述べたクブスの残党や士官学校を乗っ取っていた化

け物をその愛人共諸共皆殺しにしたという、恐るべき集団の長だ。
更に質の悪いことに、奴は今現在ここアクサノに居るそうだ。諜報部からの知らせでは、我々を探りに来ているという】
【何だと!?それは本当か!?】
【あぁ、本当だ。どうやら市長か林霊教の神官が呼び付けたらしい】
【何と言うことだ!これは一大事だ!我々は確かに一騎当千の力を持つ軍勢でこそあるがしかし、ヴァーミンや古式特級魔術の前には一溜まりもないではないか!
ああ、星界の君よ!我等はここで死に絶えてしまうのでしょうか!?】
【おい、慌てるな。落ち着かんか。まだ我々が滅ぶと決まったわけではないだろう】
【これが慌てずに居られようか!ツジラ一味は相手を選ばず滅ぼし尽くす残虐非道な魔の眷属!
武の利も地の利も数の利も、全てを知略で見事に覆し、時には大国一つをも一晩で荒れ地に買えてしまう程におぞましき者共ではないか!】
【確かにそれは真実だが、お前のそれはあまりにも気が早すぎる。未来を必要以上に案ずる暇があるのなら、現時点に於ける最善策を思案すべきだ】
【では何をしろと言うのだ?】
【一先ずは待つのだ。諜報部からの連絡を待ち、確固たる情報が集まり次第動く。
これで問題あるまい】
【確かにそうではあるがな……何より母上様が心配でならん。奴らは敵とあらば女子供老人とて容赦なく殺害すると言うからな……】
【あぁ。未来を案じ計画を練ることと、無闇矢鱈に何でも悲観視することはウイルスと細菌程にも似て非なる事だ】
等という会話を繰り広げながら、二匹は闇に消えていった。

―同時刻・地下施設内部―

「…どういう事……？何故でこいつが学者の研究ノートなんかに……」

「わからん……だが何にせよ、こいつが並大抵の代物じゃねえって事は確かなようだな」

研究ノートの冒頭に書かれていたのは普段通りの研究データや執筆者自身の日記等何気ないものであったが、その内容は約１０ページ目から急変する。

―以下、研究ノート本文より―

９／４　天候：曇

今日の午後だったか、妙なニュースが舞い込んで来やがった。

何でもカタル・ティゾルの両極で観測隊がそれぞれ正体不明のブツを見付けたとかで、北極にあったのは馬鹿でかい隕石、南極にあったのはこれまたどでかい金属塊だそうだ。

隕石ってのは俺にとっちゃさほど珍しいもんでもねぇ。

問題は金属塊の方で、専門家に言わせると人工物―それも大規模な金型鋳造で創られた鋳物だろうという話だった。

俺は驚いた。だってそうだろう？そりゃ南極にだって先住民くらいは居るが、そいつらに金属加工の技術や文化は無い。刃物や建材は骨や氷が主で、偶に石を使うことがあるくらいだという。

そもそも南極の陸地は分厚い氷に覆われてるから並大抵の魔術でも地殻まで掘り進める事は至難の業で、何より南極の先住民には魔術どころか火というもん自体が伝わっていなかったとも聞く（元々寒さに強い体つきだったり、無菌状態だったりという理由もあって火起こしをする必要性が無かったらしい）。

まぁ今そんな事を考えたって仕方無ぇけどな。
さて、これからどうなるんだろうなぁ。

９／２２　天候：晴

＊＊前略＊＊

そんな訳で色々あったが、大陸議会の意向で隕石と金属塊はそれぞれ別々の研究機関が預かることになった。
審議の結果、隕石はアクサノ、金属塊はラビーレマを代表してうちが預かって研究することになった。
俺は生憎機械の事なんて判らないから研究には参加しなかったが、研究に参加する奴の中には仲の良い奴も居るから、そいつから話くらいは聞こうと思う。

１０／３　天候：雨

上から呼出を喰らった。何でも例の金属塊研究のチームに入れという事らしい。
理由を聞くと、金属塊の中は空洞だったらしく、その中から何かの生物らしきミイラが出てきたんだそうだ。
内部は複雑な機械のように入り組んでいて、そっちの研究は引き続き工学系のメンバーが続けるから、俺にはそのミイラの研究をして欲しいんだと。
出所不明のミイラだとよ。偶然とはいえまさかこんなブツを研究出来るとは、研究者冥利に尽きるって奴だと思ったね。

１０／５　天候：快晴

早速ミイラを調べてみたが、どうもコイツは霊長種の雌に極めて似ているようだった。
腹を裂いて見てみると、内蔵や骨の形までそっくりだった。
そんで試しに同じチームの奴に頼んでＤＮＡを調べて貰ったんだが、霊長種どころかカタル・ティゾルのどの生物にも当て嵌まらない塩基配列だったという。
俺は益々楽しい気分になってきた所為か、逸る気持ちを抑え込むのに苦労した。今もまだ胸の高鳴りと気分の高揚が止まらない。

１０／７　天候：晴天

研究中、ふとミイラから砂のようなもんがこぼれ落ちた。
砂や塵とは雰囲気が違うそれを光学顕微鏡で観察したところ、ミジンコやブラインシュリンプなんかの乾燥卵と似てるような気がしてきた。
試しに一粒ずつ取り分けてそれぞれ違う条件の水に入れてみた。
何が起こるか判んねぇ分ワクワクしてくるが、同じだけの不安もある。不測の事態に備えて今日はここで寝るとするか。

第八十八話　蒸発恩師の研究記録（後書き）

次回、乾燥卵らしき物体はどうなるのか！？

第八十九話　研究ノートの内容が、ほぼ日記な件について（前書き）

乾燥卵の中から産まれてきたのは……？

第八十九話　研究ノートの内容が、ほぼ日記な件について

―前回より・研究ノートの内容―

１０／９　天候・曇

四番から七番水槽までの卵が白くなっている。顕微鏡で見たところ、残念ながら死んでしまったようだ。

これら四つの水は擬似的な海水を再現していたんだが、卵のまま死んでいる所から見て塩分濃度の濃い環境に弱いと見える。

温度には影響されないのか？

１０／１１　天候・晴

喜ばしい事に、９日に死滅した奴以外の卵４つ全部が無事に孵化してくれた。

水槽内を泳ぎ回っていたのは全長１ｃｍ以下、ミミズの幼生に似た生物だった。泳ぎ方は魚に似ていて動作が素早く、水温２５度で中性の真水を入れてあった二番水槽の個体が一番活発だった。次からは他の水槽も二番と同じ環境にするか。

光学顕微鏡で見てみると、僅かに体節のようなもんが見えている所から見て環形動物か？だとしても何故人型ミイラの身体にこの乾燥卵が？まぁ良い、今度はこいつらの餌を考えてやらんとな。

１０／１２　天候・晴

＊＊前略＊＊

と、このように色々なものを与えてみたが、どれも食い付きがいい。

肉食らしく、二番水槽の奴はソーセージを必死で貪っている。

この分なら皆順調に育ちそうだな。

１０／２０　天候・雨

ここ八日間で随分と育ったもんだと思う。全長は既に平均１１．５ｃｍ、生まれたてが１ｃｍにも満たない所からスタートしたと思うと、とんでもない成長力だ。

それに伴って光学顕微鏡サイズの頃では捕らえきれなかった色々な特徴が判ってきた。

例えばその全体的な姿はミミズというより細長いイモムシ（完全変態をする昆虫の幼虫）に似ていたし、動きも魚というより蛇のような落ち着きを見せ始めているし、体色も成長するに伴って乳白色になりつつある。

だが何より特徴的なのはこいつらの頭部で、そこには赤と青の目玉に似た器官がついていた。

節足動物ならばまだ判るが、環形動物で明確な目があるなんて聞いたことがねぇ。

１０／２８　天候・曇

今更かもしれないが、こいつらは相変わらず発育が良い。というか、良すぎる。

ここまで来ると、不意にとんでもない大きさまで育ってしまうような気がしてならない。

忍びないが、近いうちに解剖でもして間引くべきか？

１１／２　天候・曇

管理委員会が節電しろと言って来た。どうせいつもの言い掛かりだろうが、この際従ってやるとするか。

丁度こいつらを間引く必要性があるとも感じていたので、忍びない

が三番を解剖する事にした。
下に張ったのが解剖前の三番だ。最初とは比べ物にならないほど体格が良くなっていて、今こうして日記を書きながら思い返しても改めて恐ろしく思う。
実際に解剖してみて判ったことだが、驚くべき事にこいつは体内に内骨格を持っている。つまり脊椎動物だって事だ。内臓までしっかり似せてやがる。
骨格の構造は魚類とも爬虫類ともつかない形だったが、頭の先にあった目玉も脊椎動物が持ってるのとそう変わりの無ぇ水晶体軸の目玉だった。
解剖を終えた死体はバラして他の奴らに喰わせることにした。リサイクル感覚だが、大丈夫だよな？

１１／５　天候・晴

相変わらず三匹は元気だった。同僚から言われたが、そろそろコイツ等に仮の種名をつけるべきかもな。
そう思って色々考えた結果、『テソロサノ』というのを思い付いた。
これからはそう呼ぶことにしよう。

１１／７　天候・雨

今朝方一番水槽を見ると中にはテソロサノが居らず、代わりに白く巨大な毛玉が浮いていた。
何事かと思って調べてみると、毛玉の正体は何とテソロサノだった。
どうやらフィルターの不備が原因で発生した水カビにやられたっぽい。ツレに種類と進入経路の特定を頼んでおこう。
最近忙しくてバタついてやがったとはいえ、水代えと掃除はきっちりやんなきゃなんねぇわな。

１１／１０　天候・晴

唐突に管理委員会から書類が来た。何でも『新しい研究対象に人員を割くから研究を取り止めてチームを解体しろ』とか抜かしやがる。ふざけんじゃねぇ。元はと言えばてめえらが他の研究機関に負けたくねぇとか言いだして、強引に引き取ってきた金属塊を俺らに押しつけたんだろうが。

派手な研究結果が出ないと判った途端新しい研究対象に乗り換えて古いモンは捨てるってか？俺が見付けたテソロサノはどうなんだと思ったが、そういや委員会の連中はああいうモンが極端に嫌いだったな。

１１／１１　天候・晴

昨日配られた書類の内容にキレた上が管理委員会を訴えやがった。俺は知らねぇぞ。

１１／１２　天候・雨

裁判は管理委員会の敗訴に終わり、研究チームは守られた。だが油断は出来ねぇ。うちの管理委員会は権威主義者の老害共が使う天下り先としちゃ最大手……何をしてくるかは全く予測出来ねぇからな。

あと、テソロサノ共は相変わらず元気だった。何があってもコイツ等の末路だけは見届けねぇとなと、俺は決意した。

１１／１５　天候・曇

今朝は珍しく寝坊しちまった。テソロサノ共に餌をやる時間を十分も過ぎちまった事を後悔しながらダッシュで廊下を走ってると、非

常ブザーの耳障りな音が俺の耳を劈いた。
いやぁ、改めて思ったがやっぱあんなに酷い音はねぇな。またどうせ化学系の奴らが爆発事故でも引き起こしたんだろう、うちは大丈夫だと思っていた俺は研究室の扉を開いて唖然とした。つーか、絶句した。

そりゃそうだ。いつもの研究室だと思ってたのが、いざ戸を開けたら大勢の同僚共が悉くぶっ殺されてるんだもんよ。しかもスプラッターだかパニックもんだかばりに無惨な姿にされてやがった。
俺は一瞬取り乱したが、カンディルやヒフバエに比べりゃどうって事ぁ無ぇと思い何とか正気を取り戻すことが出来た。こういう時、俺みたいな異常者は便利だよな。

どこのどいつか知らねえが、こんな異常者相手でも対等に接してくれた同僚達を皆殺しにするとは太ぇ野郎だ。
そう思い俺は現場の状況を知ろうと同僚達を見て回ったんだが、何かがおかしい。

ざっと二分ほど確認してみて漸く判った。死体の数が若干足りてねぇんだ。しかも、若い女ばっかり。
ばっかりと言うが、若い女の同僚でも死体の残ってる奴は居た。だが皆死んでいた。無惨な姿にされて。

その時、ふと俺はある重要な事を思い出した。そうだ、テソロサノ共だ。二番と八番は無事なのか？
そう思って俺は自分用の研究スペースに向かったが、そこでとんでもねぇ光景を見ちまった。

あんなに元気だった八番が死んでて、二番水槽がぶっ壊されてたんだ。

何が起こったんだ?そう思った俺はひとまず八番の死因を調べることにした。調べた結果、八番の死因は水槽内の塩分濃度が急激に上昇した事にあると判った。

多分管理委員会の奴らが何か細工をしたんだろう。死亡推定時刻から見て、俺が餌をやった直後に死ぬよう仕組んでいたらしいな。ド畜生めが、命を何だと思ってやがる。

んで次に二番だが、こっちは水槽をぶっ壊されたばかりか姿さえも完全に消えていた。脱走したとしてもこのドサクサで生き残れるとは思えねぇし、陸上での運動能力は皆無に等しいからそれほど遠くには行ってねぇ筈だ。

となると盗まれたという説が濃厚だが、公的機関なんぞアテにゃなんねぇ。俺なりに出来る事をしつつ、上からの指示を待つか。

11／18　天候・晴

駄目だ。もうここには居られねぇ。明日の朝、荷物まとめてラビーレマ出るか。

第八十九話　研究ノートの内容が、ほぼ日記な件について（後書き）

研究員達の身に何が起こり、二番水槽の個体はどこへ消えたのか！？
次回、影に潜む何かが動き出す！？

第九十話　メイデンコープス（前書き）

衝撃の事実を知った繁達は……

第九十話　メイデンコープス

―前回より―

「……とんでもねぇな」
「うん……まさかあんな展開になろうとは思いもしなかったよ」
「まさか師匠があんな研究をやってたとはねぇ……」
「何にせよ、このデータは絶対外部に流しちゃならんな」
「そりゃそうだ。外に漏らさないよう、ちゃんと管理すると誓うよ」
「あぁ。俺らも全力で捜査にあたる」
「絶対に解決するとは言わないけど、力の限り頑張らせて貰うから」
「有り難うよ。くれぐれも気を付けてね」

かくして供米を呼び付けた二人は、彼に連れられ地下施設を後にした。

―同時刻・廃洋館内部―

青白く発光する虫を詰め込んだ空き瓶を明かりに、謎の生物達が円卓を囲んでいた。
その中には前々回に姿を見せた緑の肥満体と奇妙な骨格の生物も居り、果実や鳥囓りながら会話に興じている。

【以上が本日の報告事項になります】

青い甲殻を持つアシナシトカゲのような細い生物は報告を終え、席に着く。
【うむ、御苦労であったなイリーよ。さしたる異変もなく、母上様も平穏なる日々を謳歌しているようで何よりだ】

【少し前までは生きるので精一杯だった母上様が自ら進んでお料理に挑戦なさるだなんて、何とも微笑ましい事だわ】

そう言うのは、それぞれ黄金色と白銀色の外皮を持った肉食恐竜のような生物二匹であった。

黄金色の方は筋肉質な男性的なフォルム、白銀色の方は艶やかな女性的フォルムがそれぞれ特徴的だった。

【母上様の笑顔が増え、更なるヒトらしさを取り戻しつつある事は大変喜ばしい事と思います。

しかしだからといって不安が無い訳ではありませんが……】

等と不安げに語るのは、何処か虫を思わせる外観のヒューマノイド。背中をマントのようなもので覆っており、外見だけなら凄まじい威圧感がある。

【何を言ってやがる。俺等がそんな弱気でどうすんだよ？

元より後が無かった俺等に存在意義をくれたのは母上様だ。となりゃ、是が非でも母上様の為に戦って死んでいくのが俺等の定めて奴だろ？】

八本足の赤い巨獣が強気に言った。

元々血の気が多く好戦的な性格なのであろう彼は、既に戦場にて敵兵をその剛腕で薙ぎ払う自らの姿を思い浮かべているようだった。

【ヴィクター、貴方の勇猛さと志はまさに我が一派一と言えるでしょう。

しかしながら、むやみやたらに死に急ぐ事が美徳であるとは思わないで下さい】

【そうですよヴィクターさん。幾ら母上様を守り切れても、肝心の私達が死んでちゃまるで意味ありませんし】

ヴィクターと呼ばれた赤い巨獣に、赤銅色のヒューマノイドとイリー―先程席に着いた青いアシナシトカゲのような生物―が穏やかに諭す。

【それもそうだわな。まぁ俺も母上様取り残して勝手に死のうなんて馬鹿な事を本気で考えてる訳じゃねぇさ。
要するに心意気って奴だよ。俺はテメェ等程賢くねえから、戦略とかそういうのはあんまし考えねぇ。
だが腕っ節とやる気だきゃあ何時でも派閥イチでありてぇんだよ。
イチでありてぇっつーか、イチでなきゃなんねぇって方が正しいのかもしれんが、兎に角そんな感じだ】

―約二時間後・ホテル内ロビー―

「さて」

再びロビーに集った繁達は、今日の間に得られた情報を交換し合っていた。

「以上が、俺と香織で確認できた情報全部だ。んで、そっちはどんな感じだ？供米神官から情報を貰ったとは思うが、身辺調査は進んだか？」

問いへ最初に答えたのは桃李であった。

「まず私どもから、最初に殺害されたティエリー・エトワルズさんについて」

そう言って羽辰がテーブルの上へさっと写真を差し出した。

『見ての通り、彼女は典型的なアクサノイド（アクサノイド）型の山猫系禽獣種です。17歳の高校生で、休日も欠かさず毎日朝早くから部活動の練習に行っていたそうです』

「因みに所属していたのはチアリーディング部であり、副部長として部員達から絶大な信頼を受けていたのだとか。

校内で行われるミスコンでも毎回上位に食い込んでいまして、当然ながら思いを寄せる殿方も多かったのですが……」

『温厚で勤勉な平和主義者の彼女は、今の状態で恋愛などすれば自身の多忙さから周囲に迷惑をかけてしまうだろうという理由で「進路が決まるまで恋愛はしない」などと公言していたようです。

よって年齢がそのまま恋人不在歴に直結しておりまして、病院から彼女が処女であるという旨の証明書まで発行されておりました』

そう行って羽辰はそれらしき書類を差し出した。日付は命日の一週間前であり、定期的に証明書発行をしていたのだという事が判る。

「検死の結果、死亡推定日時は6月27日午前1時19分。現場の草村には藻掻いたような形跡が見られることから、何らかの手段で家の中から連れ去られ屋外で殺害されたものと見て間違い有りません」

「有り難う、桃李さん。じゃあ次の報告は誰にする？」

「あぁ、じゃあ私らが行こうか」

そう言って立ち上がったのはニコラとヌグであった。

「デハ、四人目ノ被害者『江藤瑠璃』女史ニツイテダ」

ヌグは鋭い爪の先端で顔写真を器用に摘んで差し出した。

「霊長種ノ彼女ハ24歳。ヤムタ首都圏カラノ旅行者ラシク、7月ノ頭頃、コノ近辺ノ宿ニ留マッテイタラシイ。

ヤムタ在住ノ知リ合イニ聞イタ話デハ、謙虚デ心優シイ人物トシテ評判ダッタヨウダガ、同時ニ積極性ヤ闘争心ガ著シク欠如シテオリ卑屈デ臆病トノ声モアッタ。

ソノ性格カラカ保守的デアリ恋愛経験モ全ク無イラシイ。力ヲ込メ過ギルト直グニ壊レテシマウヨウナ、脆弱ナ雰囲気ダッタトイウ」

「ただ、根はいい人だったから宿での評判は良かったらしいよ？調理師さん曰く癒し系で、もうちょっと元気があればいい嫁さんになりそうな人だったって言ってたし。

検死で判明した死亡推定時刻は7月12日午後9時8分、部屋から物音がしたのを掃除係が駆け寄ったらもう死んでたみたい。

遺体の特徴として特筆すべきは、何と言ってもその肥大化した両乳房。私も長らく医者をやっていた身の上だけど、霊長種の身体でこんな事が出来る訳無いし正直驚いたね。

写真の通り元からかなりの巨乳だったみたいだけど、そもそもどうやって膨らませたんだって話でしょ」

かくしてそれぞれの報告会は過ぎていく。

第九十話　メイデンコープス（後書き）

次回、処女怪死事件に新たなる犠牲者が！？（出るかどうかは判りません）

第九十一話　ほうそくっ！：前編（前書き）

報告会を終えた翌日、再びロビーに集まった繁達…
※１２／９　表記ミスを発見したため急遽修正しました

第九十一話　ほうそくっ！：前編

―前回より・翌日のロビー―

報告会を終えた翌日、繁達は再び集っていた。

「さて、昨日の報告会が終わってから、俺なりに被害者の特徴について纏めてみたんだが……少しばかり被害者についての共通点というか、法則性のようなもんが見えてきたような気がする」

「法則性？」

「そうだ。言ってみれば劇場型とか愉快犯とかと呼ばれる犯罪者の事で、この手合いは自分自身の行動にルールを設定し、それそのものを目立たせたがるんだ。

例えば俺らもそうだが、予め犯行予告をしたり、行為そのものを目立たせたりな」

繁の話を聞いた一同は、フィクション作品などで語られる典型的な怪盗やインターネット上で犯罪予告をする馬鹿の事を思い浮かべた。

もっとも、ツジラジメンバーからすれば後者と同格の存在と見なされるのは死んでも願い下げだったが。

「要するに演劇かゲーム感覚で犯罪に興じるわけだ。

ほんで、今回処女殺しをやってる奴も当然そんな劇場型犯罪者だろうから、殺しには何かの明確なルールがあるんだ」

「ルールねぇ……一体何だってんだ？若い処女の身体いじくって殺すだけじゃねぇってのか？」

「だよなぁ。あとルールっつったら、骨格の形ぐれえしか思い浮かばねぇんだが……」

リューラとバシロの言い分は尤もだった。自分達はあくまでラジオDJであり鑑識ではない。
故に限られたヒントの中から怪事件の法則性を割り出し犯人を見つけ出すなど、そうそう簡単に出来る筈もない筈だ。
しかし繁は、それでも尚事件の裏に潜む法則性についての言及をやめようとはしない。自らの考えに余程自信があるのだろう。

「あぁ、そうだとも。この殺しの犯人にはそういうの以外に、明確な殺しの基準たりえる何かがある。
安易に断言すると後が怖いからあんま言いたくねぇんだが、こっちにも鍵を握る情報ってのがあるからなあ……」

「フム。デハ聞カセテクレ、ツジラ殿。貴殿ノ考エル『事件ノ法則性』トヤラヲ」
「よっしゃ、そんじゃとりあえずこいつを見てくれ」

繁はテーブルに大振りな紙を広げた。見ればそれは、顔写真付きの被害者リストであった。
被害者の氏名や種族の他、年齢、職業、推定死亡日時、殺された順番や身辺調査で判明したデータなどが簡潔に記されている。

「あれ？こんなの何時の間に作ったの？」
「昨日報告会が終わった後、記録メモ見ながらワープロで作った」
「ワープロ……だから昨日夜遅くまでプリンターの音が五月蠅かったのね」
「そんなに五月蠅かったんなら言ってくれりゃ良かったのに」
「眠気が強かったので言うに言えなかったんですよ」
「なら結果オーライだな。

んじゃ皆、とりあえずこのリストに注目してくれ。何か思い浮かぶ

事は無ぇか？」

等と思わせぶりに言い放つ繁だったが、そんな事を振られたからといって何かを思い立つほど冴えた者はこの場にいない。一同は揃って首を横に振った。

「やっぱ思い浮かばねぇか……」

やっぱって何だよ、判ってたんならそんな話振るなよ。

誰もがそう思ったが、敢えてそこへ突っ込む者は誰もいなかった。

「じゃあこれでどうだ？」

そう言って繁が突き出したのは、縦に繋がったカレンダー三枚―上から順に先々月、先月、今月のもの―であった。

所々に赤いマジックで丸印と時刻が描き込まれている。

「これって、被害者の死亡推定日時？」

「そうだ。図示してみれば法則性が見えてくるだろうと思ってまとめてみたんだがな。

ついでにこっちは時刻を図示した奴だ」

続いて繁が取り出したのは、小学生の授業で用いられるような時計盤型の紙であった。

十枚が金属製のリングで閉じられており、日付順に時針が緑、分針が黄色で表記されている。

繁を除く一同は思考を巡らせた。あの繁がここまでヒントを出す程に勿体ぶっているという事は相当自信があると考えて間違いないと、そう確信できたからである。

―暫くして―

「そいじゃまぁ、俺も勿体ぶるのやめてそろそろ正直に答え言うわ」
「あ、言っちゃうの？クイズ形式とかにして私らに回答を要求せずに？」
「おう。何かそういう流れとか面倒だし、ここは俺が言っとかねぇと絞まらんだろ」

何だよそれ。散々振っておいてその落ちかよ。等と思う一同を余所に、繁は縦に連結したカレンダーを手に取り、言った。

「単刀直入に言うが、一連の事件に潜む法則を探り当てる鍵を握っているのは『日時』と『名前』だ」
そう言いながら、繁はハサミでカレンダーを細長く切っては横に繋げていく。
「まず殺害された日付だが、このカレンダーをこうして横一列に繋ぐと判りやすくなると思う」

繁はカレンダーの両端をバシロに持たせ、腕を伸ばして撓まないよう真っ直ぐに張らせた。

「成る程、横一列に並べてみると確かによく判るぜ。てっきり不規則だとばかり思ってたが、成る程そういう意味か！」

両腕を伸ばしつつ首を曲げて横繋ぎのカレンダーを見たリューラが、感心そうに言った。

「これでもう判ったと思うが、処女殺しは一定の感覚を開けて起こっている。

まず一人目の死亡推定時刻が先々月の２７日、次の被害者はその１５日後の７月１２日。続く三人目はその五日後の１７日に殺され、その後五人目までが５日おきに殺されている。
その次に六人目が殺されたのは２７日から三日後の３０日で、その後十人目までが四回が三日おきに殺された。
つまり奴は殺害日程の間隔に関して１５という数に拘っているらしい」

一同はただただ繁に驚かされるばかりであった。
というのは、ここまで推理を展開するだけならばまだしも、それを説明するためにここまでのものを一晩で準備したという事と、それでいて居眠りの一つもせずにこうして平然と喋り続けるなど、まともな霊長種では考えられないことだからである。
しかしながらそんな繁に意義を申し立てる者も少なからず存在した。
彼の従姉妹・青色薬剤師こと清水香織である。

「まぁ確かに１５っていうのは奴が逃げ出した日―１１月１５日とも合致するけど、そうだとすると可笑しくない？
その計算で行くと十一人目が殺されるのは８月１１日なわけでしょ？」
「そうなるが、どうした？」
「どうしたも何も、もうその予定日から三日も経ってるのに死体見付かって無いじゃん。
別に繁の仮説を疑ってる訳じゃ無いけど――「ツジラ殿っ！」

香織の発言を遮るようにしてホテルの中に駆け込んできた者が居た。
今朝方から別件でホテルを離れていた供米である。

「供米神官、一体どうしたのです？」
「ツジラ殿、大変ですぞ！そうこうしている間に、人里離れた山中

でまたも件の死体が！これで十一人目です！」
その場に動揺が広まるが、繁は尚も冷静に供米に問いかける。
「被害者の名前と死亡推定日時は？」
「はい。被害者の名は『ノーラ・トルドー』、死亡推定時刻は三日前の８月１１日、午前２時３６分です」
「やはりそうなったか……良し、皆落ち着け。まだ慌てるような時間じゃない」
「そうは言いますがね辻原さん、また一人死んだんですよ？」
『これが慌てずに居られましょうか。落ち着いてなど居られませんよ』
「良いから落ち着け。詳しい情報も判らないまま闇雲に動き回っても徒労だぞ？
俺が見付けた法則性はまだあるんだ。それに、どうせこんな日中に奴らは動かん。動くとすれば夜明け前と日没後だ」
「へぇ、何か根拠がありそうな言い方だね。それも法則性の一つ？」
「そうだ。言っただろ？奴らは劇場型犯罪者……殺しを執り行うにしてもルールがあるってな」

第九十一話　ほうそくっ！：前編（後書き）

次回、処女殺害に秘められた更なる法則性とは！？

第九十二話　ほうそくっ！：後編（前書き）

―読者の皆様へのお詫び―

前回掲載分に表記されていた『十一人目の被害者』の氏名を間違えてしまい、読者の皆様に多大なご迷惑をお掛けしていることを深くお詫び申し上げます。

第九十二話　ほうそくっ！：後編

―前回より―

「何だ？まだ法則があるってのか？」
「あぁ、ある。さっきは日付の話をしたから、次は時刻について話すとしよう」

バシロの問いかけに答えた繁は、更なる法則性を証明するため時計盤を模した紙束を手に取った。

「連中の殺しが『夜明け前』と『日没後』―つまり、太陽の出ていない時間帯に行われるって事はもう分かり切ってると思う。だがそれだけじゃあ情報としては不十分だ。夜明けと日没をそれぞれ午前と午後の六時と仮定しても時刻の特定は不可能だし、１２時間交代ごとに交代で被害者候補を見張るなんざほぼ不可能な話だ。

だが、殺害時刻の法則性は十分絞り込める」
「何をどうすんの？」
「それは今から話す事だ。

とりあえず、こいつを見てくれ。これは一人目の被害者が殺害された時刻を図示したものだ。
時針を緑、分針を黄色で表してある」

紙製の時計盤には確かに、緑と黄色の線が１時１９分を指し示すように描かれていた。

「次に二人目が殺された時刻は３時２６分、三人目は１８時２０分、

四人目は２１時８分、五人目と六人目は２３時１５分、七人目は２時４５分、八人目は１９時０３分、九人目は２０時９分、十人目は０時５６分、そんでさっき報告のあった十一人目は２時３６分。

この時点で判ることは精々、各位数値の和が全て１１になるという事だけで、このままじゃまだ不十分だ。

しかしこの図面をちょっと工夫して、分針を０まで戻した図面にしたのを重ねてみると……こうなる」

繁がフィルムの束を重ね合わせると、時針を表す緑色のラインが大きく四方に分類出来る形となった。

「つまりそれぞれ気まった時間帯に殺しを行うって訳だ。

一回目、五回目、九回目は２３時から翌１時台、二回目、六回目、十回目は２時から４時台、三回目、七回目は若干推測も入るが１７時から１９時台、四回目、八回目はこの流れから言って２０時から２２時代…」

「つまりその四パターンを順番に繰り返してるんだな？」

「そういう事だ。言い表し方がよくわからんが、時計盤にある三の倍数を起点にした前後二時間の間とでも覚えておきゃ良いだろう。無論、日の照ってない時間帯でな」

「シカシ何故ソンナヤヤコシイ時間帯ニ殺シヲ？」

「さてな。そこは計りかねるが、法則性がまだあることは確かだ」

「日付、時間帯と来ましたが……次は何についての法則性です？」

「次の鍵は被害者の名前だ」

「名前？」

「そう、名前だ」

そう言って繁は小振りな紙を差し出した。紙面にはアルファベットで表記された十の人名が縦に並んでいる。

以下がリストアップされた人名の一覧である（尚、前回表記されていた11人目の名前は誤りであったため急遽修正した）。

Thierry Etowaruzu（ティエリー・エトワルズ）
Nathalie Toramonto（ナタリー・トラモント）
Anna Campbell（アナ・キャンベル）
Luri Eto（江藤瑠璃）
Tara（タラ）
Emmy（エミー）
Nancy Tagami―（田上ナンシー）
Ally Cranston（アリー・クランストン）
Lena Elliott（リーナ・エリオット）
Tomie Ejima（江島富恵）
Nora Trudeau（ノーラ・トルドー）

「これが今までに殺害された被害者の名前だ」
「さっき死体が見付かったヒトのまで書いてるじゃん。何時の間に？」
「大急ぎで書き加えたんだよ。で、何で俺が被害者の名前を態々アルファベットに書き換えたか判るか？」
『さて……何故です？』
「それじゃまだ判んねぇな……もう少し判りやすくなんねぇか？」
「判った。んじゃ少し待ってろ」

繁は白い紙とシャープペンシルを取り出し、一枚目の紙に書いてある被害者達の名前を迅速に書き写していく。
「よし、出来た！」
「早っ！？」
その間、僅か20秒。繁はその間に書き写しを済ませてしまったのである。

「これで判りやすくなったろ」

そう言って繁が差し出した紙には、以下のように書かれていた。

Thierry
Etowaruzu
Nathalie
Toramonto
Anna
Campbell
Luri
Eto
Tara
Emmy
Nancy
Tagami
Ally
Cranston
Lena
Elliott
Tomie
Ejima
Nora
Trudeau

「お、何か見えてきたような……」

「縦読みがヒントのようですね。何かの文章でしょうか？」

「或イハ単語群カモシレンナ」

「もう少し答えに近付けてみるか」

そうして繁が手を加えた紙は以下のようになった。

Thierry
Etowaruzu
Nathalie
Toramonto
Anna
Campbell
Luri
Eto
｜
｜
｜
Tara
Emmy
Nancy
Tagami
Ally
Cranston
Lena
Elliott
｜
｜
｜
Tomie
Ejima
Nora
Trudeau

「［T］，［E］，［N］，［T］，［A］，［C］，［L］，［E］……」

「テン…タ……ティーン、テイ……」

「…［Tentacle（テンティクル）］……触手って意味だねぇ。もしかして、

これが答え？」
「そうだ。被害者のイニシャルを繋ぎ合わせると、刺胞動物や軟体動物が持つ事で有名な『触手』を表す［Ｔｅｎｔａｃｌｅ］という単語になる。これが現時点で判る最後の法則だ」
「成る程。つまりここから次の犯行日時と被害者をある程度限定的に割り出せる訳ね」
「そうだな。但し注意すべきはそれでも限定的であるという事と、諸事情で名字を持たない者の場合は複数一度に殺されるという点だな」
「……そう考えっと、ミドルネーム持ちとかも狙われるんじゃねえか？殺した奴のイニシャルでテンティクルって単語作れればいい訳だしよ」
「確かにその可能性も捨て切れませんね」
「良し……あとはこの事を供米神官やムチャリンダ市長に報告して……っと」
繁は説明に用いた紙類を仕舞い込みながら言った。
「こっちはその間に、秋本の隠し財産を探さねえとな……」

第九十二話　ほうそくっ！：後編（後書き）

次回、秋本の隠し財産を探す繁達の前に新たなる脅威が！？

第九十三話　ふしゼン！（前書き）

そんなこんなで準備を整え熱帯雨林へ向かった一行。

第九十三話　ふしぜん！

―前回より―

一行は繁が搾取した記憶を頼りに、熱帯雨林の中を進んでいた。

「んで、一つ質問なんだけど」

そう言って話題を切り出したのは、遠隔攻撃担当という事で集団の真ん中辺りを歩いているニコラ。

「何だ？」

「被害者のイニシャル繋げたら［Ｔｅｎｔａｃｌｅ］―『触手』になるってのは納得したけどさ、そもそも触手である理由の見当は付いてるの？」

「理由の見当？そうさな、強いて言うなら奴らのかもしれねぇ得体の知れない死骸って奴、アレの殆どが身体のどっかから触手生えてたんだよ。

で、被害者の氏名を分析してたら偶然にも合致したと、そういうわけだ。

俺だってまさか三回連続で続くとは思わなかったよ」

「あぁ、そういう事だったのね。確かに、昔から若い処女を下品に犯す化け物の代表格と言えばわけのわからない触手の塊と相場が決まってるけど」

「いや、その言い方もどうよ？まるでその方面に詳しいような言い方じゃん」

「悪趣味な金持ち相手にしてる売人の扱うアレげな物品の中にはそういうのがあるらしくってね。

魔術とか学術でいろんな生き物をしっちゃかめっちゃかに改造して、人身売買で手に入れた適当な人間を襲わせて楽しむんだとかって」

『ベースとなる生物は軟体動物や刺胞動物が主であり、大概はそこ

へ節足動物や人間の遺伝子を混ぜ込む事が多いようですね。
無論そういった商売を目的とした生命体の改造は禁止されていますし、そもそも生命体の融合自体国際条約で厳しい規制がかけられていますがね』
「そもそも触手の先端部を男性器にしてそのまま射精まで可能にするなんて、もう悪趣味の域を超えて知性体の考えるべき事ではないような気さえしてしまいますよ。
好奇心と向上心が強く思考に多様性があることは確かに素晴らしいことでしょう。しかしながら、正当な理由も確固たる目的も無く、品も学も芸も無い愚劣な快楽の為に生命科学を用いる事は害悪と断言できる」
「あぁ、そりゃ確かに同意するしかねーわ。俺も元科学者っつー身の上だから言うが、学術の悪用ってのはそういうのを言うんだろうぜ。
そりゃ国一つ滅ぼせるような爆弾やら改造病原菌やら電磁波発生装置なんかも悪用と言えるには言えるだろうが、根本的な学術の悪ってなるとこの辺りが妥当だろうしな」
「あー、その気持ちは解るな。『世の為人の為』とか『私利私欲NG』とかそういう偽善者めいた事は言いたかねぇが、それとはまた話が別ってモンだわ。
つかそもそも陵辱は兎も角輪姦とかって格好悪くね？いや陵辱も十分格好悪いけどさ、まだ脚色次第でどうにでもなるじゃん？
輪姦は幾ら脚色しても輪姦だからなぁ。あやべ、話題それた」
等と、至極普通の若者が繰り広げるような他愛もない会話を楽しみながら、一行は熱帯雨林の中を進んでいた。
他の大陸以上に自然が豊かで独自の生態系が広がるアクサノの熱帯雨林には、嘗て繁がノモシアの森で見た以上に多種多様な生物がひしめき合っていた。

例えば翼が完全に前足となって獣同然に動き回る鳥や五匹一組でキノコに擬態する甲殻類、遠目から見れば派手なクサリヘビにしか見えないような樹上棲の巨大ムカデ、蔓を能動的に動かせる植物等がそれである。

中でも驚かされたのはバシロが見付けたカメレオンかヤモリのような中型の爬虫類で、その頭部には眼球を五つ持ち、先端部が脊椎動物の顎のように開いて獲物を掴み取るというホースが如し長い舌を持っていた（ちなみに捕食されたのは小振りなヒヨケザルに似た小型の哺乳類だったのだが、その背面には何故か白い人面のような模様があった）。

そうこうして進んでいくうち一行は熱帯雨林を抜け、樹木が無く背の高い草ばかりが鬱蒼と生い茂る開けた土地に足を踏み入れた。

広大な草叢はあたり一面に広がっており、その中央には背の高い奇妙な樹木が生えている。

しかし奇妙なことに草叢は局所的なものであり、その周囲を取り囲むように熱帯雨林の樹木が壁を成していた。

「何なのここ……まるでこの辺りだけ人為的に木が伐採されたみたいに……」

「そもそも何故この区画だけがこうなっているのか、という事が最大の謎でしょう。普通資源目当てで伐採するならば外側から削るでしょうし、木材目当てなら中央の木だけが伐採されずに残っているのも妙な話で」

『そもそも熱帯雨林と隣り合わせであるというのに、ここまで徹底して環境や生物層が違うという事が有り得るのでしょうかねぇ』

「大方魔力か何かの影響じゃねぇの？そもそもそう言ってここ通らなかったら道分からなくなるぜ。なぁ、繁？」

「そうだな。秋本の奴ぁ女遊びに夢中で隠し場所もいい加減にしか覚えてなかったらしい。入手できた道のりではあの樹を経由するし

かねぇんだ」
「んま、大丈夫でしょ。どうにかなるって」
「そうだそうだ。もしあそこに機関銃持った敵が潜んでて弾が飛んできたら私が盾になってやるしよ」

かくして一行は不自然な草叢の中央にそそり立つ奇妙な樹木を目指して歩き出した。
並びは前から前衛としてリューラとバシロがちょうど先頭に位置している。

そして一分ほどあるいた頃、遂に異変は起こった。

どさり、ばさりと音を立て、リューラとバシロの後ろを歩いていた面々が次々に地面に倒れていくのである。

「おい皆、大丈夫か？」

異変を察知したリューラがふと振り返ると、背後では彼女を除くメンバーが無造作に草村へ倒れ込んでいた。
背の高い草で若干姿は隠れてしまっているが、元陸軍として銃撃戦の経験もある彼女の目に狂いはない。

「おい！大丈夫か！？繁！香織！」

大声で呼びかけながら揺さぶってみたが、反応は一切無い。
もしや神経毒かとも思ったが、呼吸や脈はあるため生きているのだろう。

「クソッ、どういう事だよ……なぁバシロ、こういう時はどうすりゃ良いと思う？」

リューラは自らの右半身に宿る亭主に語りかけたが、反応がない。
いつもなら此方から語りかけるまでもなく、何かあれば直ぐに―否、何も無くとも大概瞬時に口を挟んでくるはずなのに。
妙だと思った彼女は、ふと自分の右手を見た。何時もなら肉食獣とも爬虫類ともつかない異形の形をしている筈のそれだが、今は普通の人間の手に合成ゴムの皮を張り付けたようになっている。

「……どういう事だ一体……とりあえずこいつらを安全な場所まで運ばねぇと！」

とは言っても安全な場所など在るはずもなく、とりあえずその変にまとめて安置しておく他無かった。

「とりあえず今はああしておくとして……問題はこの状況の打破だな。
こんな大人数が一度に意識を失うなんざあまりにも不自然だ。となると、敵の攻撃を受けていると考えていい筈だ。

だがどうする？私は元々陸兵だ。陸兵は戦うことにかけちゃ強いが、それは相手が明確に判ってる場合の話……こんな状況、どう対抗すりゃ良いのかなんてサッパリだ。
だが考えろ。無い知恵絞って考えろ。何も行動を起こさないままだと皆が危ねぇ。何か、行動をっ――」

ニコラは尚も熟考する。自分を隔離病棟から解放したばかりか、母校を荒らす秋本一味を倒し、生きる意味を与えてくれた仲間達を救い出す為に。

第九十三話　ふしゼン！（後書き）

次回、不自然な草地の真相とは！？そしてリューラの前に現れた敵の正体とは一体！？

第九十四話　りぴーと！（前書き）

頭を抱えるリューラを何処かから見つめる怪しい影…

第九十四話　りぴーと！

―前回より―

『それ』は只、中枢から外界の様子を伺っていた。

《あれは一体何だというのだ？何故余の力が及ばぬ？
奇妙だ。明らかに奇妙だ。何故命ある者に余の力が及ばぬ？
あれは明らかに息をしていたし、汗をかいていた。ならば当然、我が力が及ぶ筈なのだ》

『それ』は少し考え込んだが、やがて深く悩むのをやめた。

《まぁ良い。余の力が及ばぬからと言って、あれを殺す手立てが無いわけではない。

夢は無限にあり、力有る限りそれは実現する。
だからこそ、諦めるのはまだ早いのだ》

―一方その頃―

リューラは未だ頭を抱えていた。相も変わらず仲間達を目覚めさせる方法が思い浮かばないのである。
一応度を過ぎない程度に一通りの事は試してみたが、基本的に何をしてみても目を覚まさない。
揺さぶっても、引っぱたいても、逆さ吊りにしても、軽く殴っても、のし掛かっても、まるで仮死状態にであるかのように一切反応しないのである。

「冗談抜きで参ったなこりゃ。ゲームだったら迷わず攻略サイト探すな。まぁ私、元々ゲームは攻略本片手にやるような不届きモンだが」

打つ手が無いにも関わらず、リューラは尚も考えることをやめない。打開策が出るまで思考を展開し続けるのである。

―四分後―

「そうだ」

リューラは閃いた。今の状況では危険な賭けになるであろうが、背に腹は代えられない。

いや、一応遺伝子操作という例外もあるにはあるのだが、現時点の作者は遺伝学についてろくな思い出がないので勘弁して欲しい。

「これを敵の攻撃と仮定するなら、攻撃の実行者もどっかに居るはずだ。もしかしたら遠距離とか上空とか異空間とかそういう手も足も出ないような場所からの攻撃かもしれんが、同時にあくまで私の手が届く範囲内という可能性も捨てきれねぇ」

そう言ってリューラは、五感を研ぎ澄ませながらゆっくりと草村を歩き出した。

元軍人である彼女が駆け抜けた戦場は、何時も晴天の昼間だったという訳ではない。

彼女の戦場は、例えば夜間の熱帯雨林であったり、砂嵐の吹き荒れる砂漠地帯であったり、強烈な吹雪で視界ばかりか体温のアドバンテージまで奪われる極地であったりもした。

そもそも彼女の出身は砂の海で知られるイスキュロンであるため、士官学校や軍の野外訓練でもしばしば砂嵐の中駆けずり回って突撃

銃や榴弾砲を振り回していた。
同じく士官学校時代に受けた砂上船操縦訓練では『砂嵐が吹き荒れる中で船をコースから外れないように操縦し、制限時間内に指定されたゴールに到着する』という高等技術を要求されたこともある。
現役時代もまた、夜間の森林奥深くで突撃銃を持った敵兵部隊を相手にしたり、光学迷彩のような擬態能力を駆使する暗殺者を豪雨の中残弾一発だけのマグナムのみで相手にしたり、大雨で増水し濁った濁流の中を着衣状態で泳いだりと、数々の死線をくぐり抜けて来ている。

「（そもそも私の場合、現役時代に昼間かつ晴天の視界明瞭な状況下で戦った事なんて数えるほどしかないんだよな。
だがそのお陰か、耳や目鼻には多少自信があるつもりだ。とは言っても、精々無反動砲の射程距離程度までだがな……）」

リューラは草村を慎重に歩いていく。幽かな音も聞き逃さないように、ゆっくりと。
そしてそんなリューラを、『それ』が放置するはずもない。

《何をやっている…？まぁ良い、戦闘を放棄したのなら此方から出向くまでの事だ！
往けい、絡み苔よ！あれの脚にからみつけ！》

『それ』の命令を受けた細長い地衣類が、まるで触手のようにリューラの足下へ向かう。
しかし絡み苔が立てる僅かな音をも聞き分けたリューラはその変則的な動きを目視することなく完全に読み通し、あまつさえ絡み苔を踏み付けて再起不能にしてしまった。

《な、何！？あれは一体何をしたのだ！？絡み苔を避けたばかりか

踏み付けるなど、まともな生物の所業ではないぞ！
ええい、小癪なっ……往けい、刀剣草よ！そやつの下半身を切り刻め！≫

続いて『それ』の命令を受けたこれまた細長い草が、まるでメトロノームの針のようにゆっくりと反り返る。
刀剣草と呼ばれるこの草は主だって草村を覆う背の高い草に混じって生えており、自らの葉を内角３０度まで反り返らせた反動で対象物を能動的に斬り付けるという恐ろしい植物であった。
しかしながらこの刀剣草、反り返るスピードが極めて襲い上に、草体そのものは薄く柔らかい為自らが切断されたりへし折られたりするとほぼ無力になってしまうという致命的な弱点があった。
加えて内角が３０度未満ではわらび餅どころか豆腐さえも満足に斬れない程に軟弱である。
当然リューラはその弱点どころか刀剣草自体認知していなかった。
しかし刀剣草が切断準備を終えるより先に歩き去ったり、或いは仮に準備を終えたとしても直ぐさま踏み付けられたりという散々な有様であったため、当然攻撃など当たるはずもない。

≪そうであった……動き回る的に刀剣草は意味は無意味であった……。
そうだ……やはり植物では限界がある……往けい、噛み付き雀！弾丸黄金！貴様らの力であれを挟み撃ちだ！≫

刀剣草に続いて『それ』の命令を受けたのは、二匹の虫だった。
方やハンミョウのような顎で獲物に噛み付きブラジキニンで激痛を与えるスズメガ『噛み付き雀』と、音速を超えるほどの速度で飛行しそのチタン合金にも匹敵する外骨格で厚さ１０ｃｍのコンクリート壁をも貫く『弾丸黄金』である。
因みに弾丸黄金は高速飛行に伴い消費される莫大な量の酸素を補う

ため、全身に気門―陸棲節足動物が持つ空気呼吸用の穴―が存在するという規格外の存在だった。
しかもどういうわけかこの二匹はどちらも自らの気配を消す力を主である『それ』から授かっていた。
故にリューラはこの二匹の接近を察知出来ず、遂に挟み撃ちにされてしまうものかと思われた。

しかし、現実とは何者にもサディストであった。

「今のところ何の気配も無ぇなぁ……どっかに術者が居る筈なんだが。とりあえず今はバシロ展開する必要性もねぇし、これ閉じとくk――あっ」

リューラが右肩のジッパーを閉じようとスライダーを引っ張った所、スライダーの取っ手にあたる部分が地面に落ちた。

「あー、やべぇな。折角香織の奴が作ってくれた戦闘服なのに…」

恐らくスライダーの金属疲労が原因であろうか。香織がリューラの戦闘服を自作するために使ったジッパーは、デザルテリアの裁縫道具屋でばら売りされていた中古品だった。
元々はジャケット等に使われていた金属製ジッパーは紆余曲折を経て劣化しており、それ故に破損したものと思われた。

「何とか直さねぇと開け閉めだりぃからなぁ……くっそー、このジッパーが何したっつーんだよ全く。
ガキのチ●皮でも挟んだってか?ったく、だからってこういう形でジッパーに裁かなくても良いだろうがよー」

ちなみに右肩のジッパーは元々、現在食道癌から復帰し再び学校の

ために尽力しているデザルテリア士官学校教頭・ディロフが愛用していた革製のカバンに使われていたものである。

リューラは落ちたスライダーの取っ手を探すため屈み込まざるを得なかった。しかしそれでも、上空の二匹は彼女を挟み撃ちにしようと飛び続けている。

そして二分後。

リューラ攻撃のために送り込まれた二匹の虫は、どちらも気配を完全に消し去っているため互いの存在を全く認識することが出来なくなり、哀れにも空中で衝突する。

顎以外は並大抵のスズメガとそう変わらない噛み付き雀はコンクリートをもぶち抜く弾丸黄金の突進を受けて空中で四散。

一方の弾丸黄金も、突進に際して全身にまとわりついた噛み付き雀の体液により全身に存在する気門が塞がり、その後僅か１１秒であっけなく窒息死してしまった。

その後どうにかスライダーのパーツを見付けたリューラは、再び探索を再開した。

《どういう事なのだ……？何故に我―ダルク・アルポの眷属ともあろう者共が、あの程度の霊長種如きに悉く敗れ去ってしまうのだ！？》

第九十四話　りぴーと！（後書き）

次回、謎の敵『ダルク・アルポ』の正体とは！？

第九十五話　超独裁的矮小領主アルポ（前書き）

ダルク・アルポの不遇はまだまだ続く。

第九十五話　超独裁的矮小領主アルポ

―全開より―

それからというものの、アルポはリューラを始末しようと次々と眷属達を嗾けたが、何れも悉く惨敗を喫していった。

あるものはリューラに察知され攻撃に失敗し、あるものはリューラに踏み潰され、あるものはリューラに飛びつこうとするも失敗しそのまま転落死。

酷いケースでは、リューラの背中に飛びついての給血を企てるも服に染み付いていた薬品の所為であっけなく死亡するという者まで居る始末。

かくして散々な有様の元に敗北し醜態を晒していく眷属達の姿は、アルポにとってしてみればこの上なく不愉快であった。

《ええい、何と言うことだ！何故我が眷属達の力を以てしても全く歯が立たないどころか、逆に劣勢に追い込まれる！？

あの霊長種、あれは一体何者なのだ！？我が力が及ばないばかりか、我が支配下を堂々と闊歩するなど！

一体どういう事なのだ！？まるでわけがわからんぞ！

この草原こそは我が領地にして帝国！即ち我こそが法規であり、我こそが神であらねばならない！

故にこの地に足を踏み入れし不届き者は、余さず裁かねばならない！即ち、我が手で覚めること無き永久の眠りに苦しめられる義務があるのだッ！

それだというのにあの霊長種、我が裁きを受けて尚我が領土を土足で踏みにじるするばかりか、兵達の黄金より尊き命までも奪いおっ

てからに！

許さん……断固、決して、必ず、絶対に、何があろうとも、例え宇宙の法則が乱れようとも、貴様だけは許さんぞ雑兵めが！我が帝国を荒らし回った貴様は、我自身が直々に裁いてくれる！》

―同時刻・草村―

「……はぁ……結局収穫無しか……」

あれから暫く探索を続けたリューラだったが、結局有益な調査結果は得られなかった。

「ごめんなぁ皆、どうも私じゃ駄目だったらしい。せめてバシロが返事してくれりゃあ、何か変わったかも知れねぇんだが……」

座り込んで落胆するリューラだったが、ふとここである事を思い付く。

「そうだ、外部だ。供米のおっさんに電話して助けに来て貰おう。いや、直接人を寄越してもらうのは駄目だ。
そうしたら援軍までこいつらの二の舞になりかねんし、おっさんの部下は今処女殺し対策に回してるかもしれん。
今の私に必要なのはあくまで情報だ。インフォメーション・アドバンテージさえ手に入れればどうにでもなる！」

早速リューラは携帯電話を用いて供米に連絡を取った。

『もしもし、供米ですが』
「もしもーし。供米のオッサン？」

『その声は嶋野殿ではありませぬか。一体どうなされたのです？』
「や、今ちょっと厄介な状況に陥ってんだよ」
『厄介な状況、とは？』
「単刀直入に言うと、私以外全員が熱帯雨林の中で意識を失っちまった」
『何と！？』
「多分敵の攻撃だろうが、黒物体まで返事が出来ないレベルまで押さえ込まれてんのはどう考えても可笑しい。
巻き添えを食らう危険性も考慮して増援を寄越せなんて贅沢は言わねぇ。そっちで誰か、情報収集の得意な奴に状況の調査を頼みたい」
『畏まりました。私の部下に最適な者が居りますので、至急調査に当たらせましょう』
「恩に着るぜ、供米のおっさん」
『いえいえ、最早ここまでお力をお貸し頂いた以上あなた方は最早セルヴァグルの市民と言っても過言ではありません故。
ただ此方からもお願いが御座いまして、そちらの状況について少々詳しい説明を頂けませんか？例えば現場の状態や風景等、如何に些細な情報でも構いませんので』
「それなら言われるまでもなくこっちから伝えようとと思ってた所だ。そうさな、まず風景についてだが――」

―同時刻・市役所二階・処女殺害事件対策臨時本部―

通話を終えた供米は、再び据置電話の受話器を手に取った。

『もしもし、神官様ですか？』

受話器の向こうから聞こえてきたのは、少々儚げだが澄み切ったように美しい女の声だった。

「あぁ、私だ。突然で悪いが、お前の力を貸してはくれないだろうか？」
『私の力、ですか？』
「そうだ。お前の力が必要になったのでな」
『「書架」……ですか？』
「何か問題でもあるのか？」
『いえ、問題など何も。ただ、例の怪物や殺人犯についての情報は何処にも見当たりませんでしたので、お役に立てるかどうか……』
「それでも構わん。今回調べて欲しいのは、処女殺しの犯人でも謎の怪物でも、ましてや空き家に潜む何かについてでもない。恐らくは魔術によるものであろう、ちょっとした怪奇現象についてなのだ」
『魔術による怪奇現象、ですか。その程度ならばお役に立てるやも知れませんね。
少々お待ち下さい。今そちらへ向かいますので』
「あぁ、待っているぞ」

通話を終えた供米は、背後に向き直って言った。

「さてお前達、早速だがそろそろ仕事にかかれ」
「はーい」
「御意」
「オウ」

供米の呼びかけに答えたのは順に、煌びやかな極彩色の羽根を持つ華奢な羽毛種、山羊とも鹿とも駱駝ともつかない偶蹄目らしき禽獣種、重厚感溢れる原始的な外観の竜属種の三名であった。
彼らはハピ達と同じく供米の運営する児童養護施設で育った孤児達であり、彼の教えを色濃く受け継いでいた。

「トッビィ、来客だ。茶と茶菓子の準備を頼む」
「はいは〜い」
「茶葉は来客用と書かれたものの右隣を使え。茶菓子は冷蔵庫にある草餅か栗羊羹だぞ」
「判りました〜」

煌びやかな極彩色の羽根を持つ華奢な羽毛種こと、極楽一族と呼ばれる血統の末裔であるトッビィは、供米の指示を受けて早速給湯室へ向かう。

「アルマ、お前には客人を迎えに行って貰いたい。頼めるか？例の女なんだが」
「承知致しました」
「宜しく頼む。送り迎えには公用車を使え。くれぐれも事故の無いようにな」
「はッ」

偶蹄目らしき禽獣種ことアルマは供米から公用車の鍵を受け取り駐車場へ向かう。

「神官、神官、俺様ノ仕事ハ何ダ？俺様ノ仕事ハ？」
「落ち着けライコーダ。お前の仕事は……そうさな……」
「マサカ何モ考エテナクテ、ソノ場ノ流レ的ニ俺様モ込ミデ呼ビ付ケタナンテコトハナイダロウナ？」
「そんなわけがあるものか」
「デハ早ク仕事ヲ寄越セ！待タセルナ！」
「お前こそ保護者をそう急かすものではないわい。待て、今探しとる」
「探シテイル！？探シテイルトハドウイウ意味ダ神官！？」
「慌てるな。取り敢えず外に群がっているマスゴミ共をどうにかし

てこい」
「ソレガ仕事カ？」
「そうだ。さぁ、早く行け。思う存分暴れ回ってこい」
「心得タ！」
「ただしブレスの類は使うなよ。あと誰一人として殺すな」
「判ッテイルゥ！」

かくして竜属種・ライコーダをも送り出した供米は来客―基、部下のとある女を待ち続けた。

「頼むぞクアン。この一件にはまさしくお前が適任なのだ」

第九十五話　超独裁的矮小領主アルポ（後書き）

次回、クアンが持つ力の実態とは一体何なのか！？

第九十六話　この中に1つ、真相がある！（前書き）

クアンに隠された力とは！？

第九十六話　この中に1つ、真相がある！

一般的に林霊教の教職者と言えば神官や巫女であるが、それぱかりが林霊教の教職者であるというわけではなく、これら以外の教職者も数多く存在する。
その中でも『知者』と呼ばれる者達は、そういった教職者の一種の中でも一際風変わりな存在であった。

彼らは古来より伝わる秘術『書架』により生きながらにしてその内側に数多の情報を宿しており、差詰め『生きた百科事典』若しくは『生体情報記憶装置』とでも言うべき者達である。

知者の肩書きは本来、書架の秘術と共に親から子へと先祖代々受け継がれるものである。
継承者は様々な掟の元に独自の修行を積み、一生を費やして一人前の知者（即ち内側に『世界そのものとも言い表せるほどの膨大な情報』を宿した上で、『それら全てを理解し決して忘れない』存在）となるべく生きるものであった。

しかしながらそれも最早過去の話。現代となっては案外簡単に修行を始められたり、新聞に求人広告が載るなど、ある種の職業として扱われるまでにその本質は変容している。

供米の部下ことサオーラ系禽獣種の女・クアンもまたそういった『近代型知者』の端くれである。
知者としては未だ未成熟である為書架の力は限定的にしか使えないが、それでも彼女の体内に宿された情報は莫大かつ多種多様であり、現代に於いてその情報が絶大な力を誇っているのは言うまでもない。

―前回より・市役所の一室―

「では早速だが、宜しく頼む」
「はい。お任せ下さい、供米神官」

目を閉じたまま椅子からゆっくりと立ち上がったクアンは、スタンダードな祈りの姿勢を取る。
これこそ彼女を初めとする若手の知者が書架を発動・行使する際の手順である。
祈りの姿勢により集中力を高めた彼女は、これより意識のみで自らの内側に存在する書架の中へと入り込むのである。

「用意が調いました。検索を始めましょう」
「よし来た」

供米は懐からメモ用紙を取り出した。リューラから聞いたキーワードを、書き記したものである。

―書架―

クアンは背景が白い異空間に佇んでいた。その内部には様々な書籍にノート、巻物のといった紙媒体の他他、ＵＳＢメモリーやカセットテープ等ありとあらゆる『記録するもの』が空中へ無作為に浮かんでいる。
これぞ知者が持つ秘術・書架の実態であり、若手の知者はこの中から任意の情報を検索する事が出来るのである（完成系に達した知者はそれら全てを完全に把握・理解している為そもそも検索の必要が無いのだが、検索できるだけでも十分便利なためこの段階に移行せんとする者は極めて少ない）。

『最初のキーワードは「アクサノ大陸の熱帯雨林」だ』
「畏まりました。絞り込みを実行します」

何処からともなく供米の声が響き渡り、それを認識したクアンが絞り込みを実行する。
すると情報の内『アクサノ大陸の熱帯雨林』に関係しない情報が取り払われる。

『次のキーワードは……「孤立した草地」とでもしようか』
「では『孤立　草地』でｏｒ検索をかけましょう」

『ｏｒ検索』とは、複数設けられたキーワードの何れかを含む事を条件として探りを入れる検索方法である。
この検索方法は精密性こそ『ａｎｄ検索（該当キーワード全てを含む事を条件として探りを入れる検索方法）』には劣るが、その分幅広い情報を得ることが出来るという代物だった。

ｏｒ検索による絞り込みは莫大な情報の中から『孤立』『草地』のどちらかを含む情報を探り当てた。
しかしその検索結果が少々多い事に不安を感じたクアンは、一段階戻って検索方法をａｎｄ検索に切り替えた。

『続くキーワードは「睡眠」としよう』
「畏まりました。ではその二字を含む単語を一通りｏｒ検索にかけます」

結果として検索結果はかなり絞り込めた。だがまだ完全でないと考えたクアンは、徐々に単語を減らす、検索方法を変えるなどして繰り返し検索をかけていく。

そして彼女は遂にただ一つの検索結果へと辿り着いた。

白い背景の世界に浮遊する『情報』は、図鑑のようなサイズの少々分厚い本であった。

くすんだような灰色の表紙には羽虫の絵が描かれており、アルファベットで書かれたタイトルには銀色の箔押しがされている。

「供米神官、見付けました。これこそが恐らく、件の怪奇現象を引き起こしていた得体の知れない力の根源でしょう」

『何と！それは本当か？』

「はい。情報整理と記録を始めますので、ホワイトボードと水性ペンの準備をお願いできますか？」

『判った。至急用意しよう』

―部屋―

書架を閉じ検索を終えたクアンは、広いホワイトボードにサインペンを走らせる。

そのペン速たるや、常に落ち着いた態度を崩さず見る者に淑女的な印象を与える彼女の手つきとしては信じがたいほどに素早いものであった。

「成る程……そういう事だったのか……」

「私としても驚きです。まさかあれがあのようになろうとは……」

「浮世とは極端な考え方で全てを判断できる訳ではないという、確固たる証拠なのだろうな。

何はともあれ、早速嶋野様にこの一件をお伝えしなければ」

供米は得られた情報をリューラに伝えるため、受話器を手に取った。

第九十六話　この中に1つ、真相がある！（後書き）

次回、ダルク・アルポの正体が明らかに！

第九十七話　蚊柱の立つ頃に（前書き）

冬場になっても屋内で生き残る蚊や蚤ほど忌々しい自然物もそうあるまい。

第九十七話　蚊柱の立つ頃に

―前回より―

供米から事の真相を伝えられたリューラは、衝撃的な事実に驚愕した。

「な、何だって!?そいつはマジなのかっ!?」

『えぇ。俄には信じがたい事ですが……若手とはいえ純粋な実力のみで知者の肩書きを得たクアンの事です。情報に誤りがあるとは思えません』

「いや、間違いとかそういうのはこの際気にならねぇよ」

『と、言いますと?』

「私は確かに打開策が欲しいが、それ以上に『暴れ回る口実』をも欲しがってたって事さ。

仲間のために、何か行動を起こしたい。だが確定的な情報も無しに動いたんじゃ、返って状況が悪化するかもしれねぇ。

つまり『暴れ回りたいが、それならそれで何か口実が無いと不安』っつーのが本音なんだよ。身体張った真似なら得意だと思ってたんだが、どうもすっかり平和ボケしたらしい」

『嶋野殿……』

「まぁそう心配すんなよおっさん。私は大丈夫だ。口実を見付けた以上、不安は無ぇも同じだからよ」

『御武運を……』

「おう」

そう言って通話を切ったリューラの手には、霊長種の脊椎を模した長い剣が握られていた。

「さぁて……今の会話、テメェも聞いてたんだろ？」

リューラの視線は不自然な草村の中央に生える奇妙な樹木―基、この草村の支配者ダルク・アルポに向けられていた。

「なぁ、ダルク・アルポ……この草村を支配してる帝王さんよぉ？」

《下等生物めが……我の名を知った程度で粋がるでないわァ！》

リューラの脳内に、高圧的な喋りの念話が鳴り響く。声は若々しく中性的であり、性別の特定は困難だった。

アクサノの熱帯雨林にある『不自然な草むら』の中央根を下ろすこのダルク・アルポという名の樹木、読者諸君はとっくにお気づきかと思うが当然普通の植物ではない。

その正体とはカタル・ティゾル全土でも天然物は半ば伝説とされる『植物と葉脈種の中間的存在』であり、高度な知性の元に統制される発達した自我と自然界の魔力を吸収・行使する力を持ち合わせていた。

産まれながらに高度な知覚と優れた魔術の才を有していたアルポは、空を舞う種子の状態で既に魔術を使いこなす事が出来た。

アルポは魔術を用いて気流を操る事で環境的に恵まれたアクサノの熱帯雨林へ着地し、生育のために根を下ろし、成長に伴って己の周囲から養分・魔力を枯渇寸前まで吸い尽くす事で不自然な円形の痩せ地にしてしまったのである。

因みにリューラを襲わせた動植物軍は、アルポの魔術によって産み出され使役される眷属である。

「粋がってんのはテメェの方だろ？いや、正しくは『粋がってた』か？」

《抜かせェ！貴様が何を知り、如何なる行動を起こそうとも、我に打ち勝つことなど出来はしないッ！》

「そいつはどうかなぁ、ヴァーミンの有資格者様よォー。さっきの会話立ち聞きしてたんなら当然知ってんだろ？私がお前の正体を、隅々まで知り尽くしてるって事も」

《何ッ！？》

「何だ？まさか聞きそびれてたってのか？仕方ねーな、私は作者と違って優しいから特別に教えてやるよお前の能力」

《いや言わんで良いわ！というか言うな！貴様知らんのか？敵に堂々と自分の能力を解説される事ほど腹立たしいことは他にそうないのだという事を！》

「……はぁ？お前何言ってんの？知ってるに決まってんじゃねぇか。特に相手の表情が無駄に自慢げだと尚のこと腹立つって事だって知ってらァ。

無駄に長生きしてる癖に自分の領土ン中の事しか把握出来てねぇ老害とは格が違うわけだしよ」

《誰が樹海を知らぬ温室の鉢植えかァッ！》

『温室の鉢植え樹海を知らず』とは、地球で言う所の『井の中の蛙大海を知らず』と同義の諺である。

「おー、年増の癖にバカだと思ってたら諺の一つくらいは知ってんじゃねぇか。

流石腐ってもヴァーミンの有資格者なだきゃあるなぁ」

《貴様……此方が下手に出ていれば調子に乗りおってェ……》

アルポの幹が脈打ち、枝も揺れ始める。

「何だよ、もう破殻化か？喋る樹が変身って何か新しいなぁオイ。つーかテメェの態度は始終高圧的だったじゃねぇか。その態度が下

手なら、私は今頃素のキャラでもってマナー教室の講師やってんぞ」
《フゥハハハハハァ！そうして余裕のままに居られるのも今の内だ！貴様は我が『ヴァーミンズ・ドヴァー　モスキート』が持つ凄まじき力の元に平伏し、跪き、泣きながら命乞いをしつつ藁のように死んでいくのだァ！》

破殻化したアルポの姿は、それが元々単なる樹木であったという事実を認めたくない程に奇怪なものだった。
蚊の象徴を持つ第二のヴァーミンの有資格者であるが為であろう、幹は蚊の腹部、枝は節足、元々大きかった葉は蚊の羽根に似た形となり、枝の先端には巨大な蚊の卵を八つ束ねて引き延ばしたような紡錘形の果実らしきものが垂れ下がっている。
締めにリューラと向かい合う位置を起点に６０度感覚で六方向へ巨大な蚊の頭と一対の前脚が表れ、破殻化は完了した。

「これこそ我が破殻化也！」
「我がこの姿となった以上！」
「貴様に残された選択肢は！」
「死という一つを除き！」
「他の一切が失われる！」
「我が力、思い知るがいい！」

六つの頭がそれぞれ別方向に向かって声高らかに叫ぶと、それを引き金にしたかのように果実らしきものが一斉に張り裂け、中から全長２０ｃｍはあろうかというボウフラのような虫が飛び出した。
ボウフラのような虫共は水も無いのに草むらを這い回り、捕食者然とした鋭い顎を打ち鳴らしながら背の高い草を薙ぎ倒してリューラに向かっていく。

「面白ェ……無抵抗な奴らを狙わず純粋に戦闘員を駆逐する事だけ

に全神経を注ぐってか。
元々が遠隔操作で相手を監視して眠らせる能力を使いこなす独裁者気取り野郎のやり口たァ思えねぇなぁ！」

不敵な笑みを浮かべたリューラは繁から手渡された脊椎のような黒い剣を逆手に持つと、柄の先端部分にある不敵な笑みを浮かべた霊長種の髑髏を勢い良く掲げた。

「粋がってんじゃねぇぜボウフラ共ォ！テメェ等ァ精々小魚の餌がお似合いだぜェ！」

リューラの叫びに反応するように、髑髏の眼窩に埋め込まれた赤い樹脂が不気味な光を放った。

「手始めはコイツからだ！」

第九十七話　蚊柱の立つ頃に（後書き）

「ヴァーミンズ・ドヴァー　モスキート」
蚊の象徴を持つ第二のヴァーミン。平常時は蚊に似た極小の『活動体』を操る。
活動体は自走機能のある監視カメラのように動き、本体はこれを用いて周囲の状況を視認出来る。
能力の本質は対象への強力な麻酔であり、活動体の口吻で刺され、麻酔を注入されたものは例え生物でなくとも眠るように活動を停止してしまう。
活動体は一つの対象に一匹しか飛ばせないが、その存在は何者にも察知することが出来ず、一度麻酔をかけられれば能力が解除されるか本体である有資格者が死亡するまで決して目覚めることはない。

第九十八話　刈れる！ＭＴ（前書き）

ＭＴ…モスキート・ツリー

第九十八話　刈れる！ＭＴ

―前回より―

髑髏を模した柄の先端部から射出された燃え盛る髑髏型の弾幕は、燃え盛る炎と凄まじい爆発力によって地を這うボウフラもどきの群れを草諸共悉く焼き殺していく。

「さァどうだどうだ！これぞ正しく焼き畑農業だぜ！見ろよ、テメェの帝国とやらが瞬く間に灰と化す様を！焼け死ぬボウフラ共を！これがテメェの言うモスキートの力だってのかぁ！？」

「ええい！」
「まだだ！」
「まだ！」
「終わらん！」
「まだ！」
「終わらんぞ！」

リューラの嘲りに加え、領土炎上とボウフラもどき全滅という痛手を負ったアルポはしかし、尚も諦めようとはしない。果実らしきものが瞬時に再生し、それらが弾けて再び虫の群れが排出される。しかも次なる虫の群れは幼虫どころか蛹（『鬼ボウフラ』の俗称で知られる頭部が肥大化したようなもの）の形態さえ通り越し、いきなり片腕一抱え半以上あるような成虫―即ち巨大な蚊の状態で飛び出て来た。
蚊特有とも言えるであろうあの独特の羽音は無く、暴走族が駆るような改造二輪車の傍迷惑極まりないエンジン音に似た羽音を立てながら、スズメバチやトンボに匹敵する速度で群れを成して飛び回る。

「ケッ！つくづく面倒臭ぇ奴らだ！こんだけ多くちゃあ立ち止まって弾なぞ使えねぇ！」

髑髏型弾幕による攻撃を諦めたリューラは、剣を持ち直し蚊の群れを次々と切り裂いていく。
しかしそんな彼女の応戦を徒労と嘲笑うかのように蚊の群れはその数を鼠算式に増やしていく。

「ふはははは！」
「どうだ！我が軍の力は！」
「これこそ！」
「貴様が嘲りし！」
「モスキートの！」
「力だ！」

「一々喧しい奴らだぜ。口が六つあるんなら、せめて六つの口で別々の事を無作為に言えっつの！」

尚も必死で剣を振り回すリューラだったが、次第にその作業然とした感覚に飽きを感じたのか、剣を振るうのをやめた。

「畜生め！無限沸きする雑魚なんぞ相手にしてらんねぇ！ここは適当に牽制して、本体を叩く！」

リューラは再び剣を逆手に持ち替え、周囲へ無作為に髑髏型弾幕を連射し続ける。
一通り掃射し、炎の勢いで蚊が若干怯んだ所でリューラは賺さず剣を持ち直し、幹の側面に出現した蚊の頭が一つを刺し貫かんと跳躍する。

バシロの補助が無かったとはいえ、その飛距離たるや平均的な霊長種の世界記録を軽々と上回るほどであり、彼女の肉体が洗練されたものである事を物語っていた。

「ブッ刺されェアアアアア！」

「馬鹿め！」
「無駄な事を！」
「往け！」
「兵士達よ！」
「あの愚か者を！」
「串刺しにせよ！」

アルポの命令を受けた蚊の群れが、賺さず空中のリューラを取り囲む。しかしながら、曲がりなりにも元は純正イスキュロン軍人であった彼女の勢いがその程度の妨害で止まる筈もない。

「邪魔だァァァァ！」

叫ぶと同時にリューラは空中で回転蹴りを放ち、打撃と風圧で蚊の群れを悉く叩き落とした。

「シェオルァアアアアアアアアア！」

そしてそのまま、急降下したリューラの剣がアルポの幹に出現した蚊の頭に襲い掛かる。
しかしすんでの所で剣は弾かれ、リューラは大きく吹き飛ばされてしまう。

「は、弾かれたぁ！？」

リューラは吹き飛ばされながらも何とか空中で姿勢を正し、元々は草村であった筈の焦土へ着地する。

「大馬鹿物がァ！」
「考えが甘い！」
「その程度の刃！」
「我には通じんッ！」
「この恥知らずの！」
「下等生物めが！」

「（一体どういう事だ？さっきのはどう考えても外骨格の硬さじゃねぇし、剣の取説には『素人が力任せに振っても鉄板くらいなら斬れる』とか何とかあったっつーのに傷一つ無ぇってのはどう考えてもおかしい）」

リューラは手足や剣でやって来る蚊の群れを薙ぎ払いながら思考を巡らせる。

「（とすりゃ、現状から考えて十中八九魔術だろうな。しかもあの反動、只単に硬いだけじゃねぇ。
もっと何か別の、受動的な攻撃ギミックが内蔵されてると考えるべきか。
つまり力業でブチ破ろうなんて策は通用しねぇ。確か運動の第三法則だったか？高校物理の話は殆ど覚えてねぇが、要するにそういう事だろうよ。
こっちがとりあえず力任せにブチ込もうもんなら、向こうから来る反発のエネルギーも強くなりやがる。
こういう厄介なタイプの障壁を破るには、ややこしい配列の魔術やら特殊な魔術具やらを仕えと世論は言う……が、私は生憎そんなも

んを使いこなす程器用じゃねぇ。
じゃあどうする？それを今から考えるんだろうが）」

等と自分に言い聞かせながらリューラは尚も思考を巡らせていたが、ふとヴァーミンの有資格者と破殻化に関する関連性についての話を思い出す。

「（そういや繁が何か前に言ってたような……確か『破殻化した姿の主軸はヴァーミンを持ってる奴の種族に左右される』とか何とか。だから霊長種の繁や桃李は蟲人間の形だったのが、ニコラは狐みてぇなデカい蛾なんだっけ？
まぁ細けぇ事考えてる場合じゃねぇ、とりあえずこのネタがあの馬鹿をぶっ殺すのに何か使えそうな気がするんだが――ん、待てよ？
そうか！その手があったか！）」

熟考の末にある作戦を思い付いたリューラは、早速それを実行に移す。

先ず髑髏型弾幕で蚊の群れを粗方焼き払うと、そのまま剣を持ち直して大きく振りかぶる。
そうして彼女が斬り付けたのは、先程と同じくアルポの本体―ではなく、アルポから少々離れた位置にある地面だった。
土をある程度斬り付けて細かく砕いたのを確認したリューラは、更にそこへ大型かつ高出力の髑髏型弾幕を放ち、爆破することでかなりの広範囲をクレーター状に削り取った。

「馬鹿な！？」
「何を！？」
「止せ！」
「我が領土を！」

「我に無断で！」
「勝手に掘るなぁー！」

六つの頭が順番に叫ぶが、リューラはそれでも尚地面を斬り付けては髑髏型弾幕で爆破するという作業を続けていく。
アルポの未来を念入りに破壊し、忌まわしき蘇蚊（モスキート）の魔手から仲間達を救い出す為に。

第九十八話　刈れる！ＭＴ（後書き）

次回、遂に決着か！？

第九十九話　ご愁傷者様カス雑草（前書き）

この程度の内容でここまで長引くなど、誰が予想出来ただろうか…

…

第九十九話　ご愁傷者様カス雑草

―前回より―

「（本当はスコップがありゃ良かったんだが、今は贅沢など言っちゃあおれん。
蚊に刺されないように気を付けながら、奴の根を重点的に潰してやらねぇと！）」

執拗に地面を斬り付けては爆破して、リューラは地中深くに眠るアルポの根を探る。

「（物理はアレだが、生物の授業ならちゃんと覚えてんだ。
植物細胞は光合成で栄養素をこそ作り出せるが、動物細胞のように自分で魔力を製造・供給するっつー機能は原則として備わってねぇ。
葉脈種を形作る第三次こそ例外だが、被子植物を形作る第二次は能動的に魔力を作るって事が事が出来ず、地衣類や裸子植物を形作る第一次に至っては溜め込むという機能さえねぇ！）」

※あくまで科学理論にファンタジーを織り交ぜた中途半端な世界観での設定なので真に受けないように。

「（奴が幾ら頭良くて魔術の才能があろうとも、本を正せば結局は単なる知恵の付いた木。となりゃ、魔力を供給する手立ては地中から吸い取り続ける他に無ぇって訳だ。
つまり奴の根さえ掘り起こしちまえば、あとは貯蓄分の魔力が尽き果てるのを待てば良いだけの話になる。
まぁそれをやった所でまだ『奴の魔術を封じた』というだけの話なんだがな。

今のところは無事だがあの蚊共が繁達を襲わないとも限らねぇし、場合によっちゃアルポ自ら皆を殺しにかかるかも知れん……まぁそん時はまた策を練るさ。どの道奴にそこまでの頭はねぇ！）」

剣と弾幕の強さ故か、それともリューラの怪力故か、アルポの根を覆う土はどんどん削られていき、遂に外骨格で覆われた太い根が露わになった。

「おっし！根が出たッ！」

口々にやめろやめろと叫ぶ蚊の頭を尻目に、リューラはアルポの外周を渦巻き状に掘り進める。

本体に攻撃を当てて障壁を発動させないように、しかし近距離を何度も何度も、ヒトを逸したスピードとパワーで迅速に地面を掘り起こしていく。

そして僅か1分後、アルポを地中から支えていた六本の根を掘り起こしたリューラは、アルポの周囲を跳ね回りながらその根を剣で力任せに殴りつけ、そして無理矢理引き抜いていく。

一本の根が引き抜かれる度に蚊の頭一つ一つが悲鳴を上げ、傷口からはよくわからない色合いの体液が流れ出ては土に吸い込まれていく。

アルポを支える根を全て引き抜いたリューラは、未だ謎の体液が流れ続ける傷口目掛けて髑髏型弾幕を放つ。

そして当然アルポはそれに対抗せんとして、魔術で障壁を展開する。

障壁以外に何か使う魔術は無いのか等と突っ込んではいけない。所詮蠱毒の作った喘ませキャラである。

少々の間は何とか障壁で爆発を凌ぎきっていたアルポであったが、魔力供給の要たる根を失った以上最早それにも限界が来てしまう。

「くそ！」
「くそっ！」
「魔力が！」
「魔力がない！」
「障壁が！」
「出ないっ！」

六つの頭で途切れ途切れに叫び続けるアルポに、リューラは言った。

「どうした？魔力が無くなったらそれで終いか？」
「黙れ！」
「黙れ！」
「黙れ黙れ黙れ！」
「この下等生物如きが！」
「我を殺そうなど！」
「烏滸がましいにも程があるぞ！」
「蚊になり損なった雑草の分際で一々五月蠅ぇんだよ。
さっきから聞いてりゃ『黙れ』だの『下等生物』だの、それしか言うことねぇのか？
まともな語彙力も無ぇ癖して一丁前に神気取ってんじゃねぇよ」

そう言ってリューラは剣の一振りで周囲に群がる蚊２０匹余りを瞬時に斬り殺しながら、ゆっくりとアルポに歩み寄っていく。
アルポは尚も蚊の群れを量産して立ち向かおうとするが、根の喪失と破殻化状態での体液流出に伴う養分欠乏が原因で、次なる実を産み出すという行為そのものが出来なくなってしまっていた。

「くそっ！」
「くそっ！」

「よもや我が！」
「至高の存在である筈の我が！」
「こんな下等生物如きに負けるなど！」
「有り得ては――っがァァァァァ！」

アルポの幹に現れた頭の一つを、リューラの剣が刺し貫いた。

「至高の存在……か。テメェがそう思ってんならそうなんだろうぜ、テメェん中ではなぁ！」

そう叫びながら、リューラの剣が彼女から見て右側の頭を切り落とした。

「ま、まだ解らぬのか！？貴様はヴァーミンの有資格者に刃を向けて――「それがどうしたぁっ！？」―アッー！」

リューラは更にその隣の頭を左手で掴み言う。

「私はヒトの肩書きについちゃとやかく言うが、それだけでそいつを評価したりはしねぇ主義なんだよ。
そういうのって何か、つまんねえだろ？」

問い掛けつつもリューラは、掴んだ頭を力任せに引き抜いた。

「びぎゃぁぁぁぁぁ！」
「そんな事言ってっからよォ……」
「な、何だと言うの―「テメェは何時まで経っても『木』止まりなんだよ！」―めぎゃぁぁぁぁぁ！」

続く頭を拳で正面から叩き潰したリューラの暴虐はまだ止まらない。

「あ、悪魔だ！貴様こそまさしくっ！この悪魔めが！」
「悪魔？この私がか？おいおい、止せよ。そんなオルドビス紀の売れないギャグ、今更使った所で寒いだけだろうが。私はあくまで平和主義者だ。それもステレオタイプ、まさに平和主義者のテンプレぶち込んだようなタイプのな」
「平和主義者だと！？」
「どの口が抜か――「はい、アウトォー！」

その一声と共に、残る二つの内の頭一つがリューラの右脚によって蹴り飛ばされた。

「良いか？平和主義者ってのには二つあってな。普通の意味合いじゃ『場の空気を和やかに保つ事で平和を維持しようとする奴』の事だがだが、時と場合によっちゃ『平和のために全力で暴力的になろうとする奴』の事をも言うんだよ。
んな事も知らねぇでよく私を下等生物なんて呼べたもんだなオイ。大人しく光合成して酸素作ってりゃ平和に生きられたかも知れねぇのによ」
「だ、黙れ！お前に我の何が判る！？知性を持った植物の何が判るというのだ！？」
「何もわかんねぇよ。理解する気さえねぇよ」
「何だと貴様ァ！？大気を汚し水を濁し地を腐らせる知的生命体が植物に向かって――「その話題からして既に終わってんだよバカ雑草がァ！」――な、何！？貴様環境問題を蔑ろにする気か！？」
「黙れ雑草。植物の分際で偉そうな口利くんじゃねえ。大人しく光合成してろっつたろうが。
そもそもテメェが出てから何か蠱毒の執筆に対するノリが悪くなって閲覧数も四日前から下がり調子、話自体も何か微妙になっちまってんだよ」

確かにそれは事実だが、作者の個人的な事情を敵キャラクターの所為にするというのは如何な物だろうか。

「何をわけのわからない事を言っている!?それに三日前はパソコン検定に合格し、昨日は新世紀蠍二枚を３００円で購入、試しに回した手札も絶好調と状況そのものはさほど悪くも無いだろうが！そもそも話が面白くなくなったのは蠱毒成長中自身の責任であり、我には何の罪も無いは――「五月蠅ェェェェェ！」

壮絶な叫び声と共に、リューラの振り翳した剣が残された最期の頭を幹諸共両断した。

そしてアルポの絶命を引き金に、それまで寂れた草村だった土地が驚くべき早さで密林へと姿を変えていく。

それと同時にリューラの右半身も元の異形然とした姿に戻る。どうやらモスキートの能力は解除されたらしい。

「土地が本来の姿を取り戻したってか?まぁこの際んな事ぁどうでも良い。

それより皆だ。おいバシロ、何時まで寝てる気だ?さっさと起きろ」

リューラが右肩に語りかけると、ファスナーが開き中から何時も通りのバシロが現れた。

「よう、リューラ……何か草村入ってからの記憶が無ぇんだけどどこに落っことしたか知らねぇか?」

「敵に持ってかれたんじゃねえのか?さっきまでお前ら、敵の攻撃で眠ってたし」

「何、敵だと?」

「おう、ついさっきぶっ殺した」

「ぶっ殺した…？一体どんな奴だったんだ？」
「それについては追々話す。それより先ずはこいつら叩き起こすぞ」
「そうだな。こんな所で寝てたら風邪は引かねぇでも何か別のもんになりそうだしな」
「それと秋本のクソ野郎が隠した遺産だ。それがそもそもの目的だしな」

かくしてリューラの活躍により無事アルポの麻酔攻撃から解放された一行は、繁が搾取した記憶を頼りに遺産探しへと繰り出した。

第九十九話　ご愁傷者様カス雑草（後書き）

次回、遂に廃洋館の主が姿を現す！？

第百話　クリーチャー×ヤングマザー（前書き）

記念すべき百話めの主役はあの勢力だ！

第百話　クリーチャー×ヤングマザー

―前回より―

【時にイリーさん】
【何です？】

内壁が繊維状の樹脂らしき物質によって固められた謎の通路を進むのは、二匹のよくわからない風貌の生物達。
青いアシナシトカゲのような風貌のイリーと、赤銅色をしたヒューマノイド型のペイジである。

【妖木が枯れ落ちたと聞きましたが、何かあったのですか？】
【妖木と言うと、我が家の近くに生えているあの口ばかり達者な張りぼての事ですね？
奴なら確かに枯れましたよ。諜報部からの報告によれば、同じ頃に付近でツジラ一味も目撃されているようです】
【ツジラ一味も？という事は、奴を殺したのも……】
【十中八九ツジラかその手の者でしょうね】
【しかし奴にはアレがあるでしょう？何と言ったかな……そう、あれは確か…】
【『ヴァーミン』ですね？】
【そおうそう、それです。奴はその『ヴァーミン』によっていかなるものも無差別に眠らせて動きを奪う力を持っていたはずですよね？
更にその力は絶対的であり、一度攻撃に遭えば何者にも抗うことを許さず、眠りに落ちれば決して目覚めないという……】
【えぇ。しかしツジラ一味はその『絶対的な眠りの力』をもかいくぐり、挙げ句妖木を破殻化へと追い込んだ挙げ句に殺害した、と。
そういう事でしょう】

イリーはリューラがアルポを殺害したことについて、実に軽々しく言い表した。

【……『そういう事でしょう』なんて軽々と言いますけどねイリーさん、これは大変な事ですよ？確かに妖木は我々からすれば無能の他に言い様が無いような奴だったでしょう。しかしそれでも、妖木が我が家にとってセキュリティシステムの役割を果たしていた事は確かなのです。それが無くなった今、いつ何時何者が攻めてくるやら……】

【あー、判らなくはありませんね。カイゼルさんやヴィクターさんからは『考えすぎ』とか『そんなんでどうする』とか言われそうですが】

【どうしましょうかねぇ……】

等と語らいながら二匹が進んでいると、ふと側面の扉から一人の少女が現れた。

見たところ有角種と思しき彼女の年齢は約１５から１７歳程度と思われ、明るいピンク色のショートヘアは薄暗い通路でもそれなりに目立っている。

「あ！誰かと思ったらペイジにイリーなのだ！お早うなのだ！」

【母上様、お早う御座います】

【お元気そうで何よりです。母上様】

「うむ！僕は大概何時でも元気なのだ！」

歳不相応に幼いような喋りの少女に、二匹は堅苦しい敬語で接する。それもその筈、彼女こそ九十話で言及されていた『母上』なのであった。

何故このような少女がイリーやペイジのような存在から母として認

識され、更に親子というより主従のような会話を繰り広げているのかについては、また後程言及することとする。
「それにしても二人とも、さっきはなんの話をしていたのだ？」
【いえね、何でも妖木が殺されたらしく】
「ええっ！？あの妖木が？一体何処の誰がそんな事をしたのだ？」
少女の話し口には怯えや怒りなどというものが見受けられず、単なる純粋な好奇心と驚きだけがあった。
【それがですね……調査に当たっていた部隊からの報告によれば、妖木殺しの犯人はあのツジラ一味であるという説が濃厚なのですよ】
「ツ、ツジラ一味！？まさかツジラがうちの近所に来ているのか！？」
【妖木殺し云々以前に、我が家の近辺でツジラ一味が目撃されているのは確かなようです】
「ほほー。それは凄いのだ。だとしたら次のツジラはうちでやるかも知れないのだ！楽しみなのだ！」
【楽しみって……事の重大さをお分かりですか！？】
【相手はあのツジラ・バグテイルですよ！？
我々が殺されるならまだしも、万が一母上様の身に何かあったら……】
「二人とも心配しすぎなのだ。確かに僕も内心ツジラは恐いけど、でもだからこそその恐怖を乗り越えた先に行ってみたいのだ」
【しかし母上様……】
「イリーが昔僕に勉強を教えてくれた時『この世の中で絶対にこうと言い切れる事はない』って言ってたけど、確かにそうなのだ」
【と、言いますと？】
「例えば、今でこそ僕らはここに住んでいられるけど、それが絶対にずっとだなんて言い切れないのだ。
これから先を生きていく以上、昔より辛いこと、悲しいこと、苦しいことが山のように待ち構えてるかも知れないのだ。でもだからこそ、僕らはそんな状況でも戦い抜いて行かなきゃいけないのだ。

カイゼルは言ってたのだ。『満足できないまま死ぬのはとても不幸な事だ』って。
キュリオは言ってたのだ。『逃げることは大事だけど、逃げたっきりは駄目だ』って。
ヴィクターは言ってたのだ。『敵は恐れるべきものであり、乗り越えるべきものでもある』って。

だから思うのだ。結果がどうなっても、僕はツジラと戦わなきゃいけないんだって。
僕はみんなのお母さんだから、みんなに守られたり助けられたりしてばっかりじゃ駄目なのだ。
だから僕はツジラと戦うのだ。絶対に勝つなんて大それた事は言えないけど、全力を尽くすのだ」
【母上様、宜しいのですか？】
「僕はそれで大丈夫なのだ。それにペイジ、『辛いときこそ笑って楽しめ』って言ったのは、他でもない君自身なのだ。
だから僕は、ツジラと戦う事を楽しみに思うようにしたのだ。どんな事をされてもへこたれないとか、死んでもみんなを守り抜くとか、そういう覚悟は怖くて出来なかったけど、でも僕は『とりあえずその事だけは』と思って覚悟を決めたのだ」
【母上様……貴女という方は……】
「イリー、ペイジ、ちょっと早いけど僕のお願いを聞いてくれる？」
【はい、何なりとお申し付け下さい】
【絶対にとは言いませんが、力の限りを尽くしましょう】
「これは今夜、会議でみんなに言おうと思ってた事なのだけど……僕と一緒に、ツジラと戦ってほしいのだ」

その言葉を受けた二匹は、少女に敬礼しながら言った（手足の無いイリーはとぐろを巻いて尾で敬礼した）。

【【勿論で御座います、母上様！】】
【我等の命四割、全て母上様の為に！】
【我等の命四割、全て己自身の為に！】
【【そして残る二割、我等が絆の為に！】】
【【血族の誓いを！】】

「二人とも、ありがとうなのだ……」

かくしてその夜を皮切りに、母上と呼ばれる少女を頂点とする廃洋館の勢力は対ツジラ戦の為の準備を開始した。

第百話　クリーチャー×ヤングマザー（後書き）

次回、遂に廃洋館戦か！？

第百一話　りっぱな英傑になる方法。（前書き）

繁達も動き出す！

第百一話　りっぱな英傑になる方法。

―前回より―

「さて、そんなわけで一昨日はやっとの思いで目的の一つを果たせたわけだが」

遺産探しから二日後、繁は何時も通りにロビーでそんな風に話題を切り出した。

「このままの流れで今回の本題『廃洋館に潜む何か』に早速ながら挑もうと思う。

供米神官、例のデータを」

「畏まりました」

供米は部下に命じてホワイトボードを引っ張り出させ、所々赤い丸印や青い曲線が書かれた地図を貼り付けた。

「此方が今回発見された廃洋館周辺を地図化したものとなります。御覧の通り廃洋館の背後には幅が広く流れの緩やかな河川が流れており、廃洋館に潜む存在が我々に匹敵するかそれ以上の知性体である場合ここから生活用水や食料を確保していると見て間違いないでしょう」

「敵の警備はどうなってます？傭兵団の皆さんは正面から挑んだらエライ目に遭ったって聞きましたけど」

「小型のライブカメラを搭載したカワネズミを送り込みましたが、廃洋館へ到達する前に川底へ引きずり込まれ依然消息不明のままです。

ツジラ殿の報告によれば死骸として発見されている謎の生物の一つには水棲のものが居たと聞きますので、その手の者の可能性も否定出来ないものかと」

「魚群探知機などで敵の位置を探り出すことは出来ませんか？」

「試してみたのですが、それらしき影は見当たりませんでした」

続いて供米は地図に描かれた赤い丸印を指し示した。

「これら地上部に記された赤い丸の位置に立ち入ると、連鎖的に護衛を勤めていると思しき生命体三体ほどが地中・樹上・上空から現れ襲い掛かってきます。

私が派遣した傭兵団に壊滅的なダメージを与えたのもこの類であると推測できます」

「じゃあ何で調査に向かった奴は生き残ってんだ？」

「そりゃ俺様が死ぬ気で行ったからだぜ、銀髪の嬢ちゃん」

「…アンタ誰だ？」

リューラの問いかけに答えたのは、本来薄く柔らかいはずの腹部に無数の傷跡を持つ地龍種または有鱗種と思しき大男だった。

「申し遅れたな。俺様は元アクサノ海洋防衛隊海将補・第二十六代『サイレントアビス』こと鰐系有鱗種のクンビーラだ」

「有鱗種なのですか？失礼ながら私、スコミムス系の地龍種かと思っておりましたが」

「おいおい、それじゃ『ワニモドキ』じゃねぇかい。

この通り俺はれっきとしたワニだぜ、スーツの嬢ちゃん」

「ソシテアクサノ海上防衛隊海将補及ビ歴代最年少ノ『サイレントアビス』デモアル」

「止せやヌグ。その肩書きも所詮は『元』だ。そういうお前も歴代『デスサイクロン』一の天才だって専らの噂じゃねぇか」

「フン、ソレハラビーレマノ企業ガ商品ノ宣伝ニ都合ガ良イカラト言ッタダケダ」
「……つか、ちょっと聞いて良いか？」
「ん？」
「何ダ、ツジラ殿」
「お前さん方さっきから『サイレントアビス』だの『デスサイクロン』だの、脳味噌足りてねぇで厭世気取ったバカ中坊が聞いたら『厨二病乙ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ』とか抜かしそうなその異名は何だ？」
「それについては儂に説明させてくれんかの」
等と言いつつタイミングを見計らうかのように現れたのは、質量と体積で周囲の全てを圧倒する象系禽獣種の老人だった。
過去に何があったのか、右の牙が思わせぶりにへし折られている。
「儂の名はエーカダンタ。元アクサノ陸上防衛隊陸将兼、初代『レイジアース』だった者じゃ」
「り、陸将！？陸将って要するに将軍の事よねリューラちゃん！？」
ニコラは妙に取り乱しながら言った。ノモシア王族には平然と喧嘩を売る癖に、前に現れたのが他大陸の防衛隊将官だと判った途端何故こうも取り乱すのだろうか。
「おー、そうだなー」
そして何故か気の抜けたような喋りのリューラもリューラである。
「そうだなーってアンタ、陸将でしょ！？」
「だから何だよ。将軍っつったって馴染むとそんなビクつく程でもねーよ。

現役時代上官に連れられて飲みに行ったり、上官連れてゲーセン巡りした私が言うんだ間違いねぇ」

「いや、それはそれでアレなんじゃねぇか？まぁニコラ、とりあえず落ち着け。

……それでご老体、説明とは？」

「うむ。アクサノ防衛隊には古くより各分野で華々しい活躍をした者を『英傑』と定め、その者に称号を授与するという制度があっての」

『列甲大学で言う「スターダスト」のようなものですね』

「成る程ねぇ。そういう事か」

「称号は全部で六つあり、それぞれ所属や技能によって異なる称号が与えられるのじゃ。

例えば海上防衛隊の英傑は『静寂深淵部（サイレントアビス）』、航空防衛隊なら『死神（デス）大暴風（サイクロン）』、陸上防衛隊なら『激昂地表面（レイジアース）』とな」

「残る三つは如何なる英傑が授かるのです？」

「『煉獄紅炎（ヘルプロミネンス）』は鉄砲や爆発物といった飛び道具の達人、『光輝聖霊（シャインスピリッツ）』は参謀や指揮者、衛生兵など善戦に立たぬ者の内での英傑に与えられるのじゃ。

ただ、『暗黒魂魄（ダークネスソウル）』という称号だけは何を基準にしておるのかわからんのじゃがな」

「そうだったのですか。という事は……」

「ソウダ。エーカダンタ老ハ嘗テ陸上防衛隊ノ陸将トシテ、天災ヤ海神教ノ脅威カラ人々ヲ守リ続ケタ英雄ダ」

「英雄と呼ばれるような事は何もしとらんよ。それより神官殿、調査の結果報告とやらを続けてくれんか？」

「はい、畏まりました。

先程も言うように、クンビーラ氏による捨て身の献身もあり、敵の出現位置や大まかな形態に関するデータを得ることに成功しました」

かくして対廃洋館戦に向けての作戦会議が始まった。

第百一話　りっぱな英傑になる方法。（後書き）

次回、閑話休題で過去話！

第百二話　メテオ・ジ・エッグ　前編（前書き）

南極に落ちてきた謎の金属塊はラビーレマ某所に惨劇をもたらした。
では、北極に落ちてきた正体不明の隕石はアクサノ某所に何をもたらすのか！？

第百二話　メテオ・ジ・エッグ　前編

ある時、北極と南極へ空から正体不明の何かが落ちてきました。
観測隊によって発見されたそれらは、どちらも詳しい調査を行うため、それぞれアクサノとラビーレマの研究機関が引き取ることになりました。

―

アクサノのあるところにある研究機関が引き取ったのは、北極に落ちてきた謎の隕石でした。
この隕石というのはよく見る普通の隕石と比べると規格外に大きく、また普通では考えられないような奇妙な形をしていました。
その表面には太く丸い円錐形の突起物が生えていて、それらは熱せられた鉄のように、幽かにですが赤く光っているのです。
表面は大変に脆い岩石のようなもので、少しの揺れでもボロボロと崩れ落ちるそれは詳しく調べてみても何で出来ているのか解りません。
誰も見たことのない、どんな資料にも載っていない元素が、ありえない形に繋がっているのです。

その上、機械で調べたところ隕石の中は謎の液体で満たされており、中央には絡み合った蔓状のもので周囲から支えられている球体と思しき何かが鎮座していました。
ただそれでも、隕石の正体は解らないままでした。内部に謎の液体が詰まった岩石というだけでも珍しいのに、ましてやその中に無数の蔓で支えられた球体が収まっているものなど有り得よう筈がなかったからです。

しかしそれでも諦められないのが、ヒトの性というものなのでしょう。研究機関は所属するあらゆる分野の研究者を集め、隕石の正体について断定するよう命じました。

委員会が『明確な答えを導き出せた者の研究費を来期から望むだけ出してやる』などと付け加える辺り、どれだけ必死だったのかが解るでしょうか。

研究者としてもやはり研究費は死活問題だったのか、それとも学術者としの本能が騒ぐのか、はたまたどちらもなのか、元から居た地学者をはじめ、化学者、物理学者、工学者、生物学者、機関に所属する学者達が、こぞって限られた資料から隕石の正体を突き止めようとしました。

限られた資料から探し出そうとしたというのは、委員会からの言いつけで隕石を削ったり割ったりする事が禁止されているからでした。

研究者達はいろいろな理由をつけて隕石の正体についての推測を打ち立てましたが、委員会はそれらに最もらしい言い掛かりと委員会権限で無理矢理押し切ってしまいます。

というのも、委員会は最初から研究者の正解を認めようなどとは思っていなかったからです。

委員会の目的、それは研究者達が手間暇かけて得た研究データを手中に収め、それを元手に自分達で隕石の正体を突き止めて手柄を独占することでした。

アクサノ民にしてはあくどい事をする奴だなと思われるでしょうがそれもその筈で、当時の委員会関係者は全員が全員海神教関係者の家系にあり、その考え方もアクサノ民とはほど遠いものだったのです。

委員会は最初、自分の作戦が上手く行くだろうと考えていました。それでも刃向かう者が現れれば、裏から部下を回してどうにでも出来たからです。

しかし、委員会の作戦は一人の若い研究者によって失敗に終わります。

―ある日の委員会室―

「失礼します。クルス・ディーエズです。隕石についての件で参りました」

「どうぞ、お入りなさい」

入ってきたのは海洋系竜属種の青年クルスでした。彼の研究分野は動物学で、特に繁殖の研究を進めていました。

「様々な観点から調べてみたのですが、あの隕石の正体…何らかの生物の『受精卵』ではないでしょうか」

「受精卵？何故そうお考えに？」

「はい。私が着目したのは『内部が液体で満たされており、内部に蔓状のもので支えられた球体がある』という点です。私の持てる知識の範囲内でこういった特徴が見られるものといえば一つ、『卵生である脊椎動物の受精卵』でしょう。液体は卵白、球体は卵黄であると推測できます」

「では球体を支える蔓状のものは何だとお考えですか？」

「恐らくカラザでしょう。卵黄の回転を防ぎ、胚の位置を整えるものです」

「成る程。しかし証拠はそれだけですか？我々委員会としては、信憑性の薄い情報を認可する事は極力避けたいのですが」

「無論、それだけではありません。此方をご覧下さい」

そう言ってクルスが差し出したのは、何やら脊椎動物らしきものが画面中央で丸まっている写真でした。

「これは一体？」
「隕石の断面図です。先週撮影しました」
「な、断面図！？」
「あなたは我々委員会が定めた規約を忘れたのですかっ！？これは重大な規約違反ですよ！」

規約違反、そう言われればここの研究者は誰しも怯えざるを得ません。しかしクルスはそれでも尚顔色一つ変えずに言いました。

「何が規約違反なのです？私は隕石を割っても削ってもいませんが」
「ぬぅ……それは、そうですが……しかし受精卵など……」
「現物を見なければ信じられませんか？でしたら……おい、あれを」
「畏まりました」

クルスの部下が持って来たのは、内側から突き破られて萎んだ隕石でした。

「勝手ながら保管庫の警備員を買収して監視カメラの映像をこちらに回させました」
「な、何ィ！？」
「子供は先々週に生まれましてね。こちらで極秘に育てたのですが、いやこれはまた素晴らしい……この惑星の生物とは思えない成長ぶりでしたよ」
「な、何だとっ……貴様、我々からあれを盗み出したというのかっ！？」
「盗み出した？人聞きの悪い事を言うのは止して頂けませんか。私は研究材料をあるべき場所に移しただけですよ」
「在るべき場所に移しただと！？」
「そうです。海神教の聖句にも『砂地這う鮪無く、沖進む鯊も無し』という一説があるでしょう？

つまり何者にも在るべき場所とあってはならぬ場所があるという事ですよ」

「海神教？貴様、海神教の関係者か！？」

「えぇ。私は代々海神教に従事する家系の産まれですが」

「ならば私の名も当然知っているだろうな！？」

「えぇ、まぁ。貴方は確か……現『セイレーン支部』管轄の支部信徒ターリー・モントラム氏でしょう？」

海神教には『レヴィアタン』『マーメイド』『ケートス』等、地球では架空とされているもののカタル・ティゾルでは古代生物としてその名が知らている動物群の名前を冠した『支部』がそれぞれ違った仕事を持っていました。

支部の頂点には『支部信徒』と呼ばれる中間管理職が居り、委員長ことターリー・モントラムもその一人でした。

「その通りだ。我々委員会は全員海神教幹部であり、そもそもこの研究所のバックには海神教がついている！この意味がわかるか…？」

脅すような問いかけに、しかしクルスはあっさり答えた。

「……いえ、解りません」

「わからんのかよ！ええい、仕方ない。折角だから私が直々に教えてやろう。

つまり我々委員会に楯突くこととは、そのまま海神教という組織そのものへの反逆にもなるのだぞ！？」

「……それが何か？」

「いや恐がれよ！お前も海神教の怖さなら良く知っているだろう！？」

「えぇ、そりゃあまぁ。私も関係者ですし」

「だったら命乞いの一つでもしたらどうだ！？どのみちお前のよう

な一般信徒(ヒラ)が私に勝つことなど――「御言葉ですが、Ｍｒ．モントラム」―な、何だ!?」
「私はそこいらに居るような一般信徒などではありません」
「何?では何だと言うのだ?」
「はい。実は私―」
「うむ」
「本部の方で中堅の下位信徒として動かせて頂いているものでして」

その言葉に、委員会の面々は凍り付きました。下位信徒は本部に存在する幹部の中で最下位の存在であり、細かく１２段階にランク分けがされているのですが、それらはどんなに位が低くても複数の『支部信徒』を束ねるだけの権限は最低限持ち合わせているのです。しかもこの場合中堅とは大体上から5番目から8番目あたりを指すのであり、つまりモントラムは自分よりずっと偉い上司を相手に好き勝手怒鳴り散らしていたという事になるのです。

『――』

ショックの余り言葉も出ずにただ混乱するばかりの委員会の面々へ、クルスは言いました。

「それでは……隕石の件は今後我々が全面的に引き受けることとします」
「え……あ……は、はい!畏まりました!仰せのままにっ!」
「それと……」

それまでの覇気が何処へやら、小物然と振る舞うしか手立ての無くなったモントラムへ、クルスは更に付け加えました。

「隕石の正体は突き止めましたので研究費の方を宜しくお願いしま

すね、モントラム委員長？」

かくしてアクサノの研究機関で起こった『北極隕石騒動』の波は次第に収まって行くかに思えました。

しかしながら騒動はまだ終わってなどいませんでした。しかし、それもその筈なのでしょう。

何せこの一件、これより始まる恐ろしき『事件』の幕開けを告知するブザーに過ぎなかったのですから。

第百二話　メテオ・ジ・エッグ　前編（後書き）

隕石から産まれた生物の正体とは！？
次回、海神教信徒にして生物学者クルス・ディーエズのおぞましい計画が明らかに！（なるのか！？）

第百三話　メテオ・ジ・エッグ　中編（前書き）

クルスは家路に就く

第百三話　メテオ・ジ・エッグ　中編

―前回より―

「おかえりなさい、先生。本日は如何でしたか？」

クルスの自宅で彼を出迎えたのは、部下である乙姫海老系外殻種の女・青波春女でした。

「只今戻りました。何時にも増して素晴らしい一日でしたよ。ところで、”彼”の様子はどうです？」

「相変わらず元気ですよ。どんなものも好き嫌い無く食べてくれますし、相変わらず芸術にに理解があるような素振りも見せていますし、研究員の皆は息子か弟が出来たみたいだと言っています」

「そうですか。それは何よりです。夕食が終わったら挨拶に行くことにしましょう」

「はい。それより大丈夫だったんですか？彼の件を委員会に報告に行くと言ってましたけど……」

「心配してくれていたんですね？有り難う御座います、青波さん。でも大丈夫ですよ。

最初こそ何人かから批判を受けましたが、誠意を以て正当な理由を説明したら委員長さんが解ってくれたようです。

証拠を見せたら認めてくれましたし、私の仮説は委員会によって正式に認可されることが決定したようです」

「では、研究費を増やして頂けるるんですね？」

「えぇ。これで来期からはもっと色々な事が出来るようになりますよ」

「そうですね。余ったお金は此方で好きに使って良いわけですし、そうなると益々使い道を冷静に考えなくてはいけませんね」

「その通りです。大金を得たからと言って、それをむやみやたらに浪費するのは愚行というもの。せめて一つか二つくらい、買う物の目星をつけておかねば。
我々ヒトは獣と違って知性があるのですから、可能な限りそれを活用しない手はありません。
ささ、ひとまず今は夕食にしましょう。青波さん、皆さんに声を掛けてきて下さいませんか？私は支度を始めますので」
「解りました。では」

そう言って春女が立ち去ろうとした時、突然地下通路に続く階段を慌てて駆け上がってくる者が居ました。
見ればそれは、クルスの部下として研究に協力するシビレエイ系鰓鱗種の青年でした。

「せ、先生っ！ディーエズ先生っ！」
「一体どうしたのです、ティンギー君。また研究所で実験体が暴れ出したのですか？」
「いいえ、そうではな、くっ！地下の方で、ですねっ！」
「地下……もしや”彼”に何かあったのですか？」
「先生、これはかなり大変なことになってしまったのかもしれませんよ？
『背後で水素爆発が起こっても何不自由なくクレジットカードタワーを完成させてしまうよう』なんてよくわけのわからない例え方をされるティンギー君がここまで取り乱しているんですし、直接地下に行って見た方が良いのでは？」
「それもそうですね。夕食は後回しです。ティンギー君、今一度現場まで案内して頂けますか？」
「畏まりました」

どうにか落ち着きを取り戻したティンギーと共に、二人は地下にあ

る研究室へ向かいました。
この研究室はクルスが余った研究費とその他の収益を費やして造り上げたもので、勤め先に備わった研究室よりずっと広く、色々な設備が備わっていました。
クルスが『彼』と呼ぶ、隕石から産まれた謎の生物は生来ここで管理されており、日々その謎を解明しようと研究員達が交代で色々なことを調べているのでした。

―地下研究室―

「ディーエズ先生！来て下さったんですね！」
「どうしたのです？一体何が起こったというのですか？」
「それが、ですね……”彼”の件なのですが……」
「”彼”がどうかしたのですか？」
「いえ、”彼”自身の事ではなく……”彼”の話し声を聞いたという者が現れまして……」

これには流石のクルスも驚きました。今の今まで『彼』が文字や芸術を理解するという事があった事から知能の高さは証明済みだったのですが、こと声に関しては大概得体の知れない呻き声や金切り声であり、それらの解析には未だ成功していなかったのです。

「な、何ですとっ！？それは一体誰なのです！？」
「はい。私です」

集団の中から現れたのは、比較的霊長種に近い姿のハクジラ系禽獣種・護藤でした。

「護藤さん……本当に、”彼”の声が理解できるのですか？」
「はい。つい先程から突然なのですが、”彼”の言葉が耳に響いて

来まして……」
「それで、”彼”は何と?」
「はい……確か、『この絵画、この音楽は実に素晴らしい。共に語り合える恋人が居れば良いのに』……だった筈です」
「恋人……?」
「はい。確かに『恋人』と言っていました。何故私にだけ聞き取れたのかは解りませんが……」
「そうですか……恋人……成る程。ひとまず護藤さん、貴女の身体を調べさせて頂いても宜しいですか?」
「はい。是非お願いします。学術に携わる者の端くれとして、私自身も知りたいと思いますので」
「解りました。皆さん、もし何でしたら先に夕食を取っていて下さい」
「あ、私も行きますよ先生」

護藤の身体を調べたクルスと春女は、彼女の身体に起こったある異変の存在を突き止めました。
それはプリンキピサ・サブマを扱える飛姫種が体内に持つＰＳ因子と同じような存在『タンビエン因子』というものでした。
タンビエンとは林霊教の主神たる森の精霊であり、老齢ながらそれ故の強い力と頭脳を持ち、神話ではあらゆる精霊や神性の力を上回存在として知られていました。
『書架』など林霊教絡みの特殊な力も、タンビエン若しくは彼の眷属が産み出したと言われているほどです。

そんなタンビエン因子が宿主に分け与える力とはつまるところ『ヒトならざる生命と対話・同調し、それらを使役出来る』というものでした。
護藤は因子の力が弱かったが為に話し声を聞くので精一杯でしたが、クルスにとってはそれだけで十分でした。

それを知ったとき、彼の脳裏には既に安易ながらも恐ろしい計画が浮かび上がっていたのですから。

第百三話　メテオ・ジ・エッグ　中編（後書き）

次回、都市市役所にて大事件勃発！？

第百四話　メテオ・ジ・エッグ　後編1（前書き）

クルス達の決行する作戦とは？

第百四話　メテオ・ジ・エッグ　後編1

―前回より―

三日程経った頃、ある都市の市役所にてちょっとしたテロ事件が起こりました。
人々で賑わう市役所に、突然大容量のコンテナを引っ張った巨大なトレーラートラックが突っ込んできたのです。

「うわあああああああああ！」
「ぎゃあああああああああ！」
「助けてくれぇー！」

公園ほどの広さを誇る市役所の駐車場へ猛スピードで突っ込んできたトレーラートラックは、職員や利用客の車という車を無茶苦茶なドリフト走行で薙ぎ払いながら、トレーラートラックはコンテナ共々突っ込んでいきます。
その様たるやまさに純然たる質量の暴力と言った具合で、城か要塞のように巨大な市役所へ横転した状態で背中から突っ込むという散々な有様でした。

当然建物内部はパニック状態に陥り、死傷者が続出しました。
職員達は我先にと逃げ惑う利用客達を纏め上げんとして奔走しますが、それさえも殆ど意味を成しません。
中には暴動鎮圧のために魔術で突風を起こしたり、スタングレネード（炎ではなく強い光を放つ手榴弾）を使う職員まで現れました。
しかしながら、パニックは何をやっても収まる様子がありません。

そんな中、突如大きな爆発音と共に横転したトレーラートラックの

ドアが吹き飛びました。
爆音のショックによって場が凍り付いたことにより暴動は一瞬で鎮圧されましたが、次に何が起こるのか全く予想出来ない生存者達はただただ不安と恐怖に怯えることしか出来ません。

ふと、トレーラートラックの中から覆面で顔を覆った霊長集の男が現れました。
運転手と思しき中年男性は青と白で彩られた裾の長い奇妙な衣類を着ており、彼が海神教の関係者である事を如実に物語っていました。

横転したトレーラートラックの上に立った運転手は、拡声器を手に取って言いました。

「動くなァッ！この場は我々海神教セイレーン支部が占拠したッ！
貴様等は人質であり、我々の奴隷であるッ！
これ以降貴様等は我々の命令に従って貰う！命令に背く者は問答無用で処刑するッ！」

運転手は天上に向かってサブマシンガンを乱射し、それに怯えた生存者達は思わず縮こまります。
ある職員が魔術を放とうとしましたが、突如得体の知れない不可視のエネルギーが働きかけて魔術は消え失せてしまいました。

「尚、今この空間は海神教に伝わる秘術によって我々が許可したもの以外の一切が無力となるように設定してある！
よって魔術師は勿論、学術やあらゆる武器の類もこの場では意味を成さない事を念頭に置いておけ！」

演説を終えた運転手は、続いて横転したトレーラートラックのコンテナの最後尾を力強く蹴り上げました。

するとその衝撃でコンテナの扉が抜け落ち、中から種族も体格も武装も様々な海神教の信徒達が現れ、それぞれが出入り口等で武器を構えて見張りにつきました。

―同時刻・都市の外れ―

「順調なようですねぇ、あちらは」

都市の外れにある住宅街に停車する、ナンバープレートのないワゴン車の窓から長い首を出して外の様子を伺うのは、海神教信徒クルス・ディーエズでした。

「はい。先生の目論み通り市内の警察機関や報道陣は全面的に市役所へ人員を割いていますね。
本来なら本部に残すべき必要最低限の人員さえ別件で外部に向かわせてる辺りかなりの徹底ぶりかと」

「それも市内ばかりか市街の警察署にまで出動要請だしてますよアイツ等。
馬鹿ですねぇ、そんなんだから能無しの民間人共からも税金泥棒呼ばわりされるんだ」

後部座席から聞こえてきた声の主は、クルスの部下である青波とティンギーでした。
もうお気づきかも知れませんが、クルス同様この二人も海神教の信徒だったりします（というか、クルスは海神教関係者以外を部下にしないんですが）。
二人ともそれぞれ『スキューレ支部』『ラハブ支部』管轄の支部信徒であり、これら二つの支部は現在市役所を襲撃している『セイレーン支部』より上位に属していたりします。

市役所での騒ぎが益々大きくなっている事を改めて確認した三人は、早速作戦に取り掛かります。

まず運転席のクルスが窓を閉めきってエンジンをかけるのですが、その時の三人は車内なのに何故かヘルメットをかぶり、災害救助や工事の作業員が着るような耐衝撃仕様のスーツを着込みました。

「では二人とも、良いですか？」

二人が頷いたのをルームミラーで確認したクルスは、車のアクセルを力一杯踏み込み、狭い道の中を猛スピードで進んでいきます。途中通りがけの人々と出会しもしましたが、（一応最低限のルールとして轢き殺さないよう配慮はしたものの）気にも留めずにクルスは進んでいきます。

そしてある場所にさしかかった所で、クルスは勢い良くハンドルを切りました。

路面とタイヤが擦れ在って甲高い音が近所に鳴り響きますが、それでもワゴン車は止まろうとしません。

そして次の瞬間、クルスの運転する暴走ワゴン車は、街にある児童養護施設『キンギョソウ』へと正面から突っ込んだのでした。

―児童養護施設『キンギョソウ』―

突然の事故にパニックを起こす子供達を落ち着かせようと、職員達は必死に奔走していました。

しかしそんな被害者達を嘲笑うかのように、三人は爆竹と煙幕で更に騒ぎを大きくしてしまいます。

「ターゲットはこの子です。なるべく迅速に探し出して下さい」

「はい」
「お任せを」

施設の奥へ向かう二人を見送ったクルスは、小型の連射式麻酔銃で無抵抗なままの子供や職員を次々と眠らせていきます。

「殺さないだけ有り難いと思いなさい。私ほど平和的な海神教関係者はそう居ません」

クルスがそう言っている内に、どんどん煙は晴れていきます。

「先生！」
「お待たせしました！」
「おや、案外早かったのですね。他の子供や職員はどうしました？まさか殺しては居ないでしょうね？」
「大丈夫ですよ。全員気絶させました」
「少し手荒になっちまいましたが、死んじゃあ居ない筈ですよ。それより先生、こいつで大丈夫ですか？」

ティンギーの腕に抱かれていたのは、大体１０歳~１２歳くらいの女の子でした。クルスが使ったのと同じ麻酔銃の作用で眠らされているのでしょう。

「えぇ。確かに彼女で間違い在りません。彼女こそ、今世紀最高品質と言っても過言でない程に上質なタンビエン因子の保有者です。これならば”彼”も満足するでしょう。余計な記憶は全て消し去って書き換えてしまえば、ふと思い出してショックに陥るという事もないでしょう」
「じゃあ早いところ逃げましょう。近隣住民が通報してるかも知れませんし」

「それにセイレーン支部じゃ高が知れてますぜ、先生。ここはさっさと逃げるに限ります」
「それもそうですねぇ。ではそろそろ撤退するとしましょうか。青波さん、一応睡眠の魔術を施しておいて下さい。変なところで薬が切れたらそれこそ洒落になりません」
「わかりました」

かくして見事作戦を成し遂げたクルス達でしたが、一方のセイレーン支部は調子に乗りすぎた結果駆けつけた機動隊の突入を許してしまい、全員が射殺されてしまいました。
これにより空席となった委員会の座はクルス達が引き継ぐこととなり、隕石から産まれた『彼』に関する研究もまた、新たなる局面を迎えようとしていました。

第百四話　メテオ・ジ・エッグ　後編1（後書き）

次回、攫われた少女と『彼』の物語！

第百五話　メテオ・ジ・エッグ　後編2（前書き）

『誘拐された少女』と『隕石生まれの彼』の間柄や如何に

第百五話　メテオ・ジ・エッグ　後編2

―前回より―

隕石から産まれたそれは、くすんだ緑灰色の外骨格と、有機的でありながら何処か機械的でもあるフォルムが特徴的な生物でした。
甲殻類のような外骨格、竜種のような長い首、頭足類のような力強い触手、気分によって色の変わる宝玉のような目玉、音楽や絵画などの芸術を理解する事が出来る程に高度な知能等、その生物はとても奇妙で謎めいていました。
誕生を見届けて以降この生物にすっかり魅了されてしまったクルス達は、委員会の座についてからもその成長を懸命に見送り続けました。
因みにクルス達が謎の生物を『彼』と呼び男性として扱っているのは、骨格や内臓の形状や成り立ちから判断した結果でした。

「して、如何です？彼らの様子は」
「順調に馴染んでいるようですね。やはり記憶を消してほぼ自然体の状態まで初期化したのが功を奏したのでしょう」
「いやぁ、凄いですよ全く。今は仲良く飯食ってますがね、初日から一日中一緒ですから」

三人が見つめる先には、簡素な中に部屋の主が佇むだけのアクリル水槽から一変して高級な一軒家同然の内装に姿を変えた飼育室がありました。
麻酔銃と魔術によって眠らされた状態で誘拐され、記憶を消去された少女と『彼』と呼ばれる謎の生物は現在、クルスの私財と研究費によって設立されたこの部屋の中で同棲中のカップルが如くに振る舞っているのでした。

―飼育室の中―

「ズィトー、ズィトー、聞いて欲しいのだ！」

【どうしたのだね？】

「今日のお昼に研究員のお姉さんから面白い話を聞いたのだ！」

【ほう、面白い話か。是非聞かせて欲しいな】

「えっと、漫画やアニメでよく読者や視聴者に向けてキャラクターが話し掛けたり、お話が気に入らなくなって作者に文句をつけたりするでしょ？」

【あぁ、『メタ発言』の事だね？】

「そうそう！その『メタ発言』なんだけど、もっとかっこいい呼び名があるって話なのだ！」

【格好の良い呼び名？】

「そうなのだ！何か『第四の壁を超える』とか『第四の壁を壊す』とか、そういう言い方もするらしいのだ」

【第四の壁か。確かにお洒落で気の利いた言い方だね。それで、その由来とは何だい？】

「大本の由来は舞台でやってるお芝居らしいのだ。お芝居の舞台は四角形で、お客さんが観客席から見ているのが『第四の壁』なのだ」

【成る程。つまり『第四の壁』とは、観客の居る『現実世界』と役者の居る『空想世界』とを隔てる為に存在が仮定される『不可視の壁』というわけだね？】

「その通りなのだ。だから『現実』と『空想』を隔てる『第四の壁』を超えたり壊したりする事は、立派なメタ発言なのだ。当たり前の事かも知れないけど、新しい事を知っていくのってとっても楽しいことなのだ！」

【あぁ、それについては私も賛成だよ。私達にはまだまだ知らないことが多すぎる。だからもっと、色々なことを学ばなければならない……】

こうして文面を読んでいると解らないかもしれませんが、『隕石生まれの彼』こと『ズィトー』の発する言葉は、タンビエン因子を持たない者にとって獣の唸り声としてしか認識できないという事を改めて思い出して下さい。
その上ズィトーの姿というのは、先程も述べましたとおり『外骨格と触手を持つ、半ば機械的な頸長竜か大蛇のような姿』なのです。よって文面だけなら微笑ましく思いようのある会話風景も、傍目からは恐ろしげで正体不明の怪物にピンク色の髪の少女が一方的に語りかけているようにしか見えないわけであります。

しかしクルス達はズィトーが持つ宝玉のような三つの目玉から彼の感情を読み取る術を知っていましたし、そこから読み取るまでもなく彼らには低質ながらもタンビエン因子を持つ護藤が居ますから、会話文を彼女に翻訳させてしまえば大概観察には苦労しなかったのでした。

そして少女とズィトーの同居が始まって一年半が過ぎた頃、研究所全体が喜びに包まれるような事態が起こりました。
あれからお互いを恋人以上の存在と見なすようになった彼らの間に、大勢の子供達が産まれたのです。
それらはいずれもズィトーに似てよくわからない姿をしていましたが、少女の血を継いだ証なのかヒトの言葉を話す事が出来ました（とはいっても、電子加工されたような奇妙な声でしたが）。

産まれながらにして両親顔負けの知恵を持っていた子供達は、少女を母上、ズィトーを御大と呼び（何故父上様と呼ばないのかは解りません）、それぞれ自分達の名前を名乗るまでしました。

金色をした恐竜のような姿の『カイゼル』は、他の子供達から頼ら

れるリーダー格でした。
『カイゼル』を細く銀色にしたような姿の『キュリオ』は、穏やかで心優しい性格でした。
成人男性ほどの背丈をした赤銅色のヒューマノイド『ペイジ』は、理性的で手先が器用でした。
特に言い表すことの出来ない奇妙な姿をした『ウィルバー』は、用心深い性格で皆を助けます。
ゼリーのような身体の『エイロン』は、パワフルでありながら機転の利く名参謀でもあります。
青くて細長い身体の『イリー』は子供達の中で一番小柄でしたが、コンピュータの扱いや計算がとても得意です。
マントを着た蟲のような姿の『ネフル』は心配性で恐がりでしたが、誰にも負けない魔術の天才でした。
子供達の中で一番身体の大きな八本脚の『ヴィクター』は、赤い身体が示すとおりに情熱的で好戦的な戦いのプロでした。

クルスは子供達を温かく受け入れ、彼ら専用の居住区を自宅の地下に造り上げました。
彼らが愛しかったという事もありますが、本当の理由は彼らを立派な海神教の信徒に育て上げるという事でした。
未知の力を持つ子供達の力を以てすれば、林霊教やアクサノ防衛隊を倒すだけでなく、他の大陸をも制圧・支配する事が出来ると考えていたからでした。

しかしその半年後、クルスの企みは思わぬ形で崩れ去ってしまうのです。

第百五話　メテオ・ジ・エッグ　後編2（後書き）

次回、クルス・ディーエズ生涯最大の危機！

第百六話　メテオ・ジ・エッグ　後編3（前書き）

異変が訪れたのは半年後……

第百六話　メテオ・ジ・エッグ　後編3

―前回より―

子供達が産まれて半年が経った頃、事件は起こりました。
商店街へ買い出しに出掛けていた新人研究員・宮田が何者かに襲撃され重傷を負ったのです。
宮田はクルスの計らいにより伯父の運営する病院に担ぎ込まれましたが、懸命の治療も虚しく死亡してしまいました。

―後日・伯父の自宅にて―

「宮田の件は、本当に済まなかったと思っている」
「いえ、良いのですよ。宮田君の死は認めがたいものですが、だからといって伯父様や医師の皆様を責めるのは馬鹿の真似というものです」
「そうか……クルスは相変わらず優しいな。海神教にあるまじき優しさだ」
「愛と絆の尊重はヒトとしての基礎です。種族も宗派も関係ありませんよ」
「それはそうだが……」
「それで、本題は何です？まさか瀕死の患者を救えなかった事を謝罪するだけの為に呼びだしたわけじゃありませんよね？」
「勿論、本題はここからだ。実は近頃、本部に不穏な噂が流れていてね。本部に居る事のない君らは知らないだろうが、近頃内部で反乱が起こりそうなんだ」
「反乱？それのどこが不穏な噂だと言うんですか？御言葉ですが伯父様、以前より冗談の腕前が落ちましたね？」
「私は冗談など言っているつもりは無いんだが」

「いえいえ、失礼ながら冗談ですよ。そもそも我が海神教の歴史とは血塗られた戦いの歴史でしょう？
遙か昔―それこそ『海神教』が『海神派』という単なる林霊教の一宗派であった頃から、幾度と無く繰り返されてきた事じゃありませんか。
ヤムタ語で言うところの『ゲコクジョウ』による『テンカトリ』を夢見た者共の数など、それこそ浜辺の砂の数ほども居る。当然、九割以上がしくじって自滅していますが……」
「すまない、『反乱』というのは少し語弊があったかも知れないな。正しくは『組織の転覆』かも知れない」
「組織の転覆？」
「そうだ。何者かが裏で暗躍し、今の信帝をその座から追い落とさんと狙っているらしい……あくまで噂だが」

信帝とは、海神教の組織内で最上位にある階級の事です。

「アノマ信帝を？いきなりですか？」
「噂によればな」
「妙な話ですねぇ。普通は最低でも上級信徒から攻めそうなものですが。用心深い者ならば、支部信徒からというのも普通ですし」

事実、過去に居た反逆者の内極めて少ない成功者はその殆どが支部信徒や下級信徒等、下から順番に攻め落としていくという戦術を用いた者でした。

「そうだ。だが、どうも今回の反逆者は信帝様を最初から直に狙うらしい」
「良いんでしょうかねぇ。アノマ信帝と言えば、霊長種ながらにモリ一本でメジロザメを仕留め、不確かながら『シロミガミ探索隊』を率いたとも言われる程の豪傑で」

「産まれながらの秀才でもあり、エレモスを除く五つの大陸でそれぞれ当時の最難関とされた大学を主席卒業した程の学力だとも言われ」
「挙げ句の果てには古式特級魔術の使い手であり、ヴァーミンの有資格者でもありますからね」
「確か、十番目の『センチピード』だったか？十ある中でパワーと耐久力については右に出る者無しという」
「えぇ。現時点で確認されている限りでは、ルタマルス軍上級大将『ランゴ・ドライシス』や指名手配犯『スキンク・ラケーリー』等と並ぶ実力者の一人です」
「それぞれ『ワスプ』と『アサシンバグ』だったか？まぁ何にせよ、相手方が余程の馬鹿でもない限り武力的に挑み掛かるという事は無いだろう」
「となると、暗殺や計略でしょうね。とりあえず注意しておくに超したことはないでしょう」
「そうだな」

この時二人は「どうせまた失敗に終わるだろう」と高を括っていました。
しかし事態は、思わぬ方向に動き出すのです。

―三日後―

その日の夜、クルスの自宅全域に緊急事態を報せる警報ブザーの音が鳴り響きました。
一体何事かと思って外に出てみると、クルスの自宅は海神教の保有する戦闘部隊によって取り囲まれていました。

「（屋根に弾痕……あの大きさは榴弾だな？どうりで揺れたと思った……）

一体何です!?何の冗談ですか、これはっ!」

普段感情的になることが少ないクルスも、この異常事態には声を荒げて怒鳴らざるをえませんでした。

「（あのエンブレムはギルマン支部……矢茂井さんだな……）ちょっと矢茂井さん!
ヒトの家を取り囲んだばかりか榴弾で屋根を壊すなんてどういうつもりです!?」

「どういうつもりって君、信帝様の命令だよ」

怒鳴りつけるクルスに、ヤツメウナギ系鰓鱗種・矢茂井は中が液体で満たされたパワードスーツ型の機械内部で蜷局を巻きつつ言いました

「信帝様?まさかアノマ信帝がこうしろと命じたんですか!?」

「いいや、違うよ。アノマ氏は辞任した。この世界で生きるのに疲れたそうだ」

「じ、辞任っ!?」

「そうさ。一昨日正式な辞任式を執り行い、彼は組織を去った。その翌日に襲名式があってね。早速新しい信帝が決まったよ」

「……そうだったんですか」

「そう言えば君は昔からこういう式典の類に出ることは無かったね。それでよく幹部格にまで昇格出来たものだ。流石は海神教始祖信徒が一人マルサの血を継ぐディーエズ家と言ったところか」

「実力の賜物と言って欲しいですね。我々は他の始祖家系と違って、家柄や経済力を理由に昇格するという事は殆ど有り得ませんので」

「そうか。それはすまなかったね。
まぁ良しとしてくれよ―

―君達の信徒生活も、今日でお終いなんだからさ」

その言葉に、クルスは一瞬耳を疑いました。

「…どういう意味です？」

「どういう意味って、決まってるだろう？新しい信帝様からの命令だよ。

『クルス・ディーエズ一味と、彼らが必死に隠し持っている”例のもの”をこの世から消し去れ』とね。

僕はその命を果たす為、今ここにいる」

「ほう、我々を消す……ここを爆破でもして事故死に見せかけますか？」

「そうだ。爆破装置はこの家の周囲と、地下にある研究施設に満遍なく仕掛けてある。僕が起爆スイッチを押せば、君らはここで粉微塵というわけだ」

「成る程……そういうことですか」

「遺言を伝えたい相手が居るなら電話くらいは許可しよう。三分間待ってやる」

「それはどうも。では御言葉に甘えて――「馬鹿め」―？」

クルスが携帯電話のキーを押した瞬間、矢茂井は手元に隠していた起爆スイッチを押しました。

凄まじい爆音と共に炎が上がり、クルスの自宅は吹き飛びます。しかしその爆発は不自然なまでに限定的で、矢茂井達には炎どころか爆風の一つも及んでいませんでした。

「同僚でも何でもなくなった奴の言うことを易々と信じるもんじゃないよ。

そんなんだから新しい信帝にすぐさま見捨てられるんだ、哀れな奴

め。

さぁ皆、早くずらかるよ。警察ならまだしも林霊教の奴らや防衛隊に見付かったらことだ。

それこそ僕らが上から消されかねない」

そう言って矢茂井達はその場からそそくさと逃げ出しました。

翌日、クルスの自宅は原因不明のガス爆発事故によって吹き飛んだと報じられました。当然、海神教の仕業です。

そして北極に落ちてきた隕石の一件は、斯様に何とも不完全燃焼の形で決着したものと思われました。

しかし事件は、まだ終わっていなかったのです（いい加減長すぎるって？まぁもうちょっとお付き合い下さいよ）。

第百六話　メテオ・ジ・エッグ　後編3（後書き）

まさか本当にここで終わってしまうのか！？

第百七話　メテオ・ジ・エッグ　終編（前書き）

法的には爆死した事になっているクルスでしたが……？

第百七話　メテオ・ジ・エッグ　終編

―前回より―

結果として、クルスは自宅諸共吹き飛ばされてしまいました。しかしここで易々と何もかも消し去られるようでは、そもそも海神教の下級信徒などやっていられる筈もありません。
クルスはあの携帯電話のキー操作一つで魔術と研究室のギミックを同時に作動させ、自身の身を守ると同時に地下で匿っていた少女やズィトーと彼らの子供達をアクサノの熱帯雨林に逃がしていたのです。
但しシステムには限界があり、地下研究室にて作業に当たっていた部下達を救い出すまでには行きませんでした。家に保管されていたクルス自身の財産や研究データ等も全て失ってしまう結果となりましたが、命には代えられません。

―クルス宅爆破から一ヶ月後―

「（それにしても、新しい信帝という奴は一体何者なんだ？知略でアノマ氏を辞任させたとすれば少なからずとも何らかの野心家な筈だが……。
いや、待て。組織を内部から破壊するつもりなのかもしれない。だとすれば早急に手を打たねば……。
今更海神教がどうこう言うわけではないが、法的に死人となった今私の行き先は最早裏社会しかない。
となると先立つものが必要だな）」

歩き出すクルスの手元には、念のためにと奪っておいた教団関係者の銀行口座番号やクレジットカードの暗証番号等をまとめたメモ書

きが握られていました。
それは嘗て自分を殺した矢茂井を含む5人のもので、信徒時代のクルスと特に仲が悪かったが為に選ばれた5人でもありました。

口座番号や暗証番号を用いてまんまと多額の金を引き出したクルスは、続いて拠点となる新居を探してフードを被り街を歩きます。

暫く歩いていたクルスは、ふと何処からか何者かの視線を感じ取りました。
ふと振り向けば、狭い路地に小さな女の子が佇んでいます。

「（……ん？あれは……）」

女の子の肌は白く、髪は長く青紫色をしていて白いワンピースを着ていました。
その瞳は左が赤で右が青という、所謂オッドアイと呼ばれるものです。

「（妙な雰囲気の少女だな。此方が何とも思っていなくても、不思議と惹き付けられるような……）」

ふと女の子と目が会ったクルスは、無意識の内に少女の元へ歩み寄ってしまいます。

「（何だ…あ、脚が勝手に……まるであの少女に誘導されているかのようだ――ッ！
ま、まさか……まさか彼女は、私の生存を察知した組織が送り込んできた暗殺者か！？
幼いからと言って油断は出来ない……種族によってはある時を境に成長や老化が止まるとも言うし、その可能性も……と、止まれ！止

まってくれ、私の脚っ！）」

クルスの念が通じたのか、彼の歩みは少女の眼前でピタリと止まりました。

ポーカーフェイスを決め込みながらも内心焦りっぱなしのクルスを尻目に、女の子は上目遣いで言いました。

「こんにちは」

それは淡く透き通るような、天使とも魔物とも言い表せる声でした。声を聞いてふと唐突に落ち着きを取り戻したクルスは、平常心を保って挨拶を返します。

「はい、こんにちは。お嬢さん、お一人ですか？」

「うん。私は一人。一人だけなの。お兄さんも、一人？」

「（騙されるな……保護欲そそる外見で油断させて殺すつもりかもしれん……）

えぇ、私も一人ですね。家族や仲間達とも離れ離れで……」

「そうなんだ。お兄さんも、一人なんだね」

その後暫く女の子と話し込んだクルスは、少女が空腹である事を察し食事に誘う事にしました。

長年の経験から考えて、この女の子は自分に悪さをしようとしているのではないと考えたからです（若い頃から海神教幹部をやっていたクルスは、初対面の人と暫く話せば大抵その他人が自分の何なのかを的確に察知する事が出来たのです）。

食事を終えた頃、クルスは女の子とすっかり仲良くなっていました。クルスは今の今まで独身で、恋人さえ居た事がありませんでしたが、ふと出会ったこの女の子を、まるで実の娘であるかのように思い始

めていたのです。

そしてその夜、女の子に隠された驚くべき秘密を知ったクルスは、遂に海神教へ反旗を翻すことを決意します。
嘘の情報により自分が死んでしまったと思い込んでいる親戚達に事の真相を話して仲間に引き入れ、着々と準備を進めていきます。

そして爆破事件から一年後、クルスは遂に自分からあらゆるものを奪った現信帝を殺害し、謀反を成し遂げたのです。
信帝と成り上がったクルスの側には、嘗て街で出会った女の子が居ます。

一方、彼の計らいで熱帯雨林に逃げ出したズィトー一家も人知れず佇む廃洋館へ住み着き、そこで幸せに暮らし始めました。
その間に様々な事件が起こり、常に一家の支えとして頑張っていたズィトーは逃げ出して二年ほどでこの世を去るなど、苦しい事や悲しい事は数え切れないほどありました。
しかしそれでも少女―基、有角種・芽浦春樹とその子供達は挫けませんでした。何故なら、苦しみや悲しみを上回るほどに、楽しい出来事や嬉しい出来事も沢山あったからです。

更に春樹は、挑戦する事をやめませんでした。例えば敵襲に備えるため、家の地下を掘り進んで住めるようにしたり、その穴を伝って街まで行って回収した粗大ゴミを使って家具などを作ったりしたのです。
挙げ句の果てに、春樹はとんでもない事を言い出しました。
自分が嘗て産んだ子供達との間に更なる子供達―つまり大勢の孫を産んだのです。
しかもその数は5や10などというものではなく、ゆうに何十、何百にも及びました。父親によってそれぞれ異なる姿をした孫達を、労働者として用いようと考えたのです。

例えばネフルとの間に産まれた孫達は魔術を仕えますし、ヴィクターとの間に産まれた孫達は力持ちで頑丈です。
但し、だからと言って奴隷のように扱うのではなく、ちゃんと母親として接する事を春樹は忘れません。

結果、芽浦一家の住まう廃洋館は個性豊かな怪物達が集うちょっとした要塞になったのでした。
ちょっとしたとは言いますが、外部の警備をしている孫はアガシュラさえも食べてしまうという事実を、読者の皆さんは知っているかと思います。

かくして時は巡り、現代。芽浦一家はツジラ一味という強大な敵との戦いを控えています。
果たして、彼女らはツジラ一味という難敵に打ち勝ち、更なる高見へ登ることが出来るのでしょうか？
それはまだ、作者ぐらいにしか解らない事なのです。

第百七話　メテオ・ジ・エッグ　終編（後書き）

次回、遂にツジラジ生中継がスタート（予定）！

第百八話　だから亭主よ、自信を持てと（前書き）

ツジラジ第四回、遂にスタート！

第百八話　だから亭主よ、自信を持てと

―廃洋館地下―

『せェーのッ、ツジラジっ！』

無駄に機嫌と元気の良い声が大陸全土に響き渡る。勿論、拾ってきた廃材を修理することで得たスピーカーが鎮座する芽浦邸の屋内にも、でかでかと。

【ツジラめ、遂に現れおったか！】

【いよいよですね。私も久々に本領を出す頃かも知れません】

【肉が震えるな。遂にあのイモウトキシンとアニジキニンを相手に戦える時が来ようとは】

【共に往くかせてくれ、エイロン】

【勿論だウィルバー。共にあの兄妹を打ち倒そうではないか】

【ほぉ、やっぱエイロン達はあの敬語使いコンビ狙いか。らしいじゃねぇの】

【そう言うヴィクター、あなたは誰狙いなのですか？】

【誰狙いかだと？決まってんじゃねぇか。俺が狙うのは嶋野と黒物体だ。口の利き方からして運命としか思えなくなっちまってんでな】

【ヴィクターさんが羨ましいですよ。私は魔術師だけに青色さんと一戦交えたいと思っているのですけど……やはり不安ですわ……】

【安心して下さい、ネフルさん。『自信のない答案ほど点は振るう』ですよ。

私は個人的にニコラ先生狙いなんですが、彼女は不死身ですし、適当にあしらったら其方へ向かいますって】

【本当ですか？有り難う御座います、イリーさん】

子供達は口々に『自分の狙いは誰か』とか『戦いではどんな技を使うか』等、これから始まる戦いについて、まるで家族旅行か地上波初放映の映画をのような感覚で語り合っている。

「みんな、準備万端なようで何よりなのだ」

語らい会う我が子等の前に姿を現した春樹は、ライフルと無反動砲の中間的な大型銃を持ち、両肩へ袈裟状に革製のベルトをかけていた。

ベルトには弾頭とも試験官とも見て取れるものが挿さっており、弾薬であろうと思われる。

【これはこれは母上様。とうとう本日が運命の日となりましたのう】

「うむ。皆が一致団結して強敵に立ち向かう事は良いことなのだ。皆それぞれ油断しないよう、負けてでも絶対に生き残れるように、程良く全力を尽くして頑張ろうなのだ！」

【当然、母上様の子である以上生きて戻る事を最優先事項として念頭に置いております】

【日々全力に絶対満足！他人ばかりでなく自分の為にも！御大と母上様が何時も口癖のように言ってた事じゃあねえですか！なあテメェ等ぁ、そう思うよなァ！？】

ヴィクターの呼びかけに、他の面々は各々同意するように雄叫びを上げる。

「みんな……僕はみんなを産めて、本当に良かったと思ってるのだ。死んだズィトーも、きっと天国で喜んでる筈なのだ！」

【御大……】

「さぁ！そうと決まればそれぞれの配置につくのだ！ツジラ達は今でこそ葉書を読んでいるけど、何時攻めてくるかは解らないのだ！

だからこそ、準備は迅速に済ませるのだ！」
《【はいッ！】》

―同時刻・スタジオ内―

「はい。そういうわけで次のお便り行ってみましょう。イスキュロンはデザルテリア西部にお住まいの羽毛種、ラジオネーム『新生宇宙帝国の底辺』さんから頂きました」

スタジオ内にて、香織が投稿された頼りを読み上げる。

「『ツジラジの皆さん、初めまして』」
《「はい、初めまして～」》
「『私はデザルテリア西部で製鉄工場を運営している者です。第一回放送から家族揃って楽しんで聞かせて頂いております』
はい、有り難う御座います！
『さて、今回こうしてメールさせて頂いたのは、皆さんにお礼申し上げたいと思ったからです。
今年で５０になる私達夫婦には、士官学校へ通う中学生の息子が居ました。過去形の表現を用いたのは、息子が既にこの世に居ないからです。
というのも―これは後の調べで明らかになったことなのですが―息子は嘗てあの秋本という男によって、かくも理不尽な理由で殺されてしまったらしいのです。
息子は私に似ず勉強が得意で、妻に似て優しく思い遣り深い大切な存在でしたから、当然死んでしまったと聞かされた時のショックも相当なものでした。妻などは、普段から冗談交じりに自分は肥満体だと言っていたのですが、息子が殺されたショックから拒食症に陥った挙げ句自傷行為に走り、生きていることが信じがたいほどに痩せこけてしまいました。

今でこそ健康状態は回復し、本人は元通りになったと言っていますが、三十年来の付き合いである私から言わせれば、妻の心についた傷が完全に癒えたとは世辞にも言えません。
しかしそれでも、追い詰められた妻が元気を取り戻す切っ掛けになったのは、他でもないツジラジ第三回でした。全大陸にリアルタイムで流れる皆さんの元気な声や楽しいトークは妻に元気のエネルギーを与え、嶋野二十五番さんと黒物体Vさんが秋本にトドメを刺した辺りで、妻は拒食症や自傷行為と縁を絶つと決意したそうです。
お恥ずかしながら私は、妻に何もしてやることが出来なかった。だからこそ、これからは妻を全力で支えていきたいと思っています。
ツジラジの放送に携わるスタッフの皆さん、妻が立ち直れたのは単に貴方達のお陰です。本当に、有り難う御座いました』

という事なんですが……嶋さん黒さん、何かある？」

香織にそう言われ、リューラとバシロはリスナーに向けてのメッセージを考えた。

「そうさな……『新生宇宙帝国の底辺』さん……アンタぁ、嫁さんが立ち直れたのは私らのお陰だと言いましたね？」
「しかしながらですね、俺等ァそんな大した事ぁしちゃいませんよ。ただ司会のツジラに言われるまま好き勝手暴れ回ってやがるだけです」
「つまり、嫁さんが立ち直れたのは私らの手柄じゃあねぇ。アンタ達夫婦の手柄なんです。
『何もしてやることが出来なかった』？馬鹿言っちゃあいけませんぜ。アンタはやれるだけの事をやったんだ。嫁さんの側に、『逃げずに居てやる』って事を為し遂げてやったんだ」
「『他人に何かしてやる』ってのが、必ずしも能動的な真似だとは限らねぇんスよ。ただそこに『居てやる』って事でも、十分誰かの

役に立てたりするもんなんです」

「特に落ち込んでる奴なんかは、寧ろ善意でも能動的になんかしようとすんのは逆効果だったりする。鬱病の奴を元気付けようとしたつもりで声かけたのが裏目に出て落ち込ませちまったりなんてのはザラだ。

だからそこで敢えて意欲を引っ込めて、相手が『助けてくれ』って言ってくるまでそっと見守ってやるってのも、そいつの為に何かしてやるって事なんですよ」

「そもそもそれ以前にアンタは嫁さんが鬱という現実から『逃げなかった』んでしょう？

今の時代、家族の絆って奴は弱り初めてやがる。飼い犬飼い猫を家族だ何だと言っておきながら、散々着せ替え人形にした挙げ句捨てる奴も居れば、少々のことで離婚云々言い出す奴、親やガキをストレスのはけ口にいたぶり殺す奴だってそう珍しくはねぇ」

「ガキ無し５０代っつったら、只でさえ家内に飽きて浮気に走るクソ亭主とか、宿六殺しを企てるクソ嫁の出始める年代だ。そんな奴らは相手が精神病になりゃ、待ってましたとばかりに裏切って捨てる。

だがそんな中で、アンタは嫁を裏切りも捨てもせず、浮気もせずに頑張ったんだろ？それは十分称えられるべき事だ。浮気だの離婚だのに走るほど性根の腐ってねぇとしても、自殺で逃げるって選択肢もあった筈だ」

「だがアンタはそれをせず、馬鹿馬鹿しく思えてもひたすら、嫁さんを心配し続けた。今の時代、それは無茶苦茶大変な事なんですよ。だからアンタは、自信を持って良いんだ。

『新生宇宙帝国の底辺』なんて、遜ったつもりなんでしょうが、そんなハンネは似合わねぇってモンです。『頂点』だの『ボス』だのは無理でも、せめて『中堅』とかぐれぇにしときなせぇ」

「『新生宇宙帝国の底辺』さんからは、同時にリクエストも頂いています。

曰く『家族揃って大好きだったテレビドラマの主題歌で、言わば家族の絆の象徴でした』との事。

ではお聞き下さい。テレビドラマ『七式探偵七重家綱』主題歌―『鳴海師団＆amp;Ａｘｒｌ　Ｒａｇｅ』で『誉れ高き探偵達のうた』―どうぞ」

第百八話　だから亭主よ、自信を持てと（後書き）

次回、対決開始！

第百九話　クラッカー・イリーの歓迎（前書き）

戦闘開始！

第百九話　クラッカー・イリーの歓迎

―前回より―

春樹と彼女の子供達は、繁達が普通に周囲から攻め入るか、或いは廃洋館内部にスタジオを設けるという二つの内どちらかの戦術を取るだろうと考えていた。
しかしその予想はあっさりと、遙か斜め上を往く形で裏切られることとなる。

【ギョエーッ！ギョエーッ！テェヘンデゴゼーマスハハウエサマッ！】

持ち場で待機していた春樹の元へ、羽毛のない鳥のような生物が現れた。
春樹によって産み出された、翼を持つ孫一族が一匹である。
「どうしたのだ？酷い慌てようなのだ」
【ソリャーアワテモシマンガヌァー！イチダイジナンスワッ！イチダイズィ！】
「一大事？一体何が起こったのだ？」
【ツジラッスゥー！ツジライチミガソラタコーカラフッテキタンスゥー！】
「振ってきた？ツジラ一味が？」
【ヘェ！シラベニムカッタンスガ、ドウヤラコンカイノ”スタジオ”ハ、ワイラーモカンカツガイノコードニウカンジョッタヨウナンスゥ！】
「空に？飛行船か何かなのか？」
【ヘェ！ドーヤラソノヨウッスゥ！トニモカクニモ、デラオッソロシーソクドデクダッテキチョリマンガヌァー！】
「報告有り難うなのだ。何はともあれ僕は引き続きここを見張るか

ら、君達は引き続き極力死なないように上空を見張っていて欲しいのだ。
それから、他のみんなへの報告も手分けしてやっておいてほしいのだ！」
【ホカントケェーハモウジンインマワシトリマンノデ、ホナラジョウクウカラノカンシカタメトキマスワァー！】
「宜しく頼むのだ！」

孫が一匹を送り出した春樹は、武器である対戦車ライフルとも無反動砲ともつかない大型銃器を抱えつつ考え込んだ。

「（僕としたことが迂闊だったのだ……横でも下でもなく、まさか上からだなんて予想外だったけど、思い返してみればツジラは策略を張り巡らした奇策を軸にした戦い方をする男だから、地上や地中だけじゃなく、上空だって十分侵攻ルートの候補になりうるのだ。それを考慮していなかったのは僕の判断ミスなのだ。でもだからって諦めちゃ駄目なのだ。
寧ろこのくらいの状況は、逆に楽しむくらいじゃないとツジラと対等に渡り合うことさえ出来ないのだ！
そうと決まれば早速この場を整えて、襲撃に備えるのだ！）」

決意を固めた春樹は、手始めにベルトに差し込まれたチューブとも試験官とも見て取れる弾丸らしきものの整理や安全確認から始めることにした。
ガラス若しくは透明な樹脂で形作られているであろうそれの内部には、緑や紫といった色合いで毒々しい質感の何かが蠢いていた。

―同時刻・廃洋館上空―

「ひぎゃあああああああああああ！」

不老不死の元開業医ニコラ・フォックス。彼女は現在、どうする事も出来ぬままに空中を真っ逆様に落下中だった。
というのも彼女は『不老不死だしいざとなったら破殻化するから』という、何ともいい加減な理由で降下用装備を受け取らずに飛行船の外へ飛び出していたのである（他のメンバーとしては、浮遊出来る羽辰を除き全員がパラシュート、滑空スーツ、小型ジェットエンジン等の降下用装備を受け取っていた）。

しかし実際に飛び降りてみたところ、彼女は自分が致命的な過ちを犯しているのだという事に気が付いた。
まず、大気の流れが激しくバランスの取りにくい降下中に破殻化してホバリングへ繋げるという事は、普段から滅多に破殻化しないニコラにとって極めて困難な行為であった。
そもそもドクガの属する鱗翅目自体、甲虫目や蜻蛉目などと比べて飛行能力はそれほど高くなく、パワーも低い。よって仮に空中で破殻化を成功させたとしても、九割方墜落するであろう。
次にもっと単純な事柄だが、確かにニコラは不老不死である。序でに言うと魔術などの特殊な方法でも余程の事がない限り永続的に活動を停止すると言うことはさほどない。
しかし神経は当然の様に現役である。つまり痛みはそれ相応にやって来るのだ。

そう。当たり前のようだがニコラも当然『落ちたら痛い』のである。しばしば散々な傷を負っては何食わぬ顔で立ち上がっている彼女だが、裏では見たとおりの尋常でない痛みを必死で堪えているのである。
『調子に乗って自分の身体で散々人体実験を繰り返した挙げ句本まで出したお前が言うか』などと思う方もいらっしゃるだろうが、どうも彼女にとっては「自ら意図してつける傷」と「不本意に負う傷」

とでは痛みの質や格が段違いであるらしいのだ（こんな事は確かシーズン2でも言及した気がするが、気にしては負けである）。

かくしてニコラは、廃洋館の中庭に存在する井戸若しくはマンホールのような穴を通じて、廃洋館の地下へと落ちていった。

―廃洋館地下―

内壁が樹脂のように硬質化した蜘蛛の糸らしきもので固められた廃洋館の地下部に落ちたニコラの有様は、最早散々としか言い様がなかった。

しかしそれでも彼女は立ち上がり、見る見るうちに再構築されていく肢体を以て歩き出す。

「何か穴に落ちたと思ったらこんな空間に来ちゃったけど、まさか屋敷の地下がこうなっていたとはねぇ。

みんなに連絡―と思ったけど、電波が通じてない!?何で!?トンネルどころか例え電磁波が暴れ回ってる中でも平然と電波が通じるグリーン科学の最新機種『ドント・コイヤー』なのに!?」

『落下に伴う衝撃で傷一つついていないとはどういうことだ』という突っ込みをしてはならない。カタル・ティゾルは謎の技術で飽和状態なのだ。

「…まぁ、連絡以前にここから出て敵を探すことが先決かしらね。

破殻化して穴から出るっていう選択肢は直径的に却下として……さて、どうしようか」

次の行動に考えを巡らせながら、ニコラは薄暗い謎の空間を歩き出そうとした――その時。

ニコラの足下から『カチリ』という乾燥したような音がした。

「カチリ……って、まさか……」

ニコラは嘗てラビーレマの東ゾイロス高等学校で起こった事を思い返していた。

今と同じように『カチリ』という音がしたかと思えば、何処からか現れた巨大な岩石球が的確に自分だけを狙うように転がってきた。

実際に轢き潰されたから解ることだが、あれは本当に辛かった。

「やばい。あたしってば、また罠踏んじゃっ――」

ニコラが言い終わるより前に、床から現れた巨大な回転のコギリらしき刃が、彼女の身体を中心線で両断した。

しかし罠の展開はそれっきりで、ニコラはすぐさま床に寝転がったまま結合を始める。

と、その場へ何かが現れた。

「成る程成る程。『不老不死消滅不可』の噂はまさしく本当だったようですね」

それは知的というより狡猾そうな若い女の声だった。

雰囲気や喋りなどからは、桃李に似たような雰囲気を感じ取れる。

「ともすれば苦戦確定ですか。

しかしそうでなければ私の取り分は先程の一瞬で消え失せてしまっていた事も確か。

となれば、これは喜ぶべき事態なのでしょうね」

「……ねぇ、あんたさ……」

「おっと、これは失礼。私、独り言が多くなりがちなたちでして」

「そう。で、あんた……」
「おっと、これまた失礼を。申し遅れました。私、あなた方の敵が一人・イリーと申します。周囲からは『クラッカー・イリー』と呼ばれております。以後、宜しく」

イリーがそう言い終わるのと同時に、仰向けに寝転がったまま話していたニコラへ天上から無数の巨大な針が降り注いだ。

「……随分とクレイジーな歓迎だねぇ。私じゃなきゃ死んでたわよ？」
「あなたであれば死なないんでしょう？なら良いじゃありませんか。それより、早くその針を抜いて立ち上がってはどうです？あなたになら出来るはずですよね？」
「まぁ、出来るけどさ……そういう言い方もアレじゃない？」
「そうでしょうかね。まぁ、勘弁して下さいよ。普通敵が攻めてきたのなら、口汚く罵りながら問答無用で殺しに掛かっていますよ？」
「……確かに、そういえばそうだねぇ」

幾つかの針を抜いて立ち上がったニコラは、残る針を抜きつつ辺りを見回した。
これでも一応狐であるからして、霊長種よりは夜目が利き暗所ではそうそう視覚のアドバンテージを牛内はしないのである。

「……イリーちゃんだっけ？あの子、何処に行ったのかしらね……」

そう言いつつ再び歩き出すニコラは、気付いていなかった。
この場がイリーの管理下にあり、彼女が設計し孫達と共に製作した罠や機械類のひしめく彼女の独壇場であるという事に。

第百九話　クラッカー・イリーの歓迎（後書き）

次回、各メンバーは更なる脅威と遭遇する！

第百十話　飛べません。（前書き）

ニコラとイリーが出会う一方、その真上では……

第百十話　飛べません。

―前回より―

「着陸ーっと」

『いやぁ、浮くのをやめて落ちてみるというのも中々乙なものですねぇ』

「あ、途中霊体化解除してたんですか兄さん」

『えぇ。始終浮いてばかりというのもつまらないかと思いまして。普通なら落ちるようなスピードで地上へ降下するんですが』

「よくタイミング合わせられましたね。ニコラさん明らかに落ちてたのに」

『破殻化とは少々性質が違いますのでね。詳しい理由は私にもわかりませんが』

等と他愛もない会話を繰り広げながら中庭を進む二人の前後に、突如異様な姿の生物が現れた。

前方に居るのは緑色をしたゼリー状の肥満体であり、後方に居るのは手足の接合を間違えたような茶褐色の怪物―即ち、エイロンとウィルバーである。

更に二人の周囲を取り囲むように、益々異様な姿をした生物群が現れる。

向かって右側から現れたのは、緑色をしたゼラチン質の身体と十字型の身体が特徴的なヒトデと思しき生物と、その上に乗せられた全身が口であるかのような黄色い透き通った生物であった。

一方向かって左側から現れたのは、Y字型の身体と細い触手が特徴的な生物と、それを背に乗せた青紫色の甲殻を持つウミグモのような生物であった。

「おやおや、安全枠かと思っていた中庭にもやはり守衛が居ましたか」

『しかもこれは……随分とまぁ、個性的な方々のようで。初めまして。私、ツジラジの方でＤＪとして活動させて頂いております。アニジキニンと申します』

「双子の妹ことイモウトキシンです。以後宜しく」

あらゆる点に於いて不可解な生物達の群れに囲まれながら、二人は尚も飄々とした態度を崩そうとはしない。

【……声を聞いたときから貴殿らの名は解ったが、よもや霊長種であったとはな】

「おや、それは種族差別ですか？いけませんねぇ、種族差別なんてナンセンスですよ？

ノモシアの金持ちやヤムタの政治家の中には、禽獣種は臭いだの外殻種は気持ち悪いだのと大声で抜かす連中が居ますけれども、それは余りにもつまらない……」

『端的に言えば「古い」というか、「時代遅れ」だと思うのですよ。所謂、女子供が他人の服装や持ち物を指して「そんなものはもう古い」だの「時代遅れだ」などと言うのと同じような事です』

【これは失礼、我々は別段貴殿らが霊長種だからと下に見ている訳ではない。寧ろ尊敬したいとさえ思っている。

ただ、名の知れたヴァーミンの有資格者が、よもやこれほどにまで幼いとは予想外だったのでな】

「そうですか」

【我々も貴殿らと同じく、種族差別など古臭く時代遅れな考えだと思っている。ノモシア王家の神性種至上主義などは聞けば呆れて身も腐る程だ】

【何より我等兄妹姉弟（けいまいしてい）、見れば解るがこの通り、奇々怪々にして名

状し難く筆舌にも耐え難し見て呉れであるからな】

「確かに、私達のリーダーならば気に入るかも知れませんが……」

『一般的な価値観からすると、少々厳しいかも知れませんねぇ。そちらの茶色のあなたなんて、何処をどう説明すれば良いのか少々迷いますし』

【あぁ、この身体つきかね？確かに仲間内でも妙だと評判だがな、慣れれば案外いいものだぞ】

【それはそうと、名乗りがまだであったな。私の名はエイロン。仲間内では『トリッキー・エイロン』と呼ばれる事もある。貴殿らの背後に居るのは我が双子の弟・ウィルバーだ】

【お初にお目に掛かる。我が名はウィルバー。時折『グラディエイト・ウィルバー』などと呼ばれもする】

『双子……ですか。それにしては随分とお姿がかけ離れているように思うのですが……』

【我等は御大様と母上様の間に産まれた第三の受精卵より産まれた双子なのだ。二卵性故、姿形に多少の差違はあろう】

「多少、ねぇ。まぁ、あなた方の規範からするとこれも多少の域だという事なのでしょう。えぇ。私はそう割り切ることにしましたよ、兄さん」

『それは中々に名案ですね。ある程度の理不尽は割り切ってやり過ごす。素晴らしい考えです。

さて……そういうわけでしてね、ご兄弟』

【何だね？】

『私ども、今回はあなた方が「御大」や「母上」とお呼びになるその存在について、あなた方諸共生け捕りにしなければならないのですよ』

【ほう、それはまた穏やかでない申し出だな】

「そう思われますか？そう思われますよね？私としてもそんな無茶は遠慮したいと思うわけですよ」

【ふむ】

「そこで、です。ここは一時停戦と行きませんか？我々としても無用な争いは避けたいですし――【それは無理だな】――あら、やはり無理ですか？」

【当然だ。此処で貴殿らをみすみす見逃し、挙げ句母上様に万が一の事があったのなら、死んだ御大様に顔向け出来ん】

【よって、だ。少々古典的な話にはなるが、此処から先に往きたければ、我ら兄弟を倒してから往け】

【逃げようなどと思うなよ？我々に翼などありはしない。しかし翼を撃墜する術ならば持ち合わせている】

ここでエイロンが言っている「翼」とは、そのままの意味ではない。二人は確信していた。

「（『翼』……とは、普通に考えれば空を飛ぶために用いるもの。鳥や蝙蝠のそれに限らず、例えば虫の翅や航空機のジェットエンジンも含むもの……）」

『（しかし今回のそれは恐らく、その意味だけで捉えてはならない筈……恐らくここで言う「翼」とは、「逃走手段」の事）』

「（となれば……戦うしかないのでしょうかねぇ。いやはや、覚悟はしていましたが到着直後からこれとは……）」

桃李と羽辰はそれぞれ鎌と分銅を繰り出し、戦闘態勢に入った。

第百十話　飛べません。（後書き）

対峙ラッシュはまだまだ続く！

第百十一話　門前の狂戦士（前書き）

門前にて壮絶な戦いを繰り広げていたのは・・・

第百十一話　門前の狂戦士

―前回より―

ニコラや小樽兄妹等、それぞれ次々に芽浦家の子供達と出会う中、廃洋館正面へ堂々と降り立ったリューラとバシロもまた、敵の攻撃に遭っていた。

「消し飛べやぁぁぁ！こんなスゲー事出来ちまってんぞウルァァァ！」

「雨なら傘広げろァァァァァァ！きっと気分は大発明だグルァァァ！」

リューラの持つ剣が、地中や樹上から這い出してくる紫色の流体が如し生物を叩き斬り、バシロは体内に備わった大砲から榴弾や光弾等を連射し、巨大な四足歩行の竜脚類らしき生物に対抗していた。しかしながら、芽浦家の中でも選りすぐりの肉体派たる豪傑・ヴィクターを父親として産まれた孫であるこの生物群は、高いパワーと尋常でない生命力を父親からしっかり受け継いでいる。よって剣で手足や首を落とされたり、体内から爆破されたりと、並大抵の生物ならばほぼ間違いなく死ぬであろう傷を負って尚、瞬時にそれらの傷を自ら修復し、いとも簡単に立ち直ってしまう。

「畜生、コイツ等一体何なんだ!?斬っても焼いても殴っても直ぐに再生しやがる！
ＨＰが減らねーっつうより、チートで超高速の自動回復機能（オートヒール・システム）が働いてるみてぇだ！」

「クッソ！繁の奴がくれたこのグレネードランチャー（グレラン）、言っちゃ悪いが攻めになってねぇよっ！

取説にあった生命エネルギー供給機能のお陰か俺らが死ぬってオチは回避出来てるみてぇだが、これじゃお互い決着つかねーよっ！」

バシロの体内に備わっていた大砲とは、繁がカドムから手渡されていた黒い箱に入っていたものである。

榴弾・光弾等を何処からのエネルギー摂取も無く発射できるこの代物は、装着者の身体と一体化して以降自在に出し入れが可能になる上に、対象物をある一定のエネルギー量で破壊する度装着者にそこそこの生命エネルギーを供給するというわけのわからない機能がついていた。

この奇妙な機能の恩恵はバシロと適度に一体化しているリューラも受けることが出来たため、地殻や樹木、巨大な岩石をも易々と砕く程の力を持つ孫達にやられっぱなしという事態には陥っていなかった。

「それにしてもつくづく思うが、こいつ等ってなァ何なんだろうな!?

専門家じゃあねえが軍役で一応世界各地回ったことのある私ぁそれなりに妙なモン見てきたが、こんな奴は初めてだぞ！」

「俺も一応元々専門家だがよぉー！こんな奴は見た事ねぇっ！いやそもそも、見たことあるなし以前にこんな奴ぁどう考えたって有り得ねーんだよ！」

「流体種が変異したとか、魔術で作られたとかじゃねぇのか！？」

「流体種はこんな変異しねぇし魔術生物にしたらこんな安定ぶりは明らかに異常なレベルだ！」

「マジで！？つか本当に焼けねーなコイツ等！一体何だって―【下がれェイ！】―！？」

突如エフェクトがかかったような重厚感溢れる男の叫び声が辺り一面に響き渡り、その叫びを合図に孫達はそそくさとその場から撤退

していった。

「な、あ？何がどうなってんだ！？化け物共が消え失せたぞ！？」
「こいつぁまさか、ボスクラスの奴が出てくるフラグか……？」
「『勃発前の静寂』ってか？だとしたらとんでもねぇのが来そうだな。例えばそう、全長５ｍぐらいの――【デェアァアッ！】――うをっ！」

突如、リューラの足下から赤い柱のようなものが飛び出した。それは大人が抱き抱えて手が少し余る程の太さで、金属に似た光沢を持っていた。
リューラは後ろに飛び退くことでその攻撃を回避したが、赤い柱のようなものの正体は未だ不明のままである。

「――っとォ、っぶねー。マジブねー。冗談抜きでブねーわ」
「言ってる場合かよ。避け損なってたら骨まで潰れてっぞ？」
「馬鹿言え。もし仮に私が死にそうになったとしたら、お前が簡単に守ってくれるだろうが」
「否定はしねぇが、お前が守られるってクチかよ。元軍役経験者が、乙女面してんじゃあ――ッ！？」

土煙が晴れるより前に、赤い柱を起点にして地面が盛り上がり、地中から巨大な何かが姿を現した。

【ェエアッ！クソっ！微粒子の土共めが！乾燥帯よろしく固まって土煙なんぞ起こしてんじゃねぇっ！
俺の視界を妨げる気か！？岩石粒子が砕け散っただけの無機物如きが生意気だぞ！】

地中から現れた巨大な何かは、悪態をつきながら土煙を必死で払わ

んとする。
暫くして漸く土煙が晴れると、地中から現れたその姿が明らかになった。
大きさは差詰め全長が１０m、体高が４mと言った所か。
見上げるような巨体は赤い外骨格に覆われ、ワニかオオトカゲのような爬虫類、若しくは肉食恐竜を思わせる。
しかしその脚は八本もあり、そのどれもが人間のような指を四本程生やしている。

【っしゃあ！漸く土煙が晴れたぜ！これで問題は解決した！やいテメェ、ツジラ一味の嶋野二十五番と黒物体Ｖだな！？】
「そうだとすりゃあ何だ？私らのファンか？餃子でも焼いてきてくれたのか？」
「最近のファンてのはスゲーな。不意打ち直後に地面から現れて、土煙に文句垂れてから親の敵でも相手にするのかってぐれぇの態度で挨拶たぁ。
この分だとテメーの親ぁ色々な意味でとんでもねぇ奴なんだろうぜ」
【あんだとゴルァ！？母上様ァＤＩＳるってんなら容赦しねぇぞ！？】
「今までのは容赦してたのかよ。オメーん家は鍋の具取り合うのに機関銃でも出すのか？」
【出す訳ねぇだろ！うちは家族揃って仲良いからんなギャグマンガのバカ共みてーな事しねぇよ！】
「マジで？化け物家族っつったら仲悪いのがセオリーなのに凄ぇな。で、私が嶋野二十五番でこいつが黒物体Ｖなのは認めるが、肝心のオメーは何者だ？さっきの奴らを引き下がらせた所から見るとこの廃洋館に住み着いてる化け物共の眷属なのは確かだろうが……」
【よくぞ聞いてくれたなァ！俺の名はヴィクター！『ディストラクト・ヴィクター』なんて派手な呼ばれ方もする力自慢の次男坊だ！】
「次男坊……つまり上には最低でも兄貴が一人は居るって事か」

「それだけじゃねぇぜ、リューラ。次男ってのはあくまで二番目に産まれた男子って事だから、上に姉貴が何人居たって二番目の男なら次男の扱いになる」
「そうかよ……まぁどのみち、全員ぶちのめして生け捕りにするだけだがな……」
【生け捕り？ナメた事抜かしてんじゃねぇぞ！俺ら止めたきゃ殺す気で来い！
つーかこっちは端から首取られる覚悟でやってんだ！寧ろ俺を殺しに来い！】

かくして、両陣営随一の荒くれ共による壮絶な戦いが始まった。

第百十一話　門前の狂戦士（後書き）

次回、出会いラッシュまだまだ続く！

第百十二話　魔法次女ねふる☆マギカ（前書き）

森の中を進む香織が見付けたのは……

第百十二話　魔法次女ねふる☆マギカ

―前回より―

魔術師・清水香織は現在、廃洋館周辺の熱帯雨林を適当に歩いていた。
当然ながら、中庭やその地下、更には門前と、仲間達が壮絶な戦いを繰り広げていることなど知る由もない。

「川には近寄らないように、でも館から離れすぎないようにーっと」

そんな即興で作った詩に節を付けて歌いながら、香織は何処か軽快なステップで進んでいく。
実際、繁と再会してから強敵との激戦を四度も繰り広げた彼女は、今回の戦いも楽しみの一つとして認識してしまっているような所があった。
別段巫山戯（ふざけ）ているわけではないし、状況を軽視しているわけでもない。
現に彼女の周囲には比較的上位に属する防御系魔術「９３－バリア－４１Ｃ」等を複数用いる事によって、大抵のものを防ぎきる事の出来る強力な障壁を展開している。
この結果、アクサノの熱帯雨林に済む動物類は彼女に手出しできなかったし、不意に樹上から降り注ぐ質量１１越えの変形菌等から身を守る事も出来ていた。

そうして森の中を歩き続けていた彼女の障壁に、再び何かがぼとりとぶち当たった。
注視してみると、それは直径３ｃｍ程の球体だった。透明な粘液らしき膜の仲に、球状に丸まった胎児らしき生命体が蠢いている。

その両目は見開かれており、小さくも確固たる敵意を障壁越しの外敵へ向けていた。
しかも辺りを見渡せば、いつの間にか辺りには同じような球体が幾つも浮かんでいる。取り囲まれていたのだ。

「（こいつら……一体何？しかもこんなに沢山何時の間に……いや、私がこいつらの縄張りに入っただけだよね）」

球体は香織に敵意の眼差しを向けながらも、障壁に行く手を阻まれ手出しが出来ないでいた。
しかし油断は出来ない。もし仮にこの球体達が廃洋館に巣くう化け物の一種だったなら、障壁の一つや二つ、破る術を持ち合わせていないとは言い切れないからだ。

「（仮にこいつらが障壁破りを出来ないとしても、だからってナメてかかっちゃいけない。
こいつらは多分、アガシュラを喰い殺した奴や、川から出てきた奴らと何かの形で関係してる筈。
それだけの事が出来るんなら、障壁破りどころか魔術を使える奴が私の近くに隠れてたって不思議じゃない……）」

香織は考えた。自分は次にどう動き、如何にしてこの状況を打破すべきなのか。不用意に動いては寧ろ危ないが、動かないわけにもいかない。
そもそも『館に潜む化け物を可能な限り生け捕りにする』というのは、香織と繁が話し合って考えた作戦案だ。
ジュルノブル城、東ゾイロス高等学校、デザルテリア士官学校と、今の今まで生放送の舞台にしてきた場所では敵対者が総じて『完全な害』であると確定された存在であったからこそ、無差別に殺害してきた。

しかし今回は違う。廃洋館の化け物共は未だ未知の存在であり、それ故にその意図や思惑も知ることは出来ない。
つまり今の繁達にとってこの謎の生物群は『害の有無について解っていない』扱いであり、それを殺すことは『正当な理由もなく故意に生物を殺す』という、道理に反する行いなのではないかというのが二人の出した結論であり、『生け捕り』という結論の理由でもあった。

「（かと言ってここに留まり続けてたらこいつ等に何されるか――っひぃっ！？」

突然香織の背後で薄い窓ガラスが突き破られるような音がした。展開していた複数の障壁が、僅か二、三枚を残して一瞬で破られてしまったのである。

【……やはりどうしても残ってしまいますか。流石は古式特級魔術の使い手、並大抵の障壁でもこの強度とは……】

茂みの奥から現れたのは、大体香織と同程度と思しき背丈の、昆虫を思わせる女性的なヒューマノイドであった。
背中には黒いマントらしきものがあり、西洋騎士の甲冑を思わせる外骨格は不思議な迫力がある。

「……」

【ちょっと、睨まないで下さいよ。こんな風体ですけど私、結構怖がりなんですよ？】

「その言葉が何処まで信頼出来るかしらねぇ」

そう言って香織は、自らの周囲に展開していた障壁を解除した。

【言いつつ障壁は剥がすんですね】
「張り直したってどうせあんた相手じゃ二発と持たずに割られるでしょ。
永続障壁の重ね貼りは燃費悪いし、そんな事してる暇あるんだったらその分攻撃に回してあんたを捕まえた方がま――――!?」

香織の顔を、バスケットボール大の光球が掠めた。『掠めた』というよりは、『直撃寸前で何とか回避に成功した』とでも言うべきだろうか。
兎も角回避が間に合っていなければ、香織の頭部は確実に消し飛んでいたことであろう。

【へぇ、流石はあのツジラが絶大な信頼を寄せる女・青色薬剤師といった所ね。感心したわ】
「（……危なかった……この眼鏡無かったら今絶対命無いわー……）」
【余裕の態度で高を括るのは別にあなたの勝手だから突っ込まないけれど、所詮世の中油断した奴が真っ先に死ぬんだって事だけは覚えておくと良いわ】
「はっ？『油断した奴が真っ先に死ぬ』？そんな事はあんたに言われるまでもなく自覚済みよ」
【そう。でもさぁ、私達を『殺す』ならまだしも『生け捕り』なんて、明らかに状況を軽視してるわよね？
そんな事言って私達と戦うつもりなら骨の五、六本は覚悟して貰うわよ？
少なくとも指なんかじゃあ済まさないし、正気のまま生きて返すつもりも毛頭無いけどね】
「はぁ？今時指とか骨とか、あんたヤムタ系マフィアの下っ端か何か？
こっちは春にあのどうしようもないバカに誘われてこれ始めてから

今の今までろくでもない死に方する事前提でやってんの」

【言うわねぇ、霊長種の分際で偉そうに……。

良いわ、この『メイジ・ネフル』が全力、とくとあんたに見せてあげる】

そう言うと同時にネフルの背後に空中を浮遊するゼリー質の球体達が集まり、茂みや地中から赤いオサムシのような生物が無数に現れた。

背丈は香織の膝丈半分程度で、長さは二の腕程より少し長い程度だろうか。紡錘形をした双頭は、それぞれ別々の方角に目を配っている。

かくして、両陣営最高峰の魔女二人による対決の火蓋は切って落とされた。

第百十二話　魔法次女ねふる☆マギカ（後書き）

次回、読者諸君もよく知っている「あの男」に強敵達が迫る！

第百十三話　どっちにせよ@必死です（前書き）

実習系の授業ではよく一人か二人、出遅れながらも必死に追い付く奴って居るよね。私もそんな奴だったんだ……地味に辛かった

第百十三話　どっちにせよ@必死です

―前回より―

他の面々が地上で芽浦家の面々と戦う中、未だ地上に降り立つ事の出来ていない男が居た。
我等が主人公にしてツジラジの司会、ツジラ・バグテイルこと辻原繁である。

【ギョエーッ！ギョエーッ！マチャガレツジラァ！】
【ミョイ、モチョットスピードダセンノカコリャ！コントリガァッ！】
【ムチャユーナィ！コレヨカダショッタラオミャーフリオトシテマウガナ！】

背中に背負うタイプの小型ジェットエンジンで廃洋館を目指していた繁であったが、その上空でオレンジ色をしたゴムホース人形のような生物を背に乗せた羽毛のない鳥のような生物の群れに襲われてしまう。
その生物とはつまるところ春樹の孫達であり、鳥のような孫の嘴や爪による連続攻撃とゴムホース人形のような孫達が手元から放つ正体不明のエネルギー弾の雨霰から逃れようと必死に梶を取る繁は、いつの間にか目的地である廃洋館を通り過ぎてしまっていた。

「だぁあああ畜生！建物通り過ぎちまったよ馬鹿じゃねーの俺！これじゃ突入近道どころか墜落遠回りルートじゃねぇかあっ！
へ？何？お前のヴァーミンで攻撃すりゃ大丈夫だろって？馬ッ鹿舵取りしながら攻撃なんて出来るかよ戦闘機じゃねえんだぞ俺ぁっ！」

いつもならばこんな状況でもヘラヘラ笑いながら楽しみそうな繁であったが、撃墜や燃料切れといった『対策のしようがないトラブル』に対する焦りは彼からその余裕を奪っていた。

「クソッ！こうなったら一度適当な場所に着陸してやり過ごすしかねぇ！
頼むから見失ってくれよ乗っただけ特殊召喚……」

孫達の追跡を何とか振り切った繁は、頃合いを見計らってその辺へ適当に降り立とうとする。
しかしそこで、ふと地上から思わぬものが飛んできた。赤みがかったオレンジ色の光線と、中央が渦巻く黒い球体である。

「うぉぇあっ！？」

繁は直線的な弾道であるそれらをどうにか避けたが、光線は何発も放たれ、黒い球体に至っては精密に彼を追尾してくる始末。
更にそうこうしている内に、振り切った筈の孫達までもが追い付きつつある。

「やべぇ！やべぇっ！冗談じゃあ、ねえっ！」

小刻みな飛び方で何とか光線と黒い球体から逃げ切ろうとするが、相手側の巧みな動きはそれさえ許さない。
それでも何とか隙を突いて溶解液で打ち消すことに成功した繁は、廃洋館へ戻ろうとする。
しかしそこで、背後に巨大な質量の気配が迫る。

「！？」

繁の全身に、帯状の溶けた飴のような液体がまとわりついた。それは蜘蛛が出す糸に似た質感で、粘つく事は無く瞬時に固まり樹脂のような物体へと姿を変えた。
それと同時にジェットエンジンの燃料が尽きてしまい、結果として繁は撃墜の挙げ句拘束される羽目になった。

「クソッ！燃料切れか！兎に角こいつをどうにかして早く建物に―
―【無駄よ】――何？」

背後から投げかけられた言葉に振り向くと、細身の獣脚類らしき銀色の外骨格を持つ生物が佇んでいた。
若干ヒューマノイドめいたフォルムは女性的であり、尾は蜂かサソリの腹部のようであるなど、既存の生物学では理解し難い存在であることは火を見るよりも明らかであった。

【その服装……あなたがツジラ・バグテイルね？】
「そういうアンタはあの建物を拠点にしてる化け物共―傭兵団の生き残り曰く『神』―の端くれか？」
【神がどうとかは知らないけれど、確かに私達はあの建物に住んでいるわ。家族揃って、仲良くね】
「そうか、なら話が早いぜ。別嬪の姉さんよ、俺をそこまで案内してくれねぇか？どうしても外せない用事があるんだ」
【あら、別嬪だなんて照れるわね。お世辞にしては心が籠もっているけれど、もしかして本心なのかしら？】
「ったりめェだ、世辞な訳があるか。アンタみてぇな上玉、六大陸探したってそう居るもんじゃねえ。何たって美の次元が違うからなぁ。
ションベン臭ぇ媚び売りのガキの穴やらキィキィ五月蠅ェバカのケツを追っ掛け回すのが好きな豚共や、間抜けな召使いに言い掛かり付けて好き勝手弄くり回すのが好きなクズ共は悪趣味だのゲテモン

だのと言うが、俺は違うぜ。アンタみてぇにガチで次元の違う女っての、最高に好みでね」

【あら、もしかして口説いているつもり？】

「口説くならもっと気の利いた言葉を使うだろうよ。それに俺なんかじゃアンタにゃ似合わない。

こんなカメムシみてぇな腐れ童貞じゃ不釣合いなのさ。やっぱ上玉の相手になるんなら、同じかそれ以上の上玉でなきゃなあ。

例えば、そう……俺の背後で何か溜めモーションに入ってる、アンタとかな」

繁の背後１０ｍ辺りに佇んでいたのは、黄金色に輝く外骨格を持った大柄な生物であった。

その体格は若干男性的なフォルムのヒューマノイドといった風体で、全体的にはやはり獣脚類を思わせるような姿をしていた。

【気づいていたのか】

「そこな銀色美人と話し始めた辺りでな。さっきのサイコボールやレッドレーザーもアンタのもんだろ？」

【正解だ。しかし惜しいな、球体は我のものだが光線は違う】

「そうかよ。だがどっちにしろ俺の相手がアンタ等二人だっつう事実に変わりはねぇ。さて、存分に――うをっ！？」

繁の顔面を赤みが買ったオレンジ色の光線が掠めた。

【私の存在を忘れてもらっては困りますねぇ、ツジラ殿。

それにカイゼルさんやキュリオさんも酷いですよ。自分達だけツジラと戦っていい所取りなんて、幾らお二人とはいえずる過ぎます】

【許せ、ペイジ。お前を置いてけぼりにするつもりはなかったのだ】

【それに戦うと言っても、今や私の糸で拘束され動けないような男

を相手に――――あ、あらっ！？】

ふと見れば、家族一の怪力を誇るヴィクターでさえ抜け出す事が出来なかったキュリオの糸から、文字通りいとも簡単に抜け出している繁の姿があった。

「姉さんよ、アンタぁこの上なく美人で才色兼備の天才肌なんだろうが……必然的にどっか一箇所くらいは抜けてんのな。マジに抜け目無い奴なら、あんな糸如きで俺を拘束しただけで安心なんてしたりはしねぇ。『相手が何かの方法で縄抜けでも何でもするかもしれねぇ』とか、普通は考えるもんだ」

【そう、かしらね？】

「そうだろ。まぁ、過ぎたことだ。事の最中に深く考えるだけ無駄ってもんだろう。

どのみち俺をぶっ殺せば解決する事だしな」

背負っていた槍を構え、手甲鉤を繰り出した繁は、挑発的にそう言った。

第百十三話　どっちにせよ@必死です（後書き）

次回、それぞれの戦いが始まる！

第百十四話　芽浦家の一存（前書き）

２０１１年最後の更新！

第百十四話　芽浦家の一存

―前回より・中庭地下―

「うへぁぁっ！ひぎぃっ！ちょっ、何これぇっ！？」

【いやぁ、凄いですね。流石は不老不死、本当に大概の事なら何をしても死なないとは】

ほんの一握りほどの油断から芽浦家一の頭脳派にして技術士・イリーの独壇場に迷い込んでしまったニコラは、彼女の造り上げた様々な罠から逃げ続けていた。

それは先程のような巨大回転ノコギリのみならず、例えば方々から飛んでくる機関砲の弾丸であったり、全方位から飛んでくる返しのついた五寸釘であったり、強酸性の液体が溜まった大きな落とし穴であったり、何処からともなくせり出してくる地雷原であったり、デンキウナギが尾を巻いて逃げ出すような高圧電流の流れる電極が無数に敷き詰められた壁であったりと、実に多種多様である。

【いやぁ、それにしても本当に凄い不死性ですねぇ。人体実験の様子をそのまま見世物にすればより儲かったのでは？】

「何言ってんのさ！あたしゃ曲がりなりにも医大卒だよ！？生活に余裕があるのにそんなバカ丸出しの真似出来る訳無いじゃん！それに研究者にとっては命の次か次ぐらいに重要な実験内容だよ！？

医学の『医』の字の一画目しか知らないような民間人にそうホイホイ晒して言い訳無いじゃあああん！？」

その叫びに伴って一斉に放たれた蛾型弾幕が、イリーのコントロール下で展開される罠を悉く破壊していく。

その様は地下に設置されたカメラからイリーと彼女を父親として産まれた子供（つまり春樹の孫）達の居るコントロールルームへと中継された。

―コントロールルーム―

【ピャーッ！ピャアーッ！デンジャー！スパデンジャアッー！】

【オオオ！カノフォックス！オドロクベキウォメン！イリーサマノアーツ！シュンジニディストラクション！キョウガクニアタイスルシング！】

濁りや澱みのない透き通った外骨格の中に白い中枢を持つ小さなイモリに似た生物が甲高い声で騒ぎ立て、それに続いて一辺の長さが４０ｃｍ程の正六面体に詰まったゲル状の生物が、合っているのかどうかも不明瞭な英語を交えた妙な喋りで話し出す。

【落ち着きなさい、我が子らよ。彼女はヴァーミンの有資格者です。あの程度の芸当、出来ない方がおかしいというものでしょう】

【シピャシイリーピャマ、ソーハイッテモドゥスルノペス？】

【どうもしませんよ。まだ手を出す時間じゃありません】

【カノフォックス、スサマジキシューター、ワレワレノプラン、ブレイクノカノウセイ】

【えぇ、確かに彼女は素晴らしい実力者です。しかし彼女は不老不死。殺す事など出来ませんし、その必要性もありません】

【ト、ピーパァッツ？】

【この戦いでの目的は彼らへの勝利であり、彼らを抹殺することではないという事です。彼らを撃退し、この場の安息を保てればそれで良いのです】

【ギモンフライング？】

【元より母上様は我々の死を酷く嫌われ、それ故にいざとなればこ

の場からの撤退も考えておられます。
ツジラ一味とは、それだけ強大な敵であると言うことです】
【ピェーニアスィ、ドゥーメト】
【そういう事です。何にせよ、そろそろ備え付けの罠だけでは限界が見えてきたようですし、あなた方の出番が近いのかも知れませんね】

―同時刻・中庭―

「切り裂け！」
『ぶち抜け！』
「『引きちぎれッ！』」
【良い技だなァ！】
【感動的であるッ！】
【【然し、無意味だッ！】】

一方で、地上にて勃発した所謂”双子対決”はかなり壮絶な戦いになっていた。
桃李の鎌はエイロンやウィルバーの体組織ばかりか大口の孫達が放つプラズマ状の砲弾なども切り裂き、羽辰の意のままに物理的法則を逸した飛び方をする分銅は、彼にコックローチを扱う権利まで与えていた。
更にこの二つの武器は、連結して鎖鎌としても機能する。まるで特異な生い立ち故に一体化軸での活動が主な二人の為に作られたかのような武器である。

しかし高性能な武装・能力を持っているのは、何も小樽兄妹だけではない。
エイロンとウィルバーにもまた、それぞれ異星生物の端くれらしく奇異な能力を持っている。

奇妙なつきかたをしているウィルバーの手足はそのパワーを維持したまま様々に変形し、徒手格闘の域を超えた戦いぶりを見せる。
ある平面に突き刺さった腕が遠く離れた別の平面から飛び出て攻撃してくる様などは、最早接近戦ですらない。
一方、一見動作が緩慢そうに見えるエイロンだが、その外見は所詮『外部から視認した情報』に過ぎないのだという事を二人は改めて思い知らされた。
内骨格というものの見当たらないエイロンの身体が秘めた可変性は実弟ウィルバーのそれを遙かに上回るものであり、刃物や鈍器等という武器の他、機関砲や盾、城壁にまで姿を変える。
『触れると取り込まれる』だとか『無限に再生する』というような事は無かったが、切断面の分子配列をかき乱す事で自己修復を打ち消す桃李の鎌を以てしても確定的な傷を負わせることは出来なかった。
更に本来ならば移動速度が極めて遅い筈の『触手』と『砲台』の孫達も、足の速い『扁平』と『節足』の孫の背に乗ることでその弱点を解消。微弱な電流の流れる素早い触手や岩をも砕くプラズマの弾丸によって兄妹を追い詰める。

「兄さん……これはどうやら……」
『……「そろそろ真面目にやらねば危ない」という意見でしたら、私も今思った所ですよ』
「自分で言うのもアレですが、流石双子なだけありますよね私達」
『えぇ。何だかんだ言って、双子は双子なんですねぇ』

等と言いつつ逃げ回りながら、二人は作戦を考える。変幻自在のエイロンを仕留め、ウィルバーの動きを止める為の作戦を。

第百十四話　芽浦家の一存（後書き）

それでは皆様、良いお年をッ！

第百十五話　破壊者の負傷（前書き）

２０１２年は辰年！辰年だけに今回の敵は赤い龍っぽい巨獣のヴィクターだ！

第百十五話　破壊者の負傷

―前回より―

【ウルァアアアアアアアアア！】

絶大な破壊力を秘めた巨獣の拳一つが、地面を砕き陥没させる。

【キェアアアアアアアアアア！】

深紅の外骨格に覆われた巨獣の長い尾が、樹木を薙ぎ倒し突風を巻き起こす。

【どうしたテメェ等ァ！？俺を生け捕りにするんじゃねえのかァ！？】

『破壊』の異名を持つヴィクターの所業は、まさしくそれに恥じないような派手で大胆なものだった。

そもそも現芽浦一家で最も大柄にして一番の肉体派かつ武闘派である彼の戦い方は、嘗て幾度と無く様々な死線を乗り越えて来たリューラ・フォスコドルをも恐れさせるに十分なものであった。

そして、そんな彼女の宿六（即ち伴侶）を自称する謎の寄生生物バシロ・ジゴールもまた、ヴィクターの恐ろしさを本能的に痛感していた。

その強力無比なパワーを産み出す巨体は勿論、鎧のように全身を覆う紅の外骨格はバシロの放つ砲弾をも弾き返す程の強度を誇っていた。

ヴィクターの猛攻から逃れるため、ひとまず樹上に隠れたリューラ

とバシロは、下で暴れ回る赤い巨獣の様子を伺いながら思考を巡らせる。

「（現れた時点で想像はついていたが、デカイ図体と大声からイメージ出来た通り奴の怪力は桁外れだ。
まるで改造コードで攻撃力二億とかになったＲＰＧの仲間キャラみてぇだ。数値の上限が無ぇだけかもしれんが、何にせよ直に正面から立ち向かうのは自殺行為と見て間違いあるめぇ）」
「（接近戦ははっきり言って無謀。近寄るだけであの腕に叩き殺される。
だが距離を取って戦うにしても俺らの持ってる飛び道具じゃ奴の皮は破れねぇ）」
「（となりゃ、あと対抗出来るもんと言えば……こいつぐれぇか？）」
リューラが取り出したのは、プラスチック製の拳銃らしき物体だった。

「おいリューラ、そりゃ何だ？」
「セルヴァグルの繁華街で自由行動んなった時、服屋の前で迷子のガキ拾った事あったろ？」
「あぁ、ハンバーガー食わせてやったり人目気にせず空飛び回ったりしたなそういや。あん時ゃガキのリクエストがブラ●だったもんで変形に苦労したぜ。ス●ダとか●モンなら二秒で出来たんだが」
「そうだ。私もあん時ガキにリクエスト取ったのは失敗だったかと思ってる。
んでよ、そんな慣れない変形したもんで疲れて寝ちまったお前は覚えてねぇだろうが、そん時に助けたガキが礼だってんで水鉄砲くれたんだよ」
「あぁ、あの最新型の奴な。空気圧で水押し出す奴。改造して電線

繋ぎゃアシつかねぇ狙撃銃が出来るっつったのは覚えてんぞ。で、そのガキが礼にくれた水鉄砲がどうした？」

「そいつな、流石に電線繋ぐような気力は無かったんだが、私なりに改造してみたんだよ。

空気圧のギミックに大容量の貯水タンク、素材は揃ってんだ。士官学校時代は武器解体実習の成績が妙に良くてよ、部活も改造武器研究会ってのに入ってたんだぜ？」

「何だよその部活動……」

「名前のまんまだよ。武器を改造して面白い奴に仕上げるんだ。部活動っつうより物好きの集まりみたいなもんで、大会を目指すとかじゃないけどな。それに改造武器ったって真剣や実銃なんかは勿論使わねぇ。危ねーってんで部費打ち切られるし、教育委員会や政府から叩かれりゃ学校そのものが崩れるからな」

「ほうほう、流石はイスキュロンが世界に誇る名門士官学校だな。幾らぶっ飛ぼうが安全第一と」

「そうだ。そのへんで売ってるペーパーナイフやオモチャのピストルを改造して、実践で役立つような武器に仕上げるんだ」

「それって余計叩かれるんじゃねえか…？で、その武器ってのは何なんだ？」

「よくぞ聞いてくれた。こいつは見ての通り水鉄砲を改造して作った飛び道具だ」

「そいつぁ言われねぇでも解るが、問題は何が出るかだろ。その調子じゃ弾も鉛じゃねぇんだろ？」

「勿論だ。まぁウダウダ説明するより実際に撃ってみた方が早いかもな」

そう行ってリューラは銃をヴィクターの右後ろ辺りにある樹木に向けて放つ。

射出されたのは先端に針のついた目視可能な程度に太いワイヤーであり、空気圧の推進力を得たそれは失速する事もなく飛んでいき、

樹木に突き刺さる。

「ワイヤーだと？そんなもん撃ってどうすんだ？」

「まぁ見てろ」

リューラは銃を素早く動かすと同時に本体からワイヤーを切り離した。

否、切り離したと言うより末端部に空気圧をかけて撃ち出したのである。

完全に本体を離れたワイヤーは樹木を基点に大きくしなり、ヴィクターの後ろ足（右後ろから数えて一番目の脚）に巻き付いた。

【うをっ！？何だこりゃあ！？クソッ、どうなってやがる！？】

ヴィクターはどうにかワイヤーを引きちぎろうとするが、脚に絡み付いたそれは細い癖にとんでもない強度を誇っており単純な力で切断する事は不可能であった。

その上表面へ何の細工がしてあるのか、ワイヤーは藻掻くヴィクターの脚を覆う外骨格にノコギリのような切れ込みを入れていく。

そして暫くした後。遂にワイヤーはヴィクターの脚を一本膝から輪切りにしてしまった。

【っがあああっ！畜生、俺の脚がっ――嶋野ォ！黒物体ィ！どうせテメェ等の仕業だな！？ド畜生め、こんな卑怯スレスレの真似しやがって！格闘技の金的レベルじゃねえかぁっ！】

脚を切り落とされた事が相当頭に来たのか、ヴィクターの暴れぶりが余計酷くなった。

更に質の悪いことには、切り落とされた脚が秒間２ｃｍという速度

で再生を始めている。

「おいおい……逆に怒らせちまったし、そもそもあんな再生力じゃどうしようもねぇぞ……」

「大丈夫だ、問題ねぇ。奴の外骨格も無敵じゃねぇって事が解っただけでも僥倖と思うべきだろ。

つーかヴィクターの奴も何だよ、卑怯スレスレだの格闘技の金的だの、あんまりじゃねぇか」

「いや、やられた側からすりゃたまったもんじゃねぇって例えだろ。まぁ俺、この身体になった途端ヒトだった頃に感じた痛みとかが一部すっぽ抜けちまってて金的がどんなもんかよく知らねぇけど」

「マジで!?お前あの痛み忘れてんの!?ありゃあつれぇってレベルじゃねぇぞ。いや、冗談抜きでな」

「そうかよ」

「この前そこそこムラついてた時に香織の後ろ姿が目に入って、思わず奴の乳を背後から揉もうと掴んでやったら反射的に踵喰らったしな。タマに」

「いやおかしいだろ。何でいきなり乳揉みに走るんだよ。ムラついてたどころの話じゃねえだろ」

「マジでムラついてたんだから仕方ねぇだろ。丁度良いくらいの巨乳だしな、あの女」

「仕方ねぇで済ますなよ立派な犯罪だろ」

「でな」

「聞けよ」

「聞けば香織の奴もびっくりして咄嗟に脚が出ちまったらしくってな。私の自業自得でもあるから大人しく引き下がったわ」

「それで?」

「そこに繁の奴が来て、部屋まで運んでくれる事になってよ」

「ほう」

「『痛むようならさすってやろうか?』って言われてよ。悪くねぇ

なと思って背中さすって貰ったんだわ」
「うん」
「でな、痛みが和らいだところでまたムラっと来てよ」
「ムラっと来んなお前。頼むからムラっと来んな」
「ついつい奴の股間に手が伸びてな」
「聞けよ。つーかいきなりそこはねぇだろ」
「で、膨らみまであと少しって所でよ」
「……どうなった？」
「空いた手でタマ殴られた……」
「ああ……」
「洒落になんねぇよアレ……」
「諦める気になったか？」
「いや、それでも一応私淫乱枠だし諦めずにこれからも―「諦めろ！マジで諦めろ！淫乱枠とかねぇから！」
「いや、でもわかんねぇだろ？もしかしたらもしかするかもしれねぇし、その可能性に賭けるって意味でも」
「いやだからねーよ！あるわけね――【そこかァァァァァァ！】
――「「へ？」」

騒ぎを聞きつけたヴィクターの尾による一振りが、二人のしがみついていた樹木を叩き折った。

「うおあああああああああああああ！」
「ぎゃあああっはっはっはっはっはっは！」
「いやお前何で笑ってんだよ！？」
「絶叫の勢いだ！」
「んな勢いがあってたまるかァァァ！」

第百十五話　破壊者の負傷（後書き）

それでは皆さん、本年もどうぞ宜しくお願い致します！

大百十六話　それぞれの三思（前書き）

三が日でも戦いは続く！

大百十六話　それぞれの三思

―前回より―

【成る程成る程。確かに凄いね青色さん。どれもレアものの術ばかりじゃない。そんなの何処で覚えたの？】

「何処で覚えたって？使い手に弟子入りしたのさ。本職は自営業の薬屋で、三年前に死んでるけどねっ！」

シーズン2でのホリェサ・クェイン戦、シーズン3の鳴頃野比良子戦に引き続き、香織はまたしても壮絶な魔術合戦を繰り広げていた。対戦相手は芽浦家次女・ネフル。『魔術師（メイジ）・ネフル』という異名の通り産まれながらに天才的な魔術の才能を持つ彼女は、実に奇妙な性分であった。

それを簡潔に熟語で表すなら『敵前弁慶』であろうか。そもそも『弁慶』とは、読者諸君もよくご存じであろうが、かの有名な『牛若丸』こと『源義経』の臣下たる薙刀使いの郎党『武蔵坊弁慶』である（カタル・ティゾルにもこれに相当する英傑が存在し、弁慶同様力強い者の例えとしてしばしば使われる）。

春樹が産んだ子供達の中でもイリーやエイロンに次ぐ策士枠・知性派の部類に入る彼女は、元来心配性で奥手なために行動力に欠ける部分がある。これは既に説明した事であるから、注意深く読んでいる読者諸君ならば理解出来ている事と思う。

しかしそんな彼女でも、行動力溢れる活動的な自信家になれる―というよりも『なってしまう』状況がある。

それは『自分と同格以下の敵を目の前にした時』である。普段は気弱で心配性のネフルだが、何の因果か敵を目の前にすると強気で好戦的な自信家になり、相手への態度も丁寧な敬語から同年代への馴

れ馴れしく挑発的なものに変貌する。
ある者はこの状態の彼女を見て『意欲的だ』と賞賛し、またある者は『調子に乗っている』と言う。本質はどちらでもあるのだろうが、そもそも周囲から取られようと彼女が奮起する事に変わりはない。

【まあどっちにせよ、あなたが劣勢なのに変わりは無いんだけどね。幾ら防御や回復が凄かろうと、ソロの魔術師は攻撃系魔術扱えてナンボでしょ】

「はぁ、そうかしら？攻撃なんて他のでどうにでもなるでしょ。態々攻撃系魔術が必要になる相手ったって、今頃はそう見ないし」

【……もう駄目だわ、あなた。そういう甘い事言えるのはね、言うほど場数踏んでない証拠なのよ？
そもそも『魔術師』っていうのはね、攻撃、操作、補助、治療、回復、錬成と、一通りのことは全部出来て当たり前なの。特に攻撃系はその中でも要の要、魔術の基礎でしょうに。魔術学校で習わなかったの？】

「魔術学校には行ってないけど、教科書なら一通り読んでるわよ。少なくともあんたよりはね。
でも魔術の教科書にある基礎ったらあんた、『点火』『念動』『予見』の三つでしょ。誰しもそれを覚えてから、攻撃とか補助とか、発展的な内容に進んでいくんでしょうが」

傍目から見れば落ち着き払っているように見えるかも知れないが、実はこの間も二人は互いに魔術を撃ち合っていた。先程のやりとりも口頭によるものではなく、念話を用いたものである。

【そうだとしても、攻撃系魔術を使わないで魔術師として一人で戦おうなんて、やっぱりお目出度い奴だよあなたは。考えが甘いにも程がある】

「……甘いも苦いも、今断言する事じゃあ無いと思うけどね」

香織は右足首に意識を集中させながら、尚も淡々と念話を続けた。

「（取扱説明書の内容が確かなら、あと少し……あともう少しで……）」

―同時刻―

【グモマモモモ、グモモマー！】

【キェヒェッヒェァアアッー！】

「（畜生め、やっぱ槍と手甲鉤じゃ手も足も出やしねぇ！）」

ラジオＤＪツジラ・バグテイルこと辻原繁は、数の暴力を生かした子供達の戦術に苦戦を強いられていた。

肉塊から六本の太い腕が生えたような姿の孫達が念力のような力で岩を投げ、蛾のような姿の孫達はまるで生物のように動き回る爆発性の鱗粉を集団で操る。

ネコともトカゲともつかない孫達が五本の尾を触手のように振り回し、そこにカイゼルの禍々しい弾丸やキュリオの粘着液、ペイジの熱線などが襲い掛かってくる。

繁は溶解液の障壁でそれらの飛び道具を悉く打ち消していたが、防御に必死になる余り攻撃に転ずる事が出来ないで居た。

「（やべえ……やべえぞ。地上に奴ら、空にも奴ら、しかも全方位から飛び道具じゃ逃亡はほぼ無理……奴らを倒すんなら能動的に攻撃して黙らせるしかねぇ。

が、かと言って攻撃をする暇もねぇ……守りが手薄になったらそれこそ即死だ。クソッ、どうすりゃ良い？作戦だけは一丁前に思い付くが、どれも破られる気がしてならん！）」

繁は手元に目をやり考える。

「（そういえば前、桃李や羽辰やリューラが『鎌や分銅、剣には凄いギミックが隠れてる』とか何とか言ってたな。確かにあのカドム店長の事だ、普通に性能が良いだけの武器なんて作るわけがねぇ。実物を見たわけじゃねぇが、今思えばあの爺さんは確かにそういう感じがしたようにも思う。……と言うことは、だ。この手甲鉤にも何かしらの仕掛けがあったっておかしくねぇ筈なんだが）」

繁は防御・回避をしながら考える。では仮に、この手甲鉤にそういった『隠しギミック』があるとして、それは如何なるものなのかと。

「（『振ったら光線が出る』……は、安直か。『何もないこの純粋な強さこそ隠しギミック』とかいうのも何かヤだよな……）」

等と思考を巡らせながら、繁は今にも念力で頭上に浮かべた岩を飛ばそうとしている孫へ向けて、まるで手品師が杖を振るように手甲鉤を振ってみた。

すると何が起こったのか、唐突に孫数匹の念力が一斉に弱まり、自分達が飛ばそうと浮かべていた岩によって押し潰されてしまった。

「（これが……この手甲鉤の隠しギミックなのか？）」

大百十六話　それぞれの三思（後書き）

次回、繁の手甲鉤に秘められた隠しギミックとは！？

第百十七話　赤銅色の思案（前書き）

手甲鉤の隠しギミックを見出した繁、状況を畳み掛ける為本領発揮か！？

第百十七話　赤銅色の思案

―前回より―

【ツジラ貴様、ヴァーミンのみならず魔術までも扱うというのか？何と恐ろしい男よ……しかしそれでこそ、この儂――『カノン・カイゼル』の相手として相応しい！】

【イケメンで強いだけじゃなくて魔術師なのね……嫌いじゃないわよ、ヴァーミンの坊や】

【殺されるのはご免ですが……生け捕りはもっと不愉快なので、ね】

カイゼルは力強さを漂わせる黄金色の両手から、禍々しい漆黒のエネルギー球を放つ。

繁はこのエネルギー球が極めて厄介である事を既に熟知しているため、溶解液で優先して打ち消しにかかる。というのも、このエネルギー弾というのは、世辞にも精密とは言い難いものの一応追尾性を持ち、何か適当なものを当てて誘爆させる事も出来ず、射出されて暫く経過すると急激に肥大化・爆発するという厄介な代物だったからである。

「（っと！とりあえずこの力を試すか。使いもせずに理解しようってのは流石に無理だ）」

繁はリズムに合わせて手甲鉤を振り下ろし、敵兵を次々と弱体化させていく。能力の発動に特殊な動作はさほど必要なく、ただ『弱体化しろ』等と適当に念じながら腕を振るだけで十分らしかった。

「（っと……差詰めこんな所か？ちっこいのは大体片付けたとして、カイゼルやキュリオもふん縛っちまえばこっちのもんだ。

となるとあとはペイジだけだが……野郎、どこ行きやがった？まさか生け捕りが嫌だからって味方ほっぽって逃げ出したか？）」

繁は辺り一面を見回したが、あの赤銅色をしたヒューマノイドは何処にも見当たらなかった。

「思えば奴は何処か妙だったな。カイゼルやキュリオは見るからに妙な奴だって雰囲気が滲み出てんのに、奴にはそういうのがあんま無かった……。

確かに俺ら霊長種と比較すりゃかなり違うが、それにしたってインパクトの無ぇデザイン……というか、キャラが薄いんだよな。

ナレーションでも単に『赤銅色の外骨格を持ったヒューマノイド』としか解説されてねーし、角とか尻尾とか、そういう突起物系もありゃしねぇし、仮にあったとしても思い出せねぇ。

まぁ何にせよ、ここで燻ってるのもアレだし廃洋館に――ぬぅおあああああっ！？」

廃洋館に向かおうとした繁へと、上空から機関砲の弾丸が降り注いだ。

ふと見上げれば、頭上数メートル辺りで翼を持った赤銅色の何かが浮かんでいる。注視してみると、それはどうもペイジであるらしく、翼に見えたのは変形した彼の両腕であるらしかった。

「お前……ペイジか？」

【ご名答。キャラが薄いという意見を聞いて少しばかりイメージ・チェンジしてみたんだ。

どうかな？少しは個性的に、キャラの濃い奴になれたかい？】

「良いねぇ……十分個性的だ」

【そうか…それでは早速、私と一騎打ちを――おや？】

気が付けば、繁は姿を消していた。

【……敵前逃亡は君の方じゃないか。まぁ良いさ。折角だ、この『チェイサー・ペイジ』が本領をお見せしよう】

繁を追って飛び立つペイジの有様は、まるで最新型の戦闘機のようであった。

―上空―

「クソッ……やっぱアサシンバグは飛ぶのが遅ぇな。やっぱ基礎スペックは他九つ以下って事か……。これじゃ途端廃洋館に到着するより前に追い付かれて撃墜されかねん……奴の光線は単発じゃない分厄介だからな……」

破殻化した繁は、熱帯の透き通った青空を全速力で飛んでいた。その速度は中々に早く、時速４０~６０ｋｍ―即ち、一般的な乗用自動車の平均時速程度と同程度の速度が出せていた。

「何にせよ早いところ皆と合流して加勢しねぇと、まだ処女殺しの一件が残ってるし――【逃がさないよ、ツジラ・バグテイル】――っ、ペイジ！？」

【甘く見て貰っては困るよ。カ『カノン』や『ハイエプリエステス』のように、私にも『チェイサー』という異名を持っていてね。追跡にかけてはそれなりに自信がある】

ペイジは両肩に備わった機関砲を繁に向けて掃射し威嚇し、怯んだ隙に光線を放つ。

左の前翅を焼き切られ撃墜された繁は、そのまま熱帯雨林へと落ち

ていった。

【さて、システムを作動させるか】

ペイジは胸元から携帯電話らしき機械を取り出し、キーを入力。イリーに作らせたシステムを起動した。

―地上―

地上に落ちた繁は腐葉土の地面に仕掛けられた落とし穴にはまり、地下深くにある湿った場所に辿り着いた。

「クソ……どういう事だよ、ここは一体何処だ？
ゴミ捨て場にしちゃ臭くねぇし、貯水池でもねぇ……」

底面に敷き詰められているのは水苔であり、水深そのものは踝（くるぶし）が少し漬かる程度。
天井から適度に明かりが灯され、羽虫やそれを狙うヤモリが貼り付いている所を見るとナトリウムランプでない事は確かだろうと繁は推測する。
暫く歩き回っていると、所々にアクサノ固有の珍しい動植物が棲息している。

「凄ぇな。壁面は質感からしてキュリオの粘液なんだろうが、どうやったらここまで整った環境が出来んのか……そもそもここは何を目的に作られたんだ？」

等と夢中になっていた繁だったが、ふと足下が妙に重く冷たいような気がしてきたのを感じ取る。
それに気になってふと足下を見た繁は、驚愕した。

「な、何だこりゃあ!?ここの水ってこんなに深かったか!?」

繁が歩き回っている間も徐々に上昇を続けていた水面は、既に彼の膝まで上がっていたのである。

水面上昇は尚も止まるところを知らず、気付いたときには腰か臍(へそ)の辺りまでになっていた。

「おいおい勘弁してくれよ。水嵩(みずかさ)が増すなんて聞いてないぞ?」

繁はどうにか逃げ出そうと藻掻いたが、水の抵抗と濡れた衣類の重さは体力ばかりを奪っていく。

「翅の再生にはもう暫く掛かる……クソっ、どうすりゃあいいってんだ!?」

更にその時、水中に潜む三から五程度の怪しい影が立ち往生する繁の背後に忍び寄りつつあった。

第百十七話　赤銅色の思案（後書き）

次回、一応主人公やってる男の運命や如何に！？

第百十八話　赤銅色の誤算：前編（前書き）

謎の水槽部屋にて繁を待ち受ける脅威とは！？

第百十八話　赤銅色の誤算：前編

―前回より―

「ぐっ、クソッ！どんどん水嵩が増して動けなっ！つか、これは流石におかしくねぇ！？」

繁は尚も溺れ続けていた。水苔に脚を取られて動きが取れなくなっているという訳ではなく、当然泳げないと言うこともない。衣類の重みと精神的な焦りに体力を奪われ続けていたのである。
そもそも現時点での繁は既に水底に足が着いていない、所謂『立ち泳ぎ』の状態であり、手足を動かして必死に身体を浮かせている状態だった。

突如、そんな彼の背後から数本の黄色い触手が現れた。
鈍い金属光沢を放つ細くしなやかなそれらの裏面には吸盤があり、イソギンチャクやクラゲなどの刺胞動物というより、イカやタコといった頭足類を思わせる。
触手は隙を突くようにして素早く繁の身体に巻き付き、彼を水中へ引きずり込みにかかる。
当然繁がそれを許すわけもなく、隠し持っていたナイフでどうにか触手を切り落として逃げようとする。
しかし切り落とされた触手は独立した生物のように動き回り、尚も繁を束縛せんとする。

「ええい、めんどくせぇ奴めがっ！こうしねぇと駄目だってのか！？」

繁は全身から溶解液を分泌し、触手そのものを消滅させる事で何と

か束縛より逃れる事に成功する。
溶解液に伴う激痛には流石に触手の持ち主も参ったのか、束縛を解除しそそくさと逃げ去った。

「そろそろ水位がヤバいな……潜るか」

繁は懐から小さなガスボンベのような物体を取り出し、酸素マスクのような形をした先端部を顔に装着。チューブで繋がれた本体を腰に据え付けた。

「こんな事も有ろうかと、ホームセンターで携帯式アクアラングを買っておいた甲斐があったってもんだ」

繁は眼鏡をケースに納め、水中へと潜っていった。

―水中―

「（……それにしてもこの部屋、何なんだ？こうして見ると熱帯雨林か山岳地帯の秘境にある透き通った湖って所だが、まさか水棲生物の飼育水槽って訳じゃねぇだろうし……ん？）」

その時、ふと繁の真横を黄色い何かが通り過ぎた。

「（あれは……）」

”何だ？”と、繁が思考を巡らせるより前に、彼の眼前を黄色い膜が覆い尽くした。

「（ぐぉ！？ぬっ、こいつは……タコかっ！？）」

繁は溶解液で顔面にへばり付いた黄色いタコのような生物を瞬時に撃退し、漸くその全貌を確認する。

「（成る程……こいつはさっきのちっこい奴らと同じような代物か？そういや供米のおっさんが、廃洋館の周辺に流れてる川に何か居るって言ってたな。もしかして川とここは何かで繋がってるんじゃねぇのか？例えばそう、太い地下水路みてぇな奴で……）」

そう思った繁は辺りを見渡しそれらしき場所を探そうとするが、そうはさせまいとして黄色い蛸のような生物が現れては襲い掛かってくる。

しかもその数が尋常ではなく、最初は三匹や四匹だったものが、今や十や二十を軽く超えるほどになっていた。

しかしそれでも繁は諦めず、襲撃してくる蛸の群れを撃退していく。

蛸の群れを粗方撃退した繁の疲労状態はかなりのものであったが、それでも尚気力を振り絞って出入り口にあたるものを探そうとする。

休み休み暫く泳ぎ回る内に、繁は幾つかの排水口のような水の出入りする穴を発見したが、何れも扉で硬く閉ざされており、素手で開く気配は見られなかった。

「（畜生、どうやら溶かして開けるしかねぇようだな……）」

繁は頭を抱えた。空気中でこそ自身の意のまま自由自在に動き回るアサシンバグの溶解液だが、水中などではどうにも動きに乱れやブレが生じてしまうのである。

「（何にせよ早急に扉をブチ破って外に出ねぇと……空気中に出さえすりゃ、あとはこっちのもんだ）」

繁は排水口を塞ぐ金属製の扉に手甲鉤の刃先を引っ掛け、慎重に溶解液を這わせていく。

「（何がどうでも焦っちゃなんねぇ。……精神の焦りは無駄な水流を産み、無駄な水流は溶解液の操作を狂わせる……。そうだ……落ち着くんだ……眼鏡を外した遠〇君が相手の線を、点を見極めてナイフの刃を滑らせるように……そーっと、そーっとッ！？）」

扉の破壊に向かっていた繁の右脚膸部分に、太い紐状のものが絡み付いた。

ズボン越しに伝わるそれの感触は硬くもあり柔らかくもあり、そして何より凄まじいパワーを誇っている。

太い紐状のものはそのまま彼の身体を扉から引き離し、水中へ引きずり込もうとする。

繁は咄嗟に右脚膸の辺りから溶解液を出す事で難を逃れ、振り向きざまに相手を見て驚愕した。

「（んなっ……こ、こいつ……）」

そこにあったのは、流線型のフォルムと、肩や股関節から手足代わりとばかりに生えた数本の太い触手が特徴的な赤銅色の生物だった。

「ペ、ペイジ……？」

【こんな姿になりながらも思い出して頂いて光栄ですよ、Ｍｒ．ツジラ・バグテイル。

如何でしたか？我が子等の部屋は。中々に乙なものでしょう？】

「お前のガキ共の、部屋だと？」

繁はマスク越しにくぐもった声で言葉を紡ぐ。

【えぇ。我々兄弟姉妹は母上様との間に子を授かり、その『孫達』は自ら望んで我らの兵となった。
先程あなたが必死に撃退していた、あの黄色い頭足類のような愛嬌溢れる生物達……あれは私と母上様の元に産まれた孫達ですよ。
彼らは我が家の側を流れる河川の中と周辺を見張っているのですが、非番の時や休憩時などはこの部屋で休んでいるのです。
この辺りは環境が豊かでしてね、その辺りでとれた水苔を敷き詰めて河から水を引き寄せるだけで斯様に素晴らしい空間が出来上がるのですよ】

「さっき水が無かったのはどういう事だ？」

【意図的に抜いたのですよ。あなたを罠にはめ、油断させる為にね。幸いにもここに住み着いている生物は何れも元から水陸両用なようでして、ほんの数分水を抜く程度はどうという事もありませんでした】

「……そうか。で、俺をここに閉じこめてどうする気だ？また勝うつもりか？」

【勘弁して下さいよ。私はあなたとやり合うつもりは無いんです。ただ、少々平和的に事を解決させたく思いましてね……】

「何をするつもりだ？」

【こうするのですよ】

ペイジの右肩から生えた触手二本が素早くしなり、繁の顔面からマスクを引き剥がすと同時に腰の酸素ボンベをも奪い取ってしまった。

「がばっ？ぼごぼばっ！？」

【私にはこの通り水中でも機能する声帯や鰓がありますが、あなたを初めとする霊長種の皆さんにそれは備わっていないのでしょう？ならば、このマスクとボンベさえ奪い取ってしまえばあとは此方の

ものという事……想定よりは遅れましたが、これならば穏やかに、
そして平和的にあなたを始末し戦いに勝利できるという訳です。

Ｍｒ．ツジラ……失礼ながらこの勝負、私が頂きましょう】

第百十八話　赤銅色の誤算：前編（後書き）

辻原繁、絶体絶命！次回、繁はこの危機をどう脱するのか！？

第百十九話　赤銅色の誤算：後編（前書き）

勝機はあるのか！？辻原繁、絶体絶命！

第百十九話　赤銅色の誤算：後編

―前回より―

【ねぇ、ツジラさん】

触手を広げて水中に浮かぶペイジは、溺れて藻掻き苦しむ繁に語りかける。

【アサシンバグ、でしたっけ？あなたのヴァーミンって。血を吸うカメムシなんですってねぇ？
ノモシア南部やラビーレマの方ではヒトを刺すばかりか妙な菌をうつして恐ろしい病に陥れるそうじゃないですか。シャーガス病、でしたっけ？酷いことするなぁ……いや本当、悪魔のような所業じゃないですか】

姿も言葉遣いも不安定な赤銅色の混血児は、淡々と饒舌に言葉を紡いでいく。
水中で酸素の供給源を失いただただ藻掻き暴れる事しか出来ない繁の耳にその声が届くことは無かったが、ペイジにはそれで十分だった。

【それにしても随分と苦しそうですねぇ、大丈夫ですか？
っはっはっはっはっはっは、そんなに慌てちゃあ駄目ですよ。貴重な酸素がどんどん逃げて行ってしまいますからねぇ。そもそもこういう『解決のしようがない現実』に抗っている時点で、あなたは周囲に対して愚かさを主張している事と同じなんですよ。
解りますか？ねぇ、ツジラさん。この場で死ぬことが確定的であると解って尚、そうして何としてでも生き延びようと藻掻き続けるお

つもりですか？いい加減諦めてはどうでしょう。
私が手を下そうと下すまいと、あなたが死ぬのは確定的なのに……
ねぇ？】

ペイジの罠にかかり散々溺れた繁は、既に意識を失いただただ水中
をゆっくりと漂うだけになっていた。

【あらあら、まぁまぁ、本当に死んでしまうだなんて……何て情け
ない。
天下のツジラ・バグテイルが、まさか溺れただけで死ぬだなんてね
ぇ。
興ざめですよ、全く。これじゃあ母上様の誓いは何だったんだと思
わざるを得ないじゃありませんか。
……あなたがかの有名なツジラ・バグテイルなら、この程度で死ぬ
なんておかしいとは思いませんか？】

ペイジはそう問いかけるが、意識を失い水死体のように漂う繁が答
えるはずもない。

【……まぁ良い。どうせ真正面から戦ったって敵う筈が無いんだ。
こうでもしなければ撃退さえ出来はしない。だからこうするしか無
かったんだ。
ツジラ……怨みたければ好きなだけ怨んでくれて構わない。呪いで
も祟りでも、好きにするが良――！？】

水槽内に、薄いガラスが割れるような音が響き渡った。普通ならば
その程度の音は掻き消されてしまうはずであるがしかし、その音は
確かに水中へと響き渡ったのである。
驚いて思わず振り向いたペイジは、己の目を疑った。

見れば先程まで繁が浮いていた筈の場所にその姿は無く、代わりにその場には、蟲のようなヒトのような薄気味悪い生物が佇んでいた。
その生物は全体的に細身であり、長い両腕はカマキリのそれが如し鋭さだが、それで居て頭部には獲物に狙いを定める冷酷な瞳や肉を貪るような大顎は無い。
そもそもカマキリのような三角形ですらないその貧相な頭部にあるのは、常に身勝手な私利私欲を満たす為の事物を探す為に使われていそうな複眼と、ろくでもないものばかりを好き勝手に摂取していると思しき針のような口吻だった。

【お前……一体何者なんだ?】

ペイジの発言に演技など含まれては居らず、その言葉にはただ純粋な疑問だけがあった。

「何者か、だと?おいおい……確かに見た目そのものは少々変わっただろうよ。
それは大人しく認める。反論なんかしねぇ。が、それにしたってその言い方は無ぇだろ……」

【何?】

「ほれ、この一々鬱陶しい声聞いてもまだ思い出さねぇか?
偶然とはいえ、だ。折角死の淵彷徨ってまでお前と同じ土俵で対等に話せるようにまでなったんだ。
忘れたふりなんてやめて、少しは思い出す努力ってのをしてほしいもんだな」

【そ、そう……か。それはすまないね(忘れたふりじゃあ無いんだがな……)】

「そもそもよ、最初に会った時から思ってたんだがお前って口調安定してねぇよな。
タメ口で親しみやすいと思わせて実は狡猾なキャラ気取ってんのか、

敬語で距離感演出して知的で油断なんねぇキャラ気取ってんのか、どっちかにしろよ」

【すまないね。これで素なんだよ】

「そうかよ。んで、少しは思い出せたか？この俺についてよ」

【まさか、君は……】

「まさか、何だ？」

【まさか君は……ツジラ、なのか？】

「……」

謎の生物はペイジの問いかけに答えず、無言のままゆらゆらと漂うが如し動きでにじり寄ってくる。

【おい、答えてくれ。君はツジラなのか？】

「……」

【ツジラだとしたら、どうやって生き延びた？その姿は何なんだ？第八のヴァーミンはカメムシだろう？】

「……」

【おい、何か言ったらどうなんだ？急に黙り込むなんて卑怯だぞ？】

「……」

謎の生物は何処からか小さな筒を取り出し、その先端をペイジに向けた。

【おい、その筒は何だ？それで何をする気だ？それで私をどうするんだ？】

そんなペイジを謎の生物はまるで相手にせず、筒の尻先から伸びた紐を器用に爪に巻き付けて素早く引っ張った。

その瞬間、筒の先端部から黄色いものがペイジ目掛けて飛び出した。半透明の黄色い袋であるそれは一瞬の内に赤銅色の混血児を包み込み、まるでイモガイが毒殺した魚を喰らうように吸い込んでしまった。

「……さて、これにて生け捕り完了って所だな。あとはここを抜け出して建物の中を目指すか」

そう言って謎の生物―基、繁は、脱出経路を探す為その場から泳ぎ去っていった。

ラジオＤＪツジラ・バグテイルこと、第八のヴァーミンを持つ有資格者・辻原繁。

溺死寸前の水中という極限状態で目覚めた彼の新たなる力については、また別の機会に詳しく言及するとしよう。

第百十九話　赤銅色の誤算：後編（後書き）

これが……繁!?破殻化とは何かが違う。
そもそもサシガメは泳げない筈なのに、一体何があったというのか!?
何にせよ奇妙な道具でペイジを生け捕りにした繁は、仲間達と合流するため脱出を試みる！
次回、他のメンバー達も本領発揮で、怒濤の反撃開始となるか!?

第百二十話　仲間達の無双（前書き）

さぁ、巻き返しの時間だ！

第百二十話　仲間達の無双

―前回より―

【何なんですか？あなたは！】

「何って、只の開業医だよ？まぁ『元』だけど―

―【出鱈目を言わないで下さいッ！】

切り刻まれて残骸と化した機械群に囲まれながら、追い詰められたイリーは言った。

「出鱈目って言われても、これが素の私なんだけどねぇ」

【仮に素だとしても……素であると仮定しても……只の元開業医にこんな真似が出来て良いはず無いでしょうッ！】

あれから孫達の乗り込むメカニック（所謂有人車両だとかロボットと呼ばれるようなデザインのもの）による襲撃を受けたニコラはその時、既に不老不死の肉体で攻撃を適当にやり過ごす事に疲れてしまっていた。

よってそろそろこの状況を打開すべきかと思い立ち、能動的な攻撃行動に打って出たのである。

「いや、そりゃ只の元開業医には出来ないよ。私はこんなナリでも一応禽獣種だし」

【それが何です？今日日医者に種族なんて関係無いでしょう！】

「それに加えて不老不死だからさ」

【この状況とそれをどう関連づけるおつもりですか？】

「ヴァーミンの有資格者だし」

【タセックモスに刃物なんてありませんよね？】

「あんたなんで私の奴――【そりゃあんだけ派手に生放送やってりゃ気付きますよ】――ですよねー」
【それで、何なんです？その刃物は】
イリーの尖った尾が指し示す先には、ニコラの手に握られた光そのもののような刃物があった。
「……あぁ、これ？」
【そう、それです】
「これ、ね。
貰ったの」
ニコラの口から出た言葉は、少々間を置いたにしてはかなり簡素で呆気ない答えだった。
【貰った!?そんな恐ろしい武器を、ですか!?】
「そ。仲間からね、貰ったのよ」
等と言うニコラの持つ刃物は、言ってみれば某世界的に有名なＳＦ映画に登場する、念力使いの騎士が扱う剣に似ていた。
しかしその刃の長さは一般的に用いられるドス程度しかなく、柄の部分は先端部を削り取った大型プラスチック製シリンジのようであった（プラスチック製シリンジとは、所謂読者諸君も小学校の理科実験などで用いたであろうアレの事であり、ザ・ライアーにて楠木雅子が空気銃に改造していたものである）。
「仲間の話だと、何でもノモシアの方で長年店をやってる自営業の武器職人が居るんだってよ」
【自営業の武器職人!?魔術師・学術者の間違いでしょう!?】

「いや、私も詳しくは知らないんだけどね。まぁ何にせよ、これであんたには打つ手が無くなった訳だし……そろそろ生け捕りに―【させませんよ？】

繁が取り出したのと同じ捕獲道具を取り出したニコラの腕が、謎の爆発によって吹き飛んだ。

「……頭が良いだけじゃ無かったのね」

【これくらい出来ないでどうするんです？】

―同時刻・中庭―

【ヌ……こんな霊長種如きに、我々が…ッ！】

【諦めるのだウィルバー、非は霊長種だからと舐めて掛かった我々にある】

所々焼け焦げ凍り付く中庭にて、双子の混血児は瀕死の状態で横たわっていた。

あれから本気を出した小樽兄妹に二人は為す術もなく圧倒され、トドメを刺せば直ぐ死ぬようなレベルにまで追い詰められていたのである。

「しかしまぁ、やはりお強いですねぇ。あなた方は」

『戦っていてひしひしと感じましたよ。先天的な素質もそうですが、それを伸ばすための努力も素晴らしいの一言だ』

【……バカにしているのか？】

『いやいや、バカになんてしてませんよ。心からあなた方を称えて居るんです。

妹共々生まれてこの方こういう喋りというか態度なもので、どうにも不真面目に捉えられがちなんですが……今の我々は大真面目です

よ？』

「そういうわけですから、早い所あなた方の『母親』とやらが何処に居るのか教えて下さいませんか？」

【それを知ってどうするというのだ？我々にそうしたように、好き勝手散々に叩きのめした挙げ句生け捕りにしていかがわしい生体実験にでもかけるつもりか？】

「さぁ、それはどうでしょうねぇ。ある程度叩きのめして生け捕りにするのは確かですが、その後のことは何とも」

『あなた方を生け捕りにすると言い出したのはうちのリーダーでしてね、詳しいことは聞かされていないのですよ』

そう言って二人は、繁やニコラが取り出したような筒状の道具を取り出した。

【そ、それは……コーンチューブ！？】

【知っているのか、エイロン？】

【以前雑誌で呼んだことがある。弱らせた動植物を特殊な袋に詰め、生きたまま圧縮して持ち運ぶ事が出来るという……】

【何……だと……？】

「これをご存じだというのでしたら話が早い。母親の居場所は我々で探しますから、あとはごゆっくり」

そう言って二人はエイロンとウィルバーを生け捕りにした。その作業とは一瞬であり、まさに『イモガイ（コーンチューブ）の管』という名前に相応しい動きと言えた。

かくして繁達『ツジラジ』制作陣一同は加速度的な勢いで歩を進めていく。

森に佇む巨大な廃洋館に潜む存在をつきとめ、それの謎を解明する為に。

しかしこの時、この場で戦っている者達や、その様子をラジオ番組として聴いている者達は気付いていなかった。
この戦いが『芽浦一家対バグテイル一味』などと言い切ることの出来るようなものではないという事に。

即ち、彼らが戦う中裏で暗躍する者達が居たのである。

第百二十話　仲間達の無双（後書き）

次回、影で暗躍する勢力の正体とは！？

第百二十一話　かげの☆クロマクさまっ♪（前書き）

反撃ラッシュはまだまだ続く！

第百二十一話　かげの☆クロマクさまっ♪

―前回より―

【なななななっ、何なんですかその右脚はっ!?】

「何って言われても……イメチェン？」

【何故あなたが疑問系なんですかっ！わけがわかりませんよ！】

香織の右脚から発せられる絶大な火力は、受け身の保守派で若干防御軸という彼女の印象を悉く覆すものであった。右脚の膝から下を覆う機械的な鎧の前面には直径３ｃｍ程の短い銃口が等間隔で６つほど備わっており、そこから信号弾のような紅色の光弾が連射されるのである。

この光弾の弾道や破壊力はまさしく一般的な攻撃系魔術のそれであり、それは本来先天的に彼女が扱えない筈のものであった。

「わけがわからないって言われてもねぇ、私にとっちゃあんた等みたいなデザインの奴らの方がよっぽどわけわかんないよ」

【デザインって何ですか!?仕方ないでしょう、こういう種類の生き物なんですから!】

「じゃあ私もね、仕方ないよ。従兄弟からのプレゼントがこういう奴だったんだから」

【従兄弟からっ!?あなたの従兄弟さんはマフィアの中堅か何かですか!?】

「いや、あいつは暴力団関係者とかそういうのに絡んではないし絡む筈がないよ」

【あ、そうなんですか?】

「そうそう。どっちかっていうと『天性のセンスから編み出した蹴り軸の我流徒手格闘を駆使する謎の金貸し』的なキャラクターかな。

あれよりもっと卑怯で質悪いけどね。
ただし酒も煙草もしないし怠け癖もあそこまで酷くはない」
【何ですかそれ!?】
「あー、ちょっと難しかったかな?」
【ちょっとどころの問題じゃないですよ!】
「ごめんごめん。解りやすく言うと『視神経がちょっと個性的で眼鏡の素敵な、でも病弱でツンデレなのが玉に瑕のイケメン男子高校生(恋人は美人吸血鬼)』から、病弱属性とツンデレ属性と個性的な視神経属性を引いて――【益々意味不明なんですが!?】
「あ、ごめん」
【っていうかもうそれは殆ど別キャラでしょう!?】
「そ、そうかな?」
【そうですよ!あと何ですか個性的な視神経属性って!どこにそんな萌え属性があるんですか!?】
「いやぁ、世の中広いし無いと断言する事は出来ないよ?あるんじゃないかなぁ、世界のどっかに」
【どっかってどこですか!?】
「……エレモスとか?」
【行ったことあるんですか?】
「ないね」
【無いの!?行ったこと無いのにそんな事言ってるんですか!?】
「いやでもほら、エレモスって通称『謎の大陸』じゃん?だから」
【絶対それだけの理由で選びましたよね!?絶対それだけが理由ですよね?】
「……あんた、もしかして心を読む魔術でも―【使ってませんから!その程度のボケくらい幾ら私でも捌けますから!】
「それは意外だったわ」

(キリが無いので省略)

―同時刻―

「でぇい、クソッ……どうだトカゲ野郎……」

「ザマぁ見ろィ、その様子じゃあテメェも抜け出せやしねぇだろ……」

【グ……ヌゥ、チぃクソっ！マジで抜けらんねぇ！どうなってやがんだ！？】

門前にてヴィクターと激しい激闘を繰り広げたリューラ及びバシロは、コーンチューブの故障という予想外のトラブルにもめげず、この暴れ者の巨獣を生け捕りする事に成功していた。

現在ヴィクターを縛り付けているのはその辺にあるような普通のテグスであり、太さ１ｍ程のそれはヴィクターの脚を束ね、首と尾を曲げられた状態で胴体に縛り付けていた。

「しかし驚きだよな。まさかあんな薬が役に立つとは……」

「あぁ。俺も買ったときは面白半分だったが、よもやこんな場所で役に立つなんざ思っても見なかったぜ……」

リューラの言う『薬』とは、観光中バシロが繁華街で見付けて購入した『天龍の血』という、プラスチックボトル入りの赤い薬液であった。

説明書きによれば、浸した物体に魔術の効果を付与し、その強度を絶対的なものにするのだという。理論上は霊長種の抜け毛ならば最大１ｔの力にまで耐えることが出来るという。

体内に雑貨を溜め込む癖のあったバシロは、木から落ちた後偶然にもそれの存在に気付き、かなり昔に何らかの弾みで入っていたテグスにこの薬を用いヴィクターを縛る縄としたというわけである。

因みに『天龍』とはヤムタ神話に於いて東の方角を守護する竜属種

の英雄である。多くの者から信頼を寄せられる、情に厚く寛容な人物であり、絶対的な戦闘能力を誇る武人とされるが、その反面人を見る目が絶望的にない事でも有名であった。

【クソッ、どうやっても切れやしねぇ！ド畜生めが、どうなってんだ！】

「まぁそんな事ぁどうでも良いじゃねぇか」

【良くねぇっ！どんだけ往生際が悪く思えようが、俺ぁどうしてもテメェ等に負けらんえぇんだよ！】

「そうか……じゃあお前は私らに『負けた』んじゃなく、『勝てなかった』って事にしよう。それで万事解決だろ？」

【解決してねぇ！どっちにしろ同じ事だし、仮に勝ってようが結局テメェ等ぁ止めらんなかったって事に違いはねぇだろうが！】

「良いじゃねぇかもう過ぎ去った事なんだしよ」

【だから良くねぇって！いや冗談抜きで！】

（こっちもキリが無いので省略）

―同時刻―

同じ頃、高級感溢れる一室に一人の少女が佇んでいた。

整った顔立ちと透き通るような白い肌が特徴的な彼女には、見る者を無差別に引き寄せるような美しさがあった。

しかし何より特徴的なのはその両目であり、宝石のようなそれらは左が赤、右が青だったのである（所謂オッドアイという奴である）。

ふと、扉の向こうからノックの音がする。

「どうぞ」

少女は儚げな、しかし決して弱々しくはない声で言った。
静かに開いた扉の向こうから現れたのは、熱帯の海原もしくは快晴の青空を思わせる青い外皮を持った竜属種の青年であった。

「あ、お兄ちゃんだ」
「お早う御座います、ラト」
「うん、おはようお兄ちゃん。それで、今日はどうしたの？」
「ラト、どうやらそろそろ本格的に動き出すべき時が来たようです。力の気配が感じられます。とても大きな、素晴らしい力が」
「それは、きれいな女の子の力？」
「はい。そうです。素晴らしい力を持ちながら、如何なる穢れをも知らない綺麗な女の子達の力です」
「そう、なんだ」

少女は少し間を置いてから、静かに言った。

「行こう、お兄ちゃん。ラトが全部、片付けてあげないと」

頷いた青年は、建物全体に放送を流す。

「緊急召集！緊急召集である！全人員に告ぐ！全員戦闘準備につけ！これより我々は聖戦へと向かう！林霊教によって奪われし我らが栄光を、天下を、あの懐かしき日々を取り戻そう！
信帝クルス・ディーエズが命ずる！
大いなるスィチンの使徒、海神教の信徒達よ、集結せよ！
本日は絶好なる改革日和である！」

第百二十一話　かげの☆クロマクさまっ♪（後書き）

次回、まさかの海神教乱入！？

第百二十二話　芽浦家の決戦（前書き）

※前回の後書き、ほぼ予告詐欺だと思って下さい

第百二十二話　芽浦家の決戦

―前回より―

廃洋館中枢にて武装し待ち構えるのは、廃洋館の住民達を統べる者にして彼らの母親・芽浦春樹。

「みんな大丈夫かな……もしツジラ一味に酷いことされてたら――っと、そんな事考えちゃ駄目なのだ。
僕はお母さんなんだから、どんなに離れていたって我が子を信じてあげなきゃ駄目なのだ。例えどんな事になったって、信じるのをやめたら母親失格なのだ」

決意を新たにした春樹は、両手で可愛らしく持ったトーストにかぶりつこうとした。

「頂きますなのだ。あ～」

と、その時である。

「ぎゃあああああああああああああ！」
「おわあああああああああああああ！？」
『桃李ー！』
「どうしてこうなったぁぁぁぁぁぁあ！？」
「知るかァァァェェイ！」
【うぼろべばっ！？】
「イェェエエエエエアアアアアッ！」

廃洋館の屋根、壁、床を突き破り、数人のヒトが降ってきた。

順にニコラ、桃李（及びそれを追って急降下する羽辰）、リューラ（及び彼女と一心同体のバシロと、二人によって生け捕りにされたヴィクター）、気分が高揚しているのか破殻化状態でわざと直下突入する繁となる。
更にそれの余波なのか、廃洋館の朽ちつつある建材が春樹に降り注ぐ。

「ぅげっ！？」

驚いた春樹はその場から逃げ出そうとするが、流れ的に当然間に合う筈もない。
結果として春樹は、（繁を除く）降ってきた面々の巻き添えになり廃材の波に巻き込まれてしまった。
それに引き続くようにして上の方から破殻化状態の繁が舞い降り、香織がドアをこじ開け入ってくる。

「……何があったの？」
「さぁな。ただ解るのは、『母上』とかいう奴がここに居るらしいって事だけだ」
「あー、それは私も聞いたよ。ネフルっていう、蟲みたいな女の化け物に吐かたらそんな事言ってた」
「するってェとアレか？そのネフルって奴の取り巻きでわけわからんちっこい奴らが居て、そいつらと戦ったって感じか？」
「うん、そんな所。てか、そんな言ってるって事は繁も？」
「おう。デカブツが一気に三匹も来やがった。それぞれ金銀銅でカイゼル、キュリオ、ペイジとかいう奴でな。
何か気弾みたいの飛ばしたり、溶けたプラスチックみたいの飛ばしたり、レーザー撃ってきたりしたな。その上ペイジって奴は空飛んだり触手生やしたり、今思えば妙な奴らだったぜ」
「私ん所のネフルって奴はそういうの無かったかなぁ。ただ、魔術

攻撃だけは散々されたけど」
「魔術ってェと」
「攻撃系も補助系も、宮仕えとか軍役とかの魔術師が使うような本格版ばっかり。流石に古式特級は無いっぽかったけど、実際の所はどうなんだろ。
でもトリロさん直伝の多重障壁コンボを衝撃波一発で半分くらい持っていく辺りは普通じゃないね」
「それでよく戦えたな。お前の使ってる多重障壁コンボって、魔術学院レベルでもそうそう敗れないようになってなかったか？しかもそれにお前が何か変な改造して色々妙な事になってなかったか？」
「うん。平均的な中等魔術学校レベルの奴は表層部に触れた瞬間無力化出来るように設定してあるわよ。
それも触れた瞬間、接触した魔術の基軸を構成する魔術式の配列をピンポイントに荒らし回るように」
「ワーム系のコンピュータウイルスか？」
「そ。当たった瞬間『それの基軸を一番効率的に潰せるプログラム』を障壁が自動的に組み上げて流すようにしてあるの」
「何かすげぇなぁ」

等と語らいながら、二人は瓦礫に埋まった仲間達を探しては助け出し、情報を交換していく。
聞けばどうやら繁や香織意外の面々も同じように、何者かの『子供』を名乗る謎の生命体と戦う羽目になったそうで、何れも『母親』について言及していたらしいのだ。

「こいつぁ驚いた。しかも皆馬鹿正直に俺の言ったとおりに生け捕りにしてくるとは」
「案外簡単でしたもので。弱らせてしまえばコーンチューブを引くだけですし」
『ただ、あの二人の体質は本当に恐ろしいものでしたよ。あれこそ

脅威というのでしょうかね』
「あんた等はまだ良いわよ。こっちなんて異能も何も無くトラップとメカの嵐だからね？」
「それ言ったら私らなんてどうなんだ。コーンチューブ故障してたからテグスで縛って引っ張るしか無かったんだぜ？」
「あの薬買ってなきゃ俺ら確実に終わってたな。間違いねえ」
「まあ何にせよ、とりあえずここに居るらしい『母上様』ってのを探さないとね」
「だな。こんな連中を腹から産んだような奴だ。この瓦礫の下にどんなおぞましい化け物が眠ってるかも解らねぇ」
【ッざけんじゃねェ！勝手な事抜かしやがって、母上様はおぞましくなんかねぇぞ！】

繁の発言に苛立ったヴィクターが、縛られながらも抗議する。

「ほう。じゃあどんな奴なんだ、お前らの母親ってのは？」
【母上様か？そりゃあ、美人で所作一つ一つが可愛らしくて素直で純真無垢で天真爛漫で――兎に角いい女だ！】
「いい女……か。だそうだぞ、皆」
「いい女ねぇ……」
「ほうほう、いい女……」
「いい女…ですか」
「いい女と言いますと……」
「んー……いい女…」
「いい女……いい女……イイオンナ……」
【そうだ！いい女だ！】
「イ●テグ●ル・ファ●ブリ●・ウ●ン●ーツ・●ルシン●的な？」
【あんな如何にもどっかに突き刺さるオーラなわけねぇだろ！】
「ではノエ●・ヴ●ーミ●オンのような？」
【体格違うわ！あと料理の腕前もあんな糞じゃねー！】

『十●夜●キでしょうか？』
【俺らのルックス見てから言えよ！エースはブラ●っつうよりゴ●ガーだろ！】
「ア●・ブレ●だろ？」
【憑依とかしねーし！】
「もうエ●●ベス・ジョ●ス●ーで良いだろ」
【養豚場の豚を見るような目なんざするわけねぇだろ！】
「●倉和●でしょ？」
【それもちげえええええ！】

順にニコラ、桃李、羽辰、リューラ、バシロ、香織と、それぞれが思う『いい女』の例を述べていったが、いずれの答えもヴィクターは強く否定した。

「ったく、仕方ねぇな……お前らは『いい女』って言葉に踊らされすぎなんだよ」
『と、言いますと？』
「こいつの挙げた点を考慮に入れろって事だ。つまり、『美人』かつ『所作が一々可愛く』て、『素直』で『純真無垢』で『天真爛漫』な『いい女』を挙げりゃいい」
「まぁそりゃそうなるが……じゃあ誰だ？」
「誰だってか？言わせんなよ、その条件に当て嵌まるいい女っつったらア●ク●イド・ブリュ●スタ●ドだろ」
「おおっ、流石繁！確かにその条件にピッタリだよ！」
「しかも原作、アニメ版、ＯＶＡ版、漫画版、メ●ブラとそれぞれで作風やキャスティングの違いから違った魅力が感じられますし」
「原作やメル●ラはスタンダードに、アニメ版では大人の色気で、漫画版やＯＶＡ版では若干童顔で可愛らしく……すげえ、完璧じゃねえか！」
「そうだろう？なぁヴィクター、そうなんだろう？」

【いやそれは確かに条件当て嵌まってるがよ……母上様ァあそこまで破天荒じゃあねえわ……】

「……そうか。それは残念だ。

それにしても、そうなると『母上』って奴はどんな女なんだろうなぁ。

きになってしょうがね――「こんな女なのだ」――うをっ！？」

【こ、この声は……母上様ァッ！】

一同が一斉に声のした方を振り返ると、そこにはヴィクターの言う『母上』―即ち、有角種の少女・芽浦春樹が佇んでいた。

【母上様、申し訳御座いませんッ！俺が……俺が不甲斐ねえばかりに……】

「良いのだ、ヴィクター。誤らないで欲しいのだ。僕はこの通り無事だし、ここまで来たからにはもう何も怖くないのだ」

【母上様、それ滅茶苦茶死亡フラグじゃ―

―「初めまして。僕の名前は芽浦春樹。この廃洋館の主で、芽浦一家のお母さんなのだ」

「ほう……どんな化け物が出てくるのかと思やぁ、お前さんみてぇな可愛らしいお嬢さんが出てくるとは驚いた。ツジラ・バグテイルだ。お初にお目に掛かる」

「ご丁寧にどうも、なのだ」

「さて、芽浦さんよ……」

「何なのだ？」

「初対面でこういうのもアレだが、少し頼みを聞いちゃあくれねぇか？」

「聞く聞かないは、どんな頼みかによるのだ」

「大人しく身柄を拘束されちゃあくれねぇか？何、悪いようにはしねぇ。お前さん方が何者なのか、詳しく調べさせて貰うだけだ」

「……断ると言ったら？」
「少々怪我して貰う事にならァな」
「覚悟は出来てるのだ」

かくして両者が武器を構え戦闘態勢に入ろうとした、その時。
天井に空いた大穴から落ちてきた大量の水に伴い、青いローブを着た長身の人物がその場に現れた。
長身の人物は暫くしゃがみ込んでいたが、ふと音もなく立ち上がり、ぽつりと言った。

「……やっと会えましたね、春樹」

声を聞いた春樹とヴィクターの脳裏に、ある人物の記憶が蘇る。

「……え？……先、生？」
【まさか、教授殿だっつうんですかい……？
だが、だがアンタは……】

縛られている事も忘れ、ヴィクターは戸惑いながらも言葉を紡ぎ出す。

【アンタは五年か六年も前のあの日、確かに死んじまった筈でしょう！？】

第百二十二話　芽浦家の決戦（後書き）

次回、突如現れた青ローブの正体とは！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8961v/

ヴァーミンズ・クロニクル

2012年1月8日18時53分発行